

県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

築山遺跡 III



2009年3月

島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会

県道今市吉志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

築山遺跡 III

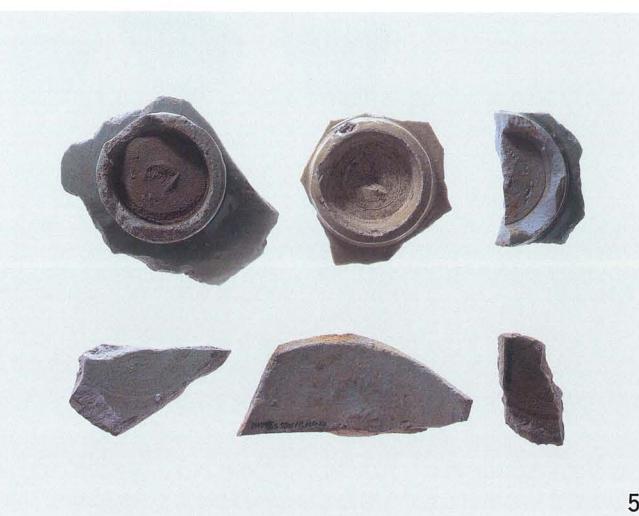
2009年3月

島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会



1.4区出土青磁 2.4区出土白磁

巻頭カラー 2



1.5A区北半（南から） 2.SK2030出土龍泉窯系青磁酒会壺 3.SK2050出土中国白磁四耳壺

4・5.5A・B区出土貿易陶磁器（龍泉窯系青磁、中国白磁、褐釉陶器）

序

出雲市教育委員会では、島根県出雲県土整備事務所（前 島根県出雲土木建築事務所）からの委託を受け、平成15年度から県道今市古志線並びに県道出雲三刀屋線の改良事業予定地において築山遺跡の発掘調査を実施してまいりましたが、今年度の調査報告書の刊行をもちまして終了する運びとなりました。本書は、このうち平成16～18年度の発掘調査の成果をまとめたものです。

築山遺跡周辺には、国史跡上塩治築山古墳をはじめとする古墳、横穴墓、集落跡などの遺跡密集地帯であり、数多くの歴史的文化遺産が残っています。

今回の調査では、縄文後期から中世までの遺構・遺物が確認されました。注目されるものは、建物を取り囲むと思われるL字状の溝、出雲平野でも屈指の質と量の輸入陶磁器、陰陽道的な色彩の強い呪符木簡などです。これらは、今後、出雲西部の歴史を考える上でも、大変貴重な資料になると思われます。

本書が、地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり、ご支援ご協力いただきました島根県出雲県土整備事務所をはじめ、関係の皆様に対して心からお礼申し上げます。

平成21年（2009）3月

出雲市教育員会

教育長 黒目俊策

例　　言

1 本書は、島根県出雲県土整備事務所の依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成16年度（2004）から平成18年度（2006）に実施した、県道今市古志線改良事業に伴う築山遺跡（島根県遺跡番号：W24、出雲市遺跡番号：F23）の埋蔵文化財発掘調査の記録である。

現地調査は、平成15年度（2003）から平成19年度（2007）の5ヵ年実施している。このうち、平成15年度調査分については『築山遺跡』I・IIとして報告している。

2 調査は、用地取得の進捗状況に応じて実施したことから、調査地の順序は連続していない。このため、整理・報告段階で、調査区の名称を北から南に振り直すこととし、北から南に4 A区、4 B区、4 B東区、4 C区、4 D区、5 A区、5 B区とした。5 B区には、報告Ⅱで掲載した場所が含まれているが、今回、関連することからあわせて報告する。

調査区名と、旧調査区名、面積、所在、発掘調査期間は次のとおりである。

4 A区 H17北区 29-19gr 700m²、出雲市上塩治町1762, 1753, 1752-2ほか
平成17年4月25日から平成17年10月21日まで

4 B区 H16北区 19-6gr 900m²、出雲市上塩治町1754-1, 1761
平成16年10月28日から平成17年2月14日まで

4 B東区 H17北区18-12gr 150m²、出雲市上塩治町1762, 1753, 1752-2ほか
平成17年4月25日から平成17年10月21日まで

4 C区 H17北区6-1 gr 450m²、出雲市上塩治町1762, 1753, 1752-2ほか
平成17年4月25日から平成17年10月21日まで

4 D区 H16南区1-8gr 700m²、出雲市上塩治町1742
平成16年4月26日から平成16年8月2日まで

5 A区 H17南区 21-32gr 1,450m²、出雲市上塩治町1737, 1735, 1737-3, 1734-2
平成17年10月6日から平成18年3月20日まで

5 B区 H18南区 34-55gr 2,400m²、出雲市上塩治町1715-2, 1719-7, 1719-2, 1716,
1725-5, 1719-1, 1720ほか

平成18年4月13日から平成18年10月20日まで

3 調査は、道路のセンター杭を基準に用い、5 mグリッドとした。グリッド杭の番号は、東西はアルファベット、南北はアラビア数字とした。

なお杭番号であるが、東西については、西から東に向かってアルファベットをふった。南北については、4 A～4 C区は、4 C区の南辺から北に向かってアラビア数字をふり、4 D区は、北辺から南に向かってアラビア数字をふった。5 A・5 B区は、北から南に向かってアラビア数字をふった。

また、グリッド名は、4 A～4 C区は北東角の杭番号で呼ぶこととし、4 D・5 A・5 B区は北西角の杭番号で呼ぶこととした。

4 遺構番号は、4区については、4 A区北辺から4 D区南辺に向かって1000番からの通し番号とした。5区については、5 A区北辺から5 B区南辺に向かって2000番からの通し番号とした。

また、遺構の種別を記号をもちいてあらわした。

S A 墓・柵 S B 建物 S D 井戸 S K 土坑 S X その他
S P 柱穴

5 調査体制

平成16年度 現地調査

調査主体 出雲市教育員会（教育長 黒目俊策）

調査指導 田中義昭（島根考古学会 会長）

東森 晋（島根県教育庁 文化財課 文化財保護主事）

中村唯史（三瓶自然館サヒメル指導員）

事務局 板倉 優（出雲市 文化企画部 芸術文化振興課長：合併前）

神門 勉（出雲市 文化観光部 文化財課長：合併後）

川上 稔（同 主査）

調査員 三原一将（出雲市 文化財課 副主任主事）

米田美江子（同 主任嘱託員）

調査補助 伊藤晶子、宮崎 綾、錦田充子（同 臨時職員）

整理作業員 飯國陽子、永田節子、吹野初子、藤原 舞、柿本節子、勝部光代

発掘作業員 青木 孝、今岡 実、小村恒利、小村保夫、奥田利晃、勝部初子、
川上靖夫、岸 邦夫、上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、

曾田利夫、高根常代、高根 豊、富田 勉、長島節子、成相吉隆、
藤江 実、藤原一男、古川八郎、吉川善美、吉田 栄、米山清司

平成17年度 現地調査

調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒目俊策）
調査指導 田中義昭（島根考古学会 会長）
原田敏照（島根県教育庁 文化財保護主事）
中村唯史（三瓶自然館サヒメル指導員）
事務局 神門 勉（出雲市 文化観光部 文化財課長）
川上 稔（同 主査）
調査員 三原一将（出雲市 文化観光部 文化財課 主任）
米田美江子（同 嘴託員）
調査補助員 坂根健悦、高橋誠二（同 臨時職員）
整理作業員 飯國陽子、永田節子
発掘作業員 青木 孝、奥田利晃、川上靖夫、上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、
須山林吉、曾田利夫、高根常代、富田 勉、成相吉隆、古川八郎、
米田 建、米山清司

平成18年度 現地調査

調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒目俊策）
調査指導 渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）
田中義昭（島根考古学会会長）
勝部智明（島根県教育庁文化財保護主事）
守岡正司（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）
事務局 石飛幸治（出雲市 文化観光部 文化財課長）
花谷 浩（同 学芸調整官）
川上 稔（同 主査）
調査員 三原一将（出雲市 文化観光部 文化財課 主事）
米田美江子（同 嘴託員）
調査補助員 坂根健悦、高橋誠二、成相幸子（同 臨時職員）
整理作業員 荒木恵理子、鶴口令子、永田節子
発掘作業員 奥田利晃、小村恒利、川上靖夫、公田悦朗、小玉順子、来間達夫、
上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、高根常代、高橋イキコ、
塚原立之、長島節子、成相吉隆、森口大輔、米田 建

平成19年度 現地調査・報告書作成

調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒目俊策）
調査指導 渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）
田中義昭（島根考古学会会長）
勝部智明（島根県教育庁文化財保護主事）
守岡正司（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）
事務局 花谷 浩（出雲市 文化企画部 次長 兼 文化財課 学芸調整官）
石飛幸治（出雲市 文化企画部 文化財課長）
川上 稔（ 同 主査）
景山真二（埋蔵文化財係 係長）
調査員 三原一将（出雲市 文化企画部 文化財課 主事）
米田美江子（ 同 嘴託員）
高橋誠二（ 同 嘴託員）
調査補助員 児玉達也、高橋 周、和田みゆき（ 同 臨時職員）
整理作業員 荒木恵理子、鵜口令子
発掘作業員 青木 孝、奥田利晃、小村恒利、川上靖夫、小玉順子、来間達夫、
上代 勇、杉原秀雄、周藤俊也、須山林吉、高根常代、高根 豊、
高橋イキコ、塚原立之、土肥源市、長島節子、成相吉隆、星野篤史、
森口大輔

平成20年度 報告書作成

調査主体 出雲市教育委員会（教育長 黒目俊策）
調査指導 西尾克己（島根県古代文化センター）
守岡正司（島根県教育庁文化財課世界遺産推進室）
事務局 花谷 浩（出雲市 文化企画部 次長 兼 文化財課 学芸調整官）
石飛幸治（出雲市 文化企画部 文化財課長）
景山真二（ 同 埋蔵文化財係 係長）
調査員 原 俊二（ 同 主任）
米田美江子（ 同 嘴託員）
高橋誠二（ 同 嘴託員）
調査補助員 児玉達也、高橋 周、和田みゆき（ 同 臨時職員）
整理作業員 荒木恵理子、鵜口令子
調査協力 三原一将（出雲市 文化企画部 文化財課 出雲弥生博物館創設準備
室 主事）

6 発掘調査、室内整理及び報告書作成にあたっては、次の方々や機関からご指導、ご協力を賜った。記して謝意を表しておきたい。(順不同・敬称略)

穴澤義功(製鉄遺跡研究会代表) 井上寛司(島根大学名誉教授)

豊島 修(大谷大学文学部教授) 平石 充(島根県埋蔵文化財センター)

廣江耕史(島根県埋蔵文化財センター) 今岡 清(出雲塩冶誌編集委員会編集長)

池淵俊一(島根県教育庁文化財課)

7 本書の編集は米田・高橋誠二・高橋周と協議しながら、原が行った。執筆は、三原、米田、高橋誠二、高橋周が行った。分担は目次に示したが、第4章については、本文中に詳細を記した。

8 遺物の出土量を示すために用いたコンテナはL540mm×W340mm×H150mm、ビニール袋は大L380mm×W260mm、中L250mm×W150mm、小L140mm×W100mmのものである。

9 本書で使用した測地系は世界測地系で、方位は座標北を示し、レベル高は海拔高を示す。

10 自然化学分析については、株式会社文化財調査コンサルタントに委託し、結果については第3章第2節に掲載した。

11 本書に掲載した写真の撮影は調査員が行った。航空写真は株式会社大隆設計と株式会社藤井基礎設計事務所に委託した。

12 遺物実測については、調査員、調査補助員のほか、次の者が従事した。

井上喜代女、藤原 舞、村田理恵(以上 いなか舎)

13 本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	(三原一将) ...	1
第1節 道路計画の概要		
第2節 発掘調査の経緯		
第3節 報告書の作成		
第2章 遺跡の位置と環境	(高橋誠二) ...	5
第1節 遺跡の位置と歴史的環境		
第2節 過去の調査		
第3章 4区の調査成果		10
第1節 調査の概要	(米田美江子) ...	10
1 基本層序		
2 遺構とその出土遺物		
3 包含層の遺物		
第2節 自然科学分析	(渡辺正巳) ...	66
第3節 まとめ	(米田美江子) ...	80
第4章 5区の調査成果	(高橋誠二・高橋周) ...	106
第1節 調査の概要		
1 基本層序		
2 遺構とその出土遺物		
3 包含層の遺物		
第2節 まとめ		
第5章 考察		180
第1節 築山遺跡5区出土の呪符木簡について	(高橋周) ...	180

挿図目次

- 第1図 築山遺跡と出雲平野の主要遺跡
(1 : 100,000) (1 : 3 石のみ 1 : 4)
- 第2図 築山遺跡と周辺の遺跡 (1 : 20,000)
- 第3図 4区・5区全体図 (1 : 3,000)
- 第4図 4区全体図 (1 : 1,000)
- 第5図 4A区遺構図 (1 : 200)
- 第6図 4B区 (1)・4B東区遺構図 (1 : 200)
- 第7図 4B区 (2)・4C区遺構図 (1 : 200)
- 第8図 4D区遺構図 (1 : 200)
- 第9図 調査区土層図 (1 : 120) と土層位置図
(1 : 2,000)
- 第10図 弥生時代の遺構図と土層図
(SD1000は1 : 400と1 : 80、SK1037は1 : 40)
- 第11図 繩文・弥生時代の遺物実測図
(土器 1 : 3 石器 1 : 4)
- 第12図 古墳時代の遺構実測図と遺物実測図
(遺構 1 : 30 土器 1 : 3)
- 第13図 古代の遺構実測図 (1 : 60)
- 第14図 古代の遺構出土遺物実測図1
(土器 1 : 3 その他 1 : 4)
- 第15図 古代の遺構出土遺物実測図2 (1 : 3)
- 第16図 中世の建物遺構等実測図 (1 : 80)
- 第17図 中世の土坑と井戸実測図 (1 : 60)
- 第18図 中世の井戸実測図 (1 : 60)
- 第19図 中世の溝実測図 (1 : 60)
- 第20図 中世のその他の遺構実測図 (1 : 60)
- 第21図 中世の遺構出土遺物実測図1
(土器 1 : 3 石器 1 : 4)
- 第22図 溝 SD1111出土遺物実測図
(1 : 3 石のみ 1 : 4)
- 第23図 溝 SD1111出土遺物実測図
(1 : 3 石のみ 1 : 4)
- 第24図 中世の井戸出土遺物実測図
(1 : 3 曲物のみ 1 : 6)
- 第25図 井戸 SE1146出土遺物実測図
- 第26図 中世の溝出土遺物実測図
(1 : 3 錢貨のみ 1 : 2)
- 第27図 溝 SD1120出土遺物実測図1 (1 : 3)
- 第28図 溝 SD1120出土遺物実測図2 (1 : 3)
- 第29図 溝 SD1120出土遺物実測図3 (1 : 4)
- 第30図 溝状遺構 SD1144出土遺物実測図
(1 : 3 石のみ 1 : 4)
- 第31図 中世の遺構出土遺物実測図2 (1 : 3)
- 第32図 遺構外出土遺物実測図1 (1 : 3)
- 第33図 遺構外出土遺物実測図2 (1 : 3)
- 第34図 遺構外出土遺物実測図3 (1 : 3)
- 第35図 遺構外出土遺物実測図4 (1 : 3)
- 第36図 遺構外出土遺物実測図5 (1 : 3)
- 第37図 遺構外出土遺物実測図6 (1 : 3)
- 第38図 遺構外出土遺物実測図7 195~207
(1 : 3) 208~210 (1 : 2) 211~219 (1 : 4)
- 第39図 遺構外出土遺物実測図8 (1 : 3)
- 第40図 遺構外出土遺物実測図9 (1 : 3)
- 第41図 遺構外出土遺物実測図10 252~256
(1 : 3) 257~261 (1 : 4)
- 第42図 遺構外出土遺物実測図11 (1 : 4)
- 第43図 遺構外出土遺物実測図12 (1 : 3)
- 第44図 4B区試料採取地点 (1 : 500)
- 第45図 SE1094の断面図および試料採取地点
- 第46図 SX1056の花粉ダイアグラム
- 第47図 SD1000の花粉ダイアグラム
- 第48図 SK1048の花粉ダイアグラム
- 第49図 SX1056のプラントオパールダイアグラム
- 第50図 SD1000のプラントオパールダイアグラム
- 第51図 SK1048のプラントオパールダイアグラム
- 第52図 SD1000の珪藻ダイアグラム
- 第53図 SD1000の珪藻総合ダイアグラム
- 第54図 SK1048の珪藻ダイアグラム
- 第55図 SK1048の珪藻総合ダイアグラム

- 第56図 5区全体図（1：3,000）
- 第57図 5区土層模式図（1：40）
- 第58図 5A区（1）遺構図1（1：200）
- 第59図 5A区（2）・5B区（1）遺構図
（1：200）
- 第60図 5B区（2）遺構図（1：200）
- 第61図 5B区（3）遺構図（1：200）
- 第62図 築山5号墳の全体図
（遺構1：200 断面1：60 出土状況1：40）
- 第63図 築山5号墳出土遺物実測図（1：3）
- 第64図 円形周溝1の全体図と出土遺物実測図
（遺構1：200 断面1：60 土器1：3）
- 第65図 古代の遺構と遺物実測図
（遺構1：60 土器1：3）
- 第66図 5A区の中世建物遺構図1（1：60）
- 第67図 5A区の中世建物遺構図2（1：60）
- 第68図 5A区の中世建物遺構図3（1：60）
- 第69図 5A区の中世建物遺構図4（1：60）
- 第70図 5A区の中世柱列図と遺物実測図
（遺構1：60 土器1：3）
- 第71図 5A区の中世土坑図と遺物実測図1
（遺構1：60 土器1：3）
- 第72図 5A区の中世土坑図と遺物実測図2
（遺構1：60 土器1：3）
- 第73図 5A区の中世土坑図と遺物実測図3
（遺構1：60 土器1：3）
- 第74図 5A区の中世土坑図と遺物実測図4
（遺構1：60 土器1：3）
- 第75図 5A区の中世土坑図と遺物実測図5
（遺構1：60 土器1：3）
- 第76図 5A区の中世土坑図と遺物実測図6
（遺構1：60 土器1：3）
- 第77図 5A区の中世土坑図と遺物実測図7
（遺構1：60 遺物1：3）
- 第78図 5A区の中世井戸実測図と遺物実測図
（遺構1：60 土器1：3）
- 第79図 5A区の中世溝状遺構と遺物実測図1
（遺構1：300 断面1：60 土器1：3）
- 第80図 5A区の中世溝状遺構と遺物実測図2
（遺構1：200 断面1：60 土器1：3）
- 第81図 5A区の中世溝状遺構実測図3
（遺構1：200 断面1：60）
- 第82図 5A区の中世溝状遺構出土遺物実測図
（1：3）
- 第83図 5A区の中世溝状遺構と遺物実測図4
（遺構1：300 断面1：60 土器1：3）
- 第84図 橋状遺構実測図と5A区Pit内遺物
（遺構1：100 土器1：3）
- 第85図 5B区の中世土坑図と遺物実測図1
（遺構1：60 遺物1：3）
- 第86図 5B区の中世土坑図と遺物実測図2
（遺構1：60 土器1：3）
- 第87図 5B区の中世土坑図と遺物実測図3
（遺構1：60 土器1：3）
- 第88図 5B区の中世土坑図と遺物実測図4
（遺構1：20 土器1：3）
- 第89図 5B区の中世土坑図と遺物実測図5
（遺構1：60 遺物1：3）
- 第90図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図1
（遺構1：200 断面1：60 土器1：3）
- 第91図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図2
（遺構1：200 断面1：60 遺物1：3 石1：6）
- 第92図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図3
（遺構1：200 断面1：60 土器1：3）
- 第93図 遺構外出土遺物実測図1（弥生～古代）
（1：3）
- 第94図 5区出土の土師質土器分類図1（1：3）
- 第95図 5区出土の土師質土器分類図2（1：3）

- 第96図 遺構外出土の土師質土器分布図
(左図1:250 右図1:300)
- 第97図 5区遺構外出土の遺物実測図1 (1:3)
- 第98図 5区遺構外出土の遺物実測図2 (1:3)
- 第99図 5区遺構外出土の遺物実測図3 (1:3)
- 第100図 5区遺構外出土の遺物実測図4 (1:3)
- 第101図 5区遺構外出土の遺物実測図5 (1:3)
- 第102図 5区遺構外出土の遺物実測図6 (1:3)
- 第103図 5区遺構外出土の遺物実測図7 (1:3)
- 第104図 5区遺構外出土の遺物実測図8 (1:3)
- 第105図 SK2035出土の木簡実測図1 (1:4)

表 目 次

表1 4区出土鉄関連遺物構成表

表2 微化石調査結果

表3 種実同定結果 (S X1056 4層最下部)

表4 S E1094の寄生虫卵分析結果

表5 呪符木簡規格一覧

写真図版目次

- 卷頭カラー1 1. 4区出土青磁
2. 4区出土白磁
- 卷頭カラー2 1. 5 A区北半 (南から)
2. SK2030出土龍泉窯系青磁酒会壺
3. SK2050出土中国白磁四耳壺
4・5. 5 A・B区出土貿易陶磁器 (龍
泉窯系青磁・中国白磁・褐釉陶器)
- 図版1 上空から見た調査区 (4 D区、北から)
- 図版2 1. 4 A区北半 (南から)
2. 4 A区南半 (南から)
- 図版3 1. 4 B区全景 (上空から)
2. 4 B区北半
3. 4 B区南半
4. 4 B区全景 (北から)
- 図版4 1. 4 C区全景 (南から)
2. 4 C区全景 (北から)
- 図版5 1. 4 D区全景 (上空から)
2. 4 D区全景 (北から)
- 図版6 1. 溝S D1000 (4 A区、南西から)
2. 溝S D1000 (4 B区、北から)
3. 溝S D1000 (4 C区、南から)
4. 溝S D1000 (4 D区、南東から)
- 図版7 1. 井戸S E1094 (東から)
2. 井戸S E1094 (北から)
3. 土坑SK1080 (東から)
4. 井戸S E1142 (南東から)
5. 東西溝SD1052 (西から)
6・7. SX1131ほか (南から)
- 図版8 1. 土坑SK1048 (南から)
2. 井戸S E1025 (南西から)
3. 土坑SK1092・1093 (東から)
4. 土坑SK1044 (東から)
5. 井戸S E1026 (西から)
6. 井戸SE1100 (東から)
7. 井戸S E1083 (西から)
8. 井戸S E1083 (南西から)
- 図版9 1. 井戸S E1116 (北から)
2. 井戸S E1117 (西から)
3. 井戸S E1119 (西から)
4. 井戸S E1122 (西から)
5. 井戸SE1141 (南西から)
6. 井戸SE1146 (南から)
7. 東西溝SD1011 (東から)
- 図版10 1. 溝S D1111と土坑SK1110 (北東から)
2. 土坑SK1110 (南から)
3. 舟形木製品(形代A) 出土状態(北から)
4. 舟形木製品(形代B) 出土状態(東から)
- 図版11 1. 東西溝SD1090 (東から)
2. 東西溝SD1047 (南から)
3. 斜行溝SD1144 (南西から)
4. 溝SD1120 (西から)
5. 溝SD1120 (南から)
6. SX1038ほか
7. SX1036 (南から)
- 図版12 1. SX1034
2・3. SD1000
4. SK1070・SD1050
5. SD1050・SE1051
6 (SD1054・SD1123)
7 (SE1137・SD1054)
8 (SE1100)
9 (SD1054・SD1073)
10 (SD1096)
11 (SD1123)
12 (SD1054)
13 (SD1145)
- 図版13 1 (SP1104)
2 (SK1084・SK1092・SK1093)
3 (SK1093・SK1110)

4 (S K1110)	3・4. 瓦
5 (S K1110・S E 1025)	5～14. 土師器
6・7 (S K1110)	図版23 1・2. 中世陶器
8～11 (S D1111)	3・4・6・8～10. 肥前系陶器
図版14 1 (S P 1147・S P 1148)	5. 中世陶器・瓦質土器
2 (S E 1025・S E 1026・S E 1083・S E 1100・S E 1116・S E 1117)	7. 瓦質土器
3 (S E 1116)	11. 土製品
4 (S E 1083)	12. 鉄製品
5・6・8 (S E 1146)	13. 石製品
7 (S E 1119・S E 1122・S E 1141・S E 1146)	図版24 1～6. 石製品
9 (S D 1024)	7～10. 木製品
10 (S D 1144)	図版25 1. 5 B区北半 (南から) 2. 5 B区南半 (南から)
11 (S X 1077・S X 1109・S X 1131)	図版26 1. 5号墳周溝北側 (西から) 2. 5号墳周溝南側 (東から)
図版15 1 (S D 1113)	図版27 1. S K2164 (北東) 2. S K2174 (北) 3. S K2183 (南) 4. S K2183 (南)
2～11 (S D 1120)	5. S K2166 (北東) 6. S K2211 (南東) 7. S K2210 (南) 8. S K2210 (西)
12 (S X 1127)	図版28 1. S K2018 (南西から) 2. S K2021 (南西から)
図版16 1 (S K 1084)	3. S K2022 (東から) 4. S K2036 (南から) 5. S K2035 (北西から)
2・3 (S D 1098)	図版29 1. S K2047 (南西から) 2. S K2030 (北西から)
4 (S D 1047・S D 1090・S D 1098)	3. S K2057 (南東から) 4. S K2045 (南東から) 5. S X 2010 A ピット列西端ピット (北西から)
5 (S D 1106・S D 1107・S D 1113)	6. S K2076 (北から) 7. S X 2010 A ピット列東端ピット (東から)
6 (S D 1144)	
7 (S X 1077)	
8・9 (S D 1047・S D 1098)	
図版17 1・2. 白磁	
図版18 1・2. 青磁	
図版19 1. 青磁	
2・3. 染付 (青花)	
図版20 1・2. 中世陶器	
3・4. 肥前系陶器	
図版21 1・2. 弥生土器	
3～6. 須恵器	
7. 中世須恵器	
8・9. 土師器	
図版22 1・2. 土師器	

- 8 . S X2010 B ピット列中央ピット(南から)
 図版30 1 . S K2071 (東から)
 2 . S K2070 (南東から)
 3 . S K2066 (南西から)
 4 . S K2069 (西から)
 5 . S E2068 (南西から)
- 1 . 土坑 S K2179 (南西から)
 2 . 土坑 S K2220 (北東から)
 3 . 土坑 S K2160 (北西から)
 4 . 土坑 S K2129 (南西から)
 5 . 土坑 S K2186 (南から)
- 1 . A27グリッド土器集中出土状況
 2 . A30グリッド土器集中出土状況
 3 . B30グリッド土器集中出土状況
 4 . 5 A区南半 (北西から)
- 1 . S D2003・S D2006・S X2010 (西から)
 2 . S D2007・S D2008 (北から)
 3 . S D2001・S D2005 (北から)
- 1 . S D2017・S D2019 (東から)
 2 . S D2019・S D2048 (西から)
 3 . S D2025・S D2031 (東から)
 4 . S D2046 (南東から)
 5 . S D2055北東隅 (北東から)
 6 . S D2055南東隅 (東から)
 7 . S D2055北半 (西から)
 8 . S D2055南半 (西から)
- 1 . 溝 S D2090 (南東から)
 2 . 溝 S D2090 (南東から)
 3 . 溝 S D2095-1・2 (南東から)
 4 . 溝 S D2165、2168-1・2、2170・2177
 (南東から)
 5 . 5 A区作業風景
 6 . 5 B区作業風景
- 1 ~ 9 . 5号墳出土土器 (1 : 3)
- 1 . 円形周溝 1 (1 : 3)
- 2 . S K2174 (1 : 3)
 3 . S K2183 (1 : 3)
 4 ~ 6 ・ 10~12. 溝 S D2090 (1 : 3)
 7 ・ 8 . 土坑 S K2172 (1 : 3)
 9 . 土坑 S K2192 (1 : 3)
- 図版38 1 . S K2018 (1 : 3)
 2 . S K2045 (1 : 3)
 3 . S K2057 (1 : 3)
 4 . S K2076 (1 : 3)
 5 . S E2068 (1 : 3)
 6 ・ 7 ・ 14. S D2019 (1 : 3)
 8 ~ 12. S K2047 (1 : 3)
 13. S D2003 (1 : 3)
 15. S D2031 (1 : 3)
- 図版39 1 . S K2066 (集合)
 2 ~ 7 . S K2066 (個別) (1 : 3)
- 図版40 1 . S K2186 (集合)
 2 ~ 7 . S K2186 (個別) (1 : 3)
- 図版41 1 ~ 17. 5 A・5 B区遺構外 (1 : 須恵器、
 2 ~ 17 : 土師質土器) (1 : 3)
- 図版42 1 . A27グリッド土器集中 (集合)
 2 ~ 7 . A27グリッド土器集中 (個別) (1:3)
- 図版43 1 . A30グリッド土器集中 (集合)
 2 ~ 9 . A30グリッド土器集中 (個別) (1:3)
 10~13. B30グリッド土器集中 (個別) (1:3)
 14~16. 5 B区遺構外 (1 : 3)
- 図版44 1 . 2 . S K2018・S K2045・S K2070 (1 : 3)
 3 . S E2068・S D2006・S D2007・S D2031
 (1 : 3)
 4 . S K2030・S K2045・S K2050・S K2069
 (1 : 3)
 5 . S E2068・S D2025・S D2048 (1 : 3)
 6 ・ 7 . 土坑 S K2220・土坑 S K2179・溝 S
 D2155 (1 : 3)
- 図版45 1 ~ 7 . 5 A・5 B区遺構外 [1 : 繩文・

弥生・須恵器 2 : 中世須恵器 3 : 土師
質土器 4 : 須恵器（子持壺） 5 : 国内
陶器 6 : 国内陶器（断面） 7 : 石器]
(1 : 3)

- 図版46 1. 木簡全体写真
2. 木簡全体写真（赤外線）
3. 木簡全体図（1 : 3）
- 図版47 1. 木簡糸文
2～5. 木簡拡大（赤外線）

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 道路計画の概要

都市計画道路である県道今市古志線は、出雲市街地の環状道路の一部をなす4車線の主要幹線街路であり、山陰自動車道とリンクし、出雲市の骨格となる街路として山陰自動車道の整備及び市街地内の他道路の整備に合わせ、島根県出雲県土整備事務所（以下、県土整備事務所という）によって計画され設置が進められている延長1.15kmの道路である。

第2節 発掘調査の経緯

平成15年度発掘調査以前

この道路は上塩治町から今市町に及ぶ間で計画されているが、特に上塩治町地内は史跡上塩治築山古墳（以下、築山古墳という）などが存在する遺跡の密集地である。このため県土整備事務所は平成14年（2002）7月23日付で、当該事業予定地内の埋蔵文化財について出雲市あて協議書を提出し、出雲市はこれに対し7月30日付で試掘調査が必要な旨を回答した。その後、出雲市は11月25日、26日に試掘調査を行い事業予定地内の埋蔵文化財包蔵地を概ね確定し、この調査結果を11月28日付で、県土整備事務所あて報告した。

平成15年度

これを受けた県土整備事務所は平成15年（2003）4月1日付で、県道今市古志線と同時に計画されていた県道出雲三刀屋線の両事業用地のうち、用地買収などが済んでおり発掘調査可能な範囲について、出雲市あてに埋蔵文化財発掘調査を依頼し、同日付で委託契約を交わした。

これに基づき、出雲市は同年6月4日から11月30日まで県道出雲三刀屋線用地内の現地発掘調査（1区及び11号区画道路部）を実施した。さらに、12月1日から平成16年（2004）3月31日まで県道今市古志線予定地内の発掘調査（2区）を実施した。

なお、これらの発掘調査の報告書は平成17年12月（報告I）及び平成19年3月（報告II）にそれぞれ発刊済みである。¹⁾

平成16年度

平成16年度は県土整備事務所と平成16年4月1日付で交わした委託契約に基づき、出雲市が塩治神社参道から南に延びる道路予定地である4D区・築山遺跡南区（1-8gr）の発掘調査を4月26日から8月2日まで行った。また、塩治神社参道以北の道路予定地で、平成14年には用地買収の都合等で試掘調査ができなかった箇所について、県土整備事務所が7月23日及び10月15日付で出雲市へ試掘調査の依頼を行った。これを受けた出雲市が試掘調査を行った結果は、8月23日及び平成17年2月23日付で県土整備事務所へ報告された。特に8月23日付け

の報告では新たに発掘調査が必要となる箇所が指摘されていたため、県土整備事務所は10月15日付けて出雲市に追加で本調査の依頼をした。このため両者は10月28日付けて変更契約を締結し、出雲市は塩冶神社参道以北の調査区である4B区・築山遺跡北区（19-6gr）の発掘調査を10月28日から平成17年2月14日まで実施した。

平成17年度

平成17年3月22日に出雲市ほか1市4町は合併した。このため、平成17年度当初の委託契約は出雲市の暫定予算内での締結となった。その後、県土整備事務所と出雲市は6月28日に変更契約することで通年の発掘調査に対応することとした。これにより、出雲市は4月25日から10月21日まで4A・4B東・4C区・築山遺跡北区（29-19、18-12、6-1gr）、10月6日から平成18年3月20日まで5A区・築山遺跡南区（21-32gr）の発掘調査を実施した。

平成18年度

平成18年度は県土整備事務所と平成18年4月1日付けて交わした委託契約に基づき、出雲市は5B区・築山遺跡南区（34-55gr）の発掘調査を4月13日から10月20日まで行った。また、新たな調査区である3A～3E区・築山遺跡3区（CD01-C D24gr）の発掘調査を9月7日から平成19年3月31日まで実施した。

第3節 報告書の作成

5年度にわたって発掘調査を実施してきたが、既刊の報告書は平成15年度発掘調査分の2冊（報告I・II）のみであった。

県道は平成20年度中に竣工し、共用を開始する予定であったことから、一連の埋蔵文化財調査も同年度中に完了しなければならない状態であった。そのため、平成20年度に残り4年度分の調査成果をまとめて刊行することとなった。

整理作業は基本的に各年度の発掘調査と平行しながら現地事務所で進めてきたが、未整理・未着手の内容も多々あり、作業は難航した。

しかし、年度末には調査成果を2冊（報告III・IV）の報告書としてまとめ、刊行する運びとなつた。

註

1)『築山遺跡』I—県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 2005 島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

『築山遺跡』II—県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 2007 島根県出雲土木建築事務所・出雲市教育委員会

関係する主な文書

平成16年（2004）

- 4月 1日 「埋蔵文化財発掘の通知について」 県土整備事務所から（市教委）県教委へ
4月 1日 「都市計画道路（交付金B）今市古志線埋蔵文化財調査委託契約」 県土整備事務所と出雲市
4月 5日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」 県教委から（市教委）県土整備事務所へ
4月19日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」 市教委から県教委へ
8月 5日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概報の提出について（報告）」
8月 5日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」 市教委から県教委へ
8月 9日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」 県教委から市教委へ
8月11日 「埋蔵文化財発見届」 市教委から出雲警察署へ
8月11日 「埋蔵文化財保管証」 市教委から県教委へ
8月16日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」 県教委から市教委へ
10月27日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」 市教委から県教委へ
10月28日 「都市計画道路（交付金B）今市古志線埋蔵文化財調査委託変更契約」 県土整備事務所と出雲市

平成17年（2005）

- 2月15日 「県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査の概報の提出について（報告）」 市教委から県教委へ
2月15日 「県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」 市教委から県教委へ
2月16日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」 （築山遺跡北区分）県教委から市教委へ
2月17日 「埋蔵文化財発見届」 市教委から出雲警察署へ
2月17日 「埋蔵文化財保管証」 市教委から県教委へ
2月23日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」 県教委から市教委へ

3月31日 「業務完了報告書」 出雲市から県土整備事務所へ

4月 1日 「今市古志線緊急地方道路（街路）事業埋蔵文化財調査委託契約」 県土整備事務所と出雲市

4月15日 「埋蔵文化財発掘調査の通知について」 市教委から県教委へ

7月29日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査の概報の提出について（報告）」 市教委から県教委へ

7月29日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」 市教委から県教委へ

8月 1日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」 （築山遺跡北区分）県教委から市教委へ

8月 4日 「埋蔵文化財発見届」 （築山遺跡北区分）市教委から出雲警察署へ

8月 4日 「埋蔵文化財保管証」 （築山遺跡北区分）市教委から県教委へ

8月22日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」 （築山遺跡北区分）県教委から市教委へ

10月21日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査の概報の提出について（報告）」 市教委から県教委へ

10月21日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡北区）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」 市教委から県教委へ

10月24日 「遺跡の取り扱いについて（回答）」 （築山遺跡北区分）県教委から市教委へ

10月27日 「埋蔵文化財発見届」 （築山遺跡北区分）市教委から出雲警察署へ

10月27日 「埋蔵文化財保管証」 （築山遺跡北区分）市教委から県教委へ

11月 2日 「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」 （築山遺跡北区分）県教委から市教委へ

平成18年（2006）

1月31日 「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区）発掘調査の概報の提出について（報告）」 市教委から県教委へ

- 1月31日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 2月 6日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡南区分）
市教委から出雲警察署へ
- 2月 6日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡南区分）
市教委から県教委へ
- 2月10日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡南区分）県教委から市教委へ
- 3月20日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区30～32gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 3月20日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区30～32gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 3月24日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡南区30～32gr分）市教委から出雲警察署へ
- 3月24日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡南区30～32gr分）市教委から県教委へ
- 3月22日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡南区30～32gr分）県教委から市教委へ
- 3月30日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡南区30～32gr分）県教委から市教委へ
- 3月31日「業務完了報告書」出雲市から県土整備事務所へ
- 4月 1日「今市古志線地方道路交付金（街路）事業埋蔵文化財調査委託契約」県土整備事務所と出雲市
- 4月 1日「埋蔵文化財発掘調査の通知について」市教委から県教委へ
- 7月12日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区33～42gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 7月12日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区33～42gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 7月13日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡南区33～42gr分）県教委から市教委へ
- 7月18日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡南区33～42gr分）市教委から出雲警察署へ
- 7月18日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡南区33～42gr分）市教委から県教委へ
- 7月26日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡南区33～42gr分）県教委から市教委へ
- 10月23日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区43～55gr）発掘調査の概報の提出について（報告）」市教委から県教委へ
- 10月23日「今市古志線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財（築山遺跡南区43～55gr）発掘調査に係る遺跡の取り扱いについて（協議）」市教委から県教委へ
- 10月23日「遺跡の取り扱いについて（回答）」（築山遺跡南区43～55gr分）県教委から市教委へ
- 10月27日「埋蔵文化財発見届」（築山遺跡南区43～55gr分）市教委から出雲警察署へ
- 10月27日「埋蔵文化財保管証」（築山遺跡南区43～55gr分）市教委から県教委へ
- 11月10日「埋蔵物の文化財認定及び帰属について（通知）」（築山遺跡南区43～55gr分）県教委から市教委へ

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

出雲平野は、南北を中国山地と島根半島に挟まれ、中国山地から流れ出る神戸川と斐伊川の沖積作用によって形成された。

築山遺跡は、神戸川右岸の微高地に位置する。この微高地は、南側の丘陵裾から北側の水田面に向かって緩やかに低くなっている。東西の水田面との比高差は、東側の水田面とは差がほとんどないのに対し、西側の水田面とは約1.5mもの差がある。また、この微高地上には南から北へ築山遺跡、角田遺跡、宮松遺跡が広がっている。

以下、築山遺跡とその周辺の歴史的概観を見る。

築山遺跡からは縄文時代後期から弥生時代前期までの土器・石器が出土している。主要な出土遺物としては弥生時代前期の人面付き土器がある。築山遺跡周辺で見つかっている当該期の遺跡としては三田谷I遺跡（38）がある。この遺跡は築山遺跡の南側丘陵を越えたところに位置し、直線距離で約1kmである。ここからは縄文時代後期の丸木船が見つかっている。

弥生時代中期～古墳時代中期の遺物は、築山遺跡からはほとんど出土していない。

弥生時代中期から後期にかけて入海「神門水海」周辺には古志本郷遺跡（45）や下古志遺跡（48）といった集落遺跡が次々と出現しているが、古墳時代前期には廃絶したり、規模が縮小したりしている。

古墳時代後期になると築山遺跡周辺には上塩治築山古墳（34）と上塩治横穴墓群（37）が造られている。従来、上塩治築山古墳は1基のみ築造されたと考えられてきたが、今回周辺から7基の古墳が見つかり、本来は群集墳であったことが分かった。また、上塩治横穴墓群の第34支群は、古墳群とほぼ同時期のもので、これ以後、連綿と造墓活動が続いている。同時期に2種類の埋葬方法が存在することは、当時の社会構成を考える上で注目される。

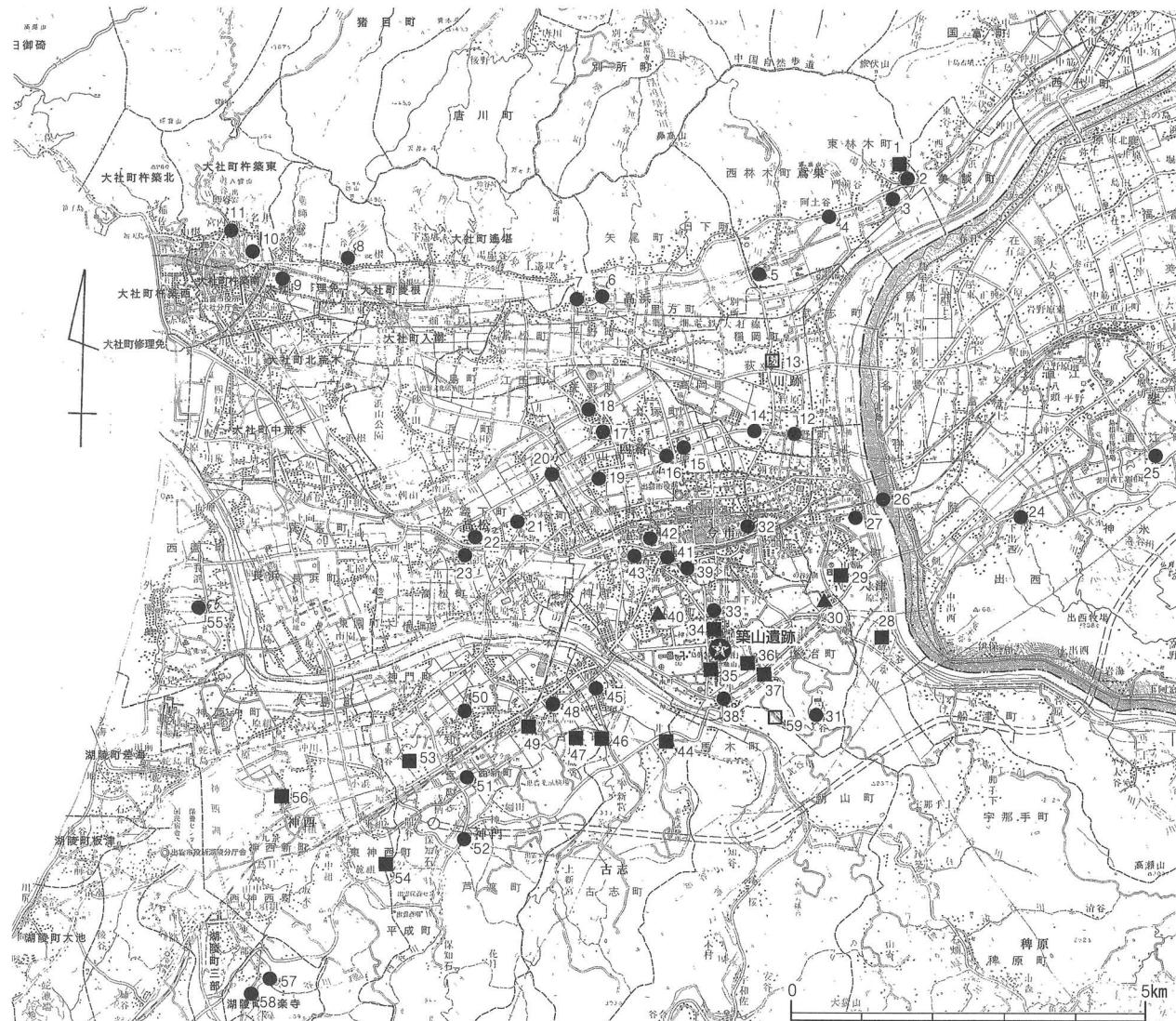
古代においては、8世紀に編纂された『出雲国風土記』に当時の様子がえがかれている。それによれば築山遺跡は神門郡の日置郷にあたる場所と推定される。塩治神社周辺に日置郷庁があったとする考え方もあるが、発掘調査範囲内では郷庁と判断できる遺構は見つからなかった。しかし、「佛」と書かれた墨書き土器や、鉄鉢形土器などが出土しており、さらに、8世紀頃の須恵器蓋杯に火葬骨を入れて埋葬している土坑墓が見つかっていることなどから、調査地周辺に宗教に関する施設や役所などの公的な施設が存在した可能性も考えられる。

なお、神門郡の朝山郷の新造院と見られている神門寺境内廃寺（40）は、調査地の西約850mの地点である。

中世には掘立柱建物跡や方形の区画溝が見つかっている。出雲平野での中世の建物跡は、蔵小路西遺跡（16）、天神遺跡（43）、渡橋沖遺跡（19）などがある。築山遺跡の主な出土遺物と

しては大量の輸入陶磁器がある。出雲平野において、輸入陶磁器の出土量は蔵小路西遺跡に次ぐ量であり注目される。また、塩治判官館跡の堀に推定されていた場所も今回調査地内であつたが、堀などの館に関する遺構は見つからなかつた。

このように、築山遺跡は出雲平野の南東部側の主要な遺跡として注目される存在である。



第1図 築山遺跡と出雲平野の主要遺跡（1:100,000）

1. 大寺古墳
 2. 大寺三藏遺跡
 3. 青木遺跡
 4. 門前遺跡
 5. 山持遺跡
 6. 里方八石原遺跡
 7. 高浜Ⅱ遺跡
 8. 菱根遺跡
 9. 原山遺跡
 10. 五反配遺跡
 11. 出雲大社境内遺跡
 12. 中野清水遺跡
 13. 萩杼古墓
 14. 中野美保遺跡
 15. 姫原西遺跡
 16. 蔵小路西遺跡
 17. 小山遺跡
 18. 矢野遺跡
 19. 渡橋沖遺跡
 20. 白枝荒神遺跡
 21. 壱丁田遺跡
 22. 白枝本郷遺跡
 23. 余小路遺跡
 24. 後谷遺跡
 25. 三井Ⅱ遺跡
 26. 斐伊川鉄橋遺跡
 27. 石土手遺跡
 28. 権現山古墳
 29. 西谷墳墓群
 30. 長者原廃寺
 31. 大井谷Ⅱ遺跡
 32. 今市大念寺古墳
 33. 角田遺跡
 34. 上塙治築山古墳
 35. 上塙治地蔵山古墳
 36. 池田古墳
 37. 上塙治横穴墓群
 38. 三田谷Ⅰ遺跡
 39. 藤ヶ森南遺跡
 40. 神門寺境内廃寺
 41. 善行寺遺跡
 42. 海上遺跡
 43. 天神遺跡
 44. 井上横穴墓群
 45. 古志本郷遺跡
 46. 放レ山古墳
 47. 妙蓮寺山古墳
 48. 下古志遺跡
 49. 宝塚古墳
 50. 多聞院遺跡
 51. 浅柄遺跡
 52. 保知石遺跡
 53. 神門横穴墓群
 54. 北光寺古墳
 55. 上長浜貝塚
 56. 山地古墳
 57. 三部竹崎遺跡
 58. 御領田遺跡
 59. 光明寺3号墓



第2図 築山遺跡と周辺の遺跡 (1 : 20,000)

第2節 過去の調査

築山遺跡を対象とした最初の調査は、昭和60年度（1985）の範囲確認を目的とするトレンチ調査である。その後、平成12年度（2000）には、塩治判官館跡のトレンチ調査が行われている。平成14年度（2002）には、築山土地区画整理事業に伴う発掘調査が行われている。平成15年度（2003）から平成19年度（2007）には、県道出雲三刀屋線と県道今市古志線に伴う発掘調査がそれぞれ実施されている。簡単にこれらの調査内容を振り返ってみたい。

昭和60年度発掘調査（学術調査）

この調査では5つのトレンチが設定され、第1・2トレンチは築山古墳の墓域確認のため、第3・4・5トレンチは築山遺跡の範囲確認のために設定されている。第3・4・5トレンチからは遺物が出土しており、築山遺跡が広範囲に拡がることが確認できた。

平成12年度発掘調査（学術調査）

塩治判官館跡の堀とされている場所にトレンチが1箇所設定された。しかし、堀の存在を認める遺構や遺物は見つかっていない。

平成14年度発掘調査（開発に伴う調査）

この調査の特筆すべき遺構としては、弥生時代の溝や土坑であり、遺物としては縄文時代後晩期の土器と塩治氏家紋入漆椀が挙げられる。

平成15年度発掘調査（開発に伴う調査）

包含層ではあるが、縄文時代後期～弥生時代前期にかけての土器や石器が見つかっている。

また、奈良時代の火葬墓も見つかっている。火葬墓は素掘りの土坑に、火葬人骨の納めた須恵器の蓋杯が据え置かれた状態で見つかっている。

平成16年度発掘調査（開発に伴う調査）

古墳の可能性のある周溝が見つかっており、周溝内からは土器も出土している。

平成17年度発掘調査（開発に伴う調査）

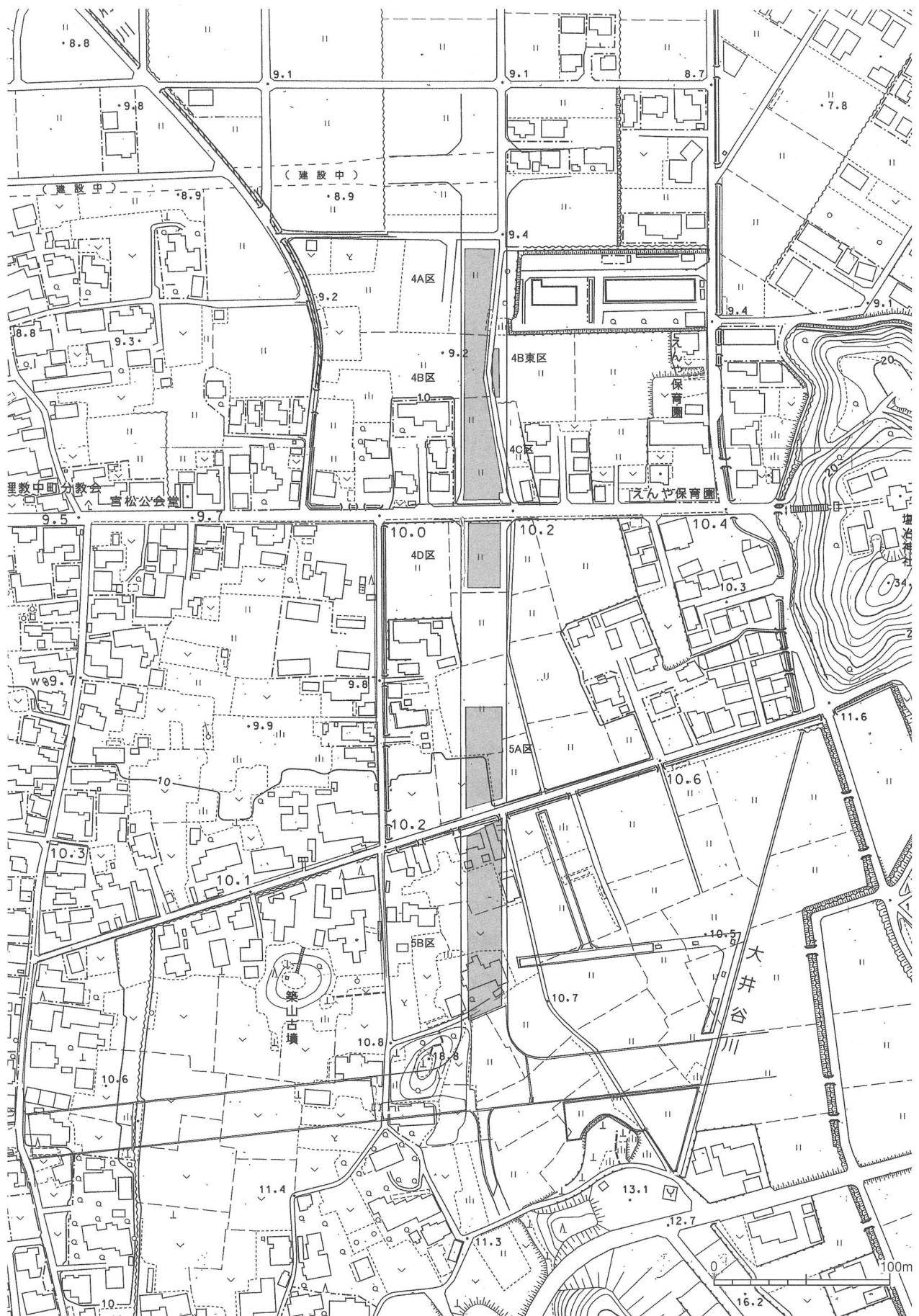
中世の方形区画溝や建物跡が見つかっている。また、遺物としては呪符木簡や、輸入陶磁器が見つかっている。

平成18年度発掘調査（開発に伴う調査）

古墳と古墳の可能性のある周溝が見つかっており、周溝からは古墳時代の土器が出土している。また、古代の土坑墓も見つかっている。

平成19年度発掘調査（開発に伴う調査）

円墳4基を確認した。いずれも墳丘は削平されていたが、玉や馬具といった副葬品が見つかっている。また、古代においては「佛」と書かれた墨書き土器や鉄鉢形土器など仏教との関連をうかがわせる遺物も見つかっている。縄文晩期から弥生初頭にかけての人面付土器をはじめ土器・石器が見つかっている。



第3図 4区・5区全体図 (1 : 3,000)

第3章 4区の調査成果

第1節 調査の概要（第4図、図版2～5）

今回報告分の調査区（4区）は、4つに区分されるので、これらを北から、4A区・4B区（4B東区）・4C区・4D区として報告する（第4図）。各調査区の調査年次や面積などの詳細は例言を参照されたい。

今回の調査区では、遺構検出面（地山面）はどこも東にむかって低くなっていた。これは調査区が谷地形（通称、大井谷）の西辺部に位置するためである。

調査の結果、各調査区で縄文時代から中世末（16世紀）にいたる各種遺構を確認した。なかでも、4C・4D区では遺構が密に分布していた。これらの多くは中世期（12～16世紀）の所産であり、古代以前の遺構は希薄であった。

1 基本層序（第5～9図）

4A区

上から耕作土（床土含む、約40cm、1層）・灰褐色粘質土層（約20cm、2層）・黒褐色粘土層（約10～20cm、3層）・第1ハイカ相当層（地山層）が堆積していた。また、調査区の北部東半では、黒褐色粘土層（3層）と地山層との間に黄褐色シルト層（約10cm、4層）があった。2層から4層は遺物包含層であり、これらを人力で除去したのち、地山層の上面で遺構検出を行った。地山面の標高は西側で約8.1m、東側で約8mである。

4B区

4B区の北部は、基本的には4A区と同じ層序である。灰褐色粘質土層（2層）が約30cmとやや厚く、逆に黒褐色粘土層（3層）は約5cm前後と薄かった。

4B区中央の12ラインあたり以南では灰褐色粘質土層（2層）がなくなり、地山上には黒褐色粘土層（3層）が厚さ約20～30cm堆積していた。

遺構は地山面上で確認したが、溝S D1047は2層上面から掘削されている。

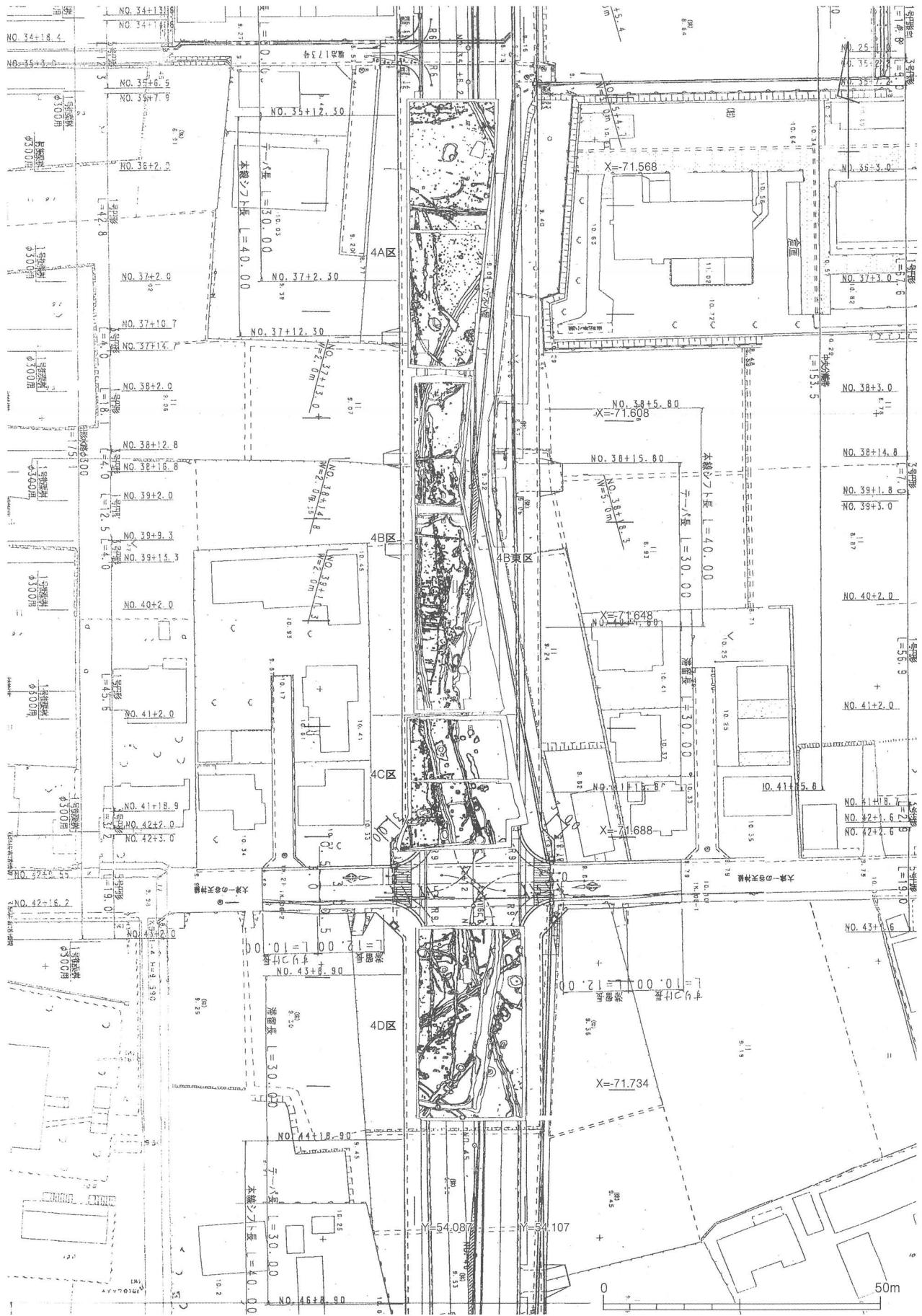
調査区の最高標高は西側で8.5m、最低標高は東側で8m、やはり東側へと地山面が下がる。

4B東区

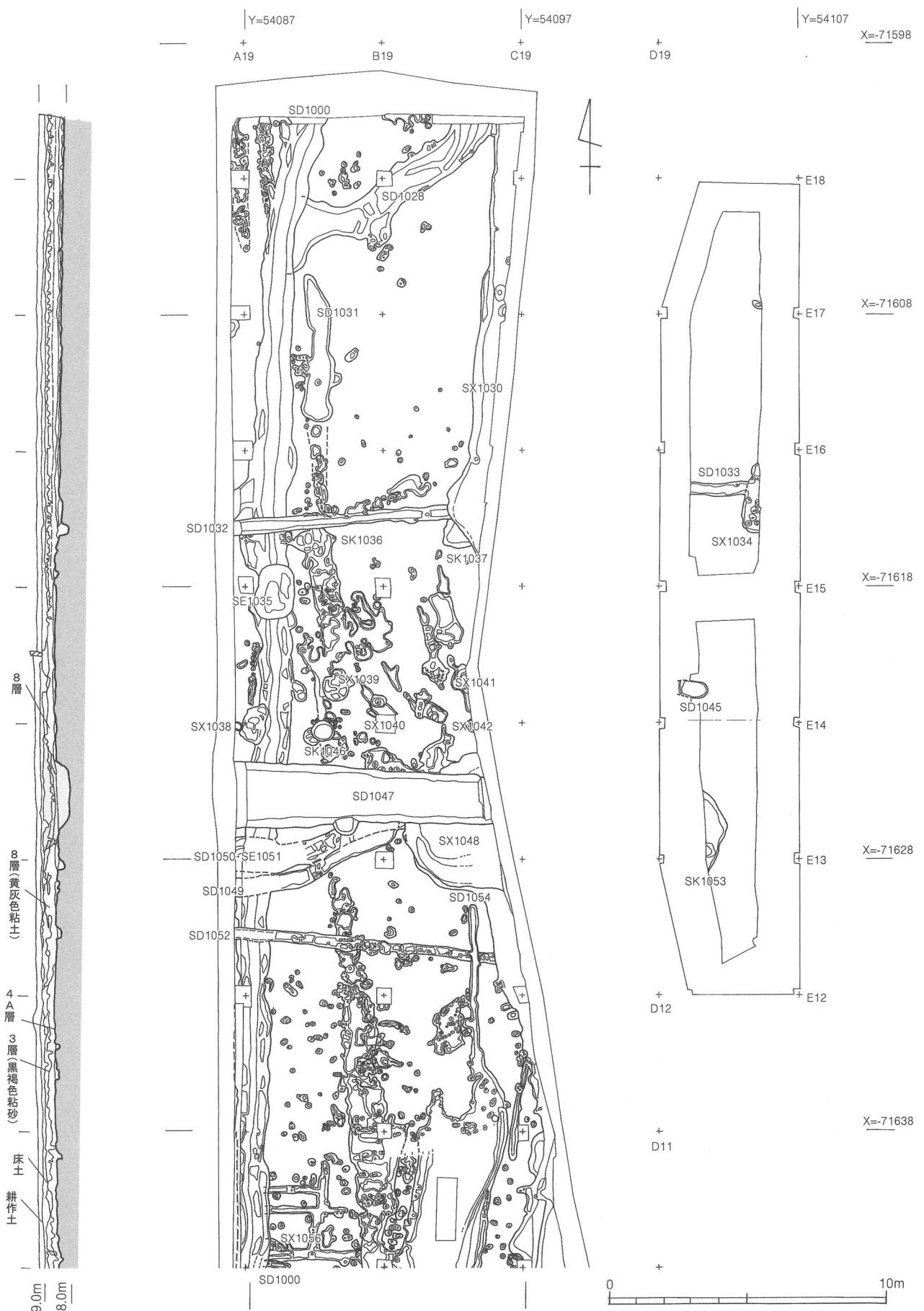
16グリッド内での底面の最高標高は8.3m（A16グリッド）、最低標高は7.9m（E16グリッド）で、東西で40cmの高低差がある。遺構は4C区東側と同じく最も疎である。

4C区

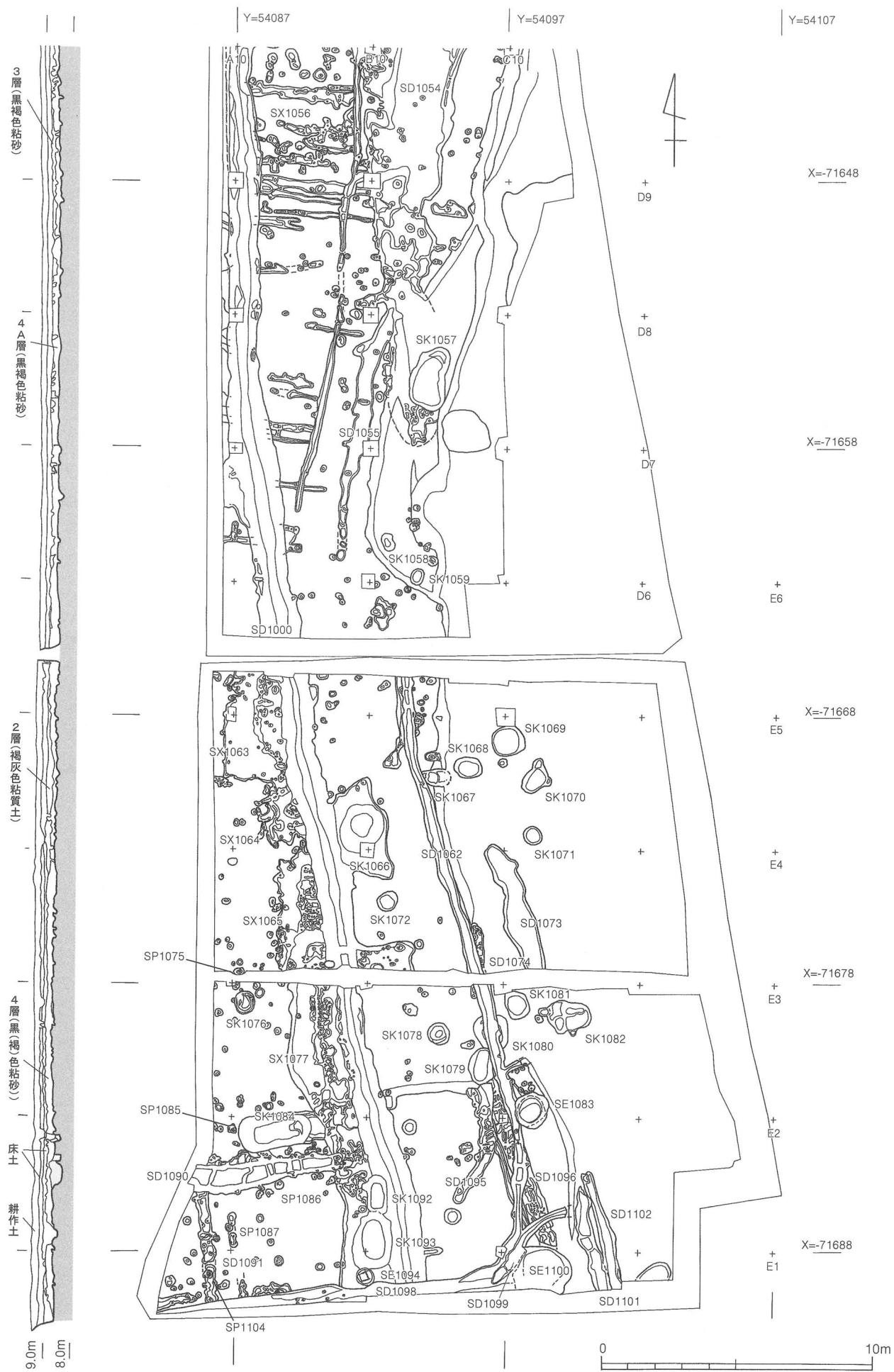
基本的には4B区と同じである。北半部に一部、灰褐色粘質土層（2層）の堆積が認められた。4C区の最高標高は西側で8.6m、最低標高は東側で8mを測る。



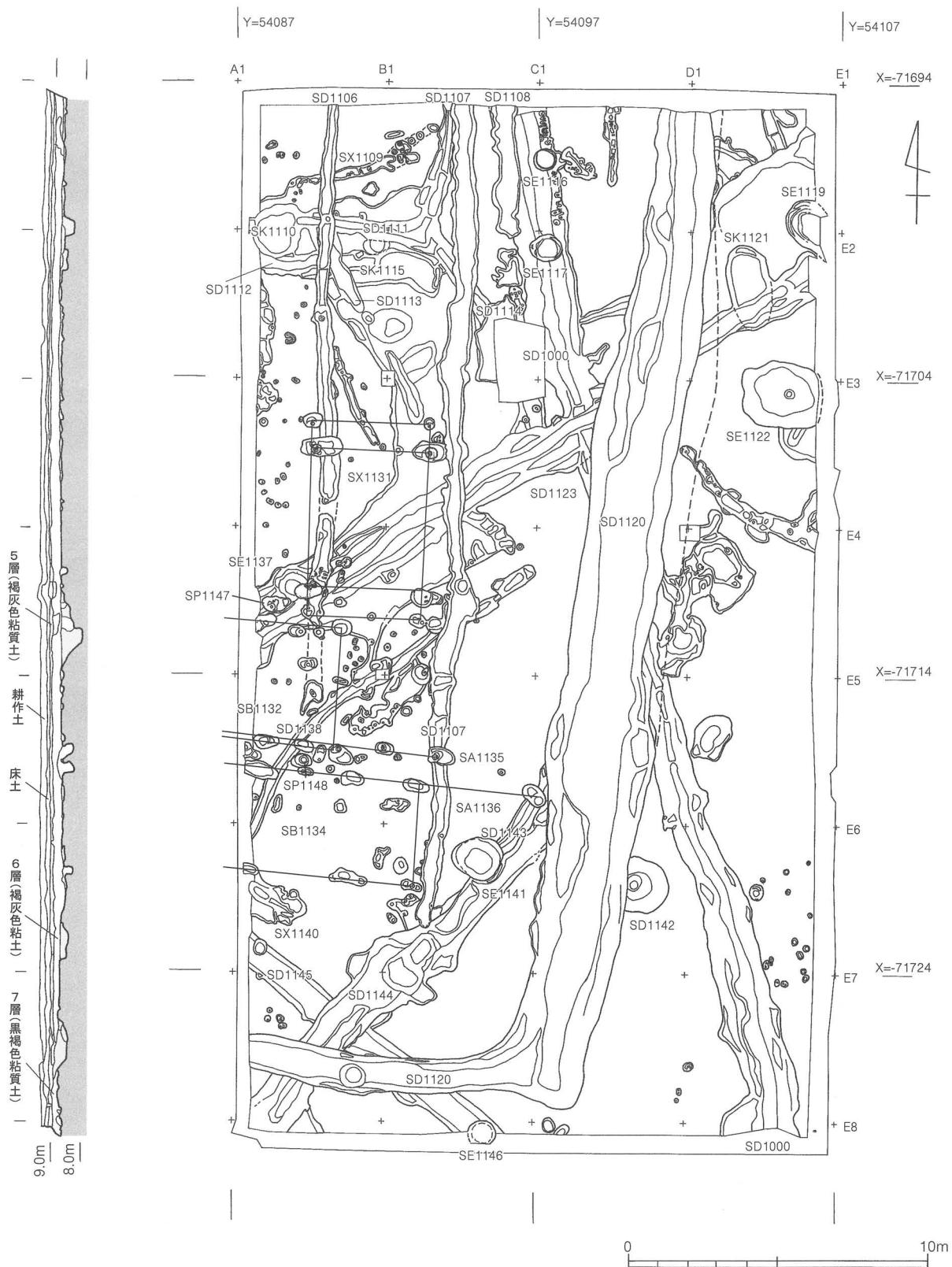




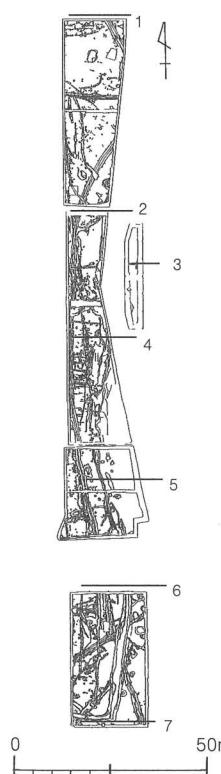
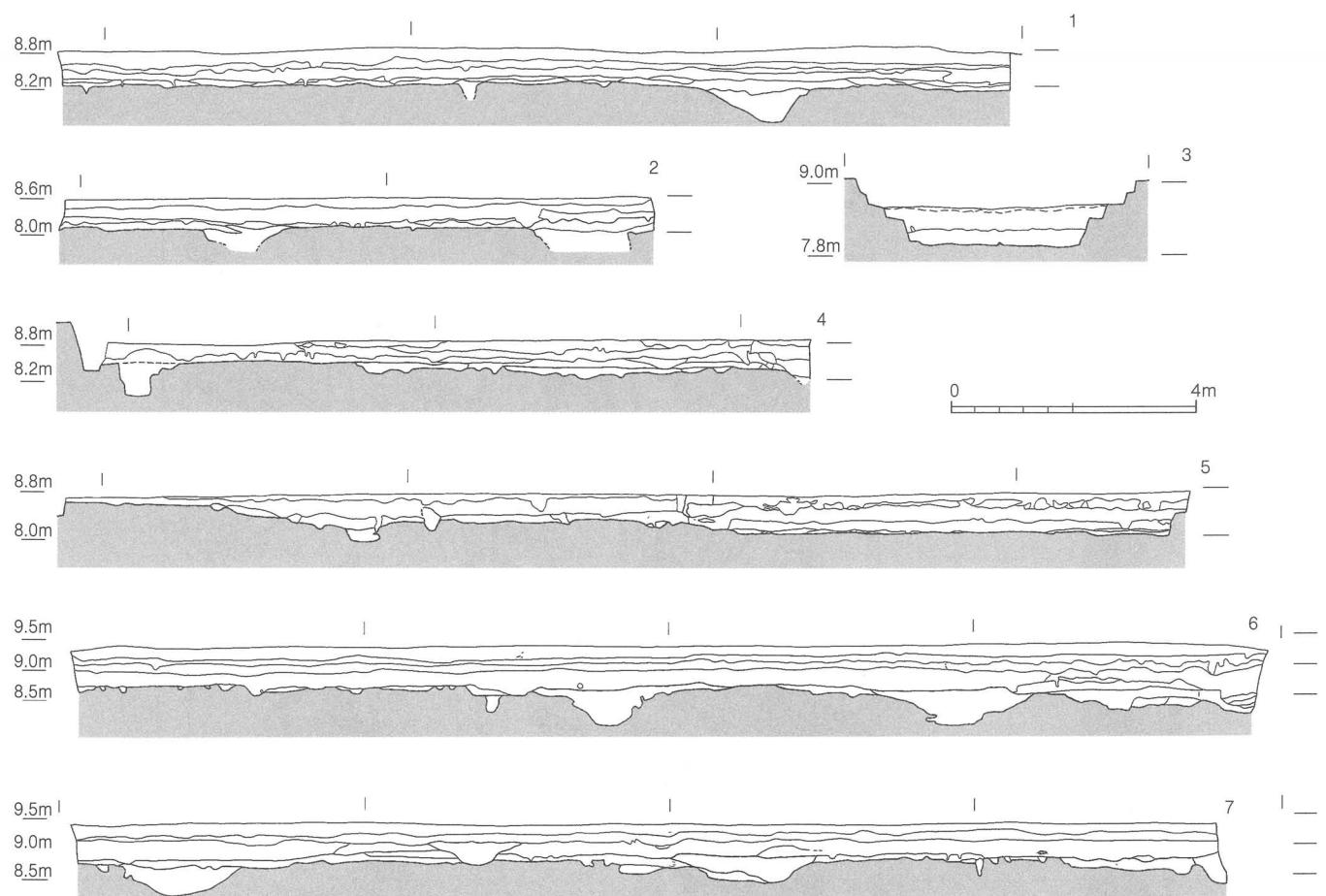
第6図 4B区(1)・4B東区遺構図(1:200)



第7図 4B区(2)・4C区遺構図(1:200)



第8図 4D区遺構図 (1:200)



第9図 調査区土層図(1:120)と土層位置図(1:2,000)

4 D区

4 C区と違つて地山上には薄く黒褐色粘土層（3層）が堆積しており、その上に約30cmの厚さで灰褐色粘質土層（2層）が堆積する。4 D区の東部では、地山層上に3層はなく、かわりに暗灰色シルト層（6層）が約10～20cmの厚さで堆積していた。

黒褐色粘土層（5層）は、4 D区南辺で、3層と6層との間に挟まれるように確認した土層である。最高標高は西側で8.7m、最低標高は北東側で8.2m。

2 遺構とその出土遺物

主要な遺構の詳細を以下記述する。

（1）縄文時代の遺構と遺物

溝 S D1033と竪穴状遺構 S X1034（第6・11図、図版12）4 B東区のE16グリッド内で検出した遺構である。検出標高は7.9mである。

溝 S D1033は断面逆台形を呈した東西方向の素掘り溝である。竪穴状遺構 S X1034は平面形が方形と考えられ、底面は平坦、壁はほぼ直立する。S X1034は溝 S D1033の埋土に掘りこまれている。

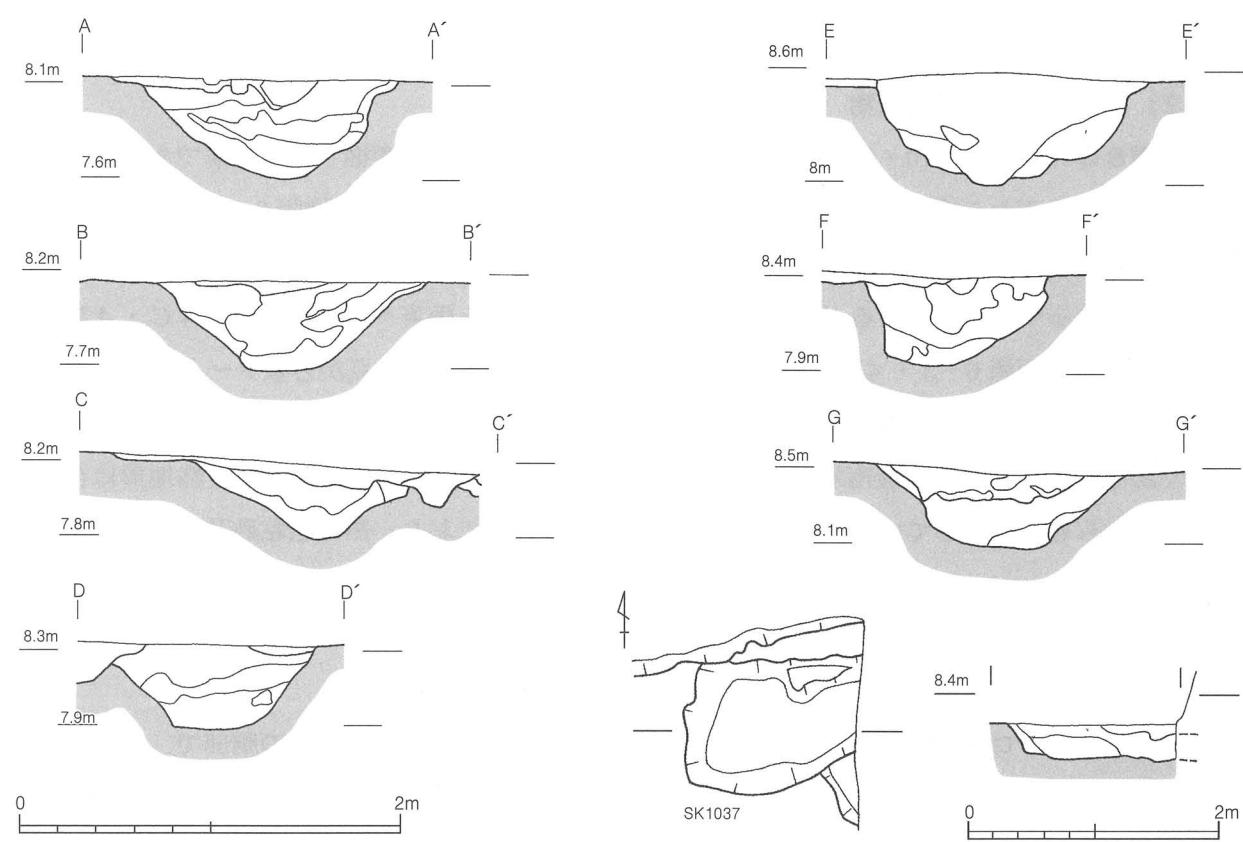
溝 S D1033の出土遺物は皆無であるが、竪穴状遺構 S X1034からは縄文土器の破片が数点出土した。これらはすべて同一個体と考えられる（図11-1～3、図版12-1）。1は口唇部に小さな刻み目をもつ深鉢の口縁部である。3はその胴部、2はその底部で、丸底である。器面調整は内外ともナデと思われる。詳細な時期は不明であるが、第1ハイカ層¹⁾の上に形成された遺構なので、時期は縄文時代後期中葉以降と考えられる。

（2）弥生時代の遺構と遺物

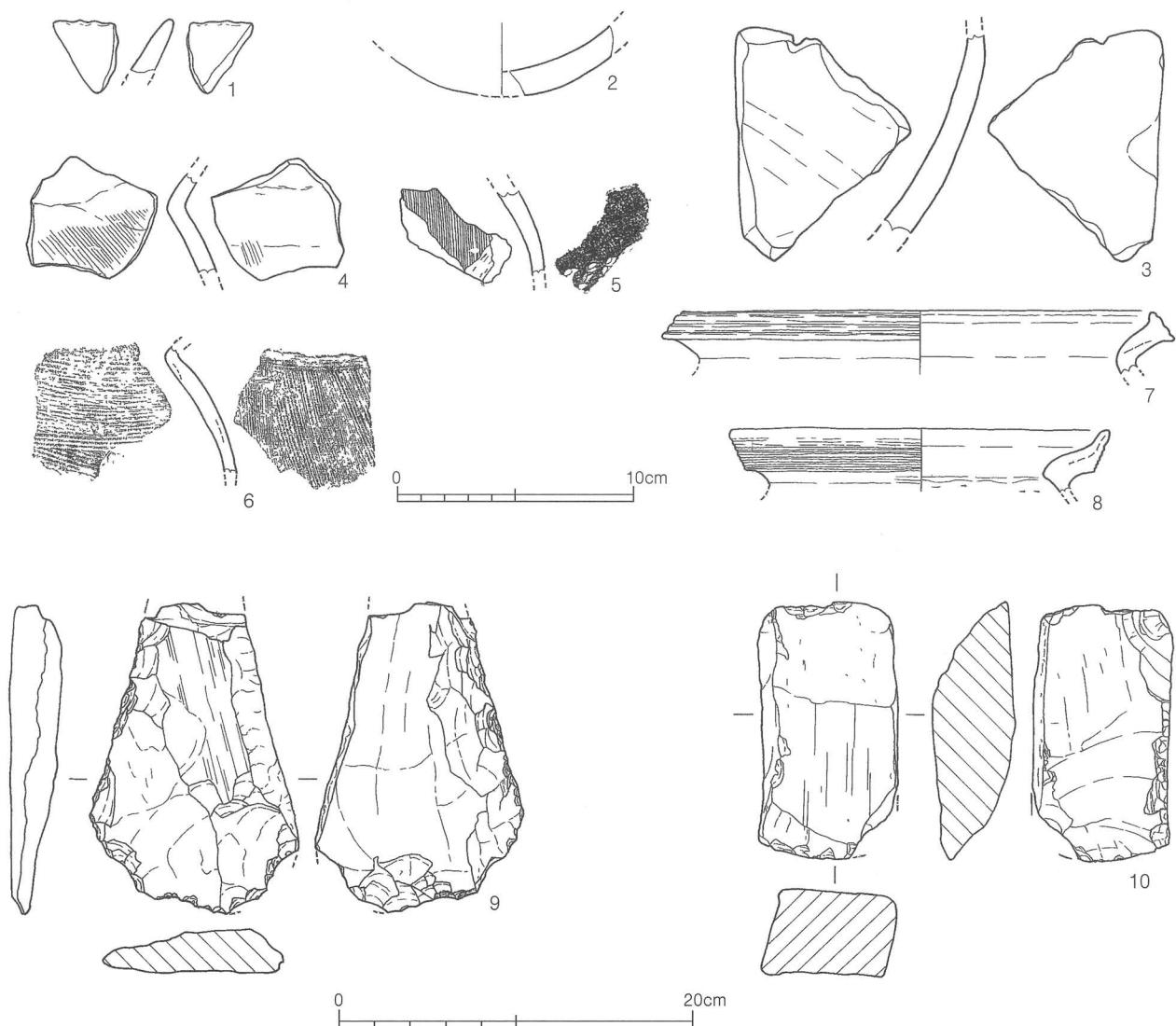
南北溝 S D1000（第10・11図、図版2・6）4区を縦断する素掘りの南北溝である。4 A区北部では北西から南東方向へ延びて、一旦、調査区外へと消える（図版6-1）が、南部では再び調査区内を北北東—南南西方向に走る（図版6-1）。4 A区南部で南へ湾曲し、4 B区ではほぼまっすぐに南下する（図版6-2）。4 C区北部から南東へ方向を変え、4 C・4 D区を貫通する（図版6-3・4）。総延長は200mにも及ぶ。傾斜変換点から数メートル西に離れて併走しているようで、地形に沿って掘削されたものと考えられる。本調査区では最も古い遺構である。底面の標高は最南端付近で8.15m、最北端付近で7.6mをはかり、自然地形に合わせて南から北へ傾斜している。断面形態はほぼ逆台形をしており、黒褐色粘砂及び粘土が堆積していた。

遺物は、上面からは古代から中世の土器が出土するが、これらはみな混入品である。量は少ないが、確実に埋土中から出土したものを掲載した（図11-4～10）。

4は如意形の口縁をもつ甕の頸部である。5は外面に刺突文を施した甕の胴部で、内面調整はケズリである。6・7は中期後半、8は後期後半の甕口縁部である。9は打製石斧。10は使用痕ある礫。



第10図 弥生時代の遺構図と土層図（SD1000は1:400と1:80、SK1037は1:40）



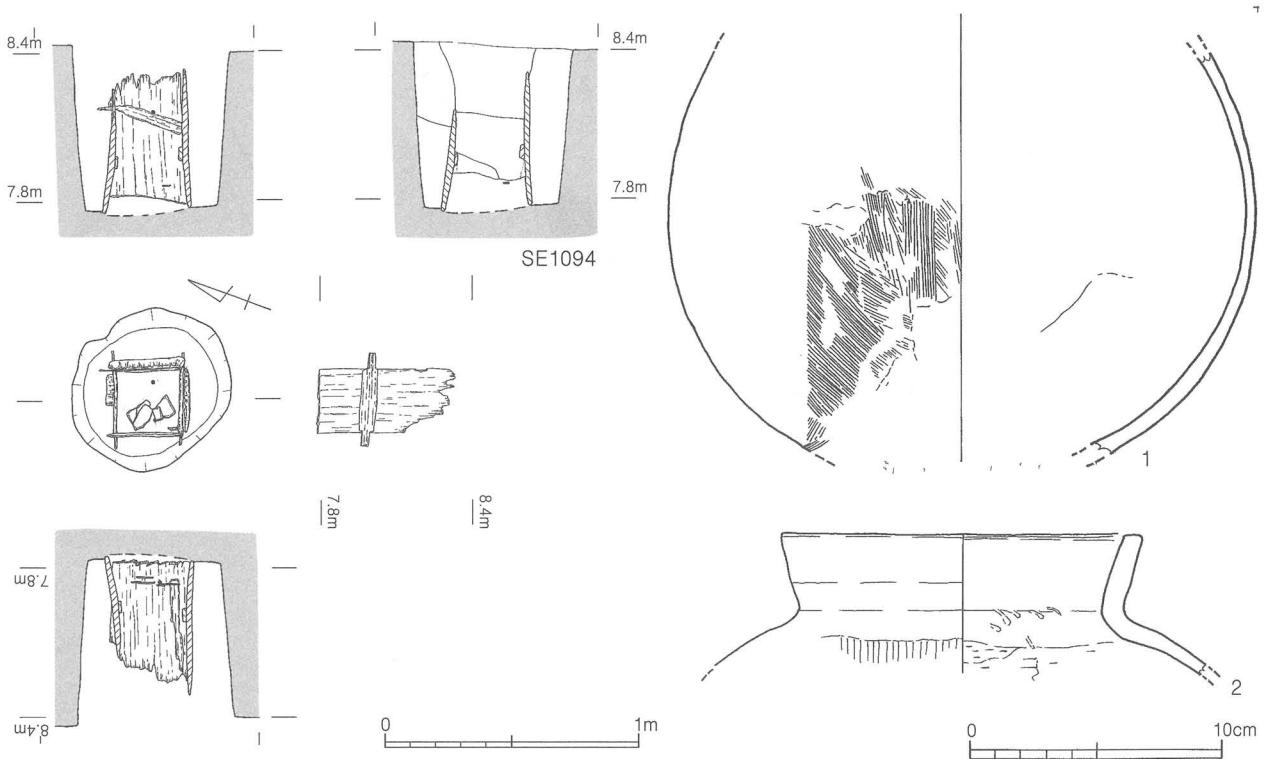
第11図 縄文・弥生時代の遺物実測図（土器 1：3 石器 1：4）

以上より、南北溝 S D1000は、²⁾弥生時代後期末のものと考えられる。しかし、今回の調査区からは同時期の遺構が他に検出されなかったことや出土遺物がごく少ないことを考慮すると、居住域からは離れていると思われる。

土坑 S K1037（第10図） 4 B区で検出した土坑である。平面形態がやや歪な長方形をした土坑である。S X1030・S D1032と重複し、それより古い。後述する土壙墓に近接し、平面形態も大きさも似ている。古代の遺構と考えられる溝 S D1032よりは古いものの、出土した2点の土器が小片であるため弥生土器と断定しきれない。

(3) 古墳時代の遺構と遺物

井戸 S E1094（第7・12図、図版7-1・2） 4 C区南辺中央にある井戸で、平面円形の掘形に、縦板組方形の井戸枠をすえ付けている。掘形の壁はほぼ直立している。また、井戸枠の各辺はおおむね方位にそろう。重複関係からすると、南北溝 S D1000より新しく、S X1077および土坑 S K1093より古い。下辺に鋸状の切り込みを入れた枠板（現存長55cm、現存幅30cm）



第12図 古墳時代の遺構実測図と遺物実測図（遺構1：30 土器1：3）

を掘形の底に立て、東西の枠板にあけた枘穴に横木を差し込んで組んでいる。裏込め土は黒褐色粘質土で下半部は地山の砂が含まれている。掘形からは遺物は出土していない。井戸内の埋土は軟質の暗褐色粘質土である。

埋土の最上層上面から須恵器片が1点出土したが、混入物と考えられる。井戸枠内の底面からは古式土師器の甕胴部が出土した（第12図1）。器壁は薄いが焼成は良好である。外面全体に煤が付着している。

以上より、井戸SE1094は古墳時代前期と考えられる。

溝SD1096（第7・12図） 4C区の溝SD1062・SD1095・SD1099などの下から検出された溝である。底面は凹凸が著しい。出土遺物は、土師器の甕口縁部片1点のみ（第12図2）。口縁部は若干膨らみをもつが直線的で、口唇部は平坦面をもつが、端面はわずかにくぼんで沈線状となる。出土土器より古墳時代中期の遺構と考えられる。

（4）古代（奈良～平安時代）の遺構と遺物

土坑SK1067・SK1068・SK1069・SK1070・SK1071（第13図6） 4C区東北部の5m四方の範囲に密集する5基の土坑である。それぞれ平面形態は楕円形と長楕円形である。いずれの土坑も基本的には灰褐色粘質土の単一層を埋土とする。土坑SK1068は灰白色シルトブロックが多く混入する灰褐色粘土質を埋土とし、人為的に埋められたようである。

出土遺物は、土坑SK1068底面から弥生土器の小片1点、土坑SK1070からは須恵器甕の胴部破片（第14図6）がある。これら4C区東側で確認した遺構は、層位関係から古代のものと

考えた。

土坑 S K1080 (第13図、図版7-3) 4C区のほぼ中央にある素掘りの土坑。室町時代の溝S D1062の真下で確認した。平面は楕円形、壁はやや急傾斜である。埋土は整然とした堆積状況を示していた。2層・3層間から、木杭2本と自然木2本が出土した。また、それらと共に斧状の石製品1点が出土した。検出状況などから古代の遺構と考えられる。

井戸 S E1051 (第6・13・14図1) 小規模だが井戸と思われる遺構である。4B区のほぼ中央に位置する。溝S D1050と完全に重複し、その下層から見つかった。底面から土師器甕片(第14図1)と礫が1点ずつ出土したのみである。溝S D1050より古いで、古代の遺構と推定する。

井戸 S E1137 (第8・13・14図8) 4D区の西辺中央部にある素掘りの井戸。溝S D1123を掘削中に確認した。掘形は楕円形をした断面形態はバケツ形である。出土遺物は凝灰岩製の磨石1点(第14図8)である。10世紀の溝S D1123に壊されているので、古代の遺構とみてよかろう。

井戸 S E1142 (第8・13図) 4D区南部にあり、掘形の西側を溝S D1120に1/4程度壊されているが、井戸と考えられる。平面形態は長楕円形に復元できる。断面形態は擂鉢状をしていて、そのほぼ中央に水溜部がある。埋土最下層には植物纖維を含んでいる。出土遺物は皆無である。井戸S E1142は、埋土などから古代の遺構ではないかと考えられる。

東西溝 S D1032・S D1052 (第6図、図版7-5) 4B区中央やや北にある東西方向の素掘りの溝である。互いに規模はよく似ており、約15mの距離をへだてて併走しているが、東に向かってやや離れていく。断面形はほぼ矩形を呈し、壁はしっかりとした立ち上がりである。両者の間が道路状遺構である可能性も考え精査したが、踏み固めたような痕跡は認められなかった。

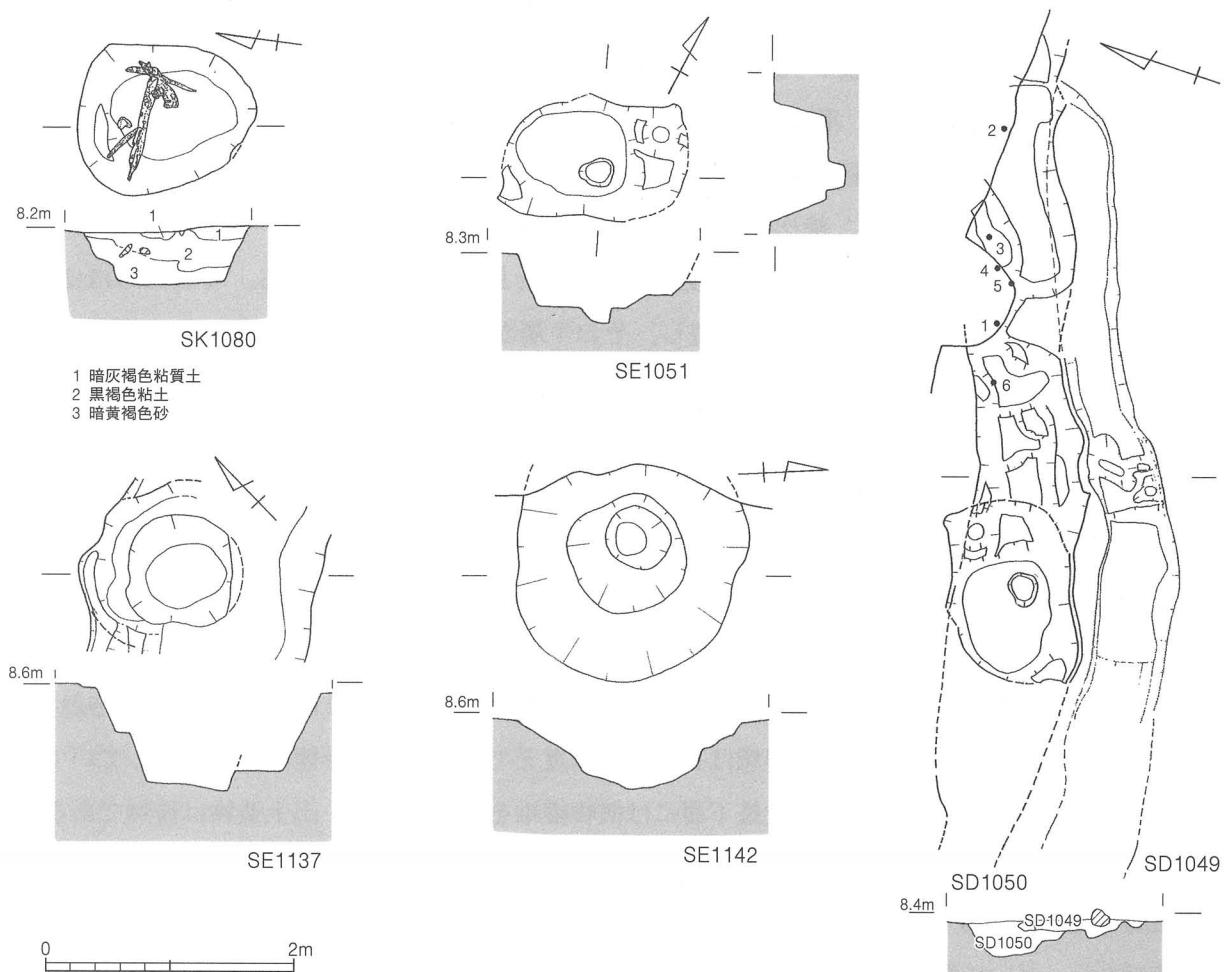
出土遺物は、それぞれ古式土師器の甕小片1点と土師器小片1点のみである。2条の溝とも南北溝S D1000以外、いずれの重複する遺構よりも古いことを考慮すると、古代の遺構と考えられる。

溝 S D1049・S D1050 (第6・13・14図2~4) 4B区西壁からゆるく湾曲しながら北東へ延びる溝である。東端は溝S D1047とS X1048に壊されて収束してしまう。溝S D1050が埋没したのち、南側にずらして浅く掘り直したのが溝S D1049である。

出土遺物は、溝S D1049からは土師器の小片6点のみである。1点には丹塗りが施されている。溝S D1050からは須恵器・土師器・弥生前期土器(小片1点)などが出土した(大袋に1袋分)。第14図2・3は須恵器で2は皿の底部で、底面にはヘラ切り痕が残っている。3は甕の底部付近で外面には平行タタキ目のうちにカキ目を施している。4は土師器甕の口縁部である。

溝 S D1054 (第6・7・15図) 4B区南半を南北に延びる深い溝である。検出長28.3m。溝というよりもS X1056のような耕作に関わる遺構の可能性もある。

出土遺物は、須恵器・土師器・砥石(1点)・鉄滓(1点)がある(大袋1袋分)。C 9グリッ



第13図 古代の遺構実測図 (1 : 60)

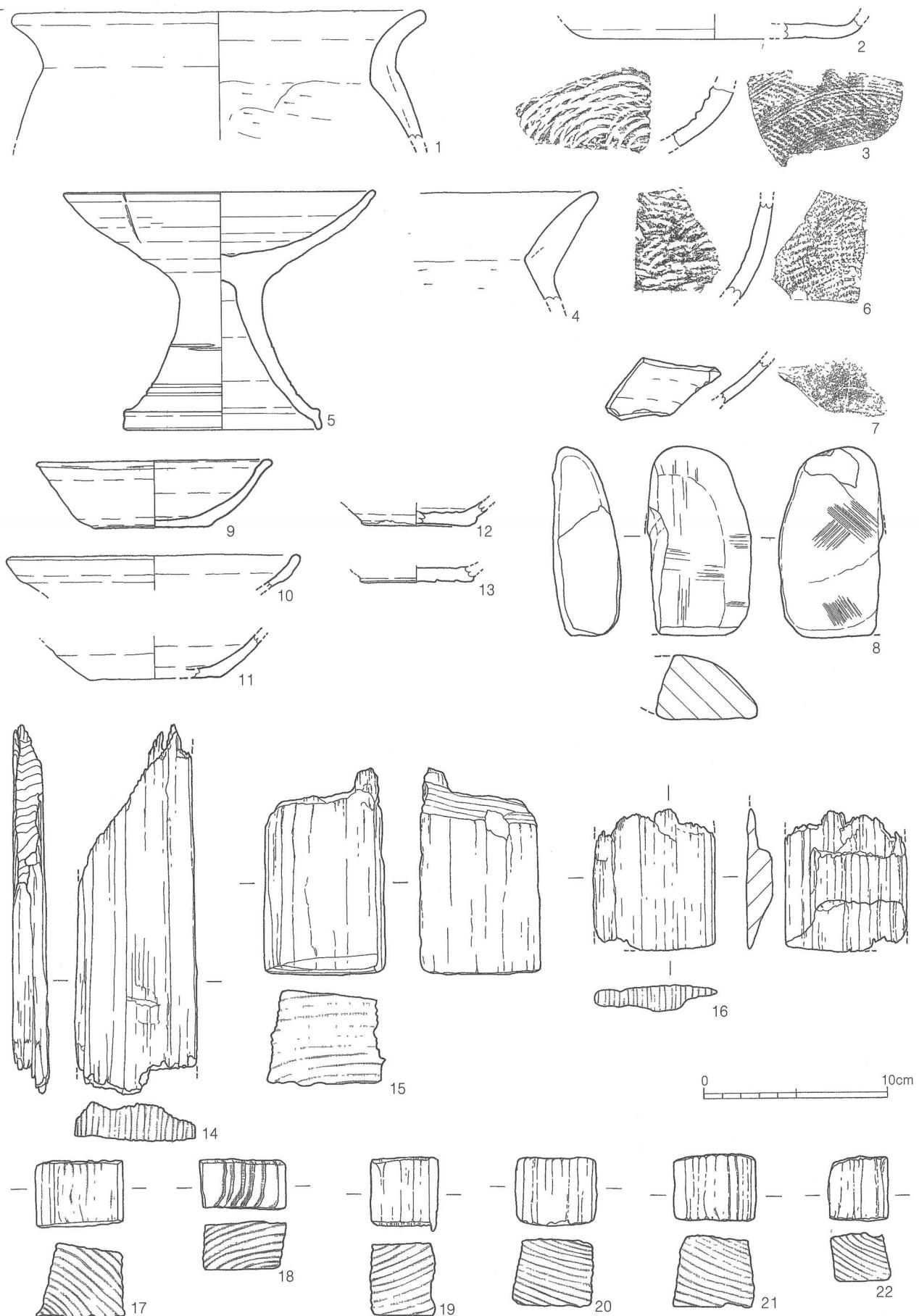
ド内でややまとまって出土した。

第15図1～3は須恵器。1は高台付杯の底部、2は壺の口縁部である。頸部に接合痕が明瞭に残る。外面の一部には自然釉がかかっている。3は壺の底部である。外面は回転ヘラケズリ調整を行ったのちに高台を接合している。4・5は土師器で、4は内外面丹塗りの皿、5は杯の底部で底面には回転糸切り痕が残る。6は砂岩の砥石である。両先端は敲打面として、4面は砥面として利用している。また全面に赤色顔料が付着している。出土遺物から8～9世紀のものである。

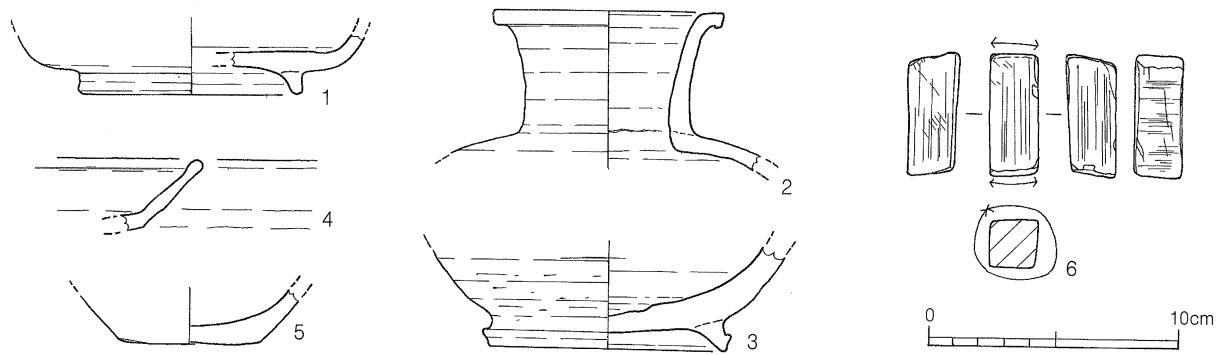
南北溝S D1073（第7・14図7） 4C区中央にある南北溝である。埋土は暗灰色砂で、木切れを多く含む。

出土遺物は、弥生土器小片2点・須恵器片2点・加工痕のある石器1点である。第14図7は須恵器の椀と思われる破片で、浅く「十」の記号が刻まれている。須恵器からみて、奈良～平安時代の遺構であろう。

斜行溝S D1123（第8・14図9～22） 4D区を斜行する溝である。総長23mにおよび、両端は調査区外に延びる。井戸SE1137より新しいほかは、溝SD1120など重複している全ての遺



第14図 古代の遺構出土遺物実測図1（土器1：3 その他1：4）



第15図 古代の遺構出土遺物実測図2 (1:3)

構より古い。4D区の他の溝状遺構とは方位を異にし、東北東～西南西 (N-55°-E) である。断面形態は逆台形状に近い。埋土はおもに褐灰色粘質土と暗褐色粘土である。

出土遺物は、重複する溝 S D1120以東では皆無であるが、それより西からは須恵器片 (1点)・土師器・磨石 (1点)・木材が出土した (中袋1袋分)。

第14図9～13は土師器の杯である。9は底部からやや内湾して立ち上がる体部をもち、口縁部はわずかに外反する。10は口縁部、11～13は底部である。14～22は木製品。14・16は加工面をもつ板材、15は角材、17～22はサイコロ状の角材である。

出土土師器から、溝 S D1123の年代は10世紀と考えられる。

斜行溝 S D1145 (第8・14図5) 4D区西南隅にある斜行溝 (北西～南東) である。埋土は主に暗褐色粘土である。

N-50°-Wに軸をとり、溝 S D1123とはほぼ直交するが、両遺構の埋土の様相は違っており、西側調査区外で両者が繋がってL字状をなすかは不明である。底面は平坦で壁の立ち上がりは急角度である。井戸 S E1146や溝 S D1120・S D1144と重複し、これらよりも古い。

出土遺物は、須恵器の高杯第14図5のみである。5は器部が浅く口径の広いもので、脚柱部には1条の雑な凹線文 (始点と終点がずれる) とその下に2条の凹線文が施されている。脚端部は垂下している。

S X 1036 (第6図) 4B区の北部で確認した径1m強の土坑状遺構である。平面は橢円形を呈している。溝 S D1031と溝 S D1032に壊されているため、歪になっている。後述する土壙墓の付近に位置し、平面形態も大きさも似ているが、出土遺物が皆無であるため、古代以前の遺構ということ以上は不明である。

(5) 中世の遺構と遺物

今回報告する4区では、中世 (12～16世紀) の遺構が最も多く発見された。これらを、建物跡、土坑、井戸跡、溝、その他の順で記述する。

4D区の西部では、地山上面で柱根や柱穴を確認した。これらは、ほぼ方位にそろった建物など3棟と柵列2条に復元することができた。

建物状遺構 S X 1131 (第8・16・21図3～6・17・18) 南北4.6m×東西3.8mの距離で大型

の柱穴 4 基が方形に並び、その南北に約 1 m をへだてて小型の柱穴が 4 基並んだ遺構である。妻柱がみつからなかったことや、柱間が広い点など、建物とするにはやや難があるので「建物状遺構」とした。柱穴掘形の埋土は灰色系の粘土である。柱穴は南北溝 S D1106・1107 の埋土に掘り込まれている。出土遺物は、土師器片 11 点、青磁片 1 点である。第 21 図 3 は北西端の大型柱穴から出土した土師器杯底部、4・5 は北東隅の大型柱穴から出土した土師器杯底部、6 は南東隅の大型柱穴から出土した土師器杯底部である。

S X1131 の中央の大型柱穴 4 基の上面には、炭化物や焼土を含んだ土が堆積していた。若干の鉄滓があったため鍛冶遺構の可能性も想定したが、確証は得られなかった。S X1131 が焼けたためにその柱基部に炭化物が堆積した可能性が考えられる。柱穴の上面からは土師器片（小袋 4 袋分、杯底部：5・6）のほか有孔石製品（17）、台石状の礫（安山岩製、18）、獸骨（2 点）、鉄滓が含まれていた。

建物 S B1132（第 8・16・21 図 7～9） S X1131 の南西にある建物跡である。柱穴 4 基を確認したが、東西棟建物で西側は調査区外にあると推定される。梁間 1 間（4 m）、桁行の柱間は 2.5 m である。柱穴掘形埋土は、S X1131 と類似した灰色系の粘土であるが、S X1131 とはごくかすかに建物の方位に振れがある。

出土遺物は、土師器片 20 点・植物の種（桃？）である。第 21 図 7～9 は土師器の杯と皿。7 は杯底部、8 は皿の口縁部で、体部が「ハ」の字状に大きく開いたものである。口縁部縁に煤が付着している。9 は小皿の底部である。

建物 S B1134（第 8・16・21 図 10～12） 建物 S B1132 の約 1 m 南にあって、方位をほぼそろえた東西棟の建物跡である。1 間 × 2 間以上で西妻は調査区外にある。

出土遺物は、土師器片 12 点である。第 21 図 10 は杯底部、11・12 は小皿で、11 は体部が外開きとなるが、12 は体部が若干内湾する。

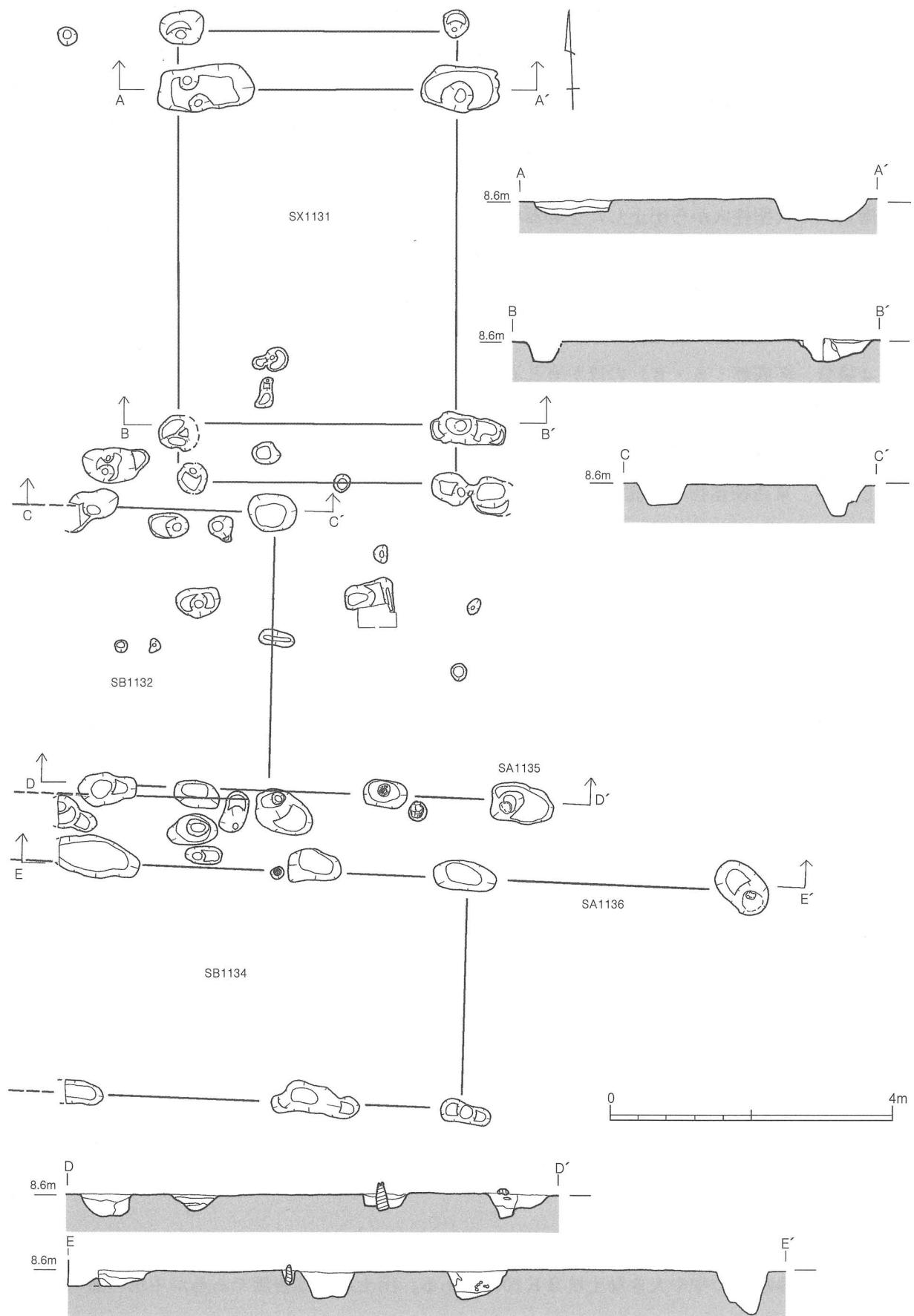
柵列 S A1135（第 8・16 図） 建物 S B1132 の南側柱筋に重なり、調査区外の西へと延びると判断した柵列である。建物 S B1132 とは柱穴が重複しておらず新旧関係は不明である。東から 2 番目の柱穴には柱根が残存している。柱根は残存直径 15 cm、残存長 40 cm をはかる。出土遺物は、土師器片 8 点、フイゴの羽口片 1 点である。

柵列 S A1136（第 8・16 図） 建物 S B1134 の北側柱筋の東延長上にある柵列である。出土遺物は、土師器片 3 点である。

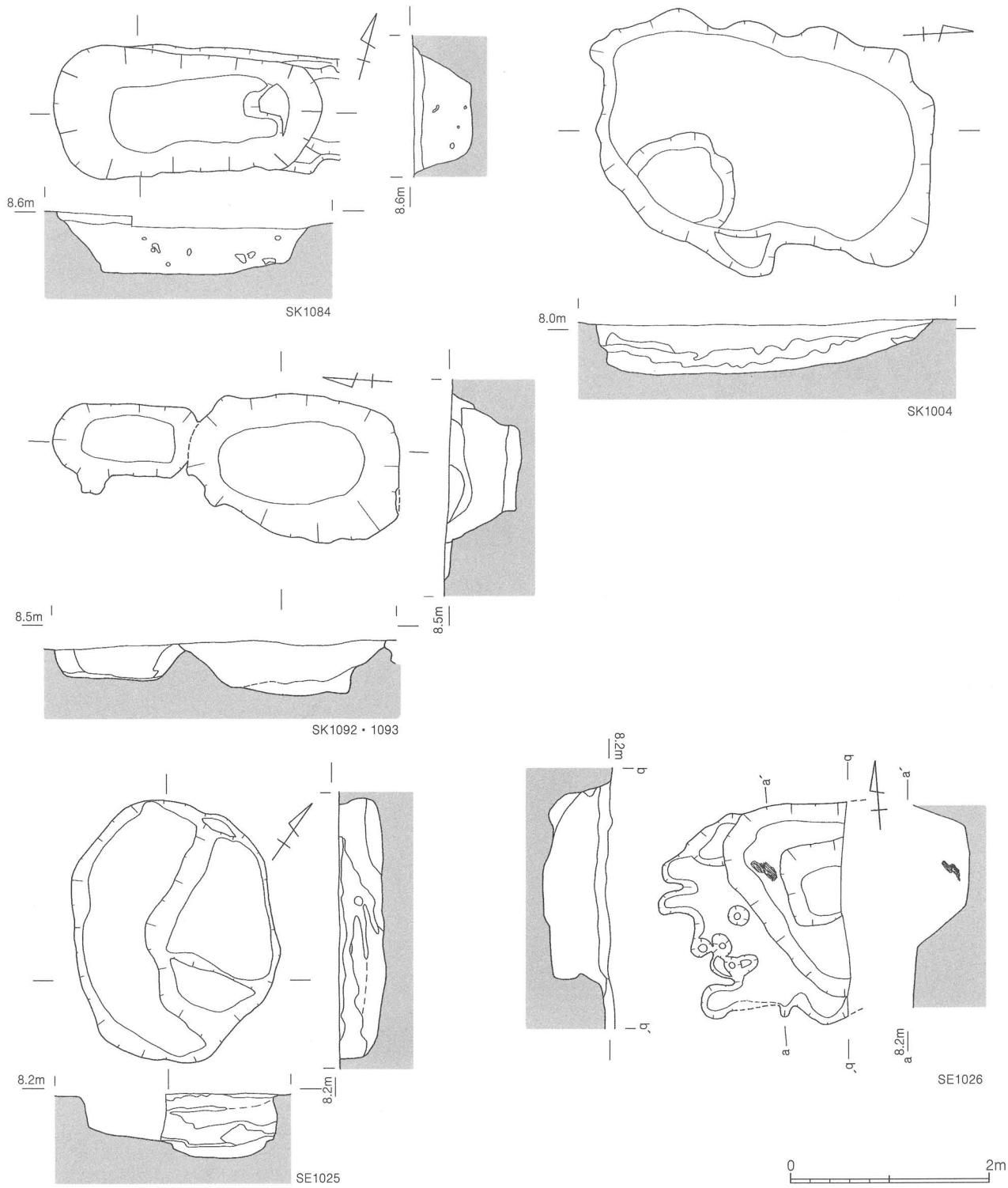
以上の S X1131、S B1132・1134、S A1135・1136 は、いずれも柱穴掘形の埋土が灰色系の粘土であることが共通し、柱穴出土土器もほぼ 15 世紀代のものなので、一群の遺構と理解できよう。

土坑 S K1014（第 5 図） 4 A 区中央部では、小規模なピットが集中して確認されたが、その中に 1 基のみ規模のやや大きな土坑 S K1014 がある。出土遺物は皆無であるが中世の遺構であろう。

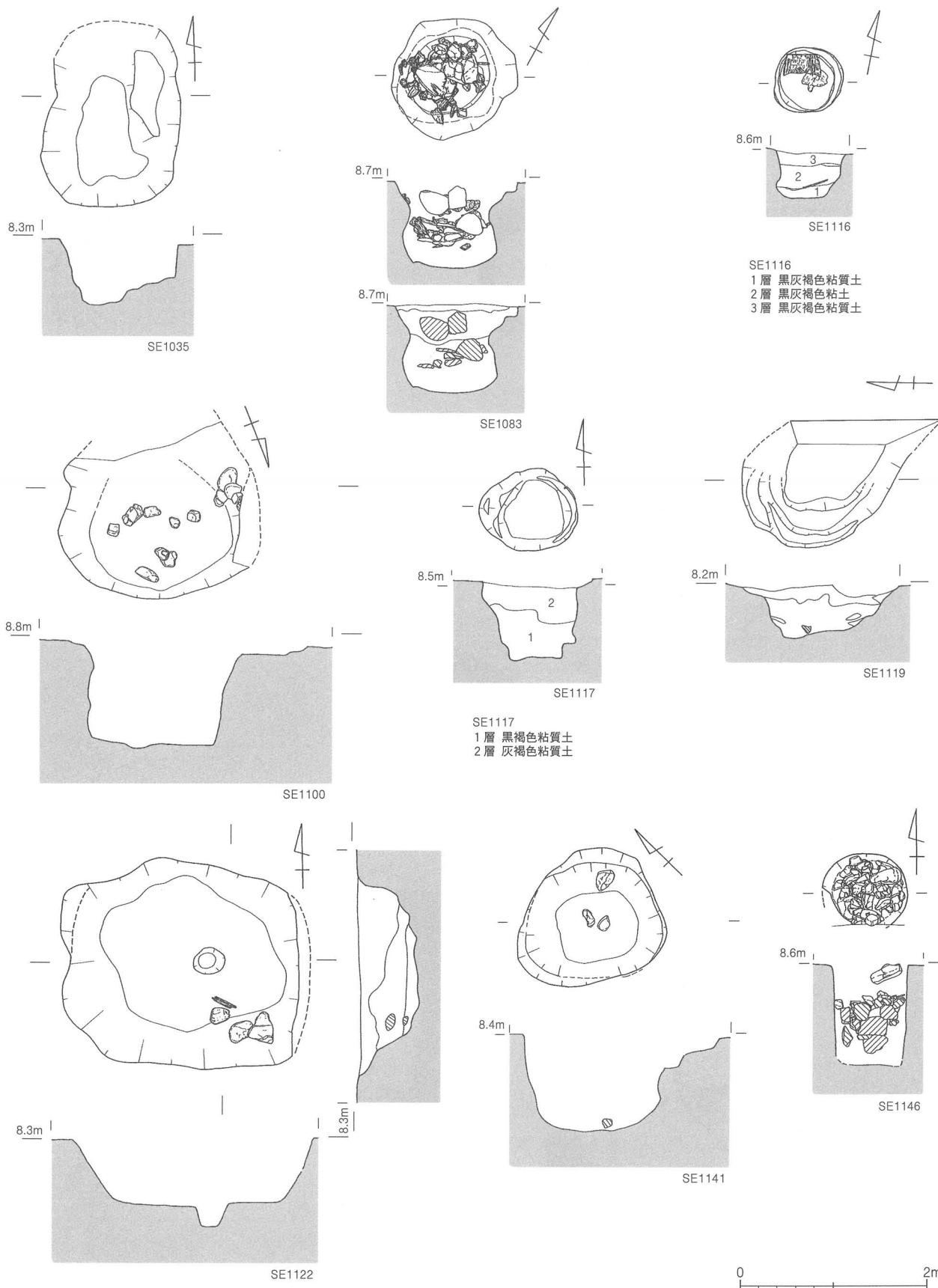
土坑 S K1048（第 6・20 図、図版 8-1） 4 B 区中央部の東壁沿いにある径約 5 m の大型の土



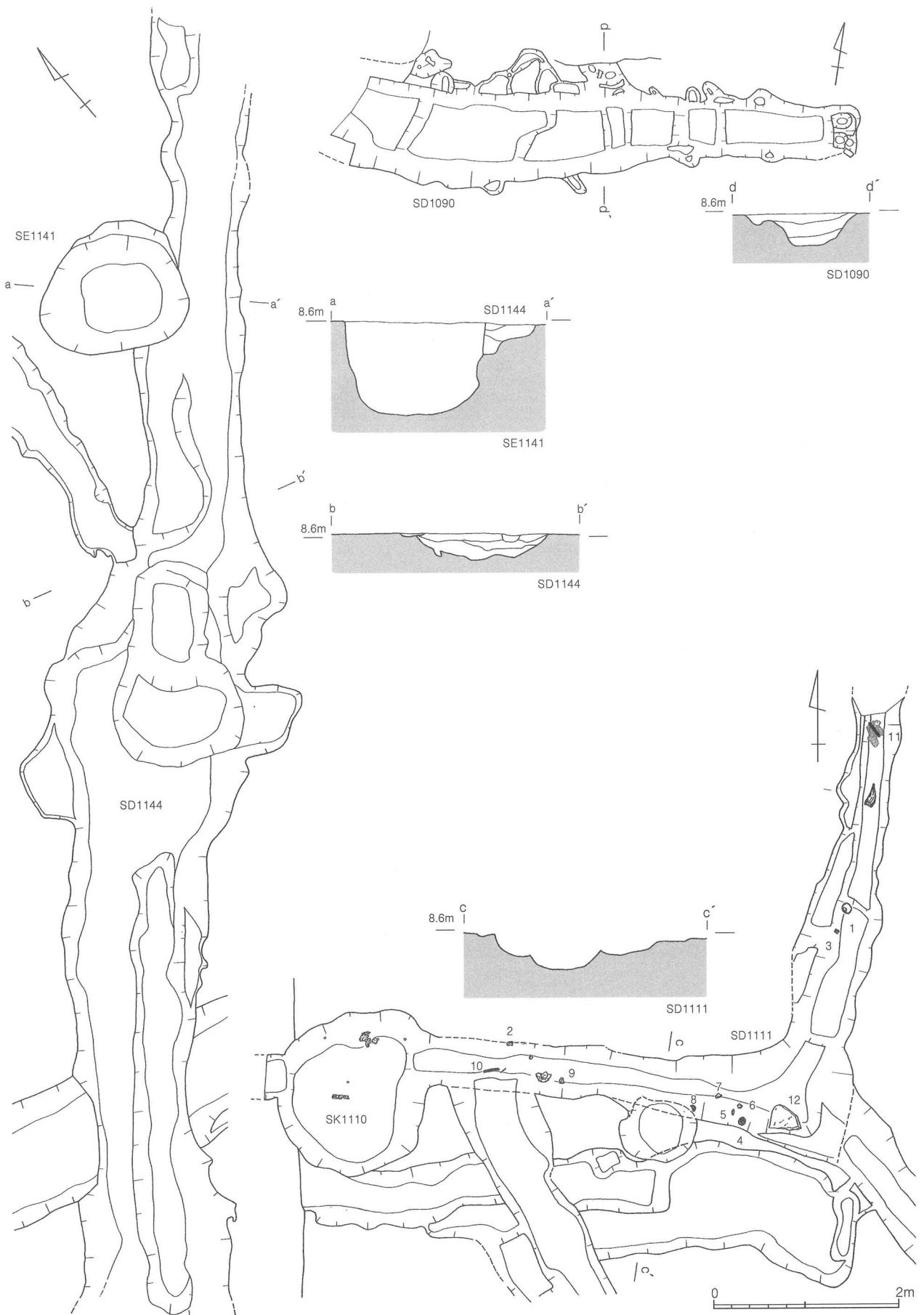
第16図 中世の建物遺構等実測図 (1 : 80)



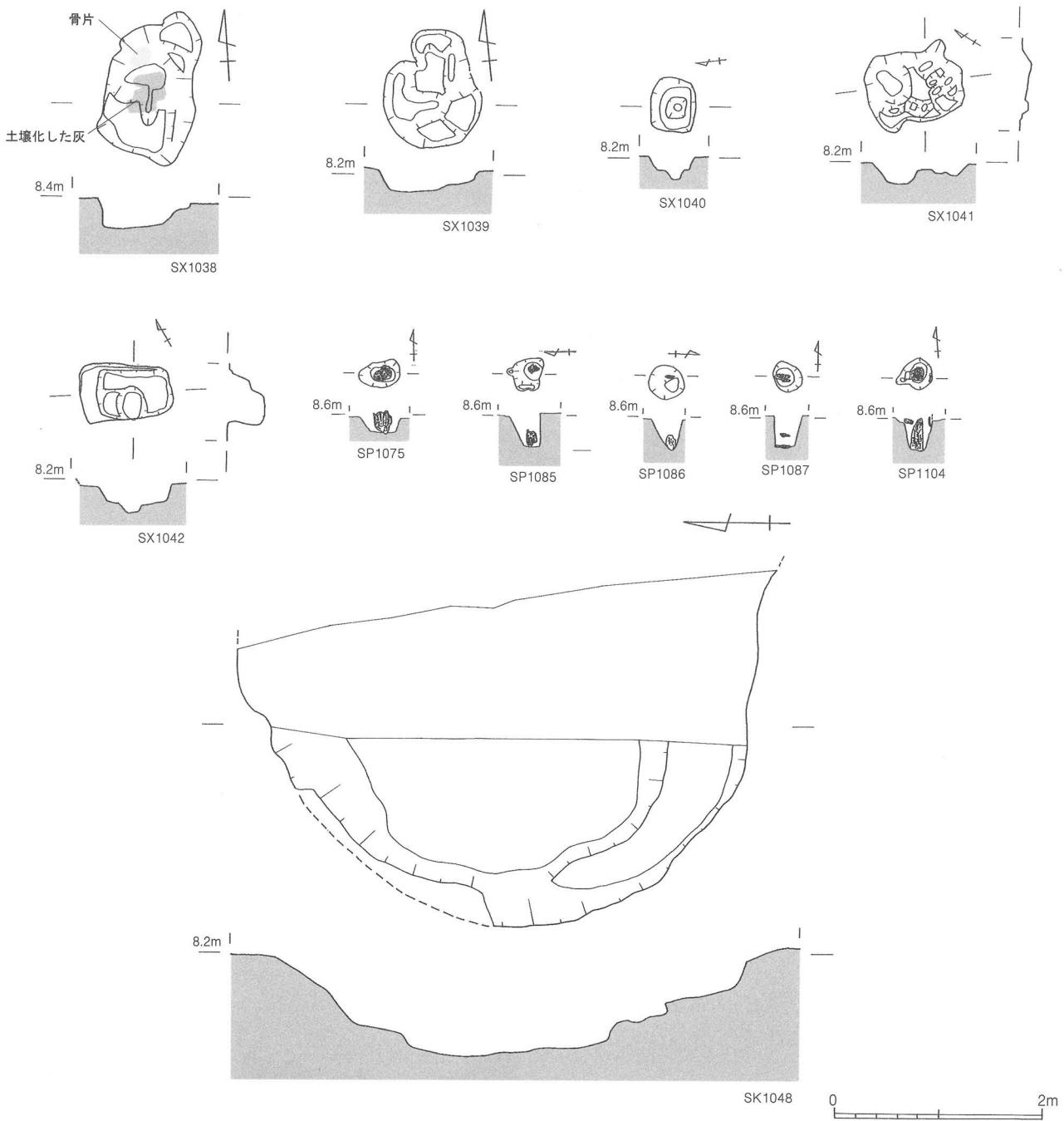
第17図 中世の土坑と井戸実測図 (1 : 60)



第18図 中世の井戸実測図 (1 : 60)



第19図 中世の溝実測図（1：60）

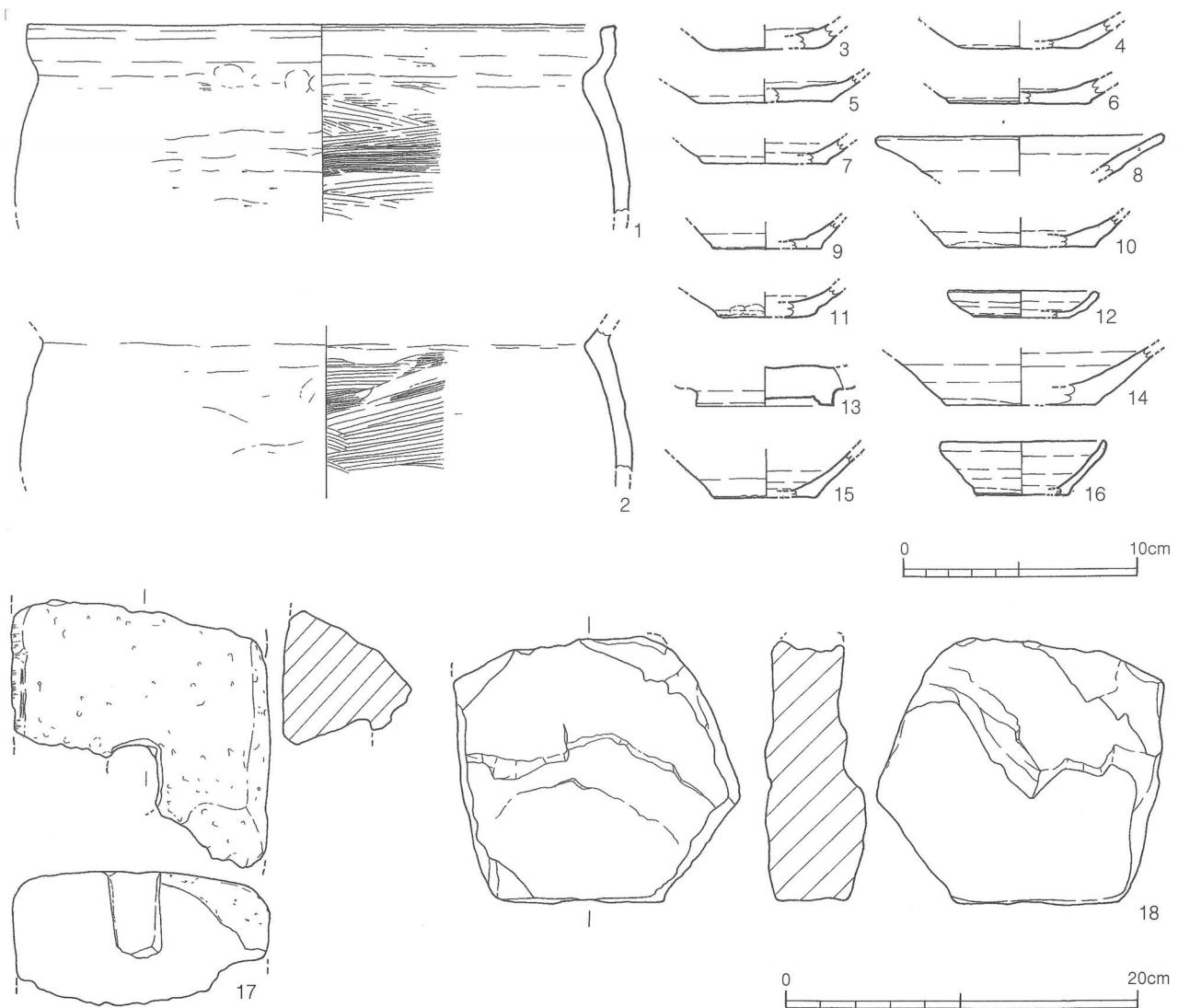


第20図 中世のその他の遺構実測図（1：60）

坑である。全体のおよそ半分を確認し、そのうち西側2/3程度の掘削にとどめた。東西溝S D1047によって1/3近くが壊されるが、斜行溝S D1050よりは新しい。擂鉢状の断面で底面は平坦である。粘土と粘砂からなる埋土3層が整然と堆積しており、円形の水溜ではないかと考えられる。最下層には植物質を含んでいる。

出土遺物は、須恵器・土師器が数点である。出土遺物からは時期不明であるが、東西溝S D1047以前である。

土坑SK1066（第7図） 4C区西北部にある不整形な土坑である。掘形は、本来、直径約1.8



第21図 中世の遺構出土遺物実測図1（土器1：3 石器1：4）

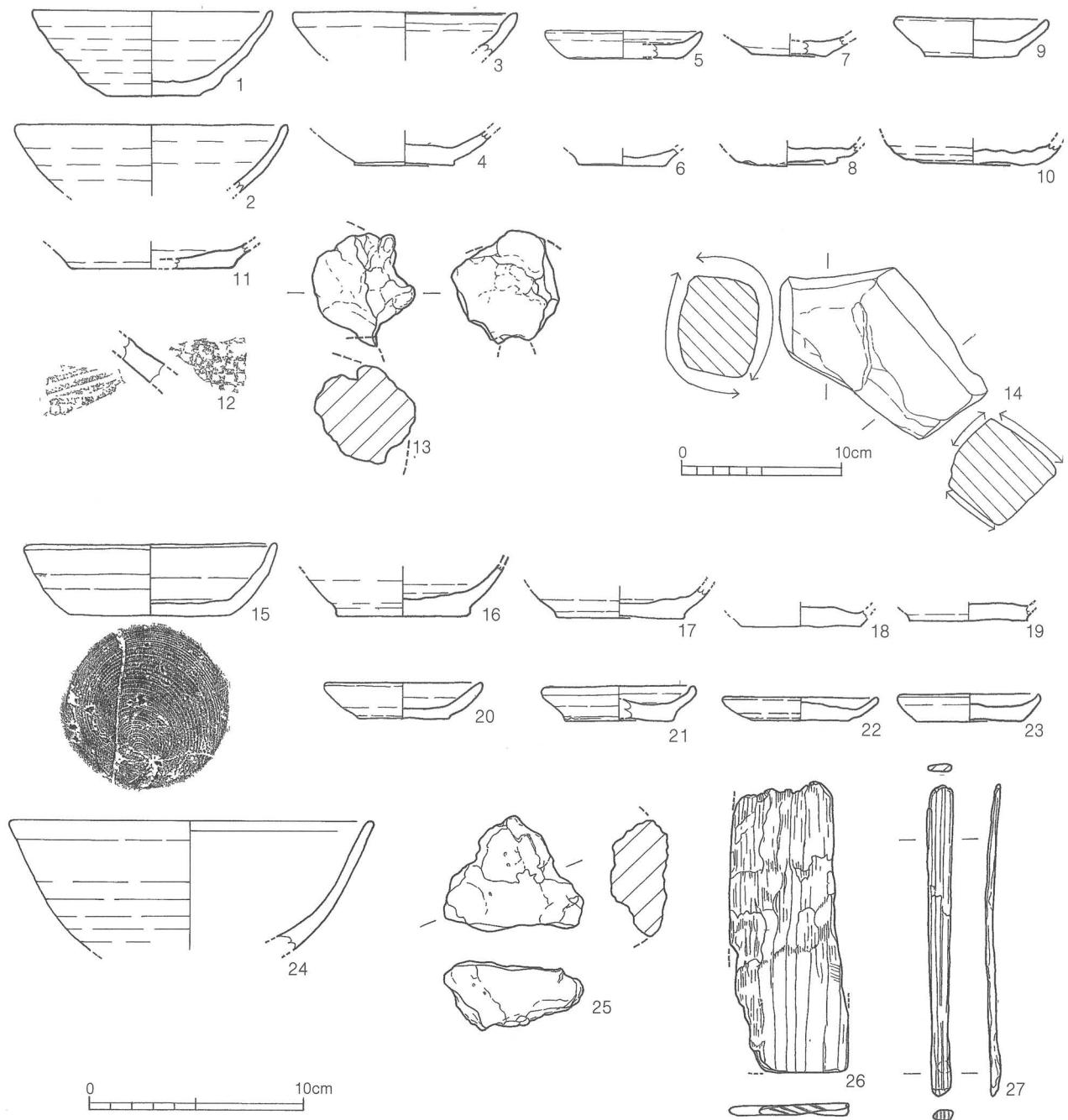
mをはかる楕円形であったと思われる。断面形態は逆台形である。灰褐色粘質土を埋土とし、長さ50cmと15cmの木片が出土した。他に出土遺物は無い。

土坑SK1076・SK1078（第7図） 4C区の中央部やや西にある円形の土坑である。2基とも遺物包含層（黄褐色シルト層・4層）を掘り込んで作られている。

出土遺物は、土坑SK1076から土師器の小片（小袋1袋分）、土坑SK1078から土師器の小片が6点・砥石1点・礫2点があった。16世紀の遺構であろう。

土坑SK1084（第7・17・22図1～6、図版8-4） 4C区西南部にある大型の土坑である。平面形は小判形である。土坑SK1084の埋土は暗褐色粘砂（灰白色シルトブロックを含みやや軟質）の単一層であるが、土坑上面には別の溝の埋土がわずかにのっていた。

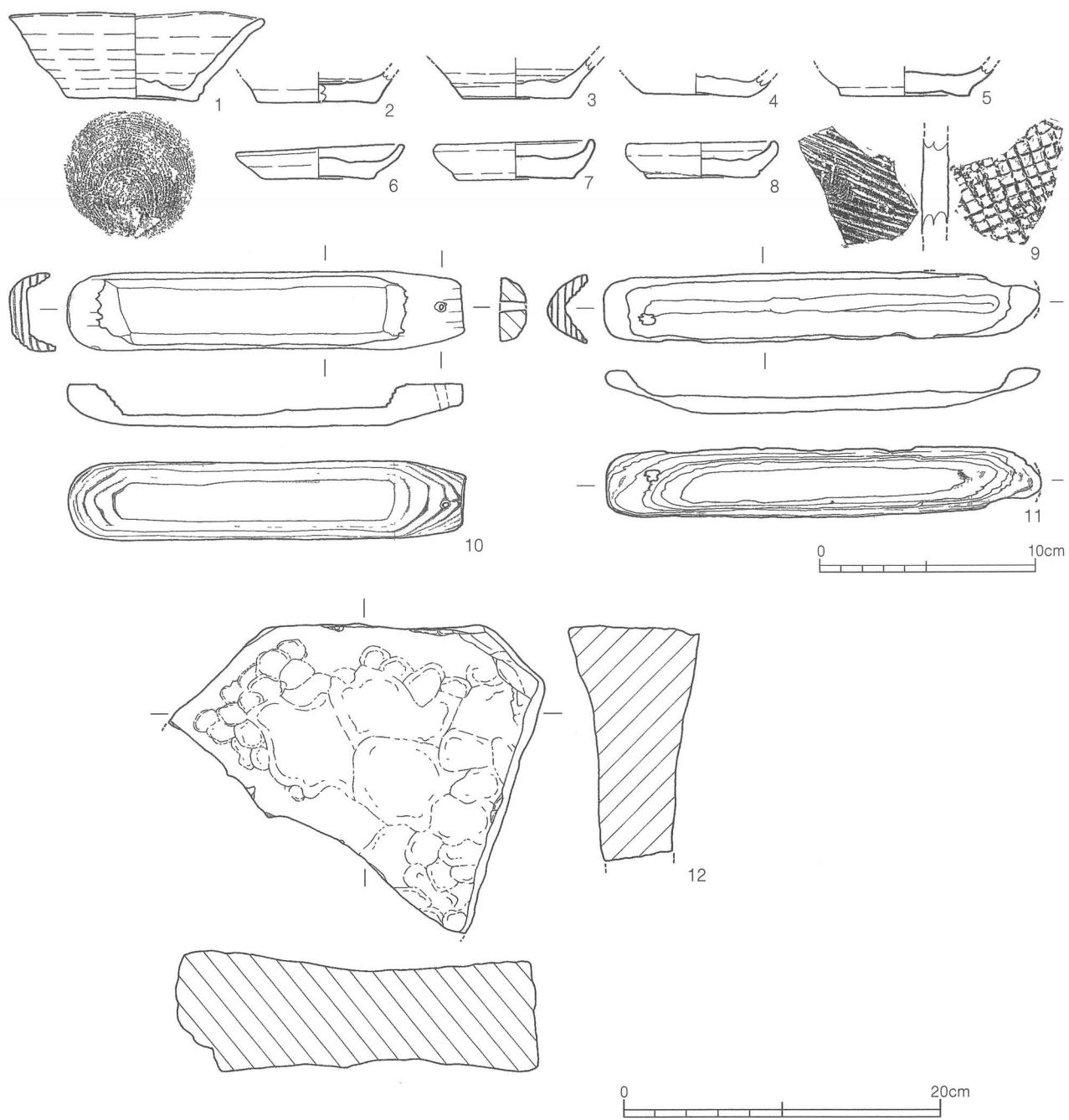
出土遺物は、土師器片である（大袋1袋分）。第22図1～3が杯、4～6は小皿である。5の皿は器壁がやや厚手で、口縁部内面には強いナデによる段がある。12～13世紀のものと考えられる。



第22図 中世の遺構出土遺物実測図2 (1:3 石のみ1:4)

土坑SK1092 (第17・22図7・8、図版8-3) 4C区の西南部にあって、小判形平面をした断面形態はバケツ形の土坑である。南端で土坑SK1093と接しており、SK1093より古い。底面は平坦で壁はやや急傾斜である。

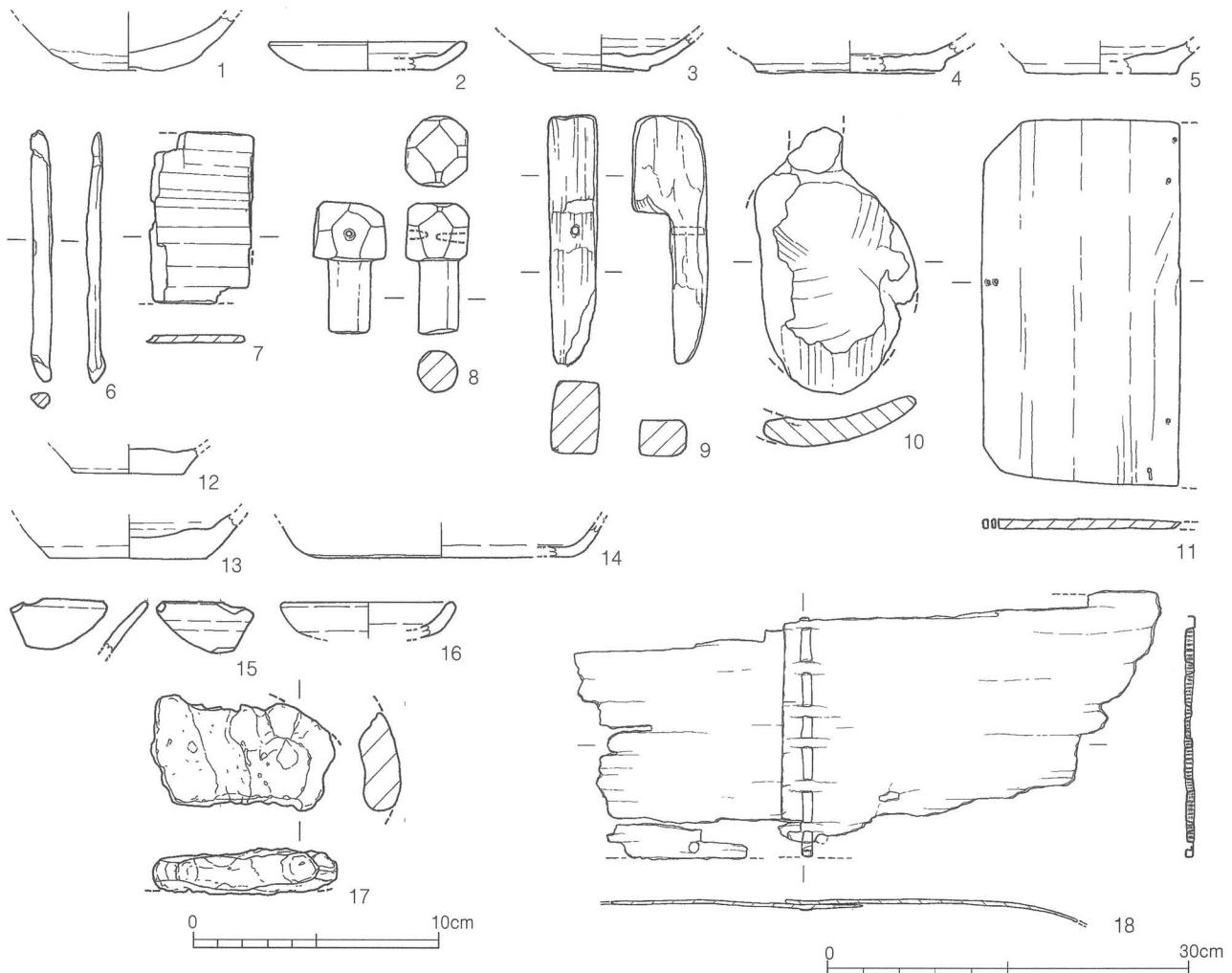
出土遺物は、土師器片5点、中世須恵器小片1点である。第22図8は杯の底部で、底部回転糸切りが切りっぱなしのため器壁のナデにより粘土の盛り上がりが残っている。7は小皿の底部である。ほかに中世須恵器の甕胴部片がある。外面は亀山系の格子タタキ目、内面は板目状の調整痕が観察される。これらは13~14世紀頃と考えられる。



第23図 溝S D1111出土遺物実測図（1：3 石のみ1：4）

土坑SK1093（第7・17・22図9・10・13、図版8-3） 土坑SK1092の南に接し、土坑SK1092より一回り大きな土坑である。平面が小判形をした断面形態はバケツ形の土坑であり、埋土は暗灰褐色粘質土である。

出土遺物は、フイゴの羽口第22図13（1点）と土師器第22図9・10（中袋1袋分）である。10は杯の底部で、底部から体部への立ち上がりは丸みを帯びたものである。9は小皿でやや厚手である。ともに13～14世紀のものであろう。

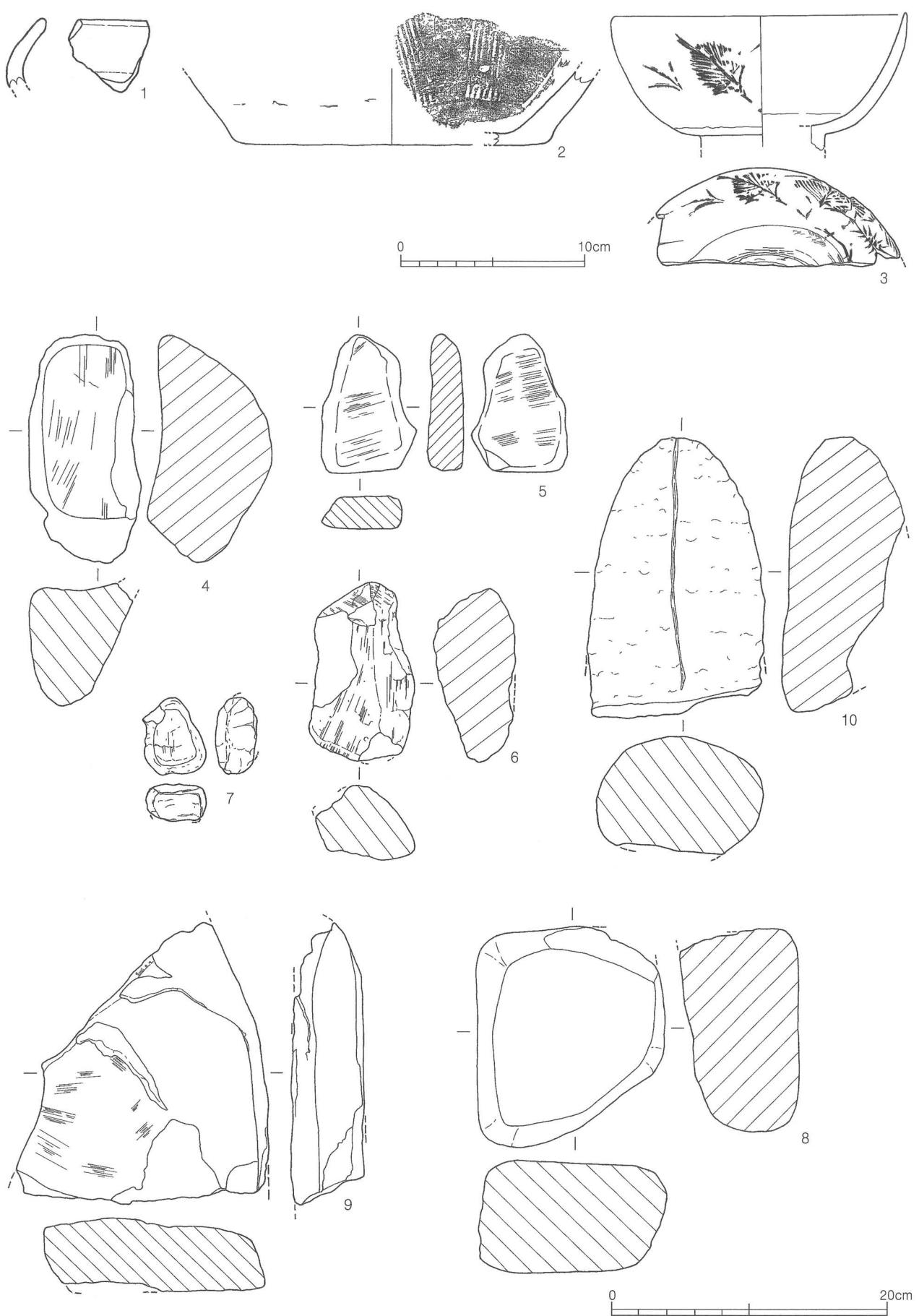


第24図 中世の井戸出土遺物実測図（1：3　曲物のみ1：6）

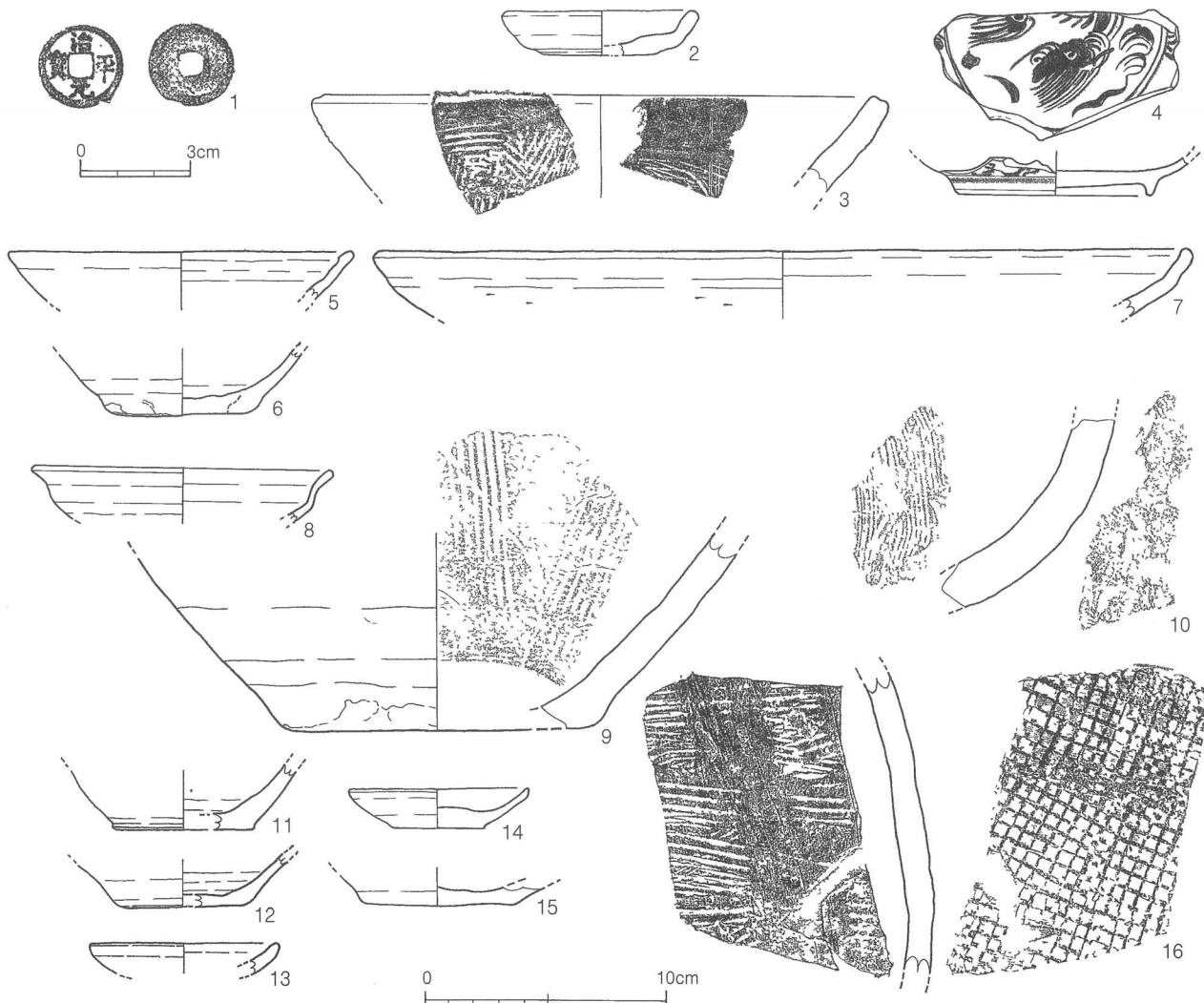
土坑SK1110と溝SD1111（第8・19・22図15～27・23図、図版10）　土坑SK1110は、4D区の西北隅にある径1.8mの大型円形土坑である。底面は平坦で壁の立ち上がりはやや緩やかである。土坑SK1110の東西両側には溝SD1111が伸びている。土坑SK1110の東側に接続する溝SD1111は、東へ伸びたのち、北へ折れ曲がる。溝SD1111の底面はおおむね平坦で、壁は急傾斜で立ち上がり、断面形態は逆台形というより箱形に近い。土坑SK1110と溝SD1111からは、比較的多量の遺物が出土した。

土坑SK1110の出土遺物は、土師器・青磁・鉄滓・木製品である（中袋1袋分）。

第22図15～27。15～19は土師器杯である。15はほぼ完形品である。体部がやや内湾する。焼成は良好である。16・17は杯の底部である。底部周辺を強くナデて高台状になっている。18・19は杯の底部である。20～23は小皿である。4点とも細部が異なるが、口縁端部が短く内湾することが共通点である。24は龍泉窯系青磁の碗の口縁部である。内外面とも無紋で、外面には若干の凹凸が観察される。25は小サイズの椀形鍛冶滓である。26は木の薄板、27は板状の棒で



第25図 井戸 S E 1146出土遺物実測図 (1 : 3 石のみ1 : 4)



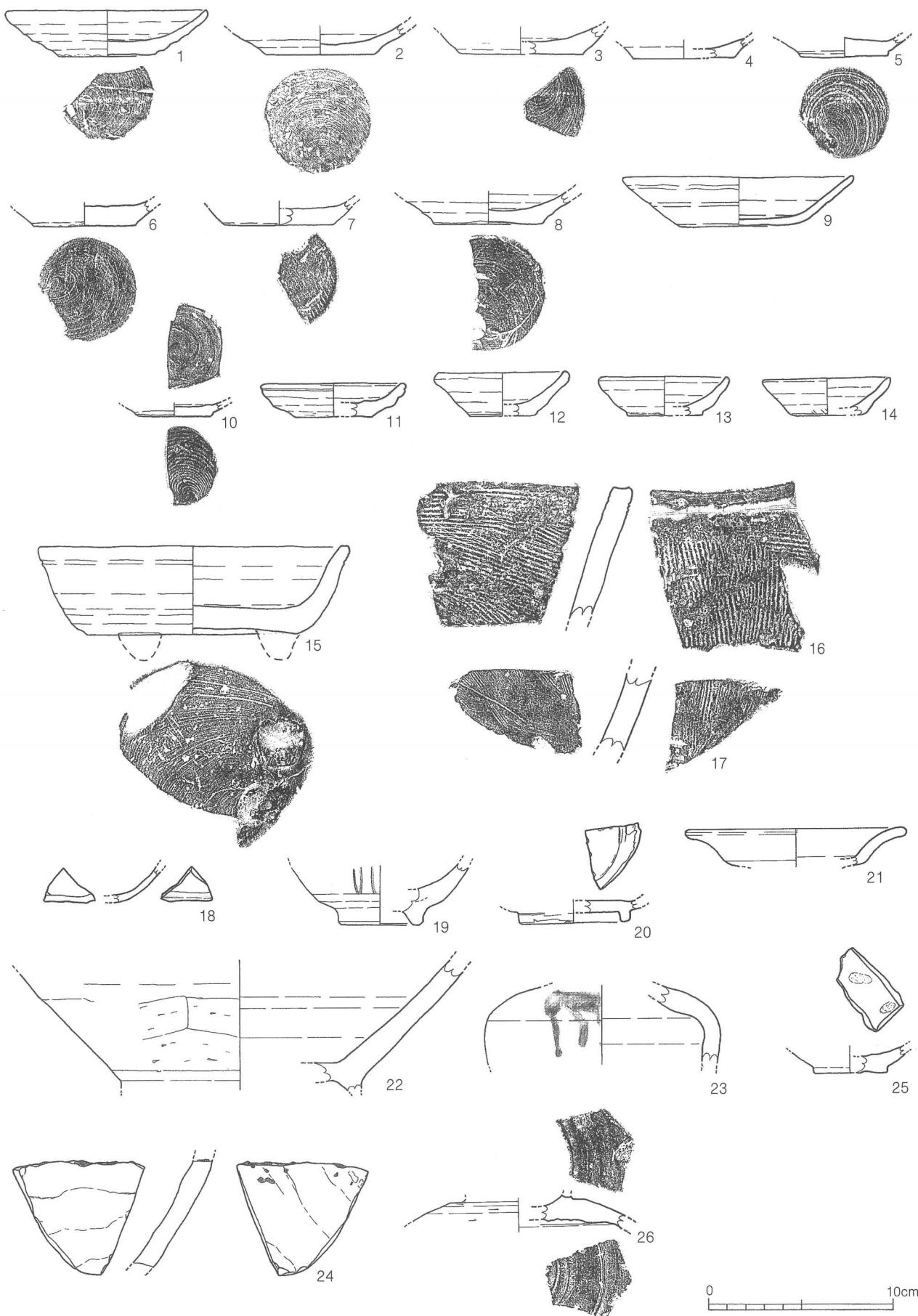
第26図 中世の溝出土遺物実測図 (1 : 3 錢貨のみ 1 : 2)

先端は燃えてコゲている。

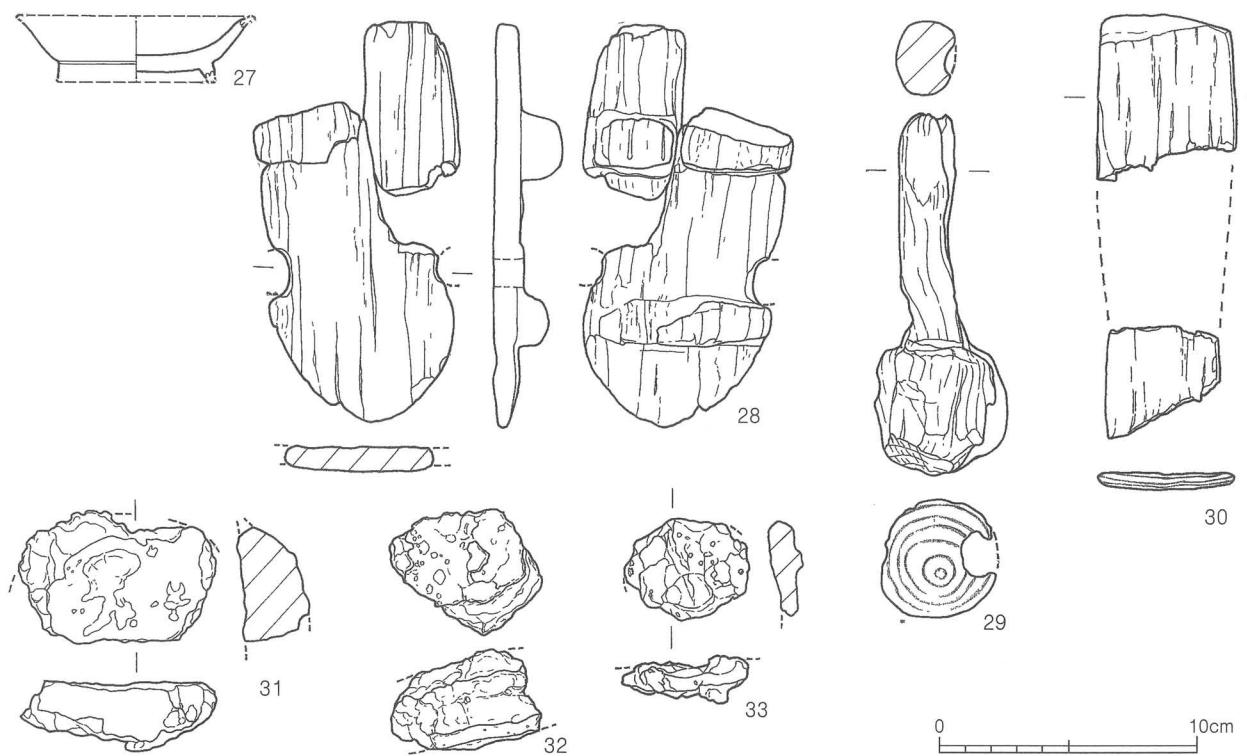
溝 S D1111からは、木製の舟形の形代が 2 点出土した。溝が L 字状に屈折する位置に三角形の台石（第23図12）が置かれており、屈折部の西3.4mのところから舟形の形代A（第23図10）が横向きで、屈折部の北4.3mのところからは舟形の形代B（第23図11）が反転した状態で出土した。舟形Aは溝底に接し、舟形Bは溝底から10cm浮いた状態で出土した。また、舟形Bの真上10cm、20×15cmの範囲からは炭化物が検出された。

溝 S D1111出土遺物はこのほかに、須恵器片（2点）・土師器・中世須恵器・鉄滓などである（大袋1袋分）。ほかに台石・礫・木製品・植物の種などがある。

第23図 1～5 は土師器杯である。1 は完形品で、底部と体部の境が明瞭で体部はやや外反して立ち上がる。内面は同心円ナデにより見込み中央が盛り上がっている。6～8 は小皿で、7・8 は完形品である。厚手の底部に口縁端部が短く内湾している。9 は中世須恵器の甕胴部で、外面に亀山系のタタキ目が施されている。10・11 が木製の舟形の形代で、共に樹種はスギ属スギである。10（形代A）は長さが短く幅広で、11（形代B）は長さが長く幅は細い。2 点とも



第27図 溝S D1120出土遺物実測図1 (1 : 3)



第28図 溝S D 1120出土遺物実測図2 (1:3)

若干様相が違う。また10には船首に穿孔がある。12は流紋岩製の三角形を呈する台石である。中央部分が窪んでいる。

以上、土坑S E 1110および溝S D 1111出土遺物の時期は13~14世紀と考えられる。

井戸S E 1025 (第5・17~24図1・6・7) 4 A区南部にある大型の井戸である。平面形は長径2.7mの小判形をし、壁はほぼ直立する。底面の北西部が一段下がっているので、そこを水溜部とした井戸ではなかったかと考えられる。埋土は粘土と砂が互層になって堆積していたので、井戸廃棄後に自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物は少ない(小袋1袋分)。3点を図示した。第24図1は須恵器の杯身で最下層からの出土である。6・7は木製品で、6はもえさし、7は曲物の側板の破片、ともに上層出土である。下層からは須恵器が出土したが、上層からは土師器の擂鉢片なども出土しており、中世の井戸であろう。

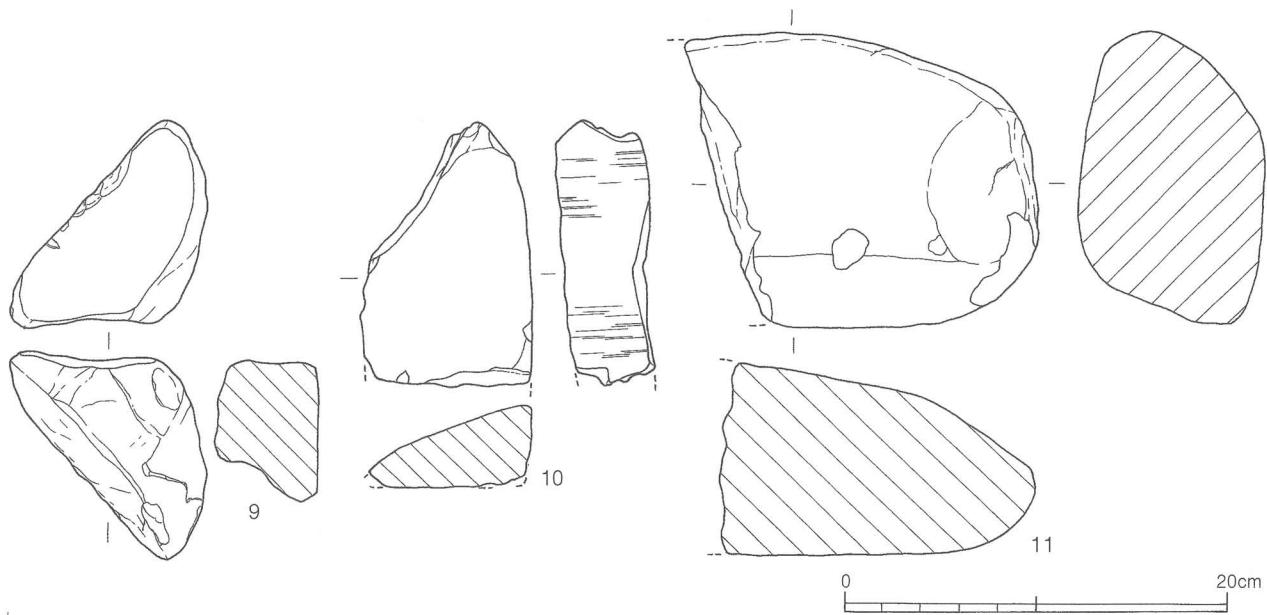
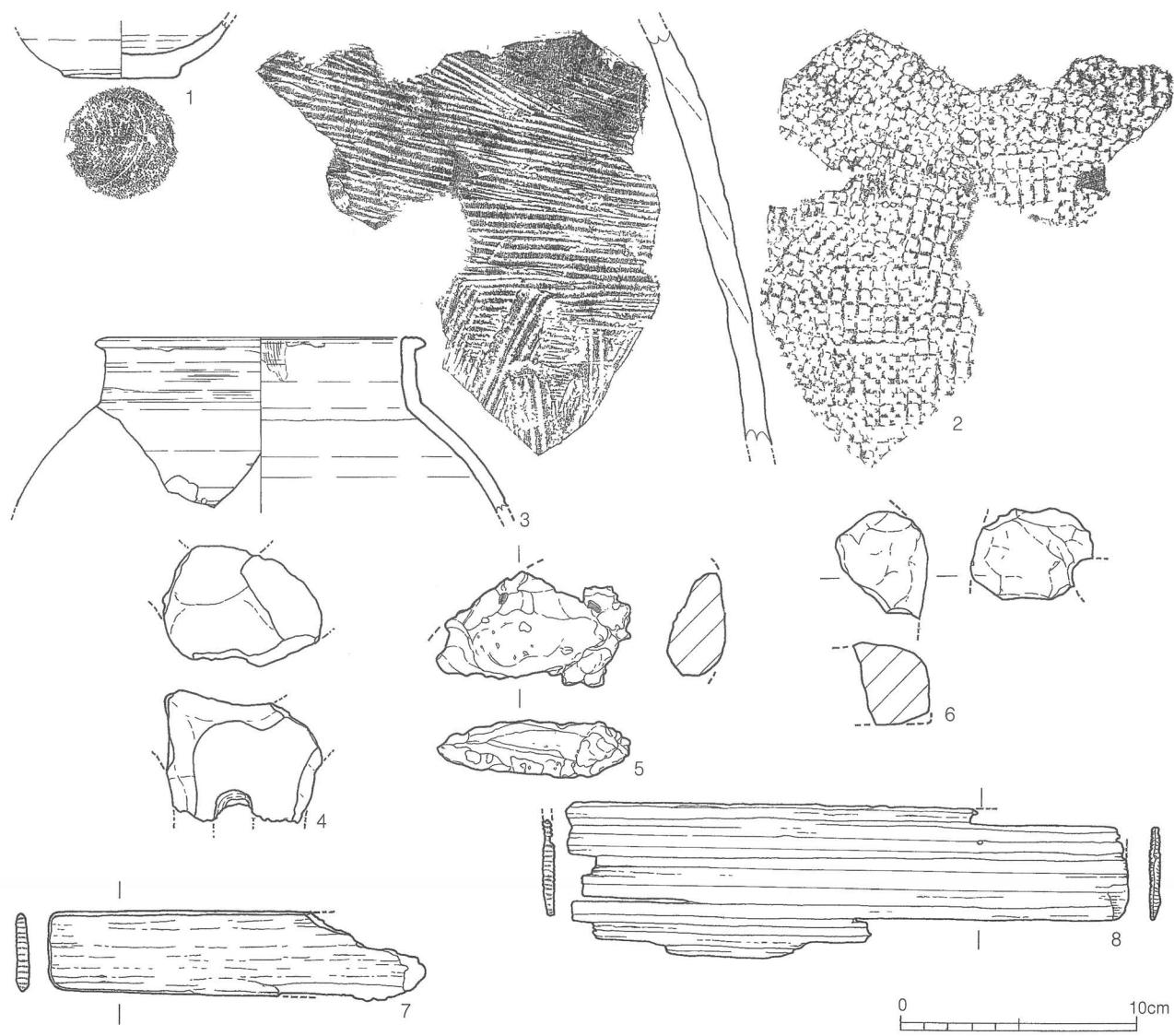
井戸S E 1026 (第5・17・24図2・3、図版8-5) 4 A区南部、井戸S E 1025の東約7mにある井戸である。西側の約半分を調査した。検出面では歪な方形をしていたが、中心部は三角形に近い平面の掘形であった。堆積土の中位には藁状のものが少量検出された。底には水溜状の凹みがあったので、井戸と考えた。

出土遺物は少量の須恵器と土師器である(小袋1袋分)。第24図3は土師器杯の底部、2は小皿である。胎土と形状からみて、14~15世紀のものと考えられる。

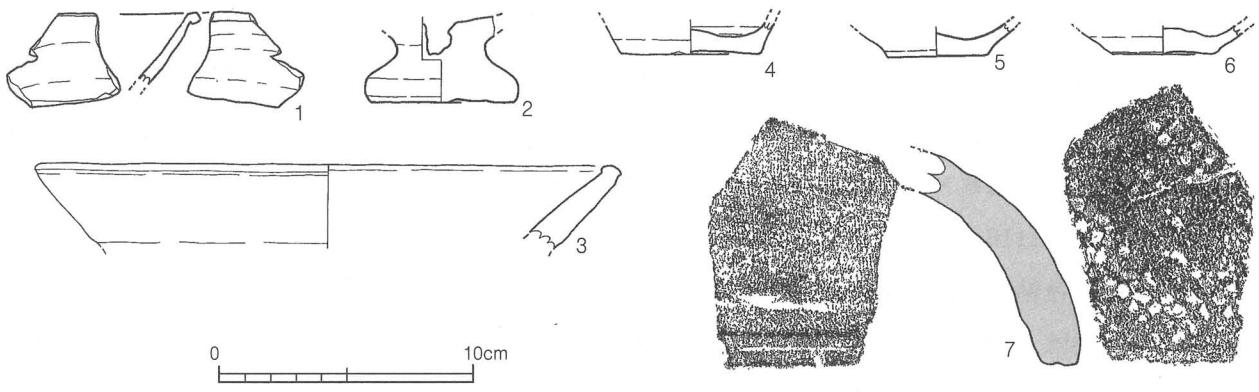
井戸S E 1035 (第6・18図) 4 B区北部にある平面小判形(長径2m)の井戸。南北溝S D



第29図 溝S D1120出土遺物実測図3 (1 : 4)



第30図 溝S D1144出土遺物実測図 (1 : 3 石1 : 4)



第31図 中世の遺構出土遺物実測図2（1：3）

1000の真上につくられている。出土遺物はない。

井戸S E1083（第7・18・24図4・8～11、図版8-7・8）4C区東南部にある円形平面の井戸である。斜行溝S D1062より新しく、調査区内で最も新しい遺構のひとつである。掘形は上部がすぼまった袋状である。底面から約25cmより上層には大小の礫（径40cmまで）が50数個詰め込まれていた。井戸を廃棄する際に投げ込まれたものと思われる。礫には人工的に使用された台石・磨石・砥石と考えられるものが16点あった。また、礫の堆積の下層には、長さ68cmで2.2cm角の木杭が斜めに差し込まれていた。

石以外の出土遺物は、須恵器小片（1点）・土師器小片（小袋1袋分）と、木製品である。第24図4は土師器の杯底部である。8～11は木製品で、10は大振りの匙部分である。11は角が面取りしてあるので折敷の底板と考えられる。8は木栓。頭部は角を面取りされた多面体で、横から穿孔してある。孔は貫通していない。樹種はスギ属スギ。9は角を丸く仕上げたもので細い部分には穿孔がある。部材の一部であろう。樹種はスギ属スギ。

井戸S E1100（第7・18・22図11・12・14、図版8-6）4C区南辺にある径2.1m平面形態円形の井戸である。溝S D1062や溝S D1099よりは古いが、溝S D1098より新しい。断面形態はバケツ形である。

出土遺物は、須恵器片（1点）・土師器片・中世須恵器片（1点）である（小袋1袋分）。第22図11は土師器の杯底部である。底径が広くて器壁が薄いものである。12は中世須恵器の甕胴部片である。外面には亀山系の格子タタキ目が施されている。14は五角形状の砥石で、ほぼ全面を仕上げ砥ぎと中砥ぎとして使用している。このほか、埋土の中位から礫が10数点出土した。

出土遺物からみて15～16世紀の遺構であろう。

井戸S E1116（第8・18・24図5・18、図版9-1）4D区北辺中央にある小型円形の素掘りの井戸である。溝S D1000と重複し、その埋土に掘られている。断面形態はほぼ筒形で、下から黒灰褐色粘質土（砂粒を多く含む）、黒灰褐色粘土（軟弱）、黒灰褐色粘質土（砂粒を多く含む）が、整然と堆積している。黒灰褐色粘土（2層）中から曲物の一部分（第24図18）と腐食した曲物の底板が出土した。出土状況から曲物の径は約66cmに復元できる。井戸の掘形直径が

70cmなので、この曲物はもと井戸枠だったのであろう。

出土遺物はほかに土師器片 6 点と中世須恵器片 1 点がある。第24図 5 は土師器の杯底部である。

井戸 S E1117 (第 8 ・ 18 ・ 24 図 12 、図版 9-2) 井戸 S E1116 の南 3 m にある円形の井戸である。井戸 S E1116 と同じく、溝 S D1000 の埋土中に掘削されている。断面形態はほぼ筒形で、下から灰褐色粘質土、黒褐色粘質土（砂粒・植物質を多く含む）が整然と堆積している。

出土遺物は、土師器片 2 点と角材である。第24図 12 は土師器の杯底部、底部は厚いが体部は薄い。

S E1116 と S E1117 はともに形状や規模がよく似ており、一連の遺構と考えられる。

井戸 S E1119 (第 8 ・ 18 ・ 24 図 14 、図版 9-3) 4 D 区東北隅にある素掘りの井戸である。平面形態は小判形と思われる。底面は緩やかに凹む。下層に灰褐色粘質土（砂粒子をやや多く含む）、上層に灰褐色粘土が堆積している。

出土遺物は、土師器片 1 点と角材 1 点のみである。第24図 14 は土師器の杯で、底部から体部下位の部分で、境目が丸みを帯びたやや不明瞭なものである。底面縁辺部の調整はナデである。

井戸 S E1122 (第 8 ・ 18 ・ 24 図 13 、図版 9-4) 4 D 区東北部、井戸 S E1119 の南 6 m にある素掘りの井戸である。掘形は長楕円形で、その底のほぼ中央に直径 30 cm 、深さ約 20 cm の水溜部が掘られている。埋土は下から、オリーブ灰色粘土、オリーブ灰色粘質土（砂粒を多く含む）、暗灰色粗砂（粘土を若干含む）が整然と堆積していた。南東側の下層上面から中層にかけて 20 ~ 30 cm 大の礫 3 点と長さ 25 cm 、幅 5 cm 、厚さ 3 cm の角材が 1 点出土している。

出土遺物は、土師器片・鉄滓（1 点）である（小袋 1 袋分）。第24図 13 は土師器の杯の底部である。底部と体部の境が明瞭なものである。調査区で最も新しい遺構の一つで、15~16世紀と考えられる。

井戸 S E1141 (第 8 ・ 19 ・ 24 図 15 ~ 17 、図版 9-5) 4 D 区の南部にある素掘りの井戸である。斜行溝 S D1143 ・ 1144 より新しい。掘形は楕円形をし、壁は急傾斜である。下半部に暗褐灰色粘砂が堆積し、その上に 5 ~ 8 cm 厚で藁状の植物質が認められた。

出土遺物は、土師器片（9 点）・鉄滓である。第24図 15 は土師器杯口縁部、16 は土師器小皿である。17 は楕形鍛冶滓の小サイズのものである。土師器小皿は 15 世紀のものと考えられる。

井戸 S E1146 (第 8 ・ 18 ・ 25 図、図版 9-6) 4 D 区の南辺中央にある井戸である。遺物包含層である 2 層の上面から検出した。掘形は平面形態がほぼ円形の断面形態が筒形である。底面の約 20 cm 上あたりから上層には 10 ~ 40 cm 大の礫が 60 点近く廃棄されていた。

出土遺物は、須恵器片 1 点・土師器片 1 点・備前焼片 1 点・漆椀 1 点・石製品である。第25図 1 は土師器の甕口縁部である。2 は備前焼の擂鉢の底部である。3 は漆椀。外面は黒漆を塗った後に赤漆で草花文を描き、内面は赤漆を塗っている。樹種は、クスノキ属クスノキ。4 ~ 10 は石製品である。4 は石英製の磨石、5 は凝灰岩製の磨石、6 は凝灰岩製の砥石で、上面のみが使用されている。7 は流紋岩製の磨石でほぼ全面に削痕が観察される。8 は凝灰岩製の台石

で、縁辺部に欠損後の被熱が観察される。9は流紋岩製の台石である。10は全体を敲打により成形した石製装飾品である。長軸に沿って1条の沈線が施されている。

S E 1146は15～16世紀のものと考えられる。

溝S D 1008（第5図） 4 A区北側のS X 1004の南にある湾曲した溝状遺構である。溝の内側には他の遺構は全くなかった。遺物は出土しなかった。時期は不明である。

東西溝S D 1011（第5図、図版9-7） 4 A区中央北寄りを横断する東西溝である。2段に掘り込まれた溝で、下段はほぼまっすぐである。調査区東壁面では、溝の掘り直しによって2段となった状況が確認された。

溝S D 1024（第5・26図1） 4 A区の西辺中央からはほぼ南に向かってのび、調査区の西南で南東方向へと湾曲する素掘りの溝である。この東には、S D 1012・1013・1028など数条の溝が曲線を描いて延びている。いずれの溝とも深さが10cmに満たない。

溝S D 1024からは「治平元寶」（北宋錢、初鑄1064年）が1点（第26図1）出土した他、須恵器片2点、土師器片1点が出土した。

斜行溝S D 1062（第7図） 4 C区で確認したが、北側の4 B区では検出できなかった。南側は東西溝S D 1098に合流して終わる。

出土遺物は、須恵器・土師器・白磁（1点）である（中袋1袋分）。土師器の時期と遺構の重複関係から15～16世紀の遺構であろう。

東西溝S D 1090（第7・19・26図5、図版11-1） 4 C区西南部にある東西溝である。東側はS X 1077と重なり、西側は調査区外へと延びていく。溝の断面形態は箱形に近い。底面はおおむね平坦。

出土遺物は、縄文土器片？（1点）・古式土師器片（1点）・須恵器片（1点）・土師器片である（中袋1袋分）。第26図5は土師器の杯の口縁部。内面には強いヨコナデによる凹みが観察される。

東西溝S D 1098（第7・26図6～10） 4 C区の南壁沿いにある東西溝。東側は井戸S E 1100に壊されている。検出幅は20～50cm。埋土は大きく3層あり、下から褐灰色粘質土（1層、軟弱）、オリーブ灰色粘土（2層、軟質）、褐灰色粘砂（3層、砂ブロックを多く含む）である。

出土遺物は、須恵器片（1点）・土師器片・備前焼（1点）・瓦質土器（1点）・白磁片（1点）・鉄塊（1点）・古錢（1点）・種子（梅か、20数個）である（大袋1袋分）。第26図6は土師器の杯下半部である。底部から器壁へは不明瞭に立ち上がる。10は土師質の擂鉢の胴部である。8は白磁の皿で、外面下半部は露胎となっている。9は備前焼の擂鉢で、内面は使い込みによる磨滅が著しい。7は瓦質土器の鍋口縁部である。

出土遺物から、S D 1098は16世紀の遺構と考えられる。

南北溝S D 1106・S D 1107・S D 1108（第8・26図11～13・16） 4 D区の西部を走る3条の南北溝である。基本土層の6層が埋土である。調査区内で最も新しい遺構のひとつである。

出土遺物は、S D 1106から中世須恵器片（1点）と土師器片（小袋1袋分）、S D 1107から

土師器片・白磁片（1点）・鉄滓など（中袋1袋分）、SD1108から土師器片5点・砥石片1点である。

第26図16はSD1106出土の中世須恵器甕の胴部片である。外面に亀山系の格子タタキ目がある。11～13はSD1107出土の土師器で、11・12は杯の底部、13は小皿である。

SD1106とSD1108は14世紀以降、SD1107は15世紀の遺構であろう。

溝SD1112・SD1113・SD1114（第8・26図14・15）4D区の溝SD1111周辺で確認した3条の溝である。SD1113は、SD1111やSD1112より新しい。

出土遺物は、SD1112が須恵器片（2点）・土師器片・瓦質土器片（1点）・鉄滓など（中袋1袋分）、SD1113からは須恵器片（1点）・土師器2点、SD1114からは土師器片7点である。SD1113から出土した土師器杯（第26図15）は底部のみ。小皿は、厚手の底部に薄い体部をもち口縁端部が短く内湾している（14）。

出土遺物からみて、SD1112は13～14世紀、SD1113は14～15世紀、SD1114は13～15世紀と捉えておきたい。

溝SD1120（第8・27～29図、図版5、11-4・5）4D区全体をL字状に延びる溝である。4D区の中で最も新しい遺構のひとつである。底面は平坦であり、断面形は逆台形である。底面標高は、北端が7.95m、屈折部西寄りが8.2m、西端が8.45mであり、地形に沿って南西から北東へ傾斜する。埋土は基本的に暗灰黄色粘土で、下半は粘性が強く軟弱である。砂ブロックを含む場所もある。D6グリッド内では15～30cm大の礫が出土して、一見、踏み石のようである。

出土遺物は、須恵器片・土師器・陶磁器・鍛冶関連遺物など（大袋2袋分）のほか、木製品と石製品である（第27～29図）。

第27図1～14は土師器。1～9は杯で、外開きに体部が立ち上がる。1～8は底部と体部の境がある程度明瞭だが、9は両者の境が丸く不明瞭で器壁も薄い。9のみ京都系手づくね土器の模倣品のようである。10～14は小皿。11は厚手で口縁部外面に1条の沈線状の凹みがある。12～14は11と比べて器高が高い。

15は土師質土器の脚付碗。3脚と考えられる。16・17は土師質土器の擂鉢である。

18は白磁の皿片。19～21は龍泉窯系青磁。19は碗の下部。全面に施釉され、外面には線描きの蓮弁文がある。20・21は皿。20は体下部で屈曲し外反するもの、21は見込み部分に圈線文がある。

22・23は瓷器系陶器。23は壺の肩部、22は高台付こね鉢で内面は使用のため磨滅している。24は陶器の甕胴部片。破面には漆接ぎの痕跡がある。25は粉青沙器（朝鮮王朝陶器）の皿底部である。見込みに2箇所砂目積み痕が観察される。26は須恵器の杯蓋で混入品。

第28図27～30は木製品。27は小型の高台付杯。黒漆の上に赤漆を重ね塗りしたもので、高台内のものが黒漆のままである。樹種はケヤキ属ケヤキ。28は一木作りの連歯下駄である。29は横槌状の木製品である。樹種はクワ属。30は板材。

31～33は椀形鍛治溝で、それぞれ中・小・極小サイズである。

第29図34～37は石製品。34は凝灰岩製の砥石、35～37は流紋岩製の台石である。

出土遺物からみて溝S D1120の年代は15～16世紀であろう。

斜行溝S D1144（第8・19・30図、図版11-3）4D区の西南隅にある南西一北東方向（N-45°-E）の溝である。溝S D1145より新しいが、溝S D1107、井戸S E1141と柵列S A1136、そして溝S D1120よりは古い。S D1120によって西側と北東側を壊されており、北東方向へはそれ以上伸びていない。底面は平坦で、壁はやや急傾斜に立ち上がる。S D1144の中央付近は幅が広く、そこの底面には長楕円形の豎穴状の落ち込みがある。

出土遺物は、土師器片・中世須恵器片（1点）・中国産陶器（1点）・土製支脚片（1点）・鍛冶関連遺物・石器・薄板である（大袋1袋分）。

第30図1は土師器の杯底部。高台状をした底部から内湾するように体部が立ち上がる。2は亀山系の中世須恵器の甕胴部である。

3は中国産褐釉系陶器の四耳壺である。頸部に自然釉がかかる。4は土製支脚の頭部片で突起は欠損している。横孔は残存している。5は椀形鍛治溝の小サイズのもの、6はフイゴの羽口の先端上半部である。7・8は板材である。9～11は石製品で、9は凝灰岩製の磨石。縁辺部に被熱痕（煤付着）がある。10は流紋岩製の磨石で下部欠損後に表面全体に煤が付着している。11は花崗岩製の台石様の礫である。

1～3の土器からみて、S D1144は13～14世紀と考えられる。

S X1038・S X1039・S X1040・S X1041・S X1042（第6・20図、図版11-6）4B区中央部のやや北、東西溝S D1047北側の約8m四方の範囲には、計5基の土坑が密集している。それぞれの平面形は、S X1038・1040～1042が隅丸長方形、S X1039が楕円形である。S X1038の埋土からは骨片のような白い粒子や灰が土壤化したような痕跡を確認したので、これら5基の遺構は墓の可能性がある。

遺物は、S X1040から土師器の小片が1点出土したのみ。埋土の状況などから中世の遺構であろう。

S X1056（第6・7図、図版11-7）4B区南部のA・B-7～11グリッド内には、幅20～60cmの小溝が何条か東西方向に併走している。これらはまとめて畝状の遺構ではないかと考えた。溝S D1054でも記述したように、4B区南半分は耕作関連の遺構が集中している可能性がある。出土遺物は、土師器の皿と思われる小片が1点あつただけだが、遺構の検出状況などから中世の遺構ではないかと考えられる。

S X1077（第7・31図1～3）4C区の南半部、南北溝S D1000の西側には1～2m幅の落ち込みがある。底面は凹凸が著しい。4C区南辺の東西溝S D1098よりは古いが、重複している他の遺構すべてより新しい。同じ4C区にあるS X1063・S X1064・S X1065も同様な遺構と思われるが、いずれも性格は不明である

S X1077出土遺物は、須恵器片（2点）・土師器片・鉄滓（2点）である（大袋半分位）。

第31図1は土師器杯の口縁部である。端部を玉縁状に作っているのは白磁の影響と思われる。2は土師器の柱状高台部である。内面中央に焼成前の穿孔がある。3は土師質の鍋の口縁部である。

以上、S X1063～1065・1077は、16世紀以前の遺構と考えられる。

S X1109（第8・31図4～7）4D区の西北隅にある性格不明の落ち込み遺構である。溝S D1106～SD1108・SX1131・SB1132よりは古いが、その他の重複する遺構より新しい。

出土遺物は、須恵器片・土師器片・丸瓦（1点）である（中袋1袋分）。第31図4は土師器杯の底部。やや厚手の底部と体部の境は明瞭で、体部は急角度にひらく。5・6は土師器小皿である。7は土師質の丸瓦片で、外面に太目の格子タタキ目が、内面には布目痕がみられる。神門寺境内廃寺の創建期の丸瓦である。

柱穴SP1075・SP1085・SP1086・SP1087・SP1104（第7・20・21図1・2）4C区の西辺、中央から南部にかけて柱根を残すピット5基を確認した。このうちSP1075・1085・1087の3基は、ほぼ一直線上に並ぶ。

SP1104から、土師器の小片4点と瓦質土器片3点が出土した。第21図1と2は同一固体の可能性のある瓦質土器の鍋で、1は受け口状の口縁部である。両者とも外面には煤が付着している。

以上より、SP1104の時期は14世紀と考えられる。ほかのピットは、時期を確定できない。

SP1147・SP1148（第8・16図、21図13～16）4D区のSX1131～1134周辺にも、柱根を残すピットが2基ある。SP1147は平面が長楕円形で、2箇所に柱痕がある。SP1148は長楕円形である。

SP1147出土遺物は、土師器片数点と青磁片が1点。第21図14は土師器の杯底部。底部から体部が開くように立ち上がる。13は龍泉窯系の青磁碗の底部である。器壁が厚く、低い高台で、釉は畳付け部と高台内にも一部かかる。

SP1148出土遺物は、土師器片（小袋半分）と梅と思われる植物の種である。第21図15は土師器杯底部。器壁は薄い。16は土師器小皿。これも器壁は薄く、高く立ち上がる。内面上半部の一部に煤が付着している。

以上より、SP1147は15世紀、SP1148は15～16世紀の遺物と考えられる。

（6）近世の遺構と遺物

土坑SK1004（第5図）4A区の北部中央にある、長径3.4mの隅丸長方形の土坑である。北側の壁はなだらかな傾斜だが、南側は直立する。堆積土を3層に分けたが、下層は黄褐色砂と褐灰色粘土が互層をなす水成堆積であった。水溜のようなものではなかったと考えられる。

出土遺物は砥石かと思われる礫が1点のみであった。2層上面から掘り込まれていたことと検出面と埋土から近世の遺構であろう。

東西溝SD1047（第6・26図2～4）4B区の中央やや北を横断する東西溝である。耕作土の直下から掘り込まれ、幅1.8～2.4mの大きな溝である。断面形態は逆台形を呈している。埋

土は暗褐灰色粘土の単純層で植物質を含み、軟質である。S D 1047の近辺に位置する S D 1045・S K 1046も同じ埋土なので、同時期と考えられる。調査区では最も新しい遺構のひとつである。

出土遺物は、土師器・磁器・陶器・瓦などである（中袋1袋分）。第26図2は土師器の小皿である。底部から体部にかけてナデによるくびれがある。3は土師質の擂鉢の口縁部、4は青花（景德鎮）の皿で、外面に圈線と草花文を、見込み部に圈線と龍の絵を描いている。

近世以降の遺構であろう。

3 包含層の遺物

築山遺跡4区の遺物包含層から出土した遺物は、弥生土器・須恵器・中世須恵器・土師器・陶磁器・瓦質土器・瓦・土製品・鉄製品・石製品・木製品があり、それらの出土量はコンテナ16箱分である。そのうち図化に耐えうる286点を図示した。

出土土器の種類ごとにその出土地区を検討すると、弥生土器は4A区に、須恵器は4B区に、中世須恵器は4C・4D区のみに、土師器は4D区に、白磁は4B区に、青磁（青白磁含む）は4D区に、青花は4B・4D区に、中世陶器は4D区に、瓦質土器は4C・4D区のみに、肥前系陶磁器は4D区に集中しており、これを検討すると、古い土器は北側の地区から、新しい土器は南側の地区から集中して出土する傾向にあることがわかる。

以下、遺物の個別の概要を述べるが、詳細は観察表に委ねる。

弥生土器（第32図1～14）

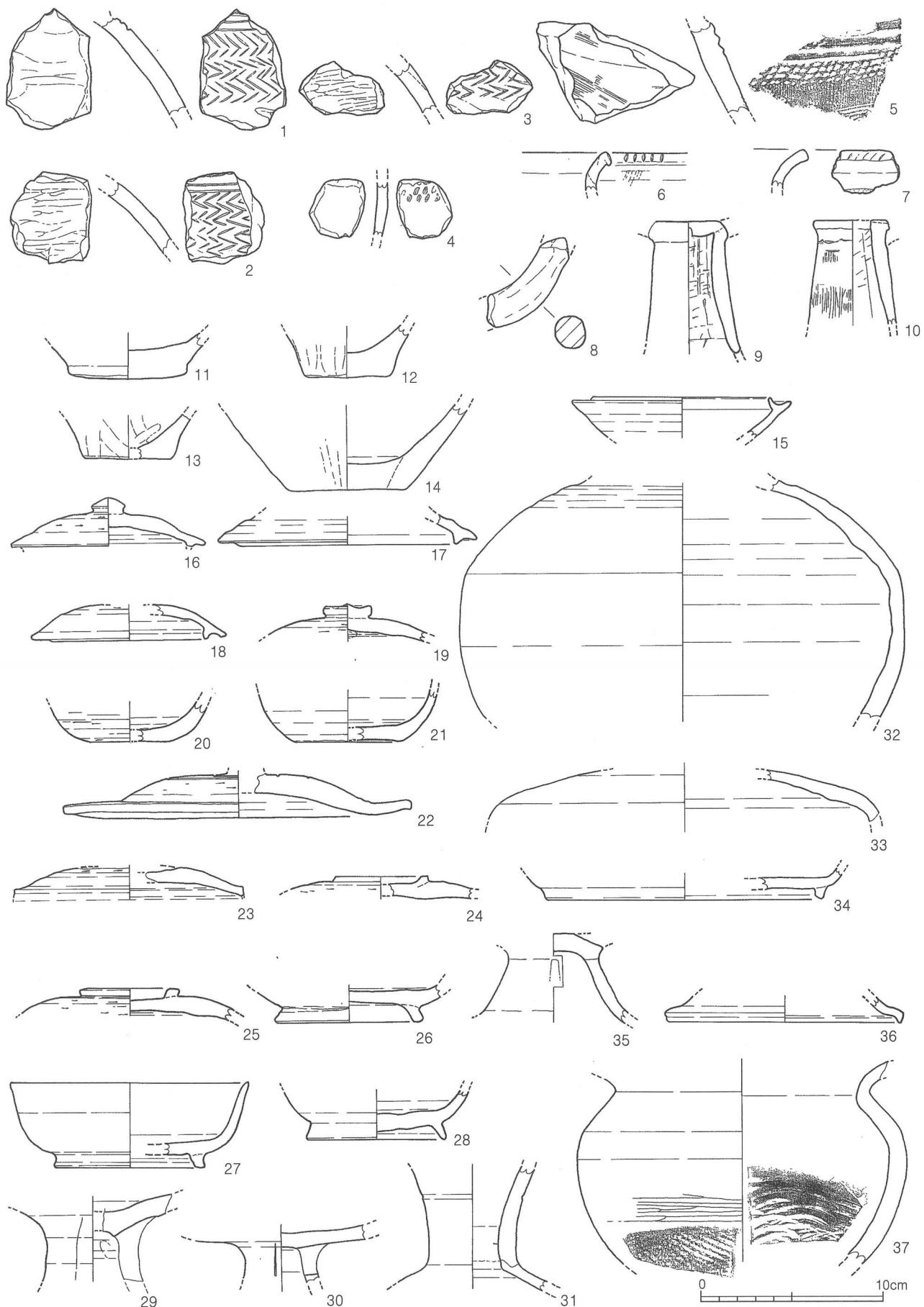
1～3はヘラ書き沈線文と羽状文を飾る壺胴部の破片で、4は甕の胴部片。先端の丸い棒状工具による刺突文がある。5は壺の肩部付近の破片。2条の凹線文と連続の刺突文がみえる。6・7は甕の口縁部片である。6の口唇部はわずかにたれ下がり、端面には刻目がある。7の口唇部にも細い刻目がある。9・10は高杯の脚柱部で、特に9の杯部の破面と脚端部の破片が人工的に丸く磨滅しており、2次使用の可能性も考えられる。11～14は壺または甕の底部で、いずれも厚手の平底である。

須恵器（第32図15～37・第33図38）

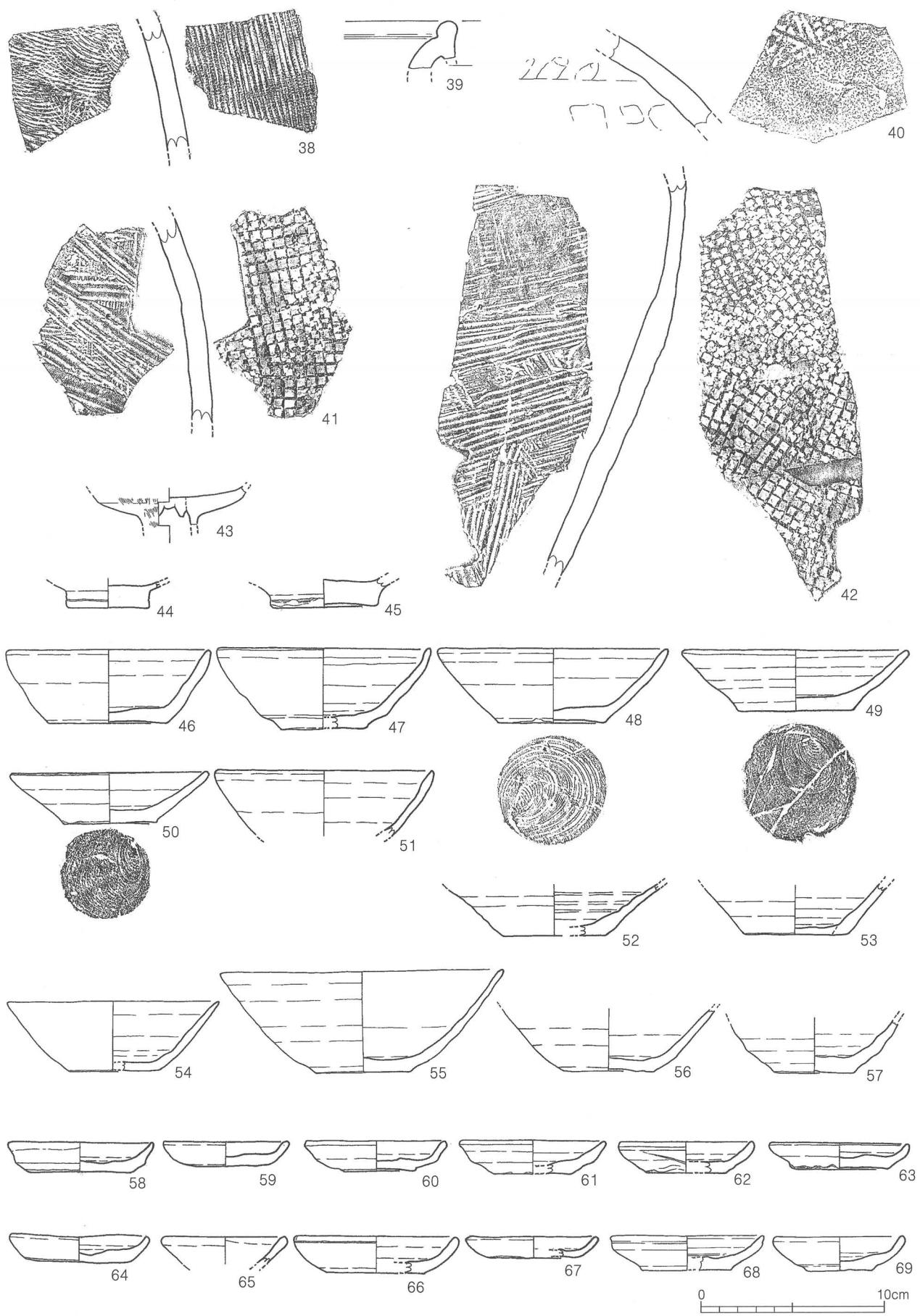
15・20・35・38は古墳時代の遺物である。15は蓋杯の身で短いたちあがりの付くもの、20は壺の底部、35は2方向に長方形のスカシがある。38は甕の胴部である。

上記以外は7～9世紀の遺物である。16～19・22～25・36は蓋杯の蓋である。16～19は宝珠状・擬宝珠状のつまみとかえりが付く。最大径が10cm位の小振りのものである。22～25・36は口唇部が垂下し天井が低いものである。21・26～28・34はそれぞれ杯・高台付杯・高台付皿で、貼り付け高台である。26は見込み部分が研磨されており転用硯と思われる。29・30は高杯の破片。切れ込み状のスカシが2～3方向にあると考えられる。31～33・37は壺。31は長頸壺の頸部である。

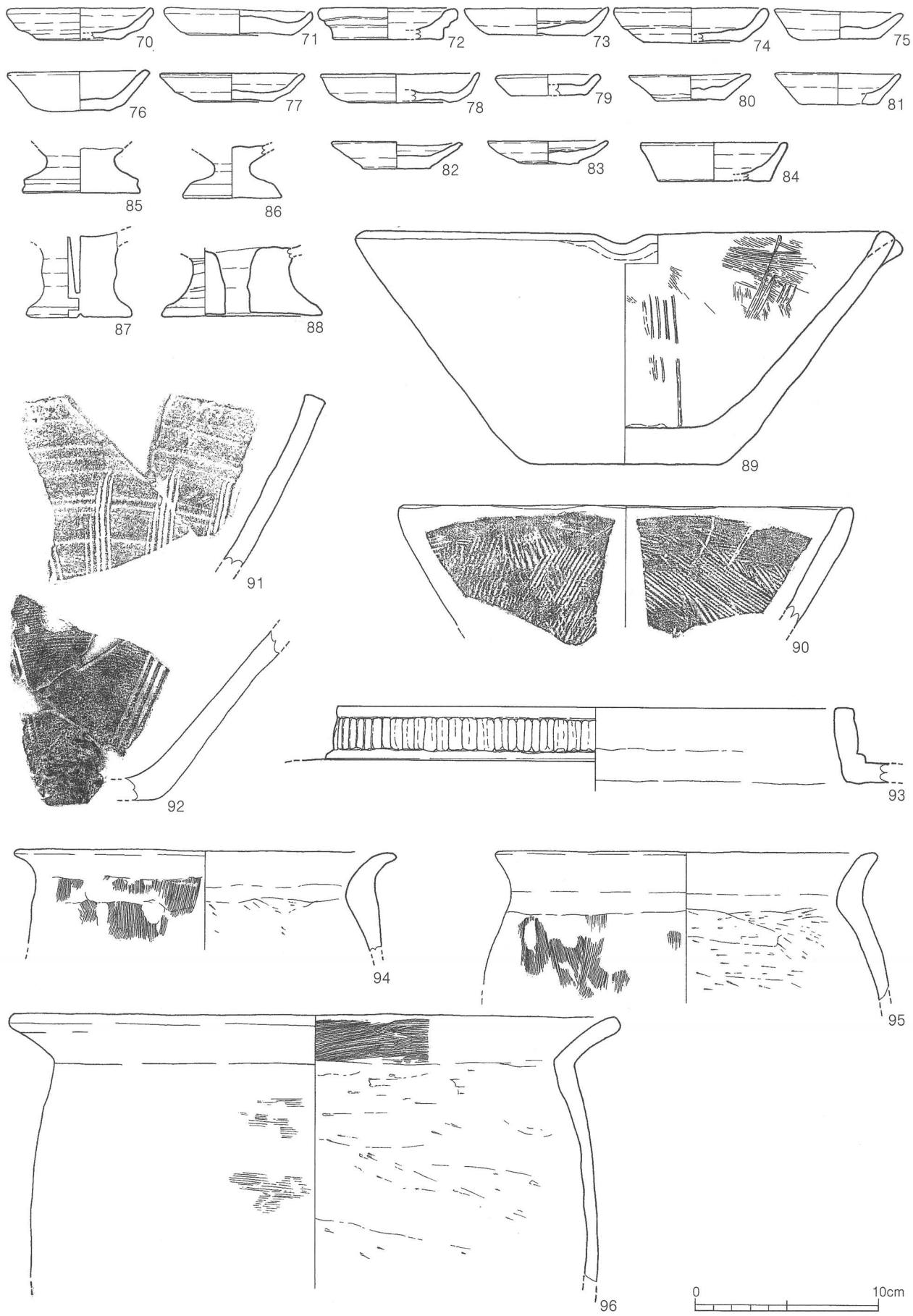
中世須恵器（第33図39～42）



第32図 遺構外出土遺物実測図1 (1 : 3)



第33図 遺構外出土遺物実測図2 (1 : 3)



第34図 遺構外出土遺物実測図3 (1 : 3)

39は口縁部である。40はスタンプ文または叩き目文ある甕の肩部片である。41・42は甕の胴部で、共に外面には亀山系の格子タタキ目がある。

土師器（第33図43～第34図96）

43は古墳時代の高杯で内外面とも丹塗りである。

44～57は杯である。44・45は底部が分厚く高台状である。55はやや薄手の椀形である。46～50・57は器壁がやや厚い。49・50は体部が大きくひらいた浅めの杯である。また52・54は内面の強いヨコナデによる凹凸が観察される。

58～84は小皿である。

85～88は柱状高台付杯または皿の高台部である。4点とも器部は欠損しており器形は不明である。87は貫通しない穿孔が、88は貫通した穿孔がある。

94～96は甕の上半部で、94・95の外面には煤の付着が観察される。

89～93は土師器と比較して堅緻な焼成なので土師質土器として扱う。90はこね鉢、89・91・92は擂鉢である。93はいわゆる奈良火鉢（瓦質土器）を模倣して作られた風炉の口縁部である。直立した口縁部に浮き彫り状の簾状文が施されている。

白磁（第35図97～116）

97～99は碗である。

97は蛇ノ目高台をもち、初期段階の輸入白磁。98は釉に貫入がある。99は底部と体部の境が屈折し高台も角ばった作りである。

100～112は皿である。100・108は口禿、101は見込みに釉剥ぎが、106は見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施されている。104の見込みには釉搔きによる文様がある。109の体部外面には強いナデでできた段がある。

113～115は杯。114は角杯の口縁部である。

116は四耳壺の肩部で、1箇所耳の痕跡がある。

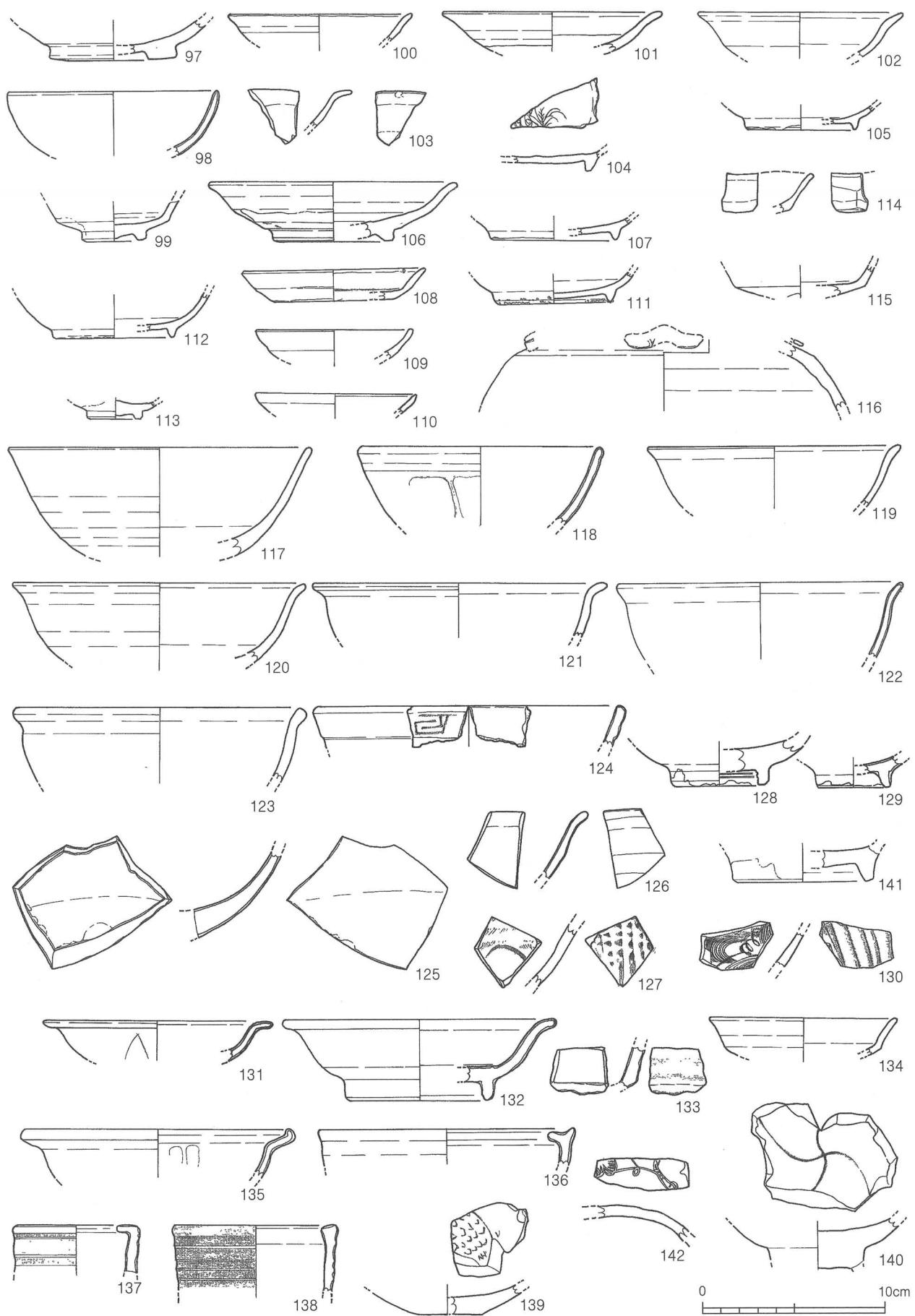
青磁（青白磁）（第35図117～142）

117～126・128・129・131・132・137～140は龍泉窯系青磁、127・130・134は同安窯系青磁である。

117～130・140は碗。118の外面には幅広の蓮弁文？が施してある。120～123・126は口縁部が外反する。124は外面に雷文がある。124・125は釉薬がやや厚く、貫入がある。127は外面に粗いクシによる連続刺突文、内面にはヘラやクシによる文様が施されている。130は外面に片切彫り状の沈線文が、内面には花文がある。140は高台状の厚い底部で、見込みに「まんじ」のような文様が施されている。

131・132・134は皿である。131・132の口縁部は外反し、131の外面にはヘラ描きの蓮弁文が施されている。134は下半部が屈曲する。

135は盤。口縁端部は屈曲して内傾する。内面には輪花状のヘラ彫りがなされている。139は杯で、見込みに鱗状文がある。



第35図 遺構外出土遺物実測図4 (1 : 3)

133・136～138は香炉である。円筒形の体部をもち、口縁端部が内側に屈折するか、肥厚されている。体部表面の凹凸により釉に濃淡があらわれ、それが文様効果をもたらしている。138は全体に貫入がある。

141・142は青白磁で、141は碗の底部、142は合子の蓋の小破片である。外面には削り出した草花文がある。

染付（青花）（第36図143～150）

143～150は皿である。143・149は外面に山形文と草花文、内面に圈線文が描かれる。144の外面口縁部には圈線を、内面口縁部には圈線と逆四方櫛文（その間にも規格的な文様あり）が描かれている。145・147は口縁部内面に圈線文、外面に圈線と波状文がみえる。146は口縁端部が外反する。内面に草花文がある。148は見込みに鹿と草花文が描かれている。150は削り出し高台の外側に圈線文があり、見込みには花文が描かれている。

中世陶器（第36図151～170・第38図198）

151～153は中国産陶器。151は褐釉陶器の壺口縁部、152は小型の茶壺の上半部、153は天目茶碗の体部である。152は器壁が薄く、きやしやな作りである。

154～156は李氏朝鮮王朝の陶器である。154・156は粉青沙器の皿で、高台状の底部をもつ。155も高台状の底部をもつ碗である。

198は灰釉陶器の碗で、外面に薄く自然釉がかかる。157は美濃焼の天目茶碗、158は瀬戸焼の灰釉陶器皿である。見込みの釉は貫入がある。

159～161は備前焼である。159・161は擂鉢。160は甕の玉縁状口縁部である。

162～165・167・168・170は瓷器系陶器で、162～164は甕の口縁部である。165は鉢の口縁部。口端部がやや膨らみをもつ。167は甕の頸部片で、内面の粘土貼り付け痕が明瞭に観察される。168は底部である。170は甕の胴部で、外面にスタンプ状の格子と矢羽状のタタキ目が施されている。166・169は陶器の底部である。169の内面の一部に漆と思われるものが付着している。

瓦質土器（第38図197・199～203）

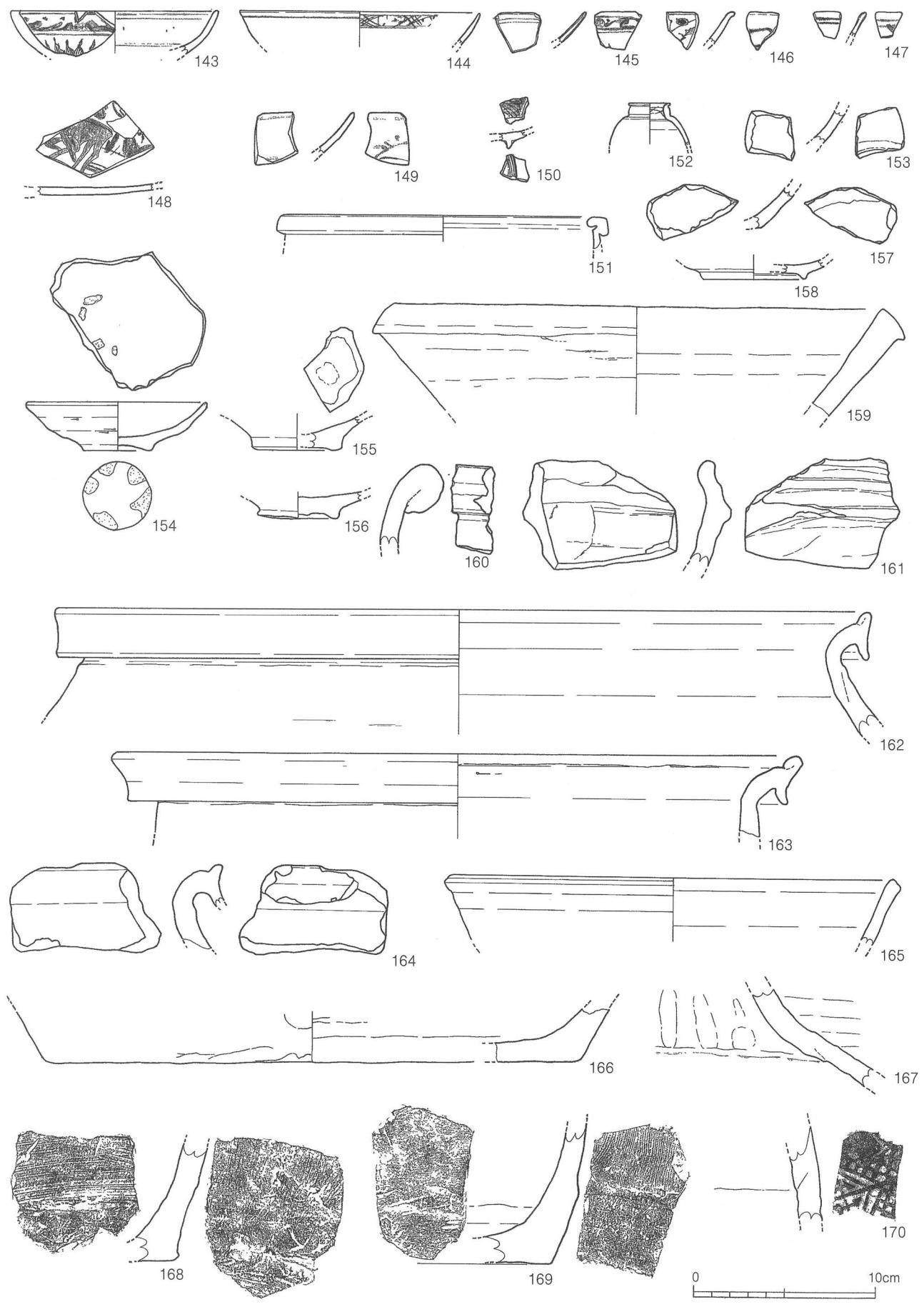
197・200は奈良火鉢である。197は浅鉢口縁部で、1条の突帯下には菱形区画のスタンプ文が施されている。200は風炉であろう。1条の低い突帯の上には簾状文、その下段には羽状文が浮き彫りを表されている。199・203は鍋の口縁部である。201は鉢、202は擂鉢の口縁部である。

肥前系陶磁器（第37図171～194・第38図195・196）

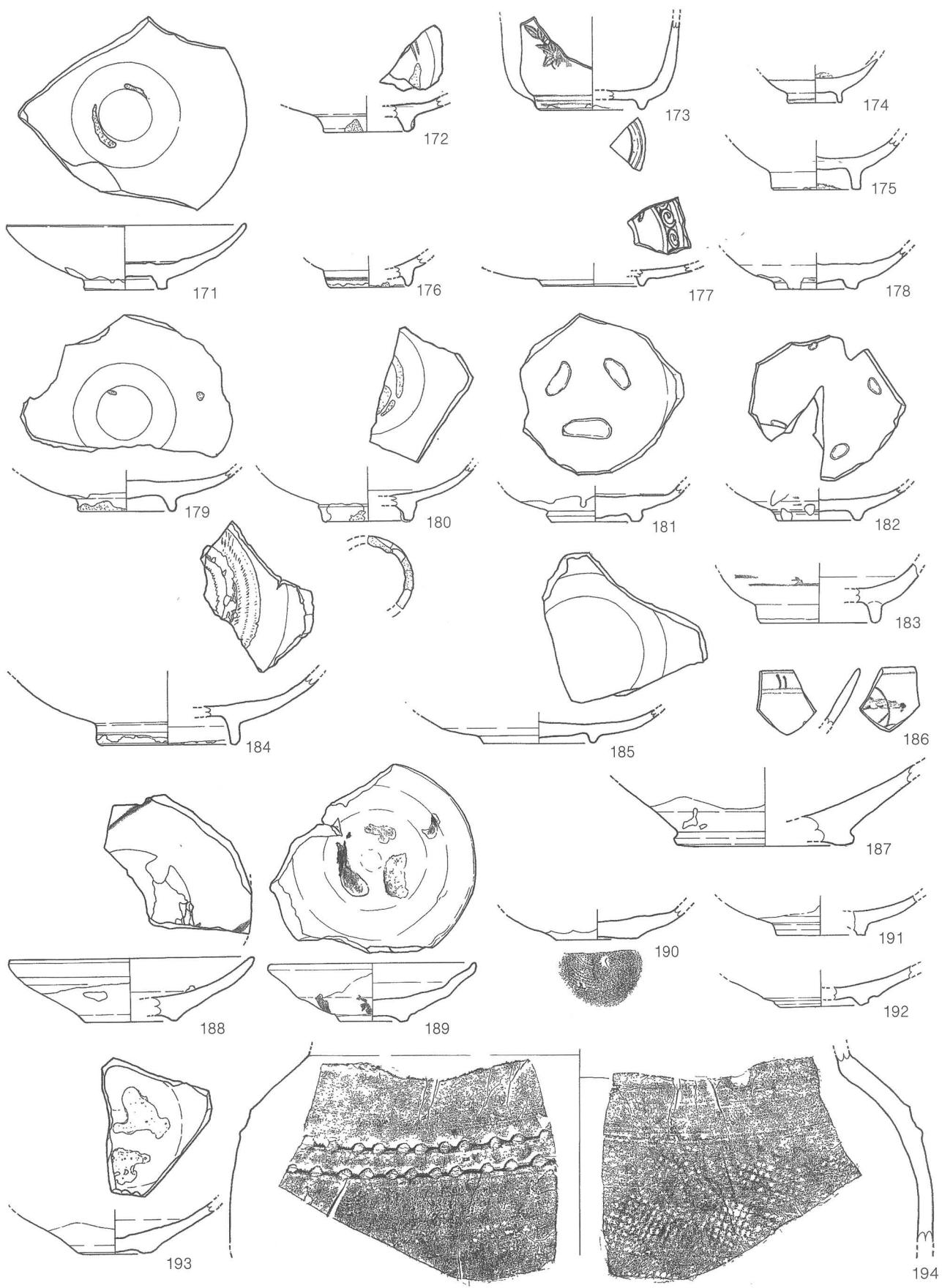
肥前系陶磁器の高台は基本的に削り出し高台である。

171～173・176・177・179・180・186は磁器である。171・179・180は皿。172・176は碗。いずれも見込みに釉剥ぎがあり、砂目積み痕が残る。176は高台の外面を細く釉剥ぎしたのちに赤色顔料が塗られている。173は小型の碗で外面にかえで葉文様が、高台の内外に圈線文がある。177は皿、見込みに圈線で縁取られた渦巻状の雷文がある。186は碗。

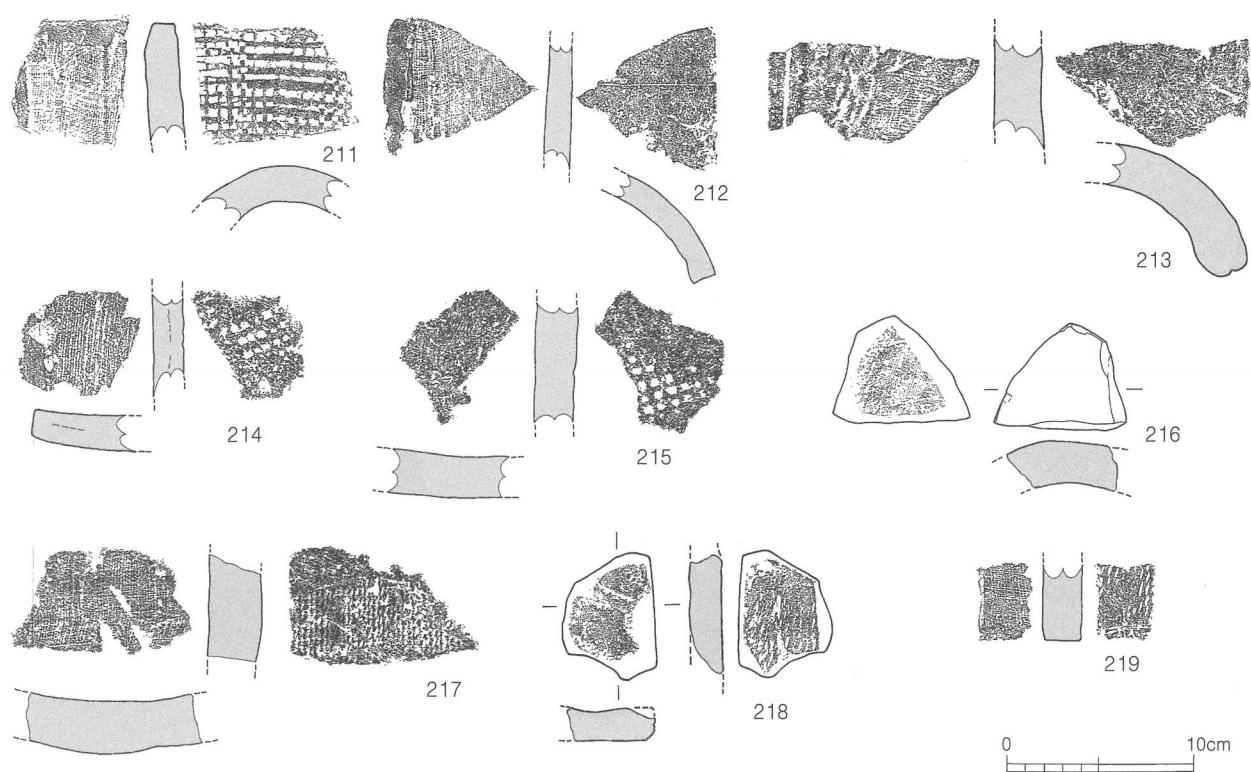
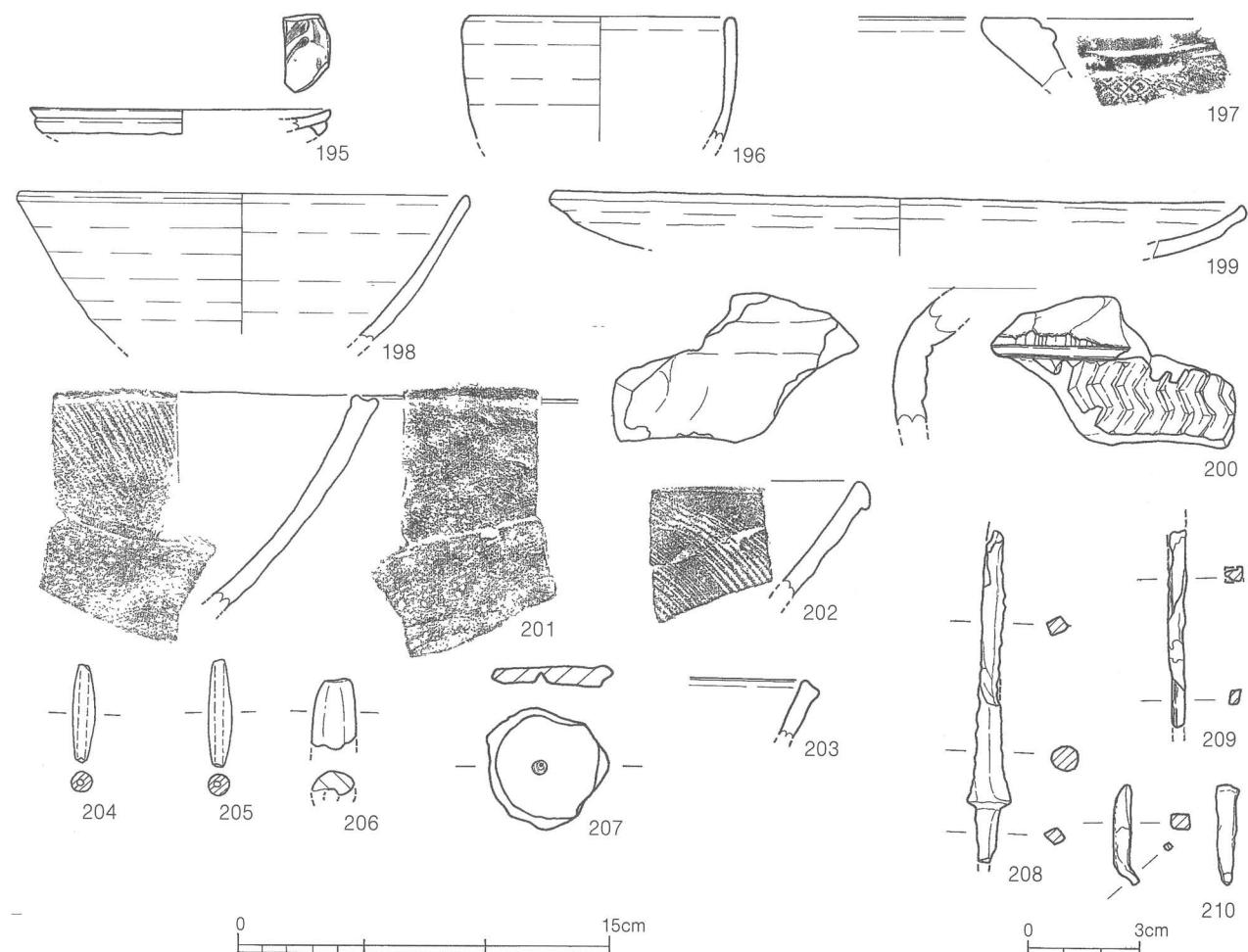
174・175・178・181～185・187～196は陶器である。174・175は碗で174は高台外側に圈線が



第36図 遺構外出土遺物実測図5 (1 : 3)



第37図 遺構外出土遺物実測図 6 (1 : 3)



第38図 遺構外出土遺物実測図 7 195~207 (1 : 3) 208~210 (1 : 2) 211~219 (1 : 4)

描かれている。178・181・182は皿。181の見込みには3箇所、182の見込みには4箇所の胎土目積み痕がある。183は碗。外面に文様の痕跡が確認できる。184・185・191・192は皿。見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。192の高台は上げ底状である。187は大皿。内面には粗雑な施釉がある。188・189・193は皿で、上げ底状の高台。188は見込みに釉剥ぎを施し、189は3箇所の、193は2箇所の砂目積み痕が観察される。第38図195は皿。見込みに鉄絵が描かれている。外面には別個体の皿が癒着し、そのため歪んでいる。196は小型の碗である。194は甕の胴部である。外面には押圧文を付けた2条の貼り付け突帯がある。内面には細かい格子状の当具痕があり回転ヨコナデにより擦り消している。

土製品（第38図204～207）

204～206は土錘である。204・205は紡錘形、206は大型の紡錘形である。207は土師器の杯底部を転用した土製円盤で、中央に凹みがある。

鉄製品（第38図208～210）

208は錐状の鉄製品である。一端が茎状となっている。209は細い角棒の破片である。太さからみて火箸の可能性が考えられる。210は用途不明品。

瓦（第38図211～219）

211～213は丸瓦である。211は狭端部。凸面には格子目叩き痕を残し、凹面には、糸切痕、側板痕、回布压痕がある。側板連結模骨を使う粘土板巻き作りの行基丸瓦である。狭端面はヘラケズリののち、凸凹面側ともに面とりされている。212は側辺部。凸面調整はヨコナデ、凹面には糸切痕と布压痕、布筒の綴じ合わせ目痕がある。綴じ目はぐし縫い。側面の凹面側のみ面とりがある。213も側辺を残す破片。凸面調整はヨコナデ、凹面には糸切痕と布压痕がある。側面の凸凹両方に面とりがある。

214～219は平瓦。214・215は凸面の格子目叩き痕をヨコナデ調整ですり消す。凹面には布压痕がある。216は叩き痕を残さない。217～219はタテ繩叩き平瓦。いずれも一枚作りであろう。これらの瓦片は、本遺跡の北西約1kmにある神門寺境内廃寺の所用瓦であり、211・214・215は創建期の瓦である。

石製品（第39図220～第42図269）

220は流紋岩製の石籠状石器で、表面の自然面は風化のため軟質となり線状のキズ痕が残る。裏面は摂理面で剥離されている。

224は碧玉製の、229は玉髓製の楔形石器である。224は縁辺に刃潰しが観察され、229は上下縁辺部に敲打痕が観察される。

225は玉髓製の敲石。縁辺及び凸状部に潰れ痕が著しい。

221～223・226・228は玉髓製の石核、227は黒曜石の石核である。222は所々自然面が残存し、223は凸部に敲打痕が観察される。

230は玉髓製の調整剥片である。235は流紋岩製の加工痕ある石器である。231は玉髓製の剥片で両側辺に刃こぼれが観察される。

232・233は安山岩製の石錘で、平らな川原石を利用している。233の縁辺一部には磨滅痕が観察される。

234・236～250・252～261・264～266・268・269は砥石である。

237・238・240・242・246・247・253・256・259・264は荒研ぎ～仕上げ研ぎ、250は荒研ぎと仕上げ研ぎ、252は荒研ぎと中研ぎ、260・265は中研ぎ、239・241・243・249・254・255・257・269は中研ぎと仕上げ研ぎ、245・258・261・266は仕上げ研ぎ、248は中研ぎとして使用されているが、左側辺に剥離痕が観察される。

234・236～241・243～245・247～250・255は凝灰岩製、242・246・252・253・257・259は砂岩製、254・258・260・261・264・265・269は流紋岩製、256は安山岩製、266は花崗岩製である。234・236は玉作関連の石器とも考えられる。234・244は側面には擦り切り痕のような削痕がみられる。236は元来石鋸の可能性も考えられるようなものである。

268は打製石斧の転用砥石と考えられ、表裏面の平坦面を研磨している。

251は全面に擦痕のある硯のような形を作り出しており形代と考えられるものである。

262は台石である。刃キズが観察される。263・267は研磨痕ある礫で、263は刃キズが明瞭に観察され、被熱で一部煤が付着している。

また砥石が4D区に集中して出土しており、鍛冶関連遺物が集中していることと関係がありそうに思われる。

木製品（第43図270～286）³⁾

270～272は漆器椀の破片である。270は高台部で、黒漆主体であるが見込みに赤漆が一部観察される。271は体部。外面に黒漆、内面に赤漆が塗布してある。272は内外面とも黒漆が塗布され、外面には赤漆で鶴と思われる鳥が描かれている。

274は折敷の底板であろう。残存する角を面取りしている。275は小判形の木皿と思われる。

273は算盤玉状の木製品で、中央に穿孔が施されている。276は軸をもたない独楽で、上面の中心から外れた位置に直径5mmの円形の凹みがある。樹種はマツ属（二葉松類）。

277は角棒状品で、側面から穿孔が1箇所施されている。278はやや小振りの横槌である。キブシ属キブシ。

279・280は下駄である。279はやや幅広の長方形をした連歯下駄で、樹種はクリ属クリ。280は細長く隅丸に作られた露卯下駄。差歎の一部が残存している。樹種は、台と後歎はハダ属キハダ。前歎は環孔材。

281～286は板材である。

鉄滓（表1）

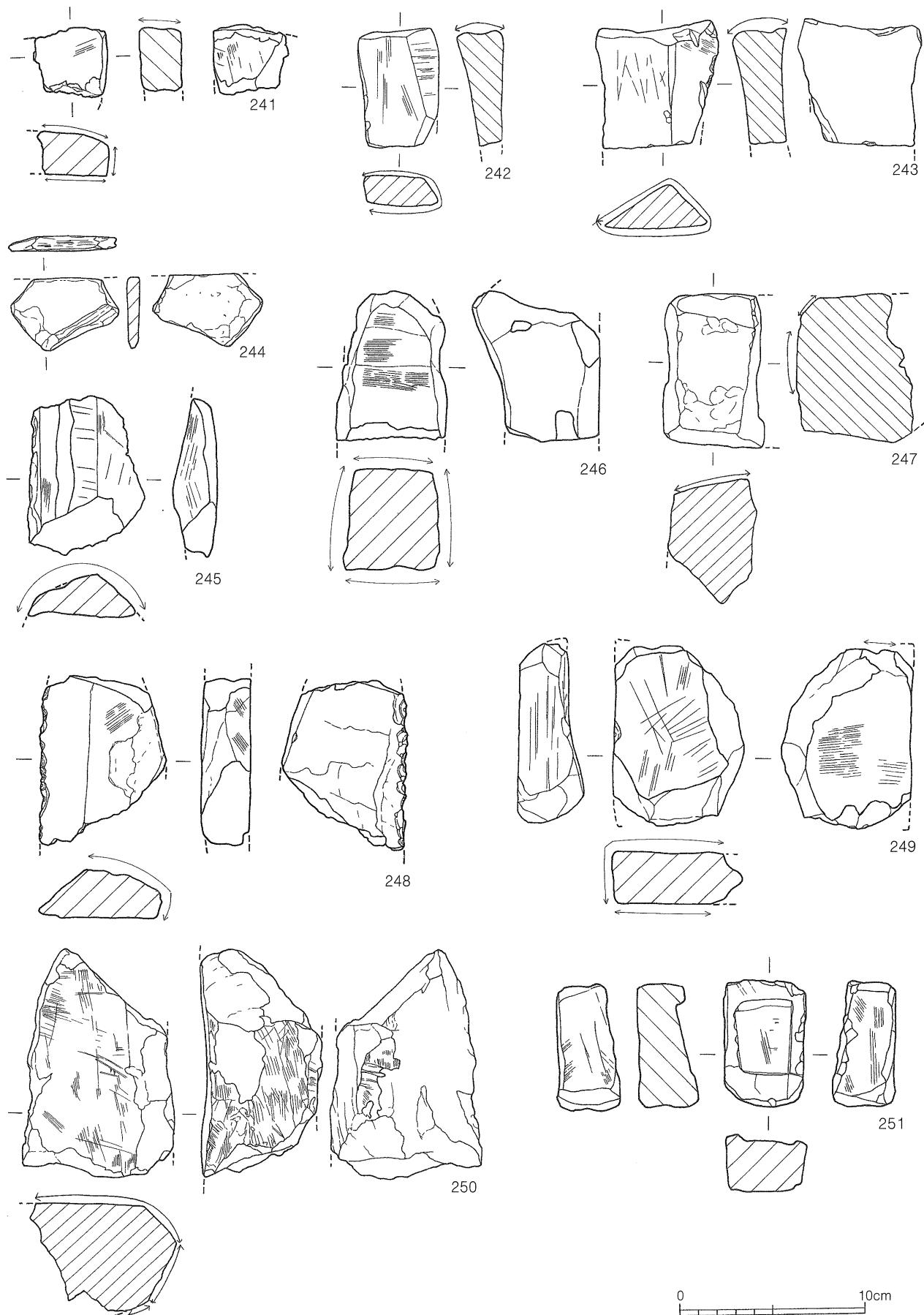
鉄滓は、構成表（表1）及び観察表としてまとめた。

註

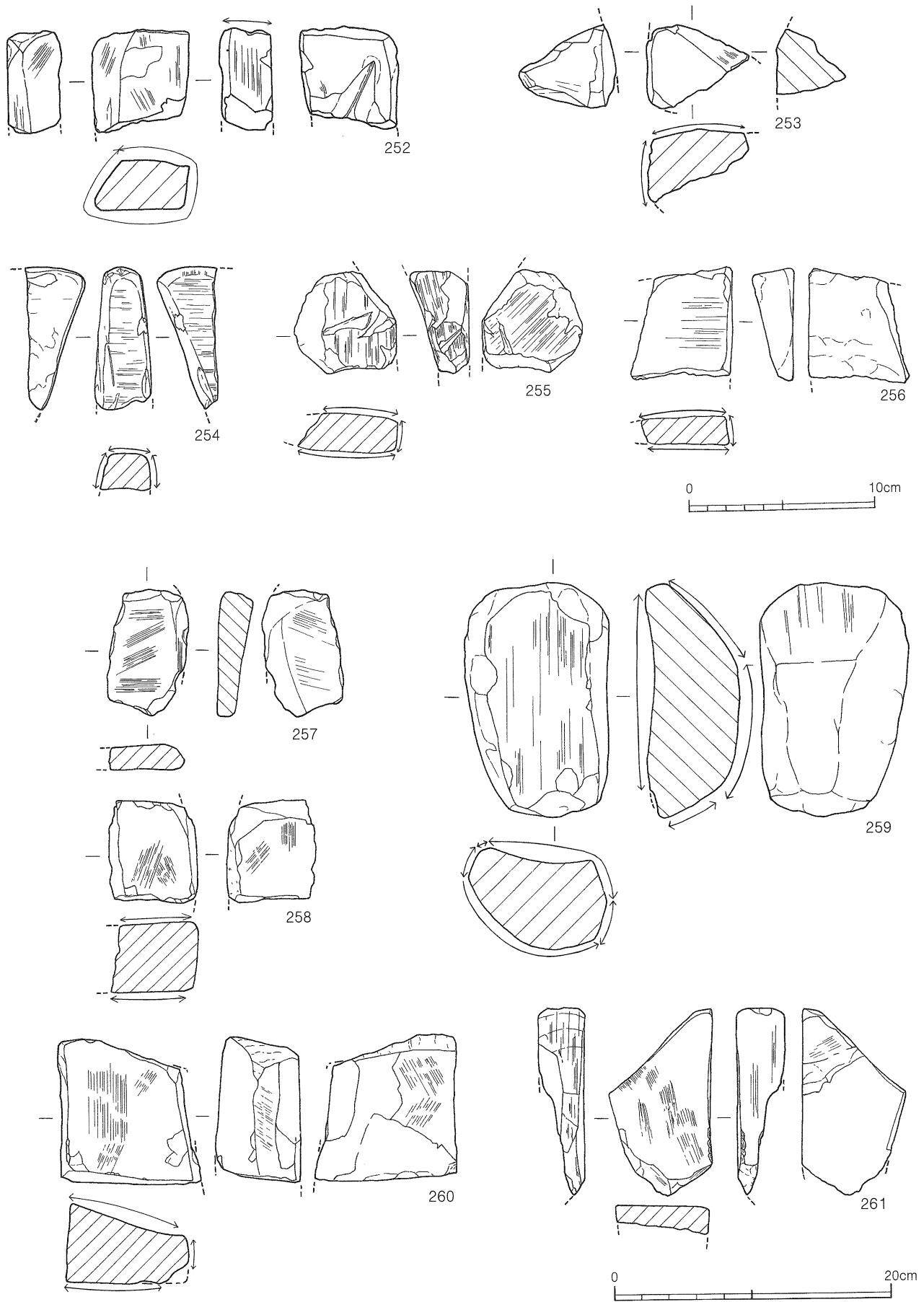
- 1) 約3600年前の三瓶山噴火による火山灰の土砂が神戸川を流れて堆積したもの。鍵層。
- 2) 出土した弥生土器片は総計13点ある。そのうちわけは、前期6点、中期7点、後期3点である。
- 3) 木製品については、一部しか樹種同定を行っていない。



第39図 遺構外出土遺物実測図 8 (1 : 3)



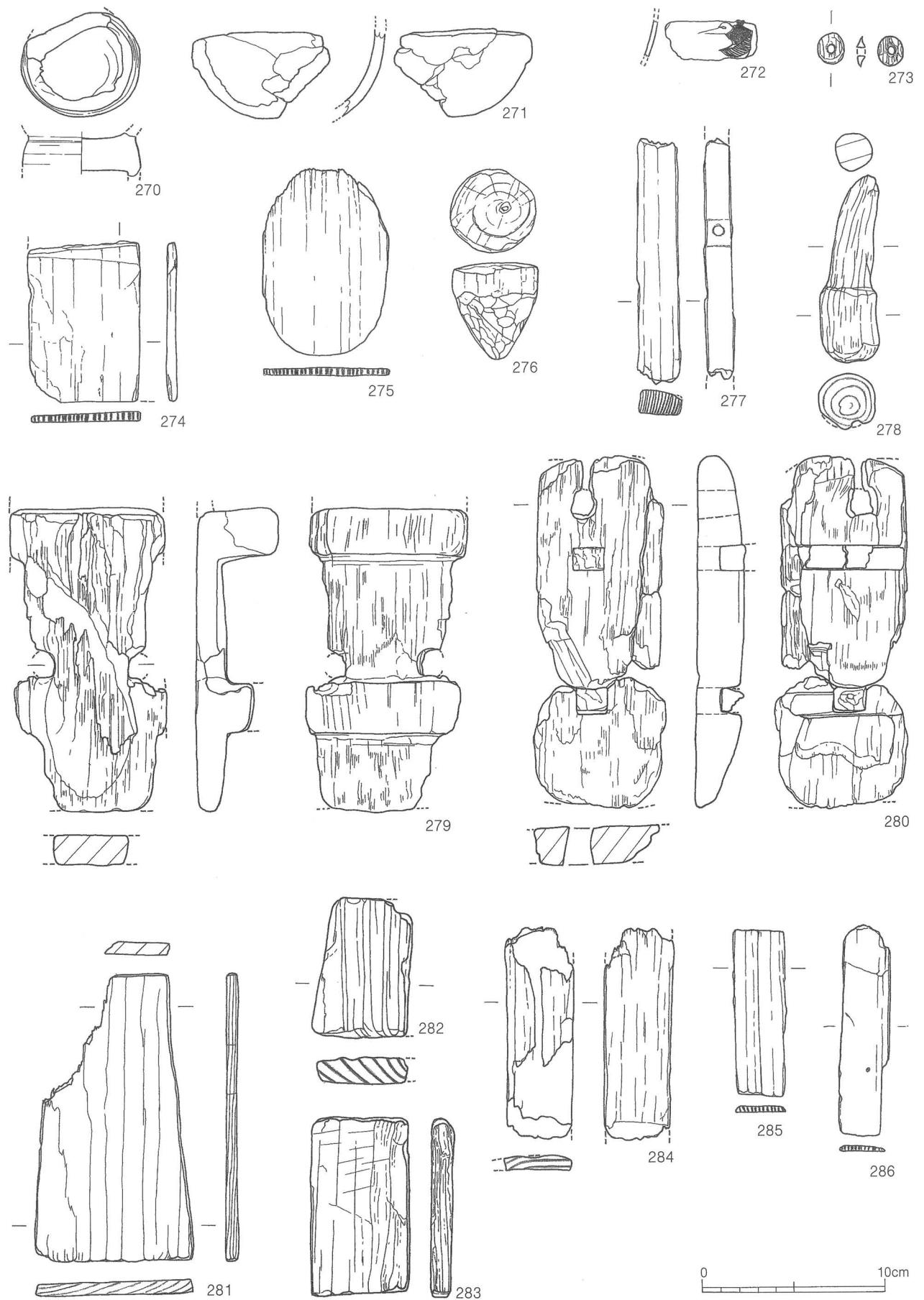
第40図 遺構外出土遺物実測図9 (1 : 3)



第41図 遺構外出土遺物実測図10 252~256 (1 : 3) 257~261 (1 : 4)

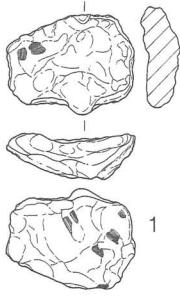
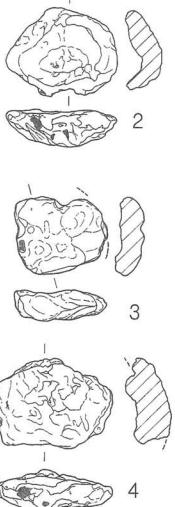
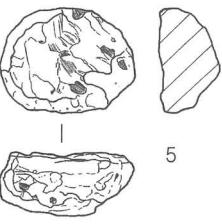
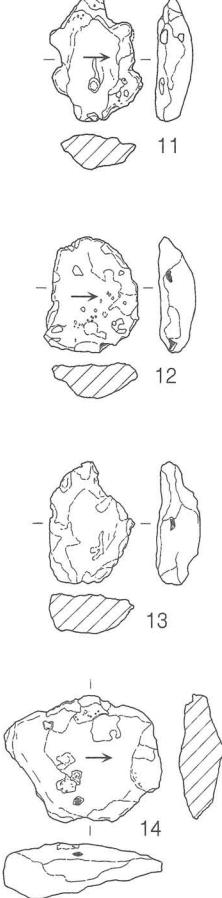
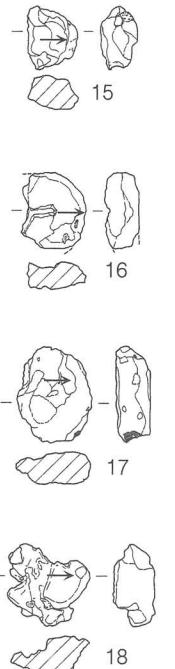


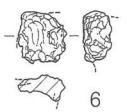
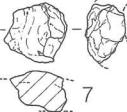
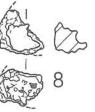
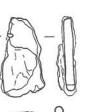
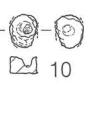
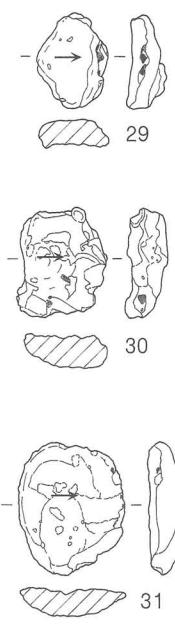
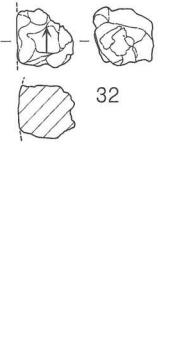
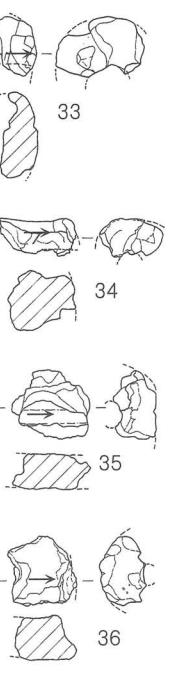
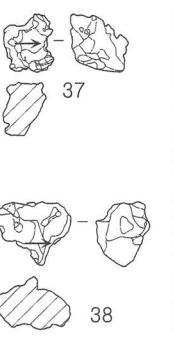
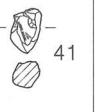
第42図 遺構外出土遺物実測図11 (1 : 4)



第43図 遺構外出土遺物実測図12 (1 : 3)

表1 4区出土鉄関連遺物構成表

遺物名	楕形鍛冶滓（中）	楕形鍛冶滓（小）	楕形鍛冶滓（極小）	鍛冶滓
	4 A · B · C 区			
軽 ↑ ↓重				
	4 D 区			
軽 ↑ ↓重				

椀形鍛冶滓 (中・含鉄) 銹化(△)	炉壁(鍛冶炉)	羽口(鍛冶)	粘土質溶解物	鉄製品 (鍛造品)	砥石
4 A · B · C 区					
			 	 	
4 D 区					
					

第2節 築山遺跡(平成17年度発掘調査4B区)にかかる自然科学分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

築山遺跡は島根県中央部の出雲市上塩治町に位置する。本報は、出雲市が文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した複数の業務内容をまとめ、再編集したものである。

分析の目的は以下に示す3点であり、花粉分析、植物珪酸体（プラント・オパール）分析、珪藻分析、種実分析、寄生虫卵分析を実施し、それぞれの目的に対して考察を行った。

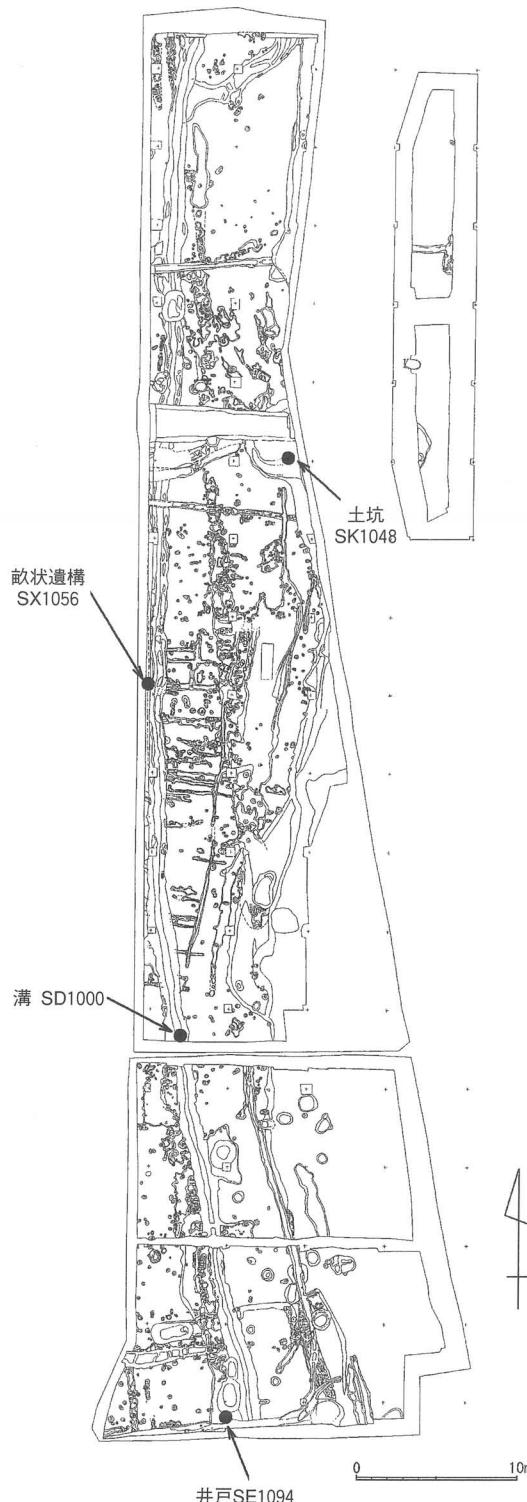
①溝状遺構（SD1000）の堆積環境を明らかにする。

②畠跡と考えられる畝状遺構（SX1056）（No.1 地点）での耕作の実態を明らかにするとともに、同時期の水溜状遺構（SK1048）との関連を調べる。

③遺構（SE1094）の性格を明らかにする。

分析試料について

図44に、試料採取地点を示す。それぞれの地点での模式柱状図及び分析試料採取層準を、分析結果として示した各種ダイアグラム左端に示してある。種実分析試料は、「畝状遺構（SX1056）」地点4層最下部からブロックで採取した。また、図45に遺構SE1094の断面図及び寄生虫卵分析試料の採取位置を示す。



第44図 4B区試料採取地点（1:500）

分析方法及び分析結果

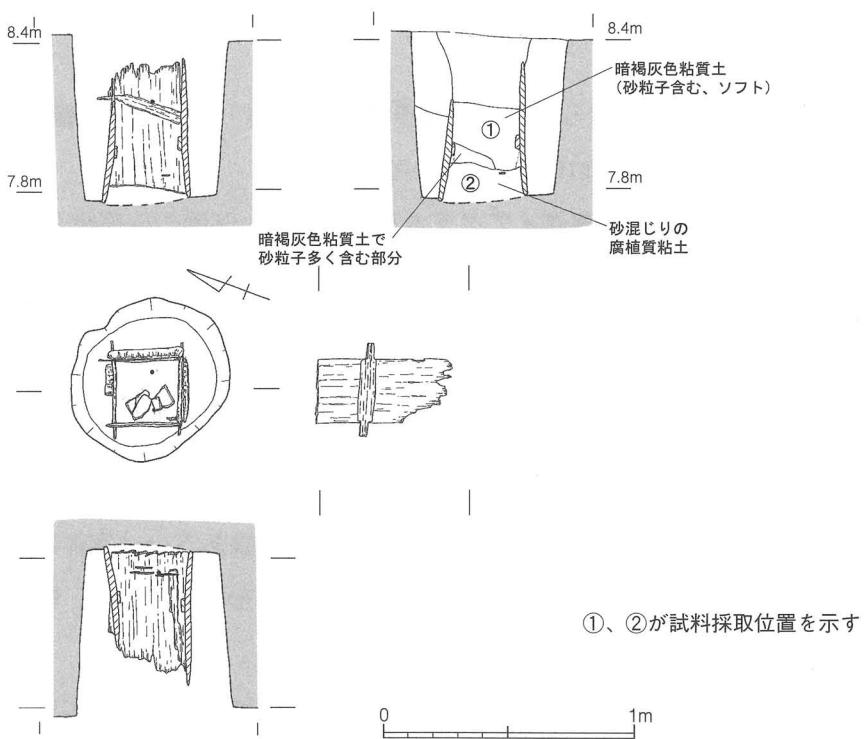
1) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び珪藻分析用プレパラートを用いて、その外の微化石、火山ガラスの含有状況を確認した。各微化石・火山ガラスの概査結果は、第2表のとおりである（植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物珪酸体は、珪藻分析用プレパラートを観察した）。

2) 花粉分析

処理は渡辺（1995a）に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、中村（1974）に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

分析結果を第46～48図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。統計処理に十分な量の木本化石が検出できなかった試料では、検出できた種類を「*」で示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積



第45図 S E 1094の断面図および試料採取地点

表2 微化石調査結果

地點名	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラント・オパール
S X1056 (畝状遺構)	1	△	◎	△×	△×	△×	○
	2	△	◎	△×	△×	△×	○
	3	△	○	△×	△	△×	○
	4	○	△	△	◎	△	○
S D1000	1	◎	○	△	◎	△	◎
	2	◎	○	△	◎	△×	◎
	3	○	○	△	○	△×	◎
S K1048	4	◎	△	△	◎	△×	○
	10	◎	△	△	◎	△×	△×
	16	◎	△	△	◎	△×	△×
	20	◎	△	△	◎	△×	△×

凡例 ◎：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる

△：非常に少ない △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

百分率として示した。

3) 植物珪酸体分析

分析処理は藤原（1976）のグラスビーズ法に従い行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いた。同定・計数は、イネ科の機動細胞由来植物珪酸体のほか、形態分類群、樹木起源など同定可能な分類群について行った。また計数は、同時に計数したグラスビーズの個数が300を超えるまで行った。

分析結果を第49～51図の植物珪酸体ダイアグラムに示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、1gあたりの含有数に換算した数を、検出した分類群ごとにスペクトルで示した。

4) 珪藻分析

処理は渡辺（1995b）に従った。プレパラートの観察・同定を光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。

分析結果を第52・54図の珪藻ダイアグラム及び、第53・55図の珪藻総合ダイアグラムに示す。珪藻ダイアグラムでは珪藻総数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、スペクトルで示した。珪藻総合ダイアグラムでは、生息域ごとにまとめて百分率を算出し、累積ダイアグラムで示した。また、生息水域グラフでは検出総数を基数とし、他のグラフでは淡水種総数を基数としている。珪藻化石組成表では、検出総数を基数とした百分率を算出し示してある。

5) 種実分析

試料を0.25mm目の篩で水洗し細粒物を除去した後、肉眼あるいは実体顕微鏡を用いて植物遺体を選別・同定する。同定に当り、現生標本及び図鑑類を参考にした。同定後の試料は、調査地点ごとに分類群別にガラス瓶に入れ標本とした。

分析結果を表3の種実同定結果に示す。また、以下に分類群ごとの記載を行った。

(1) イネ科 (Gramineae)

炭化した種子を出土した。種子は長卵形で扁平、腹面下端に長楕円形の胚があり、背面には不明瞭なへこみがある。種子頂部は丸く、表面は平滑である。形状からメヒシバやカモジグサ

表3 種実同定結果 (S X1056 4層最下部)

試料名	分類	部位名	個数
S X1056 4層	イネ科	種子	1
	核菌綱	菌核	1

などと考えられる。

(2) 核菌綱 (Pyrenomycetes)

菌核を出土した。ほぼ球形で表面はざらつくが模様はない。中は均質のスponジ状である。もともと黒く堅いので炭化しているかどうかの判断は難しい。主にコナラ属などの広葉樹の樹皮に付着して生活する菌類で、胞子を放出する器官である菌核は、成熟すると子座から離れる構造になっている。

6) 寄生虫卵分析

処理は金原（2003）に従った。プレパラートの観察・同定を光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。

分析結果を、表4の寄生虫卵分析結果に示した。表4には、同定種類ごとの計数値を示すほか、処理試料1cm³あたりの含有数に換算した数量を示す。また、基礎データとして寄生虫卵密度・希釈率を示す。

花粉分帶

築山遺跡では平成15年度以降、継続的に花粉分析等の自然科学分析が実施されている。これらのうち渡辺（2004）では、弥生時代以降とされるほぼ連続した花粉組成が得られている。また、近隣の三田谷I遺跡では、断続的ではあるが縄文時代中期以降の花粉組成が得られている（中村・渡辺、2000ほか）。

今回の分析地点の内、SD1000が弥生時代後期、SX1056地点及びSK1048が中世に堆積したと、それぞれの出土遺物から考えられていた。

既知の花粉分析結果、及び今回の推定堆積年代を基に、各地点で築山遺跡での局地花粉帯（渡辺、2004）に対比した。

1) SX1056地点の各試料について

SX1056地点は、中世の畝状遺構（畠跡）と考えられていた。

試料No.3～1は、出土遺物の時期からⅢ帶に相当すると考えられる。しかし、木本花粉の検出数が少ないとから、花粉分帶の対象から除いた。

試料No.4は最下部から採取したものであったが、微粒炭に乏しいなど他の3試料と試料の様相が異なった。また、この試料のみ花粉化石の含有量も多いなど異質なものであった。下位の地山は砂層であり、これらの花粉化石が「地山」からの混入であるとは考えにくい。どこかから持ってきて客土をしたなどの可能性が指摘され、本質的なものでないと考えて花粉分帶の対象から除いた。

表4 SE1094の寄生虫卵分析結果

試料No		(1)	(2)
1 マンソン裂頭条虫卵 Diphyllobothrium mansoni	個体数 (個体/cm ³)	0 0	1 2
総数		0	1
寄生虫卵密度 (個体/cm ³)		0	2
稀釈率 (1/x)		17	2

2) IV帶 (弥生時代後期 : SD1000)

スギ属が卓越し、マツ属（複維管束亜属）、アカガシ亜属、コナラ亜属を伴う。胞子化石の割合は低く、草本花粉ではヨモギ属が卓越するほか、イネ科（40ミクロン未満）も高率を示す。

渡辺（2004）では、中世の堆積層下位で弥生時代に堆積した可能性のある層準の花粉組成もⅢ帶としていた。しかし、ここでのⅢ帶はマツ属（複維管束亜属）が卓越し、今回得られた花粉組成とは異なるものであった。一方、近辺の遺跡に目を向けても弥生時代に堆積したと確定される堆積物の分析例がなかった。両地点とも局地的な植生を反映したものである可能性も残るが、今回の試料は明らかに弥生時代後期の堆積物であり、渡辺（2004）の堆積時期は不確実なことから、今回得られた花粉組成が弥生時代後期を代表する花粉組成であると考えた。またⅢ帶に先立つことから、IV帶とした。

3) Ⅲ帶 (中世 : SK1048)

マツ属（複維管束亜属）が卓越するほか、スギ属、コナラ亜属を伴う。胞子化石の割合は低く、草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）が卓越するほか、イネ科（40ミクロン未満）、ヨモギ属が高率を示す。

今回得られた花粉組成の特徴は、渡辺（2004）で明らかになったⅢ帶の特徴と一致する。また、時期も良く一致することからⅢ帶に対比した。

畝状遺構で花粉化石含有量が少なかった原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

- 堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。
- 堆積物の特性（粒度・比重）と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。
- 土壤生成作用に伴う堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
- 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
- 有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

今回分析した試料の多くは暗褐～黒色の中～粗砂質粘土であり、胞子の割合が高く、キク科を主とした草本の割合も高い。またプラント・オパールの含有量も多い。これらのことから、

3が主因であったと考えられる。つまり、堆積速度が遅いために花粉が堆積物中に固定される以前に紫外線の作用で分解したと考えられる。

S X1056（畝状遺構）とSK1048（土塙）の関係について

1) 畝状遺構の環境

前述のように、畝状遺構は紫外線の影響を強く受ける環境下で土壤化を受けていたことが明らかである。つまり、畠作環境に長く置かれていたことが示唆される。一方分析試料の内、試料No. 1からは「イネ」のプラント・オパールが多量に検出されるほか、「ムギ」のプラント・オパールも検出され、畠作を裏付けるものである。しかし、試料No. 1層準は畝状遺構を覆う堆積物であり、畝状遺構の耕作土ではない。したがって、中世にイネやムギが作られていたとは言い難い。

試料No. 2では「キビ族型」のプラント・オパールとソバ属花粉が検出された。「ソバ」と「アワ（キビ族型プラント・オパール）」が栽培された可能性が指摘できるが、試料No. 2層準も畝状遺構を覆う堆積物であり、畝状遺構の耕作土ではない。

試料No. 4、3でも「キビ族型」のプラント・オパールが検出された。また試料No. 3では、ソバ属花粉が検出された。試料No. 4層準の種実分析では、イネ科の「雑草」であるメヒシバあるいはカモジグサと考えられる種子が検出されたが栽培植物は検出できなかった。

試料No. 3では「ソバ」と「アワ（キビ族型プラント・オパール）」が栽培された可能性が指摘できる。しかし、ソバ属花粉の検出量は少なく、上位の2層からも検出されていることから上位から混入した可能性も指摘できる。またキビ族型プラント・オパールがアワ以外の雑草も含むことなど、「ソバ」と「アワ（キビ族型プラント・オパール）」が栽培された可能性は低い。

2) S X1056地点とSK1048との関連

共に中世の遺構と考えられることから、SK1048が畠への灌漑用溜池の可能性が指摘されていた。SK1048の花粉分析結果からは、近辺が草地あるいは水田であったことが示唆され、S X1056地点が土壤化を受ける環境（畠地、草地）であったことと矛盾はしない。しかし、両地点で共通して特徴的な花粉化石が検出されなかつたことから、両地点の関連を論ずることはできなかった。

遺構SE1094の性格について

遺構SE1094がその形態からトイレ遺構との可能性が指摘された。このことから、遺構内堆積物の寄生虫卵分析を行った。しかし、分析結果（表3）に示すとおり、検出された寄生虫卵はマンソン裂頭条虫（イヌ、ネコに普通にみられる寄生虫）卵1個体であった。ヒトには、生水や広範に分布している第2中間及び待機宿主の生食や加熱不十分な状態で摂取することによって感染するが、ヒトが終宿主ではないため、幼虫状態で寄生する。

前述のようにSE1094の上部①からは全く寄生虫卵が検出されず、下部の②からのみ寄生虫

卵がわずかに検出された。現地観察で②がS E 1094の本質的な堆積物で、①は廃棄時あるいは廃棄後の堆積物であると推定されていたことと併せると、検出された寄生虫卵はS E 1094の使用時に付加されたことになる。しかし前述のように、マンソン裂頭条虫はイヌ、ネコが終宿主であり（卵は終宿主の体内で生まれる）、S E 1094に人間の糞がたまっていたと言うことにはならない。

いわゆる「トイレ遺構」では、終宿主が人間の寄生虫卵が数百個体/cm³以上の密度で検出されることが普通であり、今回の結果からは、S E 1094がいわゆる「トイレ遺構」であるとは考えにくい。

古環境推定

以下では、堆積時期ごとに古環境を推定する。

1) 弥生時代後期（IV帶期）

① S D 1000の堆積環境

珪藻分析結果で底生種がほとんどを占め、上位に向かい陸生種が微増する。また、流水種は検出できなかった。また試料No.3層準が粘土質砂層であったものの、全体に明確なラミナが認められないことから、閉鎖的で流れの乏しい湿地状の溝であったと考えられる。溝が埋まるにつれ、水量も減り時には干上がる事もあったと考えられる。

② S D 1000内あるいは近辺の植生

ヨシ属のプラント・オパールが検出されることから、溝内あるいは縁辺にはヨシが生育していた部分があったと考えられる。また、ウシクサ族A型やススキ属型のプラント・オパールも検出され、チガヤ類やススキ類などが溝の縁辺から近辺には繁茂していたと考えられる。一方で、アリノトウグサ科やノアズキ属の花粉が特徴的に検出され、フサモ類が溝内に、ノアズキが溝近辺に繁茂していたことが明らかである。

また、ブナ科のプラント・オパールが検出されることから、シイノキ類が近辺に生育していた可能性がある。

③山地の植生

草本花粉が卓越することから、遺跡近辺には草地が広がっていたと考えられる。また得られた木本花粉は、遺跡背後の山地から遠く中国山地より飛来、あるいは水とともに流れ着いたもので、広い範囲の植生をしめしていると考えられる。

谷沿いや、扇状地末端にはスギ林が分布する一方、山地にはカシ類を主要素とする照葉樹林やナラ類、マツ類を要素とするいわゆる「二次林」が分布していたと考えられる。

2) 中世（III帶期）

① S K 1048の堆積環境

珪藻分析で底生種がほとんどを占め、下位ほど浮遊種が多い。もともと水深が深かったものが、徐々に埋まっていたことが分かる。途中で砂層が発達するなど流れ込みがあったことは

確実であるが、流水種はほとんど検出されないことから、出水時にSK1048内に水が流れ込むことがある程度で、ふだんは流れが乏しかったと考えられる。

② SK1048内あるいは近辺の植生

イネの花粉（イネ科：40ミクロン以上）やプラント・オパールが検出され、SK1048の近辺あるいは流れ込む溝の周囲で稲作が行われていたと考えられる。またヨシ属やウシクサ族A型やススキ属型のプラント・オパールが検出されることから、溝内あるいは縁辺、近辺にかけてヨシ、チガヤ類やススキ類などが溝の縁辺から近辺には繁茂していたと考えられる。

また水生植物の花粉も検出されるが、水田雑草でもある。これらはSK1048の近辺あるいは流れ込む溝の周囲、水田内に生育していたと考えられる。

③ 山地の植生

前時期同様に草本花粉が卓越することから、遺跡近辺には草地が広がっていたと考えられる。また得られた木本花粉も、遺跡背後の山地から遠く中国山地より飛来、あるいは水とともに流れ着いたもので、広い範囲の植生をしめしていると考えられる。

谷沿いや、扇状地末端のスギ林や山地の照葉樹林の分布域が縮小し、山地にはマツ類やコナラ類を要素とする、いわゆる「里山」が広く分布していたと考えられる。

まとめ

築山遺跡平成17年度調査での自然科学分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

(1) 花粉分帯を行い、既知の局地花粉帯との比較を行った。

①従来弥生時代以降の植生を示すとしていたⅢ帯に先立つ花粉組成が見つかり、Ⅳ帯とした。

ただし、既知の結果にも局地的な植生を反映した可能性があるなど、再度検討する必要がある。

②Ⅲ帯は、中世を中心とする植生を示唆する可能性が高くなった。

(2) SX1056畝状遺構での堆積環境を推定した。

いわゆる土壤化作用により形成され、畠作環境下にあったことが分かった。また、畝状遺構を覆う試料No.1層準からはイネ、ムギが検出された。畝状遺構の作土である試料No.3、4層準では、ソバ属花粉、キビ族型のプラント・オパールが検出された。このことからソバ、アワが栽培された可能性が指摘できるが、可能性は低い。

(3) SX1056とSK1048の関係は、分からなかった。

(4) SD1000、SK1048に関連した古環境が明らかになった。

①SD1000は、湿地状で流れに乏しい溝であった。

②SK1048は、水深の深い水溜池（？）であった。出水の度に砂が流入するが、普段は流れに乏しかった。

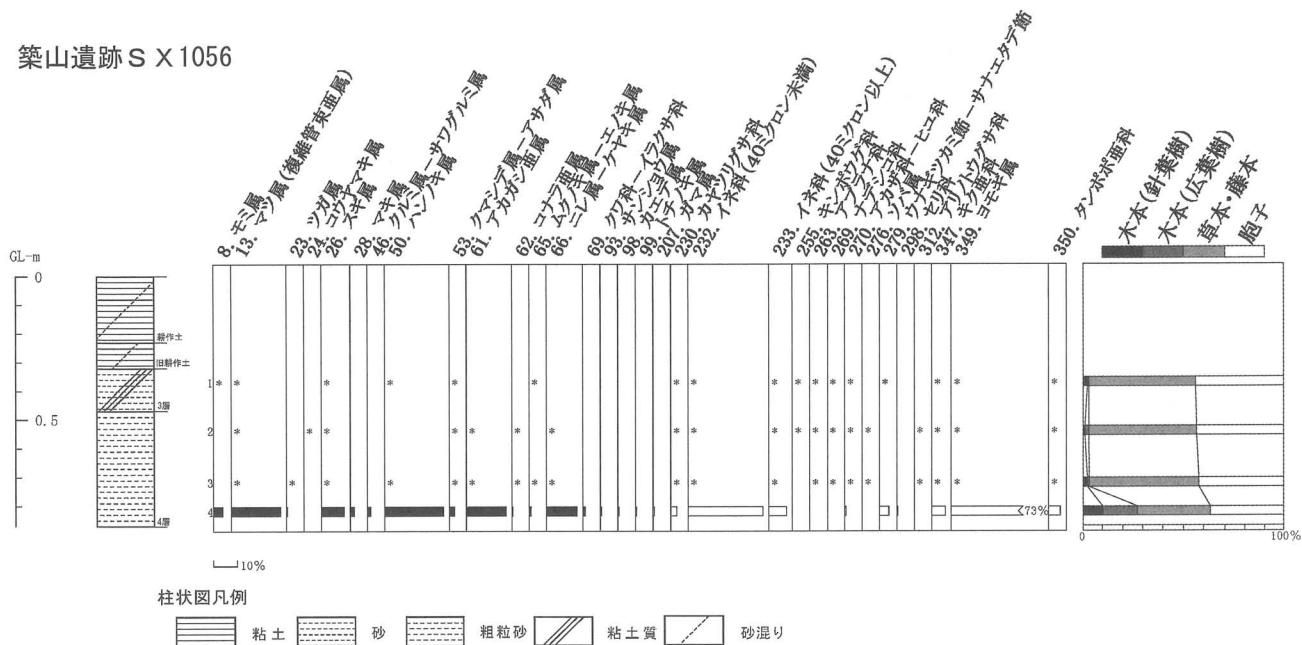
③弥生時代後期、中世の遺跡内から周辺にかけての植生が明らかになった。

(5) 遺構SE1094は、トイレ遺構とは考えられなかった。

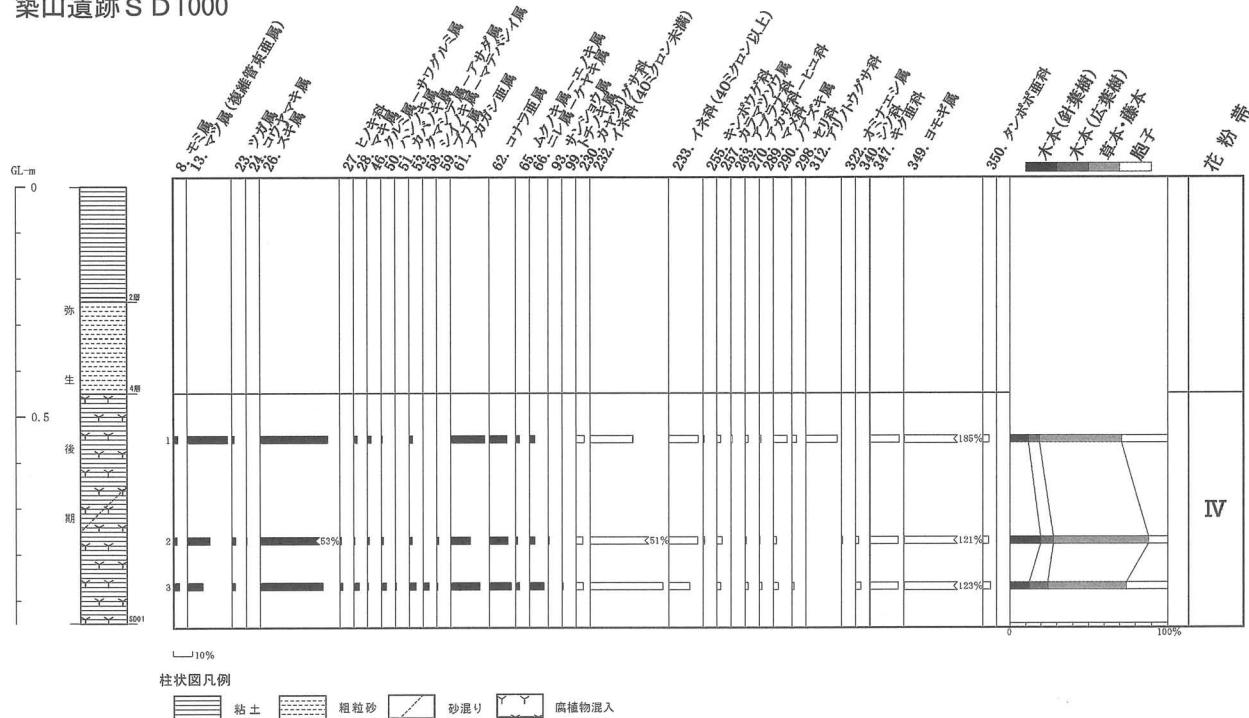
引用文献

- 金原正明（2003）遺跡の土壤分析. 環境考古学マニュアル, 77-84, 同成社.
- 中村 純（1974）イネ科花粉について, とくにイネを中心として. 第四紀研究, 13, 187-197.
- 中村唯史・渡辺正巳（2000）三田谷 I 遺跡の地下層序と地形発達史. 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VIII—三田谷 I 遺跡(Vol. 2)—, 116-127, 建設省中国地方建設局出雲工事事務所・島根県教育委員会.
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, p. 15-29.
- 渡辺正巳（1995 a）花粉分析法. 考古資料分析法, 84-85. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳（1995 b）珪藻分析法. 考古資料分析法, 86-87. ニュー・サイエンス社.
- 渡辺正巳（2004）築山遺跡における自然科学分析. 出雲市築山土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-寿昌寺遺跡・築山遺跡報告書-, 出雲市教育委員会. 156-166.

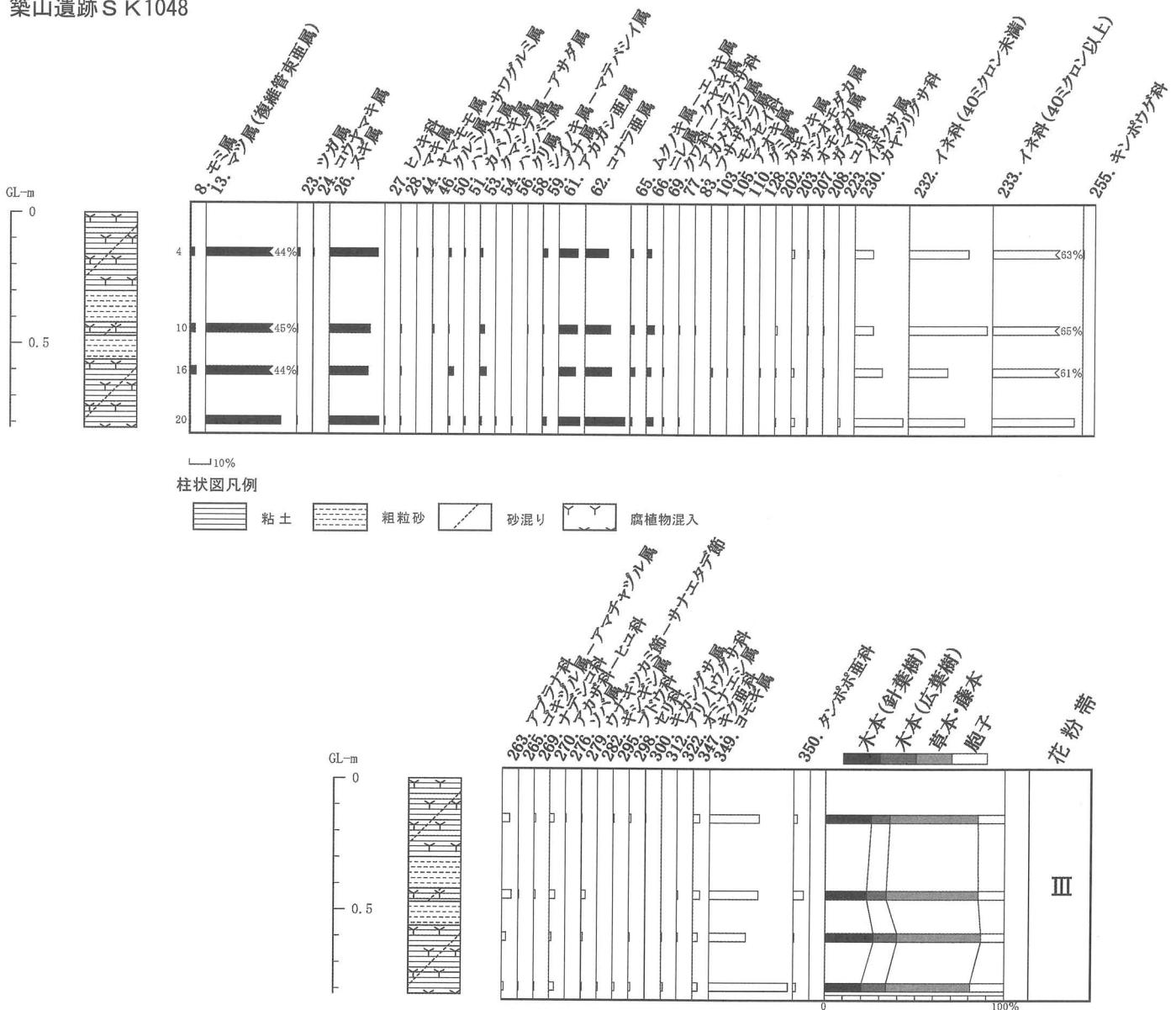
築山遺跡 S X 1056



築山遺跡 S D 1000

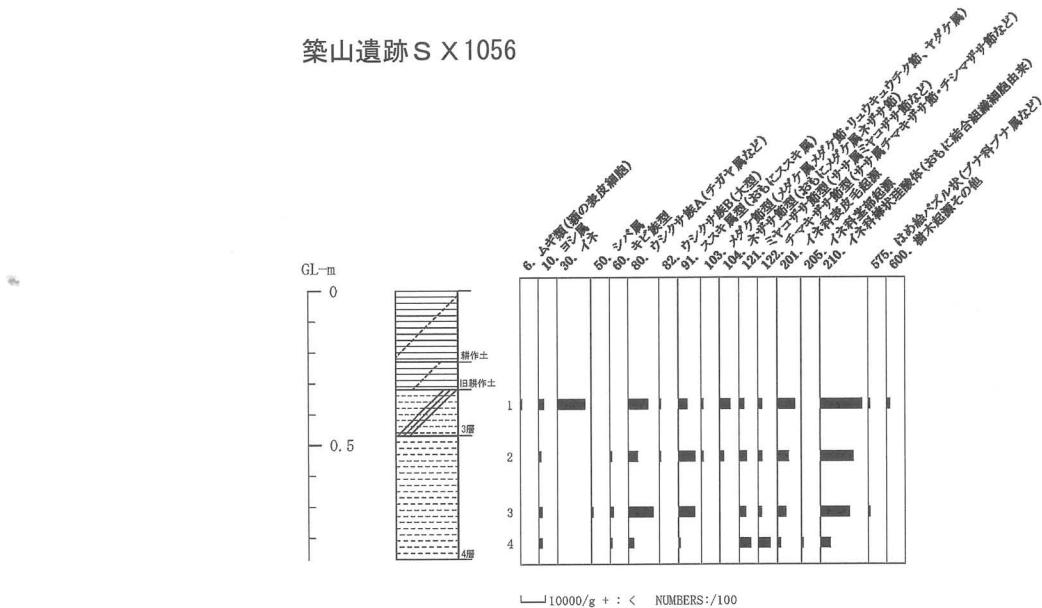


築山遺跡 SK1048



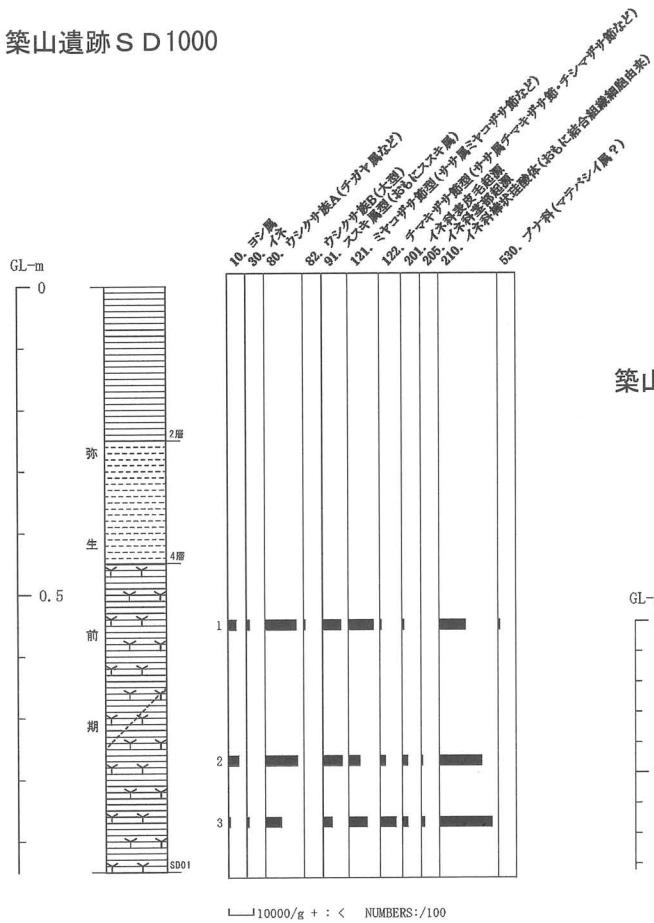
第48図 SK1048の花粉ダイアグラム

築山遺跡 S X 1056

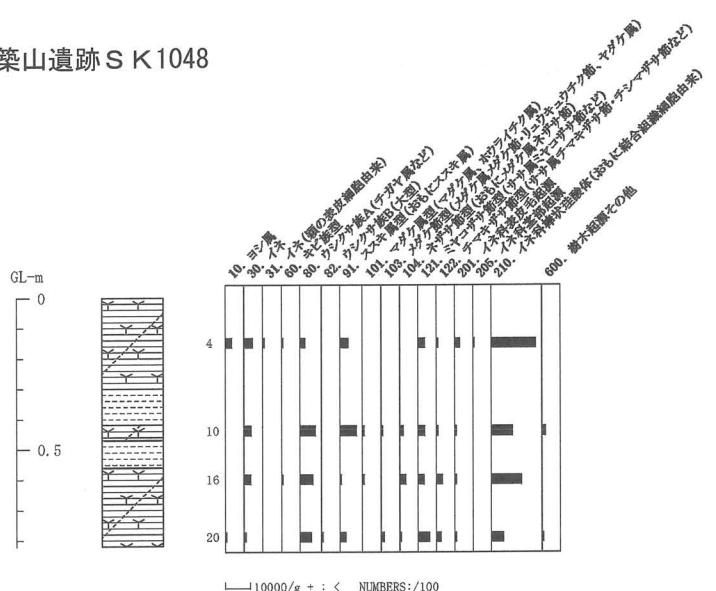


第49図 S X 1056のプラントオパールダイアグラム

築山遺跡 S D 1000



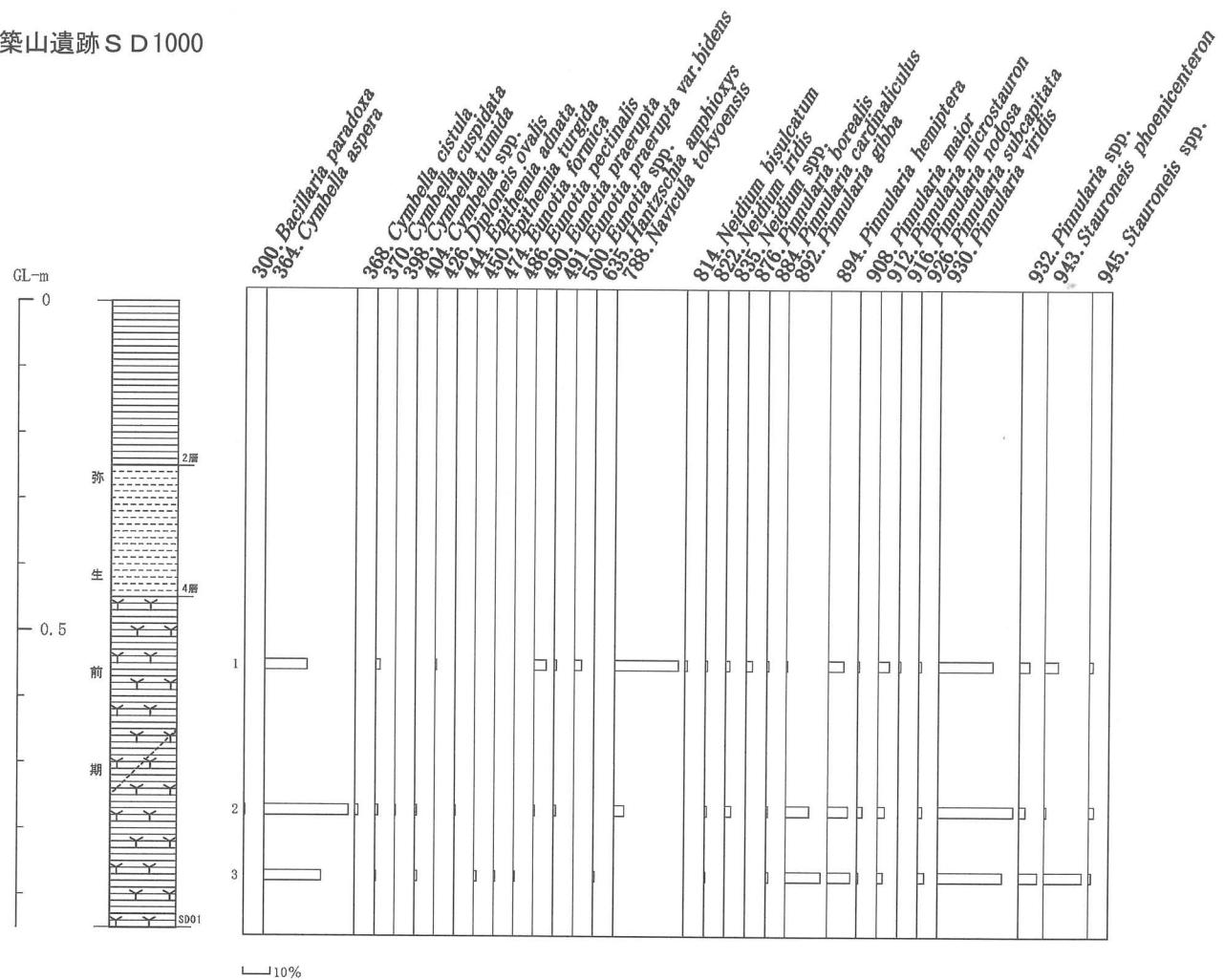
築山遺跡 S K 1048



第50図 S D 1000のプラントオパールダイアグラム

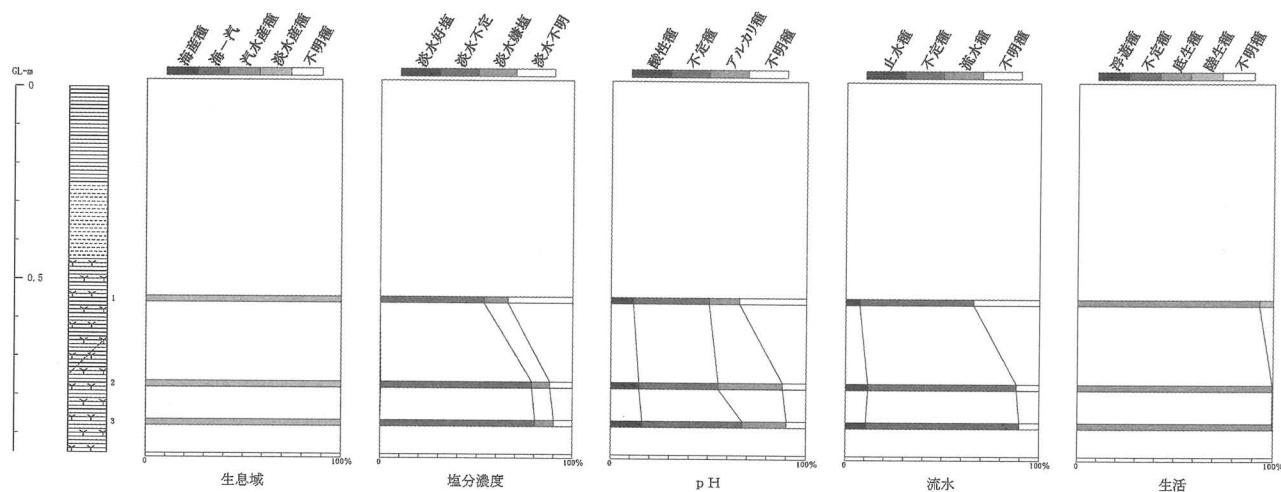
第51図 S K 1048のプラントオパールダイアグラム

築山遺跡 S D 1000



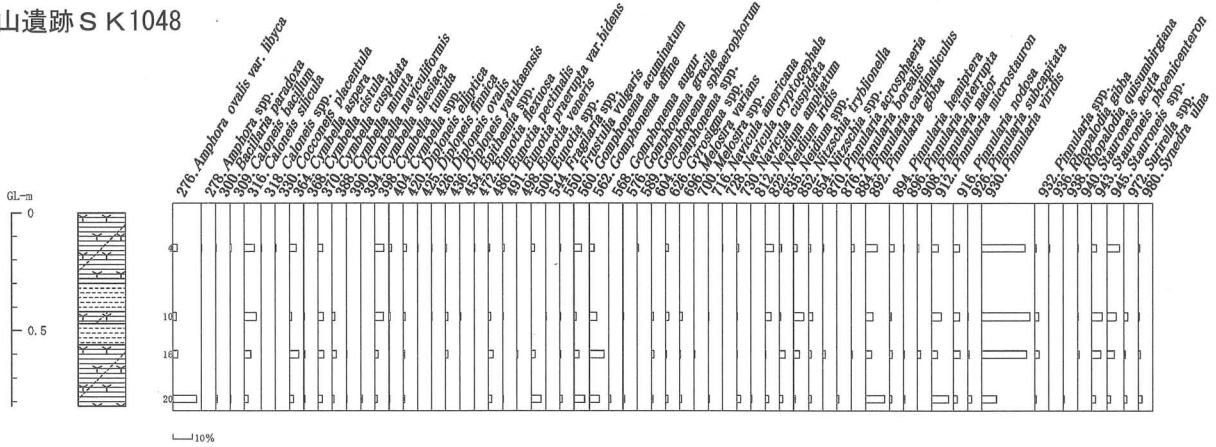
第52図 S D 1000の珪藻ダイアグラム

築山遺跡 S D 1000



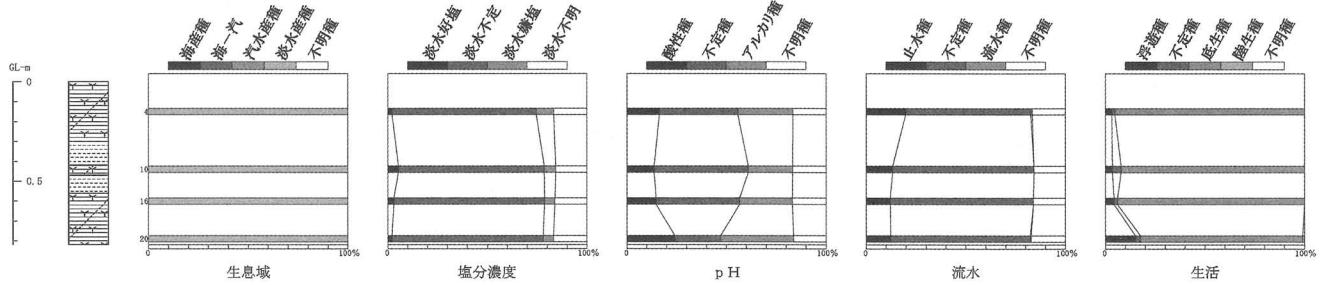
第53図 S D 1000の珪藻総合ダイアグラム

築山遺跡 SK1048



第54図 SK1048の珪藻ダイアグラム

築山遺跡 SK1048



第55図 SK1048の珪藻総合ダイアグラム

第3節 ま と め

今回報告した築山遺跡4区では中世の遺構・遺物を中心とし、縄文時代以降、古代に至る遺構・遺物も確認した。4区の遺構配置状況を概観すると、4D区に最も遺構が密集し4A区が最もまばらである。以下、時代毎にまとめを記す。

縄文時代

4B東区の北部にある溝S D1033とS X1034の2つの遺構が検出されているのみである。詳細な時期が判明する縄文土器は出土していないが、遺構が第1ハイカ上面に形成されているので、その時期は後期中葉以降であろう。

築山遺跡ではこれまで、平成14年度調査II区（遠藤ほか2004）および、その北に隣接した平成15年度調査1区（三原ほか2005）で、第2黒色土と第2ハイカ層が確認され、縄文時代後期初頭の中津式土器が石器とともに出土した。また、第1ハイカ層面からは縄文時代晚期からの突帯文土器が弥生時代前期の土器と供伴して石器と共に出土している。約50m南西に位置する平成19年度調査3区（本年度報告予定）の西端からは、第1ハイカ層面から縄文時代晚期中葉～弥生時代初頭の土器が石器とともに出土している。

弥生時代

約200mにわたって4区を縦断する南北溝S D1000と土坑1基（SK1037）がある。南北SD1000は弥生時代後期の溝であるが、周辺から同時期の遺構はみつからなかった。

古墳時代

4C区に古墳時代前期の縦板組の井戸SE1094と中期の溝SD1096があった。

今回報告した4区の南方に位置する2区（三原ほか2007）と5区（本書第4章）、および南西の3区（平成18・19年度調査、本年度報告予定）からは後期（6世紀後半から7世紀前半）の遺構・遺物がみつかっている。これらは破壊された古墳に関わると推測されるもので、4区とは様相が異なる。

古 代

古代の遺構として、4D区の斜行溝SD1123・SD1145、そして4B区南端から4C区にかけて点在していた6基の土坑（SK1067～1071・1080）を報告した。既報告の築山遺跡2区からは8世紀前半の須恵器骨蔵器1基、11号区画道路部の調査区からは8世紀後半の斜行溝（SD01）がみつかっているが、概して古代の遺構は希薄である。

中世

4区では、もっとも遺構と遺物の多い時期である。その前半期は平安時代末から鎌倉時代（12～14世紀）、後半期は室町時代（14～16世紀）にほぼ該当する。

前半期の遺構では、4D区で確認したL字状の溝S D1111およびそれと連結した土坑S K1110（13～14世紀）が注目される。溝S D1111からは舟形の形代が2点出土し、土師器の杯と小皿も一定量出土していて、祭祀的な様相をうかがうことができる。

後半期には4区全体にわたり井戸や水溜遺構があるほか、4D区では15世紀代の建物跡と柵跡を確認した。この時期の出土遺物量からみても、4D区は今回報告する調査区の中心となるであろう。

4区全体からは、総数130点の輸入陶磁器が出土した（白磁41点、青磁63点、青白磁2点、青花12点、褐釉黒釉など7点）。白磁には9～10世紀の製品が1点（第35図97）ある。これは伝世品の可能性があるが、出雲平野部では最も古い白磁である。12世紀の白磁と青磁はごく少なく、13世紀になると数が増える。14世紀のものがやや少ないようであるが、15世紀になると出土量がもっと多くなり、この地区が盛期をむかえたようである。17世紀の遺構は確認できなかつたが、肥前系の陶磁器が出土している。

出雲平野部での陶磁器出土遺跡は、1994年時点では16遺跡（西尾・守岡1994）、1999年時点では28遺跡（間野1999）が数えられている。そのうち、出雲平野中央にある蔵小路西遺跡（出雲市小山町・渡橋町）からは破片数で、青磁216点、白磁55点、褐釉陶器6点のほか国産陶磁器379点が出土している。輸入陶磁器は13～14世紀を中心とするようで、青磁の中には双魚文盤など優品を含む。これらの遺物や遺構の状況から、12～15世紀の蔵小路西遺跡は、「朝山家総領家」の居館跡と推定されている。

築山遺跡4区の輸入陶磁器類の出土量は、蔵小路西遺跡にはおよばないものの、出雲平野部では屈指の質と量ではある。当然、この地に勢力をはった塩冶氏との関係が問題となるが、それは未報告の築山遺跡3区・5区の報告を経た後に議論してみたい。

参考文献

第3章で用いた分類（用語を含む）及び編年観は基本的に下記の論文・報告書に依拠している。

弥生土器

松本岩雄 1992 「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年』一山陰・山陽編一 木耳社

須恵器

柳浦俊一 1980 「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古』第3号 松江考古談話会
大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会
大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 平田市教育委員会

古式土師器

赤澤秀則 1992 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会
寺澤 薫 1900 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

中世土師器

八峰 興 1997 「鳥取県における土師器皿の展開について」『立命館大学考古学論集』I 立命館大学論集刊行会
八峰 興 1998 「山陰における中世土器の変遷について—供膳具・煮炊具を中心として—」『中近世土器の基礎研究』XIII 日本中世土器研究会
「平安時代前期の土器様相—中国地方を中心に—」『第4回 山陰中世土器検討会資料』山陰中世土器検討会 2005
『出雲平野の中世土器検討会資料』1998
「山陰における中世の調理具」『第6回 山陰中世土器検討会資料』山陰中世土器検討会 2007
間野大丞 1999 『蔵小路西遺跡』一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会

陶磁器

「城館出土の貿易陶磁器—職豊前夜の西国大名と貿易—」『貿易陶磁研究集会 四国大会資料集』日本貿易陶磁研究会 2000
横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『研究論集』4 九州歴史資料館
西尾克己・守岡正司 1994 「常楽寺遺跡と庭反II遺跡の性格について—出雲西部出土の中世陶磁器を手掛りとして—」『湖陵町誌研究』3 湖陵町教育委員会
大橋康二 1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
乗岡 実 2000 「中世の備前焼甕(壺)の編年案」『第2回 中近世備前焼研究会資料』

中世（その他）

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
小野正敏編 2001 『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会

鉄滓

穴澤義功 2005 「製鉄関連遺物（分析資料）の考古学的観察」『茗ヶ原奥たら跡』林道宮本聖谷線開設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II 島根県出雲農林振興センター・出雲市教育委員会
天辰正義・穴澤義功・平井昭司・藤尾慎一郎 2005 『鉄関連遺物の分析評価に関する研究会報告—鉄関連

遺物の発掘・整理から分析調査・保存までー』 (社)日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学部「鉄の歴史ーその技術と文化ー」フォーラム 鉄関連遺物の分析評価研究グループ

その他

- 遠藤正樹・藤永照隆 2004 『寿昌寺遺跡・築山遺跡発掘調査報告書』出雲市築山土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 出雲市教育委員会
- 三原一将・米田美江子・藤永照隆 2005 『築山遺跡』I 県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 島根県出雲土木事務所・出雲市教育委員会
- 三原一将・米田美江子 2007 『築山遺跡』II 県道出雲三刀屋線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 島根県出雲県土整備事務所・出雲市教育委員会

遺物観察表の記載事項について

挿 図 番 号：本文の挿図番号に対応する。

出 土 地 点：地区名・グリッド名・遺構名・層位名の順で記した。

種 別・器 種：土器の種類・器種、不確定なものは部位を記した。土器以外のものは、素材・器種を記した。

計測値・残存率：実測図から測定した。残存率は全体分の、部位が記載してあるものはその部位の、比率である。

胎 土：胎土に含まれる砂粒子の大きさとその量、砂粒子の主な種類（目分量の多いものから順に）を記した。

焼 成：良好・やや良好・普通・やや不良・不良の5段階に分けて判断した。

色 調：素焼き系統の土器は褐色を、還元炎焼成の土器は灰色を基本として色調を判断した。

成形・調整・文様：遺物を正位置に置いた状態での、各位の上から下へ、底面は外縁から内縁へ特徴を記した。変化点には「・」で区切りをつけた。重複するものは「→」を使い「古→新」で表した。並列関係は「+」を用いた。「回転」と明記したものは、回転台・轆轤を利用したと考えられるものである。

「ナデ」とのみ記載したものは意識的な方向性を持たないもの、または方向が不明なもの。

「ケズリ (L R)」とはヘラケズリの方向が左から右を表したものである。

「ケズリ (D U)」とはヘラケズリの方向が下から上を表したものである。

ハケ目の単位が未記載のものは不明なものである。

鍛治関連遺物：椀形鍛治滓の（中）は500 g以下、（小）は250 g以下、（極小）は125 g以下のものをさす。

磁着度とは製鉄関連遺物分類用の「標準磁石」を用いて、6 mmを1単位として資料との反応の程度を数字で表したものである。

メタル度とは埋蔵文化財専用に整準された小型特殊金属探知機によって判定された金属鉄の残留の程度を示すもので、基準感度は次のものである。

H (○) は最高感度で、ごく小さな金属鉄が残留する。

M (◎) は標準感度で、Hの倍以上の金属鉄が残留する。

L (●) は低感度でMの倍以上の金属鉄が残留する。

特L (☆) はごく低感度でLの倍以上の大きな金属鉄が残留する。

錆化 (△) とは、かつて金属鉄が内包されていた資料でも既に錆化してしまったもの。

4区出土遺物観察表1

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm·g) 残存率	胎 土	焼成	色 調	成形・調整・文様	備 考
第11図 1	4B区E16 SX1034	縄文土器 深鉢口縁部	3×2.5角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄褐色	口端部:小さな刻目 外:やや粗いナデ 内:ナデ	第11図2・3と同一固体の可能性あり 後期中葉以降
第11図 2	4B区E16 SX1034	縄文土器 深鉢底部	底径 3~4	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	灰黄褐色	丸底 外:調整不明 内:ナデ	第11図1・3と同一固体の可能性あり 後期中葉以降
第11図 3	4B区E16 SX1034	縄文土器 深鉢胴部	10×7角	2mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)やや多く含む	普通	灰黄褐色	外:ナデ? 内:斜めナデ	第11図1・2と同一固体の可能性あり 後期中葉以降
第11図 4	4A区D29 SD1000 4層	弥生土器 甕頸部	5×4角	1~2mm大の砂粒子(石英・花崗岩など)含む	普通	灰黄褐色	外:ナデ+頸部屈曲部に工具痕あり・ハケ目(6本/5mm) 内:ナデ・ハケ目(4~5本/5mm)	如意形口縁 前期末
第11図 5	4A区B・C 20 SD1000 上面	弥生土器 甕胴部	5×2角	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外:黒褐色 内:灰黃色	外:ハケ目→ナデ・連続刺突文 内:ハケ目(6本/5mm)・ケズリ(DU)	中期後半
第11図 6	4B区B16 SD1000 中位	弥生土器 甕胴部	6×6角	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	浅黄色	外:タテハケ目→ヨコナデ・ タテハケ目(8本/1cm) 内:ヨコナデ・ヨコハケ目 (6本/1cm)	外面ともハケ目調整を重ねて細かい単位に見せかけている 中期後半
第11図 7	4A区B20 SD1000 上位	弥生土器 甕口縁部	口径 19.7 口縁部 1/5存	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄色	外:3条の浅いナデ状の凹線文・ヨコナデ 内:ヨコナデ	松本IV-2
第11図 8	4B区B7 SD1000 上位	弥生土器 甕口縁部	口径 16 口縁部 1/9存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	にぶい褐色	外:口縁上半(擬凹線→ナデ消し)・口縁下半(5条の擬凹線)・ヨコナデ 内:ヨコナデ・ケズリ(LR)	複合口縁 草田3
第12図 1	4C区B・C1 SE1094 底面	古式土師器 甕胴部	胴部最大径23 胴部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)多く含む	良好	黒褐色	外:ナデ・ハケ目 (10本/1cm) 内:ナデ	体部は球状で器壁は薄手・ 外面全体に煤付着 草田6~7
第12図 2	4C区C3 SD1096	土師器 甕口縁部	口径 14 口縁部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)やや多く含む	普通	灰白色	外:口端部(ナデ)・ナデ・ ハケ目→ナデ 内:ヨコナデ・ナデ・ケズリ(LR)	口端部は平坦面で口端内面直下には下からの強いナデにより沈線状となる・口縁部は若干膨らむ 布留中段階
第14図 6	4C区D5 SK1070	須恵器 甕胴部	5×6角	微砂粒子(石英など)若干含む	良好	灰色	外:平行タタキ目 内:同心円タタキ目	古代
第14図 1	4B区B14 SE1051 底面	土師器 甕上半部	口径 22.4 頸部 1/6存	1mm大の砂粒子(石英・角閃石・長石など)多く含む	やや不良	明褐灰色	外:調整不明 内:調整不明・ケズリ(RL)	古代~中世
第14図 2	4B区B14 SD1050	須恵器 皿底部	底径 13.6 底部 1/7存	1mm大の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外:調整不明・底部(ナデ・ ヘラ切り) 内:調整不明	9世紀
第14図 3	4B区B14 SD1050	須恵器 甕胴部	8×4.5角	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰色	外:平行タタキ目→等間隔にカギ目 内:凹凸著しい同心円タタキ目	古墳~古代
第14図 4	4B区B14 SD1050	土師器 甕口縁部	8×6.5角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)多く含む	やや不良	にぶい黄橙色	外:調整不明 内:調整不明・ケズリ(RL)	古墳~中世
第14図 7	4C区D4 SD1073 上面	須恵器 碗?胴部	6×3角	微砂粒子(石英・長石など)少量含む	良好	灰色	外:回転ヨコナデ→「十」字のヘラ記号 内:回転ヨコナデ	刻書は浅く施されその面はナデと同じような筋が観察される 7~8世紀
第14図 9	4D区B5 SD1123 中位	土師器 杯	口径 12.8 器高 3.6 底径 6.2 2/3存	1mm以下の砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄褐色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	内外面とも煤付着 10世紀
第14図10	4D区C4 SD1123 上半	土師器 杯口縁部	口径 16 口縁部 1/12存	微砂粒子(石英など)少量含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	15世紀
第14図11	4D区B5 SD1123 上半	土師器 杯底部	底径 7 底部 1/6存	微砂粒子(石英など)やや多く含む	普通	灰黄褐色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	14世紀
第14図12	4D区B5 SD1123 上位	土師器 杯底部	底径 6 底部 1/2存	微砂粒子(石英・角閃石など)及び若干の1.5mm大の砂粒子含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・強い回転ヨコナデ	中世
第14図13	4D区B5 SD1123 中位	土師器 杯底部	底径 6.2 底部 1/3存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	灰黄褐色	外:調整不明・底部(回転糸切り)→板状工具によるナデ 内:ナデ	内面に擦痕あり 内外面とも煤付着 古代~中世
第14図 5	4D区B8 SD1145 上面 + 中位	須恵器 高杯	口径 17 器高 13 底径 10.8 1/3存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	暗赤灰色	外:回転ヨコナデ→脚柱部(1条の凹線文+2条の凹線文) 内:回転ヨコナデ・ナデ・脚柱部(ナデ・回転ヨコナデ)	杯部外面にキズ痕あり 古代
第15図 1	4B区C9 SD1054 上面	須恵器 高台付杯 底部	底径 8.8 底部 1/5存	微砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外:回転ヨコナデ・高台貼り付け→回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ→ナデ	7世紀末~8世紀前半
第15図 2	4B区C9 SD1054	須恵器 壺口頸部	口径 9 口頸部 2/3存	1.5mm以下の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	良好	灰色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	内面に頸部と体部の接合痕あり
第15図 3	4B区C9 SD1054	須恵器 壺底部	底径 9.3 底部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰色	外:回転ヘラケズリ(RL)・回転ヨコナデ・底部(回転ヘラケズリ→高台貼り付け→外縁を回転ヨコナデ) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	古代

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g)	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
第15図4	4B区C9 SD1054	土師器 皿体部	4×3角	微砂粒子(石英など) 若干含み粉っぽい	良好	露胎:浅黄橙色	外:回転ヨコナデ・ナデ 内:回転ヨコナデ	外面とも丹塗り 8世紀
第15図5	4B区C11 SD1054	土師器 杯底部	底径 5.6 底部完形	微砂粒子(石英・長石など) 少量含む	良好	淡黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	9世紀
第21図1	4C区A1 SP1104 上位	瓦質土器 鍋上半部	口径 25 口縁部 1/15存	1mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	オリーブ黒色 断面:灰黄色	外:回転ヨコナデ・粗いナデ・ケズリ(RL)→粗いナデ 内:回転ヨコナデ・ナデ・ハケ目(5~15本/1cm)	第21図2と同一固体の可能性あり内湾する口縁部で口端部には平坦面あり頸部外面上に指痕あり外面に一部煤付着 12~14世紀
第21図2	4C区A1 SP1104 上位	瓦質土器 鍋胴部	頸部径 24 胴部上半 1/12存	1mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	オリーブ黒色 断面:灰黄色	外:粗いナデ 内:回転ヨコナデ・ハケ目(5~15本/1cm)→一部ナデ消し	第21図1と同一固体の可能性あり外面に煤付着 12~14世紀
第21図3	4D区B4 SX1131 3層	土師器 杯底部	底径 4.6 底部 1/8存	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	灰白色	外:回転ヨコナデ・底部調整不明 内:回転ヨコナデ	15~16世紀
第21図4	4D区C4 SX1131 3層	土師器 杯底部	底径 5 底部 1/8存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15~16世紀
第21図5	4D区C4 SX1131 上面	土師器 杯底部	底径 5.6 底部 1/4存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)若干含む	良好	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(調整不明) 内:回転ヨコナデ	15~16世紀
第21図6	4D区C5 SX1131 上位	土師器 底部	底径 6 底部 1/3	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(調整不明) 内:回転ヨコナデ	15~16世紀
第21図7	4D区B6 SB1132	土師器 杯底部	底径 5.4 底部 1/8存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15世紀
第21図8	4D区B6 SB1132 下半	土師器 皿口縁部	口径 12.4 口縁部 1/8存	微砂粒子(石英・長石・金雲母など)若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口縁部内面縁に煤付着 15世紀
第21図9	4D区B6 SB1132	土師器 小皿底部	底径 4.6 底部 1/4存	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など) 少量含む	良好	にぶい橙色	外:調整不明・底部(回転糸切り) 内:調整不明	15世紀
第21図10	4D区B6 SB1134	土師器 杯底部	底径 6.4 底部 1/5存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15世紀
第21図11	4D区B6 SB1134	土師器 小皿	底径 4.2 下半部 1/5存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	黄灰色	外:回転ヨコナデ・底部(調整不明) 内:回転ヨコナデ	14~15世紀
第21図12	4D区B7 SB1134 中位	土師器 小皿	口径 6.4 器高 1.15 底径 4 1/8存	微砂粒子(石英など) 少量含む	良好	灰黄褐色	外:回転ヨコナデ・底部(調整不明) 内:回転ヨコナデ	15世紀
第21図13	4D区B5 SP1147	青磁 碗底部	底径 5.8 底部 2/3存	緻密	良好	釉:オリーブ 灰色 露胎:灰白色	外:施釉・底部(疊付け部と高台内の一帯に施釉) 内:施釉	龍泉窯系碗 I類 器壁は厚手 13世紀
第21図14	4D区B5 SP1147	土師器 杯下半部	底径 6.3 下半部 1/3存	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	器壁に化粧塗りを施す底面には糸切り痕とともに平行する当て真痕あり 15世紀
第21図15	4D区B6 SP1148	土師器 杯下半部	底径 4.5 下半部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15~16世紀
第21図16	4D区B6 SP1148	土師器 小皿	口径 7 器高 2.3 底径 4 1/8存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	内面上半部の一部に煤付着 15~16世紀
第22図1	4C区B2 SK1084 上位+下位	土師器 杯	口径 11.2 器高 4.05 底径 4.5 体部 1/8存 底部完形	3mm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母・角閃石など)含む	良好	灰白色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	口端部に若干の平坦面あり 12世紀
第22図2	4C区B2 SK1084 中位	土師器 杯口縁部	口径 12.6 口縁部 1/6存	微砂粒子(石英など) 含む	良好	灰白色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	12世紀
第22図3	4C区B2 SK1084 中位	土師器 小皿上半部	口径 10.4 口縁部 1/7存	微砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)含む	普通	灰黄褐色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	内面に強いナデによる段あり 13世紀
第22図4	4C区B2 SK1084 上位	土師器 杯底部	底径 4.7 底部ほぼ完形	1~2mm大の砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)含む	普通	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:同心円ナデ	13世紀
第22図5	4C区B2 SK1084 上位	土師器 小皿	口径 7.3 器高 1.3 底径 5.3 1/5存	微砂粒子(長石・石英・赤色粒子・金雲母など)含む	普通	灰黄褐色 断面:にぶい 黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	器壁厚手で浅い 口径と底径の差が少ない 13世紀?
第22図6	4C区B2 SK1084 中位	土師器 小皿底部	底径 4.1 底部 1/3存	微砂粒子(石英・長石など) 少量含みやや 粉っぽい	良好	褐灰色~黒褐色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:調整不明	破面が丁寧に打ちかいたよう に丸みを帯びている 13世紀
第22図7	4C区C2 SK1092 中位	土師器 小皿底部	底径 3.4 底部 1/4存	微砂粒子(石英・長石など) 及び若干の2mm 大の砂粒子を含む	普通	黃灰色	外:調整不明・底部(回転糸切り) 内:調整不明	13~14世紀
第22図8	4C区C2 SK1092 上面	土師器 杯底部	底径 4.8 底部ほぼ完形	微砂粒子(石英・安山岩・金雲母など) 及び若干の4mm大の砂粒 子を含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:同心円ナデ	底部糸切りが切り離しのため器壁のナデによる粘土 盛り上がりが残存 13~14世紀

挿図番号	出土地点	種別 器 種	計測値(cm・g) 残存率	胎　土	焼成	色　調	成形・調整・文様	備　考
第22図9	4C区B1・2 SK1093 1層	土師器 小皿	口径 7.3 器高 1.8 底径 4.5 体部 1/7存 底部完形	微砂粒子(石英・長石など)及び1~2mm大の灰白色粘土を含む	普通	橙色～にぶい 橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ→ナデ取り	内底面のナデ取りは中央に2回の指ナデによるもの 12~13世紀
第22図10	4C区C2 SK1093 1'層	土師器 杯底部	底径 6.2 底部 1/2存	微砂粒子(長石など) 少量含む	普通	にぶい橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：同心円ナデ	内面は強いナデにより凹凸 が著しい 13世紀
第22図15	4D区B2 SK1110	土師器 杯	口径 11.8 器高 3.4 底径 7.6 ほぼ完形	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	良好	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ	外面に若干の煤付着 13~14世紀
第22図16	4D区B2 SK1110	土師器 杯下半部	底径 6.2 底部 2/3存	微砂粒子(石英・金雲母など)含む	良好	暗灰黄色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	SD1111と接合 厚底状の底部 13~14世紀
第22図17	4D区B2 SK1110	土師器 杯下半部	底径 6 底部 1/2存	微砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む	良好	外：淡黄色 内：浅黄色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・ナデ	厚底状の底部 13~14世紀
第22図18	4D区B3 SK1110	土師器 杯底部	底径 5.6 底部完形	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	良好	にぶい黄橙色	外：ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：同心円ナデ	古代～中世
第22図19	4D区B3 SK1110	土師器 杯底部	底径 5.6 底部完形	微砂粒子(石英・角閃石など)やや多く含む	良好	外：明褐色 内：にぶい黄橙色	外：ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：同心円ナデ	古代～中世
第22図20	4D区B2 SK1110 下半	土師器 小皿	口径 7.4 器高 1.75 底径 4.2 1/4存	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	良好	にぶい黄色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ	13~14世紀
第22図21	4D区B2 SK1110	土師器 小皿	口径 7.2 器高 1.6 底径 5.1 1/2存	微砂粒子(石英・金雲母など)含む	良好	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ	口縁部断面形態は三角形 厚底状の底部 13~14世紀
第22図22	4D区B2・3 SK1110	土師器 小皿	口径 7.2 器高 1.1 底径 4.6 体部 1/2存 底部完形	微砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む	良好	灰黄褐色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・ナデ	内底面に回転時にできた沈 線あり 厚底状の底部 13~14世紀
第22図23	4D区B2 SK1110	土師器 小皿	口径 6.8 器高 1.3 底径 5 1/2存	微砂粒子(石英・角閃石・長石など)含む	良好	浅黄色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	口縁端部外面を少し強くナ デて内湾ぎみにする 13~14世紀
第22図24	4D区B2 SK1110	青磁 碗体部	口径 17 口縁部 1/5存	緻密	良好	釉：灰オリーブ色 露胎：暗灰黄色	外：回転ヨコナデ→施釉 内：施釉	外面に若干の凹凸が観察さ れる 13世紀前半
第22図11	4C区D1 SE1100	土師器 杯底部	底径 7.6 底部 1/5存	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	灰白色	外：調整不明・底部(糸切り) 内：回転ヨコナデ	中世
第22図12	4C区D1 SE1100	中世須恵器 甕胴部	3.5×2角	1mm大の砂粒子(小豆色粒子など)含む	良好	灰白色	外：格子タタキ目 内：粗いハケ目(3本/9mm)	亀山系 13~14世紀
第23図1	4D区C2 SD1111 上位	土師器 杯	口径 11.9 器高 4.2 底径 6.1 完形	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)及び若干の3.5~8mm大的砂粒子含む	普通	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	見込み中央部分盛り上がる1 3~14世紀
第23図2	4D区C2 SD1111 中位	土師器 杯底部	底径 5.6 底部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・赤褐色粒子・金雲母など)やや少量含む	普通	外：にぶい黄 橙色 内：灰黄褐色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ	中世
第23図3	4D区C3 SD1111 中位	土師器 杯底部	底径 5 底部 1/3存	微砂粒子(石英・角閃石・金雲母など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	中世
第23図4	4D区C3 SD1111 下位	土師器 杯底部	底径 5 底部ほぼ完形	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：同心円ナデ	内外面とも煤付着 中世
第23図5	4D区C2 SD1111	土師器 杯底部	底径 6 底部 1/2存	微砂粒子(石英・角閃石・赤褐色粒子・金雲母など)含む	良好	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り→一部ナデ) 内：回転ヨコナデ	中世
第23図6	4D区C3 SD1111 中位	土師器 小皿	口径 7.9 器高 1.65 底径 5.2 完形	2mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	にぶい黄色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	薄手の体部・厚手の底部 13~14世紀
第23図7	4D区C3 SD1111 下位	土師器 小皿	口径 7.5 器高 1.8 底径 5.4 完形	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	器壁は厚手 (13~)14世紀
第23図8	4D区C3 SD1111 中位	土師器 小皿	口径 6.8 器高 2.15 底径 5 1/2存	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	外：にぶい黄色 内：灰黄色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	器壁は厚手 13~14世紀
第23図9	4D区C3 SD1111	中世須恵器 甕胴部	6×4.5角	1mmの大砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰色	外：格子タタキ目 内：横位のハケ目	亀山系 13~14世紀
第24図1	4A区B21 SE1025 最下層	須恵器 杯身下半部	底径 5.8 底部ほぼ完形	1mm以下の砂粒子(石英など)少量含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ・底部(切り離し→ナデ) 内：ナデ	若干丸底 7世紀
第24図2	4A区C・D21 SE1026 1層	土師器 小皿	口径 5.2 器高 1.2 底径 8 1/5存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ	15世紀
第24図3	4A区D21 SE1026 上面	土師器 杯下半部	底径 4 底部 2/3存	微砂粒子(石英など) 若干含みやや粉っぽい	良好	灰白色	外：回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	器壁は薄手 14世紀

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎 土	焼成	色 調	成形・調整・文様	備 考
第24図 4	4C区D3 SE1083 2層	土師器 杯底部	底径 7.4 底部 1/5存	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	浅黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:同心円ナデ	中世
第24図 5	4D区C-D2 SE1116 2層	土師器 杯底部	底径 6.4 底部 1/4存	微砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	にぶい黄色	外:ナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・ナデ	中世
第24図12	4D区D3 SE1117 2層	土師器 杯底部	底径 4.6 底部 1/2存	微砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・ナデ	中世
第24図14	4D区E2-3 SE1119 1層	土師器 杯底部	底径 11 底部 1/10存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄褐色	外:ナデ・底部(ナデ) 内:ナデ	古代～中世
第24図13	4D区E4 SE1122 3層	土師器 杯底部	底径 6.6 底部 1/2存	1.5mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	にぶい橙色	外:調整不明 内:調整不明	中世
第24図15	4D区C7 SE1141 4層	土師器 杯口縁部	4×3角	微砂粒子(石英・角閃石など)含む	良好	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	15世紀
第24図16	4D区C7 SE1141 1層下植物質ブロック	土師器 小皿口縁部	口径 7.2 口縁部 1/8存	2mm以下の砂粒子(石英など)含む	普通	灰黄色	外:調整不明 内:調整不明	手捏ね? 14～15世紀
第25図 1	4D区C9 SE1146 中位	土師器 甕口縁部	4×4角	1mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む	やや不良	灰黄色	外:ナデ 内:ナデ	古墳～古代
第25図 2	4D区C9 SE1146 中位	偏前焼 擂鉢底部	底径 17.8 底部 1/7存	2mm大の砂粒子(石英・赤橙色粒子など)含む	普通	外:暗灰黄色 内:灰色	外:ナデ・底部(ナデ) 内:ナデ→擂目(7条単位)	内面は使い込みによる磨耗 15～16世紀
第26図 2	4B区C14 SD1047 中位	土師器 小皿	口径 8 器高 1.7 底径4.6 1/2存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	良好	灰白色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	体部と底部の境目に強いナデによるくびれあり 14～15世紀
第26図 3	4B区C14 SD1047	土師質土器 擂鉢口縁部	口径 23.5 口縁部 1/14存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)若干含む	普通	灰白色	外:ナデ・粗いハケ目(4本/1cm) 内:ハケ目または擂目→上部はナデ	口縁端部に平坦面あり(粘土の盛り上がりにより中央は凹む) 14～15世紀
第26図 4	4B区C14 SD1047 下位	青花 皿底部	底径 7.9 底部 1/2存	緻密	良好	釉:青みかかった灰白色 露胎:灰白色 文:青灰色～暗青灰色	外:草花文+2重圈線描寫→施釉・底部(施釉→墨付)は釉葉かきどる 内:龍文+2重圈線描寫→施釉	削り出し高台 青花皿E類・景德鎮 16世紀
第26図 5	4C区A2 SD1090 1層	土師器 杯口縁部	口径 14.1 口縁部 1/10存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい褐色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	内面には2回の強いナデにより凹みが観察される 12世紀?
第26図 6	4C区C1 SD1098	土師器 杯底部	底径 5.8 底部 1/2存	若干の1mm大の砂粒子(石英など)含み粉っぽく緻密	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	底部は円盤作り 15世紀
第26図 7	4C区C1 SD1098	瓦質土器 鍋口縁部	口径 30.8 口縁部 1/10存	微砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	灰白色	外:ヨコナデ・ケズリ(RL) 内:ヨコナデ	口縁端部に平坦面あり 14～15世紀
第26図 8	4C区C1 SD1098	白磁 皿体部	口径 12.4 口縁部 1/9存	緻密	良好	釉:灰オリー ブ色 露胎:灰白色	外:施釉・下部露胎 内:施釉	体部中央に稜線あり 15～16世紀
第26図 9	4C区B1 SD1098	偏前焼 擂鉢下部	底径 12.8 底部縁辺 1/3存	2mm以下の砂粒子(赤褐色粒子・石英・長石など)含む	良好	赤褐色～黒色	外:ヨコナデ・底部(未調整) 内:ナデ→擂目(単位7本)	内面は使い込んでかなり磨滅している外面体部下に粘土痕観察される 14～15世紀
第26図10	4C区B1 SD1098	土師質土器 擂鉢胴部	10×4.5角	6mm以下の砂粒子(石英・長石など)少量含む	普通	灰白色～明褐 灰色	外:ハケ目→ナデ 内:ナデ→粗い擂目(6本/1cm)	14～15世紀
第26図11	4D区C4 SD1107	土師器 杯下半部	底径 5.6 底部 1/5存	2mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	灰黄褐色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り?) 内:回転ヨコナデ	14～15世紀
第26図12	4D区C3 SD1107	土師器 杯下半部	底径 5.2 底部 1/4存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい褐色	外:回転ヨコナデ・底部(調整不明) 内:回転ヨコナデ	体部と底部の境が不明瞭 15世紀
第26図13	4D区C4 SD1107	土師器 小皿 体部上半	口径 7.8 上半部 1/7存	1mm大の砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む	普通	浅黄色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口縁端部外面を強くナデて直立にする 15世紀
第26図14	4D区B3 SD1113	土師器 小皿	口径 7.4 器高 1.65 底径 3.6 完形	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	良好	浅黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ→丁寧なナデ	薄手の体部・厚手の底部 13～14世紀
第26図15	4D区B3 SD1113	土師器 杯底部	底径 6.1 底部ほぼ完形	2mm大の砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:同心円ナデ	内面煤付着 13～14世紀
第26図16	4D区B2 SD1106	中世須恵器 甕胸部	12×8角	1mm大の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外:格子タタキ目 内:横位のハケ目→縦位のナデ	龜山系 13～14世紀
第27図 1	4D区D3 SD1120 1層	土師器 杯	口径 10.8 器高 2.5 底径5.3 1/2存	微砂粒子若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	体部は浅い 15世紀
第27図 2	4D区D3 SD1120 2層	土師器 杯下半部	底径 5.8 底部完形	1mm以下の砂粒子(石英・赤橙色粒子など)少量含む	良好	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	立ち上がりが広がる 15世紀

揮図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎 土	焼成	色 調	成形・調整・文様	備 考
第27図 3	4D区C8 SD1120 2層	土師器 杯底部	底径 6.6 底部 1/5存	微砂粒子(石英・金雲母など)少量含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・丁寧なナデ	15世紀
第27図 4	4D区D6 SD1120 2層	土師器 杯底部	底径 5.4 底部 1/5存	微砂粒子(石英など) 少量含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(調整不明) 内:調整不明	15世紀
第27図 5	4D区D4 SD1120 1層	土師器 杯底部	底径 4.8 底部完形	微砂粒子(石英・長石など) 少量含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:同心円ナデ	高台状の底部 15世紀
第27図 6	4D区D3 SD1120 2層	土師器 杯底部	底径 5.4 底部ほぼ完形	1mm以下の砂粒子(石英・長石など) 少量含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:同心円ナデ	15世紀
第27図 7	4D区D4 SD1120 1層	土師器 杯底部	底径 5.8 底部 1/3存	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など) 少量含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り→平行条線の残るナデ) 内:調整不明	15世紀
第27図 8	4D区D6 SD1120 2層	土師器 杯下半部	底径 6 底部 1/2存	1mm大の砂粒子(石英など) 少量含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	外面とも煤付着 15~16世紀
第27図 9	4D区D3 SD1120 1層	土師器 杯	口径 12.4 器高 2.7 底径 6 完形	微砂粒子(石英・金雲母など) 少量含む	良好	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(ナデ) 内:回転ヨコナデ	京都系手づくね土器模倣品 15~16世紀
第27図10	4D区C8 SD1120 上位	土師器 小皿底部	底径 4 底部 1/2存	微砂粒子(石英・角閃石など) 少量含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15世紀
第27図11	4D区D5 SD1120 1層	土師器 小皿	口径 7.8 器高 1.8 底径 4 1/5存	微砂粒子(石英・角閃石など) 少量含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	体部下半部にナデによるくびれ 口縁部に1条の沈線 14世紀
第27図12	4D区D3 SD1120 1層	土師器 小皿	口径 7.2 器高 2.35 底径 3.8 1/4存	微砂粒子(石英など) 少量含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(ナデ) 内:回転ヨコナデ	体部にキズ痕 15世紀
第27図13	4D区D7 SD1120 2層	土師器 小皿	口径 7 器高 2.1 底径 4 1/5存	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15世紀
第27図14	4D区D3 SD1120 1層	土師器 小皿	口径 7 器高 2 底径 4 1/8存	微砂粒子(石英・長石など) 若干含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(調整不明) 内:回転ヨコナデ	15世紀
第27図15	4D区D3 SD1120 1・2層	土師質土器 脚付碗	口径 16.5 器高 4.8 底部 11.2 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など) 少量含む	良好	浅黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り)→脚部貼付(剥落痕あり) 内:回転ヨコナデ・回転ヨコナデ→ナデ	脚はおそらく3ヵ所
第27図16	4D区D3 SD1120	土師質土器 擂鉢口縁部	8.5×7.5角	1mm大の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外:ナデ・ハケ目(5本/1cm) 内:ハケ目による擂目(5本/1cm)	外面に煤付着 13~14世紀
第27図17	4D区D・E2 SD1120 1層	土師質土器 擂鉢体部	6.5×4.5角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	にぶい黄橙色	外:ハケ目(7本/1cm) 内:擂目(5~8本/5mm)	中世
第27図18	4D区D8 SD1120 上位	白磁 皿体部	3×2.5角	緻密	良好	釉:灰白 露胎:明オリーブ灰色	外:回転ヨコナデ→施釉・露胎 内:施釉	中世
第27図19	4D区D6 SD1120 1層	青磁 碗下半部	底径 4.6 体部下位 1/8存	緻密	良好	釉:オリーブ灰色 露胎:灰色	外:線描きの蓮弁文→施釉・底部(施釉) 内:施釉	龍泉窯系 15世紀
第27図20	4D区D4 SD1120 1・2層	青磁 皿底部	底径 6 底部 1/4存	緻密	良好	釉:オリーブ灰色 露胎:灰色	外:施釉・底部(高台内露胎) 内:2条の圈線→施釉	龍泉窯系 15世紀
第27図21	4D区D6 SD1120 4層	青磁 皿体部	口径 12 体部 1/8存	緻密	良好	釉:オリーブ灰色 露胎:灰白色	外:施釉 内:施釉	龍泉窯系 15世紀
第27図22	4D区D・E2 SD1120	瓷器系陶器 高台付こね鉢 体部下半部	底径 13 体部下半 1/8存	6mm以下の砂粒子(石英など)含む	良好	にぶい赤褐色	外:ナデ・ケズリ・ナデ・底部(ナデ) 内:回転ヨコナデ	内面は使用のため磨滅 13~14世紀
第27図23	4D区D4 SD1120	瓷器系陶器 壺胴部	胴部最大径12.7 胴部 1/9存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	外: 暗赤褐色 内: 黄灰色 釉:オリーブ灰色	外: 灰釉がかかるため調整不明 内: 回転ヨコナデ	中世
第27図24	4D区D2・3 SD1120 6層	陶器 壺胴部	6.5×6角	微砂粒子(石英・長石など) 若干含む	良好	灰色	外:ナデ 内:ナデ	割れ口に漆付着 (漆つきの跡) 中世
第27図25	4D区B・C8 SD1120 上半	朝鮮王朝陶器 粉青沙器皿 底部	底径 4 底部 1/3存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	釉:灰白色 露胎:にぶい 橙色	外:施釉 内:施釉	見込みに砂目積痕あり 16世紀
第27図26	4D区C8 SD1120 上位	須恵器 蓋杯の蓋体部	体部 1/6存	微砂粒子(石英など) 少量含む	良好	灰色	外:回転ヨコナデ・回転ヘラ ケズリ(LR) 内:回転ヨコナデ	輪状つまみの痕跡 7世紀末~8世紀前葉
第30図 1	4D区B8 SD1144 上面	土師器 杯下半部	底径 4.9 底部完形	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄色	外:調整不明・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	11~12世紀
第30図 2	4D区C・D6 SD1144 C・D3 2・6層	中世須恵器 壺胴部	21×11角	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外:格子タタキ目 内:ハケ目(4本/1cm)	12~13世紀

掲図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎 土	焼成	色 調	成形・調整・文様	備 考
第30図3	4D区B8 SD1144	中国産褐釉系 陶器 四耳壺? 上半部	口径 14 口縁部 1/4存	密	良好	オリーブ黒色	外：回転ヨコナデ→1条の沈 線 内：回転ヨコナデ	口縁部は横に引き出し平坦 面をもつ 12~13世紀
第31図1	4C区B2 SX1077	土師器 杯口縁部	4×3.5角	1mm大の砂粒子(石英・ 赤褐色粒子・角閃石 など)含む	普通	にぶい橙色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	玉緑状の口縁端部(白磁の影 響) 12世紀?
第31図2	4C区C2 SX1077 上半	土師器 柱状高台部	底径 6 脚柱径 3.5 底部縁辺部 1/2存	微砂粒子(石英・角閃 石・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：回転ナデ・底部(糸切り) 内：調整不明	中央に焼成前穿孔(末貫通) あり。布目状の当て具でね じりつけた感じ 12~13世紀
第31図3	4C区C2 SX1077 上半	土師器 鍋口縁部	口径 23 口縁部1/14存	1~2mm大の砂粒子 (石英など)含む	普通	灰白色	外：ナデ 内：ナデ	口唇部は内傾ぎみ 12世紀~
第31図4	4D区B2 SX1109	土師器 杯底部	底径 5.4 底部完形	3mm以下の砂粒子(石 英・角閃石・金雲母など) 含む	普通	灰黄色	外：回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内：回転ヨコナデ	見込み中央部分盛り上がる 14世紀
第31図5	4D区B3 SX1109 上面	土師器 小皿底部	底径 4 底部ほぼ完形	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外：回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内：回転ヨコナデ	見込み中央部分盛り上がる 12世紀
第31図6	4D区C3 SX1109	土師器 小皿底部	底径 4 底部ほぼ完形	1.5mm以下の砂粒子 (石英・長石・赤褐色 粒子など)含む	普通	にぶい赤褐色	外：回転ヨコナデ・底部 (回転糸切り) 内：回転ヨコナデ	見込み部分は強い回転ヨコ ナデによりカキ目状に 中世
第32図1	4A区B29 3層	弥生土器 壺胴部	6.5×4.5角	1~3mm大の砂粒子 (石英・花崗岩など) 含む	普通	灰黄褐色~に ぶい褐色	外：ナデ→3条のヘラ描沈線 文・3段のヘラ描羽状文 内：ナデ	松本I-2
第32図2	4A区C28 3層	弥生土器 壺胴部	4.5×4角	1~2mm大の砂粒子 (花崗岩・石英など) やや多く含む	普通	浅黄色	外：ナデ→2条のヘラ描沈線 文・4段のヘラ描羽状文 内：ミガキ	松本I-2
第32図3	4A区B29 3層	弥生土器 壺胴部	4.5×2.5角	1.5mm大の砂粒子(花 崗岩・石英・長石など) 含む	普通	にぶい黄色	外：ミガキ→2段以上のヘラ 描羽状文 内：ミガキ	松本I-2
第32図4	4A区C23 3層	弥生土器 壺胴部	3×2.5角	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	灰黄色	外：ナデ→2条の刺突文(先 端の丸い棒状工具による) 内：ナデ	弥生中期
第32図5	4D区B7 2層	弥生土器 壺胴部	9×5角	2mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	にぶい黄色	外：2条の凹線文・刺突文・ハケ 目(12本/1cm)・3条の沈線文 内：ナデ	松本IV-2
第32図6	4B区C15 3層	弥生土器 甕口縁部	2.5×2角	1~3mm大の砂粒子 (石英・花崗岩など) 多く含む	普通	にぶい橙色	外：ナデ→刻目・ナデ押さ え・ナデまたはハケ目 内：ナデ	口唇部下端が引き出されて いる 弥生前期前半
第32図7	4B区C16 3層	弥生土器 甕口縁部	3.5×2.5角	2mm大の砂粒子(安山 岩・石英など)やや多 く含む	普通	灰黄褐色	口唇部：刻目 外：調整不明 内：調整不明	口唇部は断面矩形 弥生前期
第32図8	4A区B20 2層	弥生土器 把手	現存長 6 最大径 1.9	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	浅黄橙色	ナデ	弥生中期~後期
第32図9	4D区B4 2層	弥生土器 高杯の脚部	接合部径 3.9 接合部完形	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石など)含む	普通	褐灰色	外：丁寧なナデ 内：坏部(丁寧なナデ)・脚部 (ケズリ(RL-DU))	円盤充填法 2次使用(?)により破面全体 が丸く磨滅 弥生後期前半
第32図10	4B区C11 2・3層	弥生土器 高杯の脚部	接合部径 3.9 脚柱部 1/2存	1mm大の砂粒子(石英・ 長石・角閃石など)や や多く含む	普通	灰白色	外：タテハケ目(6本/5mm) 内：ケズリ(RL)	円盤充填法 弥生後期~古墳初頭
第32図11	4A区D28 3層	弥生土器 底部	底径 6.4 底部 1/3存	1mm大の砂粒子(石英・ 長石・花崗岩など)や や多く含む	普通	にぶい黄橙色	外：ナデ・底部(ナデ) 内：ナデ	厚手の平底 弥生前期末~中期初頭
第32図12	4A区A23 2・3層	弥生土器 底部	底径 4.7 底部完形	1mm大の砂粒子(石英・ 長石など)多く含む	普通	にぶい黄橙色	外：タテミガキ・底部(ナデ) 内：ナデ	厚手の平底 弥生前期末~中期前半
第32図13	4B区E18 3層	弥生土器 底部	底径 5 底部 1/5存	微砂粒子(石英・長石 など)含む	普通	外：灰黄色 内：黄灰色	外：ナデ・底部(ナデ) 内：ナデ+指圧痕	外面の体下部から底部に煤 付着 底面に黒斑 弥生中期中葉
第32図14	4A区B23 2層	弥生土器 底部	底径 6.4 底部 1/2存	1mm大の砂粒子(石英・ 長石など)含む	普通	浅黄色	外：タテミガキ?・底部(ナデ) 内：ナデ	厚手の平底 弥生中期前半
第32図15	4D区B2 2層	須恵器 杯身口縁部	口径 10.6 最大径 12 蓋受径 10.8 立ち上がりの高さ0.35 口縁部 1/8存	微砂粒子(石英・長石 など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	出雲6A期(古墳末)
第32図16	4B区C19 2層	須恵器 杯蓋	つまみ径 1.8 つまみ高 0.8 最大径 10.6 身受径 9.6 受部長 0.5 1/6存	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	灰色	外：つまみ貼り付け→回転 ヨコナデ・回転ヘラケズリ(L R)・回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	宝珠状つまみ かえしは欠損 全体的に風化著しい 7世紀前半
第32図17	4C区B1 3層	須恵器 杯蓋口縁部	口径 13 最大径 14.2 口縁部 1/7存	微砂粒子(石英・長石 など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	かえりあり 7世紀
第32図18	4B区B15 3層	須恵器 杯蓋	口径 8.4 器高 2.9 立ち上がり高0.25 最大径 10.6 身受部径 9.4 受部長 0.6 1/6存	微砂粒子(石英・長石 など)含む	良好	灰色	外：回転ヘラケズリ→ナデ? 回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ・ナデ	大谷蓋杯C2型 出雲6B期(7世紀)

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎　土	焼成	色　調	成形・調整・文様	備　考
第32図19	4B区E15 1層	須恵器 杯蓋天井部	つまみ径 2.6 5.5×2角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ・回転 ヘラケズリ(RL)・(LR) 内：ナデ	擬宝珠状つまみ 8世紀
第32図20	4D区B8 2層	須恵器 壺底部	底径 4.4 底部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヘラケズリ(RL)・ 底面(ケズリ) 内：回転ヨコナデ	内面に自然釉 古墳後期後葉
第32図21	4C区C4 2層	須恵器 杯下半部	底径 6 底部 1/7存	砂粒子ほとんど含ま ず	良好	黄灰色	外：回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内：回転ヨコナデ・ナデ	8~9世紀
第32図22	4C区C4 3層	須恵器 杯蓋	口径 19 1/4存	2mm以下の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ・回転ヘラ ケズリ→1条の沈線・2条の細 い沈線・回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ・ナデ	外面天井部につまみ剥落痕 あり 口唇部はあまり垂下しない 9世紀
第32図23	4A区C29 3層	須恵器 杯蓋	口径 12.6 1/6存	微砂粒子(長石・石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヘラケズリ・回転 ヨコナデ(口縁部は強いナ デにより凹部あり) 内：回転ヨコナデ・ナデ	外面天井部につまみ 剥落痕あり 垂下口縁部 8世紀
第32図24	4B区D7 1層	須恵器 杯蓋天井部	つまみ径 5 つまみ部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：つまみ貼付→回転ヨコ ナデ・回転ヘラケズリ 内：同心円ナデ?	輪状つまみ 転用硯(内面はツルツルして おり調整は不明瞭) 8世紀
第32図25	4D区E5 2層	須恵器 杯蓋天井部	つまみ径 5 1/4存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：つまみ貼付→ナデ・回転 ヨコナデ・回転ヘラケズリ(LR) 内：ナデ	輪状つまみ 柳浦3(8世紀)
第32図26	4B区C8 3層	須恵器 高台付杯 底部	底径 8 底部 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り→高台貼付→回転 ヨコナデ) 内：回転ヨコナデ・同心円ナデ	転用硯(見込み部分がツルツ ルしている) 8世紀
第32図27	4A区B25 2層	須恵器 高台付杯	口径 12.9 器高 4.6 底径 8.1 1/4存	微砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰白色	外：回転ヨコナデ・底部(静 止糸切り→高台貼付→回転ヨ コナデ)・置付部(ナデ) 内：回転ヨコナデ	8世紀
第32図28	4D区C2 3層	須恵器 高台付杯 下半部	底径 7.6 底部ほぼ完形	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ・底部 (回転ヨコナデ) 内：回転ヨコナデ・ナデ	貼付高台 柳浦2(7世紀末~8世紀前葉)
第32図29	4B区D10 3層	須恵器 高杯接合 部付近	接合部径 5 杯底部→筒部 1/3存	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ 内：ナデ・脚柱部(回転ヨコ ナデ)	3方向スカシ 7世紀
第32図30	4C区B1 3層	須恵器 長脚無蓋 高杯	接合部径 3.9 脚柱部 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ・ナデ 内：ナデ→研磨・脚柱部(ナ デ・ヨコナデ)	転用硯 スカシは2ヵ所確認(おそらく3方向スカシ) スカシは切れ込み状だが貫通 7世紀
第32図31	4B区C9 3層	須恵器 長頸壺頸部	接合部径 5 頸部 1/4存	2mm大の砂粒子(石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	外面に自然釉 8世紀
第32図32	4C区B3、 C3-4,D3-4 2・3層	須恵器 壺胴部	胴部最大径 24.2 胴部 1/3存	微砂粒子(長石・石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ・粗雑な 回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	外面上部に強いナデによる 凹みがみられる 内面は強いナデによる凹凸 が著しい 古代
第32図33	4A区B24・ 25 2・3層	須恵器 壺肩部	肩部径 20.3 肩部 1/7存	1mm大の砂粒子(長石・ 石英など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	古代
第32図34	4A区D20 3層	須恵器 高台付皿 底部	底径 15.1 底部 1/8存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：高台貼付→回転ヨコナ デ・ヘラ切り 内：ナデ	8世紀
第32図35	4D区B7 2層	須恵器 高杯脚部	接合部径 5 脚部 1/3存	2mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ 内：ナデ・脚柱部(回転ヨコ ナデ)	2方向長方形スカシ 大谷5期(古墳後期後葉)
第32図36	4D区D2 2層	須恵器 杯蓋	口径 13 口縁部 1/11存	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	垂下口縁 柳浦4(8~9世紀)
第32図37	4B区D10 3層	須恵器 壺胴部	頸部径 13.8 胸部最大径18 胸部 1/4存	微砂粒子(石英など) 及び2mm大の砂粒子 若干含む	良好	自然釉：暗灰色 露胎：灰色	外：回転ヨコナデ・縦方向のタタキ→ 回転ヨコナデ・タタキ→回転ヨコナデ・ タタキ→コヘラミガキ・タタキ 内：回転ヨコナデ・同心円タタキ	胸部外面上部は自然釉をか きるようにヨコナデが施 される 8~9世紀
第33図38	4D区D5 2層	須恵器 甕胴部	6.5×6角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰色	外：平行タタキ目 内：同心円タタキ目	古墳時代
第33図39	4C区B1 3層	中世須恵器 甕口縁部	4×3角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	灰色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	丸い口唇部 短い二重口縁 12~14世紀
第33図40	4C区C5 2層	中世須恵器 甕肩部	7×9角	微砂粒子(石英・長石など)含む	良好	自然釉：オリ ブ灰色 露胎：灰白色	外：スタンプ文及び叩き目 文・調整不明 内：粗雑なナデ+指押さえ・ ヨコナデ+工具によるナデ	12~15世紀
第33図41	4D区C-D 2・3層	中世須恵器 甕胴部	11×7.5角	1mm以下の砂粒子(石英など)若干含む	良好	灰色	外：格子タタキ目 内：平行タタキ目→ナナメ ハケ目+ナデ	龜山系 13~14世紀
第33図42	4D区C2 2・3層	中世須恵器 甕胴部	23×8.5角	1mm以下の砂粒子(石英など)若干含む	良好	灰色	外：格子タタキ目 内：斜め方向のハケ目→上半 ナデ+下半縦方向のハケ目	龜山系 13~14世紀
第33図43	4C区D2 3層	土師器 高杯林部	接合部径 3.15 杯部 1/4存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	露胎：にぶい 黄橙色 丹色：橙色	外：タテハケ目 内：ナデ	内外面とも丹塗り円盤充填 法(円盤の下部に竹管状の刺 突痕) 古墳時代前期~中期
第33図44	4D区C5 2層	土師器 杯底部	底径 4.4 底部ほぼ完形	微砂粒子(石英・長石・ 角閃石など)含む	良好	灰黄色	外：回転ヨコナデ・底部 (回転糸切り) 内：調整不明	底部は高台状で厚い高台中 程にヘラ描き沈線? 10~11世紀

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎 土	焼成	色 調	成形・調整・文様	備 考
第33図45	4D区D2 3層	土師器 杯底部	底径 5.8 底部ほぼ完形	2mm以下の砂粒子(石英・橙褐色粒子・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:同心円ナデ	底部は高台状で厚手 14世紀
第33図46	4D区B5 2層	土師器 杯	口径 11 器高 4 底径 6.4 1/4存	微砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)やや多く含む	普通	灰白色	外:強い回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:強い回転ヨコナデ・調整不明	14世紀
第33図47	4D区B5 2層	土師器 杯	口径 11.6 器高 4.4 底径 4.6 1/4存	3mm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母など)若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	底部から体部への立ち上がり は強いナデによりくびれる 14世紀
第33図48	4D区B3 3層	土師器 杯	口径 12.4 器高 4 底径 6 体部 1/3存 底部完形	1mm以下の砂粒子(石英・橙褐色粒子・角閃石・金雲母など)含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	14~15世紀
第33図49	4D区B8 2層	土師器 杯	口径 12.3 器高 3.3 底径 6.3 体部 1/2存 底部完形	1mm以下の砂粒子(石英・長石・橙褐色粒子など)少量含む	良好	にぶい黄橙色	外:強い回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・ナデ	14~15世紀
第33図50	4D区B8 2層	土師器 杯	口径 10.8 器高 2.8 底径 5 体部 2/3存 底部完形	1mm以下の砂粒子(石英など)及び4mmの大砂粒子若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	口唇部に平坦面あり 15世紀
第33図51	4D区B3 3層	土師器 杯上半部	口径 12 上半部 1/3存	微砂粒子(石英・赤褐色粒子・角閃石など)若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	15世紀
第33図52	4D区B5 2層	土師器 杯下半部	底径 5.6 下半部 1/4存	微砂粒子(長石など)若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	内面は強いナデによる凹凸 が著しい 15世紀
第33図53	4D区C4 2層	土師器 杯下半部	底径 5.8 下半部 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・金雲母など)若干含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	15~16世紀
第33図54	4A区C22・ D21 2層	土師器 杯	口径 11.5 器高 3.9 底径 5.1 体部 1/8存 底部 1/2存	微砂粒子(石英・長石など)若干含みやや粉っぽい	普通	にぶい橙色	外:調整不明・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	内面強弱により凹凸あり 15世紀
図32-55	4A区B22 3層	土師器 杯	口径 15.4 器高 5.5 底径 5.2 1/8存	微砂粒子(石英など)含む	普通	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:調整不明・同心円ナデ	13~14世紀
第33図56	4A区B29 2層	土師器 杯下半部	底径 5 底部 2/3存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	器壁は薄手 15世紀
第33図57	4A区B22 3層	土師器 杯下半部	底径 4.4 底部 2/3存	微砂粒子(石英・長石など)若干含みやや粉っぽい	普通	灰白色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	内外面とも強いナデにより 凹凸著しい 底部はやや厚手 14世紀
第33図58	4D区E7 2層	土師器 小皿	口径 8 器高 1.6 底径 5.6 1/3存	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	13世紀
第33図59	4D区E6 2層	土師器 小皿	口径 6.8 器高 1.85 底径 4.5 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	浅黄色～灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	13世紀
第33図60	4D区D6 2層	土師器 小皿	口径 7.6 器高 1.65 底径 4.1 体部 1/6存 底部完形	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	黄灰色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	13~14世紀
第33図61	4D区C6 2層	土師器 小皿	口径 8 器高 1.8 底径 4.2 1/3存	微砂粒子(石英・長石・角閃石など)含む	良好	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	底部から体部への立ち上がり は強いナデによりくびれる 14世紀
第33図62	4D区C5 2層	土師器 小皿	口径 7.2 器高 1.7 底径 4.4 1/5存	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)若干含む	良好	浅黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・ナデ	14~15世紀
第33図63	4D区B4 2・3層	土師器 小皿	口径 7.6 器高 1.4 底径 5.3 2/3存 底部ほぼ完形	1mm以下の砂粒子(石英・長石・角閃石・金雲母など)含む	普通	褐灰色～灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナデ	14~15世紀
第33図64	4D区E4 2層	土師器 小皿	口径 7.5 器高 1.55 底径 5.8 ほぼ完形	微砂粒子(石英・長石・金雲母など)含む	良好	浅黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	外面に煤付着 14~15世紀
第33図65	4D区B6 2層	土師器 小皿上半部	口径 7 上半部 1/5存	微砂粒子(石英・長石など)若干含む	普通	灰白色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口縁端部の一部に煤付着 14~15世紀
第33図66	4D区C2 2層	土師器 小皿	口径 9 器高 2 底径 5.4 1/7存	微砂粒子(長石・石英など)若干含む	良好	灰白色～にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15世紀
第33図67	4D区C7 2層	土師器 小皿	口径 7.2 器高 1.15 底径 4.8 1/6存	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15世紀

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎 土	焼成	色 調	成形・調整・文様	備 者
第33図68	4B区C19 3層	土師器 小皿	口径 8.4 器高 1.85 底径 4.8 1/2存	1mm以下の砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	浅黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ・ナデ	口唇部に強いナデによる沈線 底部から体部への立ち上がり は強いナデによりくびれる 14世紀
第33図69	4B区B18 3層	土師器 小皿	口径 7 器高 1.9 底径 3.5 1/4存	微砂粒子(石英・角閃石など)含む	普通	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回転糸切り) 内:回転ヨコナデ	底部から体部への立ち上がり は強いナデによりくびれる 14世紀
第34図70	4C区C2 3層	土師器 小皿	口径 7.8 器高 1.8 底径 4.7 1/6存	微砂粒子(石英・長石など)若干含みやや粉っぽい	良好	にぶい褐色	外:強い回転ヨコナデ・底部 (回転糸切り) 内:強い回転ヨコナデ	内外面とも強いナデにより 凹凸が著しい 14~15世紀
第34図71	4B区A10 1・3層	土師器 小皿	口径 7.8 器高 1.5 底径 5.4 体部 1/3存 底部完形	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	外:明赤褐色 内:にぶい黄 橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナ デ	13世紀
第34図72	4A区B20 3層	土師器 小皿	口径 7.6 器高 1.7 底径 6 1/4存	微砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄橙色	外:粗雑なヨコナデ・底部 (静止糸切り) 内:粗雑な回転ヨコナデ	外面は粗雑なヨコナデによ り凹凸が著しい 器壁が厚手 14世紀
第34図73	4A区B28 3層	土師器 小皿	口径 7.8 器高 1.5 底径 5.3 1/5存	微砂粒子若干含みや や粉っぽい	普通	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内:回転ヨコナデ	外面に黒斑あり 13~14世紀
第34図74	4A区C20 3層	土師器 小皿	口径 8.2 器高 1.9 底径 5.2 1/2存	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰黄色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナ デ	14~15世紀
第34図75	4B区C11 3層	土師器 小皿	口径 7.2 器高 1.6 底径 4.2 ほぼ完形	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	普通	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナ デ	15~16世紀
第34図76	4B区C11 3層	土師器 小皿	口径 7.6 器高 2.1 底径 4.4 ほぼ完形	微砂粒子(石英・角閃 石・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内:回転ヨコナデ	15~16世紀
第34図77	4A区B26 3層	土師器 小皿	口径 7.8 器高 1.6 底径 4.3 1/5存	微砂粒子(石英など)含む	普通	にぶい黄橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナ デ	13世紀
第34図78	4A区B22 3層	土師器 小皿	口径 8.6 器高 1.6 底径 6.4 1/6存	微砂粒子(石英など)含む	普通	灰黄褐色	外:回転ヨコナデ・調整不明・ 底部(回転糸切り) 内:調整不明	外面口縁部に1条の沈線 13世紀
第34図79	4C区C1 3層	土師器 小皿	口径 5.8 器高 1.15 底径 4.1 1/4存	微砂粒子(石英・角閃 石など)含む	普通	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(糸 切り) 内:回転ヨコナデ	14~15世紀
第34図80	4C区B1 3層	土師器 小皿	口径 6.6 器高 1.4 底径 3.9 体部 1/8存 底部一部欠損	微砂粒子(石英・長石 など)含む	普通	褐灰色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナ デ	14世紀?
第34図81	4B区E3 調査区壁 面精査	土師器 小皿	口径 6.8 器高 1.7 底径 4.5 2/3存	微砂粒子若干含む	良好	浅黄色	外:回転ヨコナデ・底部(ヘ ラ切り) 内:回転ヨコナデ	口唇部の一部にタール状の 煤付着 15世紀
第34図82	4C区A2 3層	土師器 小皿	口径 7.2 器高 1.5 底径 3.6 1/3存	微砂粒子(石英・長石 など)含む	普通	にぶい橙色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り) 内:回転ヨコナデ・同心円ナ デ	口縁部の高さが一定ではな い 12世紀
第34図83	4C区B6 2層	土師器 小皿	口径 6.6 器高 1.3 底径 3.4 1/4存	1mm以下の砂粒子(石 英など)含む	良好	にぶい褐色	外:回転ヨコナデ・底部(糸 切り) 内:回転ヨコナデ	12世紀
第34図84	4D区B7 2層	土師器 小皿	口径 8 器高 2.1 底径 6.2 1/5存	微砂粒子(石英など)含む	良好	灰白色	外:回転ヨコナデ・底部(糸 切り) 内:回転ヨコナデ	体部から底部への境は明瞭 17世紀
第34図85	4D区C7 2層	土師器 柱状高台部	底径 6.4 底部 3/4存	微砂粒子(石英・角閃 石など)多く含む	普通	灰白色	外:回転ヨコナデ・底部(回 転糸切り→板具によるナデ?)	13~14世紀
第34図86	4D区B2 2層	土師器 柱状高台部	底径 5.4 底部 3/4存	1mm以下の砂粒子(石 英・長石・角閃石など) 含む	普通	にぶい黄橙色	外:ナデ・底部(回転糸切り)	13~14世紀
第34図87	4B区B17 2層	土師器 柱状高台部	底径 5.8 底部 1/2存	1mm以下の砂粒子(石 英・長石・角閃石など) 少量含む	普通	灰白色	外:ヨコナデ・底部(糸切り) 内:調整不明	脚部は強いナデにより凹凸著しい 中央に穿孔あり(未貫通) 13~14世紀
第34図88	4D区B7 2層	土師器 大型柱状 高台部	底径 8.8 上の孔径 2.4 下の孔径 1.4 底部縁欠損	2mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	灰白色	外:ヨコナデ・底部(回転糸 切り) 内:ヨコナデ	底面から器部の方向に穿孔 孔は底面側にかけて小さく なる 中世
第34図89	4D区B7、 C-D-7-8、 E5・8 2層	土師質土器 擂鉢	口径 29.6 器高 12.8 底径 10.4 1/2存 底部完形	2mm以下の砂粒子(石 英など)含む	良好	灰黄褐色	外:ナデ 内:ハケ目→擂目(単位5条? で7節以上)	片口 15世紀
第34図90	4D区E5 2層	土師質土器 鉢口縁部	口径 25 口縁部 1/7存	1mmの大砂粒子(石英・ 長石など)含む	良好	淡黄色	外:ナデ・ハケ目(5本/1cm) →ナデ 内:ハケ目(単位9本)	14~15世紀
第34図91	4A区B20・ C23 2層	土師質土器 擂鉢口縁部	14×10角	1cm以下の砂粒子(石 英など)含む	良好	にぶい黄橙色	外:ナデ・粗いヨコナデ 内:粗いヨコナデ→擂目(单 位5本)	14~15世紀

捲図番号	出土地点	種別 器 種	計測値(cm・g)	胎 土	焼成	色調	成形・調整・文様	備 考
第34図92	4B区E14 2層	土師質土器 擂鉢下半部	10×8角	2~3mm大の砂粒子 (石英・長石など)含む	普通	にぶい黄橙色	外:粗雑なナデ 内:ヨコハケ目→擂目・調整 不明→擂目	内面上部に煤付着 14~15世紀
第34図93	4D区C3 2層	土師質土器 風炉口縁部	口径 28.1 口縁部1/14存	1~2mm大の砂粒子 (石英・長石など)含む	良好	外:浅黄色 内:灰白色	外:ナデ+浮彫状の簾状文 内:ナデ	15~16世紀
第34図94	4C区C4. 5 3層	土師器 甕口縁部	口径 20.7 口縁部1/11存	3mm以下の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	にぶい赤褐色 ~灰褐色	外:ナデ・ハケ目(7~8本/5mm)→一部指押さえ? 内:ナデ・ケズリ(RDLU)	第34図95と同一個体の可能性あり 外面口縁部に煤付着
第34図95	4C区C5 3層	土師器 甕口縁部	口径 20.8 口縁部 1/8存	1mm大の砂粒子(石英・長石など)やや多く含む	普通	褐色	外:ナデ・ハケ目(8本/5mm) →一部ナデ 内:ナデ・ケズリ(RL)	第34図94と同一個体の可能性あり 外面煤付着
第34図96	4C区C3 3層	土師器 甕上半部	口径 33.1 上半部 1/5存	1mm大の砂粒子(石英・花崗岩・角閃石など)多く含む	普通	にぶい黄橙色	外:ナデ・ハケ目(4本/5mm) 内:ハケ目(8本/1cm)・ケズリ(RL)	11世紀?
第35図97	4B区A11 3層	白磁 碗底部	底径 7 底部 1/5存	密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	外:施釉・底部(露胎だが一部高台内に釉かかる) 内:施釉	蛇の目高台(研磨により平滑) 初期貿易磁器 白磁碗I-2類(9~10世紀)
第35図98	4B区E13 2層	白磁 碗体部	口径 11.2 口縁部 1/8存	密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	外:施釉 内:施釉	外側とも貫入あり 白磁碗D群(15世紀)
第35図99	4B区E14 1層	白磁 碗底部	底径 3.7 底部完形	緻密	良好	釉:灰白色~乳白色 露胎:灰白色	外:施釉・回転ヨコナデ・底部(削り出し高台) 内:施釉	体下部で屈曲 白磁碗D群(15世紀)
第35図100	4B区B8 2層	白磁 皿口縁部	口径 10 口縁部1/16存	緻密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	口唇部:口禿 外:回転ヨコナデ→施釉 内:施釉	白磁皿IX類(13~14世紀)
第35図101	4D区D4 2層	白磁 皿体部	口径 12 体部 1/7存	密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	外:施釉・無釉 内:施釉・見込み釉ハギ	白磁皿D群(15世紀)
第35図102	4B区E17 2層	白磁 皿体部	口径 11.2 体部 1/5存	緻密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	外:施釉 内:施釉	白磁皿E群(16世紀)
第35図103	4B区E14 2層	白磁 皿口縁部	3×2.5角	緻密	良好	釉:灰黄色 露胎:灰白色	外:施釉 内:施釉	口縁部が外反 白磁皿C群(14~15世紀)
第35図104	4B区C14 1層	白磁 皿底部	5×2角	緻密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	外:施釉・壺付け部(露胎) 内:施釉→釉力キによる文様	白磁皿E群(16世紀)
第35図105	4D区D5 2層	白磁 端反皿底部	底径 6 底部 1/3存	緻密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	外:施釉・底部(壺付け部以外施釉) 内:施釉	削り出し高台 白磁皿E群(15~16世紀)
第35図106	4D区E8 2層	白磁 皿	口径 13.6 器高 3.25 底径 6.5 1/4存	密	良好	釉:明オリーブ灰色 露胎:灰白色	外:施釉・回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ・回転ヨコナデ・底部(ナデ) 内:施釉→蛇ノ目釉ハギ	削り出し高台 白磁皿D群(15世紀)
第35図107	4B区E16 2層	白磁 皿底部	底径 6.6 底部 1/6存	緻密	良好	釉:乳白色 露胎:乳白色	外:施釉・底部(壺付け部以外施釉) 内:施釉	白磁皿E群(16世紀)
第35図108	4A区B21 3層	白磁 皿	口径 9.8 器高 1.7 底径 6.7 1/16存	緻密	良好	釉:明緑灰色 露胎:灰白色	口唇部:口禿 外:施釉 内:施釉	白磁皿IX類(13~14世紀)
第35図109	4A区D26 2層	白磁 皿口縁部	口径 8.3 口縁部 1/6存	緻密	良好	釉:灰白色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	外面体部に強いナデによる段あり 白磁皿D群(15世紀)
第35図110	4B区C17 2層	白磁 皿口縁部	口径 8.7 口縁部 1/13存	緻密	良好	釉:灰白色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	中国白磁皿D群(15世紀)
第35図111	4B区A17 2・3層	白磁 皿底部	底径 6 底部 1/4存	緻密	良好	釉:灰白色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	壺付け部に砂目積みの砂粒付着 白磁皿E群(16世紀)
第35図112	4A区AB- 20・21 調査区崩壊壁面	白磁 皿底部	底径 6.5 底部 1/10存	緻密	良好	釉:乳白色 露胎:灰白色	外:施釉・底部(壺付け部以外施釉) 内:施釉	白磁皿E群(16世紀)
第35図113	4A区AB- 20・21 調査区崩壊壁面	白磁 杯底部	底径 3.1 底部完形	緻密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	外:施釉・削り出し高台部+高台内(露胎) 内:施釉	白磁杯D群(15世紀)
第35図114	4B区C18 2層	白磁 角杯口縁部	2.5×1.5角	緻密	良好	釉:灰白色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	白磁杯D類(15世紀)
第35図115	4D区B3 2層	白磁 杯体部	屈曲部径 7.1 体部 1/9存	密	良好	釉:灰白色 露胎:灰白色	外:施釉・下位(露胎) 内:施釉	貫入あり 16世紀
第35図116	4D区B3 2層	白磁 四耳壺胴部	4.5×3.5角	緻密	良好	釉:明緑灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	肩部に耳状の飾り痕あり 12~13世紀
第35図117	4C区B3 3層	青磁 碗体部	口径 16.5 体部 1/8存	緻密	良好	釉:灰オリーブ色 断面:黄灰色	外:施釉 内:施釉	龍泉窯碗I類(13世紀前半)
第35図118	4D区C6 2層	青磁 碗上半部	口径 13.4 口縁部 1/8存	緻密	良好	釉:灰オリーブ色 断面:灰色	外:凹線・輪花状の幅広の鈍い蓮弁文?→施釉 内:施釉	龍泉窯系 14世紀

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
第35図119	4D区B6 2層	青磁 碗上半部	口径 14 上半部 1/12存	密	良好	釉:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	龍泉窯系 15世紀
第35図120	4D区D7 2層	青磁 碗体部	口径 16 口縁部 1/10存	密	良好	釉:明緑灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	龍泉窯系 15世紀
第35図121	4D区D4 2層	青磁 碗口縁部	口径 16 口縁部 1/7存	密	良好	釉:明オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	龍泉窯系 15世紀
第35図122	4A区B20 2層	青磁 碗上半部	口径 15.5 口縁部 1/15存	緻密	良好	釉:明オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	部分的に灰白色の灰がかかる 龍泉窯系碗D類 (15世紀)
第35図123	4B区B19 2層	青磁 碗上半部	口径 16 口縁部 1/17存	密	良好	釉:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	外面頸部に凹線状の凹みあり 龍泉窯系碗D類 (15世紀)
第35図124	4B区C16 2層	青磁 碗口縁部	口径 17 口縁部 1/16	緻密	良好	釉:明オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:雷文→施釉 内:施釉	釉薬がやや厚く貫入あり 龍泉窯系碗C2類 (15世紀)
第35図125	4B区D8 2層	青磁 碗胴部	8.5×7角	緻密	良好	釉:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	釉薬が厚く貫入あり 龍泉窯系碗D類 (15世紀前半)
第35図126	4D区B5 2層	青磁 碗口縁部	4×2角	緻密	良好	釉:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	端反り口縁 龍泉窯系碗D類 (15世紀)
第35図127	4D区C2 2層	青磁 碗胴部	3.5×3.5角	密	良好	釉:オリーブ 黄色 断面:灰白色	外:連続刺突文→施釉 内:ジグザク文・ヘラ状工具による文様→施釉	同安窯系碗I類 (12~13世紀)
第35図128	4D区D4 2層	青磁 碗底部	底径 5 底部 1/4存	密	良好	釉:オリーブ 灰色 露胎:灰白色	外:施釉・削り出し高台(露胎一部に釉付着) 内:施釉	高台内に2条の沈線 龍泉窯系 15世紀
第35図129	4D区B6 2層	青磁 碗底部	底径 4 底部 1/6存	密	良好	釉:灰オリーブ 色 露胎:灰白色	外:施釉・底部(壺付け部以外施釉) 内:施釉	龍泉窯系 15世紀
第35図130	4C区B1 2・3層	青磁 碗胴部	3.5×2角	緻密	良好	釉:灰オリーブ 色 断面:灰色	外:片彫り状沈線→施釉 内:花文→施釉	内面の花文はクシ状・ヘラ 状の施文具による 同安窯系碗III類 (13世紀前半)
第35図131	4D区B5 2層	青磁 皿上半部	口径 12.6 口縁部 1/6存	緻密	良好	釉:明緑灰色 断面:灰白色	外:蓮弁文→施釉 内:施釉	龍泉窯系 14~15世紀
第35図132	4C区C2 3層	青磁 皿	口径 15 器高 4.45 底部 8.2 1/10存	密	良好	釉:明オリーブ 灰色~緑灰色 露胎:灰白色	外:施釉・底部(高台内面以外施釉) 内:施釉	内外面とも貫入あり 削り出し高台 龍泉窯系 15世紀
第35図133	4B区E4 2層	青磁 香炉胴部	3×2.5角	緻密	良好	釉:緑灰色 断面:灰白色	外:凹線状の凹み→施釉 内:施釉	中世
第35図134	4B区C19 2層	青磁 皿口縁部	口径 10.2 口縁部 1/12存	微砂粒子(石英)を若干含む	良好	釉:灰白色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	同安窯系 12~13世紀
第35図135	4D区E7 2層	青磁 盤口縁部	口径 15 口縁部 1/12存	緻密	良好	釉:明緑灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:輪花状のヘラ彫り→施釉	内外面とも貫入あり 中世
第35図136	4D区B6 2層	青磁 香炉口縁部	口径 14 口縁部 1/12存	緻密	良好	釉:明緑灰色 断面:灰白色	外:施釉 内:施釉	15世紀?
第35図137	4B区E16 ・17 2層	青磁 香炉口縁部	口径 7 口縁部 1/7存	緻密	良好	釉:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:凹線状の凹み→施釉 内:施釉	13~14世紀
第35図138	4A区D21 2層	青磁 香炉口縁部	口径 8.8 口縁部 1/4存	緻密	良好	釉:オリーブ 灰色 断面:灰白色	外:凹線状の凹み→施釉 内:施釉	口唇部に平坦面あり 内外面とも貫入あり 15~16世紀
第35図139	4A区C28 3層	青磁 杯底部	底径 3.8 底部 1/4存	緻密	良好	釉:緑灰色 断面:灰白色	外:施釉・底面(釉ハギ) 内:うろこ状施文→施釉	龍泉窯系 15世紀
第35図140	4A区C・D 20 2層	青磁 碗底部	底径 5.1 高台部ほぼ完形	密	良好	釉:オリーブ 灰色 露胎:灰褐色 断面:灰色	外:施釉→回転ヨコナデ・ 底部(回転ヨコナデ) 内:見込みにまんじ状の施文→施釉	龍泉窯系碗E類 (15世紀)
第35図141	4D区B5 1層	青白磁 碗底部	底径 7.6 底部 1/8存	密	良好	釉:明緑灰色 露胎:灰白色	外:施釉→回転ヨコナデ・ 底部(回転ヨコナデ) 内:施釉	中世
第35図142	4D区D4 2層	青白磁 合子蓋	3.5×1角	緻密	良好	釉:明緑灰色 露胎:灰白色	外:凸状に彫り出した草花文→施釉 内:露胎	12~13世紀
第36図143	4D区B・D 2 2層	青花 皿口縁部	口径 11.4 口縁部 1/6存	密	良好	釉:明青灰色 断面:灰白色	外:山形様+草花文→施釉 内:2条の圈線→施釉	青花皿C群 (16世紀)
第36図144	4B区E15 2層	青花 皿口縁部	口径 13.2 口縁部 1/6存	緻密	良好	釉:灰白色 断面:灰白色	外:圈線→施釉 内:圈線と逆四方櫻文など→施釉	染付皿C群 (15~16世紀)

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
第36図145	4B区D9 2層	青花 皿口縁部	2.5×2角	緻密	良好	釉：明青灰色 染付：濃紺色	外：圈線+波状文→施釉 内：2条の圈線→施釉	青花皿C群(15~16世紀)
第36図146	4A区 重機掘削	青花 皿口縁部	2×1.5角	緻密	良好	釉：明緑灰色 染付：青色 断面：灰白色	外：文様→施釉 内：文様→施釉	口唇部外反 15~16世紀
第36図147	4B区C11 2層	青花 皿口縁部	1.5×1角	緻密	良好	釉：灰白色 染付：濃紺色 ~明青灰色	外：圈線+波状文→施釉 内：2条の圈線→施釉	青花皿C群(15~16世紀)
第36図148	4D区E6 2層	青花 皿全体部	6.5×3.5角	やや緻密	良好	釉：灰白色 断面：灰白色	外：鹿+草花文→施釉 内：施釉	16世紀
第36図149	4D区C7 2層	青花 皿口縁部	3×2角	緻密	良好	釉：灰白色 染付：青灰色	外：圈線+草花文→施釉 内：圈線→施釉	中世
第36図150	4D区C2 2層	青花 皿底部	1.5×1.5角	緻密	良好	釉：明青灰色 露胎：灰白色	外：2条の圈線→疊付け部 以外施釉 内：花文→施釉	16世紀
第36図151	4B区B9 2層	中国褐釉陶器 壺口縁部	口径 18 口縁部 1/12存	密	良好	暗赤褐色～に ぶい褐色 断面：灰白色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ+ヘラ状 工具による押し込み	13~14世紀
第36図152	4D区E8 2層	中国産陶器 茶壺上半部	口径 2.2 上半部 1/3存	緻密	良好	釉：黒色 露胎：灰色	外：沈線・凹線→施釉 内：ヨコナデ・回転ヨコナ デ→施釉・露胎	中世
第36図153	4D区B6 2層	中国産陶器 天目茶碗胴部	2×2角	密	良好	釉：黒色 断面：灰白色	外：施釉 内：施釉	中世後半
第36図154	4D区B5 2層	朝鮮王朝陶器 粉青沙器皿	口径 10 器高 2.7 底径 3.8 1/3存	1.5mm以下の砂粒子 (石英など)含む	良好	釉：オリーブ 灰色 露胎：灰色	外：施釉(釉薬の下に砂移 動の痕跡あり)・底部(施釉) 内：施釉	見込み及び底部に砂目積み 痕あり 高台状の底部はやや上げ底 16世紀
第36図155	4B区B16 2層	朝鮮王朝陶器 碗底部	底径 5 底部 1/4存	微砂粒子(石英・長 石など)若干含む	良好	釉：灰白色 断面：灰白色	外：施釉 内：施釉	見込み及び底部に砂目積み 痕あり 高台状の底部 16世紀
第36図156	4D区D9 1層	朝鮮王朝陶器 粉青沙器皿底部	底径 4.4 底部完形	1mm以下の砂粒子(石 英など)含む	良好	釉：灰白色 断面：灰色	外：施釉 内：施釉	高台状の底部はやや上げ底 16世紀
第36図157	4D区E6 2層	美濃焼 天目茶碗胴部	5×2.5角	密・砂粒子(長石など) 若干含む	良好	釉：黒色 露胎：灰白色	外：施釉・ヘラケズリ? 内：施釉	16世紀前半
第36図158	4B区B16 2層	瀬戸焼 灰釉陶器皿底部	底径 5.4 底部 1/5	緻密	良好	釉：灰白色 露胎：灰白色	外：施釉・底部(疊付け部以 外施釉) 内：施釉(貫入あり)	14~15世紀
第36図159	4A・4C区 C26・D4 2層	備前焼 擂鉢口縁部	口径 26.8 口縁部 1/8存	1mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	灰色～黄灰色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ→擂目	14世紀
第36図160	4D区C3 3層	備前焼 甕口縁部	5.5×2角	微砂粒子(石英など) 含む	良好	黒褐色 断面：灰黄褐色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	玉縁状口縁 14~15世紀
第36図161	4D区B8 2層	備前焼 擂鉢口縁部	8×5.5角	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	外：暗赤褐色 ~灰色 内：灰褐色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	いびつい変形 16世紀後半
第36図162	4D区E8 6層	瓷器系陶器 甕口縁部	口径 45.8 口縁部 1/10存	4mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	灰色	外：ナデ 内：ナデ	二重口縁 13世紀
第36図163	4D区B7 2層	瓷器系陶器 甕口縁部	口径 37.7 口縁部 1/12存	1.5mm以下の砂粒子 (石英・長石など)含む	良好	黄灰色 釉：オリーブ 黑色 断面：灰白色	外：回転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	内外とも自然釉がかかる 二重口縁 13世紀
第36図164	4D区B3・ C3 2層	瓷器系陶器 甕口縁部	8×4.5角	1~7mm大の砂粒子 (石英・長石など)含 む	良好	赤色 自然釉：灰白 色 断面：にぶい 黄橙色	外：回転ヨコナデ・ナデ 内：回転ヨコナデ	二重口縁 13世紀
第36図165	4B区B18 2層	瓷器系陶器 鉢口縁部	口径 25 口縁部 1/14存	1mm大の砂粒子(石英・ 長石など)含む	良好	にぶい赤褐色	外：口縁端部面に沈線→回 転ヨコナデ 内：回転ヨコナデ	中世
第36図166	4D区E2 2層	陶器 甕底部	底径 29.6 底部 1/11存	1.5mm以下の砂粒子 (石英など)含む	良好	灰色	外：タテナデ・ナデ・底部 (ハケ目(6本/1cm)) 内：ナデ	中世
第36図167	4C区B4 2層	瓷器系陶器 甕頸部	8×8角	2mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	灰色 自然釉：灰白色	外：粗い単位の明瞭なヨコ ナデ 内：指押さえ明瞭な粗いナ デ・粗いナデ	内面では粘土貼付痕が明瞭 中世
第36図168	4D区B5 2層	瓷器系陶器 底部	7×7角	3mm以下の砂粒子(石 英・長石など)含む	良好	外：にぶい赤 褐色 内：にぶい橙 色	外：ナデ 内：ナデ	中世
第36図169	4D区B7 2層	陶器 底部	10×5角	1.5mm以下の砂粒子 (石英・長石・赤褐色 粒子など)含む	良好	外：にぶい黄 橙色 内：にぶい橙 色	外：ハケ目(10本/1cm)・ナ デ・ヨコナデ・底部(ナデ) 内：回転ヨコナデ・回転ヨ コナデ→ヘラによるタテナ デ・ナデ	内面の一部に漆?付着 中世
第36図170	4B区E14 2層	瓷器系陶器 甕胴片	4.5×3角	微砂粒子(石英・長石 など)含む	良好	灰白色	外：格子状のタタキ+矢羽 状のタタキ(スタンプ?) 内：粗雑なナデ	中世

掲図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎　土	焼成	色　調	成形・調整・文様	備　考
第37図171	4D区C8 2層	肥前系磁器 皿	口径 12.8 器高 3.5 底径 4.4 1/4存 底部完形	緻密	良好	釉：明緑灰色 (リリ釉) 露胎：灰白色	外：高台部～底部以外施釉 内：施釉・見込み部(蛇ノ目 釉ハギ)	削り出し高台 見込み部分及び畳付け部に砂 目積痕あり 17世紀後半
第37図172	4D区D2 2層	肥前系磁器 碗底部	底径 4.8 底部 1/6存	緻密	良好	釉：明緑灰色 露胎：灰白色	外：施釉・底部(露胎) 内：施釉・見込み(搔き取り)	見込み部及び高台部外面に 砂目積痕あり 17世紀後半
第37図173	4D区E6 1層	肥前系磁器 小型碗下半部	底径 5.6 下半部 1/5存	緻密	良好	釉：明緑灰色 露胎：灰白色	外：草花文・2条の園線→施 釉・底部(畠付露胎・1条の園 線→施釉) 内：施釉	削り出し高台 18世紀
第37図174	4A区 重機掘削	肥前系陶器 碗底部	底径 3 底部完形	緻密	良好	釉：灰白色 断面：灰白色	外：園線→施釉 内：施釉	削り出し高台 見込みに砂目積み痕あり 17世紀～
第37図175	4D区B7 2層	肥前系陶器 碗底部	底径 4.8 底部完形	密	良好	釉：灰黄色 露胎：灰黄色	外：施釉葉・底部(畠付け部 以外施釉)	削り出し高台 高台部に砂目積による砂付着 17～18世紀
第37図176	4D区C8 2層	肥前系磁器 碗底部	底径 4.5 底部 1/4存	密	良好	内：にぶい黄 褐色 釉：明緑灰色 露胎：灰白色	外：施釉→底部(帯状に釉 ハギ→顔料塗布・畠付け部 (露胎)・施釉) 内：回転ヨコナデ	赤絵 削り出し高台 高台部に砂目積痕あり 18世紀～
第37図177	4D区E4 2層	肥前系磁器 皿底部	底径 5.4 底部 1/10存	密	良好	釉：灰白色 露胎：灰白色	外：施釉 内：2条単位の平行線文の 間に渦巻状の雷文→施釉	削り出し高台 18世紀
第37図178	4D区C6 2層	肥前系陶器 皿底部	底径 4.5 底部完形	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	黃灰色 釉：灰色 露胎：浅黄色	外：施釉・ヘラケズリ・ヨコ ナデ・底部(回転ヨコナデ) 内：施釉	削り出し高台 16世紀
第37図179	4D区B7 2層	肥前系磁器 皿下半部	底径 5 下半部 1/2存	緻密	良好	釉：明緑灰色 露胎：灰色	外：施釉・ケズリ?・回転ヨ コナデ・削り出し高台 内：施釉・蛇ノ目釉ハギ	ルリ釉 見込み及び高台部に砂目積 み痕あり 17世紀後半～
第37図180	4D区B7 2層	肥前系磁器 皿底部	底径 5 底部 1/3存	緻密	良好	釉：明緑灰色 露胎：灰白色	外：施釉・ケズリ 内：施釉・見込み部釉ハギ	削り出し高台 見込み及び畠付け部に砂目積 み痕あり 17世紀後半～
第37図181	4D区C8 3層	肥前系陶器 皿下半部	底径 4.8 下半部完形	密	良好	浅黄色 釉：灰白色 露胎：にぶい 黄橙色	外：施釉・露胎 内：施釉	削り出し高台 見込部に3ヶ所の胎土目積 痕あり 17世紀中頃
第37図182	4D区D7 2層	肥前系陶器 皿底部	底径 4.6 底部完形	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	にぶい黄橙色 ～橙色 釉：灰オリー ブ色	外：回転ヘラケズリ・回転 ヨコナデ・底部(畠付け部 (粗雑なナデ)) 内：施釉	外側の一部に釉かかる 削り出し高台内面に4力所 の胎土目積痕あり 17世紀前半
第37図183	4A区D25 1層	肥前系陶器 碗底部	底径 6.4 底部 1/8存	密	良好	釉：灰オリー ブ色 露胎：にぶい 赤褐色	外：文様→施釉・底部(畠付 け部以外施釉) 内：施釉	貫入あり 18世紀
第37図184	4D区B6 1層	肥前系陶器 皿底部	底径 7.4 底部 1/6存	密	良好	釉：にぶい黄 褐色 露胎：にぶい 黄橙色	外：施釉・削り出し高台・底 部(回転ヨコナデ→施釉葉) 内：施釉→蛇ノ目釉ハギ	削り出し高台 18世紀
第37図185	4D区B7・ D2 1・2層	肥前系陶器 皿底部	底径 6 底部 1/2存	密	良好	釉：灰白色 露胎：灰黃褐色	外：施釉・底部(畠付け部以 外施釉) 内：施釉・見込み部蛇ノ目 釉ハギ	削り出し高台 17世紀後半～18世紀
第37図186	4A区B20 試掘坑	肥前系磁器 碗口縁部	3.5×3角	緻密	良好	釉：青灰白色 染付：青灰色 ～暗青灰色	外：文様→施釉 内：文様→施釉	近世
第37図187	4D区 排土中	肥前系陶器 大皿下半部	底径 9.6 下半部 1/10存	微砂粒子若干含む	良好	にぶい褐色 釉：灰白色	外：回転ヨコナデ・回転ヘ ラケズリ・回転ヨコナデ・底 部(ナデ) 内：粗雑な施釉	削り出し高台 外面上部に化粧土 17世紀前半
第37図188	4D区D5 2層	肥前系陶器 皿	口径 13 器高 3.4 底径 5 1/4存	微砂粒子(石英など) 若干含む	良好	にぶい赤褐色 ～にぶい橙色 釉：灰オリー ブ色 露胎：にぶい橙色	外：施釉・回転ヨコナデ・底 部(ナデ) 内：施釉・見込み部釉搔き 取り	削り出し高台 17世紀中頃
第37図189	4B区C13 2層	肥前系陶器 皿	口径 11 器高 3.1 底径 3.6 3/4存	密	良好	釉：灰オリー ブ色 露胎：灰色	外：施釉・回転ヨコナデ 内：施釉	削り出し高台 見込み及び外面下半部と高 台内に砂目積み痕あり 17世紀
第37図190	4D区B8 2層	肥前系陶器 皿下半部	底径 4.4 下半部 1/2存	微砂粒子(石英・長石 など)若干含む	良好	浅黄色 釉：灰白色	外：回転ヨコナデ→施釉+ 露胎・底部(回転糸切り) 内：施釉	17世紀
第37図191	4B区A6 1・2・3層	肥前系陶器 皿下半部	底径 4.6 下半部 1/8存	緻密	良好	釉：灰オリー ブ色 露胎：にぶい 橙色	外：回転ヨコナデ→施釉 回転ヘラケズリ・底部(削り 出し高台) 内：施釉・蛇ノ目釉ハギ	畠付け部に砂目積痕あり 17世紀
第37図192	4B区 排土中	肥前系陶器 皿底部	底径 4.4 底部 1/3存	微砂粒子若干含む	良好	釉：オリーブ 灰色 露胎：暗灰黃 色	外：回転ヨコナデ→施釉+ 露胎・回転ヘラケズリ(回転ヨ コナデ・底部(削り出し高台)→ 畠付け部(ハケ目(5本/5mm)→ ナデ)) 内：施釉・見込み部蛇ノ目釉ハギ	17世紀末～18世紀
第37図193	4D区D6 2層	肥前系陶器 皿下半部	底径 4.1 下半部 1/2存	密	良好	灰黄色 釉：灰オリー ブ色	外：施釉・回転ヨコナデ→2条の 貼付突帯→指押さえ 内：格子状タタキ目→回転 ヨコナデ	見込部分に砂目積痕あり 17世紀
第37図194	4D区B・C 2 1・2層	肥前系陶器 蓋体部	胴部径 37.9 体部 1/8存	微砂粒子(石英・長石 など)若干含む	良好	外：黑褐色 内：暗赤褐色	外：回転ヨコナデ→2条の 貼付突帯→指押さえ 内：格子状タタキ目→回転 ヨコナデ	17世紀後半
第38図195	4D区B7 2層	肥前系陶器 皿底部	口径 12.1 底部 1/13存	密	良好	釉：灰オリー ブ色 露胎：灰白色	外：施釉 内：鉄絵→施釉	重ね焼で下に貼り付いた状 態で欠損したもの 17世紀

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	胎土	焼成	色調	成形・調整・文様	備考
第38図196	4D区C9 1層	肥前系陶器 小型碗体部	口径 10.8 体部 1/5存	密	良好	釉:浅黄色 露胎:灰白色	外:回転ヨコナデ→施釉 内:回転ヨコナデ→施釉	貫入あり 17世紀終末～18世紀
第38図197	4B区B6 2層	瓦質土器 浅鉢口縁部	5.5×4角	1～3mmの砂粒子(石英・長石など)含む	普通	灰色 断面:灰黄色	外:ヨコナデ・突帯文・スタンプ文(菱形区画文) 内:ナデ	内外面とも風化が著しい 14～15世紀
第38図198	4D区C3・4 2層	灰釉陶器or 山茶碗 碗体部	口径 18 体部 1/8存	1.5mm以下の砂粒子(石英・長石など)若干含む	良好	灰白色	外:回転ヨコナデ 内:回転ヨコナデ	口縁端玉縁状 内面に薄く自然釉かかる 12世紀
第38図199	4C区 B2・3、C2 2・3層	瓦質土器 鍋口縁部	口径 27.8 口縁部1/10存	微砂粒子(石英・長石など)含む	やや不良	黄灰色	外:回転ヨコナデ・ケズリ 内:回転ヨコナデ	口端部に平坦面あり 14～15世紀
第38図200	4D区D2 2・3層	瓦質土器 風炉?胸部	10×6角	2mm以下の砂粒子(石英など)若干含む	良好	暗灰色 断面:灰白色	外:縦簾状文・浅い突帯文・ 浮彫状の複合羽状文 内:ナデ・指押さえナデ	15～16世紀
第38図201	4D区B5・ C4 3層	瓦質土器 鉢上半部	10×6.5角	1mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む	良好	外:黒色 内:黒色～灰白色	外:回転ヨコナデ・指押さ えナデ 内:ハケ目(7本/1cm)・調整 不明	14～15世紀
第38図202	4C区B1・2 3層	瓦質土器 擂鉢口縁部	5×5角	微砂粒子(石英など) 若干含む	普通	灰色	外:粗雑なナデ 内:ナデ→擂目	13世紀
第38図203	4B区B6 2層	瓦質土器 鍋口縁部	4×2角	微砂粒子(石英・長石など)含む	普通	暗灰色	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	口唇部は外に少し引き出し 平坦面をつくる 13～15世紀

4区出土遺物観察表2

挿図番号	出土地点	種別 器種	計測値(cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
第11図9	4D区D7 S D1000	流紋岩 打製石斧	現存長 17.6 最大幅 11.7 最大厚 3 刃部一部・基部 欠損	撥形・尖刃	表面の一部に磨滅痕及び 右側縁に敲打痕あり
第11図10	4A区B・C20 S D1000 上面	流紋岩 使用痕ある礫	長さ 14.7 最大厚 5 幅 7.6 重量 780		表面に擦痕あり
第14図8	4D区B5 S E1137	凝灰岩 磨石	長さ 10.4 最大厚 3.7 幅 5.6 重量 270		全体に磨られている
第14図14	4D区D4 S D1123	木製品 板材	現存長 20.1 最大厚 2 現存幅 6.6	左上方を斜めにカット 両サイドは調整、表裏面は割り取ったまま使用	
第14図16	4D区B5 S D1123 底面	木製品 板材	現存長 7.7 現存厚 1.4 幅 6.6	下部を片刃状にカット	
第14図15	4D区D4 S D1123 2層	木製品 角材	現存長 11.2 厚さ 5.3 幅 6.5	上面は調整、下面是鋸で切断、左右面 は未調整	上下とも切断されている
第14図17	4D区D4 S D1123 5層	木製品 角材	長さ 3.6 厚さ 4 幅 4.7		サイコロ状
第14図18	4D区C4 S D1123	木製品 角材	長さ 2.8 厚さ 2.7 幅 4.6		サイコロ状
第14図19	4D区D4 S D1123	木製品 角材	長さ 4 厚さ 4.1 幅 3.6		サイコロ状
第14図20	4D区D4 S D1123 2層	木製品 角材	長さ 3.7 厚さ 3.6 幅 4.3		サイコロ状
第14図21	4D区D4 S D1123	木製品 角材	長さ 3.6 厚さ 3.9 幅 4.5		サイコロ状
第14図22	4D区C4 S D1123	木製品 角材	長さ 3.5 厚さ 2.6 幅 3.3		サイコロ状
図15-6	4B区C10 S D1054	砂岩 朱用磨敲石	長さ 4.9 厚さ 2 幅 2 重量 35		全面に朱が付着 上下面是潰し面・4面は 磨面
図21-17	4D区 S X1131	凝灰岩 有孔石製品	現存長 15.4 現存厚 7.5 幅 14.5 重量 1210		中央に長方形の穿孔あり 一側縁に磨面あり
図21-18	4D区 S X1131	安山岩 台石	長さ 15.3 厚さ 6 幅 16.2 重量 2500		上面の一部に炭化物付着

挿図番号	出土地点	種器 別種	計測値 (cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
第22図13	4C区B1・2 S K 1093 上半	鍛冶関連遺物 フイゴの羽口	5×5.5角		外面にガラス溶解物付着
第22図14	4C区D1 S E 1100	砥石	長さ 13.1 厚さ 6 幅 8.1 重量 880		中研ぎ～仕上げ研ぎ
第22図25	4D区B2・3 S K 1110 上半	鍛冶関連遺物 楕円形鉄滓(極小)	長さ 6.6 厚さ 2.8 幅 5.4 重量 76		
第22図26	4D区B3 S K 1110	木製品 薄板	現存長 13.7 厚さ 0.55 幅 5.5	下面是鋸で切断	表裏面に刃物痕残存
第22図27	4D区B2・3 S K 1110 上半	木製品 板状の棒	長さ 14.6 厚さ 0.5 幅 1.2	先端を耳搔き状に加工	先端は被熱のため黒化している
第23図10	4D区B2 S D 1111 底面	木製品 舟形の形代	長さ 18.6 高さ 2.1 幅 3.7	底面は丸みを帯びた削りを施す 船底は平坦に削り出す(断面U字状)	船首中央に穿孔あり
第23図11	4D区C2 S D 1111 中位	木製品 舟形の形代	長さ 20.3 高さ 2.1 幅 3.3	底面は丸みを帯びた削りを施す 船底は工具幅分平坦に削り出す(断面V字状)	第23図10より細身
第23図12	4D区C3 S D 1111 中位	流紋岩 台石	長さ 29.4 厚さ 12.4 重量 13750		中央部は深く窪み周辺は 橋円形状の浅い窪みあり (凹凸の著しい使用面)
第24図6	4A区B21 S E 1025 1層	木製品 かきませ棒状品	長さ 10.4 最大厚 0.7 幅 0.8	柄部分に切れ込みあり 先端部は肥厚して蛇頭状	先端は被熱のため黒化している
第24図7	4A区B21 S E 1025 1層	木製品 曲物の側板片	7×4.1角	切れ込み施す	
第24図8	4C区D2・3 S E 1083	木製品 木栓	長さ 5.45 頭部幅 2.9 孔径 0.4～0.6 基部径 1.7 頭部厚 2.5	頭部はこけし状の多角形面取りを施す	頭部に貫通しない孔あり
第24図9	4C区D2・3 S E 1083	木製品 部材	長さ 10.35 頭部幅 2.9 厚さ 2 基部幅 1.4	片側下半部をカット	基部に穿孔あり
第24図10	4C区D2 S E 1083	木製品 大振りの匙	現存長 11.1 最大厚 1.8 現存幅 6.4		
第24図11	4C区D3 S E 1083 3層	木製品 折敷の底板	長さ 15.1 厚さ 0.4 現存幅 8.15	角取りを施す	縁辺に数ヶ所小穿孔あり
第24図17	4D区C7 S E 1141 5層	鍛冶関連遺物 楕円形鉄滓(極小)	長さ 7.5 厚さ 1.7 幅 4.8 重量 71		
第24図18	4C区C-D2 S E 1116 2層	木製品 曲物の側板	現存長 48.5 厚さ 0.3 復元高 22.4	内側に切れ込み施す 幅1cmの綴じ皮で外側長く内側短く綴じる	重ね合わせは6.5cm部分 下部に底板との目釘孔あり
第25図3	4D区C9 S E 1146 中位	木製品 漆塗り椀	口径 16 1/3存	外面は黒漆を施した後赤漆で草花文を描く。内面は赤漆を施す	顔料は朱
第25図4	4D区C9 S E 1146 中位	凝灰岩 砥石	現存長 16.5 厚さ 8 重量 1370		上面のみ使用
第25図5	4D区C9 S E 1146 中位	流紋岩 磨石	長さ 10.1 厚さ 2.6 幅 5.8 重量 250		全面に削痕が観察される
第25図6	4D区C9 S E 1146 中位	凝灰岩 磨石	現存長 12.3 厚さ 5.2 重量 600		全面に削痕が観察される
第25図7	4D区C9 S E 1146 中位	石英 磨石	現存長 5.2 現存厚 2.6 重量 100		
第25図8	4D区C9 S E 1146 上位	凝灰岩 台石	長さ 15.6 厚さ 8.6 幅 13.5 重量 3100		上面は剥離した後に被熱
第25図9	4D区C9 S E 1146 下位	流紋岩 台石	現存長 20.1 厚さ 5.3 現存幅 16.1		
第25図10	4D区C9 S E 1146 下位	安山岩 石製装飾品	長さ 15.1 現存厚 8.3 幅 12.1 重量 2920	全体に敲打による成形	中央軸に擦って窪んだ1 条の筋あり
第26図1	4A区B20 S D 1024	古銭 宋銭	直径 2.3 内孔径 0.65 厚さ 0.12 重量 25		「治平元寶」初鑄1064年
図28-27	4D区D7 S D 1120 2層	木製品 杯	復元口径 9.2 底径 6.1 一部欠損	内外面は黒漆を施したのち赤漆塗布 高台内は黒漆塗布	顔料は朱

掲図番号	出土地点	種器 別種	計測値 (cm・g) 残存率	成形・調整・文様	備考
第28図28	4D区D5 SD1120 1層	木製品 連歯下駄	現存台長 15.9 現存台幅 8 現存歯高 前 2.4 後 2.1	2ヶ所横縫穴あり	上面は後歯の近くにわずかに火を受けている
第28図29	4D区D2 SD1120	木製品 横柾状木製品	現存長 14.3 現存幅 5 現存厚 2.9		下方の先端が磨滅
第28図30	4D区D5 SD1120	木製品 板材	復元長 16.9 最大幅 5.4 最大厚 0.7		
第28図31	4D区D3 SD1120 上面	鍛冶関連遺物 椀形鍛治滓(小)	長さ 7.7 幅 5.25 厚さ 2.85 重量 131		
第28図32	4D区D4 SD1120	鍛冶関連遺物 椀形鍛治滓(中)	長さ 5.9 幅 5 厚さ 3.8 重量 147		
第28図33	4D区D4 SD1120	鍛冶関連遺物 椀形鍛治滓(極小)	長さ 4.9 幅 4 厚さ 1.95 重量 29		
第29図34	4D区D8 SD1120 上位	凝灰岩 砥石	現存長 7.3 現存幅 3.1 現存厚 9.9 重量 210		
第29図35	4D区D6 SD1120	流紋岩 台石	現存長 31.5 現存幅 18.5 現存厚 9.1 重量 6400		
第29図36	4D区D6 SD1120	流紋岩 台石	現存長 34.2 現存幅 17.1 現存厚 12.1 重量 9320		裏面に数条の刃キズ痕あり
第29図37	4D区D6 SD1120	玄武岩 ブロック状の角状 礫	現存長 21.1 現存幅 13 現存厚 12.5 重量 5400	全体に敲打による成形	全体的に被熱を受ける
第30図4	4D区C6 SD1144	土製品 支脚	現存長 5.6 現存幅 6.7 現存厚 4.9	外:ナデ	下半部及び上部のY字状突起を欠損 胎土:6mm以下の砂粒子(石英・長石など)含む 色調:にぶい黄橙色
第30図5	4D区C7 SD1144	鍛冶関連遺物 椀形鍛治滓(小)	長さ 8.3 幅 4.9 厚さ 2.5 重量 105		
第30図6	4D区B8 SD1144 下半	鍛冶関連遺物 フイゴの羽口(鍛 治)	現存長 4 現存幅 4 現存厚 3.5 重量 61		
第30図7	4D区C7 SD1144 3層	木製品 板材	現存長 15.9 最大幅 3.7 最大厚 0.5		
第30図8	4D区C7 SD1144 上位	木製品 板材	最大長 23.7 最大幅 6.6 最大厚 0.5		1ヶ所穿孔あり
第30図9	4D区C7 SD1144 上位	凝灰岩 磨石	長さ 10.1 幅 11 厚さ 5.6 重量 615		縁辺部に被熱痕(煤付着)
第30図10	4D区C8 SD1144 下半	流紋岩 磨石	現存長 13.9 現存幅 8.9 現存厚 4.9 重量 638		表面は下部欠損後に煤付着
第30図11	4D区B8 SD1144 下半	花崗岩 台石	長さ 15.3 現存幅 18.7 厚さ 9.9 重量 3720		
第31図7	4D区C2 SX1109	土師質 平瓦	10×7角	凸面:格子タタキ目痕 凹面:布庄痕	胎土:1mmの大砂粒子(石英など)含む 焼成:良好 色調:灰黄褐色
第31図12	4D区B4 SX1127	凝灰岩 有孔石	現存長 14.5 現存幅 15.4 現存厚 7.5 重量 1210		片面に磨り痕をもつ面あり中央に長方形(隅円)の穿孔あり
第31図18	4D区B5 SX1130	安山岩 台石	現存長 15.3 現存幅 16.2 現存厚 6		上面の一部に炭化物付着
第38図204	4A区B21 3層	土製品 土錘	長さ 4 最大径 0.9 孔径 0.3		紡錘形
第38図205	4A区B20 2層	土製品 土錘	長さ 4.3 最大径 0.9 孔径 0.3		紡錘形
第38図206	4B区B11 3層	土製品 土錘	現存長 2.8 現存幅 1.8 孔径 (0.5)		紡錘形
第38図207	4C区D6 3層	土師器底部転用品 土製円盤	直径 5 孔径 10.6	外面側:回転ナデ、底部(回転糸切り) 内面側:回転ナデ	底部外面側からの穿孔は未貫通 胎土:微砂粒子(石英・長石・角閃石など)多く含む 焼成:普通 色調:にぶい黄橙色
第38図208	4D区B3 2層	鉄製品 錐?	最大長 8.95 最大幅 1.15 最大厚 1		

挿図番号	出土地点	種器 別種	計測値 (cm・g) 現存幅	成形・調整・文様	備考
第38図209	4D 区C7 2層	鉄製品 火箸?	現存長 5.3 現存厚 2.05		
第38図210	4D 区D3 3層	鉄製品 用途不明品	現存長 3.7 現存厚 0.35		
第38図211	4D 区D8 2層	須恵質 丸瓦狭端部	8×6角	凸面: 格子目タタキ痕 凹面: 糸切り痕・側板痕・回布圧痕	胎土: 1mm以下の砂粒子 (石英・長石など)含む 焼成: 良好 色調: 灰色
第38図212	4D 区B2 3層	須恵質 丸瓦側辺部	7.5×7角	凸面: ヨコナデ 凹面: 糸切り痕・布圧痕・布筒綴じ合 わせ目痕 側面の凹面側は面取りされている	胎土: 1.5mm以下の砂粒子 (石英・長石など)含む 焼成: 良好 色調: 凸面灰色・凹面に ぶい黄褐色
第38図213	4D 区D3 2層	土師質 丸瓦側辺部	10.5×6.5角	凸面: ヨコナデ 凹面: 糸切り痕・布圧痕 側面の凸凹両方に面取りあり	胎土: 2mm以下の砂粒子 (石英など)含む 焼成: 良好 色調: 凸面暗灰色・凹面 にぶい橙色
第38図214	4D 区E4 2層	須恵質 平瓦	6×5.5角	凸面: 格子目タタキ痕→ヨコナデによ る磨り消し 凹面: 布圧痕	胎土: 微砂粒子(石英・ 長石など)含む 焼成: 普通 色調: 灰色
第38図215	4D 区C2 2層	土師質 平瓦	7×5.5角	凸面: 格子目タタキ痕→ヨコナデによ る磨り消し 凹面: 布圧痕	胎土: 8mm以下の砂粒子 (長石など)含む 焼成: 普通 色調: ぶい黄橙色～橙 色
第38図216	4C 区C4 3層	須恵質 平瓦	7×5.5角	凸面: タタキ→ナデ消し 凹面: 布圧痕	胎土: 微砂粒子(石英・ 長石など)含む 焼成: 良好 色調: 灰色
第38図217	4B 区B15 3層	土師質 平瓦	10×6.5角	凸面: タテ縄タタキ痕 凹面: 布圧痕	胎土: 1mm以下の砂粒子 (石英など)含む 焼成: 普通 色調: 灰白色
第38図218	4C 区C4 2層	須恵質 平瓦	8×5角	凸面: タテ縄タタキ痕 凹面: 布圧痕	胎土: 1mm以下の砂粒子 (石英・長石など)含む 焼成: 普通 色調: 黄灰色
第38図219	4D 区B3 2層	須恵質 平瓦	4×3角	凸面: タテ縄タタキ痕 凹面: 布圧痕	胎土: 微砂粒子(石英など)含む 焼成: 普通 色調: 灰色
第39図220	4B 区C13 2層	流紋岩 石籠状石器	長さ 6 厚さ 1.4 一部欠損	幅 5.9 重量 65	表面の自然面は風化のた め軟質となり線状のキズ 痕あり
第39図221	4B 区E17 2層	玉髓 石核	長さ 3.2 厚さ 2.2	幅 4.3 重量 32	
第39図222	4B 区B17 2層	玉髓 石核	長さ 6.3 厚さ 3.8	幅 5.4 重量 100	自然面が残る
第39図223	4D 区B8 2層	玉髓 石核	長さ 4.2 厚さ 3.2	幅 4.6 重量 72	敲打痕あり 全体に磨滅
第39図224	4B 区B7 2層	碧玉 楔形石器	長さ 2.4 厚さ 1.7	幅 2.7 重量 12	縁辺は刃潰し
第39図225	4B 区B6 2層	玉髓 敲石	長さ 3.2 厚さ 2.1	幅 3.7 重量 27	縁辺の凸部に敲打痕著し い
第39図226	4B 区C11 2層	玉髓 石核	長さ 2.8 厚さ 2.2	幅 2.5 重量 20	
第39図227	4B 区A14 2・3層	黒曜石 石核?	長さ 4.2 厚さ 2.2	幅 3 重量 28	
第39図228	4B 区C13 2層	玉髓 石核	長さ 2.5 厚さ 2	幅 2.65 重量 18	
第39図229	4D 区D5 6層	玉髓 楔形石器?	長さ 2.2 厚さ 1.4	幅 3.4 重量 13	上下縁辺部に敲打痕あり
第39図230	4D 区C8 2層	玉髓 調整剥片	長さ 3 厚さ 0.8	幅 3.4 重量 9	
第39図231	4B 区C8 3層	玉髓 剥片	長さ 5.3 厚さ 1	幅 2.4 重量 0.8	両側辺に刃こぼれあり
第39図232	4D 区D8 2層	安山岩 石錐?	長さ 6.2 厚さ 1	幅 5.65 重量 60	縁辺に打ち欠き部あり
第39図233	4D 区D7 2層	安山岩 石錐?	長さ 6.4 厚さ 1.3	幅 5.5 重量 70	表面に打ち欠き部あり
第39図234	4B 区B10 2層	凝灰岩 砥石	現存長 2 現存厚 0.75	現存幅 2.2 重量 8	玉素材の可能性あり 方形状 使用面は2面(上面と側面) 側面は擦り切り痕のよう にみられる

挿図番号	出土地点	種別 器	計測値 (cm · g) 残存率	成形・調整・文様	備考
第39図235	4B 区B16 3層	流紋岩 加工痕ある石器	現存長 2.9 厚さ 1 現存幅 5 重量 18		
第39図236	4D 区B5 3層	凝灰岩 砥石?	現存長 4.15 厚さ 0.5 現存幅 3.1 重量 10		石錆の二次使用? 使用面は2面 縁辺に小さな抉りあり
第39図237	4D 区D8 2層	凝灰岩 砥石	現存長 7.1 厚さ 7.5 現存幅 2.9 重量 20		3面の使用面(中研ぎ1面・ 仕上げ研ぎ2面) 線状痕あり
第39図238	4D 区B6 2層	凝灰岩 砥石片	現存長 7.7 現存厚 3.35 現存幅 6.5 重量 140		ほぼ全面使用(荒研ぎ～ 仕上げ研ぎ)
第39図239	4D 区E7 2層	凝灰岩 砥石	現存長 4.2 厚さ 2.4 幅 3.8 重量 68		使用面は4面(中研ぎ2面・ 仕上げ研ぎ2面)
第39図240	4D 区B3 2層	凝灰岩 砥石	現存長 8.3 厚さ 2.6 幅 5.6 重量 160		4面の使用面(荒研ぎ～仕 上げ研ぎ) 溝状痕あり
第40図241	4D 区C5 2層	凝灰岩 砥石	現存長 3.75 厚さ 2.3 現存幅 4 重量 48		2面の使用面(中研ぎ・仕 上げ研ぎ)
第40図242	4A 区B23 2層	砂岩 砥石	現存長 6.5 厚さ 1.5 幅 4.4 重量 80		全面使用(荒研ぎ～仕上 げ研ぎ)
第40図243	4B 区B16 2層	凝灰岩 砥石	現存長 9 厚さ 2 幅 6.6 重量 115		全面使用(中研ぎ1面・仕 上げ研ぎ3面)
第40図244	4C 区B4 3層	凝灰岩 砥石	現存長 5.8 厚さ 0.7 現存幅 3.9 重量 21		全面使用(風化のため不 明瞭) 線状痕(擦り切り痕?)あ り
第40図245	4D 区D5 2層	凝灰岩 砥石	現存長 13.6 現存厚 2.3 現存幅 6.3 重量 100		仕上げ研ぎ 線状痕が残る
第40図246	4D 区B8 2層	砂岩 砥石	現存長 8.1 厚さ 6.8 現存幅 6.05 重量 375		全面使用(荒研ぎ～仕上 げ研ぎ)
第40図247	4C 区B2 3層	凝灰岩 砥石	現存長 8.3 現存厚 6.1 現存幅 5.4 重量 375		2面の使用面(荒研ぎ～仕 上げ研ぎ)
第40図248	4D 区C4 2層	凝灰岩 砥石?	現存長 8.1 厚さ 2.6 現存幅 6.8 重量 220		中研ぎ
第40図249	4D 区E5 2層	凝灰岩 砥石	現存長 9.8 厚さ 3.55 現存幅 7 重量 230		使用面は3面(中研ぎ・仕 上げ研ぎ) 方向の一定しない線状痕 あり
第40図250	4B 区D7 2層	凝灰岩 砥石	現存長 12.4 現存厚 6.5 現存幅 8.1 重量 600		使用面(荒研ぎ・仕上 げ研ぎ) 線状痕あり
第40図251	4D 区E8 2層	凝灰岩 硯の形代	長さ 6.8 厚さ 3.4 幅 4.5 重量 140		砥石の転用?
第41図252	4D 区B6 2層	砂岩 砥石	現存長 5.6 厚さ 2.9 幅 5.3 重量 110		全面使用(荒研ぎ・中研 ぎ) V字状の鋭い溝あり
第41図253	4D 区C2 2層	砂岩 砥石	現存長 5.5 現存厚 5.3 現存幅 4.1 重量 90		全面使用(荒研ぎ～仕上 げ研ぎ)
第41図254	4B 区D7 2層	流紋岩 砥石	現存長 7.85 現存厚 3.2 現存幅 3.1 重量 85		使用面は3面(中研ぎ・仕 上げ研ぎ) 使い込んだ為か凹みが見 られる
第41図255	4B 区B9 2層	凝灰岩 砥石	現存長 5.7 厚さ 3.2 現存幅 5.5 重量 90		3面の使用面(中研ぎ・仕 上げ研ぎ)
第41図256	4B 区A17 3層	安山岩 砥石	現存長 6.2 厚さ 2.2 現存幅 5.5 重量 95		荒研ぎ～仕上げ研ぎ
第41図257	4B 区C15 3層	砂岩 砥石	現存長 9.4 厚さ 2.45 現存幅 6 重量 150		全面使用(中研ぎ・仕上 げ研ぎ) 線状痕(刃キズ)あり
第41図258	4D 区C8 2層	流紋岩 砥石	現存長 7.6 厚さ 5.2 現存幅 7 重量 455		2面の使用面(仕上げ研ぎ)
第41図259	4B 区B13 2層	砂岩 砥石	長さ 17.1 厚さ 7.5 幅 10.5 重量 1520	舟形の断面	全面使用(荒研ぎ～仕上 げ研ぎ)
第41図260	4D 区D-E6 6層	流紋岩 砥石	現存長 10.8 厚さ 6.3 幅 10.3 重量 900		3面の使用面(中研ぎ)

挿図番号	出土地点	種器 別種	計測値 (cm · g) 残存率	成形・調整・文様	備考
第41図261	4D 区C8 2層	流紋岩 砥石	現存長 13.7 現存厚 3.4 重量 305		3面の使用面(仕上げ研ぎ)
第42図262	4B 区D8 2層	流紋岩 台石	現存長 16.1 厚さ 8.2 重量 1480		上面のみ使用 線状痕あり
第42図263	4B 区D10 2層	流紋岩 研磨痕ある礫	長さ 18 厚さ 6.95 重量 1500		切り込んだような痕(刃物痕?)あり 筋状の痕、擦痕あり 煤付着
第42図264	4D 区C8 2層	流紋岩 砥石	長さ 17.2 厚さ 8.3 重量 1970		ほぼ全面使用面(荒研ぎ ~仕上げ研ぎ) 石皿の転用?
第42図265	4D 区E6 2層	流紋岩 砥石	現存長 14 厚さ 3.8 重量 930		全面使用(中研ぎ) 線条痕あり
第42図266	4C 区C6 3層	花崗岩 砥石	長さ 12.1 厚さ 6 重量 810		上面のみ確実な使用面 (仕上げ研ぎ) 全体的に風化が著しい
第42図267	4D 区B8 2層	花崗岩 研磨痕ある礫	長さ 21.1 厚さ 10.6 重量 2950		
第42図268	4B 区D8 2層	流紋岩 砥石	現存長 7.1 厚さ 3.6 重量 310		打製石斧の転用
第42図269	4D 区E3 6層	流紋岩 砥石	現存長 8.1 厚さ 1 重量 115		2面使用(中研ぎ・仕上げ 研ぎ) 刃部をもつ石器の転用?
第43図270	4D 区D5 2層	木製品 器の底部	底径 6.4	全面黒漆塗布 見込みに一部赤漆残存	
第43図271	4D 区 出土地不明	木製品 椀胴部	7.5×4.5角	外: 黒漆 内: 赤漆	
第43図272	4A 区B20 2層	木製品 椀胴部	5×4.1角	外: 黒漆塗布の上に朱漆で鳥を描く 内: 黒漆	
第43図273	4D 区B2 2層	木製品 算盤玉状	長さ 1.7 厚さ 0.45 幅 1.4 孔径 0.4	ほぼ円形で中央に穿孔	断面は算盤玉状
第43図274	4C 区D2 3層	木製品 折敷の底板?	残存長 8.8 厚さ 0.6 幅 6.1	長方形 一角を丸く切り取る	小孔あり?
第43図275	4C 区D4 3層	木製品 小判型木皿	長さ 10.3 厚さ 0.5 幅 6.8	斜めに面取り	
第43図276	4B 区C14 2層	木製品 独楽	長さ 5.4 直径 4.7	上部は平坦なカット、下部は傾斜する 細かいカット	軸をもたない 上面には中心から外れて 小さな凹みあり
第43図277	4C 区D3 6層	木製品 角棒状品	現存長 13.5 厚さ 1.4 幅 2.35		柾目に沿って穿孔付近の 皮が薄く剥ぎ取られる
第43図278	4D 区D5 2層	木製品 横槌	長さ 10.3 厚さ 3.1 幅 3.2		下方の先端部分が使用の 為?わずかに磨滅
第43図279	4D 区D3 2層	木製品 連歯下駄	現存台長 17.7 現存台幅 8.4 現存歯高 前 4.4 後 3.1	台裏面は中央が少し膨らむ	台部は前歯より前方は全 て欠損 後歯は下半分を欠損 横緒穴は一部を残し傾斜 不明 台部外面は二次的に火を 受け炭化に近い状態
第43図280	4D 区D3 2層	木製品 差歎下駄	現存台長 19.3 現存台幅 7.3 現存歯高 前 2.55 後 2.5	台の一部が斜めに切断されている(意図的?)	露卯下駄 全体的に磨耗
第43図281	4D 区C5 2層	木製品 板材	長さ 15.7 厚さ 0.75 幅 8.6	上下端は鋸で切断?	抉り込みをもつ
第43図282	4D 区B8 2層	木製品 板材	長さ 7.7 厚さ 1.5 幅 5.2		
第43図283	4D 区C4 2層	木製品 板材	長さ 9.8 厚さ 1.2 幅 5.25	表面は面が整っているが裏面は粗い 上下面とも鋸で切断	表面に線状痕あり
第43図284	4D 区B8 2層	木製品 板材	現存長 11.6 厚さ 0.8 幅 3.7	下端は刃状に削る	
第43図285	4C 区C5 6層	木製品 板材	長さ 9.2 厚さ 0.3 幅 2.7		
第43図286	4B 区E17 2層	木製品 板材	長さ 11.7 厚さ 0.3 幅 2.5	上方は将棋の駒のように加工	小孔あり

4区出土遺物観察表3

番号	種類	地区	グリッド	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度	残存率(%)	備考
表1-1	楕形鍛治滓(中・含鉄)	4B区	C7	2	7.80	10.15	3.20	288.90	4	H(○)	100	平面、不整長楕円形。底部に多くの粉炭付着。木炭痕あり。
表1-2	楕形鍛治滓(小・含鉄)	4C区	D4	2	8.70	7.05	3.00	144.73	6	錆化(△)	100	平面、不整長楕円形。底部に木炭付着。上面中央が凹状になっている。
表1-3	楕形鍛治滓(小・含鉄)	4B区	D7	2	6.20	7.30	2.20	103.89	4	H(○)	100	平面、不整楕円形。緻密。
表1-4	楕形鍛治滓(小・含鉄)	4C区	B2	2・3	9.35	7.20	3.55	175.63	3	H(○)	90	平面、不整五角形。上面3ヶ所、側面1ヶ所の木炭痕残る。
表1-5	楕形鍛治滓(極小・含鉄)	4C区	E5	3	5.45	4.30	2.60	69.92	4	H(○)	100	平面、楕円形。上面に木炭付着。緻密。
表1-6	羽口(鍛冶)	4B区	D8	2	3.85	4.05	2.05	27.62	1	なし	—(破片)	羽口先端上部から側部。黒色ガラス質化部分あり。
表1-7	羽口(鍛冶)	4B区	C9	2	5.00	4.70	3.20	55.46	5	なし	—(破片)	羽口先端下部。
表1-8	粘土質溶解物	4C区	D3	3	3.45	3.50	2.50	30.42	2	なし	—(破片)	粉炭が多く付着する。
表1-9	鉄製品(鍛造品)	4C区	D6	2	6.20	3.50	0.70	43.13	7	特L(★)	—(破片)	鍛造により板状に成形。
表1-10	鉄製品(鍛造品)	4B区	C8	2	2.15	2.60	1.40	19.21	7	L(●)	—(破片)	鍛造により円形に成形。
表1-11	楕形鍛治滓(中)	4D区	E4	2	9.80	7.35	3.00	221.42	3	なし	100	平面、不整長楕円形。側面に1ヶ所の木炭痕残る。
表1-12	楕形鍛治滓(中)	4D区	C4	2	9.20	7.60	2.90	229.08	3	なし	100	平面、不整半円形。上面に4ヶ所の木炭痕残る。
表1-13	楕形鍛治滓(中)	4D区	D4	2	9.70	6.80	3.60	255.88	4	なし	100	平面、不整半円形。底面に1ヶ所の木炭痕残る。
表1-14	楕形鍛治滓(中)	4D区	D2	3	10.10	12.60	3.60	322.55	5	なし	100	平面、不整四角形。上面に4ヶ所の木炭痕残る。
表1-15	楕形鍛治滓(小)	4D区	C4	2	5.00	4.00	2.85	67.22	5	なし	50	平面、不整半円形。緻密質である。
表1-16	楕形鍛治滓(小)	4D区	E7	2	6.00	5.10	2.70	107.69	4	なし	80	平面、不整半円形。上面・側面に1ヶ所の木炭痕残る。
表1-17	楕形鍛治滓(小)	4D区	C3	3	7.60	5.90	2.70	125.11	3	なし	90	平面、不整長楕円形。側面に多くの粉炭が付着する。
表1-18	楕形鍛治滓(小)	4D区	E6	2	6.50	6.50	3.30	110.61	2	なし	100	平面、不整四角形。流動状の鍛治滓。底面は、緩やかにカーブする。上面に1ヶ所の木炭痕あり。
表1-19	楕形鍛治滓(極小)	4D区	C6	2	5.30	5.80	1.85	53.58	4	なし	80	平面、不整楕円形。上面、底面に1ヶ所ずつ木炭痕あり。
表1-20	楕形鍛治滓(極小)	4D区	C4	2	5.70	4.50	2.20	58.15	4	なし	100	平面、不整長楕円形。上面木炭痕、工具痕1ヶ所残る。緻密質である。
表1-21	楕形鍛治滓(極小)	4D区	C3	3	7.40	5.80	2.30	74.63	4	なし	90	平面、不整長楕円形。上面に1ヶ所の木炭痕痕残る。
表1-22	楕形鍛治滓(極小)	4D区	B7	S X1140(中)	4.20	4.00	1.70	28.05	4	なし	100	平面、不整四角形。上面2ヶ所、底面4ヶ所の木炭痕残る。緻密質である。
表1-23	楕形鍛治滓(極小)	4D区	C5	3	4.60	3.60	1.40	30.11	4	なし	100	平面、不整三角形。側面に木炭付着。
表1-24	楕形鍛治滓(極小)	4D区	B8	2	4.90	4.50	1.60	29.51	3	なし	80	平面、不整半円形。底面に4ヶ所の木炭痕残る。
表1-25	楕形鍛治滓(極小)	4D区	E5	2	4.20	3.70	1.10	40.35	1	なし	50	平面、不整半円形。かなり緻密質である。
表1-26	鍛治滓	4D区	C2	2	3.30	2.35	1.20	5.51	2	なし	—(破片)	平面、不整長楕円形。緻密質である。
表1-27	鍛治滓	4D区	E7	2	2.00	2.40	1.60	11.20	4	なし	—(破片)	平面、不整長楕円形。砂鉄付着
表1-28	鍛治滓	4D区	C3	2	3.80	2.80	1.80	8.07	4	なし	—(破片)	平面、不整長楕円形。側面に木炭付着。
表1-29	楕形鍛治滓(中・含鉄)	4D区	C2	2	7.60	5.60	3.20	113.95	5	錆化(△)	90	平面、不整長楕円形。側面に木炭付着。

番号	種類	地区	グリッド	層位・遺構	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度	残存率(%)	備考
表 1-30	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	4D区	C 3	S D 1112	8.70	7.20	3.40	199.33	4	錆化(△)	90	平面、不整四角形。側面、底面に木炭付着。全面に砂鉄付着。
表 1-31	椀形鍛冶滓(中・含鉄)	4D区	C 5	2	10.50	8.40	2.70	233.15	3	錆化(△)	100	平面、不整円形。底面に木炭痕残る。木炭付着。
表 1-32	炉壁(鍛冶炉)	4D区	B 4	2	4.70	4.40	4.60	41.86	1	なし	—(破片)	表面以外全て破面。胎土は、2mm以下の砂粒を含む緻密な粘土。
表 1-33	羽口(鍛冶)	4D区	C 3・4	3	4.7	3.50	7.00	71.39	2	なし	—(破片)	羽口先端上部(天井部)である。胎土は、2mm以下の砂粒を含む緻密な粘土。
表 1-34	羽口(鍛冶)	4D区	C 4	2	3.00	6.10	5.10	61.31	4	なし	—(破片)	羽口先端上部(天井部)である。羽口内部にスマキ痕が残る。胎土は、緻密。
表 1-35	羽口(鍛冶)	4D区	C 4	2	5.50	6.30	3.40	71.75	2	なし	—(破片)	羽口先端下部である。内部先端にスマキ痕残る。
表 1-36	羽口(鍛冶)	4D区	B 4	3	5.50	5.40	3.70	85.14	2	なし	—(破片)	上部から底部にかけての側面部分である。外面は、緑色にガラス質化している。
表 1-37	粘土質溶解物	4D区	B 2	2	4.60	4.00	4.60	38.89	1	なし	—(破片)	全体的に流動し、黒色ガラス質化している。1cm大の石が付着している。
表 1-38	粘土質溶解物	4D区	C 2	3	5.10	6.00	4.30	63.98	3	なし	—(破片)	全体的に流動している。木炭痕が3ヶ所残る。
表 1-39	鉄製品(鍛造品)	4D区	C 5	2	1.10	1.90	0.50	5.34	7	L(●)	—(破片)	刀子の先端部か?
表 1-40	鉄製品(鍛造品)	4D区	C 4	2	3.00	4.40	1.80	43.88	4	特L(★)	—(破片)	鉄斧か?
表 1-41	砥石か?	4D区	D 2	2	3.50	2.40	2.20	12.68	1	なし	—(破片)	石材不明。

第4章 5区の調査成果

第1節 調査の概要

今回の調査区は道路を挟んで南北2箇所に分かれている。道路の北側が「5A区」、道路の南側が「5B区」である。

5A区は平成17年度に調査を行った。北端は21グリッド、南端は32グリットである。長さは約50m、幅25m、面積は約1,250m²である。

5B区は平成18年度に調査を行なった。北端が33グリッド、南端が55グリッドである。長さは約100m、幅25m、面積は約2,500m²である。

いずれの調査区も、耕作土は重機掘削を行い、遺物包含層以下は手掘りによって調査を行った。その結果、調査区全域で古墳時代から中世にかけての遺構を確認したが、ほとんどが中世の遺構である。

また、『築山遺跡II』で報告した、e17～e20グリッドは、5B区のD44～D47グリットに相当する。

(高橋誠二)

1 基本層序（第57図）

本調査区の基本層序は2層で、1層が耕作土、2層が遺物包含層である。2層には弥生時代から近世までの遺物が含まれている。隣接調査区との土層対応関係であるが、北側に位置する4D区西壁5ラインとは、耕作土・床土が1層、5～6層が2層に対応する。南側に位置する2区西壁i7ラインとの比較では、1A・1C層が1層、3・3'層が2層に対応する。

(高橋誠二)

2 遺構とその出土遺物

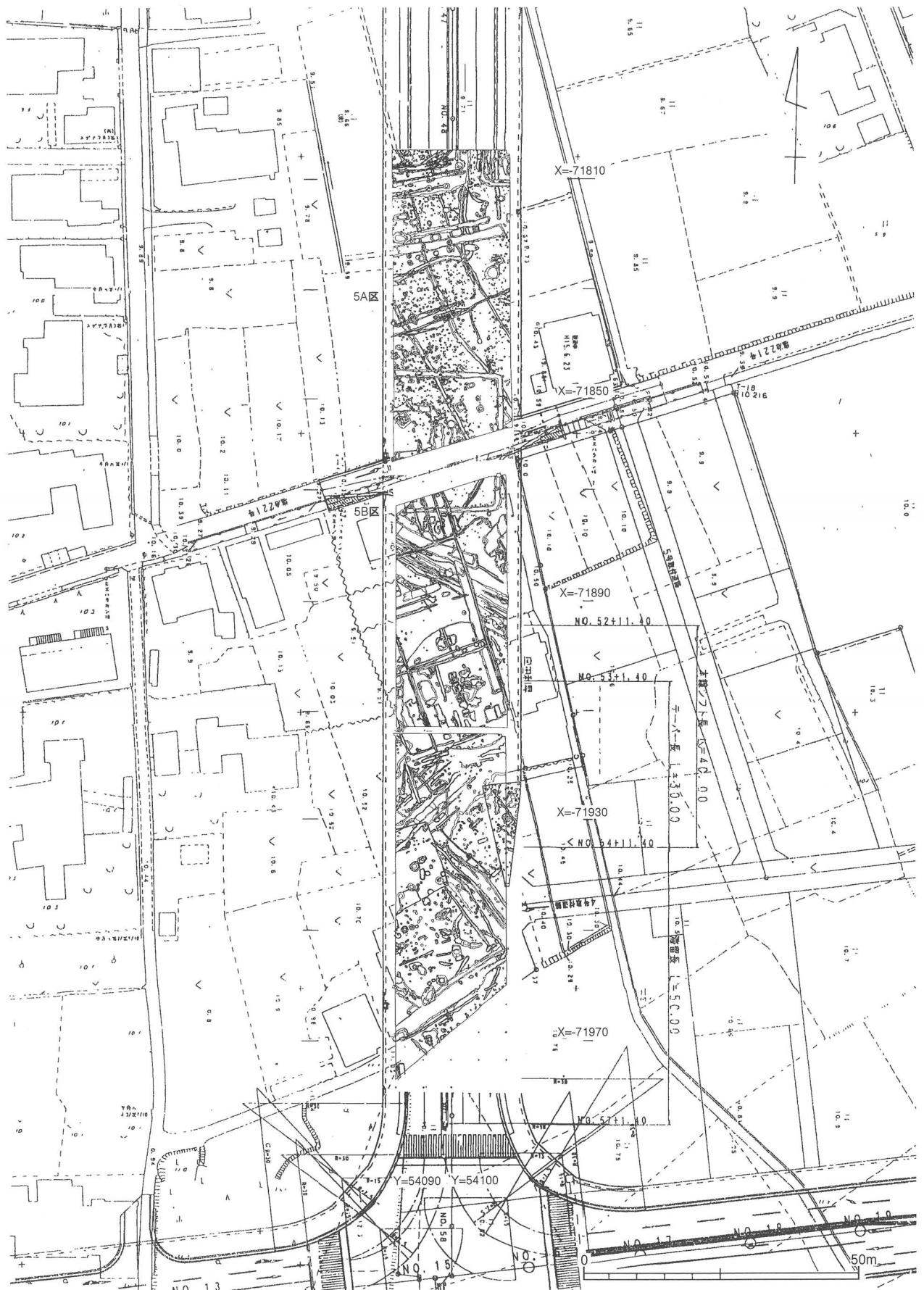
(1) 古墳時代の遺構とその遺物

古墳（第62～64図 図版26）

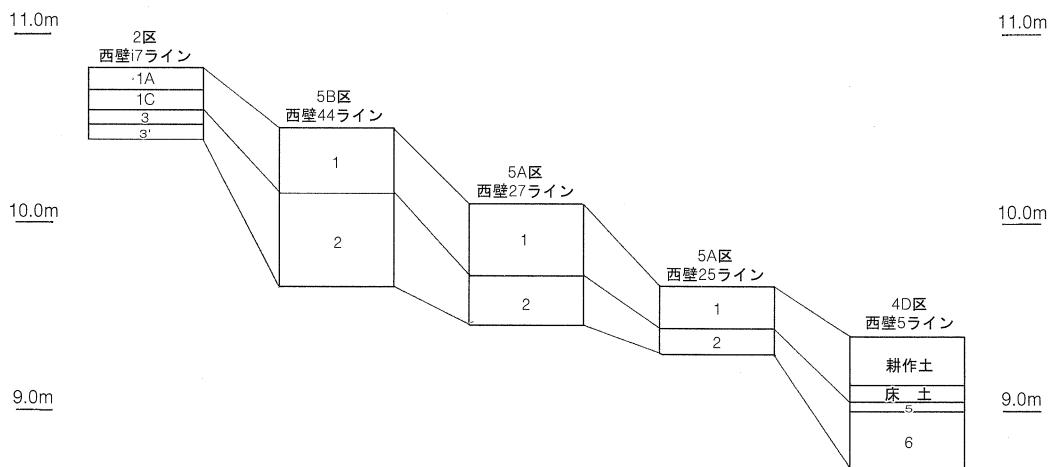
5号墳と円形周溝1を確認した。いずれも墳丘は削平されており、周溝底部がわずかに残る程度である。

5号墳（第60・62・63図 図版26）

39ライン～43ラインに位置する。墳丘側の周溝の立ち上がりを基点として、墳丘規模を推定すると、直径約23mの円墳である。周溝幅は、北側セクションで約2m、南側セクションで約3.5mを測る。埋土は北側セクション（A38・B39グリッド）で4層、南側セクション（C43・44グリッド）で7層認められた。北側セクションで確認した埋土は、いずれも古墳削平後の堆積である。南側セクションの1～3層は、古墳時代以降の溝の堆積土である。4～7層は古墳



第56図 5区全体図 (1 : 1,000)



第57図 5区土層模式図（1：40）

削平後の堆積である。

周溝南側（C44グリッド）からは、土師器の高杯（第63図1～6）や須恵器の蓋杯（第63図7～12）、壺（第63図13）、甕（第63図14）などが出土した。1～6の土師器の高杯には、杯部を脚部にはめ込んで接合するもの（1～3）と、杯部を脚部に置き粘土で接合するもの（4～6）とがある。7～10の杯蓋はいずれも口縁端部内面に1条の沈線を施している。7・9の天井部は中央からヘラケズリをしている。8は口縁端部がやや内湾している。天井部は外周のみヘラケズリをしている。11・12は杯身である。11の底部は12に比べ丸く仕上げている。13の壺は、口縁下端部に2条の凹線が入る。14の甕は口縁端部外面に面をもち、頸部には波状文を施す。

円形周溝1・S X2190（第61・64図）

C49・50グリッドに位置する。S D2182と重複しており、円形周溝1が作られた後、S D2182が作られている。

周溝規模は、外径約8mと小規模である。幅0.85m、深さ0.2mである。埋土は1層で、黒色粘質土である。周溝内から須恵器の杯身（第64図1）が出土している。出土状況より流れ込みと考えられる。底部は平底で、たちあがりはやや内傾している。 （高橋誠二）

（2）古代の遺構とその遺物

土坑墓（第65図 図版27）

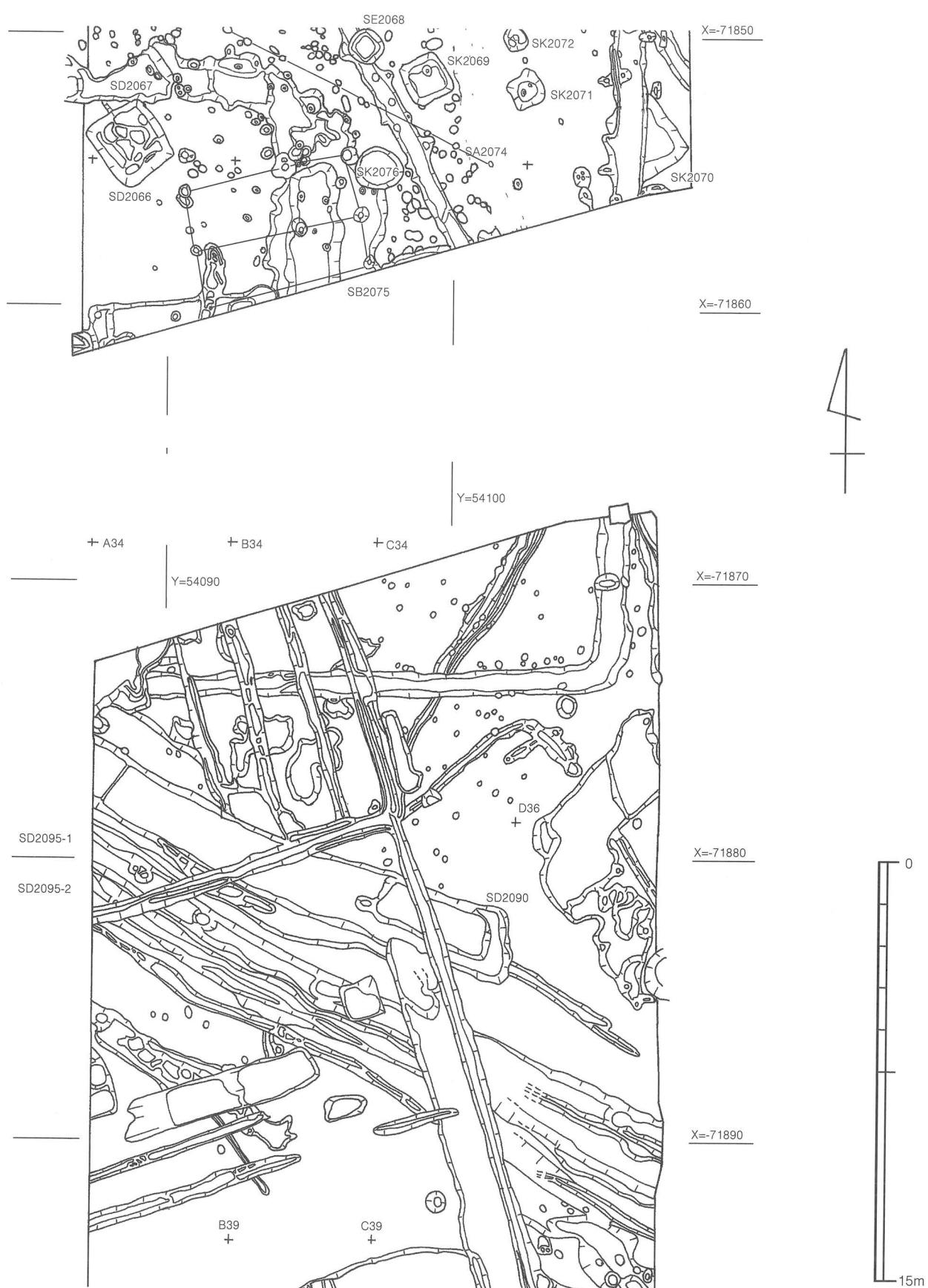
6基の素掘りの土坑を確認した。S X2174とS X2183は掘形と副葬品から土坑墓と判断した。他の土坑は、土坑墓の可能性が高い遺構である。

S K2164（第60・65図 図版27-1）

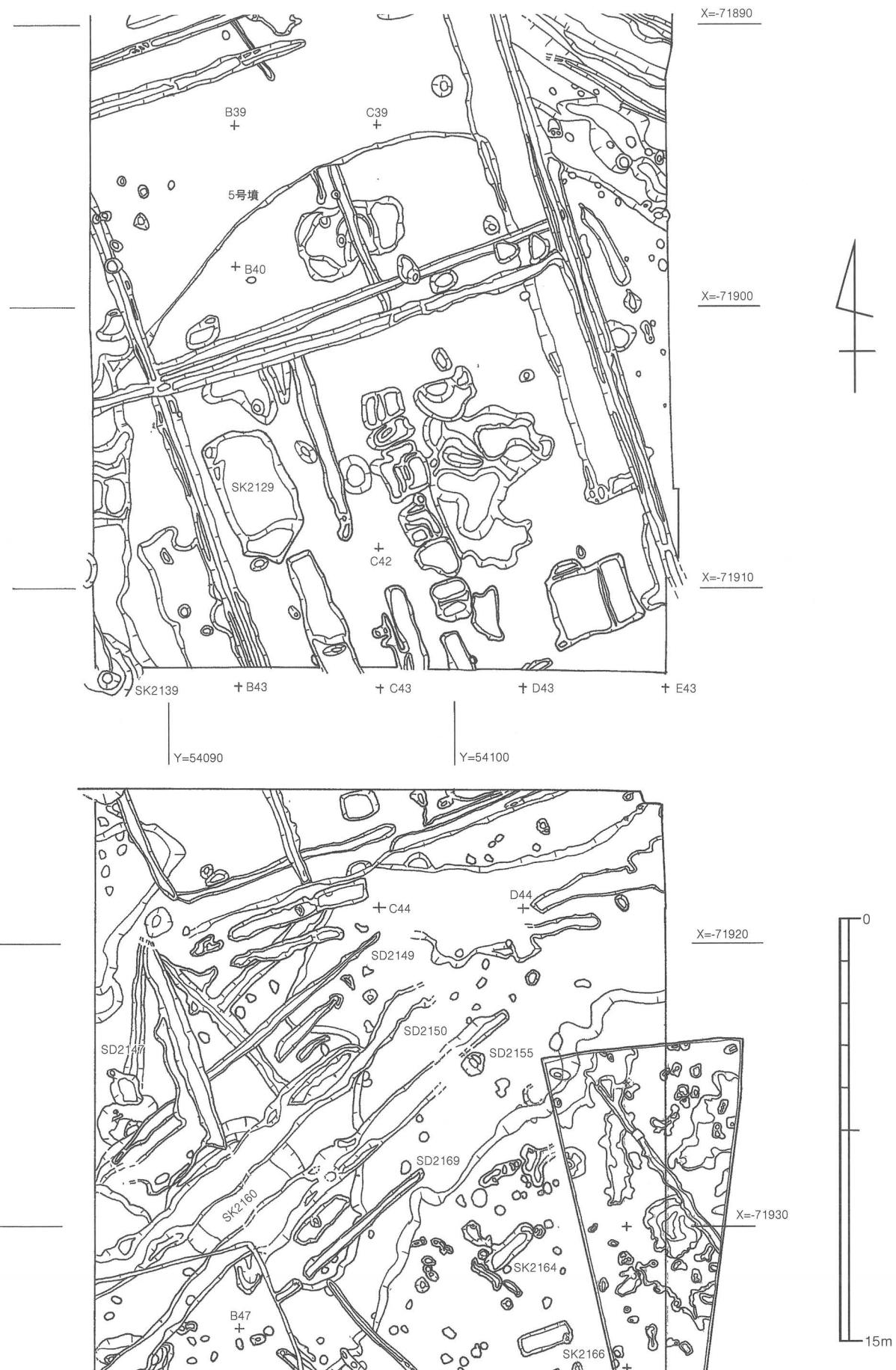
C46グリッドに位置する。S K2166の北3mにあり、主軸はN-42°-Eである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸2.1m、短軸0.6m、深さ0.25mである。埋土は2層で、1層は黒色粘質土、2層は黒褐色粘質土である。出土遺物はない。



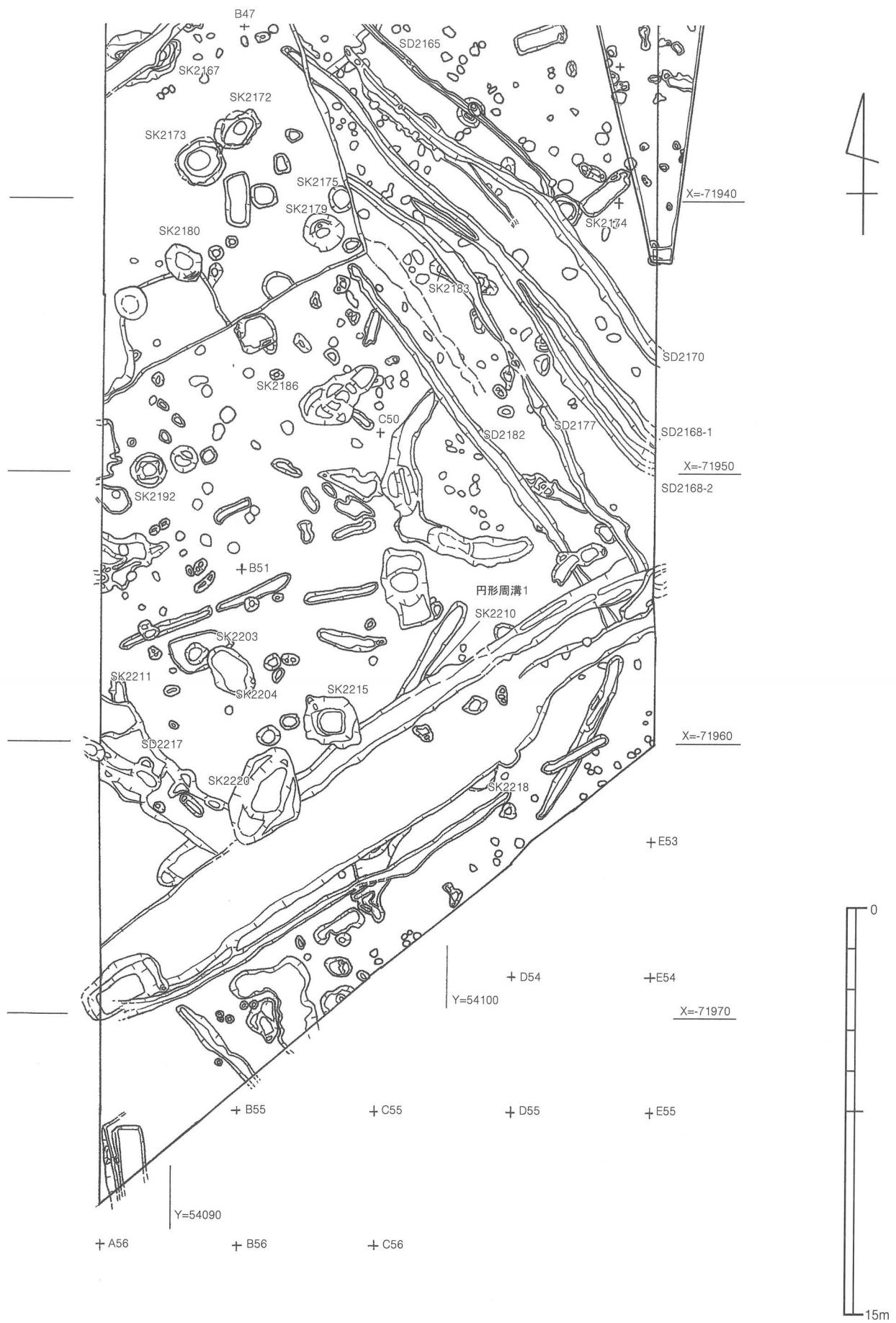
第58図 5 A区(1) 遺構図1 (1:200)



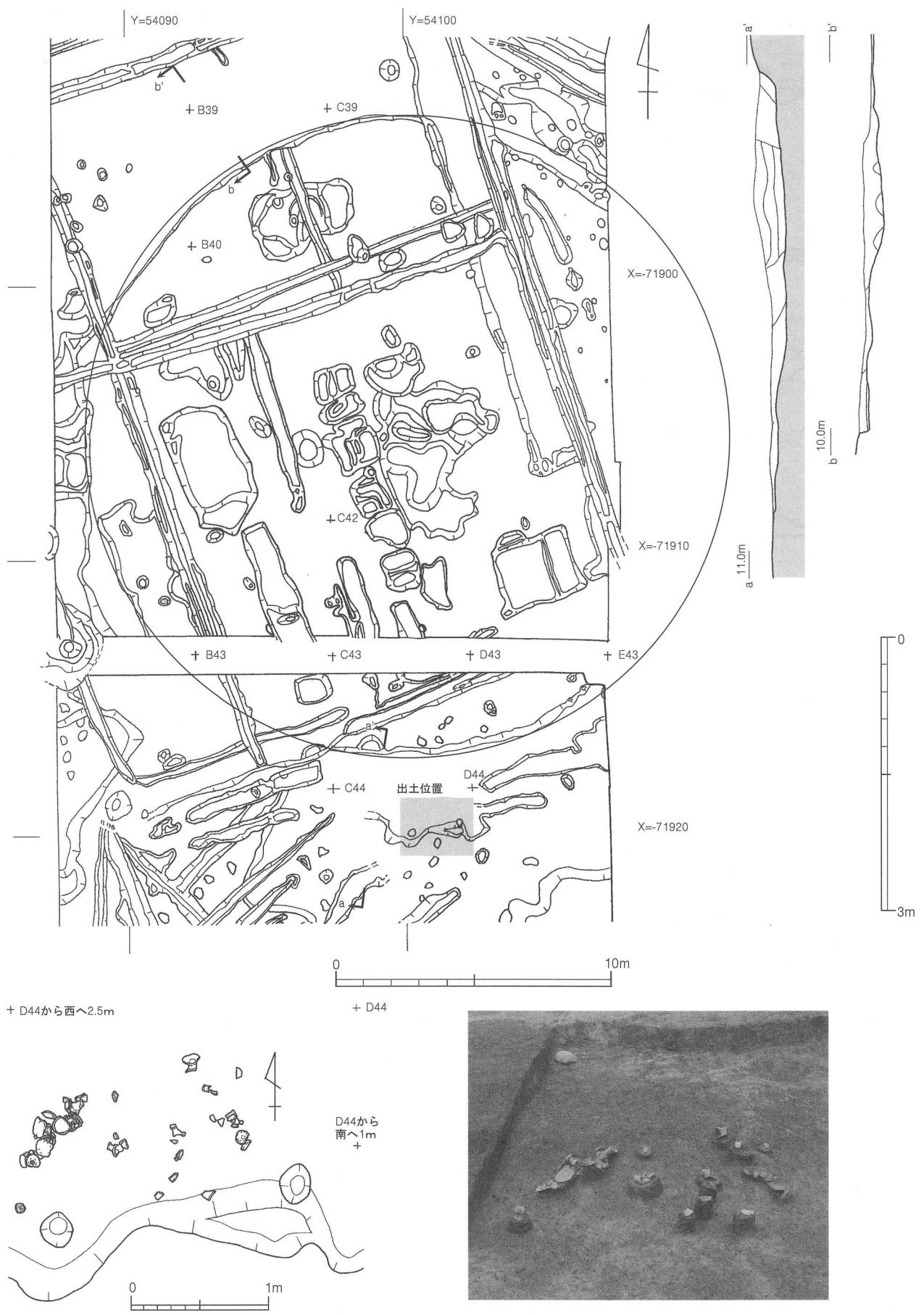
第59図 5A区(2)・5B区(1) 遺構図(1:200)



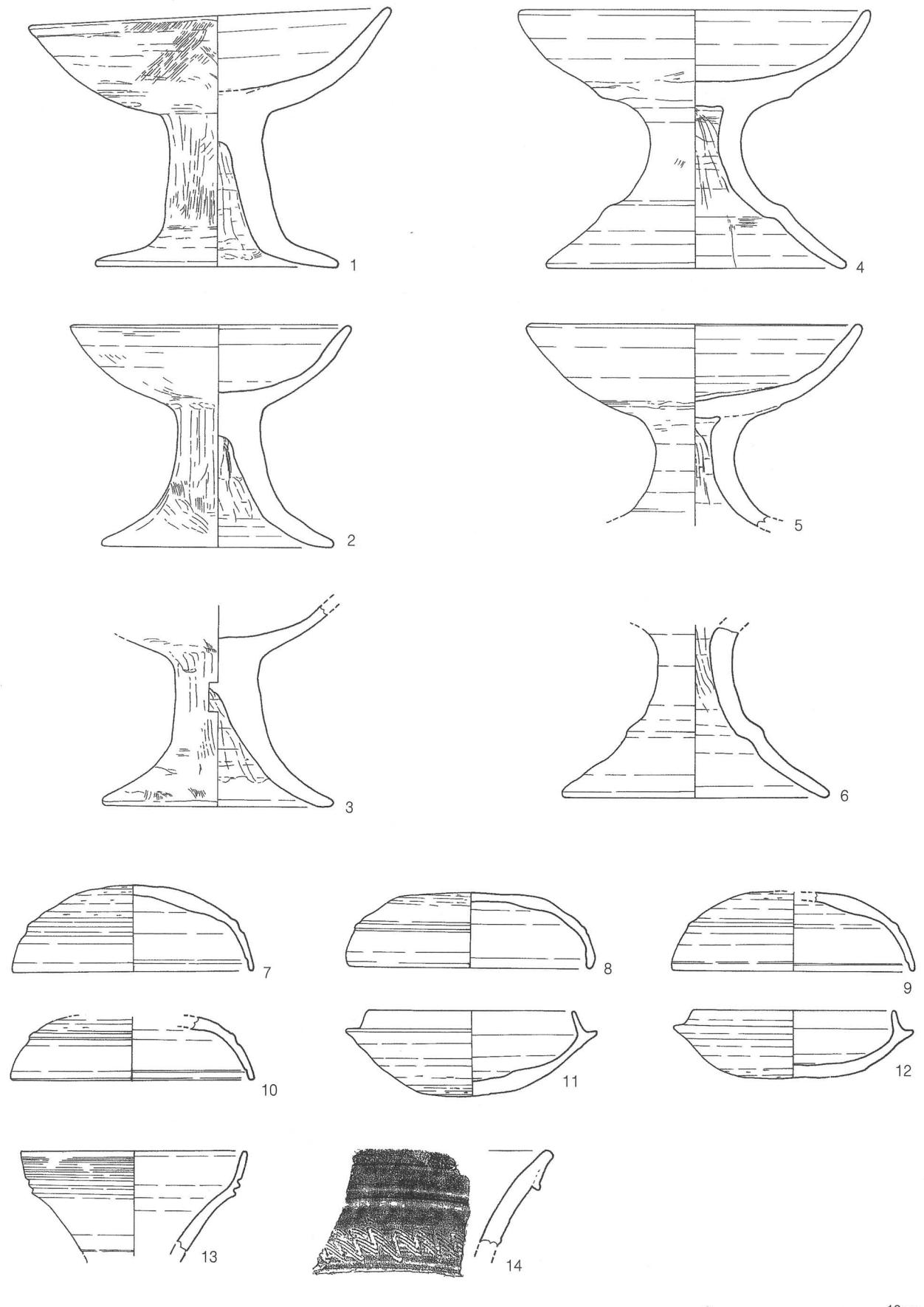
第60図 5B区(2)遺構図(1:200)



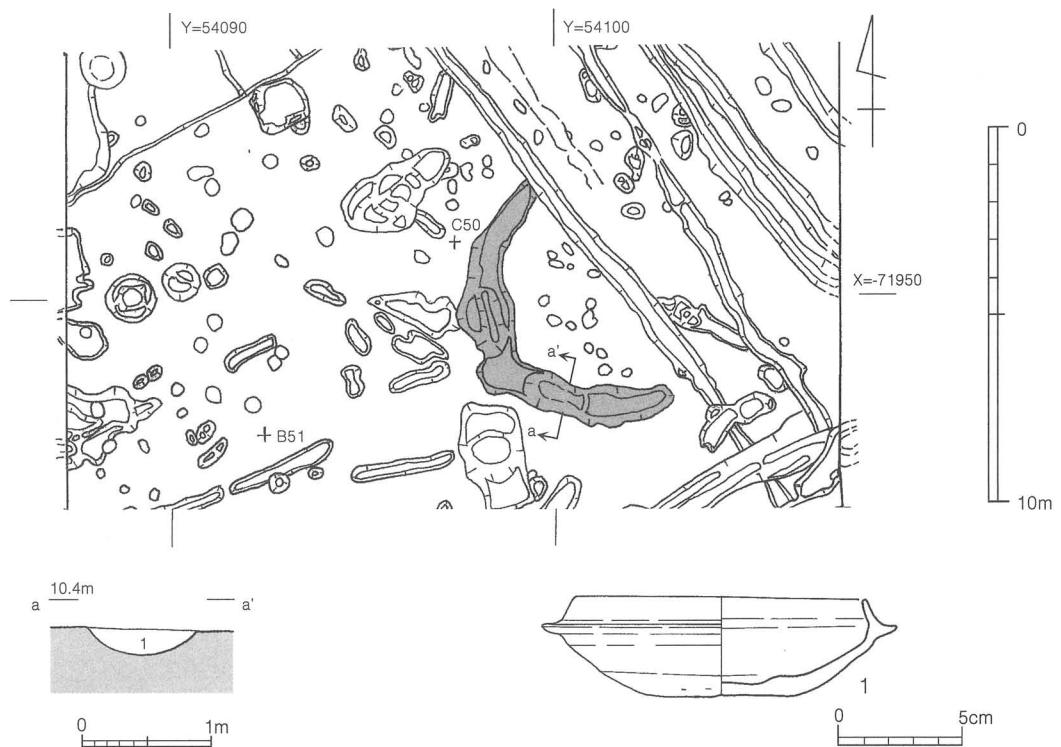
第61図 5B区(3)遺構図(1:200)



第62図 築山5号墳全体図（遺構 1:200 断面 1:60 出土状況 1:40）



第63図 築山 5号墳出土遺物実測図 (1 : 3)



第64図 円形周溝1の全体図と出土遺物実測図（遺構1：200 断面1：60 土器1：3）

S K2166（第60・65図 図版27-5）

D47グリッドに位置する。S K2164の南3mにあり、主軸はN-68°-Eである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸1.95m、短軸0.7m、深さは0.2mである。埋土は1層で黒色粘質土である。出土遺物はない。

S K2174（第61・65図 図版27-2）

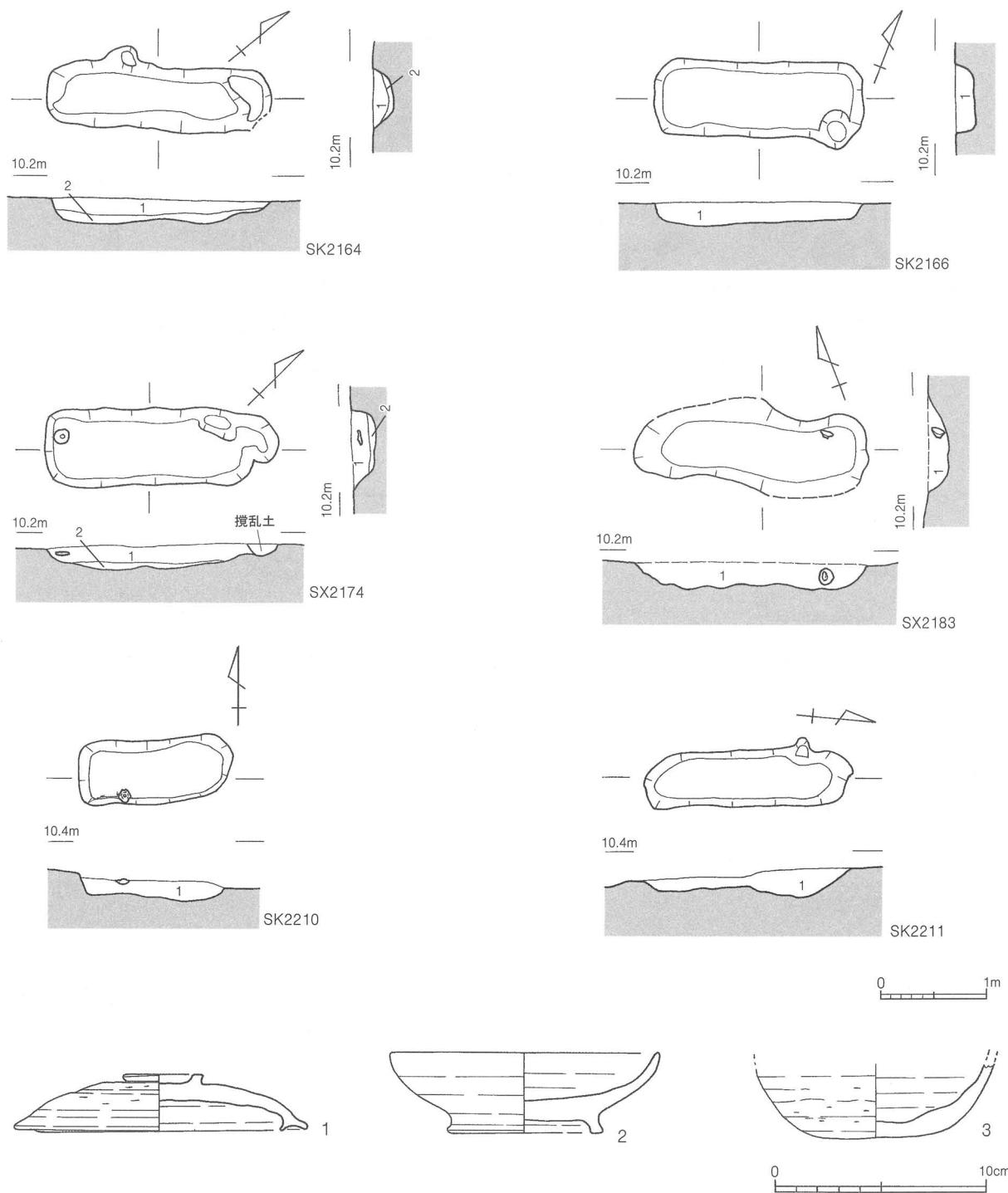
D48グリッドに位置する。S K2166の南6mにあり、主軸はN-46°-Eである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸2.2m、短軸は0.7m、深さは0.25mである。埋土は2層で、1・2層とも黒褐色粘質土である。1層より、須恵器の蓋（第65図1）が出土している。輪状つまみをもち、口縁部にはかえりをもつ。

S K2183（第61・65図 図版27-3・4）

C48グリッドに位置する。S D2177と重複しており、S K2183が作られたのちS D2177が作られている。主軸はE-19°-Sである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸2.15m、短軸0.9m、深さは0.2mである。埋土は1層で黒褐色土である。須恵器の高台付き杯（第65図2）が出土している。体部がやや内湾気味に立ち上がる。

S K2210（第65図 図版27-7・8）

C51グリッドに位置する。S D2199と重複しており、S K2210が作られたのちS D2199が作られている。主軸はE-1°-Sである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸1.45m、短軸0.6m、深さ0.15mである。埋土は1層で黒色土である。須恵器の壺（第65図3）の底部が出土してい



第65図 古代の遺構と遺物実測図（遺構 1 : 60 土器 1 : 3）

る。底部中央から削っている。

SK2211 (第65図 図版27-6)

A51グリッドに位置する。SD2217と重複しており、SK2211が作られた後、SD2217が作られている。主軸はN-6°-Wである。掘形は隅丸長方形で、規模は長軸1.95m、短軸0.55m、深さ0.25mである。埋土は1層で黒色土である。出土遺物はない。
(高橋誠二)

(3) 中世の遺構とその遺物

1) 5 A区

掘立柱建物跡

5 A区内において、多くのピットを確認した。ピットの中には柱根を残すものもあった。いくつかの掘立柱建物を復元することができたが、この他にも建物が存在した可能性がある。

S B2004 (第58・66図)

A21グリッドに位置する。梁間1間 (1.8m) × 柁行3間 (3.2m) の東西に長い建物である。主軸はN-81°-Eである。本遺構は、S D2006東西溝とほぼ平行で、S D2001・2003を壊してつくられる。柱穴は概ね直径20~40cm程度の円形で、地山面からの深さは10~40cmである。柱穴の底面は標高9.1m以下である。遺物は3つの柱穴から土師質土器の細片が出土する。S D2006と主軸を平行にすることから、同時期の建物とみることができる。

S B2009 (第58・66図)

A23グリッドに位置する。梁間1間 (1.3m) × 柁行3間 (2.3m) の南北に長い建物である。主軸はN-14°-Wである。本遺構は、S D2001と重複してつくられる。柱穴は概ね直径20~30cm程度の円形で、地山面からの深さはほぼ20cmである。柱穴の底面は標高9.1mで一定する。北東隅柱とその南隣の柱には柱根が残存する。遺物は出土しておらず、その年代は不明である。

S B2032 (第58・67図)

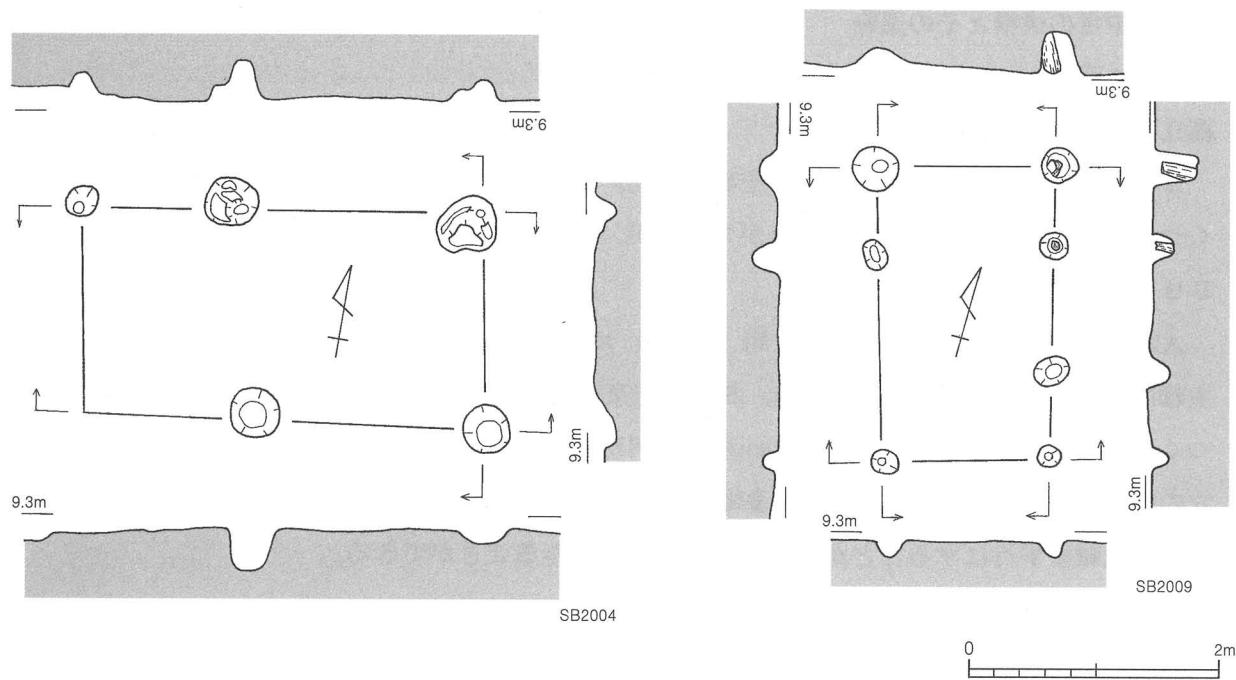
B・C25グリッドに位置する。梁間2間 (3.2m) × 柁行4間 (6.4m) の東西に長い建物である。主軸はN-76°-Eである。本遺構はS D2017・S D2019に区画された敷地内にある。S D2025・2031との主軸方位がほぼ一致することから、それらの溝と同時期の可能性がある。柱穴は概ね直径30cm程度の円形で、地山面からの深さは30~50cmである。柱穴の底面は概ね標高9.0m前後で一定する。北東隅柱とその西隣の柱には柱根が残存する。遺物は4つの柱穴から土師質土器の細片が出土する。

S A2039 (第58・67図)

B25グリッドに位置する。主軸はN-75°-Eである。S B2032の北側の柱筋とほぼ平行であり、S B2032の孫庇となる可能性もある。また、S D2017と重複する。規模は長さが4.5mで、柱間は西から1.3m、1.3m、1.1m、0.8mである。柱穴は直径20~30cmの円形で、深さは10~20cmである。柱穴底面の標高は9.1~9.2mである。

S B2042 (第58・68図)

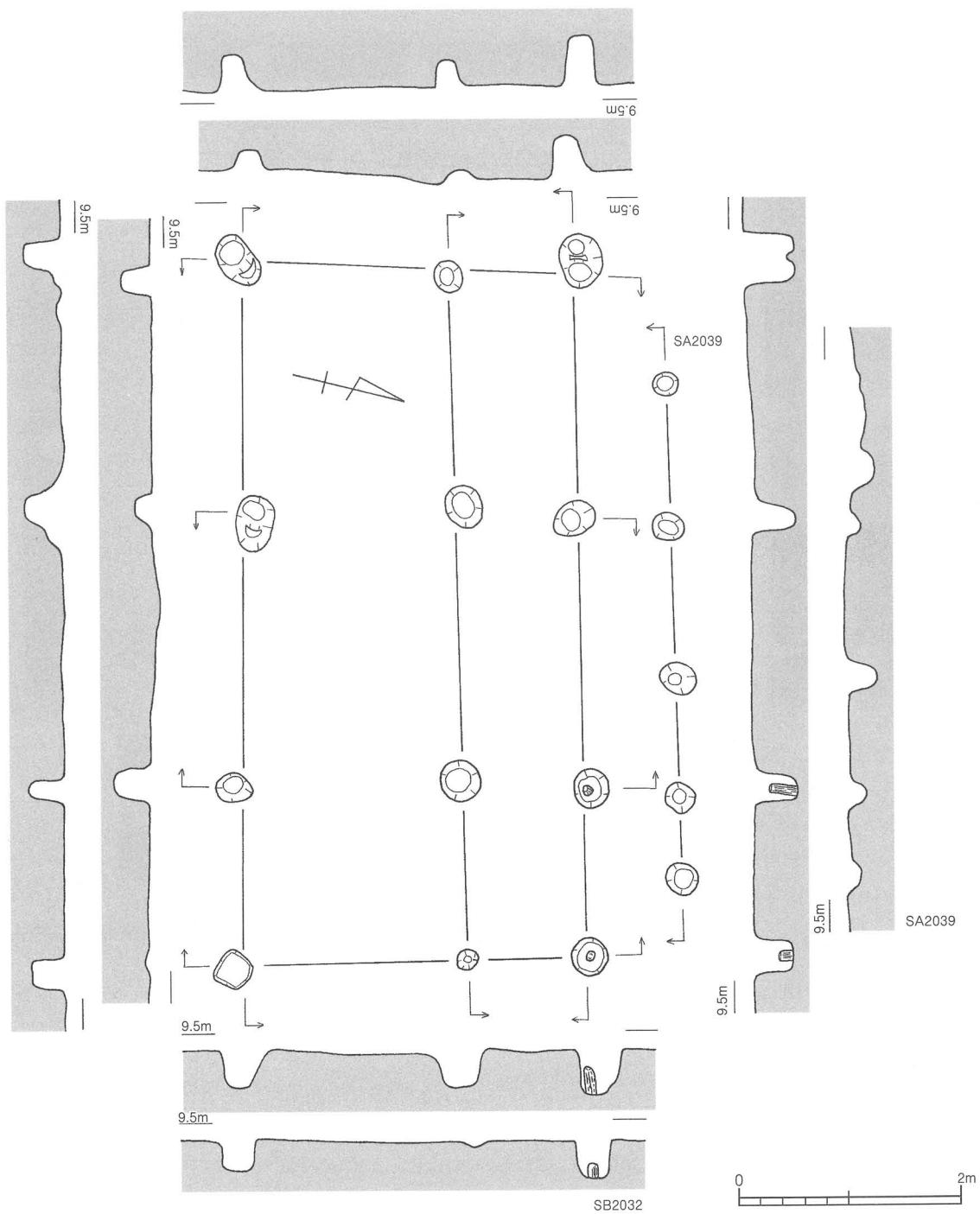
B25・26グリッドに位置する。梁間3間 (4.3m) × 柁行4間 (4.6m) の南北に長い建物である。建物の平面形としては、梁間3間×柵行3間の身舎の北側に庇が取り付くものと思われる。主軸はN-23°-Wである。本遺構はS D2017・S D2019に区画された敷地内にある。S B2032と重複するが、S D2017・2019と主軸方位が近似することから、本遺構が先行する可能性が高い。柱穴は概ね直径15~20cm程度の円形で、地山面からの深さは10~50cmである。柱穴の底面は概ね標高9.1m前後で一定する。遺物は2つの柱穴から土師質土器の細片が出土する。



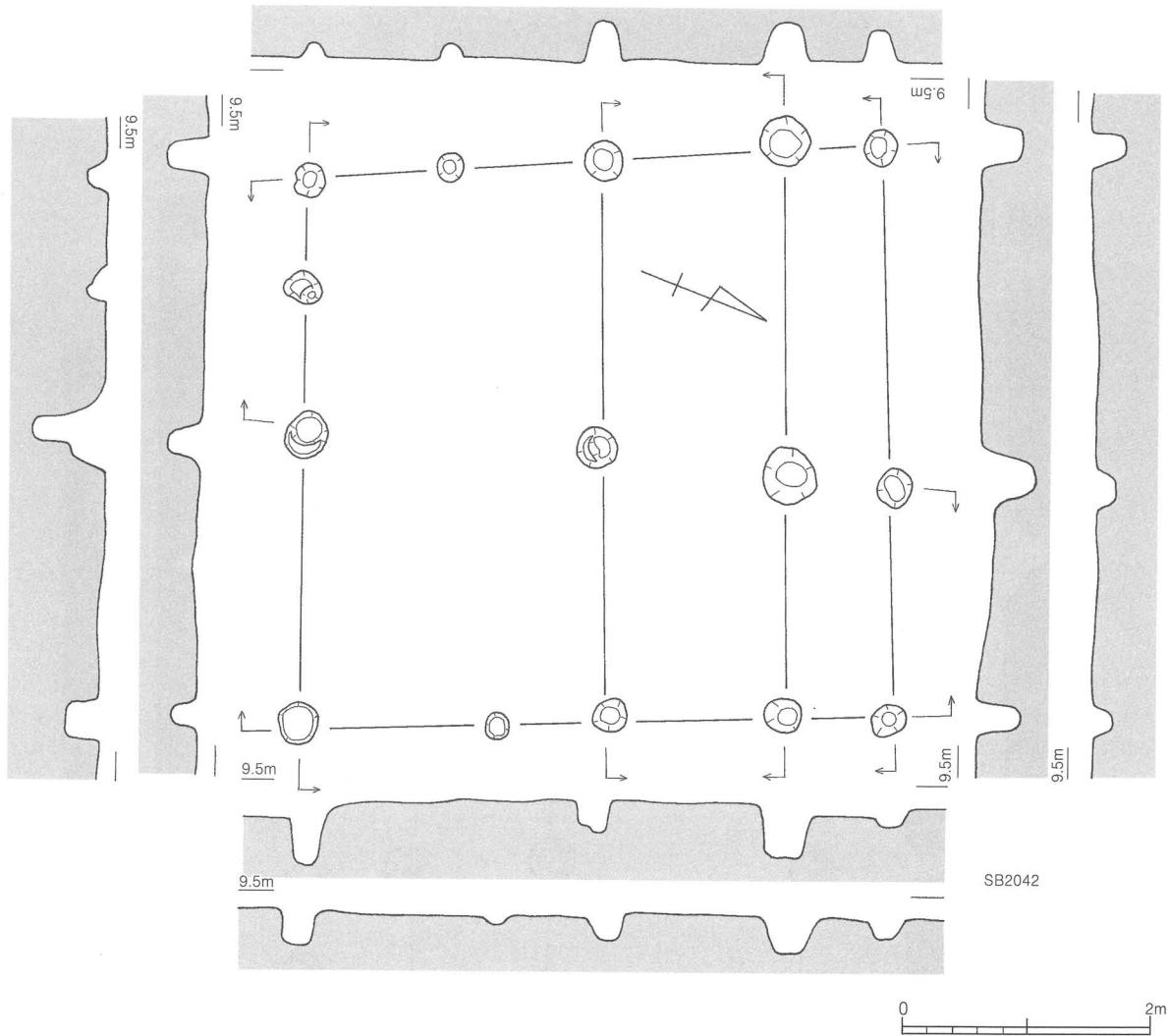
第66図 5 A区の中世建物遺構図1 (1 : 60)

S B2075 (第69図)

A・B31グリッドに位置する。梁間2間(3.7m)×桁行2間(5.8m)の東西に長い建物である。調査区の南端に接しており、調査区外に柱穴が存在する可能性がある。主軸はN-78°-Eである。本遺構はS D2055の区画内に存在するが、主軸が同溝と異なるために方形区画との関連性は不明である。柱穴の平面形は円形で、その直径は30~60cmとややばらつきが見られる。地山面からの深さは10~20cmのものが多く、直径に対して浅いことが特徴的である。本遺構周辺は後世の攪乱が顕著であり、本遺構は本来の遺構面を維持していない可能性が高い。なお、南西隅柱は攪乱により確認できない。柱穴の底面の標高は多くが9.3m前後で一定するが、西側の柱筋は9.6mとやや高い。遺物は4つの柱穴から土師質土器の細片が出土する。



第67図 5 A区の中世建物遺構図 2 (1 : 60)

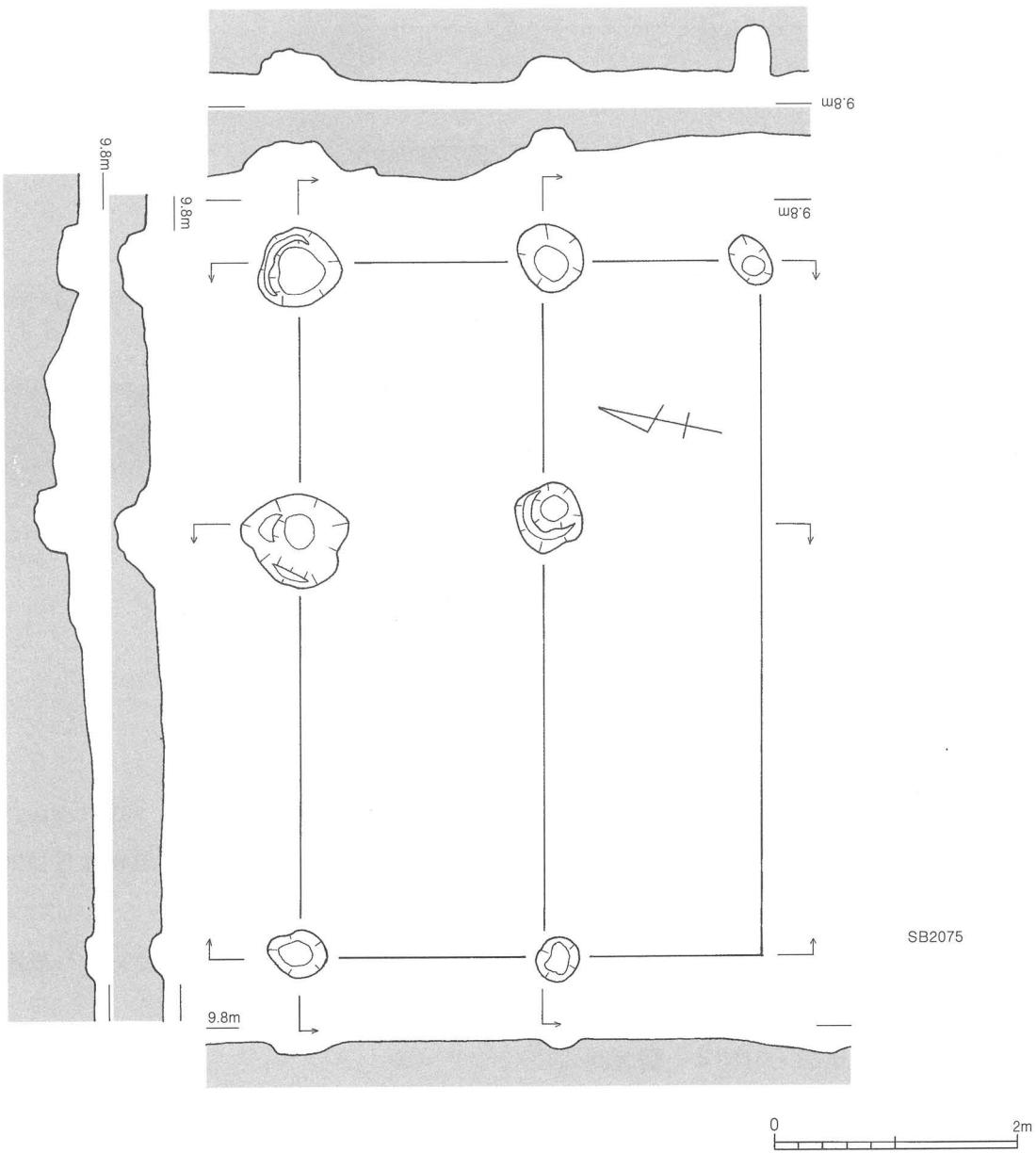


第68図 5 A区の中世建物遺構図 3 (1 : 60)

柱穴列跡

S A2074 (第70図)

B・C30、C31グリッドに位置する。11の柱穴からなる柵列である。主軸はN-44°-Wである。長さは11.7mで、柱間は北から1.1m、1.4m、1.3m、0.5m、1.3m、1.3m、1.3m、1.25m、1.4m、1.1mである。柱間が短くなる箇所があるため、2つの柵列の可能性もある。柱穴の直径は20~30cmの円形で、深さは10~50cm。柱穴底面の標高は9.1~9.5mである。この柵列はSD2055の方形区画内にわたり、柵列の北側には方形土坑が集中し、南側では多量の土師質土器が集中する。これらの遺構・遺物との関連性は不明であるが、同時期に機能していた可能性が高い。



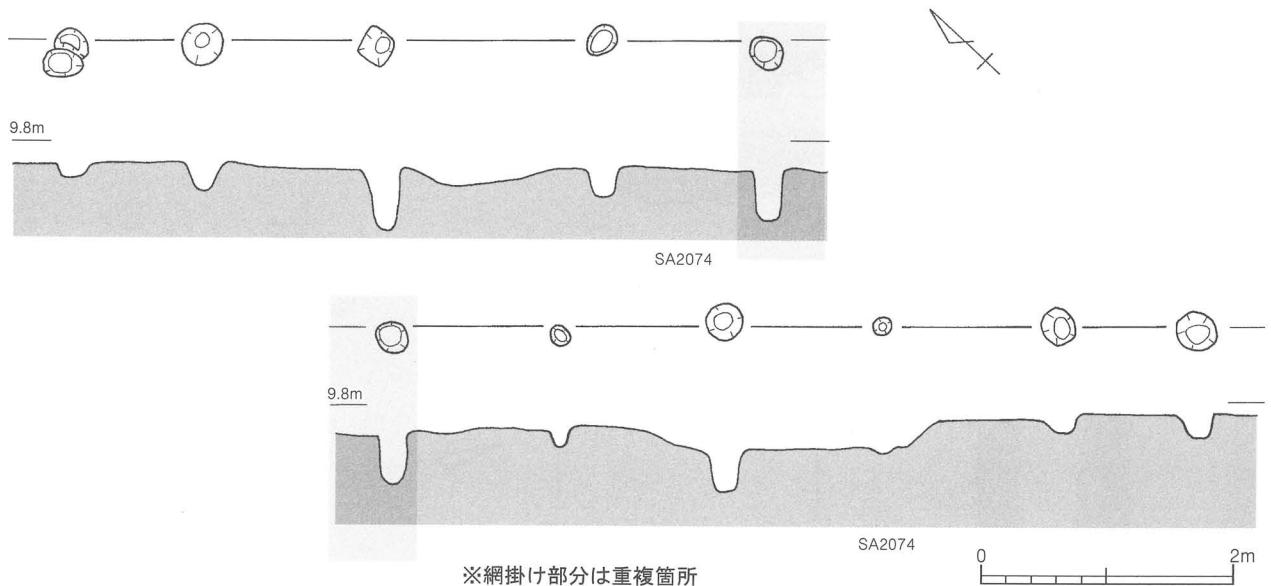
第69図 5 A区の中世建物遺構図 4 (1 : 60)

土坑

土坑 S K2018 (第58・71図 1・2 図版28-1)

D22グリッドに位置し、SD2008を壊してつくられている。平面形は楕円形で、その中央に円形の掘り込みを持つ。土坑本体の規模は、長径1.5m、短径1.1mを測り、中央の掘り込みは、直径0.8m、地山面からの深さ0.8mである。埋土は2層で、いずれも砂・地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。第2層がやや暗い。

出土遺物は、土師質土器の皿（第71図1）、中世須恵器の鉢（第71図2）がある。1は底部周辺を絞り、内傾しつつ立ち上がる（皿b-2類）。2は内面にハケメを施す。本遺構の時期は、出土遺物等から13世紀代と考えられる。



第70図 5 A区の中世柱列図と遺物実測図（遺構 1 : 60）

土坑SK2021（第58・71図3 図版28-2）

A23グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、規模は長軸2.8m、短軸1.0m、地山面からの深さ1.1mである。長軸はN-80°-Eである。SD2025・SD2031、短軸はSD2001とほぼ同方向の関係にある。

出土遺物は、備前焼（第71図3）、土師質土器の細片、同心円のタタキ目をもつ須恵器片がある。本遺構の時期は、周辺遺構と同時期の中世に属するものであろう。

土坑SK2022（第58・71図4 図版28-3）

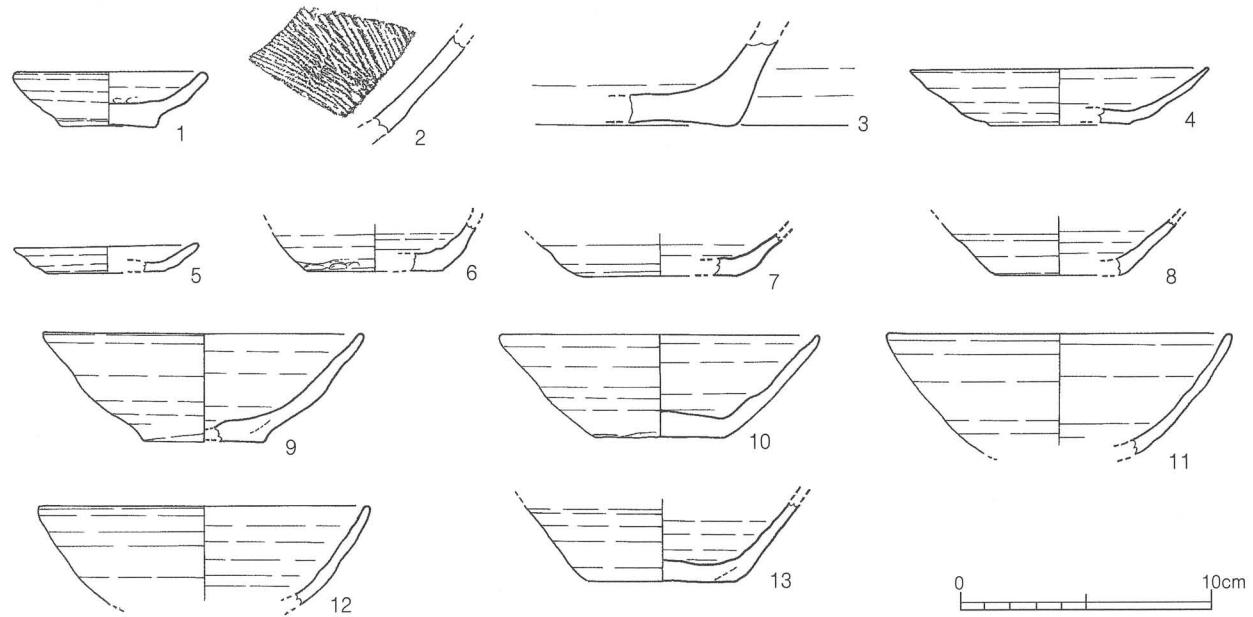
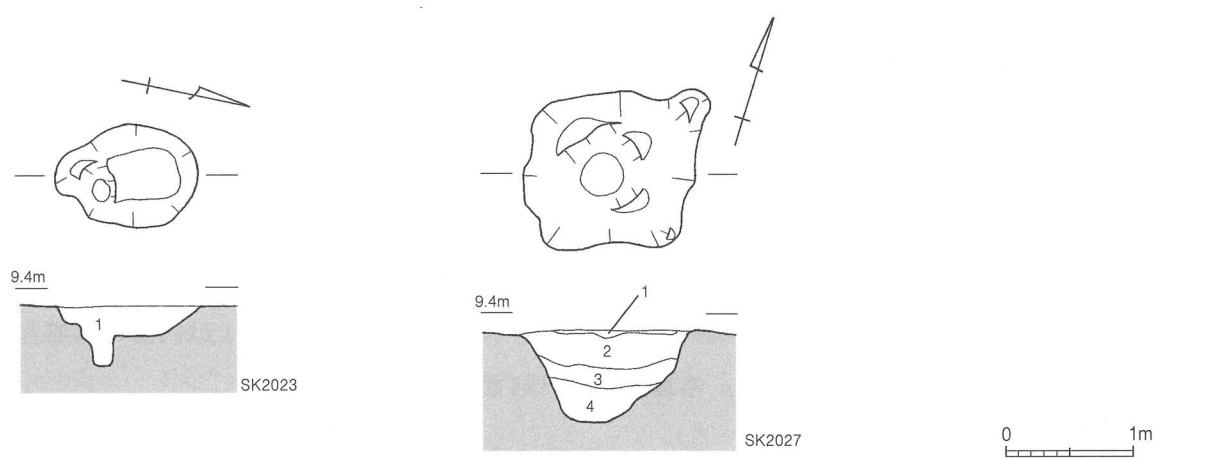
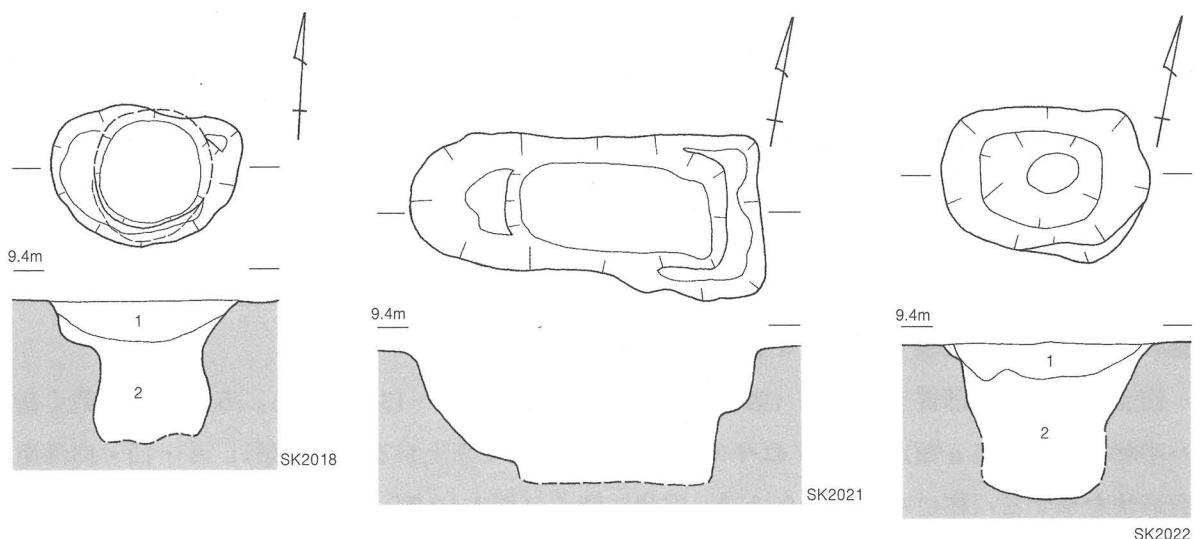
A23グリッドに位置し、SK2021の南東に近接する。SD2001を壊してつくられる。平面形はやや不整な長方形で、規模は長軸1.6m、短軸1.2m、地山面からの深さ1.2mである。長軸はN-79°-Eである。SK2021と同様に、SD2025・SD2031と同方向である。埋土は2層に分かれるが、いずれも黒色粘質土で、第1層は炭化物をわずかに含み、第2層は砂を含む。

出土遺物は、土師質土器の杯（第71図4）、箸状木製品・丸鞘状木製品のほか用途不明木製品3点、同心円のタタキ目をもつ須恵器片2点が出土する。本遺構の時期は、中世に属すると思われる。

土坑SK2023（第58・71図）

B23グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.8m、地山面からの深さ0.4mで、南寄りに直径0.1m、深さ0.4mの円形の掘り込みを持つ。埋土は砂・炭化物・地山ブロックをわずかに含む黒色粘質土が堆積する。

遺物として土師質土器の細片が出土する。本遺構の時期は不明である。



第71図 5 A区の中世土坑図と遺物実測図1 (遺構1:60 土器1:3)

土坑SK2027（第58・71図5～13）

B24グリッドに位置する。SD2031に北側上端を壊される。平面形は不整な隅丸方形で、規模は長軸1.3m、短軸1.2m、地山面からの深さ0.7mである。長軸はN-16°-Wである。西1.6mの土壙（遺構番号なし）、西4mのSK2033、西6mのSK2038と、長軸・短軸ともにほぼ同方向である。埋土は4層で、第1層に砂を含み粘性の弱い黒褐色粘質土、第2層に地山ブロックや炭化物を含む黒褐色粘質土、第3層に砂を少し含む黒色粘質土、第4層に砂を含み粘性の強い黒色粘質土が堆積する。第4層からは遺物を確認しない。

出土遺物は、土師質土器の皿（第71図5）と杯（第71図6～13）がある。5は器高が低く逆ハ字状に開く（皿d類）。6・7はやや急に丸みをもち立ち上がる（杯C類）。8・10・13は逆台形状を呈する（杯C-2類）。9は逆ハ字状に開く（杯A-3類）。11・12は丸みをもち立ち上がる（杯A・B類）。本遺構の時期は、13～14世紀代と考えられる。

土坑SK2028（第58・72図1）

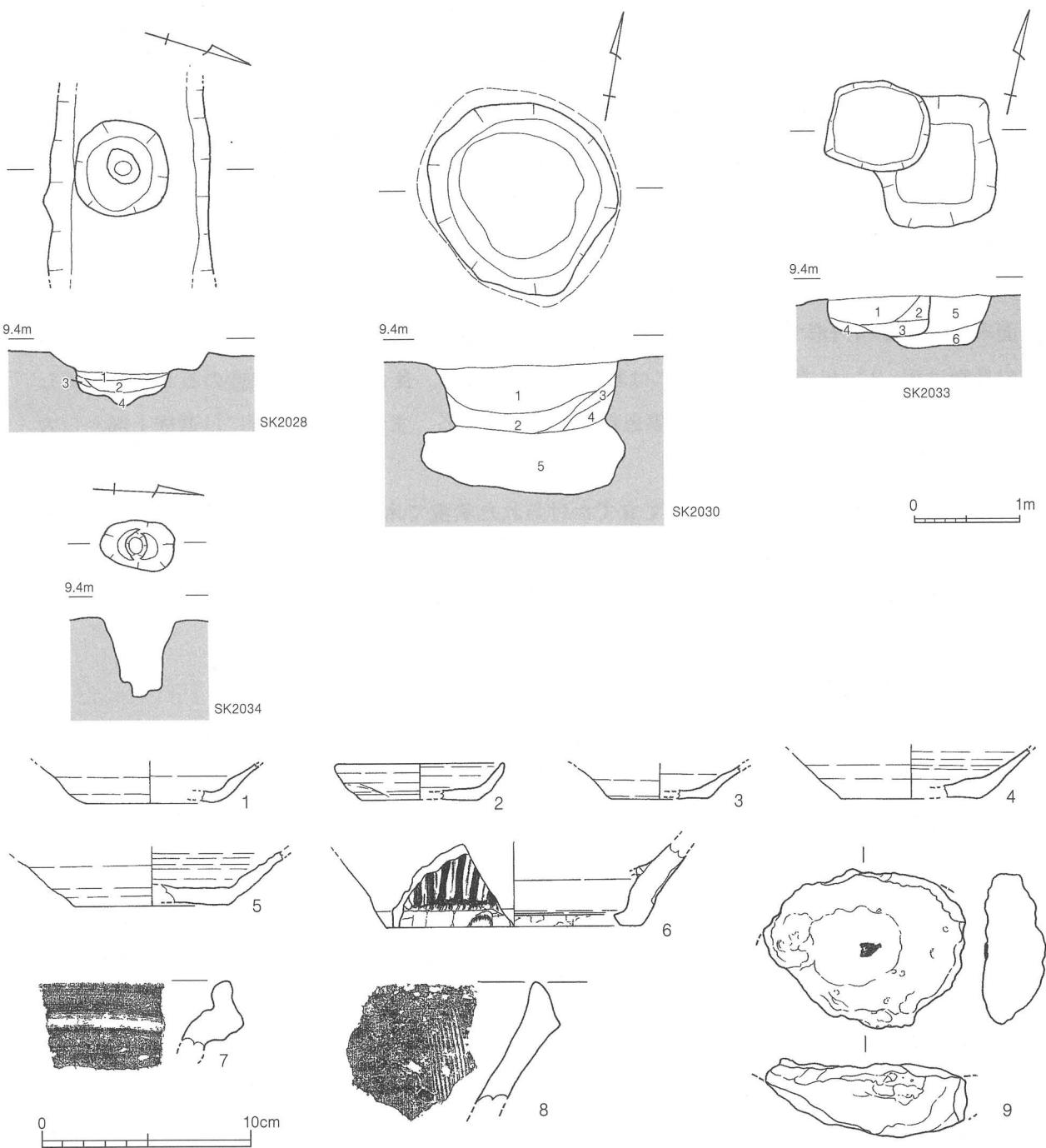
B24グリッドに位置する。SD2031により遺構上部は壊される。平面は円形で、規模は直径0.9m、地山面からの深さ0.4mである。また、底面中央で直径0.3mの円形に0.2m深く掘り込む。埋土は4層で、いずれも黒色粘質土が堆積する。第1層のみが地山ブロックを多く含み、第2層は粘性が強く、第3層は炭化物を多く含み、第4層は第3層より明るい。

出土遺物は、土師質土器の杯（第72図1）と古墳時代の須恵器片がある。1は内面の体部と底部の境に窪みをもつ（杯C・D類）。本遺構は13～14世紀代と考えられる。

土坑SK2030（第58・72図2～9）

B24グリッドに位置する。SD2025に北側上端、SD2031に南側上端を壊される。平面はほぼ円形で、規模は直径1.8mで、地山面からの深さ1.2mである。埋土は5層で、第1層・第2層に黒色粘質土が堆積し、第1層は地山ブロックを少し含む。第3層に砂を多く含む黒褐色粘質土、第4層・第5層に黒色粘質土が堆積する。第5層は有機物を含む。

出土遺物は、土師質土器の皿（第72図2）と杯（第72図3～5）、龍泉窯系青磁の酒会壺（第72図6）、瓷器系の甕（第72図7）、備前焼系の擂鉢（第72図8）、碗形鉄滓（第72図9）、また、図化していないものとして、備前焼の片口片、国内陶器片、須恵器片、曲物の側板2点、用途不明木製品4点、竹筒片等が出土する。2は直線的に立ち上がる（皿c類）。3は逆ハ字状に立ち上がる（杯E類）。4・5は逆ハ字状に立ち上がり、内面の体部と底部の境を明瞭に凹ませる（杯D類）。6は島根県内初例で、越後守護所に比定される新潟県伝至徳寺跡（15世紀後半廃絶）出土の壺と形態が類似する。7は常滑編年5～6a型式（13世紀第2四半期～第3四半期）。8は間壁編年IV A期（14世紀後半～15世紀前半）。本遺構の時期は、14～15世紀代と考えられる。



第72図 5 A区の中世土坑図と遺物実測図 2 (遺構 1 : 60 土器 1 : 3)

土坑SK2033 (第58・72図)

A24グリッドに位置する。SD2001を壊してつくられる。2つの方形の遺構が重複する。規模は、先行する遺構が長軸1.2m、短軸1.1m、地山面からの深さ0.5m、新しい遺構が一辺0.9m、地山面からの深さ0.4mである。先行遺構の長軸はN-13°-Wである。SK2027・SK2038等とほぼ同方向である。底面は2段となり、遺構中央で一段深く20cmを測る。

出土遺物には、少量の土師質土器の細片がある。本遺構の年代は、不明である。

土坑SK2034（第58・72図）

A24グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径0.7m、短径0.5m、地山面からの深さ0.8mである。底面に長径15cm、短径10cm、深さ15cmの楕円形の掘り込みをする。出土遺物には、少量の土師質土器の細片がある。本遺構の年代は不明である。

土坑SK2035（第58・73図1・第105図 図版28-5）

C24グリッドに位置する。SD2025と北側で接し、SD2031により上部南半を壊される。平面形は不整な楕円形で、規模は長径2.4m、短径1.3m、地山面からの深さ1.0mである。遺構の長軸はW-2°-Nである。底面には若干の凹凸があり、長さ10~40cm程度の石9個を確認した。埋土は2層で、粘性の異なる黒色粘質土が堆積する。また、遺構南端には遺構上部から大きな地山ブロックが入る。

出土遺物は、遺構中央に北面して立てかけられた状況で木簡（第73図1・第105図）が認められた。その詳細は後章に述べる。また、木簡と付随して竹筒片が出土する。このほかに、少量の土師質土器の細片が出土する。本遺構の年代はその内容から14世紀後半~15世紀代と考えられる。

土坑SK2036（第58・73図2・3 図版28-4）

C24グリッドに位置する。SD2017・SD2019を壊してつくられる。平面形は不整な楕円形で、規模は長径2.2m、短径1.3mである。遺構の中央で長径1.8m、短径1.0mの楕円形に掘り込む。最大深は1.0mを測る。遺構の長軸はW-0°-Nである。

出土遺物には、土師質土器の杯（第73図2）と摩擦痕のある石（第73図3）がある。また、図化していないが、内面を赤色、外面を黒色に塗る漆椀の小片2点、曲物の側板2点、用途不明木製品4点が出土する。2は逆台形状に立ち上がる（杯C-2類）。本遺構は14~15世紀代と考えられる。

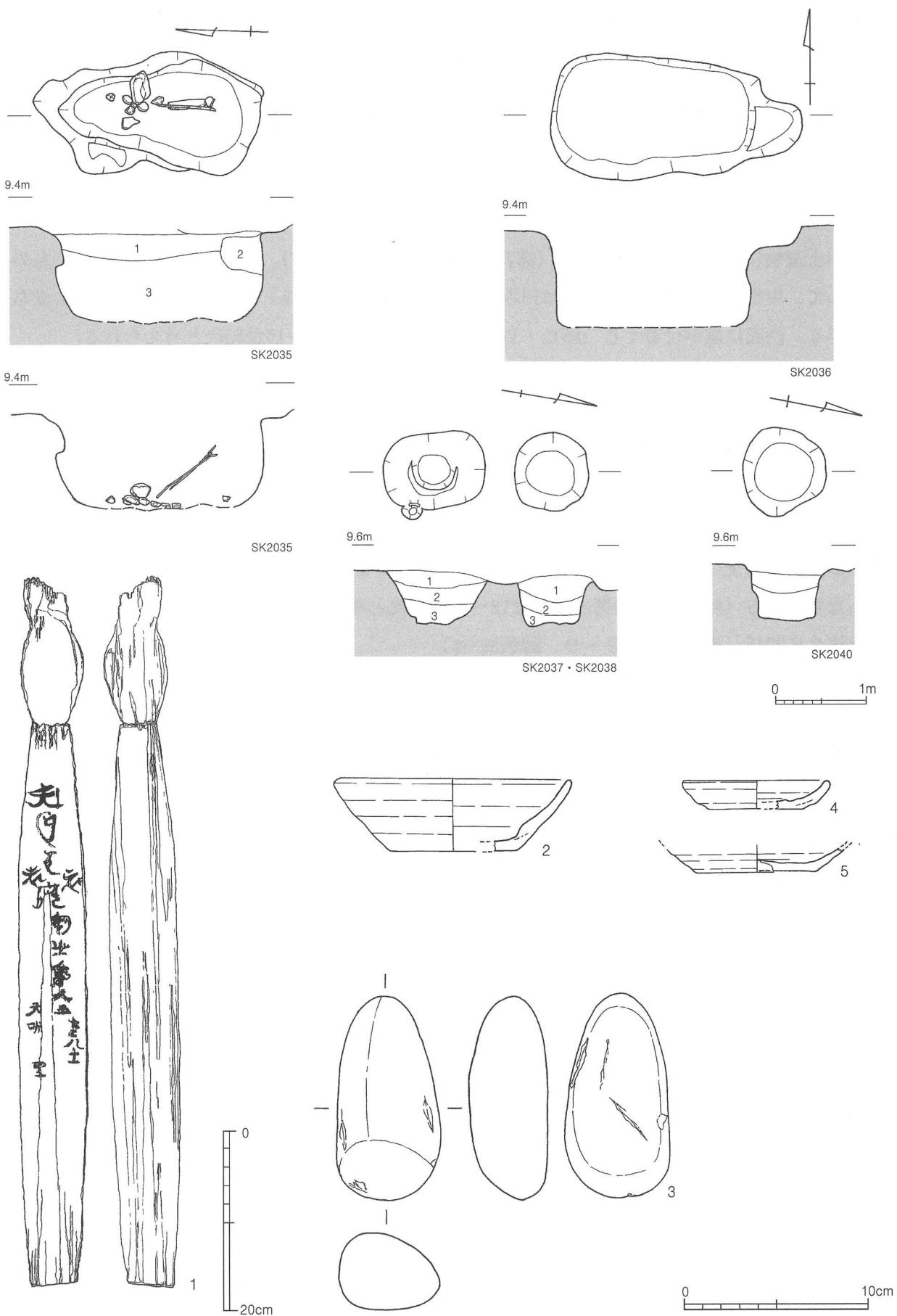
土坑SK2037（第58・73図）

A24グリッドに位置する。SK2038と南側で、SD2031と北側で近接する。平面形は楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.8m、地山面からの深さ0.6mである。埋土は3層で、いずれも黒色粘質土である。第1層・第2層に地山ブロックを含み、第3層には含まない。第2層の遺構中央に長さ30cm程度の石を確認する。

出土遺物には、土師質土器の細片と須恵器片がある。遺構の年代は不明である。

土坑SK2038（第58・73図）

A25グリッドに位置する。SK2037と北側で近接し、本遺構とSK2037との中心軸はN-11°-Wである。両遺構の中心軸はSD2001とほぼ平行する。平面形は隅丸方形で、規模は一辺0.8m、地山面からの深さ0.5mである。底面に10~30cm程度の石が詰められた状況で確認された。埋土は3層で、いずれも黒色粘質土が堆積する。第1層・第2層に地山ブロックを含み、第3層には含まない。



第73図 5 A区の中世土坑図と遺物実測図3 (遺構1:60 土器1:3 木簡1:6)

出土遺物には、土師質土器の細片がある。遺構の年代は不明であるが、SK2037ともSD2001と同時期と考えられる。

土坑SK2040（第58・73図4・5）

A25グリッドに位置する。SD2017を壊してつくられる。平面形は不整な円形で、規模は直径0.9m、地山面からの深さ0.5mである。底面に長さ10~20cm程度の石6個を確認した。埋土は2層である。本遺構の主軸はN-11°-Wである。

出土遺物には、土師質土器の皿（第73図4）と杯（第73図5）。また、図化していないものとして、中世須恵器片がある。4は円みをもち立ち上がる（皿b-1類）。5は逆ハ字状に立ち上がり、内面に煤が付着する（杯C・D類）。遺構の年代は14~15世紀代と考えられる。

土坑SK2044（第58・74図1・2）

D25グリッドに位置する。SK2045と近接する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径1.5m、短径1.3mである。遺構中央に長径0.7m、短径0.6mの楕円形の掘り込みをする。地山面からの最大深は1.1mを測る。

出土遺物には、土師質土器の皿（第74図1）と杯（第74図2）、また、図化していないものとして、備前焼の小片や瓦質の鉢片がある。1は円みをもつ（皿b類）。2は体部が円みをもち立ち上がる（杯B類）。遺構の年代は13~14世紀代と考えられる。

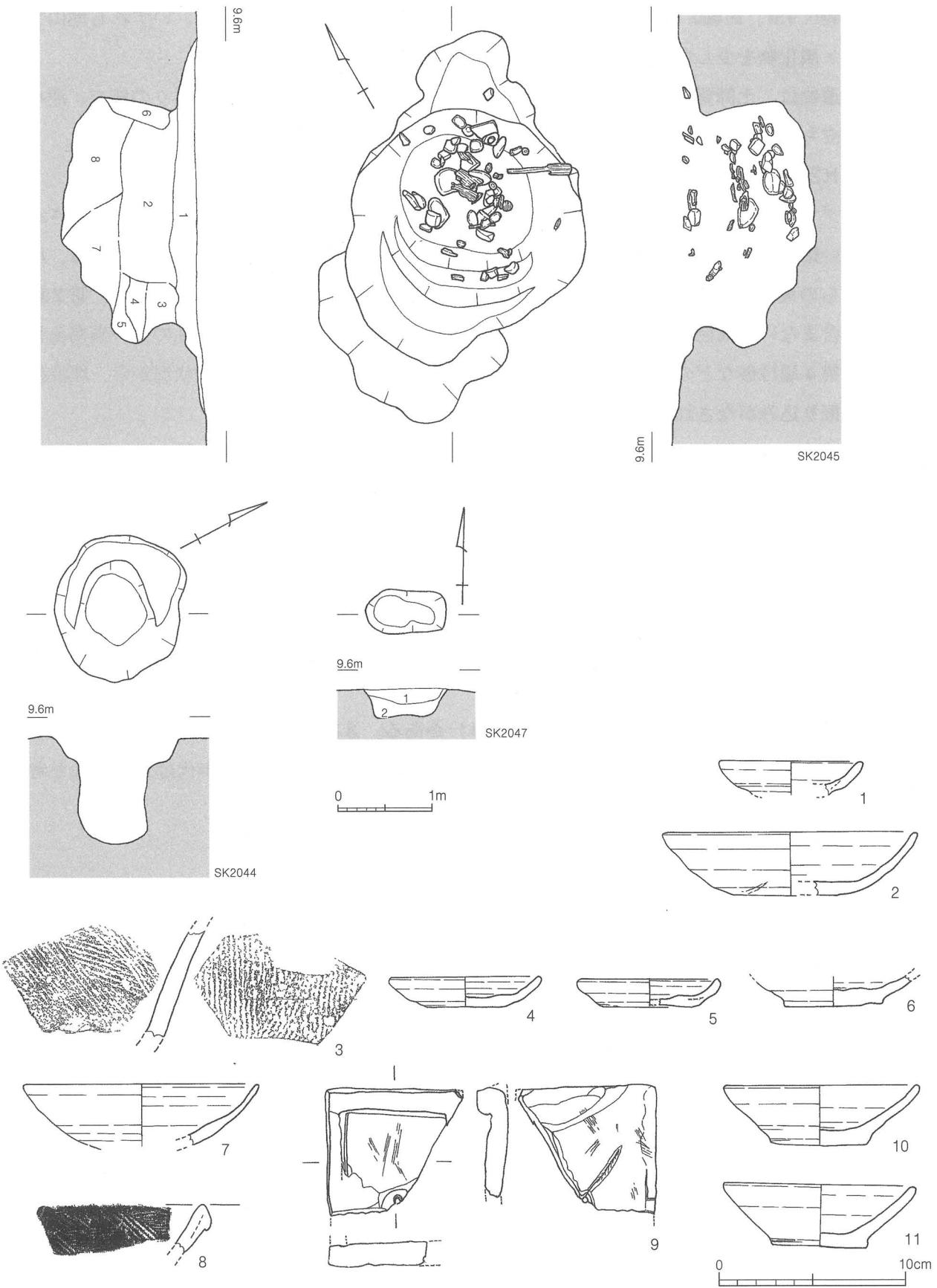
土坑SK2045（第58・74図3~9 図版29-4）

D25グリッドに位置する。SE2044と近接する。平面形は不整な楕円形で、規模は長径3.6m、短径2.5mである。深さ20cmの浅い掘り方の中央に直径2.4mの円形の掘り込みをもつ。掘り込みの最大深は、遺構上端より1.4mを測る。埋土は8層で、第1層は黒褐色粘質土、第2層は黒色粘質土、第3層は黄灰色砂質土、第4層は地山ブロックを少し含む黒色粘質土、第5層は黄灰色砂質土、第6層は第3層と似る黄灰色砂質土、第7層は地山ブロックを少し含む黒色粘質土、第8層は黒色粘質土を含む灰黄褐色砂質土である。埋土の堆積状況から井戸の機能を推定でき、第3層~第5層は井戸枠の裏込め土と考えられる。また、出土遺物は第1層・第2層・第8層で確認され、順次埋没したことが窺える。

出土遺物は、土師質の捏鉢（第74図3）、土師質土器の皿（第74図4・5）・杯（第74図6・7）、瓦質土器の鉢（第74図8）、石製の硯（第74図9）である。図化していないものとして、内外面とも黒塗りの漆椀の破片が5点あり、その1つは外面に赤色で描画する。また、国内陶器片2点、中世須恵器片、土師質土器の細片及び鍋の口縁部片がある。4は丸味をもち逆ハ字状に開く（皿b-3類）。5は口縁部が内傾気味となる（皿b-1類）。6は底部周辺をやや絞り、緩やかに立ち上がる。（杯A類）。7は丸味をもち立ち上がる（杯A・B類）。6・7ともに内面に煤付着が認められ、内面・外面に被熱による変色がある。8は口縁が玉縁状となる。遺構の年代は4が底面から出土することから、13~14世紀代と考えられる。

土坑SK2047（第58・74図10・11 図版29-1）

C26グリッドに位置する。SD2019を壊してつくられる。平面形は不整な隅丸長方形で、規



第74図 5 A区の中世土坑図と遺物実測図 4 (遺構 1 : 60 土器 1 : 3)

模は長軸0.9m、短軸0.5m、地山面からの深さ0.3mである。埋土は2層で、いずれも地山ブロック・炭化物を少し含む黒褐色粘質土であるが、第2層はやや粘性が強い。

出土遺物は、土師質土器の杯（第74図10・11）である。10・11とともに、小ぶりの杯で、逆ハ字状に立ち上がる（杯E-1類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

土坑SK2050（第58・75図1・2）

A27グリッドに位置する。SD2019を壊してつくられる。平面形は不整な楕円形で、深さ20cmの浅い掘り方の中央に直径80cmの円形の掘り込みをする。規模は長径1.2m、短径1.0m、地山面からの最大深1.0mである。埋土は4層で、第1層は砂を多く含む黒褐色粘質土、第2層は砂を含まない黒褐色粘質土、第3層は地山ブロックや炭化物を少し含む粘性の強い黒褐色粘質土、第4層は砂などの不純物が混入する黒褐色粘質土である。埋土の堆積状況から、埋没後に再び掘り込みがなされたと推定される。

出土遺物は、中国白磁・四耳壺の口縁（第75図1）、須恵器の高杯（第75図2）である。また、図化していないものとして、国内陶器片がある。1は丸く折り曲げる口縁。

土坑SK2056（第58・75図3・4）

A29グリッドに位置する。SD2055に近接する。平面形は不整な楕円形で、遺構中央に直径20cmの深い凹みがある。規模は長径1.4m、短径0.6m、地山面からの最大深0.4mである。埋土は2層で、第1層は黒褐色粘質土、第2層は黒色粘質土である。第1層・第2層ともに、地山ブロックを少し含む。

出土遺物は、土師質土器の杯（第75図3・4）がある。3は緩やかに逆ハ字状に立ち上がる（杯E類）。4は底部周辺を絞り、内面に煤が付着する（杯F類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

土坑SK2057（第58・75図5・6 図版29-3）

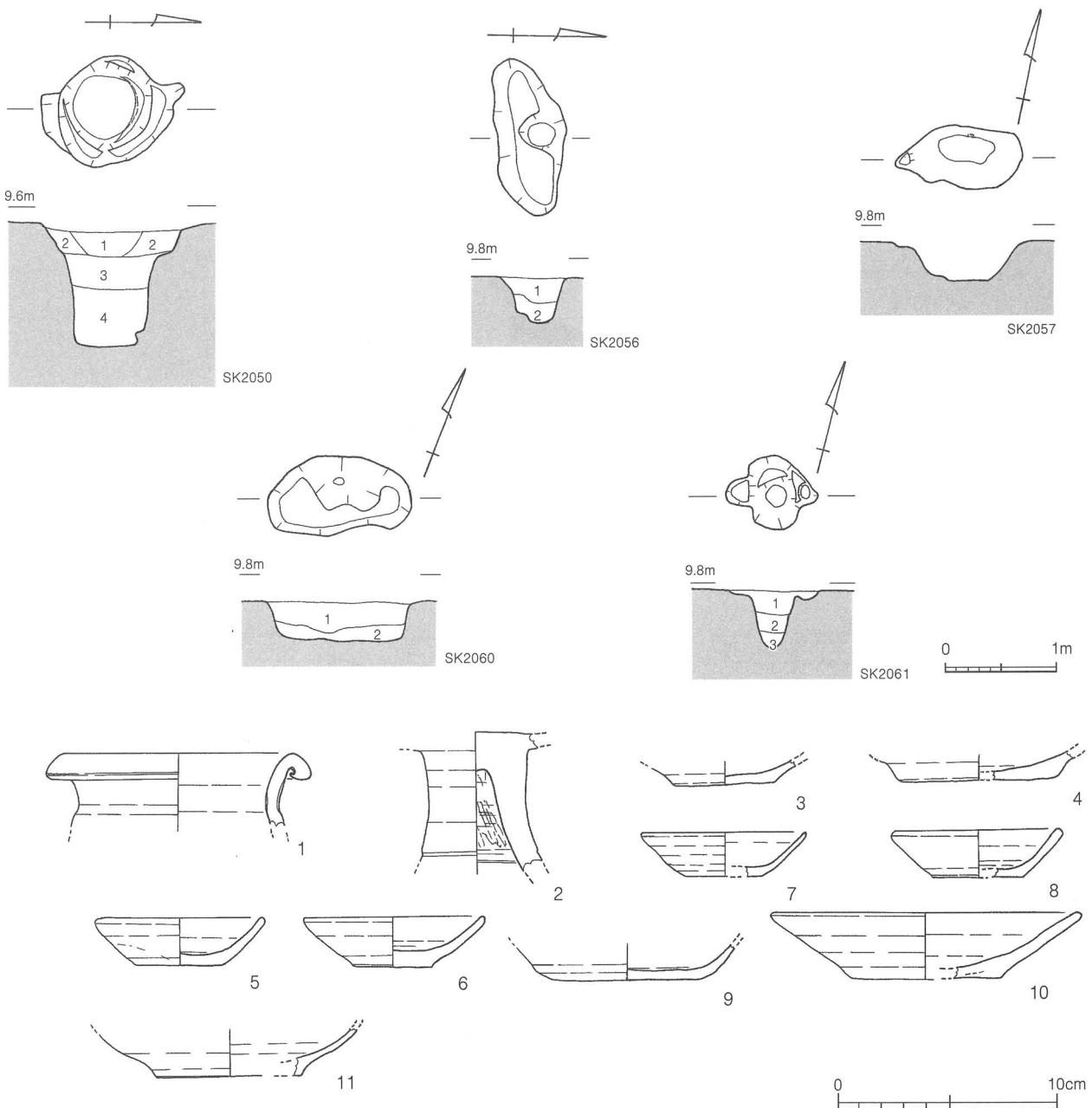
A29グリッドに位置する。SD2055に近接する。平面形は不整な楕円形である。規模は長径1.1m、短径0.6m、地山面からの深さ0.4mである。

出土遺物は、土師質土器の皿（第75図5・6）がある。5・6ともに内面の底部と体部の境が不明瞭（皿e-2類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

土坑SK2060（第58・75図7～10）

A29グリッドに位置する。SD2055を壊してつくられる。平面形は不整な楕円形で、遺構北半にやや深い落ち込みがある。規模は長径1.3m、短径0.7m、地山面からの深さ0.3mである。埋土は2層で、第1層は地山ブロック・炭を含む黒褐色粘質土、第2層は地山ブロックを少し含む黒色粘質土である。

出土遺物は、土師質土器の皿（第75図7・8）、杯（第75図9・10）がある。7・8は逆ハ字状に立ち上がる（皿e類）。7は器壁が特に薄い。9は円みをもち立ち上がる（杯B類）。10は緩やかに直線状に立ち上がり、内面に煤が付着する（杯F類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

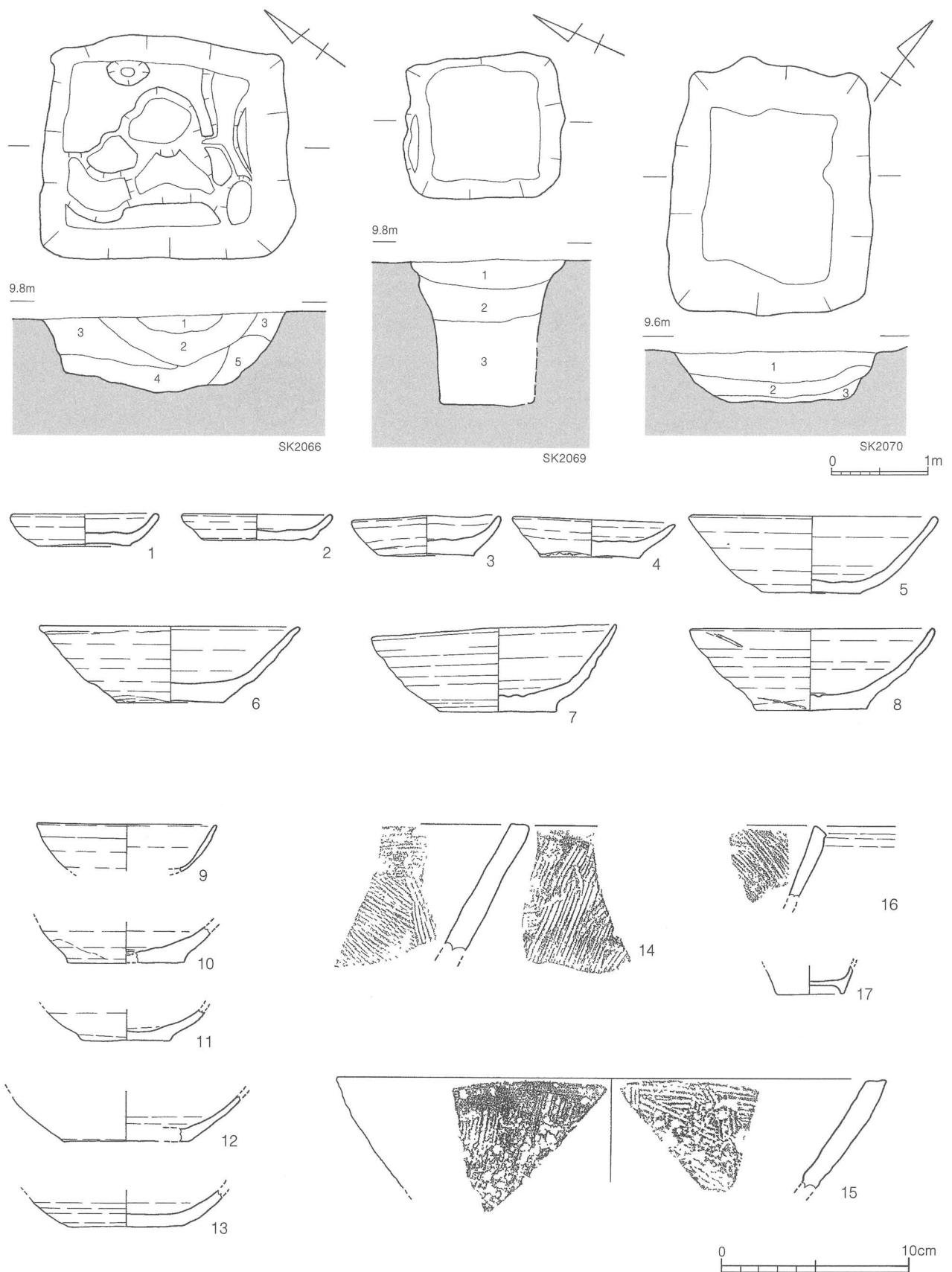


第75図 5 A区の中世土坑図と遺物実測図5 (遺構1:60 土器1:3)

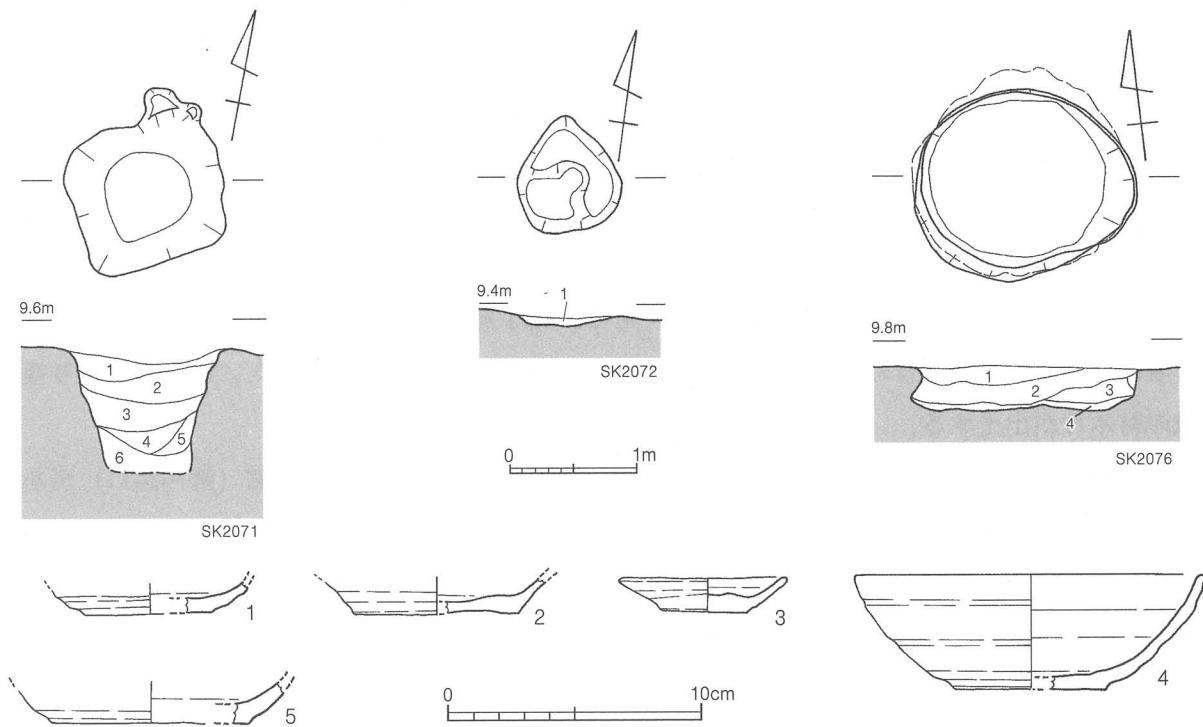
土坑SK2061 (第58・75図11)

B28グリッドに位置する。平面形は不整な橿円形で、遺構中央に直径50cmの円形に掘り込みをもつ。規模は長径0.8m、短径0.7m、地山面からの最大深0.5mである。埋土は3層で、3層とともに黒色粘質土である。第1層・第2層ともに地山ブロックを含むが、第2層は粘性がやや強い。第3層は地山ブロックを含まない。

出土遺物は土師質土器の杯 (第75図11) がある。11は丸みをもちつつ立ち上がり、内面には墨の付着が認められる (杯F類)。遺構の年代は15世紀代と考えられる。



第76図 5 A区の中世土坑図と遺物実測図 6 (遺構 1 : 60 土器 1 : 3)



第77図 5 A区の中世土坑図と遺物実測図7（遺構1：60 遺物1：3）

土坑SK2066（第76図1～8）

A30・31グリッドに位置する。平面形はやや不整な方形で、規模は一辺2.4m、地山面からの深さ0.8mである。遺構の主軸はN-35°-Wである。SD2001とほぼ平行である。埋土は5層で、いずれも黒色粘質土である。第1層は粘性が少なく地山ブロックを含み、第2層は地山ブロックをわずかに含む。第3層は地山ブロックを含むが、第2層よりやや明るく粘性も少ない。第4層は粘性が少なく地山ブロックを多く含む。第5層は粘性が少なく地山ブロックを非常に多く含む。埋土には地山ブロックが多く含まれることから、人為的に埋められた可能性がある。その堆積状況から少なくとも2回以上の掘り返しが想定される。

出土遺物は、土師質土器の皿（第76図1～4）と杯（第76図5～8）である。すべてが最下層から出土し、すべてに被熱痕が見られる。1～4は内傾気味に立ち上がる（皿c類）。2は底面外縁に回転ナデ調整が見える。4は底部の器壁が厚い。5は丸みをもち立ち上がり、6～8は底部周辺を絞る（杯A-3類）。遺構の年代は13～14世紀代と考えられる。

土坑SK2069（第76図9 図版30-4）

C30グリッドに位置する。平面形はやや不整な方形で、規模は一辺1.6m、深さは1.5mである。遺構の主軸はW-25°-Nである。SD2001・SD2046と同方向である。埋土は3層で、第1層は地山ブロックを少し含む黒褐色粘質土、第2層・第3層とともに地山ブロックを多く含む黒色粘質土である。第2層が第3層よりやや粘質性が強い。また、遺構西半の第3層上面に多

数の石が集中する。これらの石は遺構廃棄時に埋め土とともに投棄されたと考えられる。

出土遺物は、山茶碗（第76図9）がある。口縁部に薄く釉がかかる。周辺の遺構の時期から、13世紀代のものと考えられる。図化しないものとして、土師質土器の細片、鉄滓などがある。

土坑SK2070（第76図10～17 図版30-2）

D30グリッドに位置する。SD2055に壊される。平面形は長方形で、規模は長軸2.6m、短軸2.0m、地山面からの深さ0.5mである。本遺構の主軸はN-35°-Wである。SD2001と平行する。埋土は3層で、いずれも黒色粘質土である。第1層は炭・地山ブロックを少し含み、第2層は粘性が強く炭を含み、第3層は粘性が強く砂の混入が見られる。また、遺構底面より複数の材木片が出土する。

出土遺物は、土師質土器の杯（第76図10～13）・鉢（第76図14～16）・白磁（第76図17）がある。10・11は底部を絞り、丸みをもち立ち上がる（杯A類）。11には内面に煤が付着する。12は逆ハ字状に立ち上がる（杯B・C類）。13は丸みをもちつつ立ち上がり（杯B類）、内面・外側ともに煤が付着する。14～16は内外面にハケ目。17は高台畳付の釉を削る。一乗谷朝倉氏遺跡に類例がある。高台の形状から近世肥前系陶器の可能性もある。遺構の年代は、13～14世紀代と考えられる。

土坑SK2071（第77図1・2 図版30-1）

C・D30グリッドに位置する。平面形は方形で、規模は一辺1.1m、地山面からの深さ0.8mである。本遺構の主軸はN-28°-Wである。SD2001と同方向である。埋土は6層で、第1層は地山ブロックを多く含む黒色粘質土、第2層は地山ブロック・炭をわずかに含む黒色粘質土、第3層は粘性の強い黒色粘質土で、第3層下層には植物遺体が堆積する。第4層は粘性の強い黒色粘質土、第5層は地山・砂粒を非常に多く含む灰黄褐色粘質土、第6層は粘性の強い黒色粘質土である。

出土遺物は、土師質土器の皿（第77図1）・杯（第77図2）、瓦質土器片が出土する。1は丸みをもち立ち上がる（皿b類）。ロクロ成型痕が明瞭。2は内面で体部と底部の境に凹みがあり（杯D類）、内外面に被熱痕が明瞭にある。遺構の年代は、14～15世紀代と考えられる。

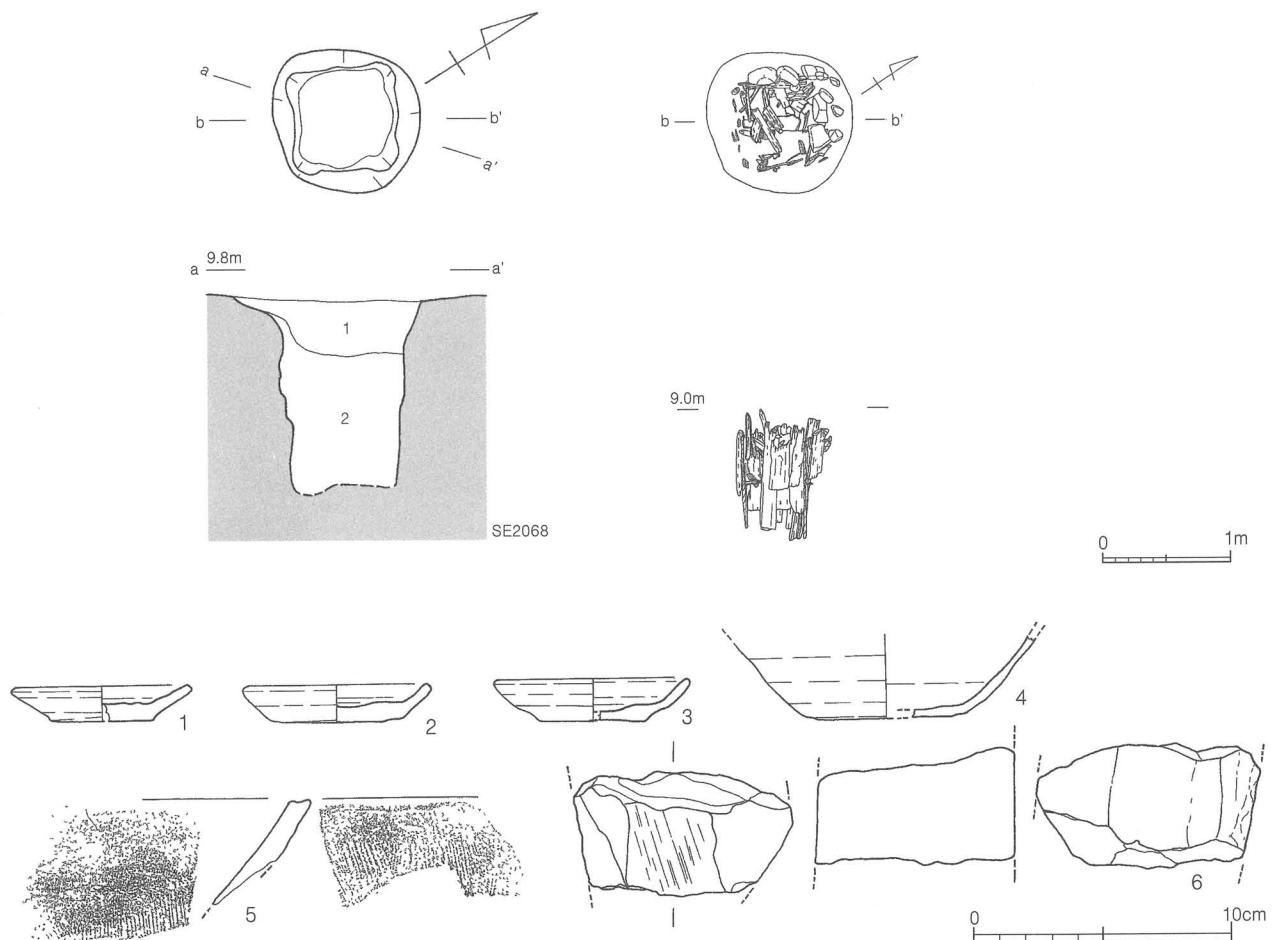
土坑SK2072（第58・77図3・4）

C30グリッドに位置する。平面形は不整な橢円形で、規模は長径0.9m、短径0.8m、地山面からの深さ0.06mである。埋土は1層で、地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。

出土遺物は、土師質土器の皿（第77図3）と杯（第77図4）がある。3は底部から逆ハ字状に立ち上がる（皿a類）。4は内湾しつつ立ち上がり、ロクロ成型痕が明瞭（杯A-1類）。遺構の年代は13～14世紀代と考えられる。

土坑SK2076（第77図5 図版29-6）

B・C30グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、規模は直径1.6m、深さは0.3mである。埋土は4層で、第1層は地山ブロック・炭を少し含む黒褐色粘質土、第2層は炭を含む黒色粘質土、第3層は炭をわずかに含む第2層より粘性の強い黒色粘質土、第4層は第3層より



第78図 5 A区の中世井戸実測図と遺物実測図（遺構 1 : 60 土器 1 : 3）

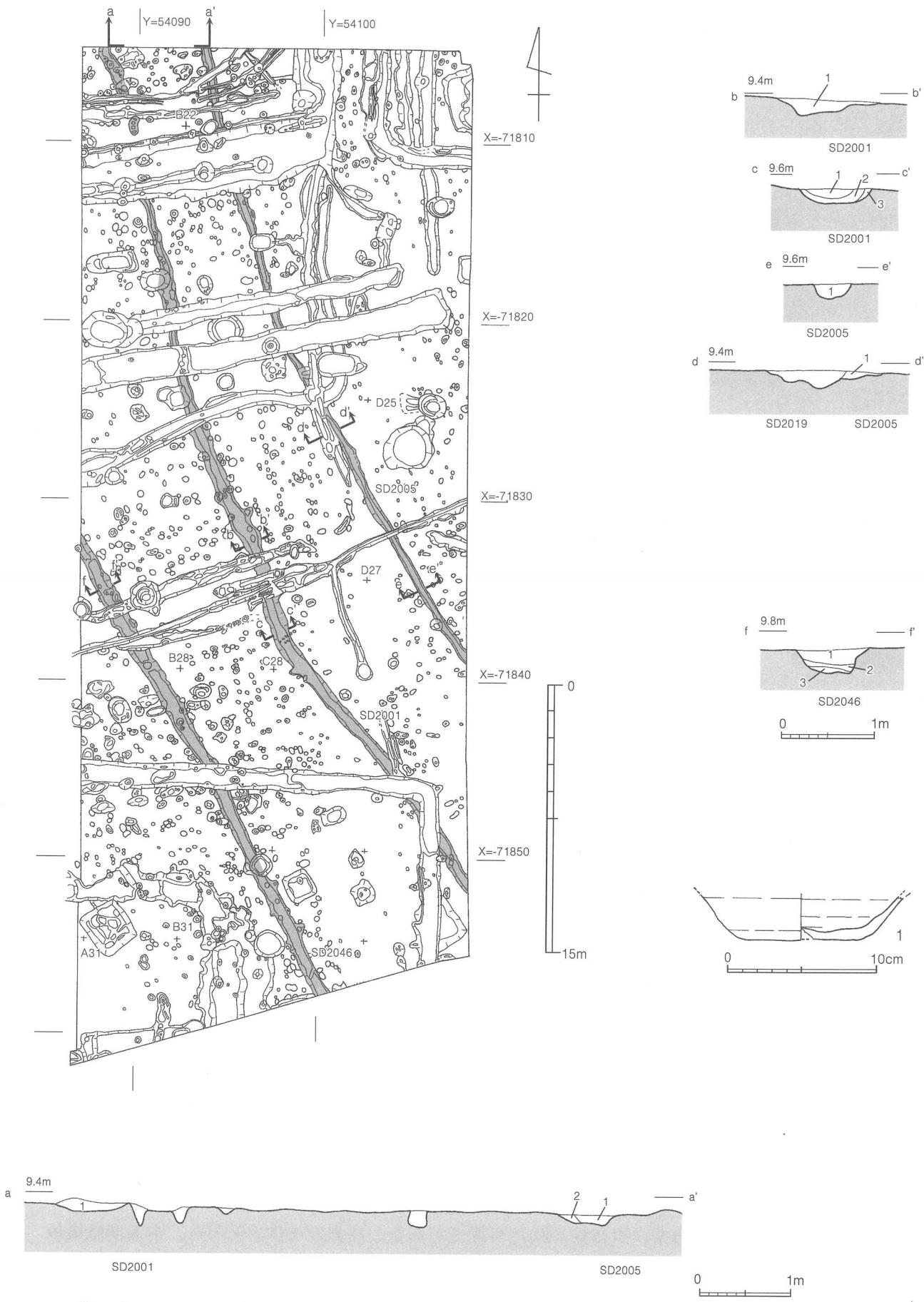
やや暗い黒色粘質土である。

出土遺物は、土師質土器の杯（第77図5）がある。また図化していないものとして、龍泉窯系青磁片、須恵器杯蓋の口縁が出土する。5は底部周辺をやや絞り、内傾しつつ立ち上がる（杯A類）。遺構の年代は13～14世紀代と考えられる。

井戸

井戸SE2068（第58・78図 図版30-5）

B 30グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は直径1.1mである。遺構中央で80cm四方の方形の掘り込みを持ち、地山面からの最大深は1.6mを測る。方形の掘り込みに合わせて、井側が北半を中心に残存し、北側に北西隅の隅柱、縦板10点、横桟1点、南側に南西隅の隅柱、縦板5点を確認できる。北側の隅柱は幅5cmの角材で長さは65cm。南側の隅柱は幅4cmの角材で長さは57cm、中央部分に釘が残存する。縦板は57cm～99cmのものがある。東西の井側はほとんど原位置を保っておらず、引き抜かれた可能性がある。井側の残存状況から、本遺構は縦板隅柱横桟型の井戸に相当すると考えられる。また、方形の掘り方に合わせ、遺構上面に長さ10～20cm程度の複数の石が配される。井戸廃棄時の祭祀行為は確認できない。埋土は2層で、い



第79図 5 A区の中世溝状遺構と遺物実測図1 (遺構1:300 断面1:60 土器1:3)

ずれも黒色粘質土であるが、第1層は粘性が弱く地山ブロックをわずかに含み、第2層は粘性が強い。井戸廃棄後はごみ捨て穴として利用された可能性が考えられ、出土遺物の多くは第1層から出土する。

出土遺物は、土師質土器の皿（第78図1～3）と杯（第78図4）と鉢（第78図5）、砥石（第78図6）がある。1は逆ハ字状に立ち上がり（皿d類）、2は内傾しつつ立ち上がる（皿c類）。3は底部周辺を絞り、内傾しつつ立ち上がる（皿b-2類）。2・3には煤の付着が見られる。4は特に器壁が薄く丸みをもち立ち上がる（杯B類）。底部外縁に回転ナデ調整が見られる。5は内・外面にカキ目調整がある。6は被熱痕が見られる。遺構の年代は、2・4が井側内からの出土であることから、13～14世紀代と考えられる。

溝

5A区において、多くの溝状遺構が確認された。ここでは、遺構番号に拘らず、溝の方向性及び規格性から分類して報告する。

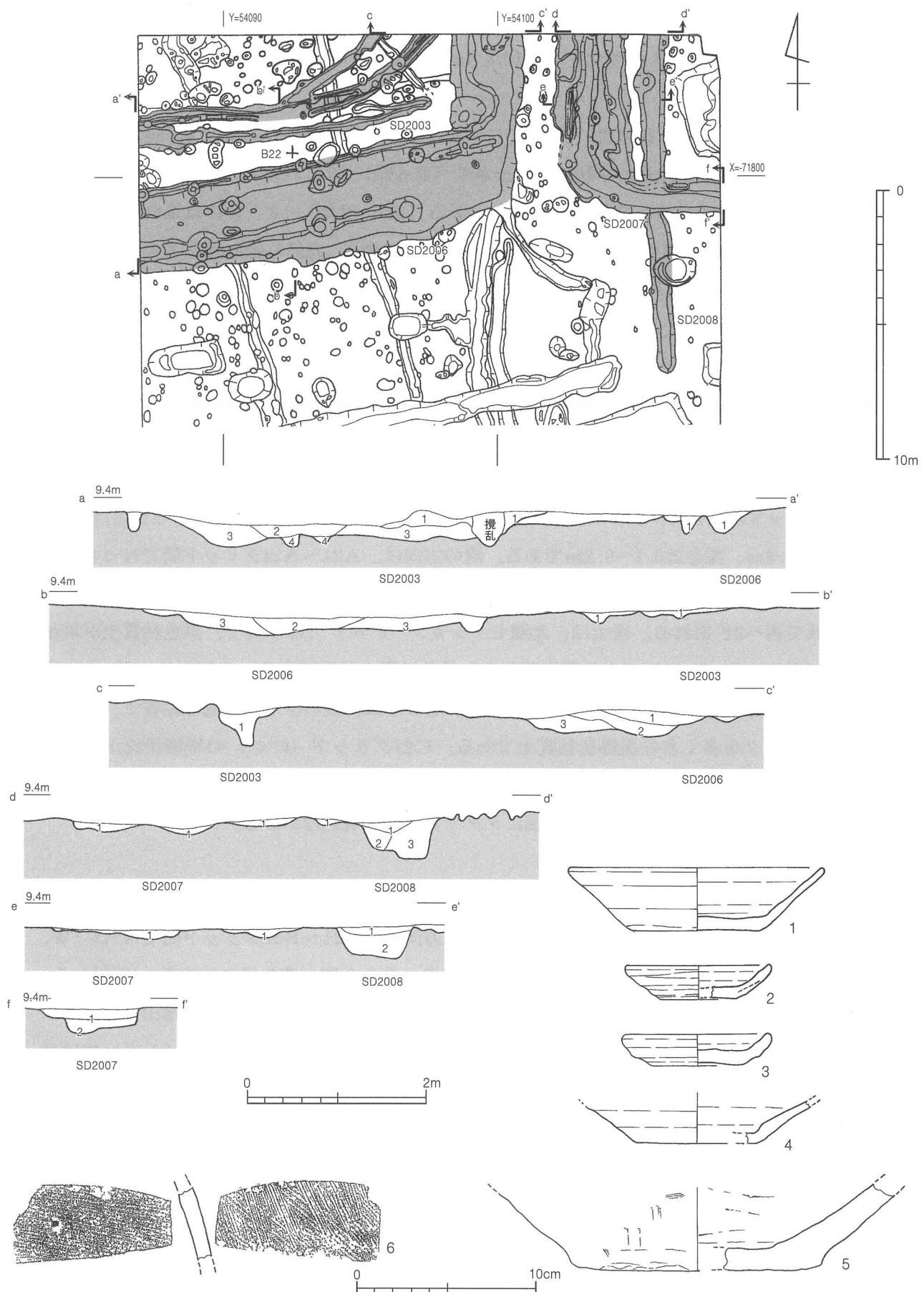
溝S D2001（第58・79図 図版33-3）

A21グリッドからE30グリッドまで、調査区を南北に走る溝である。確認できる長さは51m、幅は0.5～0.9m、深さは0.1～0.2mである。溝の方向は、A21～A24グリッド間でN-14°-W、B25～B27グリッド間でN-22°-W、C27～E30グリッド間でN-35°-Wとなり、北から南へ進むにつれて西へ21°振れる。埋土は、北壁セクション（a-a'）では1層で、黒色粘質土が堆積し、B27グリッド（b-b'）でも1層の砂を含む黒色粘質土が堆積する。C27グリッド（c-c'）では3層で、第1層は粘性の少ない黒色粘質土、第2層は粘性の少ない黒褐色粘質土、第3層は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質土である。C27グリッド（c-c'）の堆積状況から、少なくとも1回の部分的な掘り返しを推測することができる。

出土遺物は、土師質土器の細片や内面にタタキ目をもつ須恵器がある。

溝S D2005（第58・79図 図版33-3）

B21グリッドからE27グリッドまで、調査区を南北に走る溝である。確認できる長さは37m、幅は0.4～0.6m、深さは0.1～0.2mである。溝の方向は、B21～B23グリッド間でN-15°-W、C24グリッドからE27グリッド間でN-30°-Wとなり、北から南へ進むにつれて西へ15°振れる。埋土は、北壁セクション（a-a'）では2層で、第1層は黒色粘質土、第2層は地山ブロック・砂を多く含む黒褐色粘質土が堆積する。C25グリッド（e-e'）・D26グリッド（d-d'）では同様な1層の粘質性のある黒色粘質土が堆積する。北壁セクション（a-a'）の堆積状況から、少なくとも1回の部分的な掘り返しを推測することできる。



第80図 5 A区の中世溝状遺構と遺物実測図 2 (遺構 1 : 200 断面 1 : 60 土器 1 : 3)

出土遺物は、A22グリッドより土師質土器の杯（第79図1）がある。1は底部から丸みをもつて立ち上がる（杯C-1類）。

S D2001とS D2005との心々間は約5～7mで、ほぼ平行に調査区の南北を走る。したがって、両遺構が道路の側溝として機能した可能性がある。また、5 A区内の殆どの遺構に先行し、本遺構の方針を意識したと考えられる溝や土坑・建物が多数存在することから、調査区周辺の地割に影響を与えるものであったと考えられる。遺構の年代は、本遺構のほか主軸を同じくする遺構の多くが13～14世紀代の遺物が出ることから、同時期に考えられる。

溝S D2046（第58・79図 図版34-4）

A26グリッドからC31グリッドまで、調査区の南北を直線的に走る溝である。確認できる長さは28m、幅は1.0m、深さは0.1～0.3mである。溝の方向はN-28°-Wであり、S D2005と北側で同方向になる。埋土は、A26グリッド(f-f')では3層で、第1層は黒褐色粘質土、第2層は黒色粘質土、第3層は地山ブロックを多く含む黒褐色粘質土が堆積する。出土遺物は、土師質土器の細片が多くある。

本遺構も5 A区内の殆どの遺構に先行し、S D2001・S D2005に関連して形成されたものと考えられる。

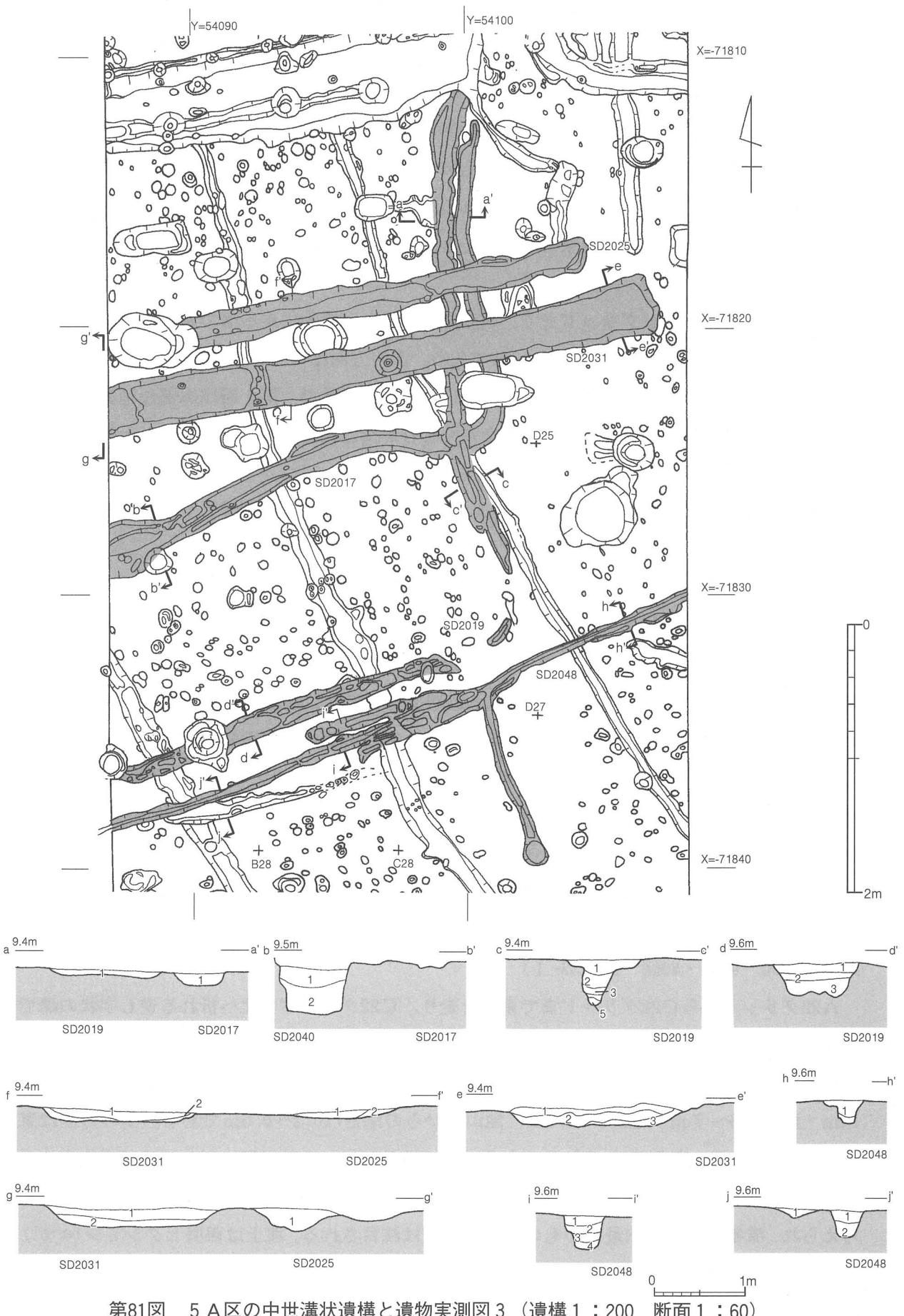
溝S D2003（第58・80図）

A21グリッドからB21グリッドで、調査区の東西を走る南北2条の溝である。本報告においては、同時期に形成された溝として一括して扱う。確認できる長さは約11m、幅は0.2m～0.4m、深さは0.1～0.6mである。溝の方向はA21グリッドでは2条ともにN-86°-Eである。B21グリッドでは、南側の溝が直線的に延びるのに対して、北側の溝は円弧条に北へ2条に分流して延びる。埋土は西壁セクション(a-a')では、南側の溝に地山ブロックを含む黒色粘質土、北側の溝に砂を多く含む黒褐色粘質土が堆積する。また、北側セクション(c-c')では、北側の溝に黒色粘質土が堆積する。

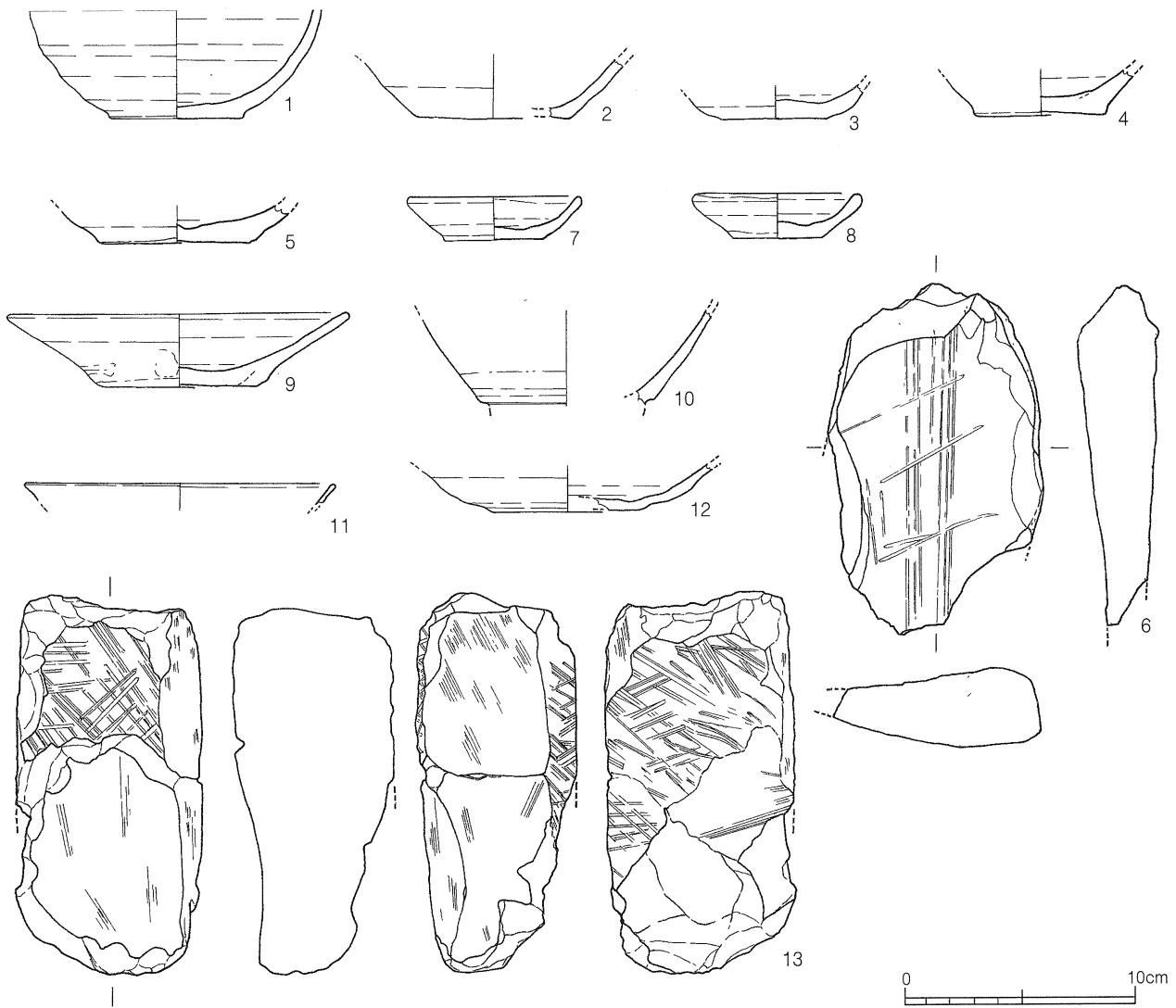
出土遺物は、土師質土器の杯（第80図1）が出土する。1は逆ハ字状に立ち上がり、内面の底部と体部の境が凹む（杯D類）。

溝S D2006（第58・80図 図版33-1）

A22グリッドからC22グリッドまで東西を走り、C22グリッドで北へ折れる逆L字状の溝である。また、A22グリッドからC22グリッドの間で、遺構の北辺に沿って浅い溝が掘られる。本報告では、これらを同時期に形成された溝として一括して扱う。確認できる長さは東西12～13m・南北4.5～7m、幅2.5～4.8m、地山面からの深さは0.2～0.6mである。溝の方位は東西がN-79°-Eで、南北がN-3°-Eである。特にS D2001・S D2005に対してほぼ直交することから南北方向は正方位を、東西方向は両溝を意識した可能性がある。方形の区画溝の一角と考えられ、溝幅が調査区内最大のものであることは注目される。埋土は西壁セクション(a-a')では4層で、第1層はややソフトな黒褐色粘質土、第2層は粘性の強い黒色粘質土、第3層は粘性の弱い黒色粘質土、第4層は地山ブロックを含む粘性の強い黒色粘質土が堆積する。B21-



第81図 5 A区の中世溝状遺構と遺物実測図3 (遺構1:200 断面1:60)



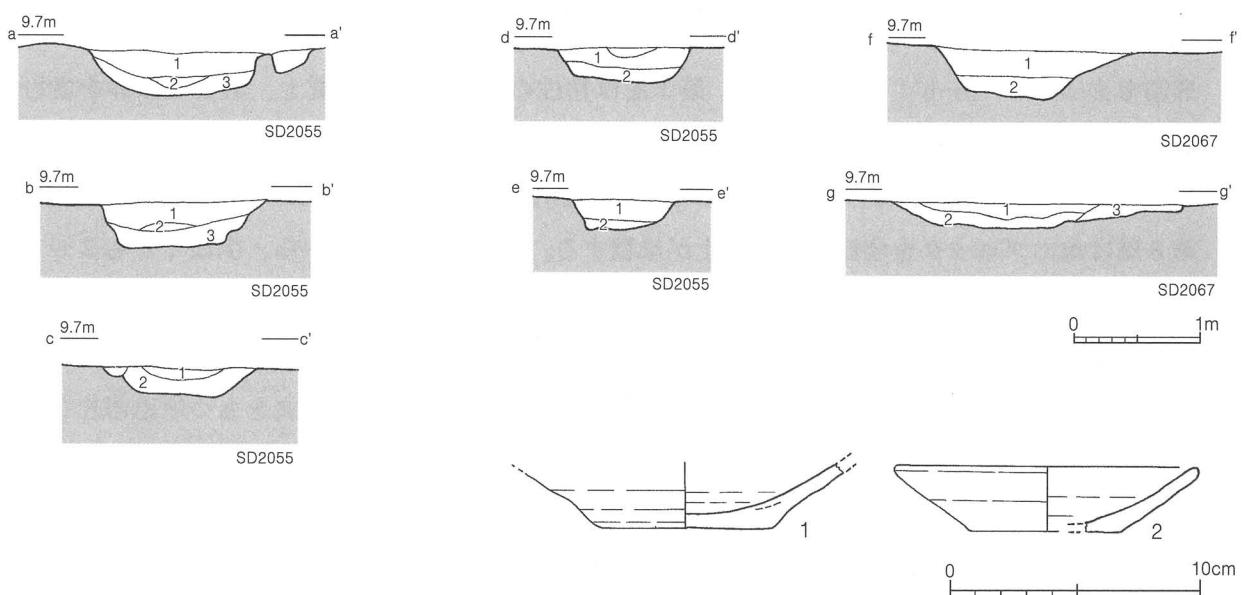
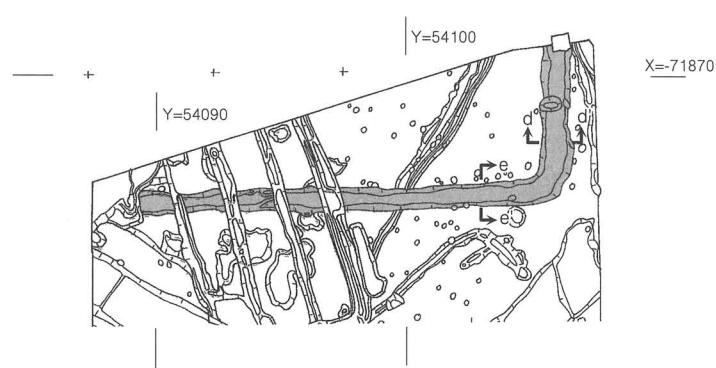
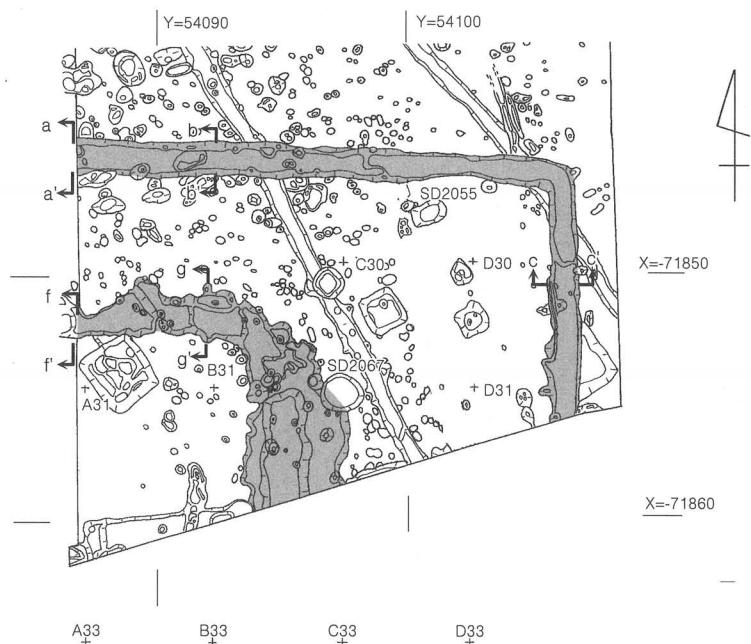
第82図 5 A区の中世溝状遺構出土遺物実測図（1：3）

B23セクション（b-b'）では3層で、第1層は粘性の強い黒褐色粘質土、第2層は砂を含む粘性の強い黒色粘質土、第3層は砂を含み第2層よりやや暗い黒色粘質土である。北壁セクション（c-c'）では3層で、第1層は粘性の弱い黒色粘質土、第2層は粘性の弱い黒褐色粘質土、第3層は地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。埋土の堆積状況から、少なくとも2～3回の掘り返しを確認することができ、長期間維持された可能性がある。

出土遺物は、土師質土器の皿（第80図2・3）・杯（第80図4）、瓷器系陶器の甕（第80図5）がある。また、図化していないものとして、土師質土器の鉢2点、波状文をもつ須恵器片などがある。2は逆ハ字状に丸みをもちつつ立ち上がる（皿b-3類）。3はやや内傾気味に立ち上がる（皿b-1類）。4は直線的に立ち上がり、内面で底部と体部の境が凹む（杯D類）。

溝S D2007（第58・80図 図版32-2）

D21グリッド西半からD22グリッドへL字状に走る溝である。南北方向では3条の溝に分か



第83図 5 A区の中世溝状遺構と遺物実測図4 (遺構1:300 断面1:60 土器1:3)

れるが、本報告では一括して扱う。確認できる長さは南北5.5m・東西4m、幅は0.5~0.9m、地山面からの深さは0.04m~0.3mである。溝の方向は南北がN-1°-W、東西がN-89°-Eである。SD2008と一部重複するが、前後関係は不明である。

屈曲部は隅丸形を呈するが溝は正方位を意識しており、方形の区画溝の一角の可能性がある。埋土は北壁セクション(d-d')では3条の溝のいずれも粘性の弱い黒色粘質土が堆積し、D21グリッド(e-e')では3条の溝のうち西2条には黒色粘質土、東1条には砂や地山ブロックを少し含む黒色粘質土が堆積する。また、東壁セクション(f-f')では2層で、第1層に黒色粘質土、第2層に砂が多く第1層より明るめの黒色粘質土が堆積する。本遺構の南北方向は浅めの溝であるが、東西方向は深く掘り込まれる。

出土遺物は、備前焼の甕の体部片（第80図6）がある。外面に明瞭なタテハケ、内面にヨコハケの明瞭な調整をする。間壁編年III・IVA期（14世紀前半～15世紀初頭）に相当すると思われる。また、図化しないものとして、龍泉窯系青磁碗の体部片が出土する。

溝SD2008（第58・80図 図版33-2）

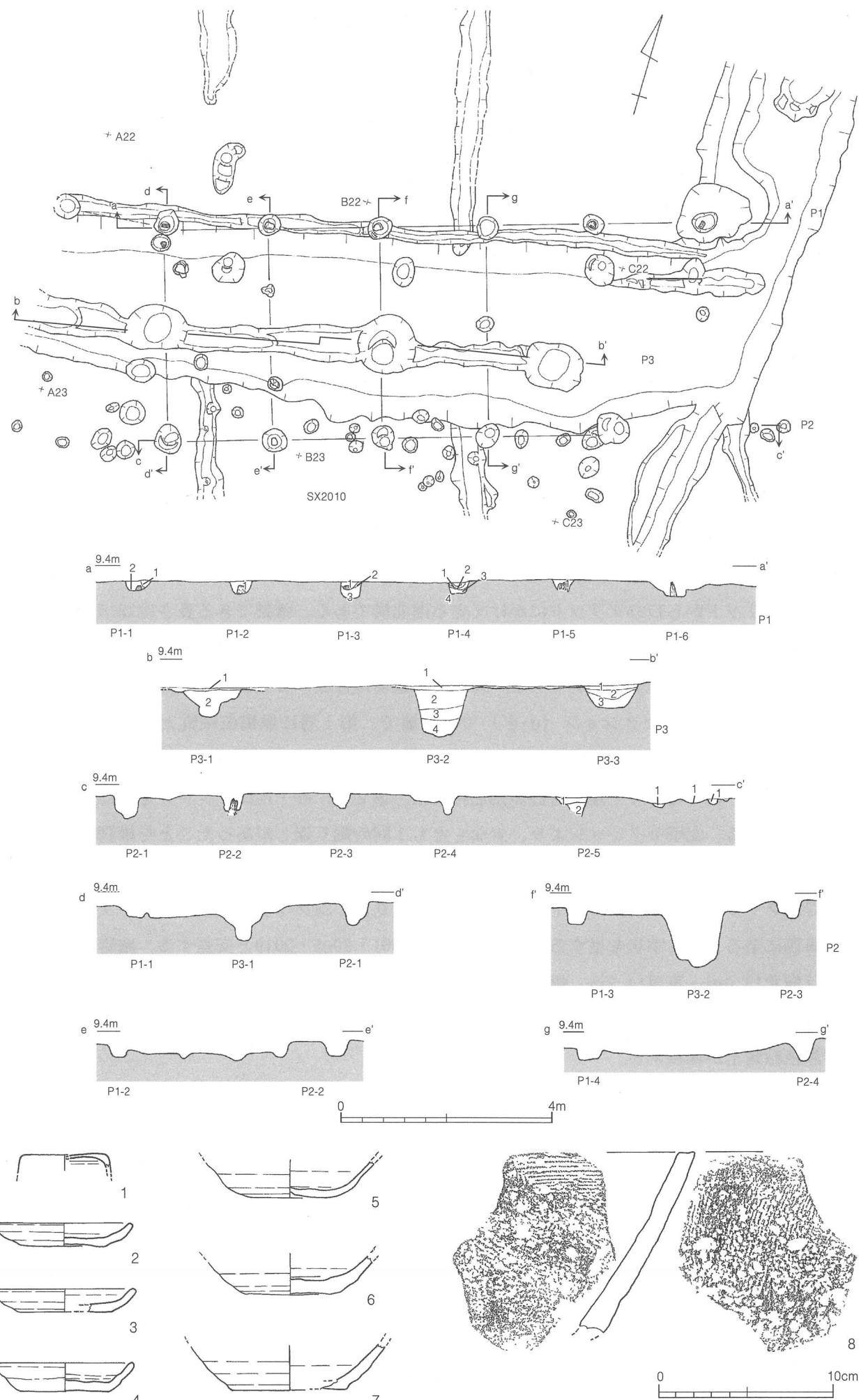
D21グリッドからD23グリッドにかけて走る南北溝である。確認できる長さは12.5m、幅0.6~0.8m、地山面からの深さは0.3~0.5mである。溝の方向はN-3°-Wである。SD2007と一部重複するが、前後関係は不明である。また、本遺構は後述のSD2055南北溝の延長線上に一致する。埋土は北壁セクション(d-d')では3層で、第1層に黒褐色粘質土、第2層に第1層より明るめで砂を多く含む黒褐色粘質土、第3層に黒色粘質土が堆積し、D21グリッド(e-e')では2層で、第1層に砂・礫を含む黒褐色粘質土、第2層に砂・地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。北壁セクションより、少なくとも1回の掘り返しがあったことを推測できる。

溝SD2017（第58・81図 図版34-1）

C22グリッドからC24グリッドにかけて南北に走り、C24グリッドからA25グリッドにかけて東西に走る、逆L字状を呈する溝である。SD2001・2005・2019と交差する。確認できる長さは南北12.0m・東西14.2m、幅0.6~0.9m、地山面からの深さは0.1~0.2mである。溝の方向は南北がN-5°-E~N-10°-W、東西がN-89°~63°-Eである。埋土はC23グリッド(a-a')で黒色粘質土が堆積する。

溝SD2019（第58・81・82図1~5 図版34-1）

C22グリッドからC25グリッドにかけて南北に走り、C26グリッドからA27グリッドにかけて東西に走る、逆L字状を呈する溝である。南北溝から東西溝へ屈曲する部分は遺構が不明瞭であるが、本報告では一連の溝として扱う。SD2001・2005・2017と一部交差する。確認できる長さは南北19.0m・東西15.7m、幅は0.5~0.9m、地山面からの深さは0.2~0.5mである。溝の方向は南北がN-5°-E~N-9°~21°-W、東西がN-70°-Eである。埋土は、C23グリッド(a-a')では粘性の弱い黒色粘質土が堆積し、C25グリッド(c-c')では5層で、第1層に黒色粘質土、第2層に非常にソフトな黒色粘質土、第3層に粘性が強く非常にソフトな黒色粘質土、第4層に褐灰色砂質土、第5層に粘性の強い黒色粘質土が堆積する。また、A27グリッ



第84図 橋状遺構実測図と5A区Pit内遺物（遺構1：100 土器1：3）

D (d-d') では3層で、第1層に粘性の弱い黒色粘質土、第2層に第1層より暗めの粘性の弱い黒色粘質土、第3層に地山ブロックをわずかに含む黒色粘質土が堆積する。

出土遺物は土師質土器の杯（第82図1～5）がある。1は底部周辺を絞り、内湾しつつ立ち上がる（杯A-1類）。2は器壁が薄く逆ハ字状に立ち上がる（杯C・D類）。3は丸みをもち立ち上がる（杯B・C類）。4・5は内面の底部と体部の境が不明瞭（杯E・F類）。

S D 2017とS D 2019に囲まれた区画内には複数の建物が確認されることから、両溝はそれらの区画溝として機能した可能性が高い。

溝S D 2025（第58・81・82図6 図版34-3）

A24グリッドからD23グリッドにかけて直線状に走る東西溝である。調査区西端でS K 2026に壊されるが、更に調査区外へ西進する。S D 2001・2005・2017・2019と交差し壊している。確認できる長さは17.8m、幅は1～1.3m、地山面からの深さは0.08～0.2mである。溝の方向はN-78°-Eである。埋土は、B 24グリッド（f-f'）では2層で、第1層は粘性が強く砂を少し含む黒褐色粘質土、第2層は砂を多く含む黒褐色粘質土が堆積する。本遺構はS D 2031と平行で、S D 2001と直交することから、それらの影響を受けて形成された可能性が高い。

出土遺物は砥石（第82図6）がある。研磨痕が明瞭に残り、一部に被熱痕がある。図化しないものとして、内面が黒色の土師質土器の皿がある。灯明皿として使用されたと考えられる。

溝S D 2031（第58・81・82図7～11 図版34-3）

A24グリッドからD 23・24グリッドにかけて直線状に走る東西溝である。S D 2001・2005・2017・2019・S K 2028・2030・2035と交差し壊している。確認できる長さは20.2m、幅は1.5～2.2m、地山面からの深さは0.15～0.3mである。溝の方向はN-79°-Eである。また、B 24グリッド付近では、不規則にピットが並ぶ堰状遺構を確認する。そのピット群の一つには、柱根が残存する。埋土は、D 24・23グリッド（e-e'）では3層で、第1層に地山ブロックを含む粘性の弱い黒褐色粘質土、第2層に部分的にシルトを含むオリーブ灰色粘土、第3層に黒色粘質土が堆積する。B 24グリッド（f-f'）では2層で、第1層に部分的にシルトを含むオリーブ灰色粘土、第2層に黒色粘質土が堆積する。また、西壁セクション（g-g'）では2層で、第1層に地山ブロックを含む黒褐色粘質土、第2層に不純物を含む緑灰色粘土が堆積する。本遺構はS D 2025と平行で、S D 2001と直交することから、それらの影響を受けて形成された可能性が高く、堰状遺構が確認されることから、何らかの機能を持った溝であると想定される。

出土遺物は、土師質土器の皿（第82図7・8）・杯（第82図9）、古瀬戸の天目茶碗（第82図10）、中国白磁（第82図11）がある。7・8ともに逆ハ字状に立ち上がり、底部と体部の境が不明瞭（皿e-1類）。9は直線的に立ち上がる（杯F-1類）。10は削り出し部の形態から後期様式天目C類（Ⅲ期・15世紀第2四半期～中頃）のものである。11は口禿げの口縁（皿IX類・13世紀中頃～14世紀初め）。

溝S D 2048（第58・81・82図12・13 図版34-2）

A27グリッドからD 26グリッドにかけて直線状に走る東西溝である。数条の溝に分流し、C

26グリッドからC・D28グリッドで南へ走るものもあるが、本報告では一括して扱う。S D2001・S D2005・S D2046を壊し交差する。確認できる長さは22.5mで、幅は0.2～0.6m、地山面からの深さは0.1～0.3mである。また、C26-C・D28グリッド間で長さ6.7m・幅0.4～0.9mの溝が南へ延びる。溝の主軸の方位はN-68°-Eである。S D2019東西溝とほぼ平行になり、S D2001・2005・2046とほぼ直交する。埋土は、D26グリッド(h-h')では2層で、ともに黒色粘質土が堆積し、第1層には地山ブロックがなく、第2層にそれを少し含む。B27グリッド(i-i')では4層で、ともに黒色粘質土が堆積し、第1層は粘性が弱く、第2層はややソフト、第3層は地山ブロックを含みややソフト、第4層は粘性が強く地山ブロックを含むという特質をもつ。A27グリッド(j-j')では2条の溝となり、北側の溝は2層で、第1層に地山ブロックを含み粘性の弱い黒褐色粘質土、第2層に地山ブロックを含まない黒色粘質土が堆積する。また、南側の溝には地山ブロックを含む黒色粘質土が堆積する。

出土遺物は、土師質土器の杯（第82図12）、砥石（第82図13）がある。12は底部周辺に段を付け、丸みをもち立ち上がる（杯B類）。13は表裏に研磨痕。また、図化していないものとして、瓷器系陶器や中世須恵器の体部片がある。

溝 S D2055（第58・83図 図版34-5～8）

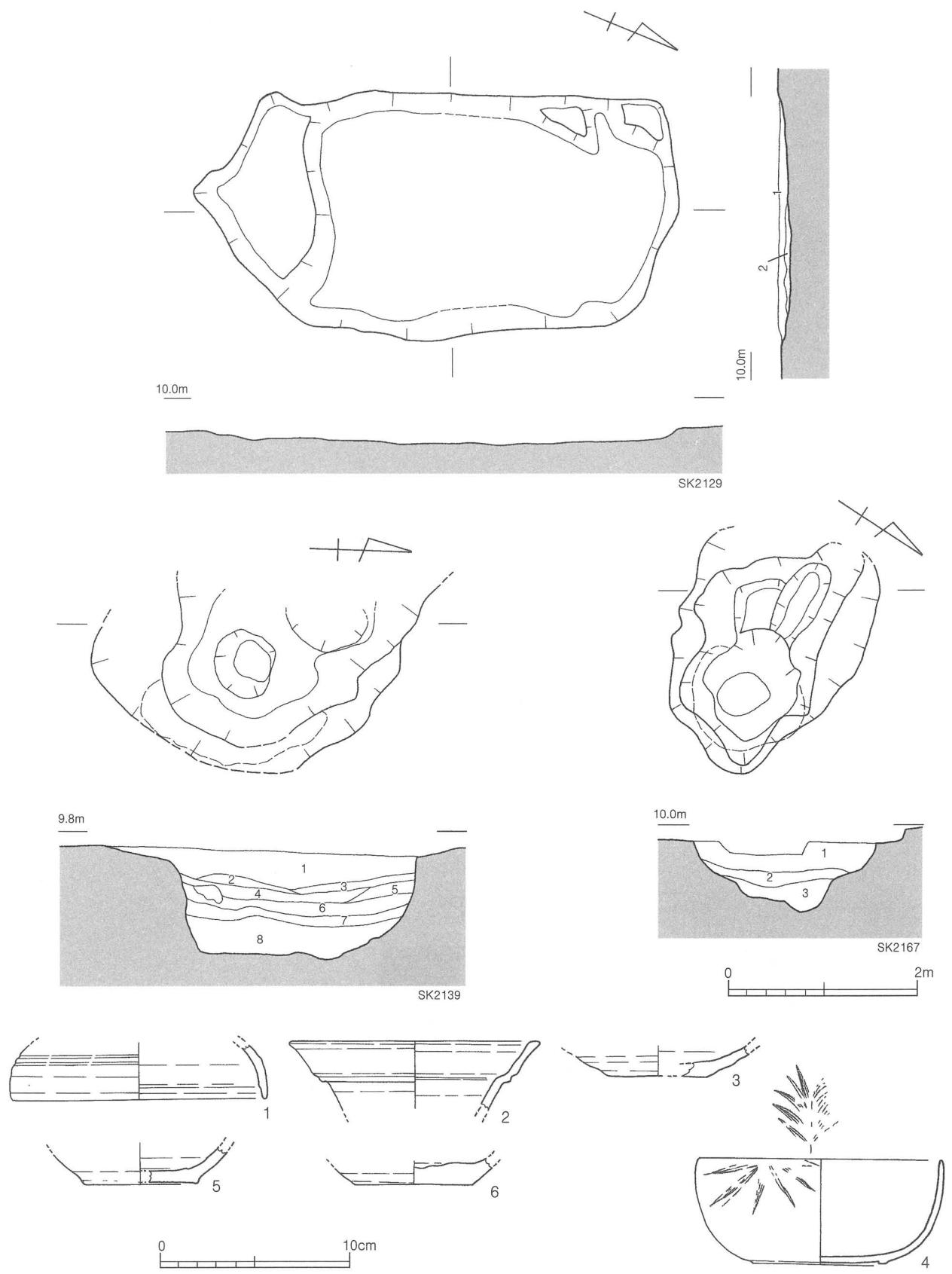
29グリッドから35グリッドの範囲を方形に区画する溝である。S D2001・S D2046を壊し交差する。確認できる長さは北側の東西溝は19.5m、東側の南北溝は29.6m、南側の東西溝は16.9m、幅は0.9m～1.4m、地山面からの深さは0.2～0.4mである。溝の方位は北側の溝でN-91°-W、東側の溝でN-0°-E、南側の溝でN-88°-Eである。正方位を意識する。埋土は、西壁セクション(a-a')・B29グリッド(b-b')では3層に分かれる。D30グリッド(c-c')では2層で、第1層に黒褐色粘質土、第2層に地山ブロックを少し含む黒色粘質土が堆積する。また、D34グリッド(d-d')・D35グリッド(e-e')では同様に2層で、第1層に粘性の弱い黒色粘質土、第2層に地山ブロックや砂を多く含む黒色粘質土が堆積する。本遺構内では総じて同様な堆積状況が見られ、少なくとも1回の掘り返しが行われた可能性がある。

出土遺物は、土師質土器の杯（第83図1・2）がある。また、図化していないものとして、同心円のタタキ目をもつ須恵器片が4点ある。1・2ともに底部から直線的に立ち上がる（杯F類）。遺構の年代は15世紀代と考えられる。

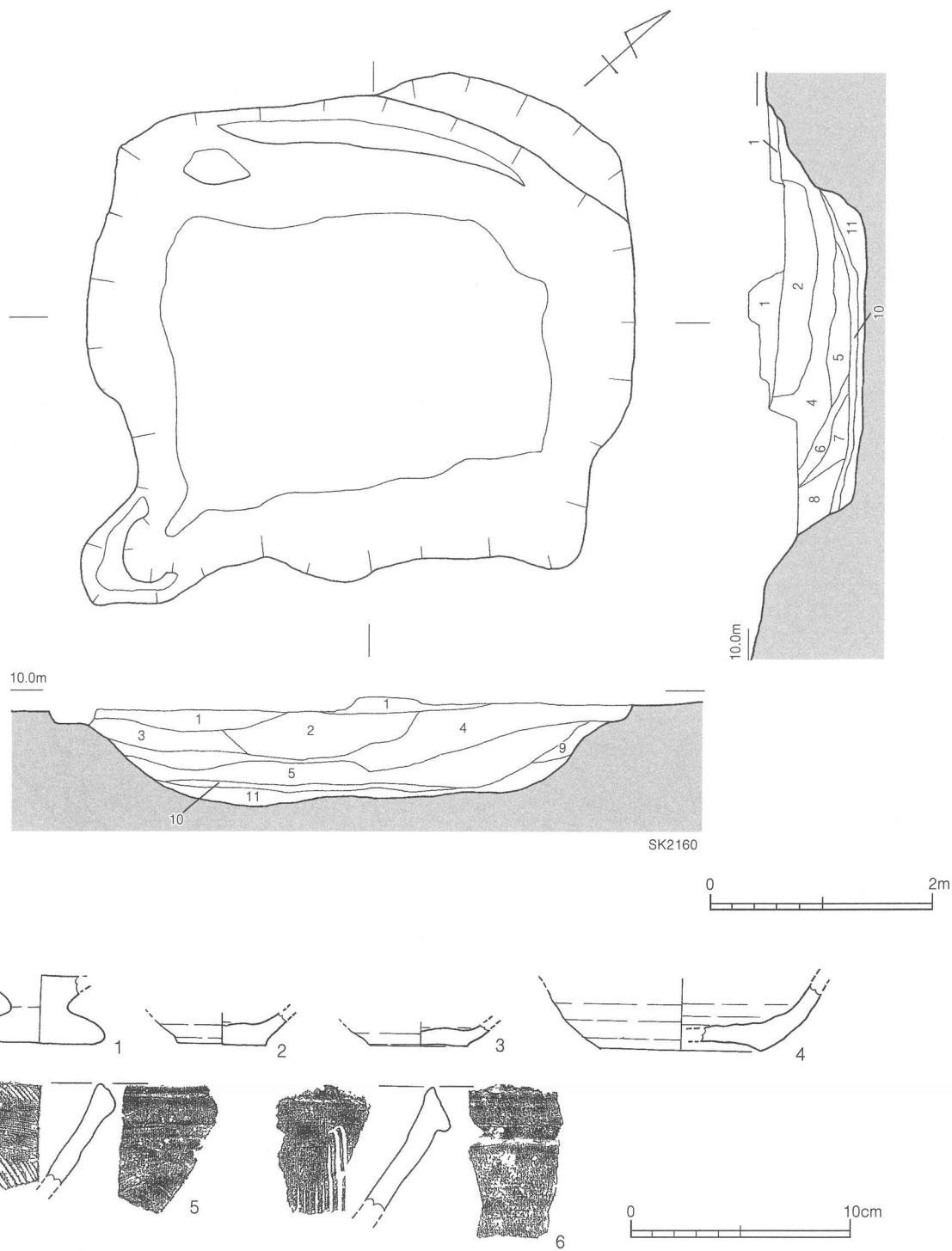
溝 S D2067（第59・83図）

A30グリッドからB31グリッドにかけて、隅丸状を呈する溝である。本遺構の1／3は攪乱をうけ、正確な形状は不明である。確認できる長さは約10.7m、幅は1.3m～2.0m、地山面からの深さは0.4mである。埋土は西壁セクション(f-f')では2層で、第1層に地山ブロックを含む黒褐色粘質土が堆積する。また、B30グリッド(g-g')では3層で、第1層に地山ブロックを少し含む黒褐色粘質土、第2層に地山ブロックを多く含む黒褐色粘質土、第3層に砂をやや多く含む黒褐色粘質土が堆積する。

出土遺物は、土師質土器の細片と同心円のタタキ目をもつ須恵器片がある。



第85図 5B区の中世土坑図と遺物実測図1 (遺構1:60 遺物1:3)



第86図 5B区の中世土坑図と遺物実測図2 (遺構1:60 土器1:3)

P i t 内遺物（第84図）

本報告に非掲載の遺構から出土した遺物を報告する。

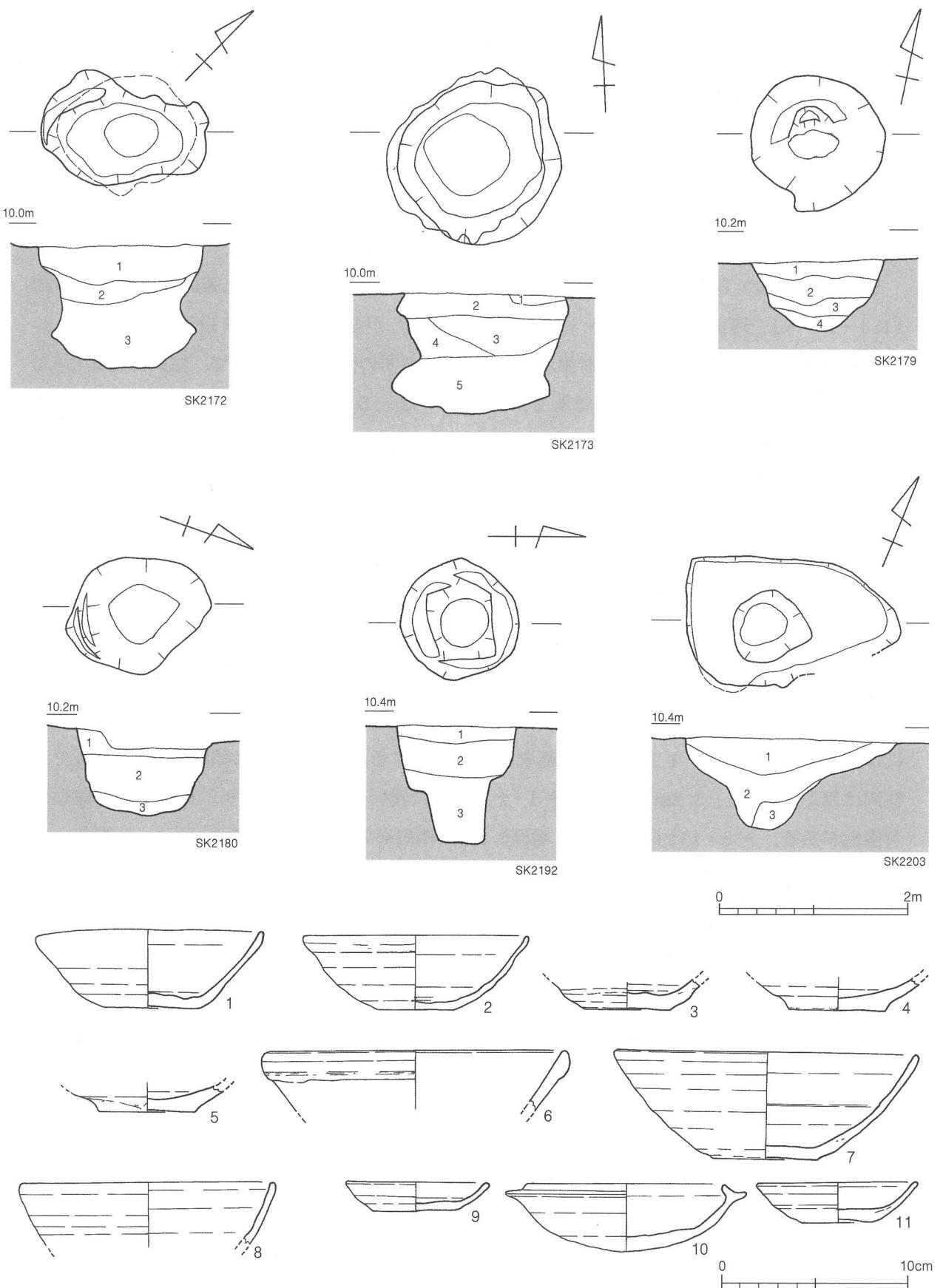
第84図1は国内陶器。茶入の蓋か。外面に釉が僅かにかかる。2～4は土師質の皿である。2・3は円みをもち内傾しつつ立ち上がる（皿b-3類）。4は逆ハ字状に立ち上がる（皿c類）。5～7は土師質の杯である。いずれも丸みをもち立ち上がる（杯A・B類）。8は土師質の鉢の口縁である。内外面にハケ目調整。

S X 2010（第58・84図 図版33-1）

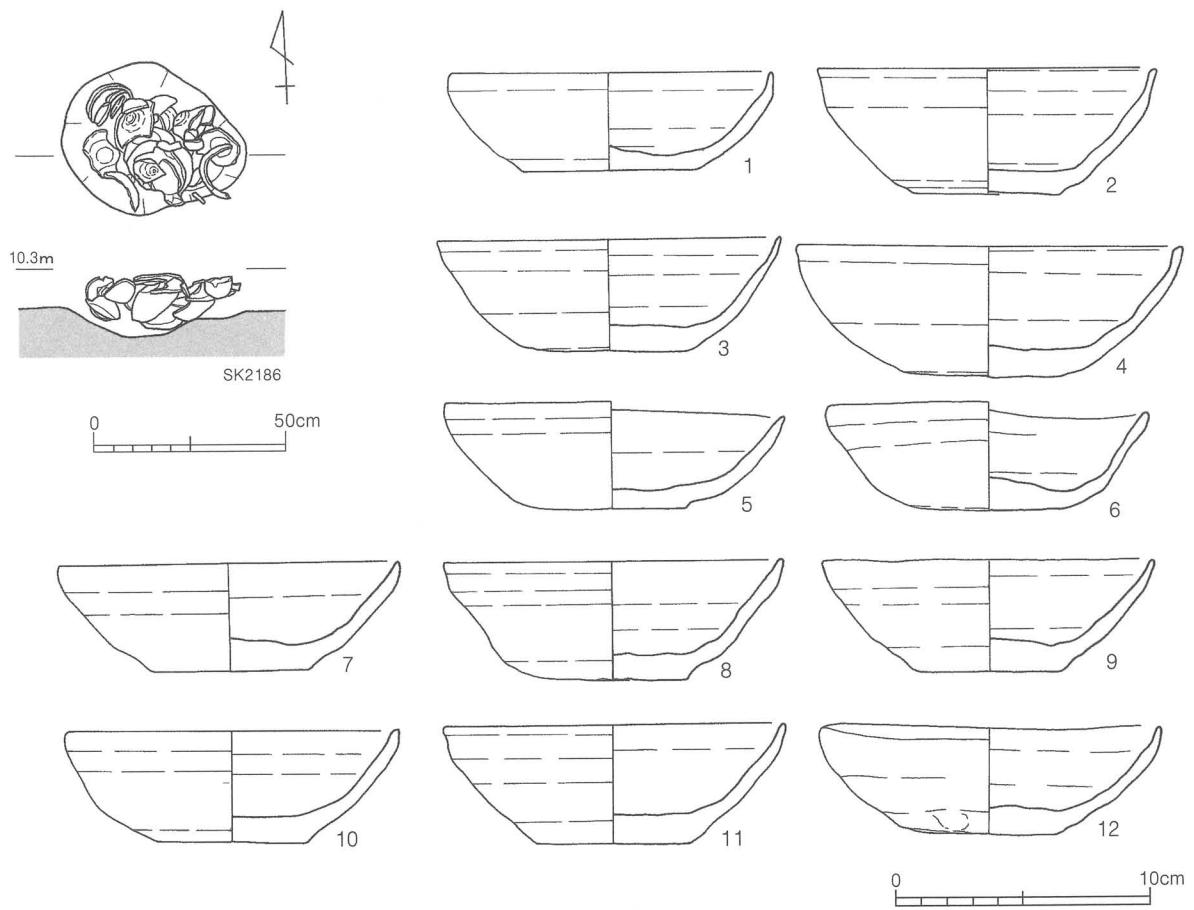
B・C21、A・B22グリッドに位置する。東西溝SD2006に沿い、北側に6つのピット列（P 1-1～6）、南側に5つのピット列（P 2-1～5）が並ぶ。また、SD2006の底面に3つの大きなピット（P 3-1～3）が並ぶ。P 1-1～6間の長さは10.2mで、柱間は西から2.0m、2.1m、2.0m、2.0m、2.1mである。P 1-1・2・5・6には柱根、P 1-3には石が残存する。柱根はいずれも打ち込まれたものではなく、底面を平坦に切断し、側面も面取りが施される。P 1-3の石は最下層と上層の間にある。埋土はP 1-1は2層で、第1層が地山ブロックを多く含む黒色粘質土、第2層が砂を少し含む黒色粘質土、P 1-2は砂を少し含む黒色粘質土、P 1-3は3層で、第1層が砂を少し含む黒色粘質土、第2層が砂を多く含む粘性の弱い黒色粘質土、第3層が砂をやや多く含む黒色粘質土、P 1-4は4層で、第1層が砂を少し含む黒色粘質土、第2層が砂を多く含む粘性の弱い黒色粘質土、第3層が砂をやや多く含む黒色粘質土、第4層が砂を多く含む黒色粘質土、P 1-5は砂を少し含む黒色粘質土が堆積する。P 2-1～5間の長さは8.5mで、柱間は西から2.0m、2.1m、2.0m、2.0mである。P 2-2には柱根が残存し、P-1と同様に底面を平坦に加工する。P 3-1～3間の長さは7.5mで、柱間は西から4.3m、3.3mである。P 3-1・2間に浅い落ち込みがあり、ピットが存在した可能性がある。P 3-1は長径1.1m、短径0.9mの楕円形の掘り方で、深さは0.6mを測る。埋土は地山ブロックを多く含む黒色粘質土であり、掘り方上面にはSD2006の最下層が堆積する。P 3-2は直径1.1mの楕円形の掘り方で、深さは1.0mを測る。埋土は3層で、第1層が砂を含む黒色粘質土、第2層が第1層や地山ブロックを含む灰黄褐色砂質土、第3層が有機物を含む黒色粘質土が堆積する。P 3-1と同様に掘り方上面にSD2006の最下層が堆積する。P 3-3は長軸1.1m、短軸0.9mの隅丸方形の掘り方で、深さは0.4mを測る。埋土は2層で、第1層が地山ブロックを多く含む黒色粘質土、第2層が砂を多く含む黒色粘質土が堆積する。P 3-1と同様に掘り方上面にSD2006の最下層が堆積する。

P 1-1～6の方位はN-74°-E、P 2-1～5の方位はN-73°-Eとほぼ平行であり、それぞれ対応するピットの間隔は4.0mずつとなる。また、P 1-1とP 3-1とP 2-1は2.0m等間隔で南北に並び、P 1-3とP 3-2とP 2-3も同様な関係にある。南北方向のピット列の方位はN-17°-Wである。これらの方位はSD2006と必ずしも合致せず、SD2001とSD2005からなる道路状遺構とほぼ平行となる。

SD2006は最大深0.4mの深い溝ではあるが、地山面の傾斜により水が流れこみやすい状況



第87図 5B区の中世土坑図と遺物実測図3（遺構1：60 土器1：3）



第88図 5B区の中世土坑図と遺物実測図4（遺構1：20 土器1：3）

であったと考えられる。P 3-1～3間に見られる溝状の落ち込みは水流による可能性がある。したがって、道路状遺構と平行であることなどから、S X2010は橋梁状遺構もしくはS D2006に先行する大型建物の可能性が考えられる。
(高橋 周)

2) 5B区

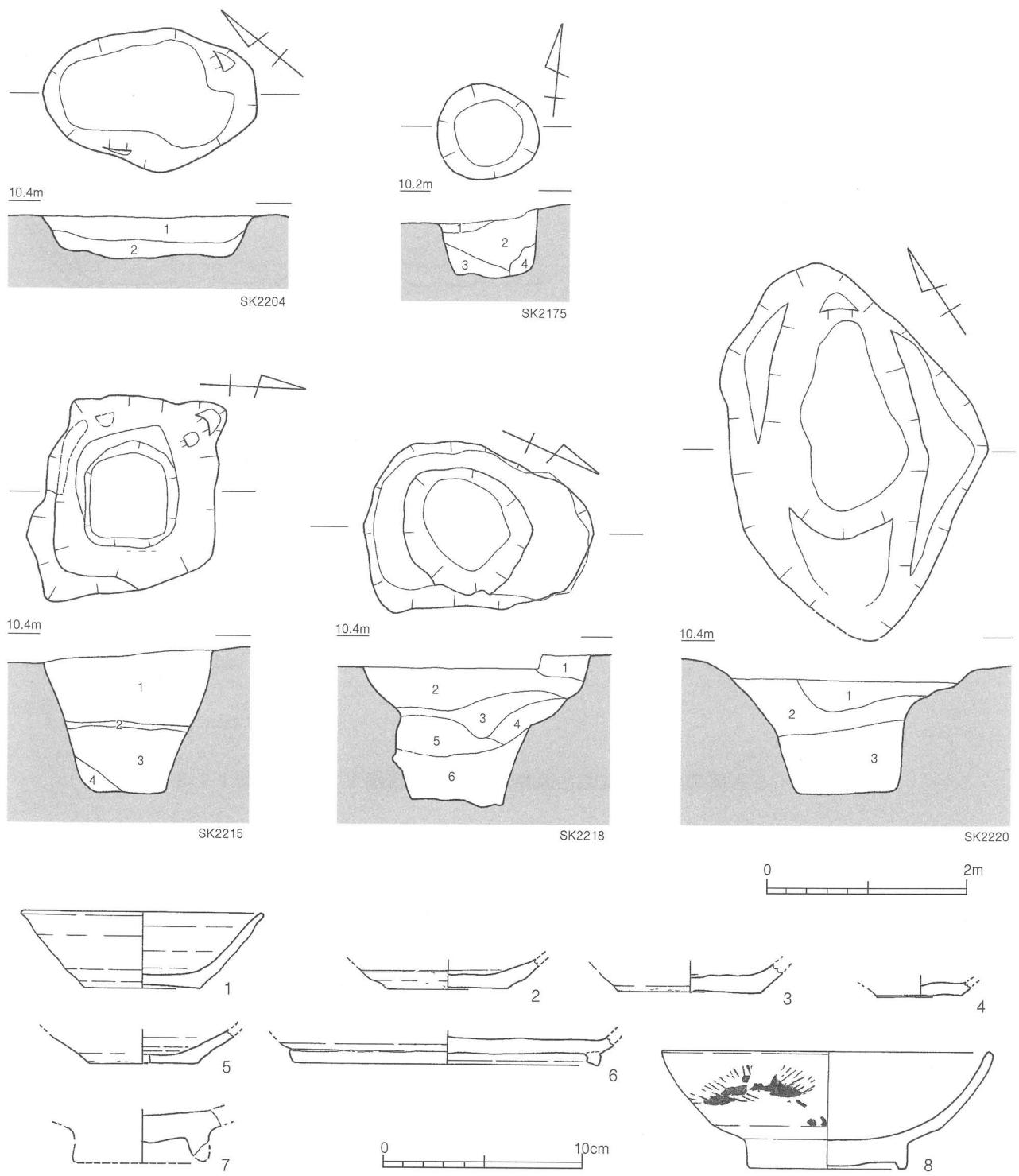
土坑

土坑SK2129（第60・85図 図版31-4）

A・B41グリッドに位置し、主軸はN-20°-Wである。掘形は不整長方形で、規模は長軸4.88m、短軸2.58m、深さ0.14mである。埋土は2層で、1層が黒褐色砂礫、2層が黒褐色粘質土である。出土遺物は図化できなかったが、須恵器の甕の体部片や土師質土器片などがある。

土坑SK2139（第60・85図1～3）

A42グリッドに位置する。掘形は不整楕円形で、規模は長軸3.24m、短軸1.98m以上、深さ0.96mである。埋土は8層で、1・2層が黒色粘質土、3層が黒褐色粘質土、4・5層が黒色粘質土、6層が黒褐色砂質土、7層が黒色粘質土、8層が灰褐色砂質土である。須恵器の杯蓋（第85図1）や磧（2）、土師質土器の杯（3）などが出土している。1は口縁端部を段状に仕上げている。2は口縁端部下端に1条の凹線を施している。3の底部内面は体部との境が不明



第89図 5B区の中世土坑図と遺物実測図5（遺構1：60 遺物1：3）

瞭である。

土坑SK2167（第61・85図4～6）

A47グリッドに位置する。掘形は不整楕円形で、規模は長軸2.12m、短軸1.96m、深さ0.6mである。埋土は3層で、1層が黒褐色粘質土、2層が黒色粘質土、3層が黒褐色粘質土であ

る。漆椀（第85図4）や土師質土器の杯（5・6）などが出土している。4は低い高台をもち、体部は口縁付近になると、ほぼ垂直になる。樹種は、ハリギリ属ハリギリ。5の底部内面は体部との境が明瞭である。6の底部内面は体部との境が明瞭で、体部は内湾気味に立ち上がる。

土坑S K2160（第60・86図 図版31-3）

B46グリッドに位置する。掘形は隅丸方形で、主軸はN-42°-Eである。規模は長軸4.99m、短軸4.44m、深さ0.92mである。埋土は11層で、1層が黒褐色粘質土、2層が黒色粘質土、3・4層が黒褐色粘質土、5層が黒色粘質土、6層が黒褐色粘質土、7～9層が黒色粘質土、10層が黒色粘土、11層が黒褐色砂である。土師質土器の柱状高台付皿（第86図1）と杯（2・3）、須恵器の壺（4）、瓦質土器のすり鉢（5）備前のかし鉢（6）などが出土している。1は脚部がほとんどなく、脚端部は丸く仕上げている。2の底部は器壁が厚い。底部と体部との境は明瞭。3の底部内面は体部との境がやや不明瞭で、体部はやや内湾気味に立ち上がる。4の底部外面は上底になっている。5の口縁下端部はやや肥厚している。6の口縁端部は上下に拡張する。

土坑S K2172（第61・87図1～3）

A・B47グリッドに位置する。掘形は不整橢円形で、規模は長軸1.75m、短軸0.92m、深さ1.3mである。埋土は3層で、1層が黒褐色粘質土、2・3層が黒色粘質土である。土師質土器の杯（第87図1～3）などが出土している。1は杯C-1類で、2は杯B類である。3の底部内面は体部との境が不明瞭。

土坑S K2173（第61・87図4・5）

A・B48グリッドに位置する。掘形は円形で、規模は直径1.76m、深さ1.29mである。埋土は5層で1・2層は黒褐色粘質土、3～5層は黒色粘質土である。土師質土器の杯（第87図4・5）が出土している。4・5は杯F類である。

土坑S K2179（第61・87図6 図版31-1）

B48グリッドに位置する。掘形は円形で、規模は直径1.44m、深さ0.72mである。埋土は4層で、1層が黒褐色土、2～4層が黒色粘質土である。白磁の椀（第87図6）が出土している。

土坑S K2180（第61・87図7）

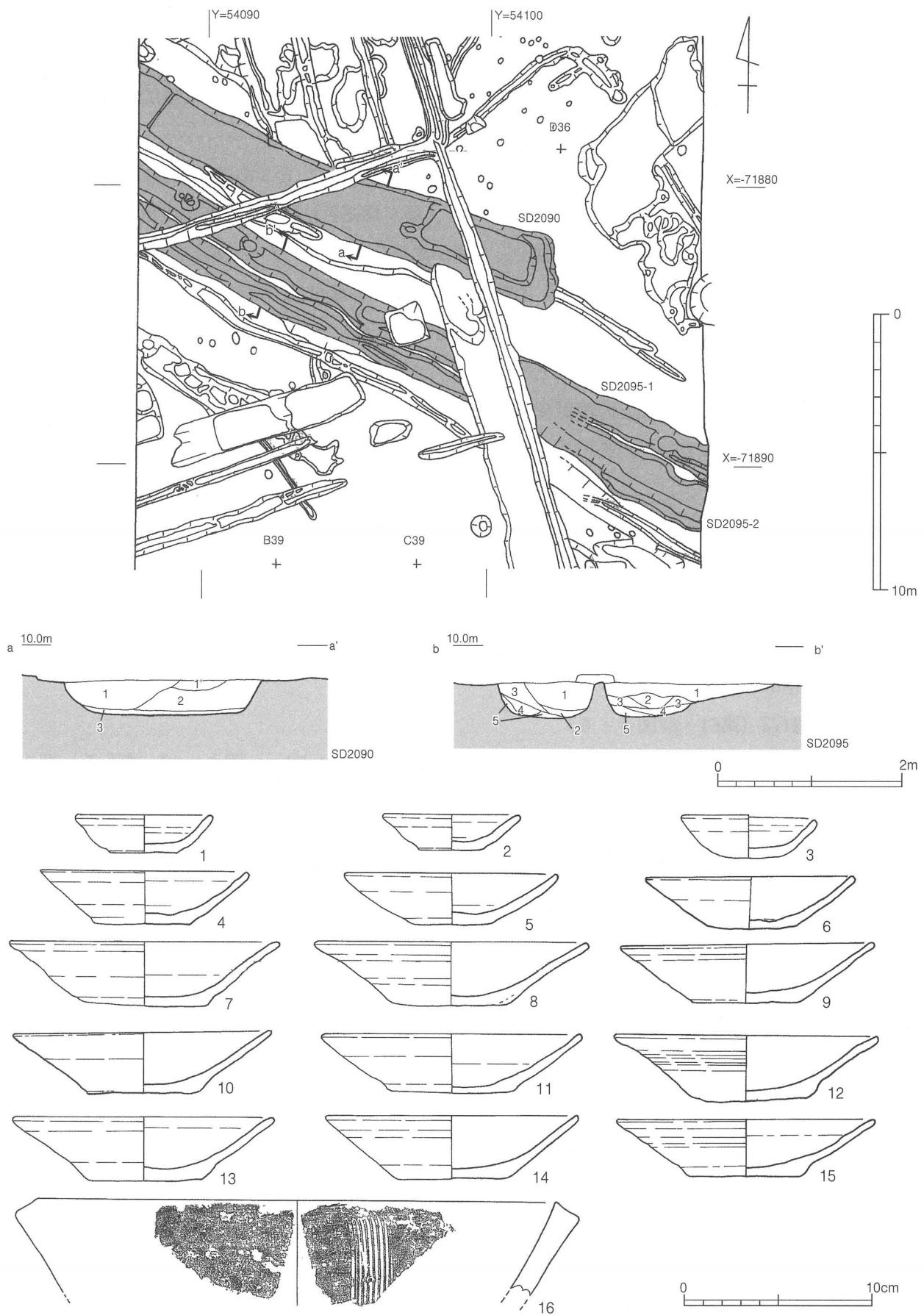
A48グリッドに位置する。掘形は不整橢円形で、規模は長軸1.44m、短軸1.24m、深さ0.86mである。埋土は3層で、いずれも黒色粘質土である。土師質土器の杯（第87図7）が出土している。杯B類である。

土坑S K2192（第61・87図8・9）

A50グリッドに位置する。掘形は円形で、規模は直径1.28m、深さ1.26mである。埋土は3層で、1・2層が黒褐色土、3層が黒色粘質土である。土師質土器の杯（第87図8）と皿（9）が出土している。9は皿b-3類である。

土坑S K2203（第61・87図10・11）

A51グリッドに位置する。SK2204と重複しており、SK2203が作られた後、SK2204が作



第90図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図1 (遺構1:200 断面1:60 土器1:3)

られている。掘形は不整橢円形で、規模は長軸2.27m、短軸1.34m、深さ0.98mである。埋土は3層で、1・2層が黒色粘質土、3層が黒褐色粘質土である。須恵器の杯身（第87図10）や土師質土器の皿（11）などが出土している。11は皿e-1類である。

土坑S K2186（第61・88図 図版31-5）

B49グリッドに位置する。掘形は円形。規模は、直径0.4m、深さ0.08mである。土師質土器の杯（第88図1～12）が積み重なった状態で出土している。1～12の杯は、杯A-2類である。

土坑S K2204（第61・89図1）

A51グリッドに位置する。掘形は橢円形で、規模は長軸2.1m、短軸1.42m、深さ0.4mである。埋土は2層で、1層が黒褐色粘質土、2層が黒色粘質土である。土師質土器の杯（第89図1）が出土している。杯C-2類である。

土坑S K2175（第61・89図）

B48グリッドに位置する。掘形は円形で、規模は直径1.0m、深さは0.56mである。埋土は4層で、1層が暗褐色土、2層が黒褐色土、3層が黒色粘質土、4層が焼土である。図化できなかったが土師質土器片が出土している。

土坑S K2215（第61・89図）

B52グリッドに位置する。掘形は不整方形で、主軸はN-3°-Wである。規模は長軸1.96m、短軸1.67m、深さ1.38mである。埋土は4層で、1層が黒褐色粘質土、2層が暗褐色粘質土、3層が黒色粘土、4層が黒褐色砂礫である。出土遺物は小片のため図化できなかった。側壁には火を受けた痕跡がある。

土坑S K2218（第61・89図2～4）

C52グリッドに位置する。掘形は不整橢円形で、規模は、長軸2.25m、短軸1.66m、深さ1.32mである。埋土は6層で、1～3層が黒褐色粘質土、4層が黒色粘質土、5・6層が黒色粘質土である。土師質土器の杯（第89図2～4）が出土している。いずれも底部のみであるが、2の底部内面は体部との境がやや不明瞭である。3の底部内面は体部との境が明瞭である。

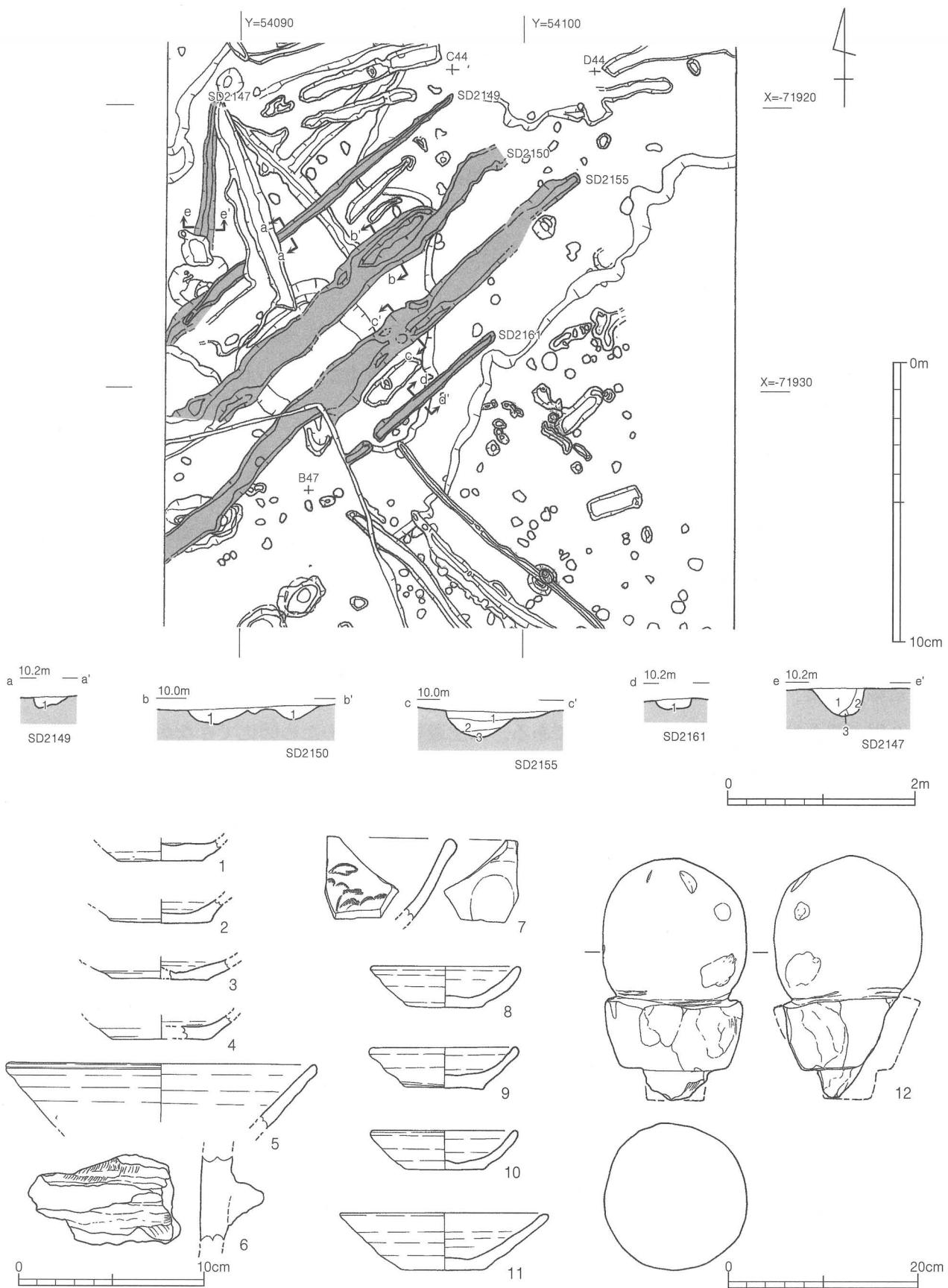
土坑S K2220（第61・89図5～8 図版31-2）

B52グリッドに位置する。掘形は不整橢円形で、規模は長軸3.56m、短軸2.54m、深さ1.3mである。埋土は3層で、1・2層が黒褐色粘質土、3層が黒色粘土である。土師質土器の杯（第89図5）、須恵器の高台付皿（6）、青磁の椀（7）、漆椀（8）などが出土している。5の底部内面は体部との境が不明瞭で、体部は直線的に立ち上がる。6の高台は底部の端に付く。7青磁の高台を砥石として再利用している。8は高台をもち、体部は口縁に向けて内湾気味に立ち上がる。樹種は、トチノキ属トチノキ。

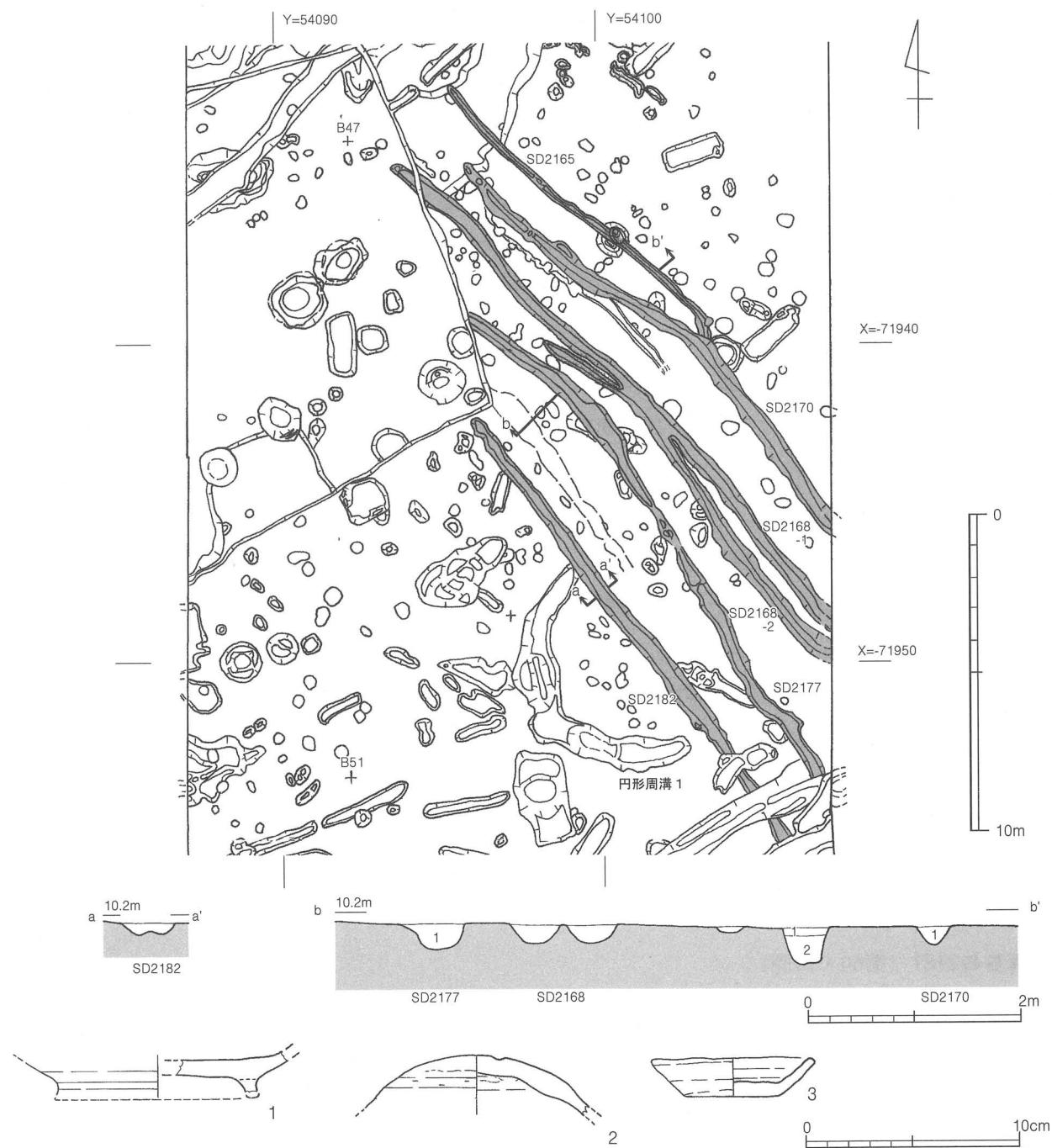
溝

溝S D2090（第59・90図1～15 図版35-1・2）

35ライン～38ラインに位置し、主軸はN-65°-Wである。規模は長さ16.5m、溝幅2.4m、深



第91図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図2 (遺構1:200 断面1:60 遺物1:3 石1:6)



第92図 5B区の中世溝状遺構と遺物実測図3（遺構1：200 断面1：60 土器1：3）

さ0.35mである。埋土は4層で、1～3層が黒褐色粘質土、4層が黒褐色粘土である。土師質土器の皿（第90図1～3）と杯（第90図4～15）が出土している。1～3は皿e-1類である。4～6・9～11・13～15は杯F-1類、7・8・12は杯F-2類である。

溝SD2095-1（第59・90図16 図版35-3）

36ライン～38ラインに位置し、主軸はN-64°-Wである。SD2095-1は、D38杭周辺でSD2095-2と合流する。規模は長さ23m、溝幅1.8m、深さ0.35mである。埋土は5層で、1層が

褐色砂礫、2層が明赤褐色砂礫、3層が黄灰色粘質土、4層が暗灰黄色粘質土、5層が褐灰色粘質土である。備前のすり鉢（第90図16）が出土している。

溝 S D 2095-2 (第59・90図 図版35-3)

36ライン～38ラインに位置し、主軸はN-62°-Wである。S D 2095-2は、D 38杭周辺でS D 2095-1と合流する。規模は長さ23m、溝幅1.05m、深さ0.35mである。埋土は5層で、1層が褐灰色粘質土、2層が褐灰色粘土、3層が褐灰色粘質土、4層がにぶい黄褐色砂礫、5層が暗褐色砂礫である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

溝 S D 2149 (第60・91図)

44ライン～45ラインに位置し、主軸はN-48°-Eである。規模は長さ10.8m、溝幅0.35m、深さ0.1mである。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

溝 S D 2150 (第60・91図 1～6・12)

44ライン～46ラインに位置し、主軸はN-48°-Eである。規模は長さ15m、溝幅1.2m、深さ0.25mである。埋土は1層で、黒色粘質土である。円筒埴輪（第91図6）や土師質土器の杯（1～5）や五輪塔（12）が出土している。1・4の底部は厚く、体部は緩やかに立ち上がっている。3の底部内面は体部との境が不明瞭で、体部は緩やかに立ち上がる。12は空風輪である。

溝 S D 2155 (第60・91図 7)

44ライン～47ラインに位置し、主軸はN-48°-Eである。規模は長さ16.2m、溝幅1.1m、深さ0.25mである。埋土は3層で、1・2層が黒褐色粘質土、3層が黒色粘質土である。青磁の椀（第91図7）が出土している。

溝 S D 2161 (第60・91図)

45ライン～46ラインに位置し、主軸はN-49°-Eである。規模は長さ4.5m、溝幅0.3m、深さ0.1mである。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

溝 S D 2147 (第60・91図 8～11)

A 44ライン～45ラインに位置する。主軸N-4°-Eで他の4本の溝とは方向を異にする。規模は長さ3.6m、溝幅0.55m、深さ0.3mである。埋土は3層で、1層が黒色粘質土、2層が黒褐色粘質土、3層が暗褐色砂質土である。土師質土器の皿（第91図8～10）と杯（第91図11）が出土している。8・10は皿e-1類で、9は皿e-2類である。11は杯D類である。

溝 S D 2165 (第61・92図 図版35-4)

46ライン～48ラインに位置し、主軸はN-47°-Wである。規模は長さ9m、溝幅0.3m、深さ0.18mである。埋土は1層で、黒褐色土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

溝 S D 2168-1 (第61・92図 2・5 図版35-4)

47ライン～49ラインに位置し、主軸はN-45°-Wである。S D 2168-2とC 48グリッドで合流

する。規模は長さ15.3m、溝幅0.5m、深さ0.18mである。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。須恵器の杯蓋（第92図2）や土師質土器の皿（3）が出土している。3は皿d類である。

溝S D2168-2（第61・92図 図版35-4）

48ライン～50ラインに位置し、主軸はN-45°-Wである。S D2168-1とC48グリッドで合流する。規模は長さ11.8m、溝幅0.35m、深さ0.2mである。埋土は1層で、黒褐色粘質土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

溝S D2170（第61・92図1 図版35-4）

47ライン～49ラインに位置し、B・C47グリッドの主軸はN-56°-Wであるが、D48・49グリッドではN-36°-Wである。規模は長さ13.5m、溝幅0.4m、深さ0.35mである。埋土は2層で、1層が黒褐色土、2層が黒褐色粘質土である。須恵器の高台付杯（第92図1）が出土している。高台は底部の端に付く。

溝S D2177（第61・92図 図版35-4）

48ライン～50ラインに位置し、B48グリッドの主軸はN-56°-Wであるが、C48グリッドからD50グリッドではN-32°-Wである。SK2183と重複しており、SK2183が作られた後、SD2177が作られている。

規模は長さ15.3m、溝幅0.6m、深さ0.25mである。埋土は1層で、黒褐色土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

溝S D2182（第61・92図）

48ライン～51ラインに位置し、主軸はN-36°-Wである。円形周溝1と重複しており、SD2182が作られた後、円形周溝1が作られている。規模は長さ13.5m、溝幅0.5m、深さ0.1mである。埋土は1層で、黒色粘質土である。出土遺物は小片のため図化できなかった。

（高橋誠二）

3 包含層の遺物

A 弥生時代（第93図1・2）

第93図1は弥生土器の甕の口縁である。口縁部は外反し、口唇部には刻み目を施している。2は弥生土器の甕の底部で、底部と体部の境は明瞭である。

B 古墳時代（第93図3～11・21・22）

第93図3は土師器の高杯である。口縁部は強いヨコナデで外反させている。4は須恵器の杯蓋で、口縁はやや内湾し、口縁端部は丸くおさめている。5は須恵器の杯蓋で、口縁内面に1条の凹線がある。6は須恵器の杯身で、底部はやや平底になっている。7は壺の口縁で、口縁端部は外反している。8は須恵器の子持壺である。親壺の頸部は緩やかに外反している。子壺は「凸」字状に張り出した親壺の胴部に貼り付けている。子壺の接合方法は、柳浦分類（1993）のd類である。9は須恵器の子持壺の脚部で、粘土紐の単位が確認できる。10は須恵器の長頸壺の頸部である。頸部内面は粘土の継ぎ足しにより肥厚している。11は須恵器の高杯の受部で

ある。口縁は欠損している。脚部との境には透かしの切り込みがある。21は須恵器の壺の口縁である。22は須恵器の甕の口縁である。口縁端部は丸くおさめている。 (高橋誠二)

C 古代 (第93図12~20)

第93図12は須恵器の直口壺の口縁で、やや内湾気味に立ち上がる。13は須恵器の壺の体部で、肩部には4本の線刻がある。底部は削っている。14は須恵器の杯で、口縁と底部の一部が欠損している。体部はほぼ直線的に立ち上がる。15は須恵器の杯で、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は細く仕上げている。16は須恵器の高台付杯の底部で、高台は底部と体部の境よりやや内側に貼り付けている。17は須恵器の高台付杯の底部である。高台は底部と体部の境に貼り付けている。18は須恵器の高台付杯の底部である。高台端部は面をもつ。19は須恵器の高台付杯の底部で、高台端部には面を作り、中央を若干凹ませている。20は須恵器の高台付皿である。高台は底部と体部の境より若干内側に貼り付けている。

D 中世

土師質土器の分類

築山5区において総破片数7500点以上（完形を含む）の土師質土器が出土した。良好な一括資料は少ないが、以下の分類を試みた。杯については、蔵小路西分類（蔵小路西遺跡1999）及び古志本郷分類（古志本郷遺跡1999）を参考にした。皿については、杯との共伴関係や形状の類似に着目し分類した。

①杯A類は、体部に丸味を持ち、底部を絞るもので、3種類に細分した。他遺跡の分類においては、蔵小路西分類の2期、古志本郷分類の杯A類に相当し、13世紀代に比定される。

杯A-1類 口径12.0~13.8cm、底径5.6~6.0cm、器高4.4~5.0cmを測る。体部が丸味を持ち、A-2・3類に比して立ち上りが急なもの。底部周辺をやや絞る。

杯A-2類 口径12.6~13.2cm、底径5.8~6.0cm、器高：3.8~5.0cmを測る。体部が丸味を持ち、口縁端部が内傾する。底部周辺をやや絞る。底部の器壁が厚い。5区SK2186からまとまって出土した。

杯A-3類 口径12.6~13.0cm、底径：5.0~6.0cm、器高：4.0~4.4cmを測る。体部が丸味を持ち、逆ハ字状に開く。口縁端部を細め、底部周辺をやや絞る。底部の器壁が厚い。5区SK2066から皿c類と共に出土した。

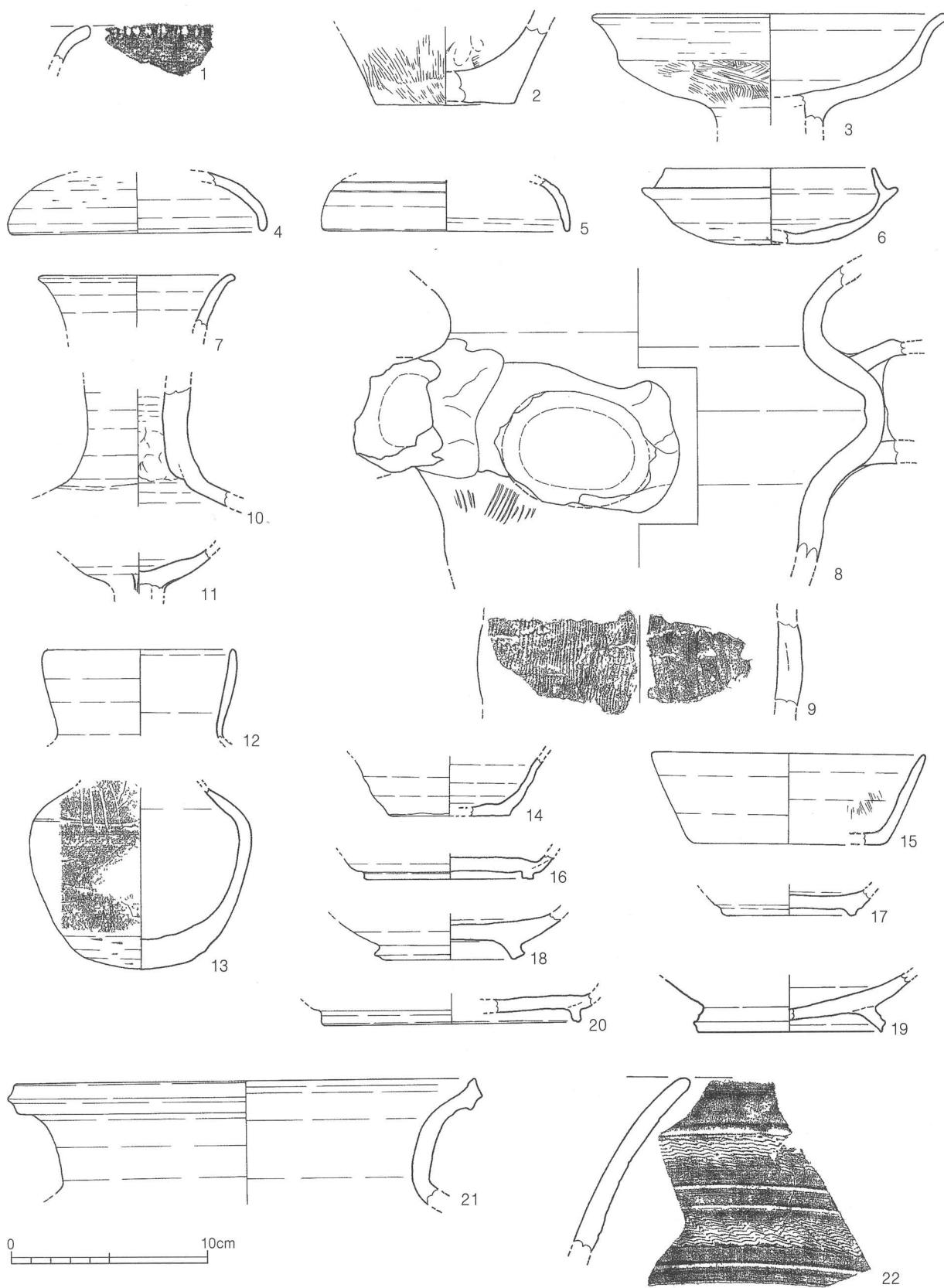
②杯B類は、体部が丸味を持ち、内湾気味に立ち上る。内面の底部と体部の境が杯A類に比して明瞭である。器壁が厚いものと薄いものがある。口径の大きさにより細分される。

①口径15.0~16.0cm、底径5.6~6.2cm、器高5.0~5.8cm

②口径13.4~13.8cm、底径5.4~5.6cm、器高3.3~4.0cm

③口径11.5~11.8cm、底径4.0~5.2cm、器高3.6~4.0cm

③杯C類は、底部から逆ハ字状に立ち上がる。内面の底部と体部の境にくぼみを持つ。形態よ



第93図 5区遺構外出土の遺物実測図1 (1 : 3)

り 2 種類に細分した。

杯C-1類 口径12.0～13.0cm、底径5.0～6.2cm、器高3.4～4.2cmを測る。底部からの立ち上りは丸みをもちつつ、逆ハ字状に立ち上がる。内面の底部と体部の境に凹みをもつ。

杯C-2類 口径11.8cm～13.0cm、底径4.8～6.8cm、器高3.8～4.8cmを測る。底部からの立ち上がりは直線的で、逆ハ字状に立ち上がる。形状は杯D類に近い。内面の底部と体部の境に凹みをもつ。

④杯D類は、底部からの立ち上りが直線的で、逆ハ字状に立ち上がる。内面の底部と体部の境が明瞭。杯C-2類に比して、立ち上がりの角度が緩やかで器壁が薄いのが特徴。口径14.0～15.6cm、底径：7.0cm、器高：3.3～4.3cmを測る。

杯B・C・D類は、蔵小路西分類の2～3期、古志本郷分類の杯B・C・E類に相当し、13～14世紀代に比定される。

⑤杯E類は、底部からの立ち上がりが直線的で、逆ハ字状に立ち上がる。形態より3種類に細分した。

杯E-1類 口径：10.0～11.2cm、底径：4.4～5.2cm、器高：2.6～3.2cmを測る。底部からの立ち上がりが直線的で、逆ハ字状に立ち上がり、底部を絞る。内面の底部と体部の境が不明瞭。杯F類に比して小ぶりなもの。

杯E-2類 口径：11.0～11.5cm、底径：4.2～6.0cm、器高：2.7～3.2cmを測る。形状の特徴はE-1類と同様であり、底部を絞らないもの。

杯E-3類 口径：11.2～12.2cm、底径：5.0～5.6cm、器高：2.2～2.5cmを測る。形状の特徴はE-1類と同様であり、底部を絞らず器高が低いもの。

杯E類は、蔵小路西分類の4期、古志本郷分類の杯C類に相当し、15世紀代に比定される。5区B30グリッドの土器溜りにおいて、杯E-1・2類が龍泉窯系青磁碗B3類と共に伴する。青磁の年代は14世紀初頭～15世紀前半とされる。

⑥杯F類は、底部からの立ち上がりをやや絞り、直線的に立ち上がる。形態の違いから2種類に細分した。

杯F-1類 口径12.6～14.4cm（14.0cm前後に集中）、底径5.8～6.8cm、器高：3.1～3.6cmを測る。底部からの立ち上がりをやや絞り、直線的に立ち上がる。内面の底部と体部の境が不明瞭。

杯F-2類 口径13.8～15.0cm、底径5.8～7.2cm、器高3.0～3.6cmを測る。形状は杯F-

1類と同様で、口縁部が外反気味となるもの。

杯F-3類 口径15.5~16.4cm、底径5.6~7.4cm、器高：3.2~3.6cmを測る。形状はF-2類と同様で、底部周辺及び底部にヘラ削り調整が見られるもの。

杯F類は、蔵小路西分類の5期、古志本郷分類の杯D類に相当し、15~16世紀代に比定される。特に杯F-3類は古志本郷分類D-3類と類似し、遺跡間での関係が注目される。

⑦皿a類は、口径6.6~7.2cm、底径3.4~4.6cm、器高1.0~1.4cmを測る。底部から直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。内面の底部と体部の境が明瞭。5区SK2072で杯A-1類と共に伴する。

蔵小路西分類の1期に相当し、12世紀後半に比定される。

⑧皿b類は、3種類に細分した。

皿b-1類 口径6.6~8.0cm、底径4.2~5.8cm、器高1.4~2.1cmを測る。底部から円みをもち立ち上がり、口縁部が内傾気味になる。立ち上がりの角度がやや急なものと緩やかなものがある。

皿b-2類 口径7.4~7.6cm、底径3.5~4.8cm、器高1.7~2.2cmを測る。底部周辺を強く絞り、円みをもち内傾気味に立ち上がる。

皿b-3類 口径7.6~8.6cm、底径：3.9~4.6cm、器高：1.6~2.1cmを測る。底部から円みをもち立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。

皿b類は、蔵小路西分類の2期、古志本郷分類の皿b類に相当し、13世紀代に比定される。

⑨皿c類は、底部から直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。皿a類に比して、立ち上がりの角度が急。内面の底部と体部の境が明瞭で、底部の器壁が厚い。口径7.0~8.5cm、底径4.4~5.8cm、器高1.2~2.0cmを測る。5区SK2066で杯A-3類と共に伴する。

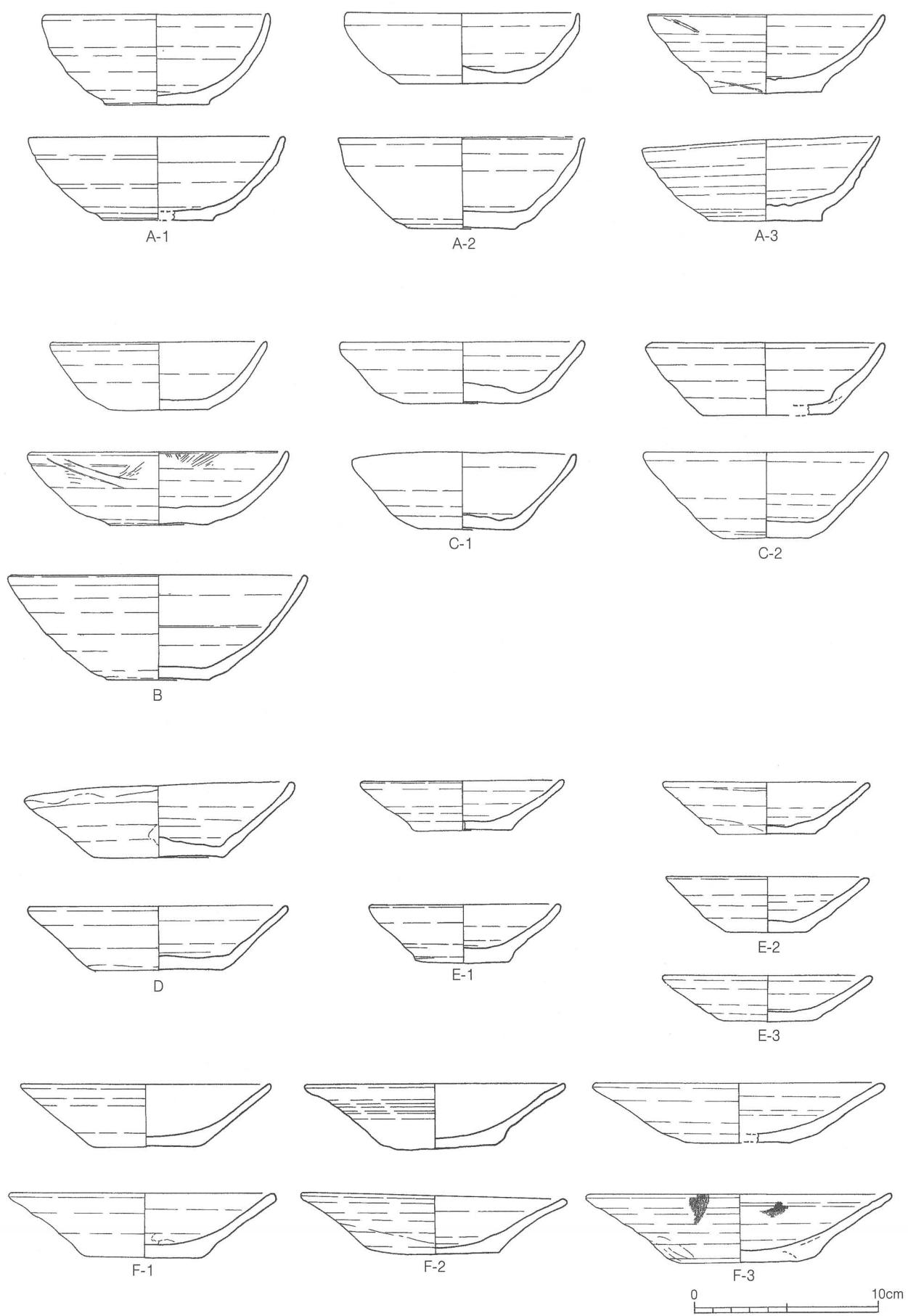
蔵小路西分類の3期に相当し、13~14世紀代に比定される。

⑩皿d類は、底部からの直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。皿a類に比して、立ち上がりが外傾する。内面の底部と体部の境を凹ませるものと不明瞭なものがある。口径：6.8~8.2cm、底径3.8~4.8cm、器高1.3~2.0cmを測る。

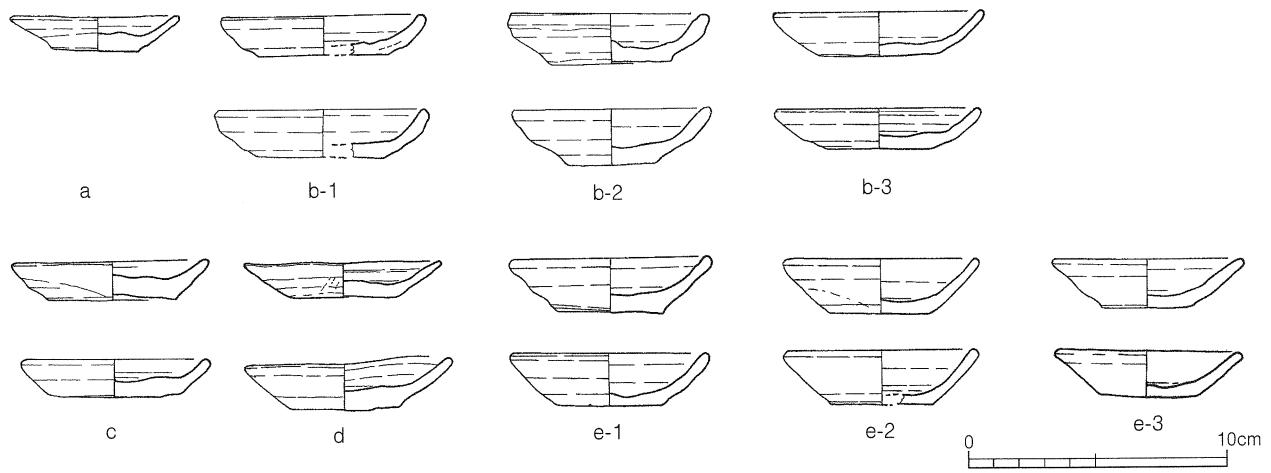
蔵小路西分類の4期に相当し、14~15世紀代に比定される。

⑪皿e類は、底部から直線的に立上り、逆ハ字状に開く。内面の底部と体部の境が不明瞭。形態より3種類に細分される。

皿e-1類 口径7.0~8.8cm、底径2.1~4.2cm、器高1.8~2.2cmを測る。底部からやや



第94図 5区出土の土師質土器分類図1 (1 : 3)



第95図 5区出土の土師質土器分類図2 (1:3)

円みをもちつつ立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。内面の底部と体部の境が不明瞭。

皿 e-2 類 口径7.4~7.6cm、底径3.6~4.2cm、器高2.1~2.2cmを測る。直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。内面の底部と体部の境が不明瞭。

皿 e-3 類 口径6.8~7.6cm、底径3.2~3.8cm、器高：1.8~2.2cmを測る。底部から直線的に立ち上がり、逆ハ字状に開くもの。やや外傾する。内面の底部と体部の境が不明瞭。

古志本郷分類の皿 c・d 類に相当し、15~16世紀代に比定される。5区A30・B30グリッドの土器溜りで杯E・F類と共に伴する。

土師質土器 (第96~100図)

本調査区内において確認した遺構の多くは中世に属するものであるが、包含層の遺物においても中世の土師質土器が多く確認された。しかし、調査区内全域において均等に確認されたわけではなく、その出土分布には顕著な偏向が見られる。特に5A区内においては一定量を認めることができるが、5B区内ではその量は激減する。

次に示した第96図は、5A区内グリッド毎の総破片数を示したものである。それによると、A27グリッドとB29・30グリッドを中心とする範囲に集中することが分かる。遺構との関連についてみると、A27グリッドではSD2019・SD2048が確認され、B29・30グリッドはSD2055に近接する。これらの遺構はともに区画溝としての性格をもつものであり、これらのグリッド内の包含層における土器の集中は遺構と無関係に捉えることはできない。また、A27グリッド・A30グリッド・B30グリッドにおいては、「土器溜まり」を確認できる。これらも包含層の土器集中分布と一致しており、ある一定の期間、継続的に土器が特定の範囲に投棄されたことを

示唆するものである。

したがって、本報告においては、包含層の土師質土器をグリッド毎に分け、「土器溜まり」の土器については、当該グリッドの土器と並べて図示する。なお、「土器溜まり」の位置は、第96図に示す。

21～26グリッド（第97図1～11）

第97図1～11の土師質土器が出土した。1～5が皿である。1・2は内傾気味に立ち上がる（皿b-1類）。3・4は底部周辺を絞る（皿b-2類）。3は内面底部中央を尖らせる。灯明皿として使用か。5は逆ハ字状（皿c類）。いずれも13世紀代のものである。6～11が杯である。6は丸みをもち内傾気味に立ち上がる（杯B類）。7・8も丸みをもつ（杯B・C-1類）。8は器壁が薄い。9・10は逆ハ字状に立ち上がる（杯C-2・D類）。11は底部から直線的に立ち上がる（杯E類）。

27グリッド（第97図12～24 図版32-1）

第97図12～24の土師質土器が出土した。ほぼA・B27グリッドからのものである。12～19が皿である。12は内傾気味（皿b-1類）、13は逆ハ字状に開く（皿c類）。14は器高が高く内傾気味（皿b-3類）。15は円みをもち逆ハ字状に開く（皿e-1類）。16は直線的に立ち上がる（皿e-2類）。17・18はやや外傾する（皿e-3類）。19は内面に赤色顔料が付着する。20～24が杯である。20は丸みをもち立ち上がる（杯B類）。21・22は底径が小さく直線的に立ち上がる（杯E類）。23・24は底部周辺をやや絞り、直線的に立ち上がる（杯F類）。後掲の土器溜りと同様に27グリッドは15世紀代の杯E・F類と皿e類が多く見られる。

土器溜り①（A27グリッド）（第97図25～39 図版32-1）

第97図25～39の土師質土器が出土した。25～29が皿である。25～27は丸みをもち逆ハ字状に開く（皿e-1類）。25は口縁部に煤。28・29はやや外傾する（皿e-3類）。30～32はやや小さめの杯で、30は底部周辺を絞り（杯E-1類）、31・32は直線的に立ち上がる（杯E-2類）。33・34は直線的に立ち上がり大きく開く（杯F-1類）。35は口縁が外傾する（杯F-2類）。36は底部周辺をヘラ削りし、底面を回転糸切りの後にヘラで丁寧に削る（杯F-3類）。他にC29グリッドから1点出土する。類似例として、古志本郷遺跡で杯D-3類として報告される。37～39も杯F類。この土器溜りの土器は杯E・F類と皿e類であり、15世紀代に投棄されたものと考えられる。

28グリッド（第98図1～7）

第98図1～7の土師質土器が出土した。1は内傾し立ち上がる（皿b-1類）。2は逆ハ字状に立ち上がり、内面の底部と体部の境が不明瞭（杯E-2類）。3～5は底部をやや絞り立ち上がる（杯F類）。6は静止糸切り。底部が厚く、古志本郷分類のC-3類に相当。16世紀。7は耳皿である。底面に回転糸切り痕を残す。伊藤分類では5c類に相当し、15世紀代と考えられる。

29グリッド（第98図8～33）

第98図8～33の土師質土器が出土した。8～13は器高の低い皿で、8～10は円みをもち内傾（皿b-1類）、11～13は逆ハ字状に開く（皿c類）。14は円みをもち立ち上がり、口径が大きい（皿b-3類）。15～17は直線的に立ち上がる（皿e-2類）。18～21は円みをもち立ち上がる杯である。18～20は内面の底部と体部の境に凹みがある（杯B・C-1類）。21は逆ハ字状に開く（杯C-2類）。22は内面に煤が付着する。23～27は小ぶりの直線的に立ち上がる杯で、23・24は底部を絞り（杯E-1類）、25は逆ハ字状に開く（杯E-2類）。26・27は器高が低い（杯E-3類）。28～32は口縁が大きく開く杯で、28は直線的に立ち上がり（杯F-1類）、29は底部周辺や底面をヘラ削りする（杯F-3類）。30～32も杯F類。33は口縁を玉縁状に成形する。

30・31グリッド（第98図34～39）

30グリッド以南は土師質土器の出土が激減する。第98図34～39の土師質土器が出土する。34・35は直線的に立ち上がり、やや外傾する（皿e-3類）。36は小ぶりの杯で、直線的に立ち上がる（杯E-2類）、37～39は逆ハ字状に大きく開く（杯F-1類）。

土器溜り②（A30グリッド）（第99図1～8 図版32-2）

第99図1～8の土師質土器の皿が出土した。個体差はあるが、基本的に外傾しつつ直線的に立ち上がり、内面の底部と体部の境が不明瞭な特徴をもつ。皿d類に分類し、15世紀代のものと考えられる。

土器溜り③（B30グリッド）（第99図9～13 図版32-3）

第99図9～13の土師質土器が出土した。9～12は小ぶりの杯で、9～11は底部を絞り（杯E-1類）、12は器高がやや低い（杯E-3類）。13は鉢の底部。また、龍泉窯系青磁碗B3類の口縁が共伴する。青磁の年代より、杯E類は14世紀初頭～15世紀前半に比定できる。

34～56グリッド（第100図）

31グリッド以北に比べ、34グリッド以南は包含層の土師質土器が少ない。第100図1～6の土師質土器が出土した。1は皿で逆ハ字状に開き、内面の底部と体部の境が凹む（皿d類）。2～6は杯である。2・3は小ぶりで直線的に立ち上がる（杯E-2類）。4は直線的に立ち上がり、内面の底部と体部の境が凹む（杯D類）。5は直線的に立ち上がり、内面の底部と体部の境が不明瞭（杯F-1類）。6は口縁部が外傾する（杯F-2類）。

第100図7～13は包含層から出土した土師質の鉢である。いずれも内外面ともにハケ目調整、口縁部にナデ調整を施す。7・8は片口鉢。9・10は擂鉢。ともに3条の擂り目を確認できる。11～13は捏鉢。

貿易陶磁器（第101図）

第101図1～14は龍泉窯系青磁である。1は碗B1類。外面に鎧蓮弁文。横田・森田編年（横田ほか1978）I-5類（13世紀初頭～14世紀前半）。2・3は碗B2類。外面に片彫りの粗略な蓮弁文。4は碗B3類。ヘラ書きの蓮弁文。2～4は14世紀初頭～15世紀前半。5・6は碗B4類（15世紀後半～16世紀前半）。外面に細い線書きの蓮弁文。7～9は横田・森田編年の杯III類（13世紀中頃～14世紀初頭）。7は外面に鎧蓮弁を施す。10は杯IV類（15世紀）以降。

全体的に被熱。11・12は碗類。11は小さな玉縁状、12は外反する。13は壺の口縁。14は体部片で内面に雲文を施す。碗I類（12世紀中頃～後半）。15は同安窯系青磁碗I類（12世紀中頃～後半）。内面に櫛描による文様を施す。16は白磁。内面に劃花文を施す。17是中国陶磁の天目茶碗。にぶい赤褐色と黒色の釉が混じる。18は褐釉陶器の壺の肩部。19～24は龍泉窯系青磁の底部。いずれも高台内天井部・畳付の一部が無釉。見込み部に19は劃花文、20は貫入、21は菊花の押型文を施す。22は体部に線描きの蓮弁文があり、碗B4類（15世紀後半～16世紀前半）。25・26は白磁の底部。いずれも畠付の釉を削る。横田・森田編年の皿E群（16世紀）。

国内陶器（第103図）

第103図1～4は備前焼の口縁である。1は玉縁状の口縁で間壁編年（間壁ほか1966～68・84）III期（14世紀半ば）。2は切断面に漆を塗る。1と同一個体の可能性あり。3は壺。玉縁状の口縁を呈するが、やや扁平化する。間壁IV期（14世紀後半～15世紀）。4は壺の体部片か。内面にヨコハケ、外面にタテハケの調整を施す。間壁III・IV期（14世紀～15世紀前半）。5～10は瓷器系陶器である。5～7は口縁。5は口縁断面がL字状を呈する。常滑編年（赤羽ほか1995）5形式（13世紀半ば）。6・7は口縁断面がN字状を呈する。常滑編年6～7型式（13世紀後半～14世紀半ば）。8は体部片で、内面に回転ナデとユビオサエ調整が明瞭に残る。常滑編年9～11型式か（15世紀前半～16世紀半ば）。9・10は壺の底部。ともに内面にナデ、外面の底部周辺にユビオサエ、立ち上り部に細かいナデを施す。ともに常滑編年9～10型式か（15世紀前半～後半）。第103図11～14は擂鉢の体部片。産地は不明であるが、11・12と13・14とで色調・胎土が異なる。この他に5A区を中心に多くの擂鉢片が包含層から出土する。15～18は肥前系陶器である。15～17は灰釉皿で、15は九州陶磁編年（九州近世陶磁学会2000）のI-2期（1594年～1610年代）、16・17はII期（1610～1650年代）に相当する。16は口縁に灰白色の釉による文様を施す。18は小型の碗。IV期（1690～1780年代）に相当する。

中世須恵器・瓦質土器（第102図）

第102図1は東播系鉢である。口縁部外面をやや肥厚させる。2～6は須恵質の鉢である。2～5は口縁。いずれも外面にヨコナデ、内面にハケメを施す。口縁部はナデ調整。2・3は玉縁状の口縁。7～11は瓦質土器である。7は内面にわずかにハケメを認める。わずかに口縁が玉縁状となる。8は口縁端部に平坦面をつくる。鉢か。9は七宝文のスタンプを施す。同例のものが蔵小路西遺跡からも出土する。10は口縁が「く」字状に屈曲する。直径2cmの円形の窓を開ける。火鉢か。11は平底で外傾気味に立ち上がる。火鉢か。

E その他（第104図）

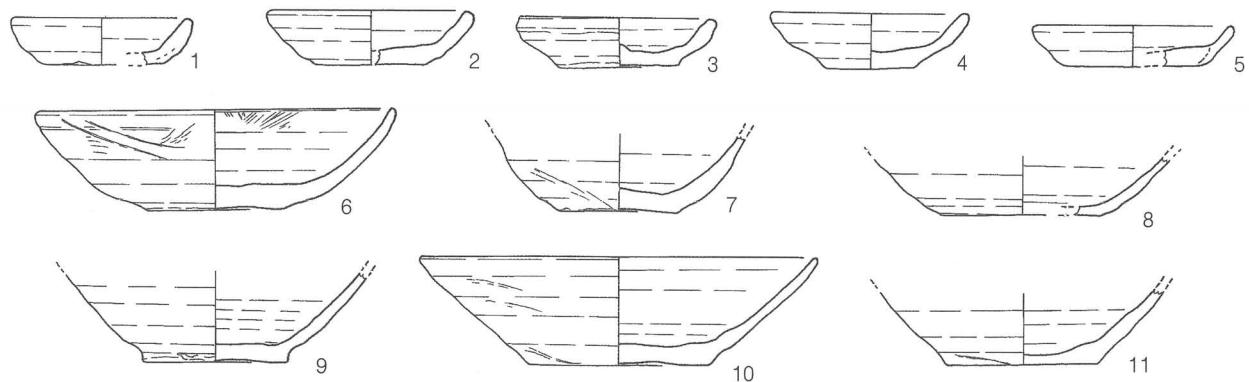
第104図1は短冊形の打製石斧と思われる。2は硯の陸部である。3・4は砥石で、いずれも2面使用している

（高橋 周）

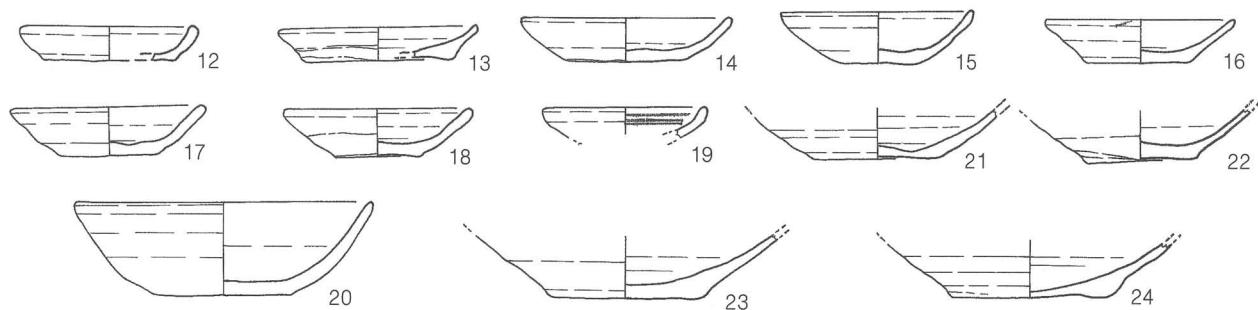


第96図 遺構外出土の土師式土器分布図（左図1：250 右図1：300）

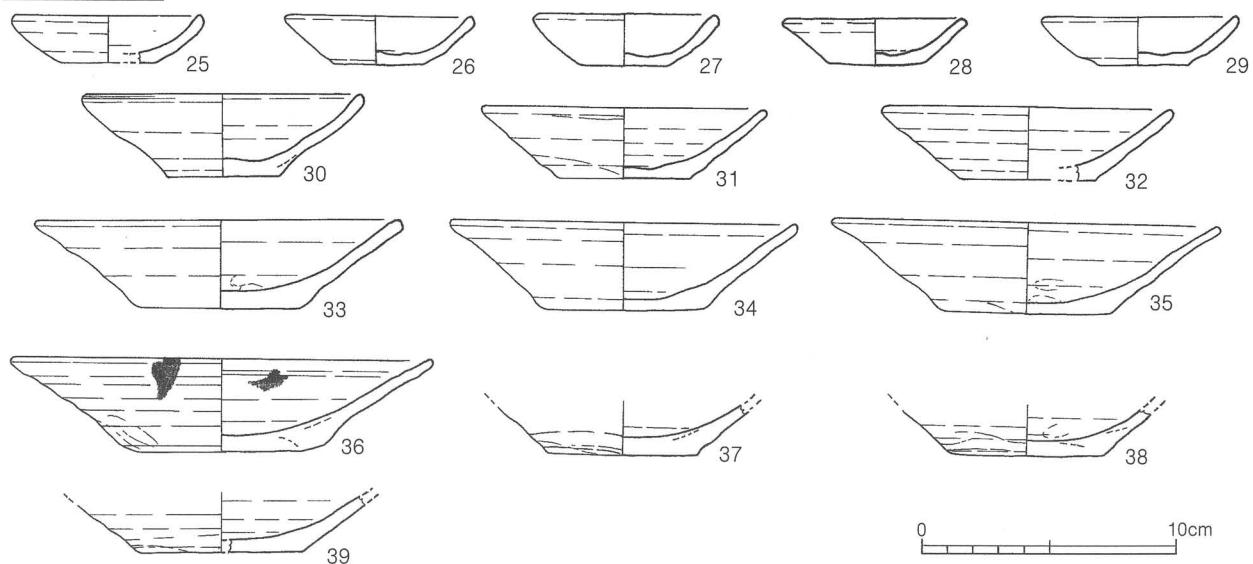
21~26グリッド



27グリッド

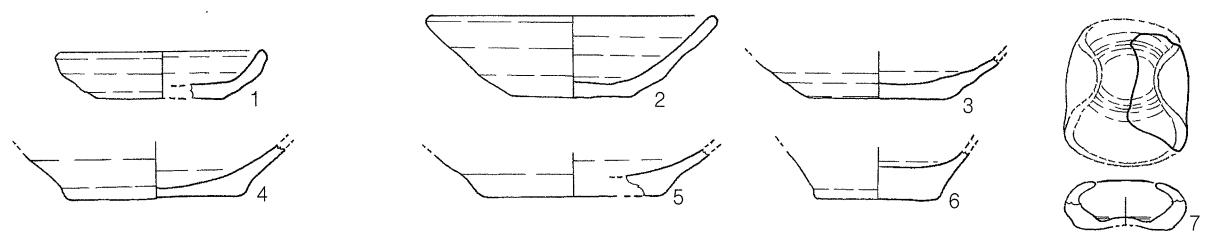


土器溜り①

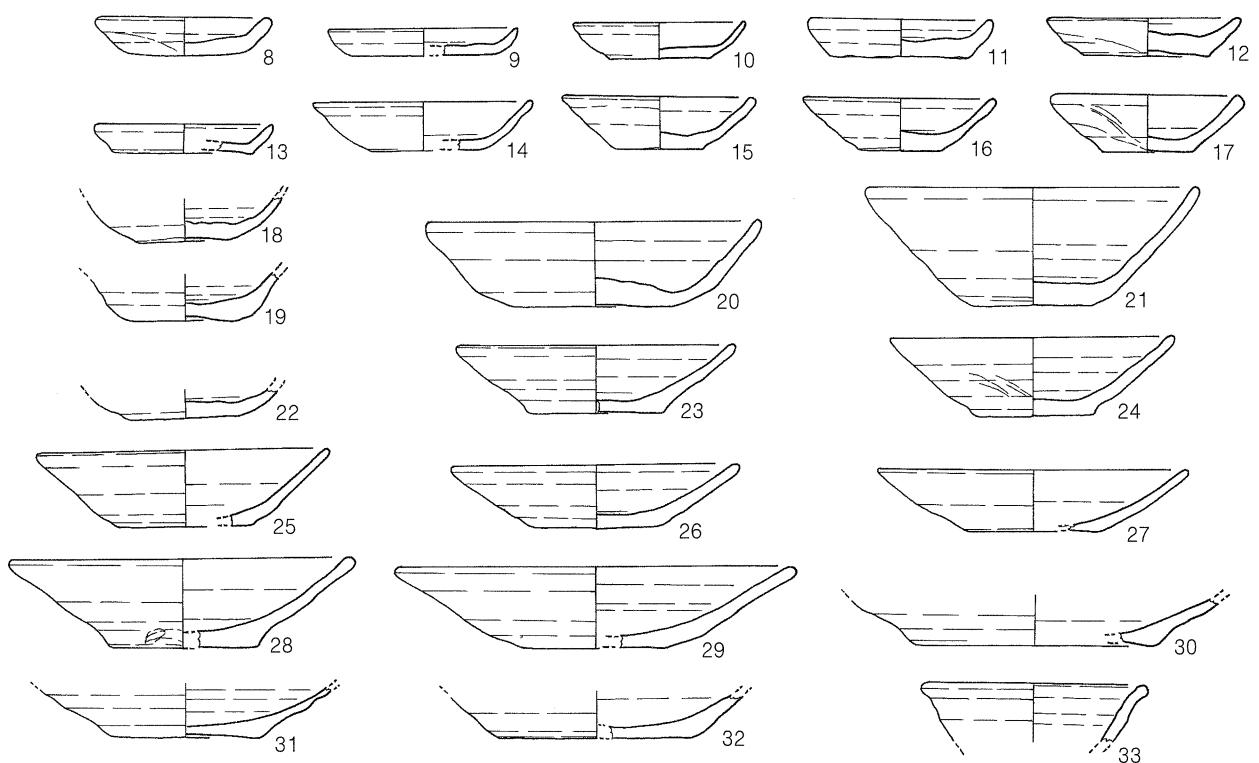


第97図 5区遺構外出土の遺物実測図1 (1:3)

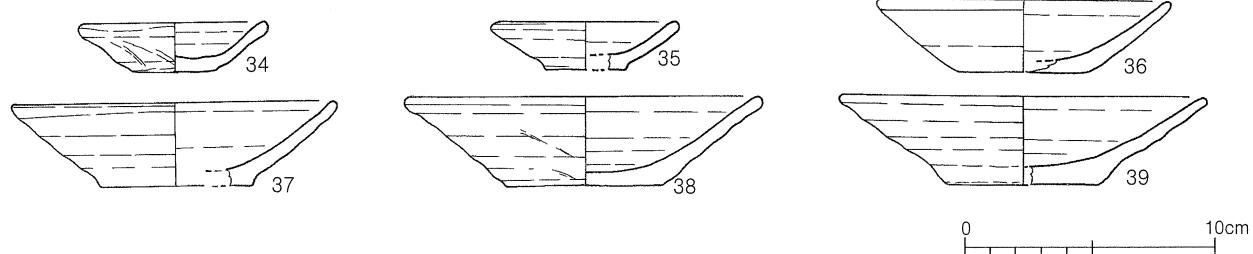
28グリッド



29グリッド



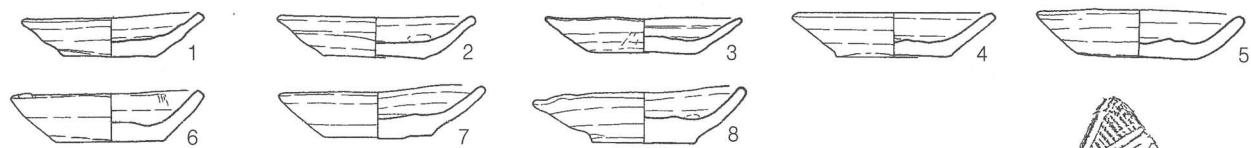
30・31グリッド



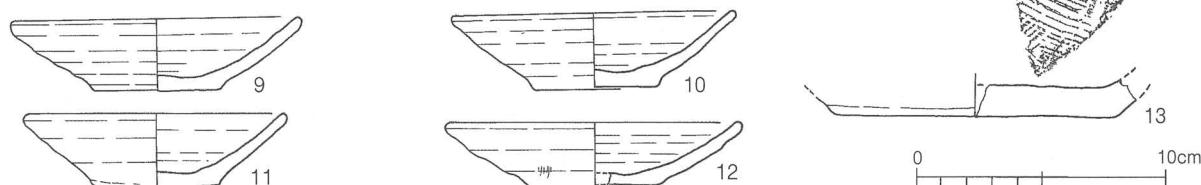
0 10cm

第98図 5区遺構外出土の遺物実測図2 (1:3)

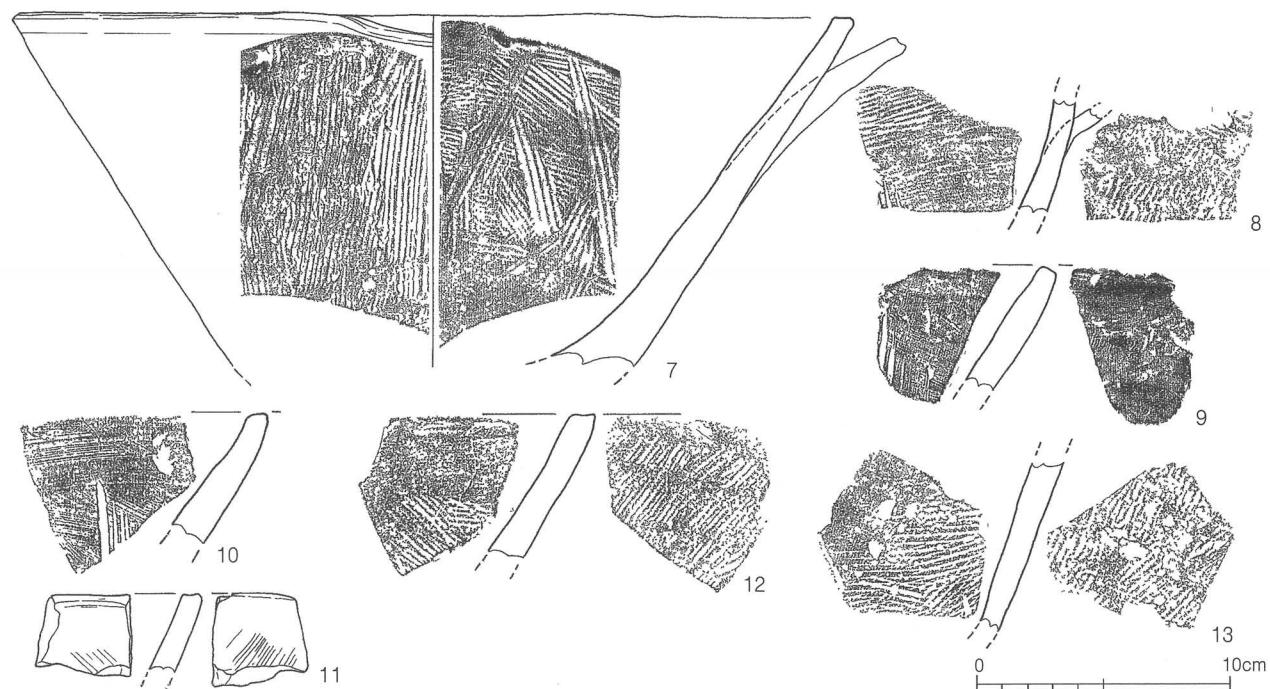
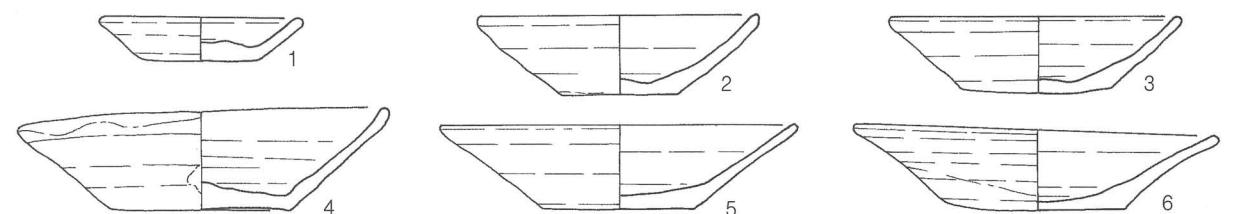
土器溜り②



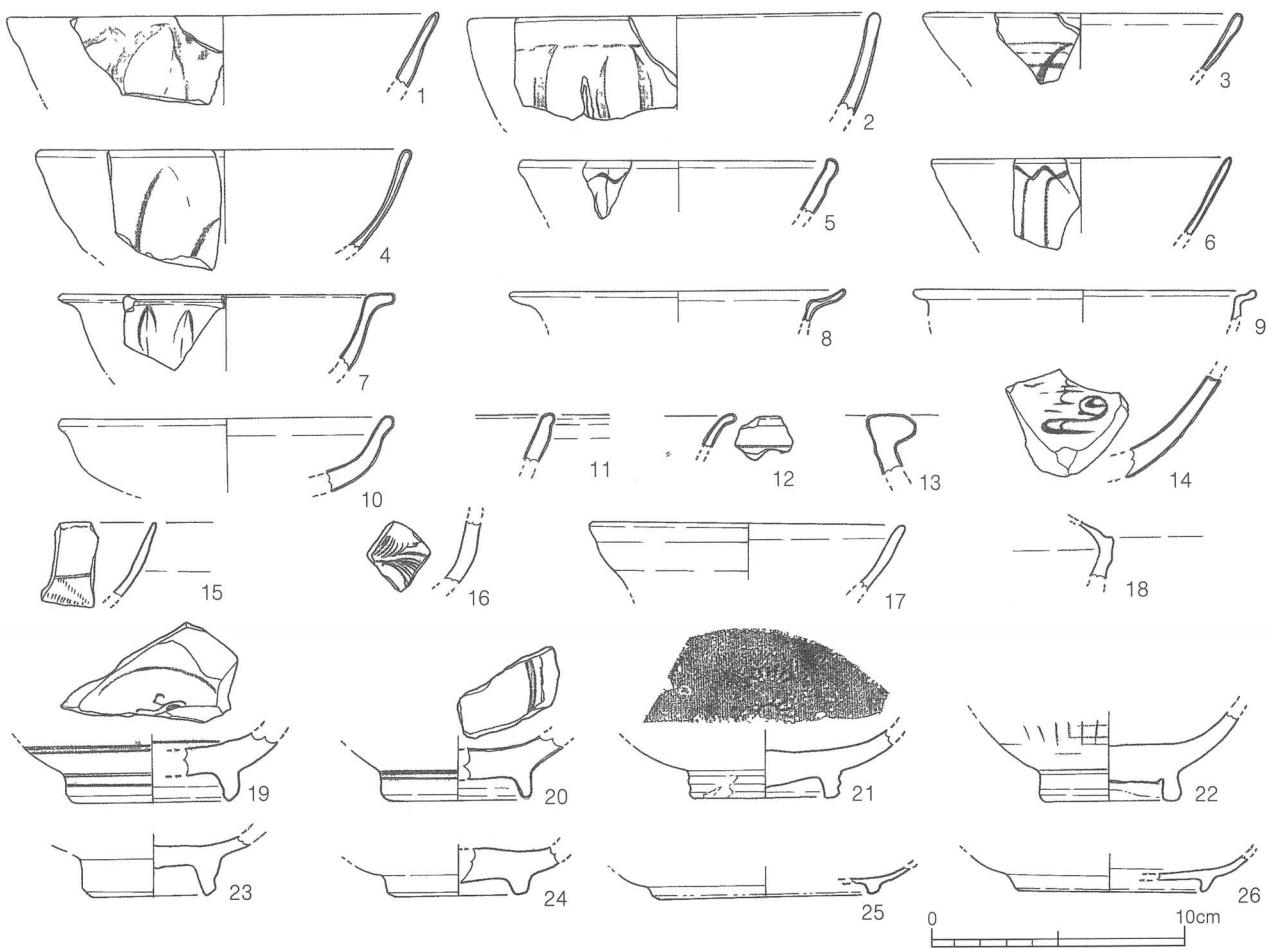
土器溜り③



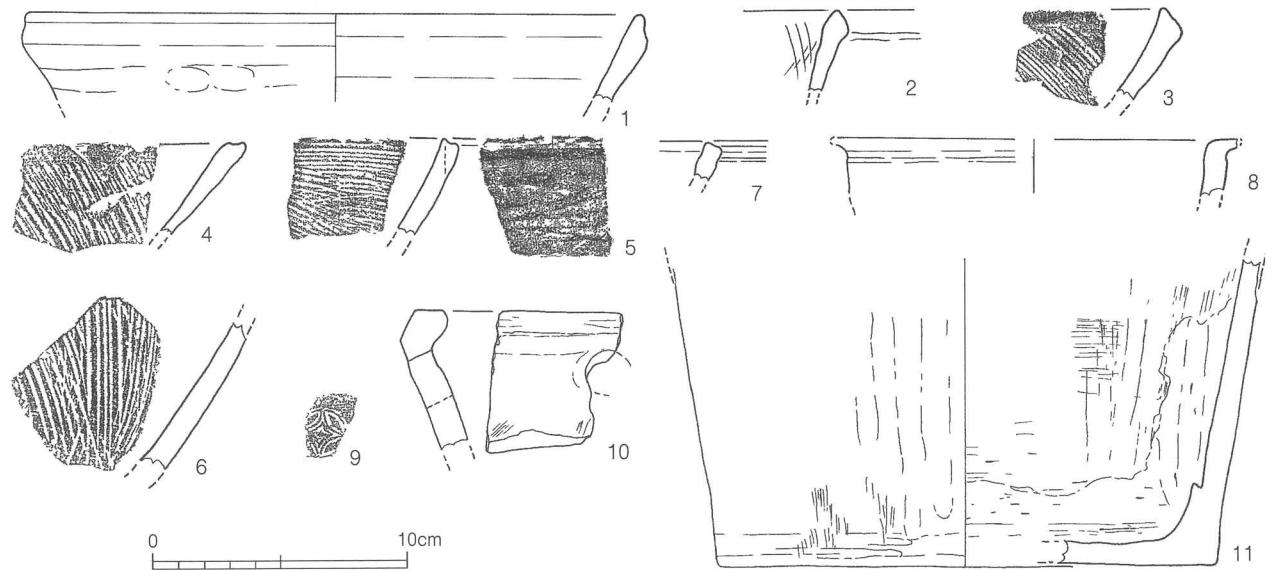
第99図 5区遺構外出土の遺物実測図3 (1:3)



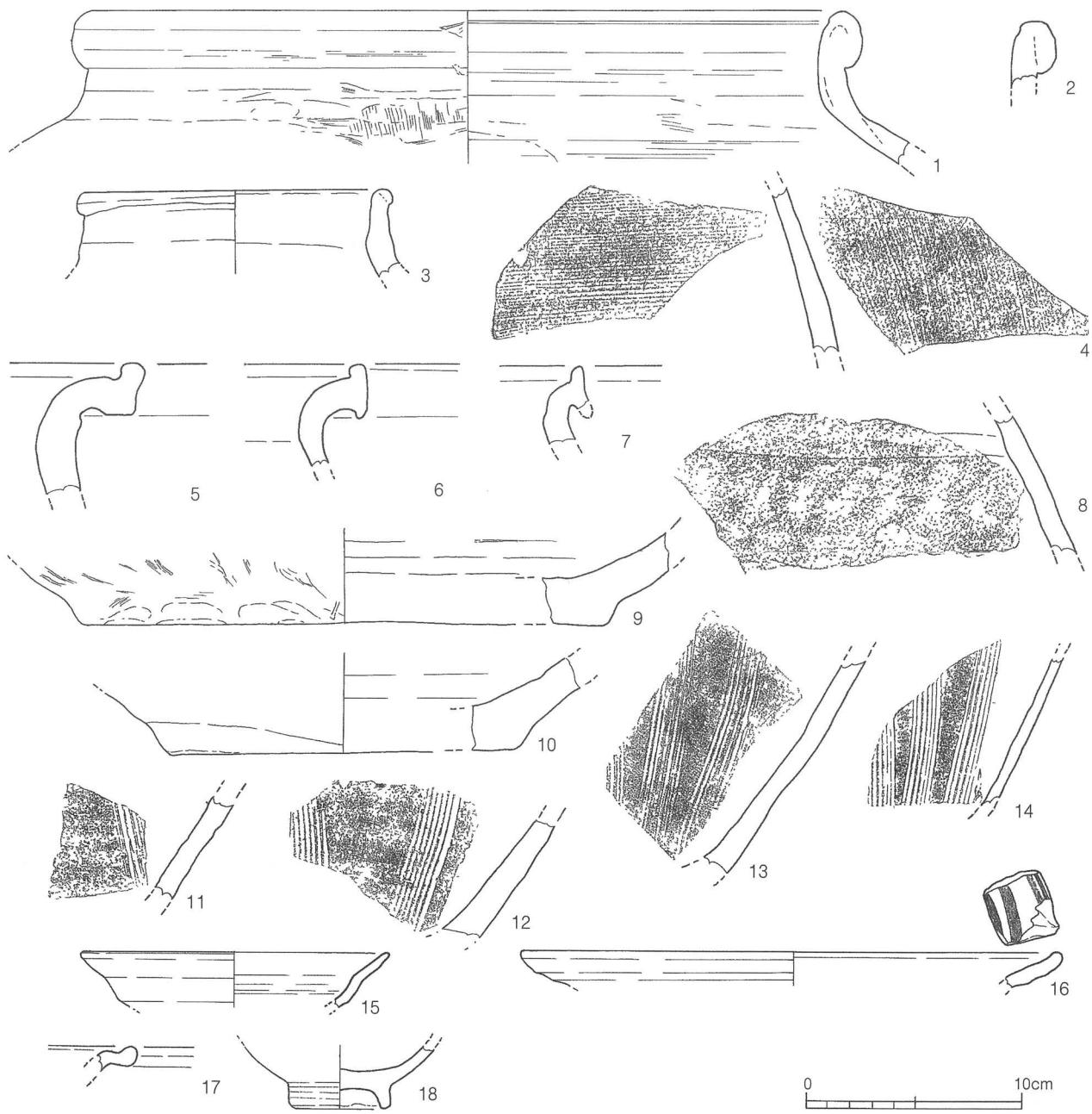
第100図 5区遺構外出土の遺物実測図4 (1:3)



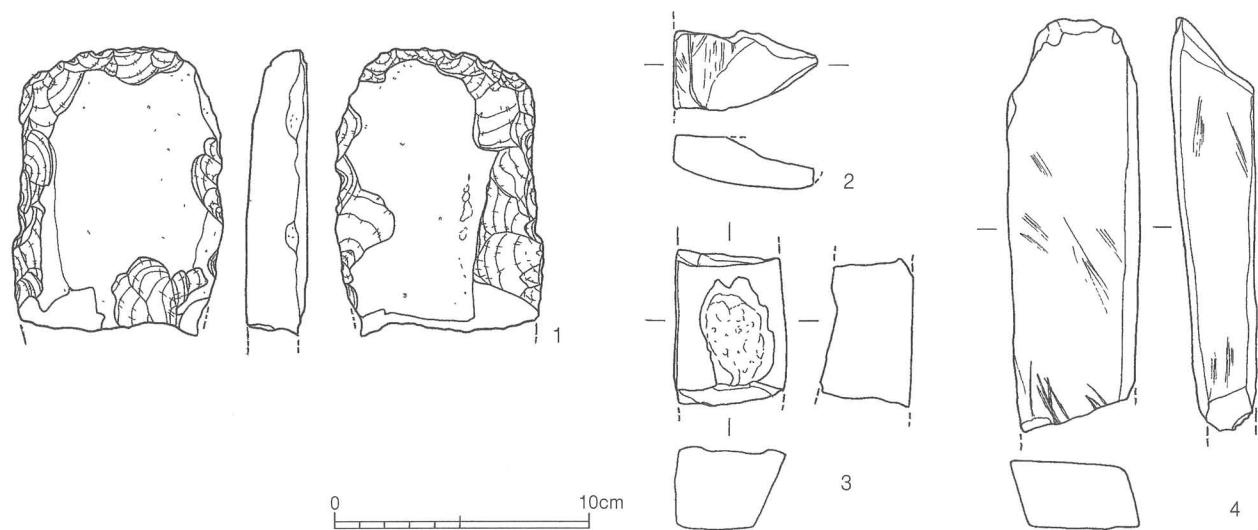
第101図 5区遺構外出土の遺物実測図5 (1:3)



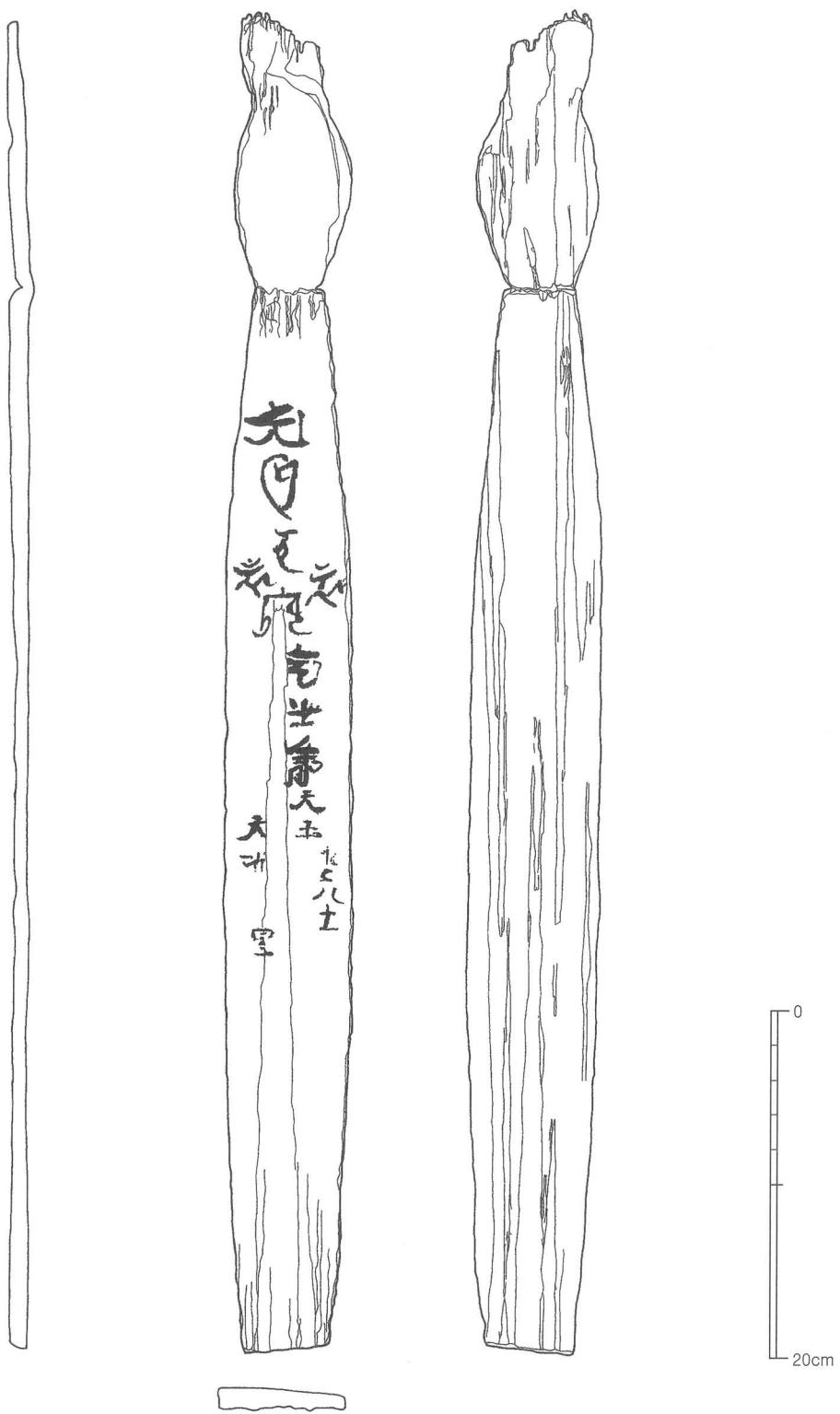
第102図 5区遺構外出土の遺物実測図6 (1:3)



第103図 5区遺構外出土の遺物実測図5 (1 : 3)



第104図 5区遺構外出土の遺物実測図 8 (1 : 3)



第105図 SK 2035出土の木簡実測図（1：4）

第2節 まとめ

1 古墳時代

古墳1基と古墳の可能性をもつ周溝を1基確認した。いずれも墳丘は大きく削平されていた。5号墳から出土した土器は、杯蓋より大谷編年（大谷1994・2001）の出雲4期の可能性が高い。本古墳の南西で確認された築山1～4号墳は、4号墳が出雲3～5期、1～3号墳が出雲4期であることから、5号墳は、1～3号墳とほぼ同時期に築造されたものと考えられる。また今のところ、5号墳より北からは古墳が見つかっていない、上塩治築山古墳を中心とする古墳群の範囲を考える上で重要な意味を持つ。

円形周溝1は、『築山遺跡II』で報告した6号墳と多くの点で類似している。（報告書では溝状遺構の周溝としている）。いずれも標高はほぼ10.2mである。墳丘径はともに約8m、残存する周溝の深さ、幅も近い数値であることから、元々は同じ規格のもとに作られた可能性が高い。6号墳は出土遺物より、7世紀以降のものであることから、円形周溝1もこの時期に作られた小型の古墳の可能性がある。

（高橋誠二）

2 古代

古代の遺構としては、明確な土坑墓2基、土坑墓の可能性が高いものを4基確認した。また、2区からは火葬骨を須恵器の蓋杯に入れて埋葬しているSK2255（『築山遺跡II』では土坑墓SK19としている。）が見つかっている。

SX2174やSX2183に副葬されていた須恵器と、SK2255の火葬骨の須恵器は大谷編年の出雲7期前後のものであることから、築山遺跡の古代の墓制を考える上で貴重な資料である。

（高橋 周）

3 中世

本調査区においては、5A区で5棟の掘立柱建物跡、溝15条、土坑34基、井戸1基、不明遺構1、5B区で溝12条、土坑16基を確認した。溝のうち、SD2001・SD2005は道路状遺構と想定され、SD2006・SD2007・SD2055は正方位を意識する方形の区画溝である。特にSD2055は一辺約30mと確認した。調査区内の遺構はSD2001・SD2005の道路状遺構の方位（北側でN-14°-W（N-76°-E）、南側でN-35°-W（N-55°-E））と正方位を意識する方形の区画溝（N～-1°-3°～E）とに方位を従うものに分けることができる。出土した土師質土器から、道路状遺構は13～14世紀代、方形の区画溝は15世紀代と考えられる。

出土遺物については、土師質土器が5A区の27～30グリッドを中心に総数7500点以上が出土した。5A区と5B区とで土師質土器の出土量に偏りがあり、5B区の南側ではほとんど出土しない。この傾向は5区における中世の遺構の多寡と同様であり、中世における遺跡の範囲を示唆するものであろう。貿易陶磁器の分布も土師質土器と同様である。具体的には、青磁として龍泉窯系碗（I類2点、B1類5点、B2類8点、B3類1点、B4類4点、D類3点）、

龍泉窯系杯（III類1点、IV類2点）、同安窯系皿3点が出土している。島根県初例となる酒会壺や特殊品1点もある。白磁としては四耳壺や端反皿E群、壺などが出土している。この他に、褐釉陶器、天目も出土する。そして、国内陶器は古瀬戸の天目、山茶碗、東播系や備前焼の甕・鉢、瓷器系陶器の甕・鉢、肥前系陶器の皿などが出土している。特に酒会壺について、国内の出土例としては鎌倉や守護所に比定される遺跡などからのものが多く、本調査区における出土は周辺遺構が塩治氏と関連するものであることを示唆している。

また、5A区において中世の呪符木簡が出土した。陰陽道的な性格の強い木簡である。ほぼ真北を向いた状態で確認されたことも注目される。調査区付近には中世において神東（塩治）八幡宮が所在したとされ、木簡は八幡宮の供僧によるものである可能性が高い。

神東八幡宮関連文書である『富家文書』¹⁾から、中世における調査区周辺は、八幡宮の諸施設や屋敷が複数存立し街区的な景観をなしたと考えられる。特に正方位を意識する中世の遺構は、周辺の寿昌寺遺跡や角田遺跡においても確認されており、周辺に広がることは注目される。本調査区における中世の遺構は、神東八幡宮の盛衰と一致しており、その関連遺構である可能性が高い。また、八幡宮を勧請した塩治氏との関連も考えられる。5A区の方形区画の溝周辺からは、古志本郷遺跡出土の土師質土器の底部にヘラケズリ調整が見られる杯と類似するものが出土しており、出雲平野の他の中世遺跡との関連を今後検討する必要があろう。（高橋 周）

註

- 1) 「18 明仏譲状」『富家文書』古代文化叢書3 1997 島根県古代文化センター

参考文献

須恵器

- 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会
大谷晃二 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第8集 平田市教育委員会。

子持壺

- 柳浦俊一 1993 「島根・鳥取県出土子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集 島根考古学会

土師質土器

- 『蔵小路西遺跡』－一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2－1999
建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会
『古志本郷遺跡』 I －斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI－1999
建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会

山陰中世土器検討会 2006 『第5回山陰中世土器検討会資料集 山陰における中世前期の諸様相—伯耆・出雲を中心として—』

耳皿

伊藤正人 2000 「耳皿ノート」 『中近世土器の基礎研究』 XV 日本中世土器研究会

常滑

赤羽一郎・中野晴久 1995 「中世常滑焼の生産地編年」 『常滑焼と中世社会』

備前

間壁忠彦・間壁葭子 1966~68・84 「備前焼研究ノート」 1~5 『倉敷考古館研究集報』 1・2・5・18号 倉敷考古館

乗岡実 2005 「備前焼の編年について」 『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
山陰中世土器検討会 2008 『第7回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における備前焼』

肥前

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』

瓦質土器

佐藤浩司 2006 「スタンプ文を有する瓦質土器の展開」 『陶磁器の社会史』 吉岡康暢先生
古希記念論集刊行会

貿易陶磁器

横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」 『九州歴史資料館研究論集』 4 九州歴史資料館

中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社

日本貿易陶磁研究会 2002 『日本貿易陶磁研究集会中国大会資料集 中世後期における貿易陶磁器の様相』

中世須恵器

山陰中世土器検討会 2003 『第3回山陰中世土器検討会資料集 中世須恵器の生産と流通—山陰地方を中心に—』

第5章 考察

第1節 築山遺跡5区出土の呪符木簡について

1 木簡の出土状況と形状

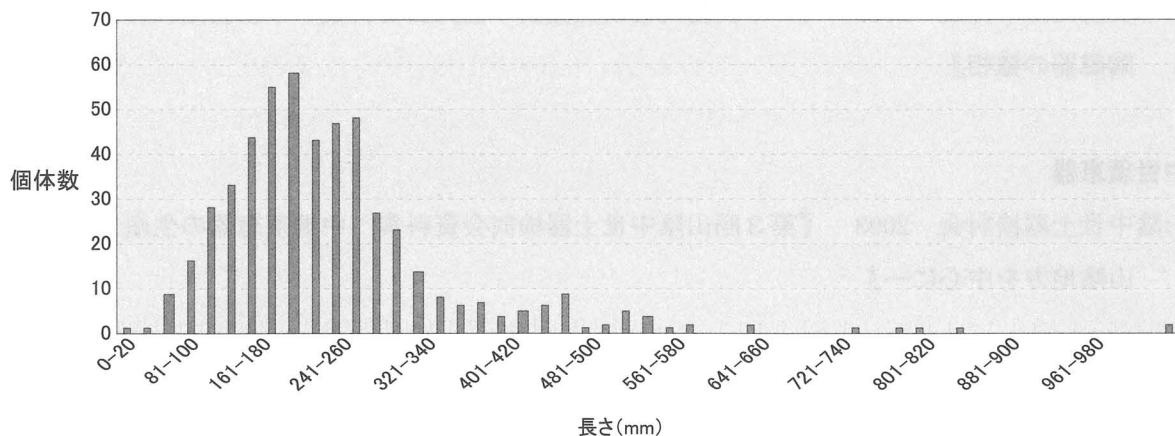
本木簡は5A区C23グリッドのSK2035から出土した。出土遺構は長径約2.4m、短径約1.3m、深さ約1mの不整な楕円形をした素掘りの土坑である。相当量の湧水が認められることから、井戸・水溜の可能性があるが、正確な機能は不明である。本木簡の方位はN-2°-Wであり、木簡の表面が北面する状況で出土した。周辺には正方位を意識した方形の区画溝SD2006・SD2007・SD2055が確認されることから、それらの遺構との関連も注目される。また、本木簡には節抜きの竹筒が副えられていた。

土坑内の共伴遺物は細片で量も少なく、直接的に年代を決定することは難しい。ただし、土坑上面を壊す溝から15世紀代の土師質土器が出土しており、少なくとも、土坑の年代の下限はその時期に考えることができる。

本木簡の法量は長さ771mm、幅73mm、厚さ10mmを測る。上端部が欠損するため、その正確な長さは不明である。樹種はスギ属スギである。板目材で、下端を切断し、両側面を表裏から細かく面取りし整形する。その形状は人形に似るが、上端が折損するため、正確な形状は不明である。両側面は「南無～星」の側面間を最大幅にとり、「**ト**」字の6cm上で最も細くなる。出土時には、その細まる部分が折れた状態で確認された。明瞭な切り込みが認められないため、埋納後の土圧により折れたものと考えられる。

本木簡について注目されるのは、その長さと形状である。以下に示した表は全国出土の呪符木簡の長さを集めたものであるが（註1）、呪符木簡は一般的に30cmを越えるものは少ない。殊に本木簡に関わる「蘇民将来」「天形星」などの字句を記す木簡はすべて30cm以下のもので

表5 呪符・物忌木簡全長一覧



ある。

60cm以上の呪符木簡については、多くの場合、物忌札に類するものである。『師守記』康永4年（1345）条に「札様 長三尺許也 梱也」と物忌札について触れた記述がある。物忌札などの長大な木簡は、人の目に示すことが前提となるものであり、77cm以上を測る本木簡の性格についても同様の可能性を指摘できるのではないかと考える。

また、本木簡の形状も同種の呪符木簡において類例のないものである。ただし、両側面に2か所の切り込みを入れる点においては、新潟県・下沖北遺跡（『木簡研究』25号）出土の蘇民将来木簡が本木簡と類似する。また、呪符木簡以外での類例については、松江市の原の前遺跡出土の人形代木製品をはじめとして、古代・中世の人形にいくつかの類例がある（註2）。後述するが、本木簡の内容は陰陽道との関わりが深く、その形状は陰陽道の思想に起因する可能性が高いと思われる。

2 粑文



冒頭に梵字で「アビラウンケン」、双行で「ウン」「キリーク」と記す。「キリーク」については、意味を通じないが、そのまま釈読した。続いて、「南無牛頭天王」と記し、双行で「九々八十一」「天口〔刑力〕星」とする。

3 木簡の内容

本木簡は中央に「南無牛頭天王」の字句を配することから、牛頭天王への帰依・祈願を図ったものと考えられる。しかしながら、この種の呪符木簡においては、牛頭天王説話に基づく「蘇民将来」の字句を用いることが一般的であり、「牛頭天王」と記す木簡は全国で3例を数えるのみである。その1つが草戸千軒遺跡（広島県）で出土したもので、折敷の底板に觀世音菩薩・八幡大菩薩とともに併記される（註3）。また、腰廻遺跡（新潟県）から「蘇民将来」木簡とともに出土する（4）。未報告ではあるが、塩津港遺跡（滋賀県）出土の平治元年（1159）の紀年を記す起請文札に「大■北野祇園五頭天王」とある（註5）。したがって、本木簡を「蘇民将来」木簡と同様なものと捉えることができるのか、更に慎重な検討をする必要がある。

本木簡の内容として注目されるのは、「牛頭天王」と「天刑星」「九々八十一」などの字句が併記されることである。呪符木簡のうち、個々の字句を記す木簡は珍しくないが、併記するものは初例である。

「牛頭天王」は本来インドの神で、中世以降、行疫神の本元として各村落で信仰されるようになるが、史料上に信仰の対象として表れるのは13世紀以降である。一方で、早くから防疫神として位置づけられたのは「天刑星」である。「天刑星」は唐代の書を初見とする中国の神で

あり、12世紀後半の絵巻物には疫鬼である牛頭天王を食する神として見え、特に密教僧の疫病に対する祈祷法に天刑星の經典が用いられた。天刑星は大日如来の変化としても捉えられ、天刑星と大日如来の種字を併記する中世の呪符木簡は珍しくない。したがって、少なくとも12世紀代には「牛頭天王」と「天刑星」とは対称的な存在として捉えられていたことが分かる。

「牛頭天王」と「天刑星」と同一とする思想は、『簠簋内伝金烏玉兔集』（以下、『簠簋内伝』とする。）を初見とする。『簠簋内伝』は牛頭天王信仰に基づいて日時・方角の吉凶などを集大成した陰陽道の書で、14世紀末には成立していたと考えられている。この『簠簋内伝』の成立を契機として、牛頭天王信仰が広がったとの指摘がある（註6）。

本木簡は以上のような「牛頭天王」と「天刑星」との融合を端的に表した内容であると言える。この融合に際しては密教僧と陰陽道とが関連したとの指摘があり、本木簡における真言密教の根本仏である大日如来を示す「アビラウンケン」や陰陽道の呪句である「九々八十一」の字句の併記は、その融合の性格を示唆するものである。先述のように、本木簡出土の遺構は15世紀代を下限として考えられ、本木簡の内容は、『簠簋内伝』の成立とほぼ同時代の牛頭天王信仰の様相を知ることができる貴重な資料と言える。

4 木簡の背景

出雲地域における牛頭天王信仰の嚆矢は、鰐淵寺に現存する牛頭天王像である。その製作方法から平安時代後期ごろの作と推定される。牛頭天王の史料上の確実な初見が『本朝世紀』久安4年（1148）3月29日条で、これらの木像の製作時期は祇園御靈会が牛頭天王の祭礼として恒例化していく時期とほぼ重なる。ただし、12世紀の密教の史料に乾闢婆王の姿形として牛頭を頭に戴くという記述（註7）があり、平安時代後期には牛頭天王の姿形は未だ明確化していなかった可能性もある。牛頭天王信仰の中心となった祇園感神院は延暦寺の末寺であり、鰐淵寺も同様にその末寺であることから、天台僧を通じた信仰の広がりを考えることができる。

先述したように、本木簡は14～15世紀のものと考えられるが、調査区周辺には木簡と同時期に神東（塩治）八幡宮が所在したと推定されている。『富家文書』によると、14世紀半ばには、八幡宮の施設として大宮・若宮・御堂・舞殿・御供所・供僧六人屋敷・舞人屋敷などがあり、また、別当屋敷・神主屋敷などの複数の屋敷の名称を知ることができる（註8）。木簡出土の遺構周辺においても複数の正方位を意識した方形の区画溝が確認され、13～15世紀代の貿易陶磁器や備前・瓷器系などの国内陶器を含めて多くの土師質土器が出土することから、これらの遺構は八幡宮周辺に展開する施設もしくは屋敷の一部である可能性が高い。本木簡もほぼ正方位に北面して出土することから、方形の区画溝に関連すると思われる。また、木簡出土の調査区以南において中世の遺構がほぼ見られないことから、木簡の出土地点は、八幡宮の所在した神東村の境界に位置し、境界祭祀の場として機能した可能性がある。本調査区において、2条の溝が平行する道路状遺構を確認し、その道は南へのびる。木簡出土も遺構は、その道に近接することも注目される。

『富家文書』応永33（1426）年3月21日「某昌本寄進状」には、「高貞御社の御祟り」によ

る寄進の記述が見える。中世において、「祟り」は主に陰陽師の卜占により判断される場合が多く、15世紀前半には神東八幡宮周辺には陰陽道の知識を有する者がいたことを窺わせる。

本木簡は陰陽道や密教的な内容を含み、出土状況は正方位を意識したもので正方位の区画溝や道路状遺構とも関連する可能性が高いことから考えると、神東八幡宮の供僧としての陰陽師法師が関与した可能性を想定することができる。

註

- 1 集成に際しては独立行政法人奈良文化財研究所「木簡データベース」(<http://www.nabunken.go.jp>) を利用した。なお、集計にあたっては、完形、折損などに拘らず、「現状の長さ」を単純にカウントした。
- 2 島根県教育委員会『原の前遺跡』1995年
- 3 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1980 『草戸千軒町遺跡—第28・29次発掘調査概要』
- 4 『木簡研究』 23
- 5 『木簡研究』 30
- 6 牛頭天王信仰については、今堀太逸「牛頭天王と蘇民将来の子孫」(同『本地垂迹信仰と念佛—日本庶民佛教史の研究』所収 1999 法藏館) を参照とした。
- 7 『澤鈔』卷七
- 8 貞治四年五月「塩治八幡宮神人宮人等申状案」、正平十二年八月十九日「明仏譲状」(島根県古代文化センター編『富家文書』)

5区出土遺物観察表 1

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第63図1	5号墳	土師器 高杯	(19.4)	13	13.4	杯内外面：回転ナデ 脚柱内面：ケズリ 脚裾部：回転ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR(7/4) にぶい橙色	赤色顔料塗布 風化
第63図2	5号墳	土師器 高杯	(15)	12.4	(11.9)	杯内外面：回転ナデ 脚柱内面：ケズリ 脚裾部：回転ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR(7/3) にぶい橙色	赤色顔料塗布
第63図3	5号墳	土師器 高杯			(12.4)	脚柱外面：縦方向の ミガキのち横ナデ 脚柱内面：ケズリ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR(6/4) にぶい橙色	赤色顔料塗布
第63図4	5号墳	土師器 高杯	(18.6)	16	(13.8)	脚裾部：回転ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10YR(8/4) 浅黄橙色	風化
第63図5	5号墳	土師器 高杯	(17.8)			杯部：回転ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10YR(8/4) 浅黄橙色	風化
第63図6	5号墳	土師器 高杯			14.2	脚裾部：回転ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10YR(8/3) 浅黄橙色	風化
第63図7	5号墳	須恵器 杯蓋	12.8	4.6		内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(5/) 灰色	出雲編年4期
第63図8	5号墳	須恵器 杯蓋	13	4		内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(5/) 灰色	出雲編年4期
第63図9	5号墳	須恵器 杯蓋	(13)			内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(5/) 灰色	出雲編年4期
第63図10	5号墳	須恵器 杯蓋	(13)			内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(5/) 灰色	出雲編年4期
第63図11	5号墳	須恵器 杯身	11	4.6		内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(5/) 灰色	
第63図12	5号墳	須恵器 杯身	10.8	6.2		内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(6/) 灰色	
第63図13	5号墳	須恵器 匙	(12)			口縁：カキメ 頸部：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 5Y(6/1) 灰色	自然釉がかかる。
第63図14	5号墳	須恵器 匙				内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(6/) 灰色	
第64図1	円形周溝1	須恵器 杯身	11.4			内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(6/) 灰色	
第65図1	S K 2174	須恵器 蓋	13.8	2.7		内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 5Y(6/1) 灰色	
第65図2	S K 2183	須恵器 高台付杯	12.7	7.4	3.8	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 5Y(6/1) 灰色	内面に重ね焼きの痕跡あり。
第65図3	S K 2210	須恵器 壺				外面：ケズリ 内面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 5Y(6/1) 灰色	
第71図1	S K 2018	土師質 皿	7.6	2.3	3.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	完存 皿b-2類
第71図2	S K 2018	中世須恵器 鉢	-	-	-	内面：ナデ、ヨコハケ 外面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	内面：灰白色 (5Y7/1) 外面：灰色 (10Y4/1)	
第71図3	S K 2021	備前焼 甕	-	-	(32.0)	内面：ナデ 外面：ナデ、ユビオ サ工	胎土：密 焼成：良好	内面：灰色 (7.5Y6/1) 外面：暗灰色 (N3/)	底部のみ残存
第71図4	S K 2022	土師質 坏	-	-	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	坏E-3類
第71図5	S K 2027	土師質 皿	(7.2)	2.1	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	皿d類
第71図6	S K 2027	土師質 坏	-	-	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：灰褐色 (7.5YR6/2) 外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏C類
第71図7	S K 2027	土師質 坏	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	灰黄褐色 (10YR6/2)	坏C類
第71図8	S K 2027	土師質 坏	-	-	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	灰黄褐色 (10YR6/2)	坏C-2類
第71図9	S K 2027	土師質 坏	(12.6)	4.3	(4.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (10YR7/2)	坏A-3類

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第71図10	S K 2027	土師質 壺	(12.4)	4.1	5.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	壺C－2類
第71図11	S K 2027	土師質 壺	(13.6)	—	—	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内面：にぶい黄橙色 (10YR7/2) 外面：にぶい褐色 (7.5YR6/3)	内面に煤付着 壺A・B類
第71図12	S K 2027	土師質 壺	(13.0)	—	—	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	壺A・B類
第71図13	S K 2027	土師質 壺	—	—	5.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	壺C－2類
第72図1	S K 2028	土師質 壺	—	—	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	壺C・D類
第72図2	S K 2030	土師質 皿	(8.0)	1.8	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	皿c類
第72図3	S K 2030	土師質 壺	—	—	(4.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	壺E類
第72図4	S K 2030	土師質 壺	—	—	(6.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	壺D類
第72図5	S K 2030	土師質 壺	—	—	(7.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内面に煤付着・被熱痕 壺D類
第72図6	S K 2030	青磁 (龍泉窯系) 酒会壺	—	—	(12.0)		胎土：緻密 焼成：良好	胎土：灰白色 (N7/) 釉：オリーブ灰色 (2.5GY6/1)	底部1/6残存
第72図7	S K 2030	瓷器系陶器 甕	—	—	—	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内面：灰色 (5YR4/1) 外面：灰褐色 (7.5YR4/2)	口縁部のみ残存 常滑編年5~6a形式
第72図8	S K 2030	備前焼 擂鉢	—	—	—	外面：ナデ 内面：ナデ、スリ目	胎土：やや粗い 焼成：良好	外面：にぶい赤褐色 (5YR5/3) 内面：灰赤色 (2.5YR4/2)	9条1単位のスリ目 間壁編年IV期
第73図2	S K 2036	土師質 壺	12.8	4.0	7.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい橙色 (10YR7/4) 外面：浅黄橙色 (10YR8/3)	壺C－2類
第73図4	S K 2040	土師質 皿	(8.0)	1.6	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	皿b－1類
第73図5	S K 2040	土師質 壺	—	—	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良	浅黄橙色 (10YR8/3)	内面に煤付着 壺C・D類
第74図1	S K 2044	土師質 皿	(7.6)	—	—	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 7.5YR(7/3)	皿b類
第74図2	S K 2044	土師質 壺	(13.5)	3.4	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	内面：にぶい黄橙色 (10YR7/2) 外面：褐灰色 (10YR5/1)	壺B類
第74図3	S K 2045	土師質 捏鉢	—	—	—	内外面：ハケメ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面：明赤褐色 (5YR5/6)	
第74図4	S K 2045	土師質 皿	(8.1)	1.6	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	内面：にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面：灰黄褐色 (10YR6/2)	皿b－3類
第74図5	S K 2045	土師質 皿	(7.6)	1.5	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	内面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面：にぶい黄橙色 (10YR7/3)	皿b－1類
第74図6	S K 2045	土師質 壺	—	—	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 外面：にぶい黄橙色 (10YR7/3)	内面に煤付着 壺A類
第74図7	S K 2045	土師質 壺	(12.2)	—	—	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	内面に煤付着 被熱による変色あり 壺A・B類
第74図8	S K 2045	瓦質 鉢	—	—	—	内面：ナデ、ヨコハケ 外面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	暗灰黄色 (2.5Y5/2)	口縁残存

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第74図10	S K 2047	土師質 壺	10.2	3.3	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	完存 壺E-1類
第74図11	S K 2047	土師質 壺	10.4	3.2	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	完存 壺E-1類
第75図1	S K 2050	白磁 四耳壺	12.0	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	灰白色 (7.5Y7/1)	口縁1/6残存
第75図2	S K 2050	須恵器 高壺	—	—	—	内面：回転ナデ、し ほり 外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	灰色 N(5/)	脚部のみ残存
第75図3	S K 2056	土師質 壺	—	—	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	壺E類
第75図4	S K 2056	土師質 壺	—	—	(6.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	底部内面に煤付着 壺F類
第75図5	S K 2057	土師質 皿	(7.8)	2.2	4.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	内面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 外面：橙色 (5YR7/6)	口縁の一部に被熱痕 皿e-2類
第75図6	S K 2057	土師質 皿	(8.2)	2.3	3.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	皿e-2類
第75図7	S K 2060	土師質 皿	(7.4)	2.0	(3.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	皿e-1類
第75図8	S K 2060	土師質 皿	(7.6)	2.2	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	皿e-2類
第75図9	S K 2060	土師質 壺	—	—	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	壺B類
第75図10	S K 2060	土師質 壺	(14.0)	3.1	(6.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	壺F類
第75図11	S K 2061	土師質 壺	—	—	(6.4)	内外面：回転ナデ、 ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良	内面：にぶい黄橙色 (10YR7/3) 外面：褐灰色 (10YR5/1)	内面に墨付着 壺F類
第76図1	S K 2066	土師質 皿	7.8	1.7	4.9	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	内・外面に被熱痕 皿c類
第76図2	S K 2066	土師質 皿	(7.6)	1.4	5.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り、 ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	外面底部中央に被熱痕 皿c類
第76図3	S K 2066	土師質 皿	7.9	2.1	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	完存 内・外面に被熱痕 皿c類
第76図4	S K 2066	土師質 皿	(8.5)	2.0	5.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	内面に被熱痕 皿c類
第76図5	S K 2066	土師質 壺	13.1	4.1	5.2	内外面：回転ナデ、ナデ 底部：回転糸切り、ナデ	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	内面・外面に被熱痕 壺A-3類
第76図6	S K 2066	土師質 壺	13.6	4.0	5.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	内面・外面に被熱痕 壺A-3類
第76図7	S K 2066	土師質 壺	12.9	4.5	6.1	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	内面に被熱痕 壺A-3類
第76図8	S K 2066	土師質 壺	12.8	4.3	5.9	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	外面に被熱痕 壺A-3類
第76図9	S K 2069	山茶碗 碗	(9.4)	—	—	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (2.5Y7/3)	口縁部に釉かかる
第76図10	S K 2070	土師質 壺	—	—	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	壺A類
第76図11	S K 2070	土師質 壺	—	—	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：浅黄橙色 (2.5Y7/3) 外面：灰白色 (2.5Y8/2)	内面に煤付着 壺A類

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第76図12	S K 2070	土師質 壺	—	—	(6.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	灰黄色 (2.5Y7/2)	壺B・C類
第76図13	S K 2070	土師質 壺	—	—	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	壺B類
第76図14	S K 2070	土師質 鉢	—	—	—	内外面：ナデ、ハケ目	胎土：密 焼成：良	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	
第76図15	S K 2070	土師質 鉢	(28.8)	—	—	内外面：ナデ、ハケ目	胎土：密 焼成：良	灰白色 (10YR8/2)	
第76図16	S K 2070	土師質 鉢	—	—	—	内外面：ナデ、ハケメ	胎土：密 焼成：良好	内面：浅黄色 (2.5Y7/4) 外面：灰黄色 (2.5Y6/2)～ 淡黄色 (2.5Y8/3)	口縁外面に浅い凹線
第76図17	S K 2070	中国白磁 力	—	—	(3.2)	白磁E類 伊万里力	胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (7.5Y8/1) 胎土：灰白色 (10YR8/1)	高台置付の釉を削る
第77図1	S K 2071	土師質 皿	—	—	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR6/6)	皿b類
第77図2	S K 2071	土師質 壺	—	—	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良	内面：オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 外面：橙色 (7.5YR7/6)	内外面に被熱痕 壺D類
第77図3	S K 2072	土師質 皿	6.6	1.3	3.4	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	完存 皿a類
第77図4	S K 2072	土師質 壺	(13.8)	4.6	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良	浅黄橙色 (10YR8/3)	壺A-1類
第77図5	S K 2076	土師質 壺	—	—	(7.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良	灰黄色 (2.5Y6/2)	壺A類
第78図1	S E 2068	土師質 皿	(7.1)	1.4	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	内面：にぶい橙色 (5YR6/4) 外面：橙色 (5YR6/6)	皿d類
第78図2	S E 2068	土師質 皿	(7.4)	1.5	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	灰黄褐色 (10YR5/2)	内面に煤付着 皿c類
第78図3	S E 2068	土師質 皿	(7.2)	1.7	(4.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内面に煤付着 皿b-2類
第78図4	S E 2068	土師質 壺	—	—	(6.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	壺B類
第78図5	S E 2068	土師質 鉢	(16.0)	—	—	内外面：ナデ、ハケ目	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	内面に被熱痕
第79図1	S D 2005	土師質 壺	—	—	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	内面：橙色 (7.5YR7/6) 外面：黄橙色 (7.5YR7/8)	壺C-1類
第80図1	S D 2003	土師質 壺	14.0	3.5	7.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	壺D類
第80図2	S D 2006	土師質 皿	8.0	1.8	4.9	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：粗い 焼成：良	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	皿b-3類
第80図3	S D 2006	土師質 皿	8.1	1.9	4	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	橙色 (2.5YR6/6)	皿b-1類
第80図4	S D 2006	土師質 壺	—	—	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	壺D類
第80図5	S D 2006	瓷器系陶器 甕	—	—	(12.0)	内面：ナデ 外面：ナデ、ユビオ サ工	胎土：密 焼成：良好	内面：灰色 (N4/) 外面：にぶい黄色 (2.5Y6/3)～ 黄褐色 (2.5Y5/3)	
第80図6	S D 2007	備前焼	—	—	—	内面：回転ナデ、ヨ コハケ 外面：回転ナデ、タ テハケ	胎土：密 焼成：良好	内面：黄灰色 (2.5Y6/1) 外面：黒褐色 (2.5Y3/1)	体部のみ残存 間壁編年Ⅲ・Ⅳ期
第82図1	S D 2019	土師質 壺	12.2	4.9	5.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良	内面：にぶい橙色 (7.5YR7/3) 外面：灰褐色 (7.5YR6/2)	壺A-1類
第82図2	S D 2019	土師質 壺	—	—	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：不明瞭	胎土：やや粗い 焼成：良	灰白色 (N7/) ～灰色 (N4/)	壺C・D類

挿図番号	出土位置	器種	口径cm	器高cm	底径cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第82図3	S D 2019	土師質 壺	—	—	(4.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良	黄灰色 (2.5Y4/1)	壺B・C類
第82図4	S D 2019	土師質 壺	—	—	(5.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良	灰色 (5Y5/1-4/1)	内面見込み部に土を 重ねる 壺E・F類
第82図5	S D 2019	土師質 壺	—	—	(6.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	壺E・F類
第82図7	S D 2031	土師質 皿	7.4	1.9	4.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (10YR7/2)	皿e-1類
第82図8	S D 2031	土師質 皿	7.0	2.0	3.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	皿e-1類
第82図9	S D 2031	土師質 壺	14.6	3.1	6.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	壺F-1類
第82図10	S D 2031	古瀬戸 天目茶碗	—	—	(6.4)	回転ナデ 高台部削り出し	胎土：密 焼成：良好	釉：黒色 (10YR2/1) 胎土：灰白色 (5Y6.5-8/1)	1/6残存 天目C類
第82図11	S D 2031	中国白磁 皿	(13.0)	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (10Y8.5/1) 胎土：灰白色 (2.5Y7/1)	口縁残存 皿IX類
第82図12	S D 2048	土師質 壺	—	—	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	壺B類
第83図1	S D 2055	土師質 壺	—	—	(6.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	壺F類
第83図2	S D 2055	土師質 壺	(12.0)	2.6	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (7.5YR7/4)	壺F類
第84図1	P 2501	国内陶器 茶入の蓋カ				回転ナデか	胎土：密 焼成：良好	灰色(N4/)～褐色 (10YR4/4)	1/4残存
第84図2	P 2816	土師質 皿	(9.8)	1.3	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	皿b-3類
第84図3	P 2908	土師質 皿	(8.1)	1.3	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	皿b-3類
第84図4	P 2401	土師質 皿	(7.8)	1.6	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	皿c類
第84図5	P 2604	土師質 壺	—	—	(4.9)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	外面に煤付着 壺A・B類
第84図6	P 2905	土師質 壺	—	—	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：不良	内面：淡黄色 (2.5Y8/3) 外面：灰白色 (2.5Y8/2)	壺A・B類
第84図7	P 2907	土師質 壺	—	—	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：不良	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	壺A・B類
第84図8	P 2821	土師質 鉢	—	—	—	内外面：ナデ、ハケ目	胎土：密 焼成：良	浅黄橙色 (10YR7/4)	口縁のみ残存
第85図1	S K 2139	須恵器 杯蓋	(13.3)			内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(5/) 灰色	
第85図2	S K 2139	須恵器 鉢	(13)			内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N(5/) 灰色	
第85図3	S K 2139	土師質 杯			(5)	内外面：回転ナデ 底部：静止糸ぎり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10Y R (7/3) にぶい黄橙色	
第85図5	S K 2167	土師質 杯			(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸ぎり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10Y R (7/4) にぶい黄橙色	
第85図6	S K 2167	土師質 杯			(5.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸ぎり	胎土：やや粗い 焼成：良好	外面 10Y R (8/2) 灰白色 内面 10Y R (5/1) 褐灰色	
第86図1	S K 2160	土師質 柱状高台 付皿			(5.1)	外面：ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5Y R (8/4) 浅黄橙色	風化
第86図2	S K 2160	土師質 杯			4.2	内面：回転ナデ 底部：回転糸ぎり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10Y R (7/3) にぶい黄橙色	風化
第86図3	S K 2160	土師質 杯			4.6	内面：回転ナデ 底部：回転糸ぎり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5Y R (7/4) にぶい黄橙色	風化

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第86図4	S K 2160	須恵器壺			7.2	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 N (6/) 灰色	
第86図5	S K 2160	瓦質擂鉢				内面：横ハケ・スリ目	胎土：緻密 焼成：良好	外面 10YR (4/1) 褐灰色 内面 10YR (6/2) 灰黄褐色	
第86図6	S K 2160	備前擂鉢				外面：回転ナデ 内面：回転ナデのち スリ目	胎土：密 焼成：良好	外面 5YR (5/3) にぶい赤褐色 内面 5YR (5/2) 灰褐色	間壁編年IV期 15~16世紀後半
第87図1	S K 2172	土師質杯	11.9	4.7	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 10YR (8/2) 灰白色	坏C-1類
第87図2	S K 2172	土師質杯	12	4	4	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 10YR (8/2) 灰白色	坏B類
第87図3	S K 2172	土師質杯			4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 10YR (8/2) 灰白色	
第87図4	S K 2173	土師質杯			(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/4) にぶい黄橙色	坏F類
第87図5	S K 2173	土師質杯			(5.2)	内外面：回転ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	外面 10YR (7/3) にぶい黄橙色 内面 7.5YR (7/4) にぶい橙色	坏F類
第87図6	S K 2179	輸入磁器 中国白磁	(16)			内外面：施釉	胎土：緻密 焼成：良好	外面 10YR (8/2) 灰白色 内面 2.5Y (7/1) 灰白色	玉縁IV類 12世紀
第87図7	S K 2180	土師質杯	(16.2)	5.7	5.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/4) にぶい黄橙色	坏B類
第87図8	S K 2192	土師質杯	(13.6)			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/4) にぶい黄橙色	
第87図9	S K 2192	土師質皿	7.6	1.5	4.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/4) にぶい黄橙色	皿b-3類
第87図10	S K 2203	須恵器 杯身	10.4	3.7		内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	内外面 5Y (5/1) 灰色	
第87図11	S K 2203	土師質皿	8.7	2.1	3.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5YR (6/6) 橙色 内面 7.5YR (7/4) にぶい橙色	皿e-1類
第88図1	S K 2186	土師質杯	(12.4)	4.9	(6.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図2	S K 2186	土師質杯	(13.2)	4.9	(5.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図3	S K 2186	土師質杯	(13.4)	4.5	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図4	S K 2186	土師質杯	15	5.3	6.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図5	S K 2186	土師質杯	13.3	4.3	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図6	S K 2186	土師質杯	12.4	4.3	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図7	S K 2186	土師質杯	13.2	4.3	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図8	S K 2186	土師質杯	13.2	4.8	6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図9	S K 2186	土師質杯	(13)	4.5	5.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図10	S K 2186	土師質杯	13	4.4	6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図11	S K 2186	土師質杯	13.4	4.7	6.1	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類
第88図12	S K 2186	土師質杯	13.3	4.3	6.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	坏A-2類

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第89図1	S K 2204	土師質杯	(12)	3.8	5.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/6) 橙色	風化 坏C-2類
第89図2	S K 2218	土師質杯			(6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10YR (7/4) にぶい黄橙色	
第89図3	S K 2218	土師質杯			7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10YR (7/3) にぶい黄橙色	風化
第89図4	S K 2218	土師質皿			4.3	内面：ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/4) にぶい黄橙色	
第89図5	S K 2220	土師質杯			(5.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/4) にぶい黄橙色	
第89図6	S K 2220	須恵器 高台付皿			(15)	内外面：回転ナデ	胎土：やや粗い 焼成：不良	外面 10YR (7/3) にぶい黄橙色 内面 2.5Y (7/3) 浅黄色	
第89図7	S K 2220	龍泉窯系 青磁碗				内外面：施釉	胎土：やや粗い 焼成：良好	胎土 10YR (8/2) 灰白色 2.5GY (7/1) 明オリーブ灰色	高台部を砥石に転用 している。
第90図1	S D 2090	土師質皿	(7.6)	2.1	3.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄橙色	皿e-1類
第90図2	S D 2090	土師質皿	7.4	1.9	3.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄橙色	皿e-1類
第90図3	S D 2090	土師質皿	7.4	2.4	3.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄橙色	皿e-1類
第90図4	S D 2090	土師質杯	11.2	2.9	4.8	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄橙色	風化 坏F-1類
第90図5	S D 2090	土師質杯	11.4	2.8	4.4	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄橙色	風化 坏F-1類
第90図6	S D 2090	土師質杯	11.4	2.9	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄橙色	坏F-1類
第90図7	S D 2090	土師質杯	(14.5)	3.5	6.6	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄橙色	風化 坏F-2類
第90図8	S D 2090	土師質杯	(14.4)	3.4	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄橙色	坏F-2類
第90図9	S D 2090	土師質杯	13.5	3.2	5.9	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄橙色	坏F-1類
第90図10	S D 2090	土師質杯	13.7	3.3	5.9	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄橙色	坏F-1類
第90図11	S D 2090	土師質杯	14	3.2	6.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄橙色	坏F-1類
第90図12	S D 2090	土師質杯	(14)	3.6	6.2	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄橙色	風化 坏F-2類
第90図13	S D 2090	土師質杯	14	3.5	6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄橙色	坏F-1類
第90図14	S D 2090	土師質杯	(14.2)	3.4	6.4	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/3) 浅黄橙色	風化 坏F-1類
第90図15	S D 2090	土師質杯	(13.8)	3.1	6.2	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5Y (8/4) 浅黄橙色	風化 坏F-1類
第90図16	SD2095-1	備前 擂鉢	(30)			外面：ナデ 内面：スリ目	胎土：密 焼成：良好	外面 5YR (5/4) にぶい赤褐色 内面 2.5YR (5/4) にぶい赤褐色	間壁編年3期 14世紀
第91図1	S D 2150	土師質杯			4.6	内面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/4) にぶい黄橙色	
第91図2	S D 2150	土師質杯			5.4	内面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 7.5YR (7/4) にぶい黄橙色	
第91図3	S D 2150	土師質杯			(5.2)	内面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	外面 10YR (8/3) 浅黄橙色 内面 7.5YR (7/4) にぶい橙色	

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第91図4	S D 2150	土師質杯			(5)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 10 Y R (7/3) にぶい黄橙色	
第91図5	S D 2150	土師質杯	(16.4)			内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 10 Y R (7/3) にぶい黄橙色	
第91図6	S D 2150	円筒埴輪				ハケ目・ナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内外面 5 Y R (6/6) 橙色	
第91図7	S D 2155	龍泉窯系青磁碗				内外面：施釉	胎土：緻密 焼成：良好	胎土 7.5 Y R (6/2) 灰褐色 釉 2.5 G Y (4/2) 灰オリーブ色	龍泉窯系碗D類14世紀中ごろ～15世紀
第91図8	S D 2147	土師質皿	7.8	2.2	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y (8/4) 浅黄橙色	皿e-1類
第91図9	S D 2147	土師質皿	7.8	2.1	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 5 Y R (7/6) 橙色	皿e-2類
第91図10	S D 2147	土師質皿	7.8	2.1	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 橙色	皿e-1類
第91図11	S D 2147	土師質杯	11	3	4.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/6) 橙色	杯D類
第92図1	S D 2170	須恵器高台付杯				内外面：回転ナデ 底部：回転糸きりのち高台貼り付け	胎土：やや粗い 焼成：不良	内外面 7.5 Y R (4/1) 褐灰色	
第92図2	SD 2168-1	須恵器杯蓋				内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (4/1) 褐灰色	
第92図3	SD 2168-1	土師質皿	(7.6)	1.8	4.4	内外面：回転ナデ 底部：回転糸きり	胎土：密 焼成：良好	内外面 7.5 Y R (7/4) にぶい黄橙色	皿d類

5区出土遺物観察表2

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	技法の特徴	色調	備考
第85図4	S K 2167	漆器碗	(12.5)	5.5	6.9	内外面黒色漆 底部内面と体部外面に赤色漆で上絵	内外面 N (2/) 黒色	顔料は朱
第89図8	S K 2220	漆器碗	13.2	5.9	7.8	外面は黒色漆、内面は黒色漆を塗ったのち赤色漆を塗っている。 体部外面に赤色漆で上絵	外面 N (2/) 黒色内面 2.5 Y R (4/6) 赤褐色	顔料は朱

5区出土遺物観察表3

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第93図1	B 26	弥生土器 甕				内外面：ヨコナデ	胎土：粗い 焼成：良好	外面 7.5YR (5/3) にぶい褐色 内面 10YR (7/3) にぶい黄橙色	口縁部外面に刻み目 あり。
第93図2	B 26	弥生土器 甕			7.0	外面：タテハケ 内面：ナデ	胎土：粗い 焼成：良好	外面 7.5YR (7/4) にぶい橙色 内面 10YR (7/3) にぶい黄橙色	
第93図3	B 49	土師器 高杯	18.0			外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5YR (5/6) 明赤褐色	赤色顔料塗布
第93図4	C 48	須恵器 杯蓋	13			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 N (4/) 灰色	
第93図5	A 43	須恵器 杯蓋	12.4			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 N (5/) 灰色 内面 2.5Y (7/4) にぶい橙色	
第93図6	A 43	須恵器 杯身	13	4	5	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5YR (6/1) 黄灰色	
第93図7	排土中	須恵器 壺	10			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 7.5YR (6/1) 灰色	
第93図8	A 52	須恵器 子持壺				外面：ナデとハケ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 5Y (5/1) 灰色 内面 5Y (4/1) 灰色	
第93図9	A 53	須恵器 子持壺				外面：タテハケ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 5Y (5/1) 灰色 内面 5Y (4/1) 灰色	
第93図10	C 28	須恵器 長頸壺				内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 7.5YR (4/1) 灰色	
第93図11	C 27	須恵器 高杯				内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 N (5/) 灰色	
第93図12	D 43	須恵器 直口壺	9.6			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 N (5/) 灰色	
第93図13	E 43	須恵器 壺				外面：カキメ 内面：回転ナデ 底部：回転ケズリ	胎土：密 焼成：良好	外面 N (5/) 灰色	肩部に4本の線刻あり。
第93図14	E 34	須恵器 杯			6.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸ぎり	胎土：密 焼成：良好	外面 7.5YR (5/1) 灰色	
第93図15	A 49	須恵器 杯	14	4.6	10	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5Y (6/1) 黄灰色 内面 2.5Y (6/2) 灰黄色	焼成時の焼けむらあり。
第93図16	C 47	須恵器 高台付杯			8.5	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5Y (6/1) 黄灰色	
第93図17	A 38	須恵器 高台付杯			6.8	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5Y (6/1) 黄灰色 内面 2.5Y (5/1) 黄灰色	内面底部にもみ痕あり。
第93図18	D 46	須恵器 高台付杯			7.6	外面：回転ナデ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 5Y (5/1) 灰色	
第93図19	B 54	須恵器 高台付杯			9.2	外面：回転ナデ 内面：ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 N (6/) 灰色	
第93図20	A 45	須恵器 高台付皿			13.2	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5Y (6/1) 黄灰色	
第93図21	A 53	須恵器 壺	23.6			内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 5Y (5/1) 灰色 内面 5Y (4/1) 灰色	
第93図22	B 54	須恵器 甕				内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	外面 2.5Y (5/2) 暗灰黄色 内面 2.5Y (6/1) 黄灰色	

5区出土遺物観察表4

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第97図1	B21 包含層	土師質 皿	(7.0)	1.9	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	皿b-1類
第97図2	C21 包含層	土師質 皿	(8.0)	2.2	(4.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR6/3-7/3)	皿b-1類
第97図3	A22 包含層	土師質 皿	7.7	2.0	4.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：灰黄褐色 (10YR6/2) 外面：にぶい黄橙色 (10YR7/3)	完形 皿b-2類
第97図4	C26 包含層	土師質 皿	(7.6)	2.3	(3.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	皿b-2類
第97図5	C24 地山直上	土師質 皿	(8.0)	1.6	(5.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	褐灰色 (10YR5/1)	皿c類
第97図6	A23 包含層	土師質 环	(14.0)	4.0	(5.3)	内外面：回転ナデ、 ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	灰黄褐色 (10YR5/2-6/2)	坏B類
第97図7	B25 包含層	土師質 环	-	-	(4.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：やや不良	内面：灰白色 (10YR8/1-8/2) 外面：浅黄橙色 (10YR8/3)	坏B・C-1類
第97図8	B26 包含層	土師質 环	-	-	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	坏B・C-1類
第97図9	B25 包含層	土師質 环	-	-	(5.7)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	底部に煤付着 坏C-2・D類
第97図10	D24 包含層	土師質 环	(15.6)	4.3	(7.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏C-2・D類
第97図11	C26 包含層	土師質 环	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：橙色 (7.5YR7/6) 外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏E類
第97図12	B27 包含層	土師質 皿	(6.8)	1.3	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：浅黄橙色 (10YR8/4) 外面：にぶい黄橙色 (10YR6/3)	皿b-1類
第97図13	B27 包含層	土師質 皿	(7.4)	1.3	(5.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：粗い 焼成：良好	内面：橙色 (7.5YR7/6) 外面：にぶい橙色 (7.5YR6/4)	皿c類
第97図14	A27 包含層	土師質 皿	(7.0)	1.7	(3.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	皿b-3類
第97図15	A27 包含層	土師質 皿	(7.2)	2.1	(3.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	底面に煤付着 皿e-1類
第97図16	A27 包含層	土師質 皿	(7.4)	1.8	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	皿e-2類
第97図17	A27 包含層	土師質 皿	(7.5)	2.0	(3.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (5YR7/6)	皿e-3類
第97図18	A27 包含層	土師質 皿	7.3	1.9	3.4	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (5YR7/6)	完存 皿e-3類
第97図19	C27 包含層	土師質 皿	(6.2)	-	-	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良	明黄褐色 (10YR7/6)	内面に赤色顔料
第97図20	D27 地山直上	土師質 环	11.7	3.7	5.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	完存 坏B類
第97図21	B27 地山直上	土師質 环	-	-	(4.5)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR7/4)	坏E類
第97図22	A27 包含層	土師質 环	-	-	(4.5)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	坏E類
第97図23	A27 包含層	土師質 环	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	坏F類
第97図24	A27 包含層	土師質 环	-	-	(6.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	坏F類
第97図25	A27 土器溜り	土師質 皿	(7.6)	1.8	(3.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切りカ	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁に煤付着 皿e-1類
第97図26	A27 土器溜り	土師質 皿	7.2	2.0	3.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	完存 皿e-1類

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第97図27	A27 土器溜り	土師質 皿	7.4	2.0	3.5	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	完存 皿e-1類
第97図28	A27 土器溜り	土師質 皿	6.9	1.9	3.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4-7/6)	完存 皿e-3類
第97図29	A27 土器溜り	土師質 皿	7.4	1.9	3.5	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	完存 皿e-3類
第97図30	A27 土器溜り	土師質 坏	(11.0)	3.3	(4.5)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏E-1類
第97図31	A27 土器溜り	土師質 坏	(11.2)	2.8	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏E-2類
第97図32	A27 土器溜り	土師質 坏	(12.4)	2.9	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (5YR7/6)	坏E-2類
第97図33	A27 土器溜り	土師質 坏	14.3	3.5	6.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (5YR7/6)	完形 坏F-1類
第97図34	A27 土器溜り	土師質 坏	(13.7)	3.5	6.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (5YR7/6)	坏F-1類
第97図35	A27 土器溜り	土師質 坏	(15.2)	3.6	6.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏F-2類
第97図36	A27 土器溜り	土師質 坏	(16.5)	3.7	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り、 ヘラ削り	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい褐色 (7.5YR6/3) 外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内面に煤(墨)付着 坏F-3類
第97図37	A27 土器溜り	土師質 坏	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	坏F類
第97図38	A27 土器溜り	土師質 坏	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内面に被熱痕 坏F類
第97図39	A27 土器溜り	土師質 坏	-	-	(6.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：橙色 (5YR7/6) 外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏F類
第98図1	B28 包含層	土師質 皿	(8.0)	1.9	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	皿b-1類
第98図2	B28 包含層	土師質 坏	(11.4)	3.2	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏E-2類
第98図3	B28 包含層	土師質 坏	-	-	(4.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	坏F類
第98図4	B28 包含層	土師質 坏	-	-	(6.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	坏F類
第98図5	B28 包含層	土師質 坏	-	-	(7.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい黄色 (2.5Y6/3) 外面：橙色 (7.5YR6/6)	被熱痕 坏F類
第98図6	D28 包含層	土師質 皿	-	-	(4.8)	内外面：回転ナデ、 ナデ 底部：静止糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい橙色 (5YR7/4)	古志本郷 皿C-3類
第98図7	B28 包含層	土師質 皿	-	-	-	内外面：ナデ、ユビ オサエ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR7/6)	長軸5.8cm短軸4.8cm 対照復元 5c類
第98図8	B29 包含層	土師質 皿	(7.0)	1.5	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	皿b-1類
第98図9	C29 包含層	土師質 皿	(7.2)	1.1	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：粗い 焼成：良	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	皿b-1類
第98図10	B29 包含層	土師質 皿	(6.6)	1.4	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	橙色 (5YR6/8)	皿b-1類
第98図11	B29 包含層	土師質 皿	(7.2)	1.6	5.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	皿c類
第98図12	B29 地山直上	土師質 皿	7.6	1.5	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	完存 皿c類
第98図13	C29 包含層	土師質 皿	(6.8)	1.2	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：粗い 焼成：良	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	皿c類
第98図14	A29 包含層	土師質 皿	(8.4)	1.9	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/6)	皿b-3類

揮図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第98図15	A 29 包含層	土師質 皿	7.6	2.1	3.5	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (5YR7/6)	皿e - 2類
第98図16	B 29 包含層	土師質 皿	(6.6)	2.1	3.4	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	皿e - 2類
第98図17	A 29 包含層	土師質 皿	7.5	2.3	3.6	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	完存口縁部に被熱痕 皿e - 2類
第98図18	B 29 包含層	土師質 坏力	-	-	(3.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：粗い 焼成：良	内面：橙色 (7.5YR7/6) 外面：にぶい黄橙色 (10YR7/4)	外面に被熱痕 坏B・C - 1類
第98図19	A 29 包含層	土師質 坏力	-	-	(4.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良	浅黄橙色 (10YR8/4)	坏B・C - 1類
第98図20	B 29 包含層	土師質 坏	(11.2)	3.4	(3.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4-6/3)	坏B・C - 1類
第98図21	A 29 包含層	土師質 坏	(13.2)	4.7	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	坏C - 2類
第98図22	C 29 包含層	土師質 坏力	-	-	(4.5)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り、 ナデ	胎土：密 焼成：良	内面：黒色 (5Y2/1) 外面：にぶい黄褐色 (10YR8/3)	内面を黒塗り
第98図23	B 29 包含層	土師質 坏	(11.0)	2.7	(5.4)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	坏E - 1類
第98図24	B 29 包含層	土師質 坏	(11.2)	3.1	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	底面中央に穿孔 坏E - 1類
第98図25	B 29 包含層	土師質 坏	(11.0)	3.1	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	内面：橙色 (7.5YR7/6) 外面：浅黄橙色 (10YR8/4)	坏E - 2類
第98図26	A 29 包含層	土師質 坏	(11.4)	2.5	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	坏E - 3類
第98図27	B 29 包含層	土師質 坏	(12.0)	2.5	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	坏E - 3類
第98図28	A 29 包含層	土師質 坏	(13.6)	3.5	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	坏F - 1類
第98図29	C 29 包含層	土師質 坏	(15.8)	3.3	(5.6)	内外面：回転ナデ、 ヘラ削り底部：ナデ	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏F - 3類
第98図30	A 29 包含層	土師質 坏	-	-	(7.8)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	底部内面に被熱痕 坏F類
第98図31	B 29 包含層	土師質 坏	-	-	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/4)	坏F類
第98図32	A 29 包含層	土師質 坏	-	-	(7.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏F類
第98図33	C 29 包含層	土師質 坏力	(8.8)	-	-	内外面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良	内面：にぶい褐色 (7.5YR6/3) 外面：にぶい黄橙色 (10YR7/4)	口縁部を黒塗り 玉縁状の口縁
第98図34	B 30 包含層	土師質 皿	7.2	2.0	3.3	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁に被熱痕 皿e - 3類
第98図35	C 31 耕作土	土師質 皿	(7.4)	1.9	(3.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (5YR7/6)	皿e - 3類
第98図36	B 30 包含層	土師質 坏	(11.6)	2.9	(5.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏E - 2類
第98図37	B 30 包含層	土師質 坏	(12.8)	3.3	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏F - 1類
第98図38	B 30 包含層	土師質 坏	(14.0)	3.5	(6.2)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	坏F - 1類
第98図39	C 30 包含層	土師質 坏	(14.6)	3.5	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	坏F - 1類
第99図1	A 30 土器溜り	土師質 皿	7.2	1.5	3.7	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	完形 皿d類
第99図2	A 30 土器溜り	土師質 皿	7.8	1.6	4.1	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	完形 皿d類

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第99図3	A30 土器溜り	土師質 皿	7.7	1.4	4.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (5YR6/6)	完形 皿d類
第99図4	A30 土器溜り	土師質 皿	(8.0)	1.8	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (5YR6/6)	底部外面に煤付着 皿d類
第99図5	A30 土器溜り	土師質 皿	8.2	1.9	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り、 へラ痕？	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	完形 皿d類
第99図6	A30 土器溜り	土師質 皿	7.6	1.9	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	褐色 (10YR4/1)	完形 内・外面に煤、被熱痕 皿d類
第99図7	A30 土器溜り	土師質 皿	8.1	1.8	4.2	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	灰黄褐色 (10YR5/2)	完形 皿d類
第99図8	A30 土器溜り	土師質 皿	8.4	2.0	4.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：やや粗い 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	完形 皿d類
第99図9	B30 土器溜り	土師質 坏	11.4	2.9	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	外面に被熱痕 坏E-1類
第99図10	B30 土器溜り	土師質 坏	11.2	3.0	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	底部内面に被熱痕 坏E-1類
第99図11	B30 土器溜り	土師質 坏	10.4	2.9	5.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	完形 口縁部に被熱痕 坏E-1類
第99図12	B30 土器溜り	土師質 坏	(11.6)	2.5	(5.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	橙色 (7.5YR7/6)	坏E-3類
第99図13	B30 土器溜り	土師質 鉢	-	-	(11.4)	内面：ハケ目 外面：ナデ			底部のみ残存
第100図1	A45 包含層	土師質 皿	(8.0)	1.7	(4.6)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい橙色 (7.5YR6/4) 外面：にぶい褐色 (7.5YR5/3)	皿d類
第100図2	A38 包含層	土師質 坏	11.0	3.1	4.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	完形 坏E-2類
第100図3	A45 包含層	土師質 坏	11.5	3.0	5.8	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	坏E-2類
第100図4	A50 包含層	土師質 坏	14.6	3.7	7.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	完形 坏D類
第100図5	A37 包含層	土師質 坏	(14.4)	3.5	(6.0)	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	坏F-1類
第100図6	A45 包含層	土師質 坏	14.4	3.2	7.0	内外面：回転ナデ 底部：回転糸切り	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	完形 坏F-2類
第100図7	B27・29 包含層	土師質 鉢	(33.0)	-	-	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	浅黄橙色 (10YR8/3)	片口鉢の口縁
第100図8	B28 包含層	土師質 鉢	-	-	-	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：緻密 焼成：良好	内面：灰黄褐色 (10YR4/2) 外面：浅黄橙色 (10YR8/3)	片口鉢の口縁下部
第100図9	D22 包含層	土師質 鉢	-	-	-	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	内面に6条の擂り目
第100図10	A22 包含層	土師質 鉢	-	-	-	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良	にぶい橙色 (5YR7/4)	内面に4条の擂り目
第100図11	B27 包含層	土師質 鉢	-	-	-	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：緻密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	内面に被熱痕
第100図12	C29 包含層	土師質 鉢	-	-	-	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：密 焼成：良好	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	
第100図13	B27 包含層	土師質 鉢	-	-	-	内外面：ナデ・ハケ目	胎土：緻密 焼成：良好	内面：明赤褐色 (5YR5/6) 外面：橙色 (5YR6/6)	やや硬質

5区出土遺物観察表5

挿図番号	出土位置	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第101図1	B 29 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(16.6)	—	—	碗B 1類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ黄色 (7.5Y6/3)	外面に鎬蓮弁文
第101図2	B 27 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(16.0)	—	—	碗B 2類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (2.5GY6/2)	外面に片彫りの蓮弁文
第101図3	A 26 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(12.0)	—	—	碗B 2類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10Y6/2)	外面に片彫りの蓮弁文
第101図4	A 27 地山直上	青磁 (龍泉窯系) 碗	(14.4)	—	—	碗B 3類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10Y6/2)	外面にヘラ描きの蓮弁文
第101図5	B 30 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(12.0)	—	—	碗B 4類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10Y6/2)	線描きの蓮弁文
第101図6	B 28 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	(11.4)	—	—	碗B 4類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (2.5GY5/1)	線描きの蓮弁文
第101図7	B 29 包含層	青磁 (龍泉窯系) 环	(13.0)	—	—	环III類(F期)	胎土：緻密 焼成：良好	釉：明オリーブ灰色 (5GY7/1) 胎土：灰白色 (7.5Y7/1)	外面に鎬蓮弁文
第101図8	B 27 包含層	青磁 (龍泉窯系) 环	(13.0)	—	—	环III類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 胎土：灰白色 (7.5Y7/1)	
第101図9	C 29 包含層	青磁 (龍泉窯系) 环	(13.2)	—	—	环III類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10Y6/2) 胎土：灰白色 (7.5GY7/1)	
第101図10	A 22 包含層	青磁 (龍泉窯系) 环	—	—	—	环IV類以降			全体的に被熱する
第101図11	C 30 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗 力	—	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (5Y7/2) 胎土：灰白色 (5Y7/1)	
第101図12	D 31 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗 力	—	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10Y6/2) 胎土：灰白色 (7.5GY7/1)	
第101図13	D 24 包含層	青磁 (龍泉窯系) 壺	—	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰オリーブ色 (5Y6/2) 胎土：灰白色 (7.5GY7/1)	
第101図14	E 34 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗 力	—	—	—	碗I類(D期)	胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰オリーブ色 (5Y5/2) 胎土：灰白色 (7.5GY7/1)	内面に雲文
第101図15	B 25 包含層	青磁 (同安窯系) 皿	—	—	—	皿I 1 b (D期)類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ黄色 (5Y6/3) 胎土：灰白色 (10Y7/1)	櫛描による文様
第101図16	排土中	白磁	—	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (7.5Y8/2) 胎土：灰白色 (2.5Y8/1)	
第101図17	B 24 包含層	中国陶磁 天目茶碗	(12.0)	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	釉：黒色(N1.5/)～ にぶい赤褐色 (5YR4/4) 胎土：灰色 (N6/)	
第101図18	A 24 包含層	褐釉 壺	—	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰オリーブ色 (5Y5/3)～ 赤灰色 (2.5YR5/1) 胎土：にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	壺の肩部
第101図19	A 27 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	—	—	6.2		胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10Y6/2) 胎土：灰白色 (5Y7/1)	見込み部に劃花文 高台天井部は無釉
第101図20	A 27 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	—	—	5.4		胎土：緻密 焼成：良好	釉：暗オリーブ色 (5Y4/3) 胎土：黄灰色 (2.5Y6/1)	見込み部に貫入 置付・高台の一部は 無釉
第101図21	排土中	青磁 (龍泉窯系) 碗	—	—	5.6		胎土：緻密 焼成：良好	釉：明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 胎土：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	見込み部中央に菊花 の押型文 高台の一部・置付・ 高台内は無釉
第101図22	B 53 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	—	—	5.2	碗B 4類	胎土：緻密 焼成：良好	釉：オリーブ灰色 (10Y6/2) 胎土：灰白色 (7.5Y7/1)	高台内に被熱による 変色・炭の残存 高台天井部は無釉

挿図番号	出土位置	器種	口径cm	器高cm	底径cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第101図23	A 25 包含層	青磁 (龍泉窯系) 碗	—	—	4.2		胎土：緻密 焼成：良好	釉：浅黄色 (2.5Y7/4) 胎土：灰白色 (2.5Y8/1)	高台内的一部分・高台天井部は無釉
第101図24	排土中	青磁 (龍泉窯系) 碗	—	—	5.6		胎土：緻密 焼成：良好	釉：明オリーブ灰色 (5Y8/1) 胎土：灰白色 (N7/)	高台内・高台天井部 は無釉
第101図25	排土中	白磁 皿	—	—	(8.0)	皿E群(16c~)	胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (5Y8/1) 胎土：灰白色 (N8/)	畠付部の釉を削る
第101図26	A 25 包含層	白磁 皿	—	—	(7.2)	皿E群(16c~)	胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (5Y8/1) 胎土：灰白色 (N8/)	畠付部の釉を削る

5区出土遺物観察表6

挿図番号	出土位置	器種	口径cm	器高cm	底径cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第103図1	D 21 包含層	備前焼 甕	—	—	(34.8)	内外面：ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面：にぶい褐色 (7.5YR5/3)	玉縁状の口縁 間壁Ⅲ期
第103図2	C 21 包含層	備前焼 甕	—	—	—	内外面：ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内面：にぶい黄橙色 (10YR7/4) 外面：にぶい褐色 (7.5YR5/3)	玉縁状の口縁 口縁切断面に漆を塗る 1と同一個体が間壁 Ⅲ期
第103図3	B 23 包含層	備前焼 壺	—	—	(13.4)	内外面：ヨコナデ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内面：にぶい黄褐色 (10YR5/3) 外面：浅黄色 (2.5Y7/3)～灰黄色 (2.5Y6/2)	玉縁状の口縁 間壁Ⅳ期
第103図4	A 28 包含層	備前焼 甕	—	—	—	内面：ヨコハケ 外面：タテハケ	胎土：密 焼成：良好	内面：オリーブ灰色 (5GY5/1) 外面：灰色 (10V5/1)	間壁Ⅲ・Ⅳ期
第103図5	D 21 包含層	瓷器系陶器 甕	—	—	—	内外面：ヨコナデ	胎土：粗 焼成：良好	内外面：灰褐色 (7.5YR5/2) 胎土：褐灰色 (10YR5/1)	L字状の口縁常滑編 年5型式
第103図6	A 28 包含層	瓷器系陶器 甕	—	—	—	内外面：ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内面：黒褐色 (2.5Y3/2) 外面：オリーブ黒色 (10Y3/1)胎土：褐灰色 (10YR5/1)	N字状の口縁常滑編 年6～7型式
第103図7	A 28 包含層	瓷器系陶器 甕	—	—	—	内外面：ヨコナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面：緑黒色 (7.5GY2/1)～ 灰黄褐色 (10YR5/2)胎土：褐 灰色 (10YR5/1)	N字状の口縁常滑編 年7型式
第103図8	排土中	瓷器系陶器 甕	—	—	—	内面：斜め方向のナ デ？ 外面：回転ナデ、ユ ビオサエ	胎土：粗 焼成：良好	内面：灰色 (N5/) 外面：灰白色 (N8/)～灰色 (7.5Y4/1)	常滑編年9～11型式 か
第103図9	A 27 地山直上	瓷器系陶器 甕	(23.6)	—	—	内面：ナデ 外面：ナデ、ユビオ サエ	胎土：粗 焼成：良好	内面：にぶい赤褐色 (2.5YR4/3) 外面：にぶい赤褐色 (2.5YR4/4) 胎土：灰色 (10YR5/1)	常滑編年9型式か
第103図10	D 23 包含層	瓷器系陶器 甕	(15.4)	—	—	内面：ナデ 外面：ナデ、ユビオ サエ	胎土：粗 焼成：良好	内外面：にぶい赤褐色 (2.5YR5/3) 胎土：灰色 (10YR6/1)	常滑編年10型式か
第103図11	C 23 包含層	国内陶器 擂鉢	—	—	—	内外面：ヨコナデ	胎土：粗 焼成：良好	内外面：灰色 (N4/)	4条1単位の擂り目
第103図12	C 21 包含層	国内陶器 擂鉢	—	—	—	内外面：ナデ、ヨコ ナデ	胎土：粗 焼成：良好	内面：灰色 (N5/)～ 暗灰色 (N3/) 外面：暗赤褐色 (5YR3/3)	7条1単位の擂り目
第103図13	B 29 包含層	国内陶器 擂鉢	—	—	—	内外面：ヨコナデ、 ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面：にぶい褐色 (2.5YR5/3) 胎土：灰色 (10YR6/1)	6条1単位の擂り目
第103図14	B 27 包含層	国内陶器 擂鉢	—	—	—	内外面：ヨコナデ、 ナデ	胎土：密 焼成：良好	内外面：にぶい褐色 (7.5YR5/3) 胎土：	6条1単位の擂り目

挿図番号	出土位置	器種	口径cm	器高cm	底径cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第103図15	D 29 包含層	肥前系陶器 灰釉皿	(14.0)	—	—	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	釉：にぶい黄橙色 (10YR7/2) 胎土：灰白色	九州陶磁編年Ⅰ－Ⅱ期
第103図16	C 27 包含層	肥前系陶器 灰釉皿	(24.4)	—	—	内外面：回転ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰黄褐色 (10YR5/2-6/2) 胎土：にぶい赤褐色 (2.5YR4/3)	口縁部に灰白色の釉 による文様九州陶磁 編年Ⅱ期
第103図17	C 26 包含層	肥前系陶器 灰釉皿	(24.2)	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	釉：灰白色 (2.5Y8/2) 胎土：赤橙色 (10YR6/6)	九州陶磁編年Ⅱ期
第103図18	B 35 包含層	肥前系陶器 碗	—	—	(4.2)	置付部は露胎	胎土：緻密 焼成：良好	釉：浅黄色 (5Y7/4) 胎土：灰白色 (10YR8/2)	九州陶磁編年Ⅳ期

5区出土遺物観察表7

挿図番号	出土位置	器種	口径cm	器高cm	底径cm	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第102図1	耕土中	東播系須恵器 鉢	(24.0)	—	—	外面：回転ナデ、 ヨビオサ工 内面：回転ナデ	胎土：密 焼成：良好	灰色 (N6/)	
第102図2	D 24 包含層	中世須恵器 鉢	—	—	—	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	緑黒色 (5G2/1)～ 灰白色 (2.5Y8/2)	玉縁状の口縁磨耗が 激しい
第102図3	B 23 包含層	中世須恵器 鉢	—	—	—	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	黄灰色 (2.5Y4/1)	玉縁状の口縁
第102図4	B 27 包含層	中世須恵器 鉢	(18.6)	—	—	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	灰色 (7.5Y5/1)	口縁に浅い沈線
第102図5	D 24 包含層	中世須恵器 鉢	—	—	—	外面：ナデ、ヘラ削 り 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	黄灰色 (2.5Y4/1)	口縁に浅い沈線
第102図6	B 26 包含層	中世須恵器 鉢	—	—	—	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：密 焼成：良好	灰色 (7.5Y5/1)	
第102図7	D 30 包含層	瓦質 鉢カ	—	—	—	外面：ナデ 内面：ハケメ	胎土：緻密 焼成：良好	オリーブ黒色 (7.5Y3/1)～ 灰黄色 (2.5Y7/2)	わずかに口縁が玉縁 状
第102図8	B 30 包含層	瓦質 鉢カ	(16.0)	—	—	外面：ナデ、ヘラ削 り 内面：ナデ	胎土：緻密 焼成：良好	灰色 (N4/1)～ 暗灰色 (N3/)	
第102図9	C 29 包含層	瓦質	—	—	—		胎土：緻密 焼成：良好	暗灰色(N3/)	七宝文のスタンプ
第102図10	B 49 包含層	瓦質 火鉢カ	(26.0)	—	—	外面：ヨコナデ、ナ デ 内面：ヨコナデ、ナ デ	胎土：密 焼成：良好	内面：灰白色 (10YR7/1) 外面：にぶい黄橙色 (10YR7/2)	く字状の口縁
第102図11	B 52 包含層	瓦質 火鉢カ	—	—	(19.4)	外面：ナデ、ミガキ 内面：ケズリ	胎土：やや粗い 焼成：良好	内面：暗灰色 (N3/) 外面：灰色 (N4/)	

5区出土遺物観察表8

挿図番号	出土位置	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	調整・手法の特徴	胎土／焼成	色調	備考
第73図3	S K 2036	磨き石カ	11.1	5.6	4.3				235g
第74図9	S K 2045	硯	(6.8)	(6.3)	1.6	全面に研磨痕、内面 に穿孔			2/3欠損 砥石として転用か
第78図6	SE 2068	砥石	(8.5)	(4.8)	(7.7)	1面のみ研磨面			373g 両端は欠損 切断面に被熱痕、煤
第82図6	SD 2025	砥石	(14.6)	(9.0)	(3.4)	1面のみ研磨面			一部被熱、煤付着
第82図13	SD 2048	砥石	(15.7)	(8.8)	(6.8)	2面に研磨痕			2つの石を合成 研磨痕が明瞭
第72図9	S K 2030	鉄滓	9.5	7.55	3.4	碗形鉄滓			250g 中央に木炭

5区出土遺物観察表9

挿図番号	出土位置	種別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	調整・手法の特徴	備考
第73図1	S K 2035	木簡	(77.1)	7.3	1.0	表・側面：ケズリ 下端：キリ	上端は欠損 表面に「アビラウンケン」「キリーク」の 梵字、「南無牛頭天王」「天刑星」「九々八 十一」の墨書 裏面は未調整

5区出土遺物観察表10

挿図番号	出土位置	器種	残存長 cm	残存幅 cm	重量 g	備考
第104図1	A 32	打製石斧	11.1	8	272	一部欠損している。
第104図2	排土中	硯	3.1	5.7	38	陸の部分に、縦方向の擦痕あり。
第104図3	D 25	砥石	6.1	4.4	157	2面に擦痕あり。
第104図4	D 252	砥石	16	5	364	2面に擦痕あり。

写 真 図 版



上空から見た調査区（4D区、北から）

図版2 4A区

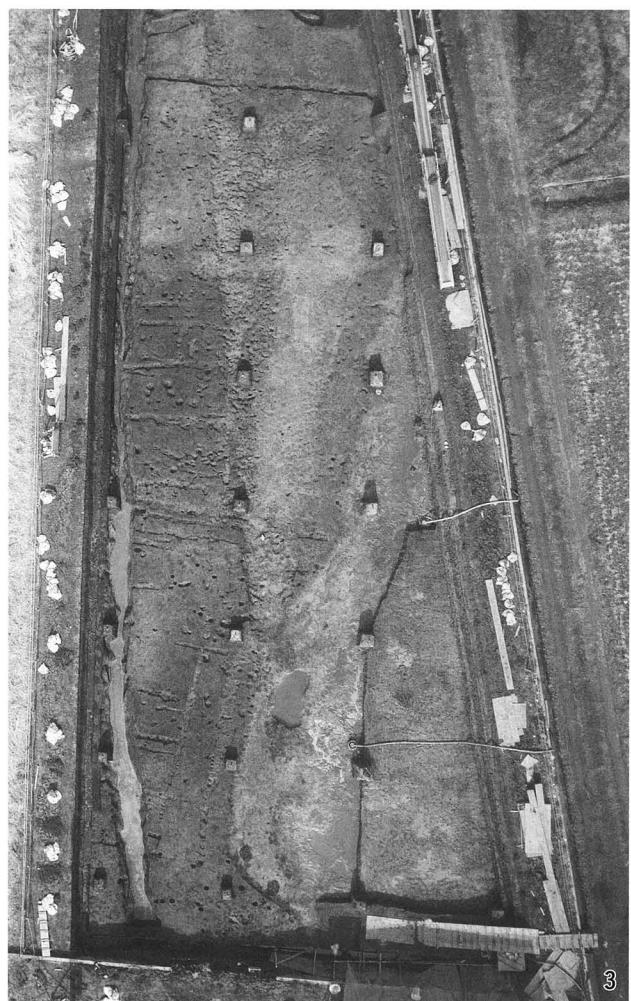


1



2

1.4A区北半（南から） 2.4A区南半（南から）



1.4B区全景（上空から） 2.4B区北半 3.4B区南半 4.4B区全景（北から）

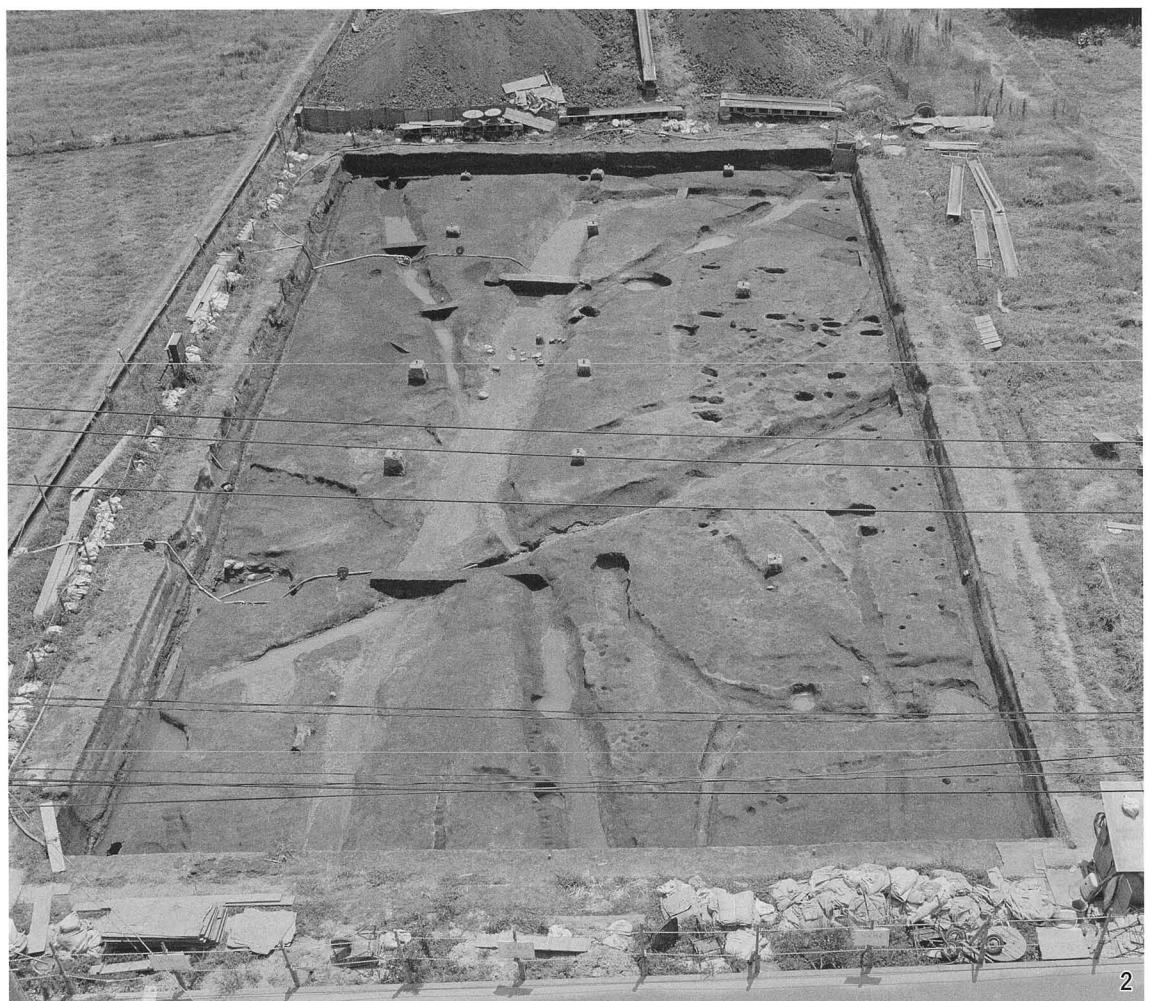
図版4 4C区



1.4C区全景（南から） 2.4C区全景（北から）



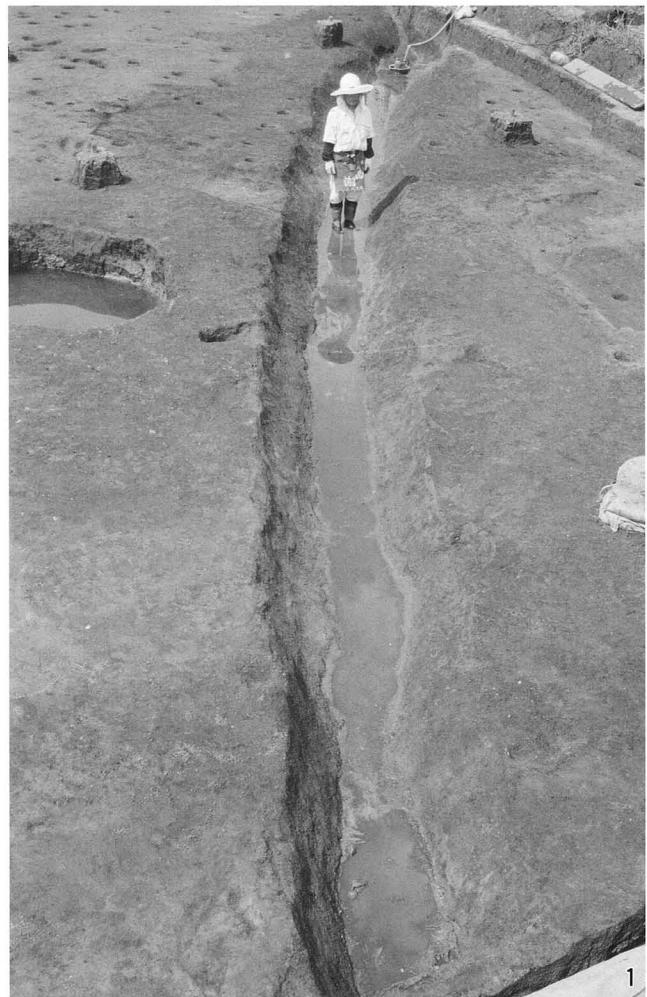
1



2

1.4D区全景（上空から） 2.4D区全景（北から）

図版6 遺構（1）



1



2



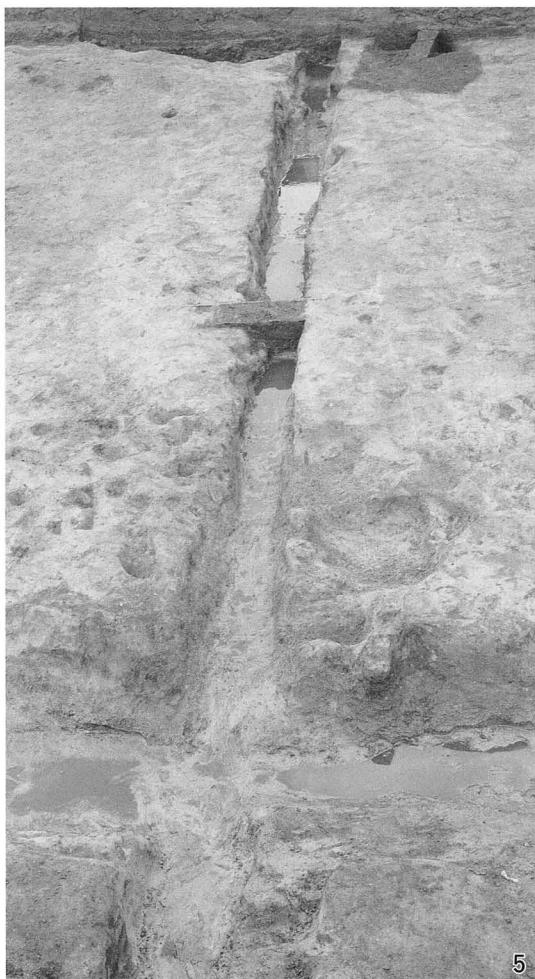
3



4

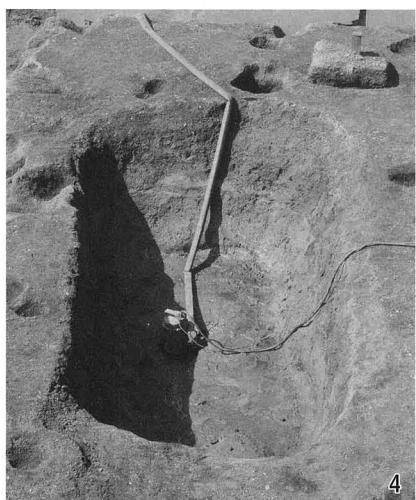
1.溝SD1000（4A区、南西から） 2.溝SD1000（4B区、北から） 3.溝SD1000（4C区、南から）

4.溝SD1000（4D区、南東から）



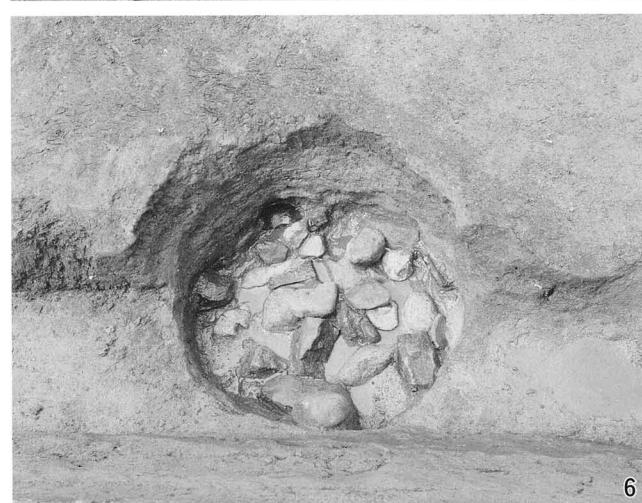
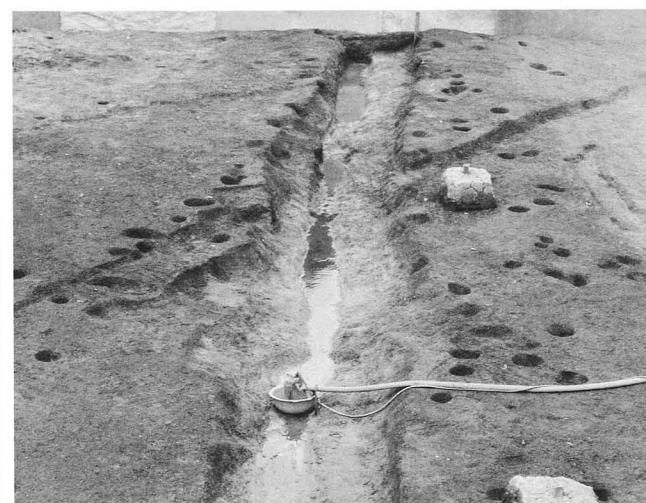
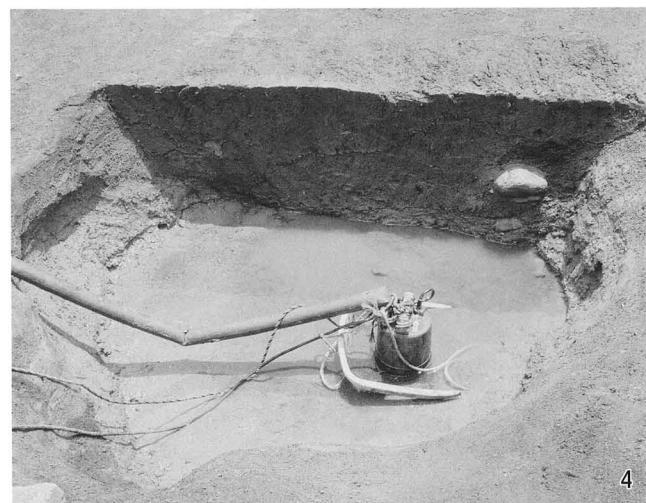
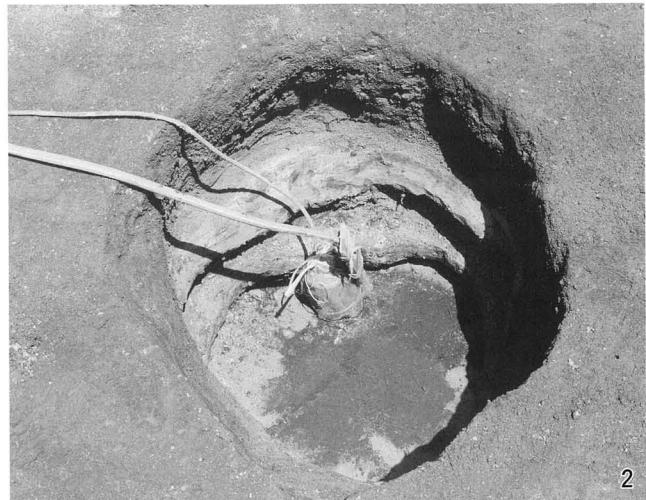
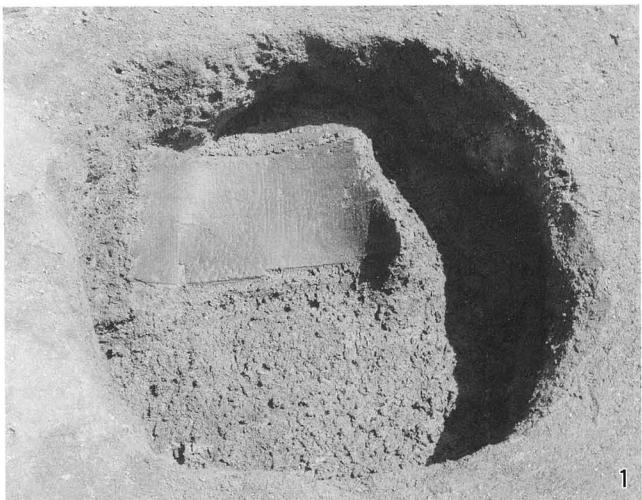
1.井戸SE1094（東から） 2.井戸SE1094（北から） 3.土坑SK1080（東から） 4.井戸SE1142（南東から）
5.東西溝SD1032（西から） 6・7.SX1131ほか（南から）

図版8 遺構（3）



1.土坑SK1048（南から） 2.井戸SE1025（南西から） 3.土坑SK1092・1093（東から） 4.土坑SK1084（東から）

5.井戸SE1026（西から） 6.井戸SE1100（東から） 7.井戸SE1083（西から） 8.井戸SE1083（南西から）



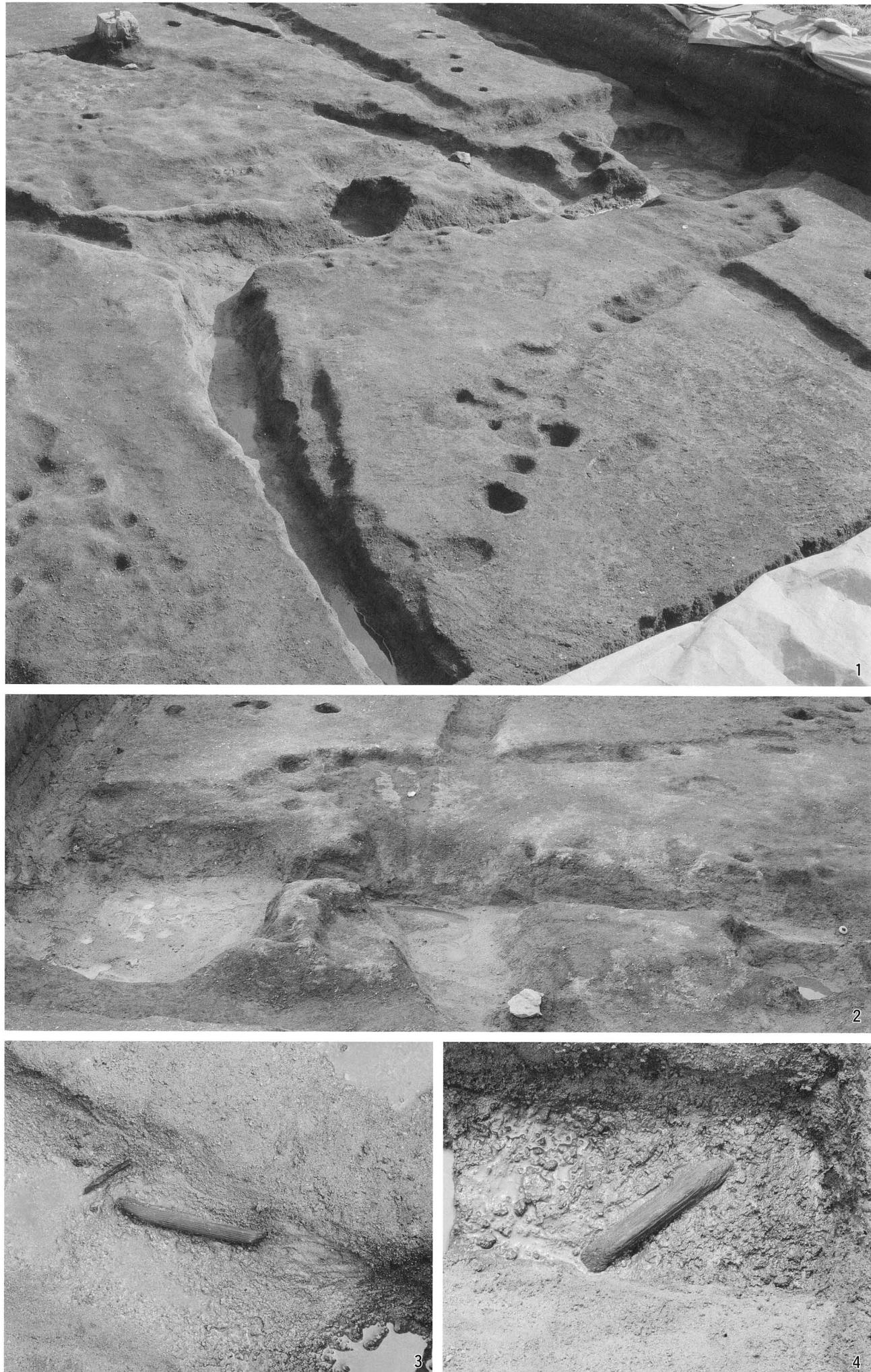
1.井戸SE1116（北から） 2.井戸SE1117（西から）

5.井戸SE1141（南西から） 6.井戸SE1146（南から）

3.井戸SE1119（西から） 4.井戸SE1122（西から）

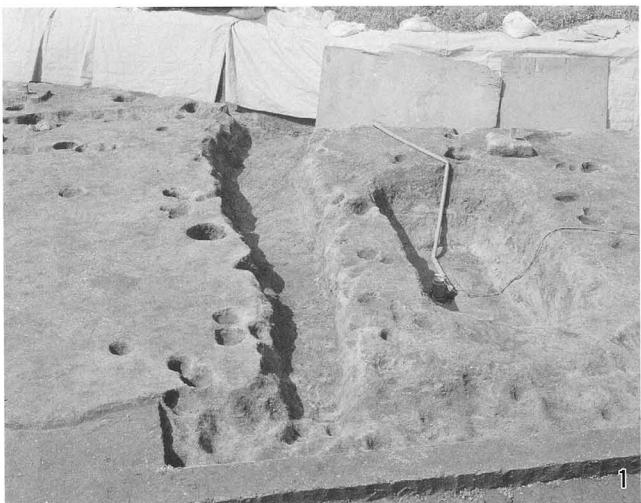
7.東西溝SD1011（東から）

図版 10 遺構（5）



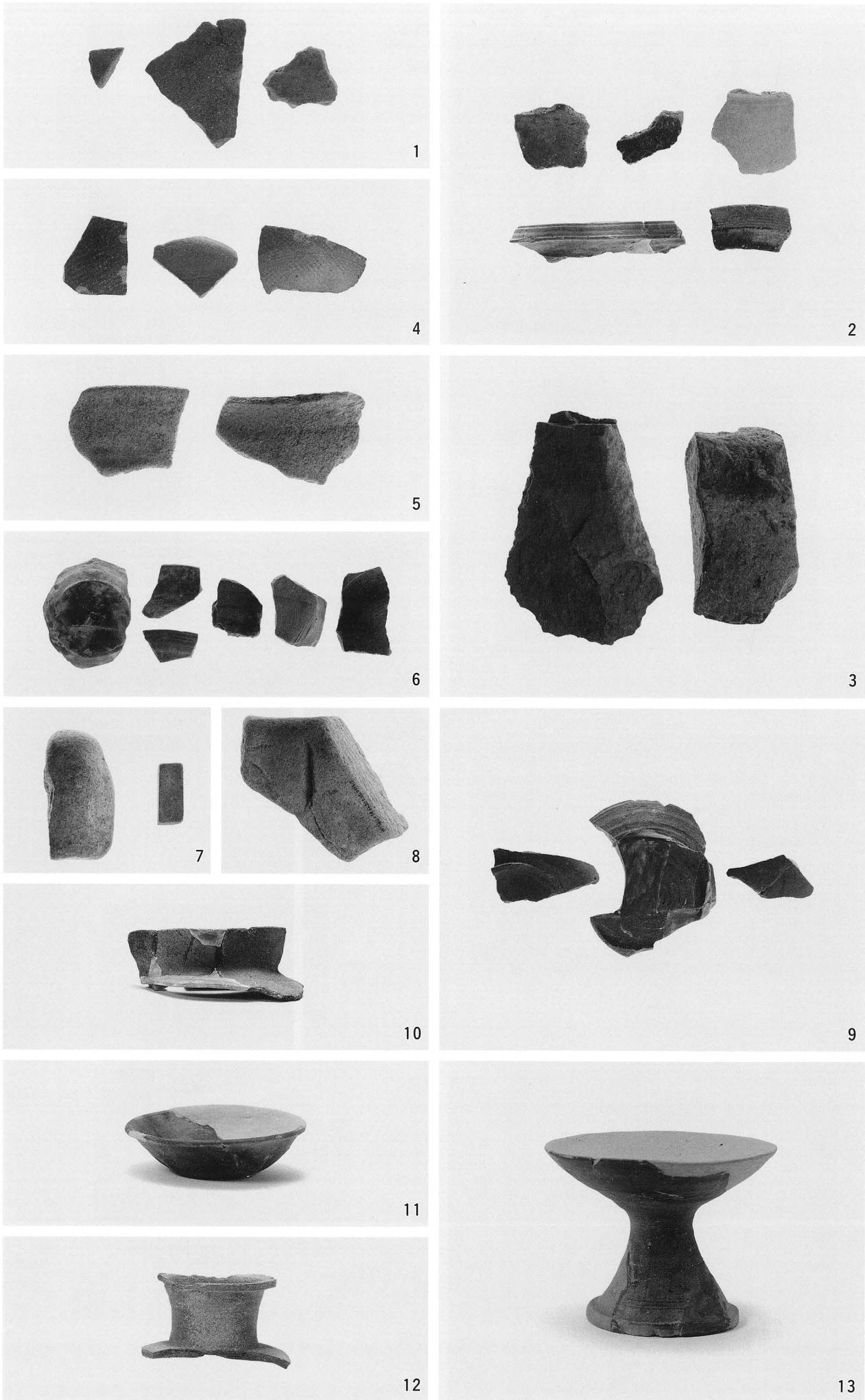
1.溝SD1111と土坑SK1110（北東から） 2.土坑SK1110（南から） 3.舟形木製品(形代A)出土状態（北から）

4.舟形木製品(形代B)出土状態（東から）



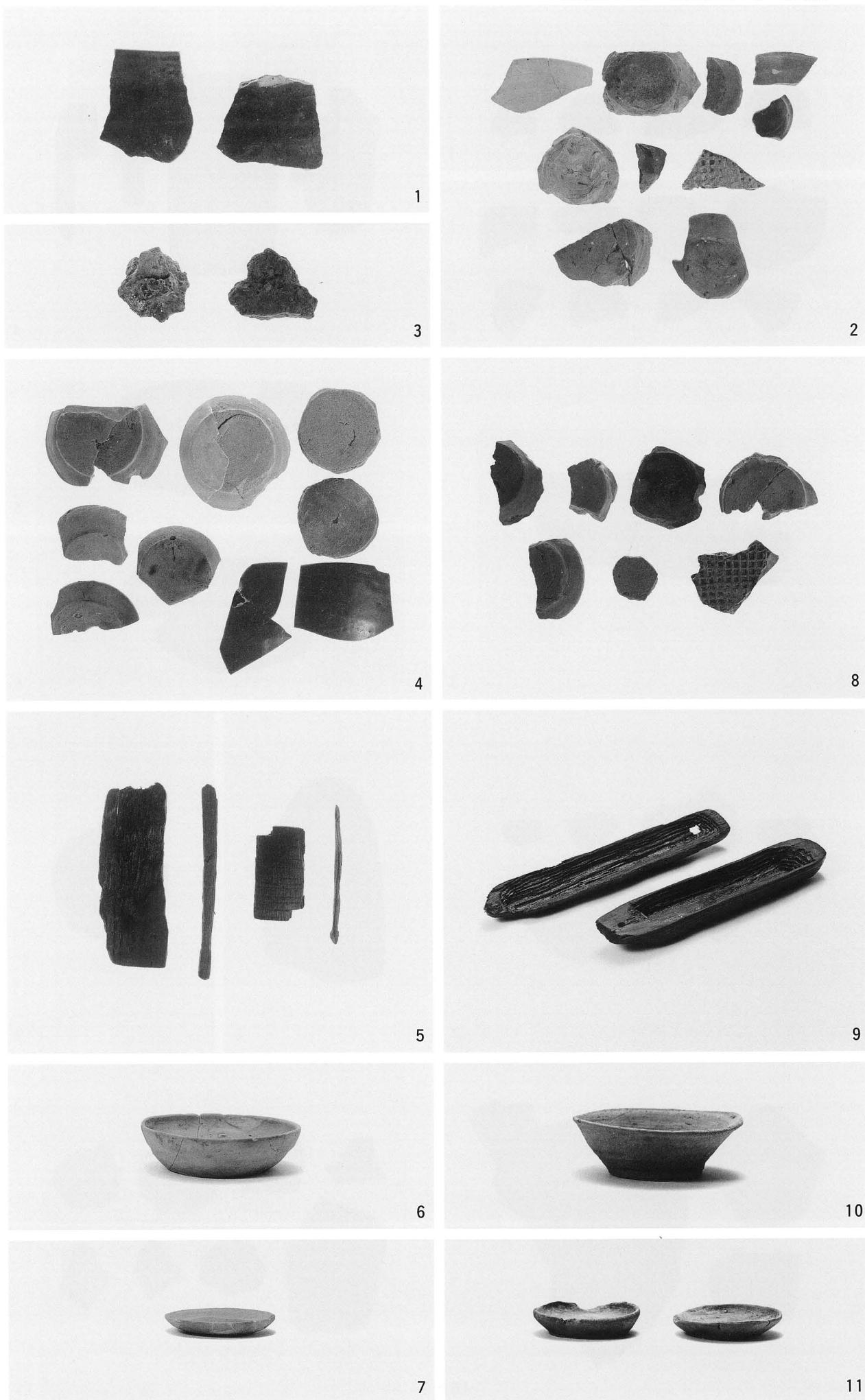
1.東西溝SD1090（東から） 2.東西溝SD1047（南から） 3.斜行溝SD1144（南西から） 4.溝SD1120（西から）
5.溝SD1120（南から） 6.SX1039～1042（北から） 7.SX1056（南から）

図版12 遺構内出土遺物（1）



1.SX1034 2・3.溝SD1000 4.土坑SK1070・溝SD1050 5.溝SD1050・井戸SE1051 6.溝SD1054・1123

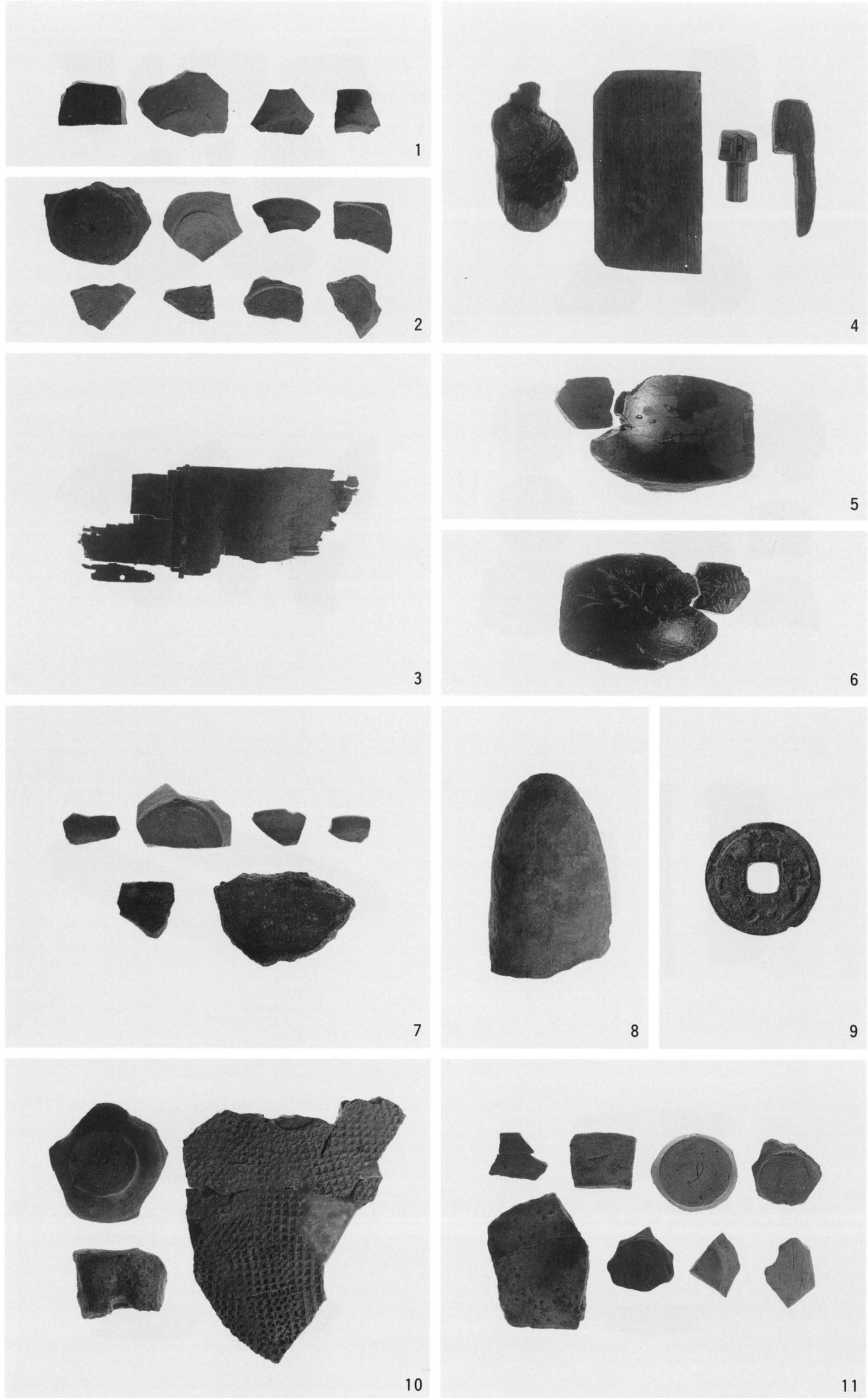
7.井戸SE1137・溝SD1054 8.井戸SE1100 9.溝SD1054・1073 10.溝SD1096 11.溝SD1123 12.溝SD1054 13.溝SD1145



1.柱穴SP1104 2.土坑SK1084・1092・1093 3.土坑SK1093・1110 4.土坑SK1110

5.土坑SK1110・井戸SE1025 6・7.土坑SK1110 8～11.溝SD1111

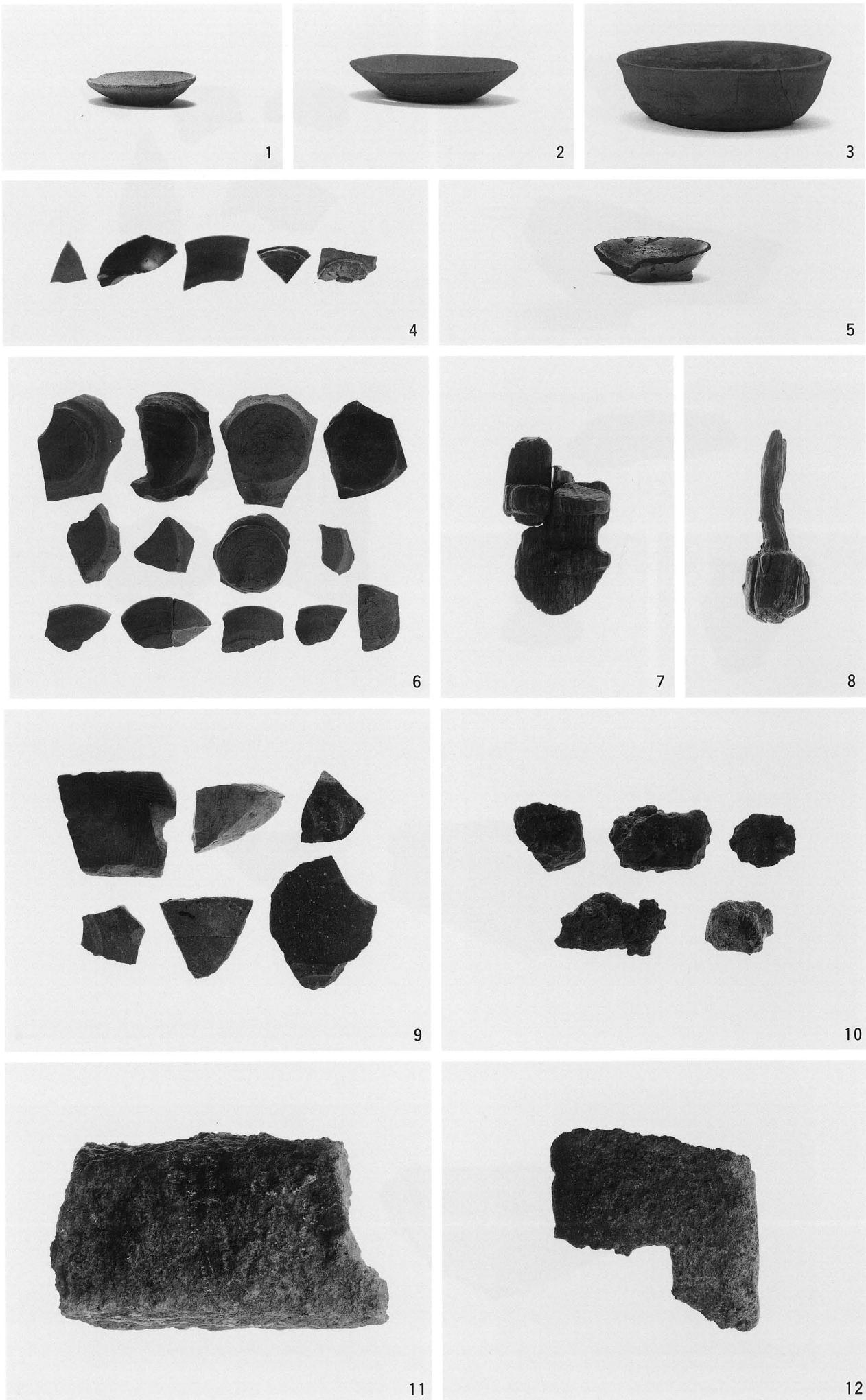
図版 14 遺構内出土遺物（3）



1.柱穴SP1147・1148 2.井戸SE1025・1026・1083・1100・1116・1117 3.井戸SE1116 4.井戸SE1083

5・6・8.井戸SE1146 7.井戸SE1119・1122・1141・1146 9.溝SD1024 10.溝SD1144 11.SX1077・1109・1131

遺構内出土遺物（4）図版15



1.溝SD1113 2～11.溝SD1120 12.SX1127

図版16 遺構内出土遺物（5）



1



2



4



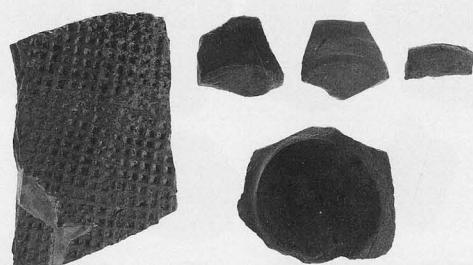
3



6



7



5



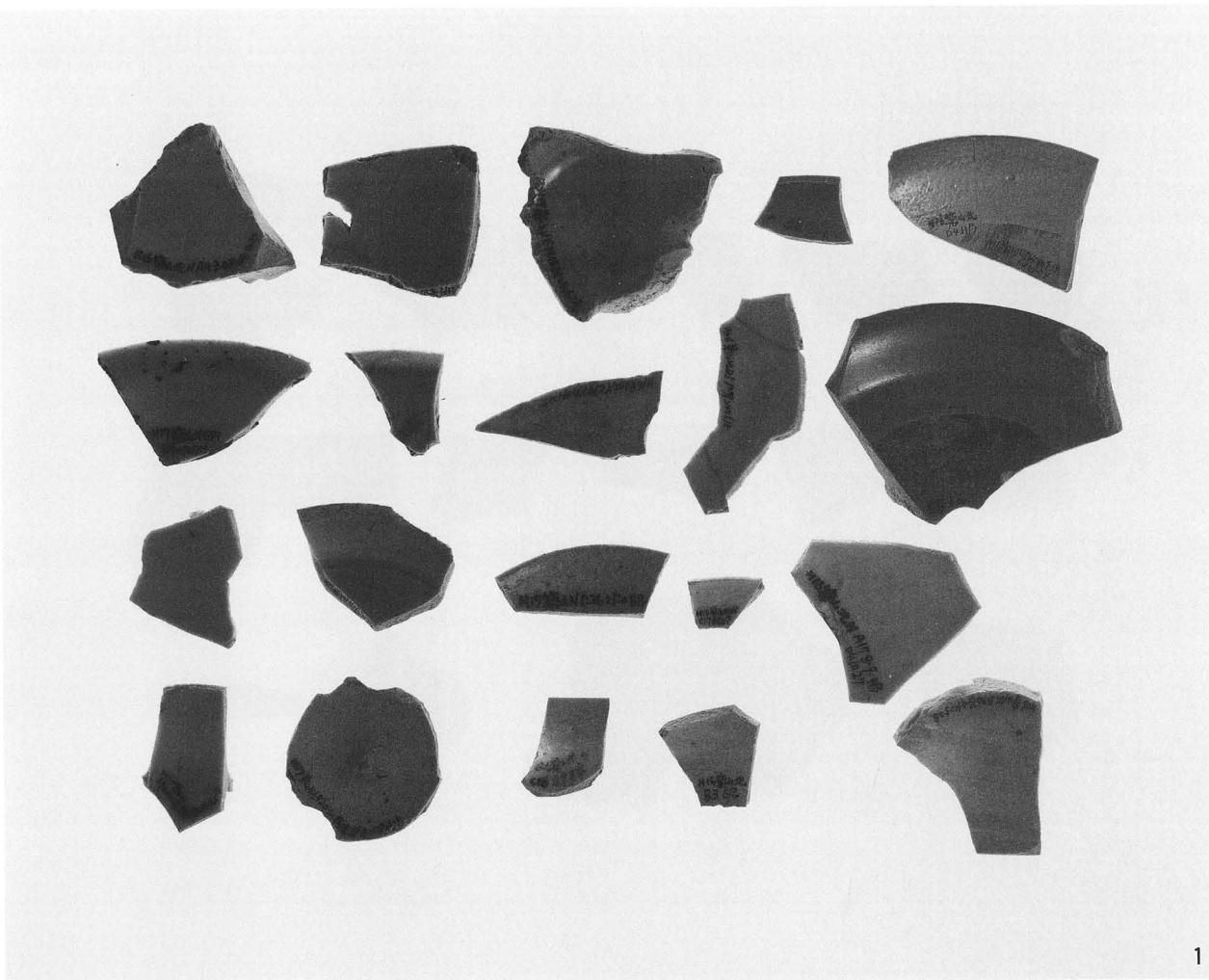
8



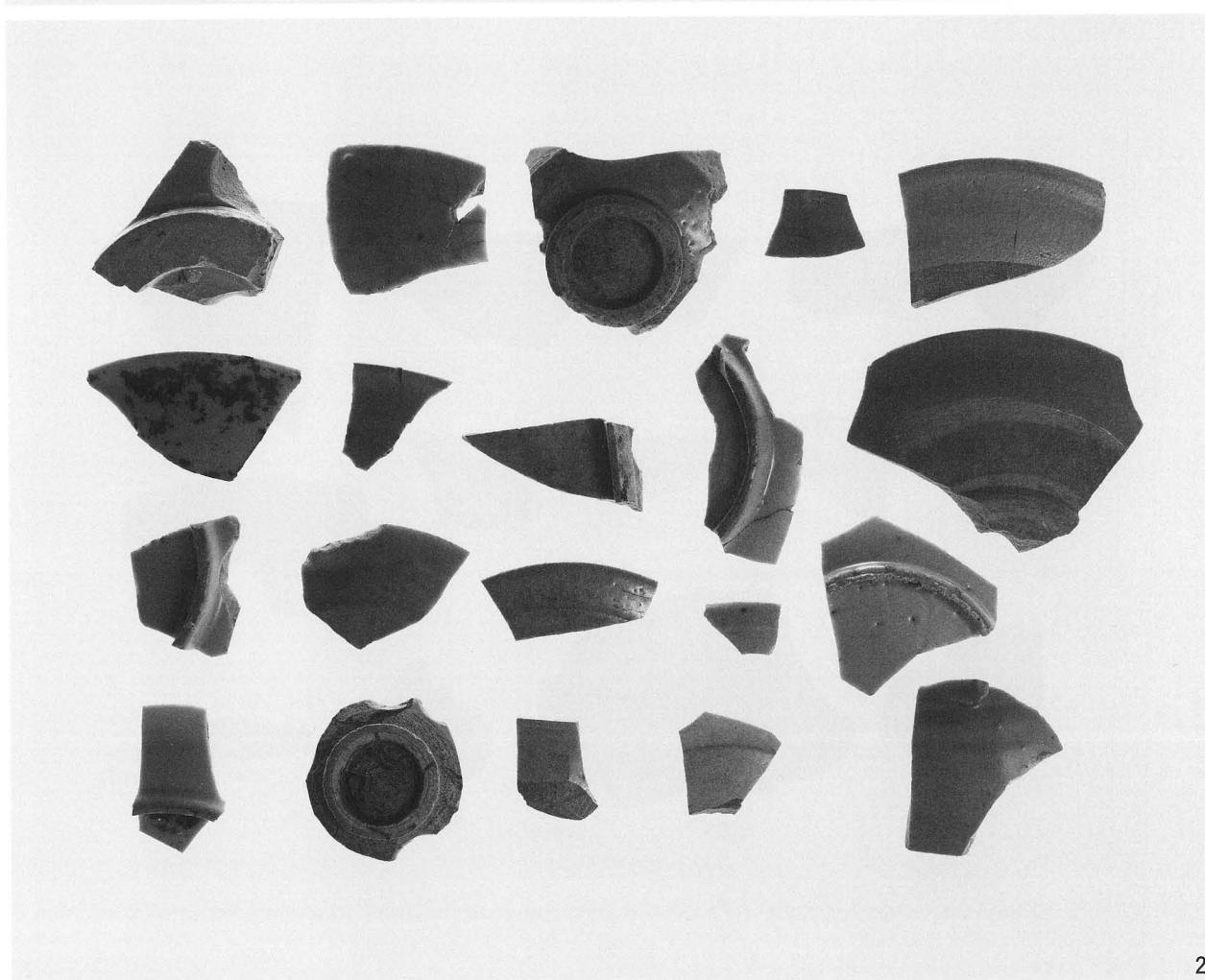
9

1.土坑SK1084 2・3.溝SD1098 4.溝SD1047・1090・1098 5.溝SD1106・1107・1113 6.溝SD1144

7.SX1077 8・9.溝SD1047・1098



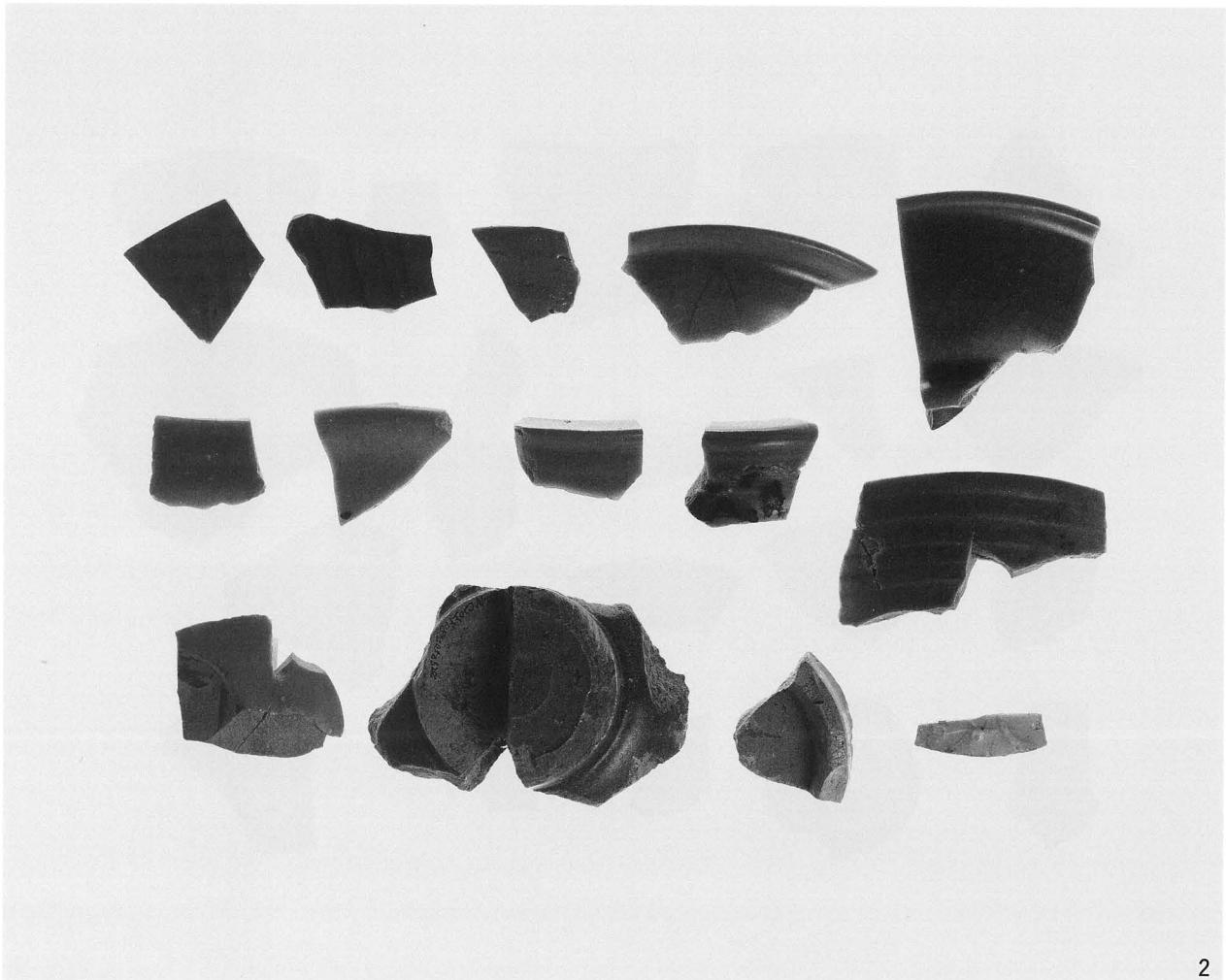
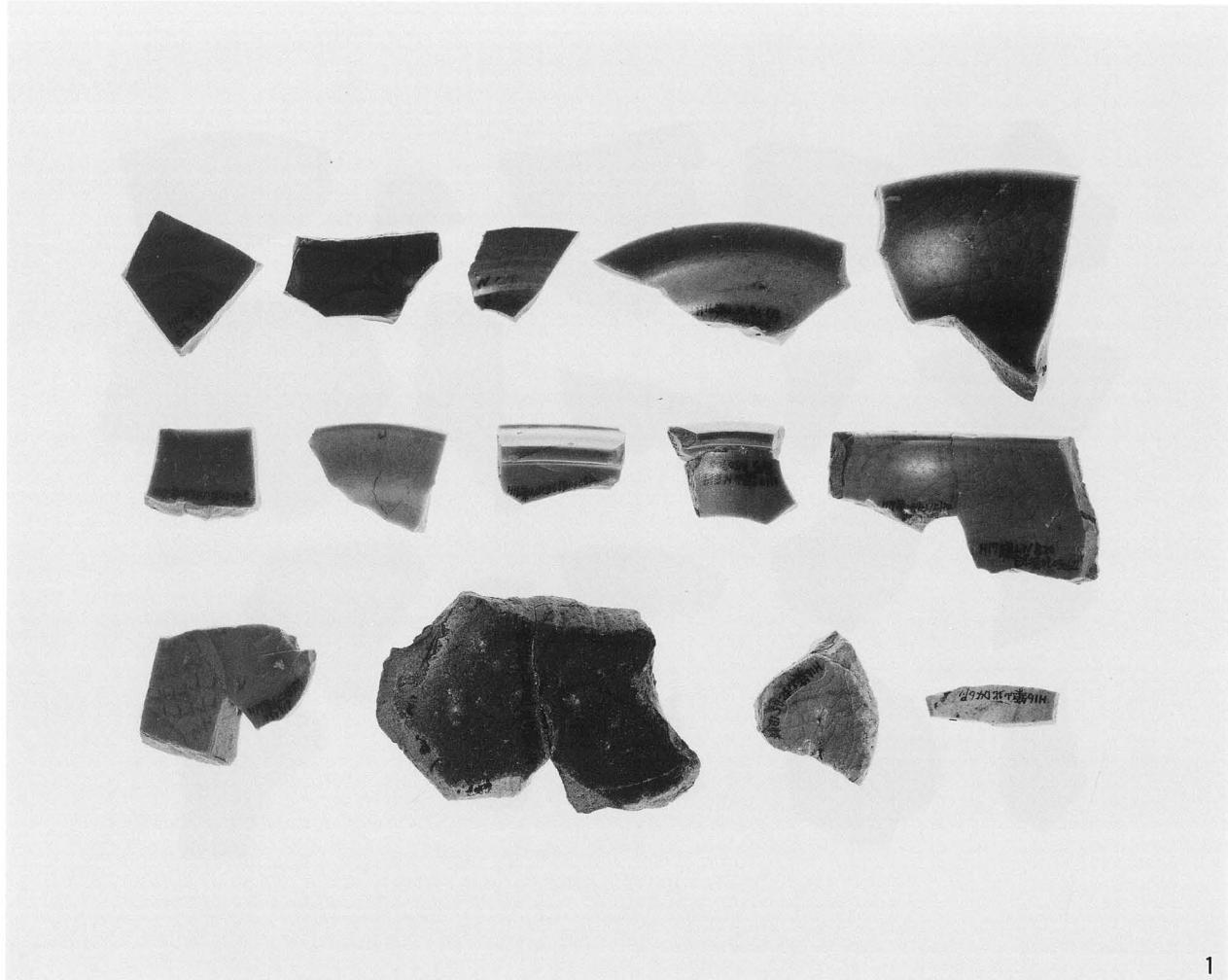
1

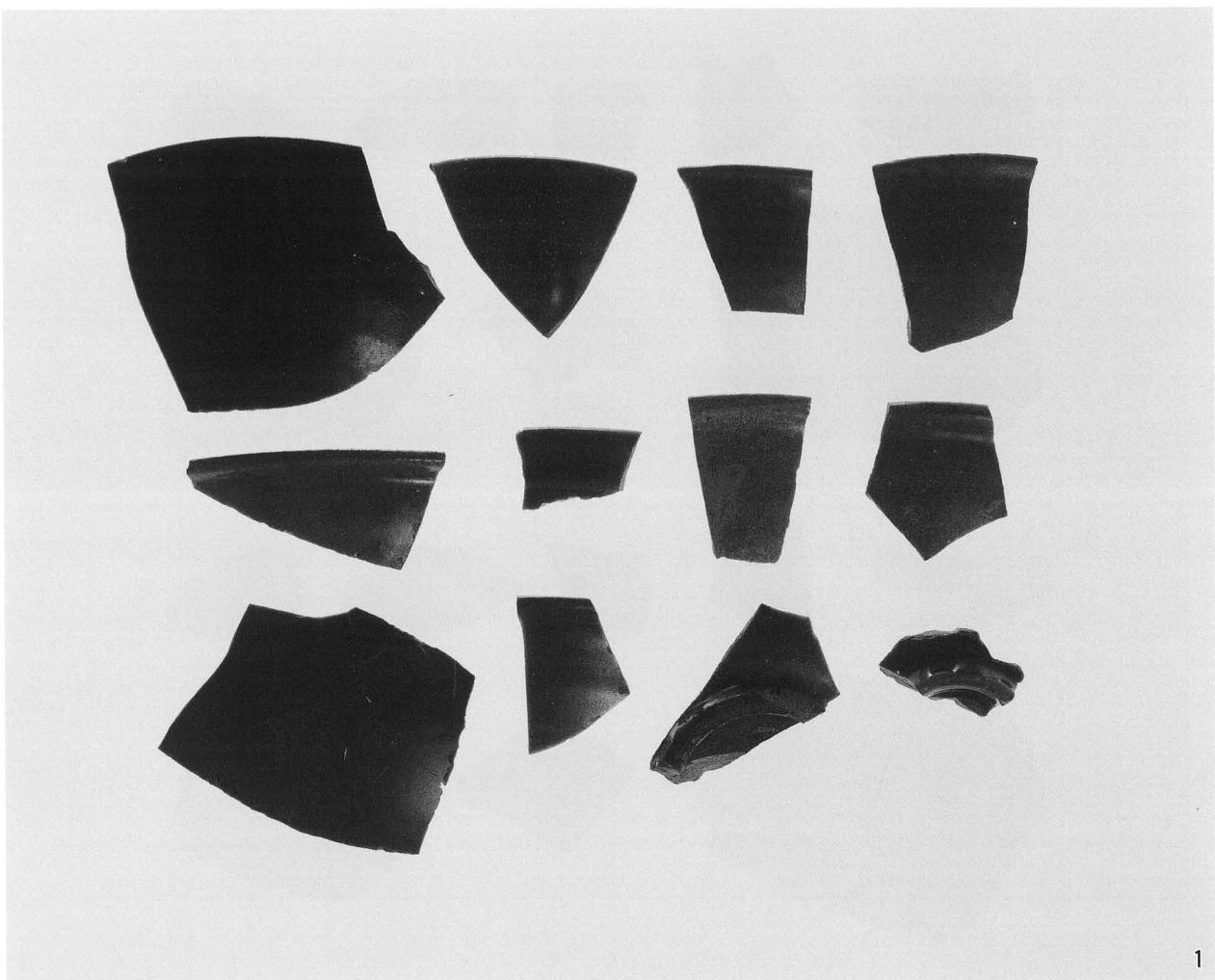


2

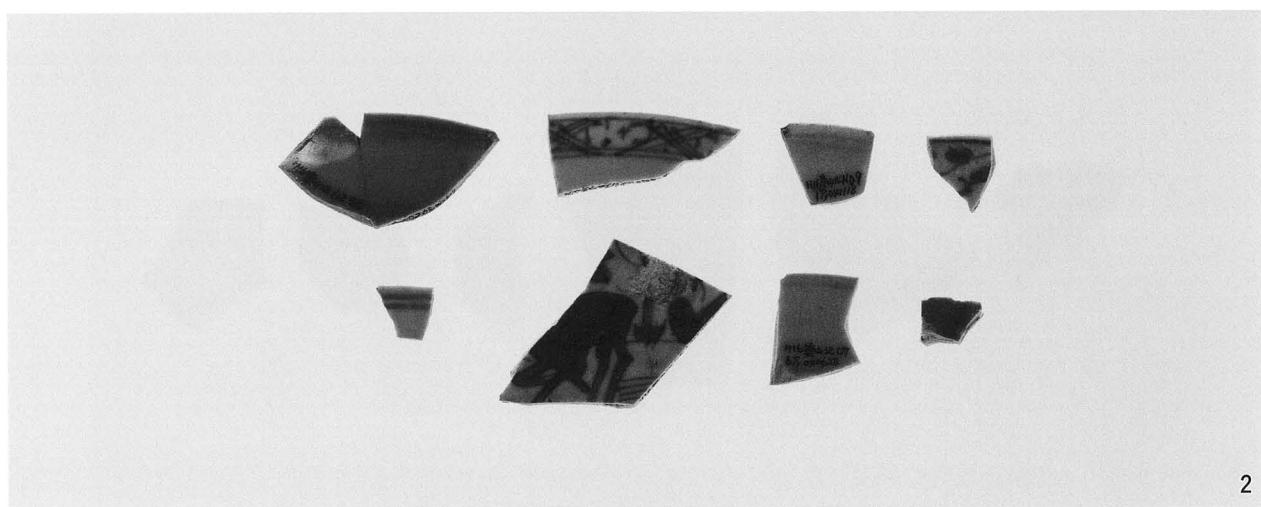
1・2.白磁

図版 18 遺構外出土遺物（2）

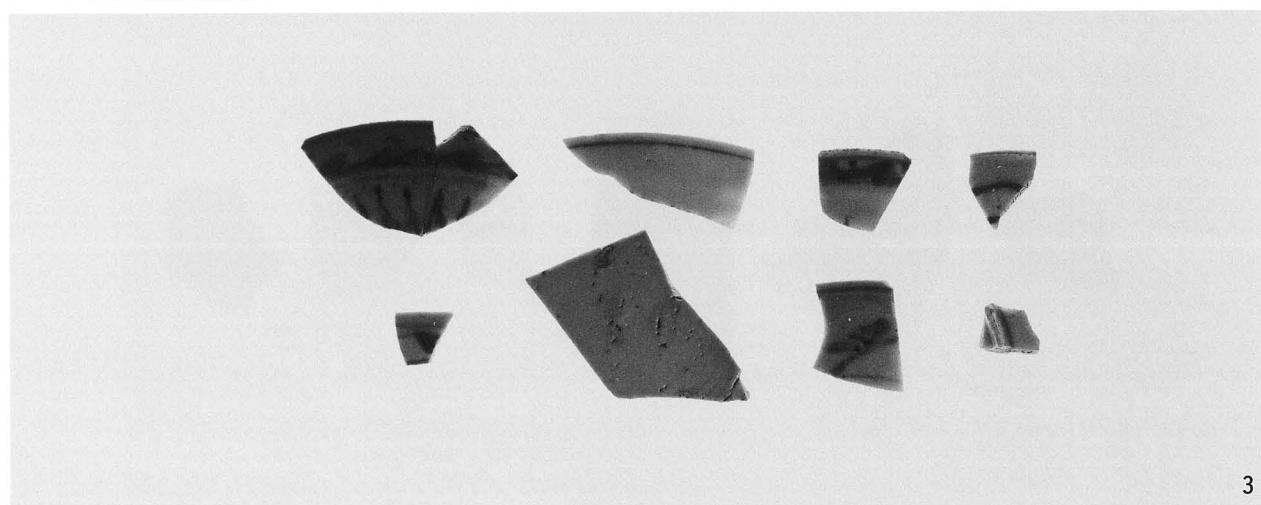




1



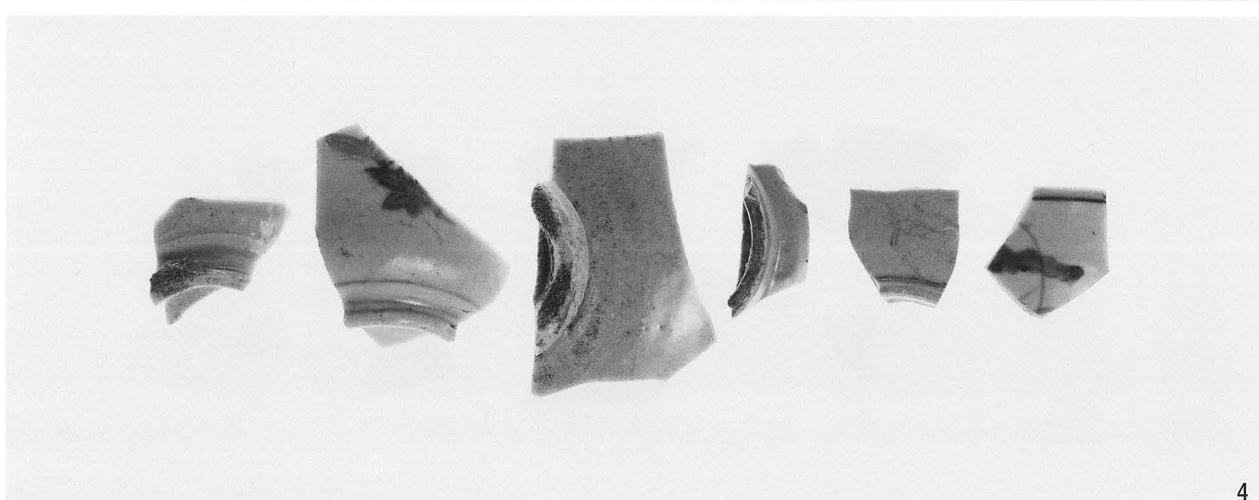
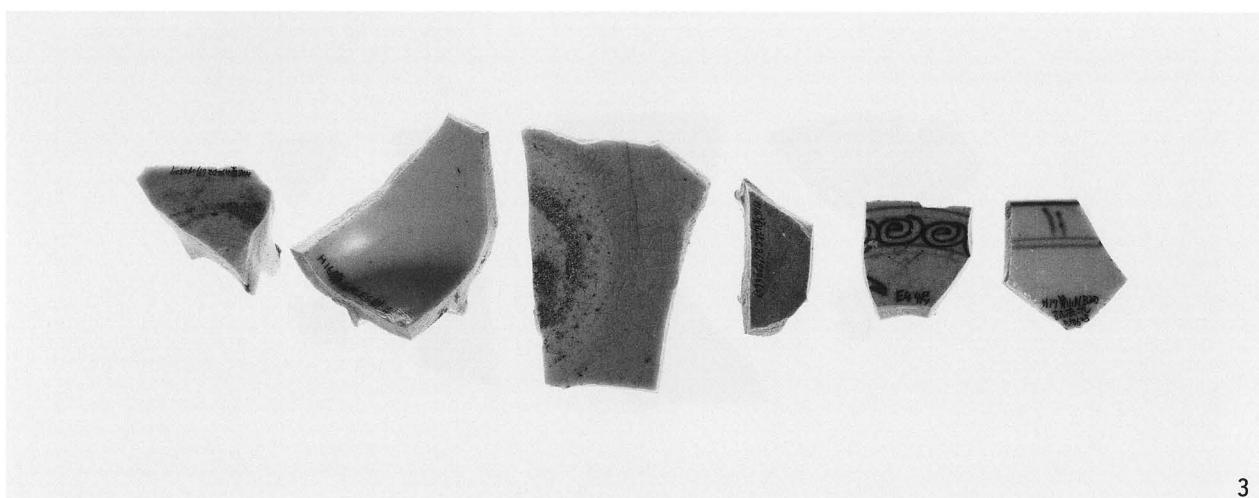
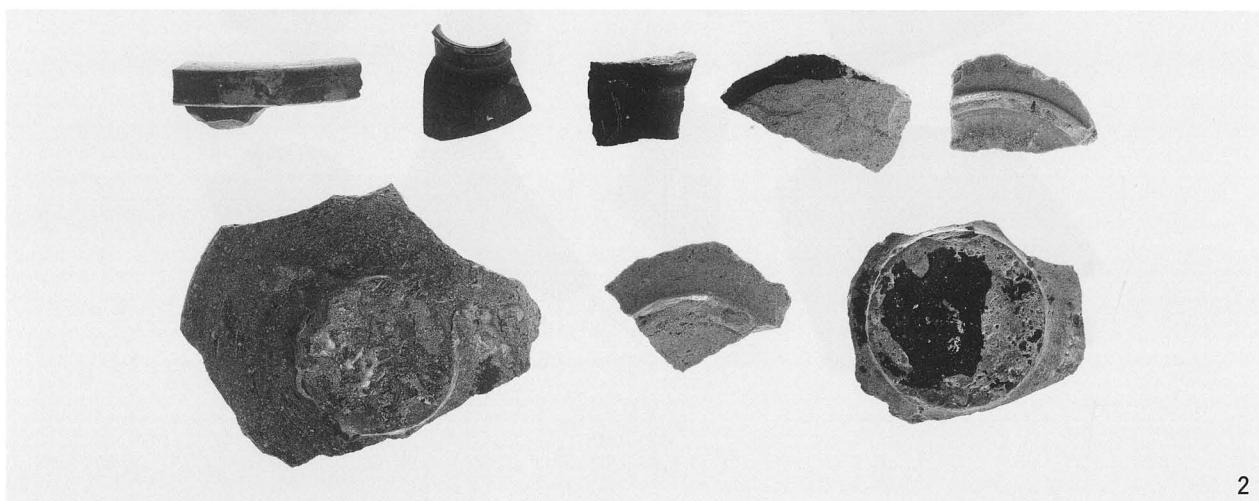
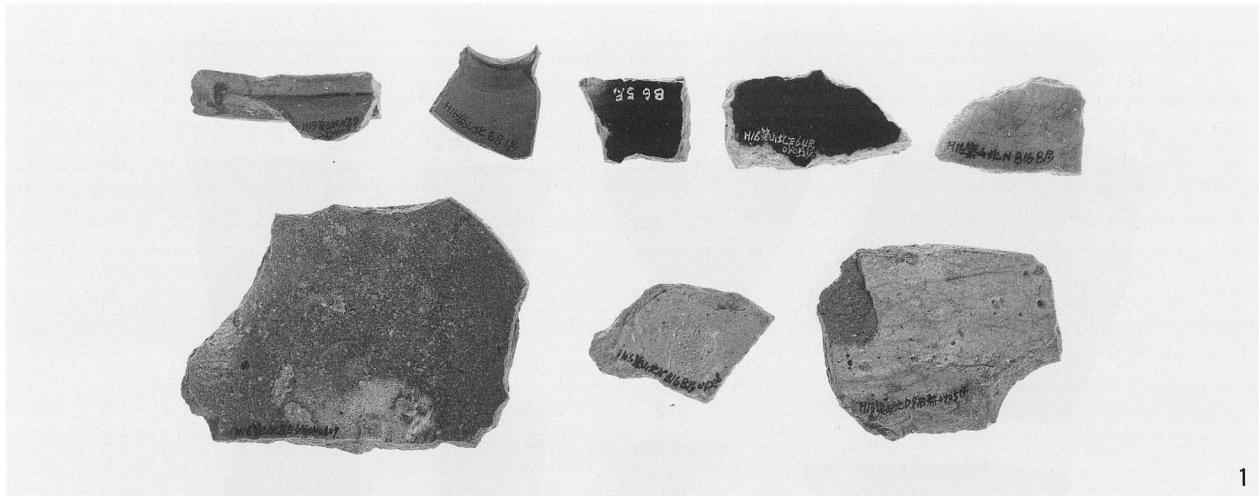
2



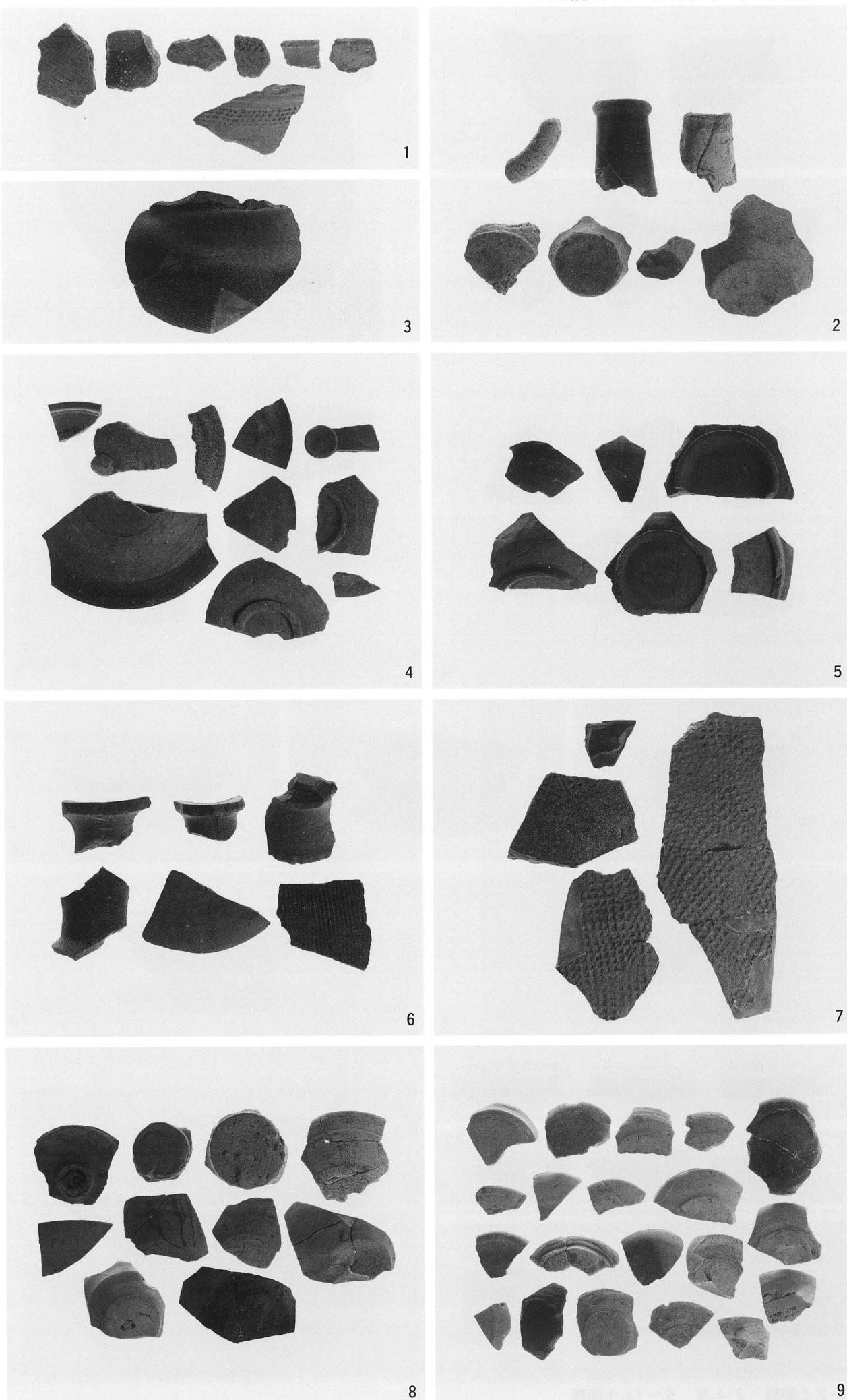
3

1.青磁 2・3.染付（青花）

図版 20 遺構外出土遺物（4）

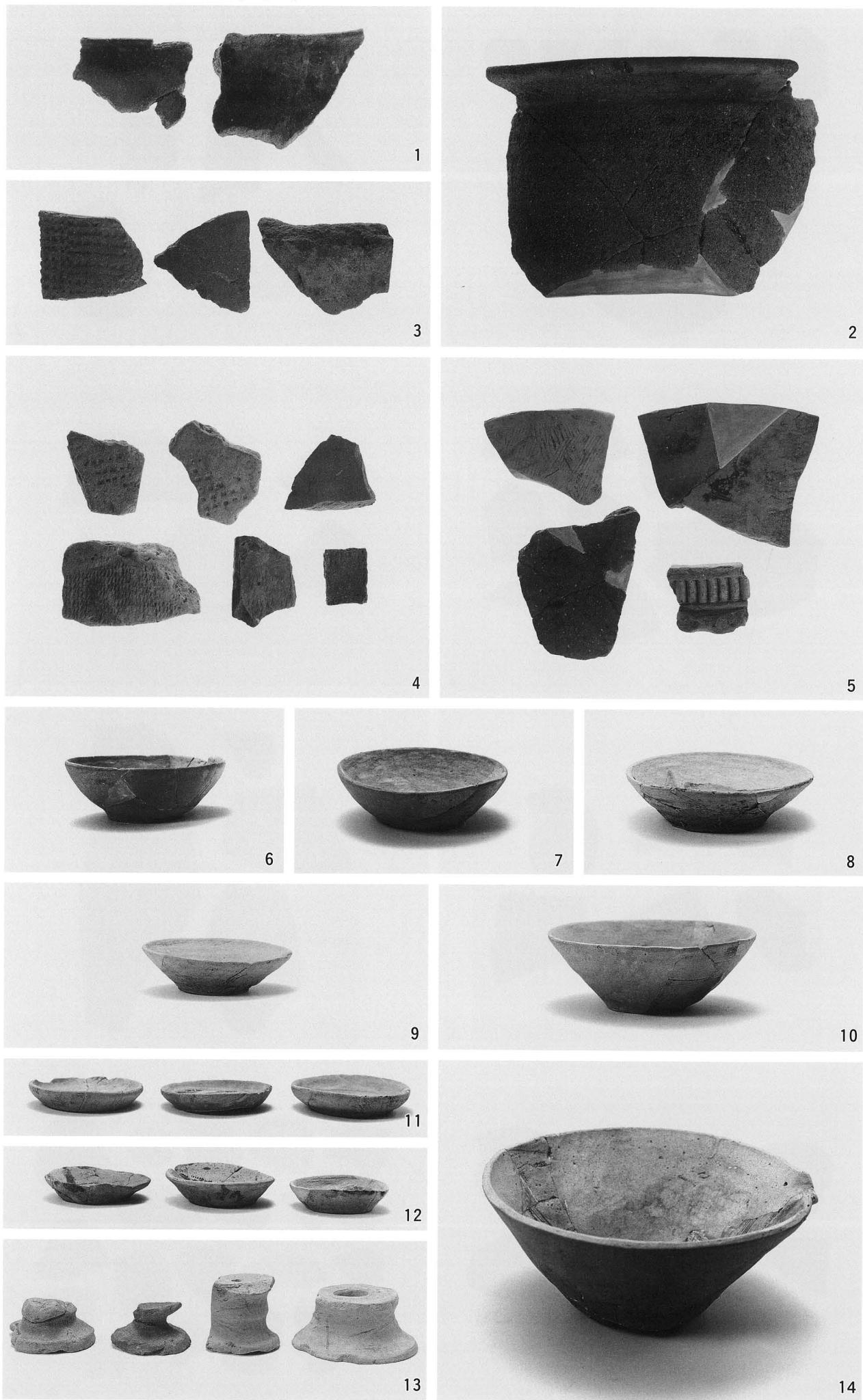


1・2.中世陶器 3・4.肥前系陶器

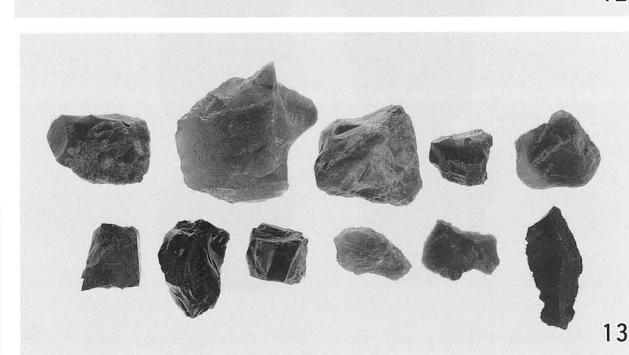
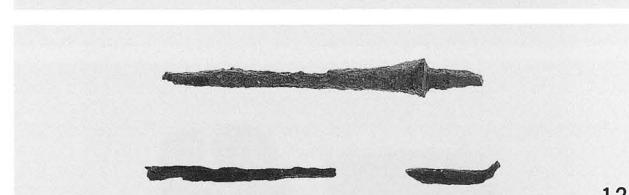
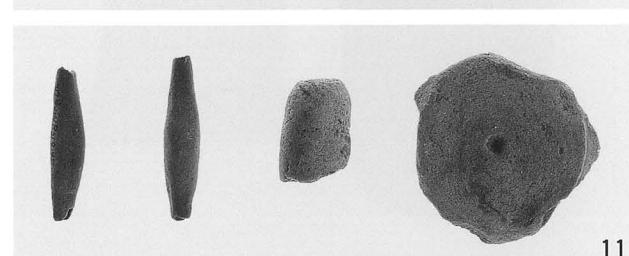
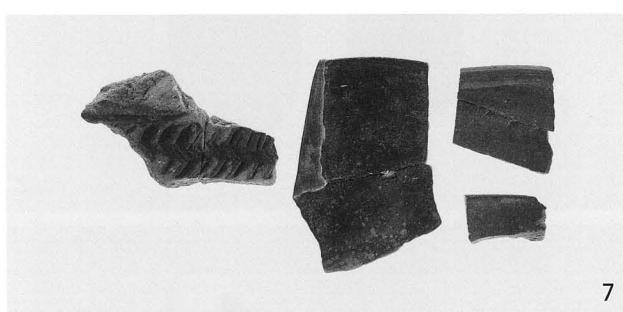
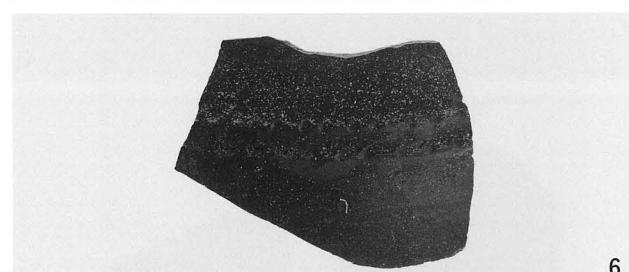
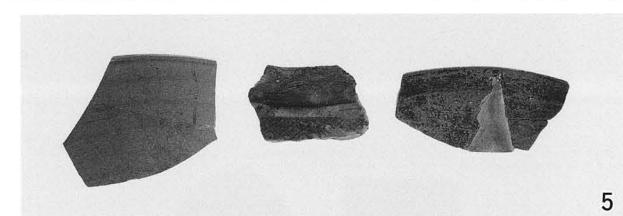
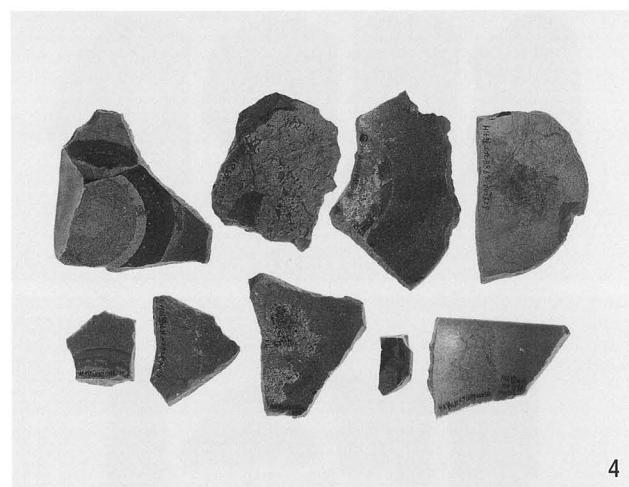
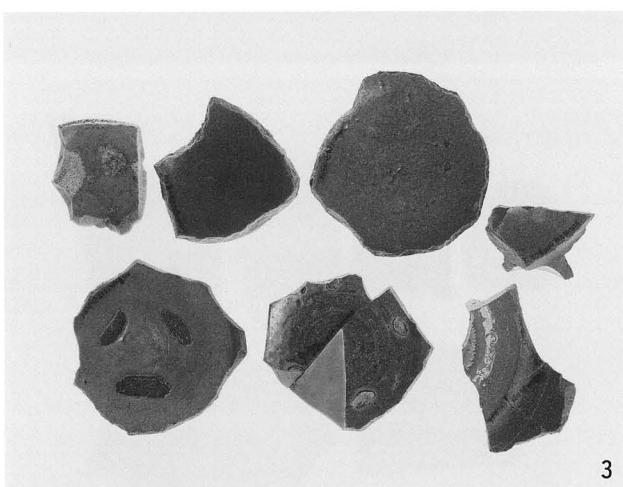
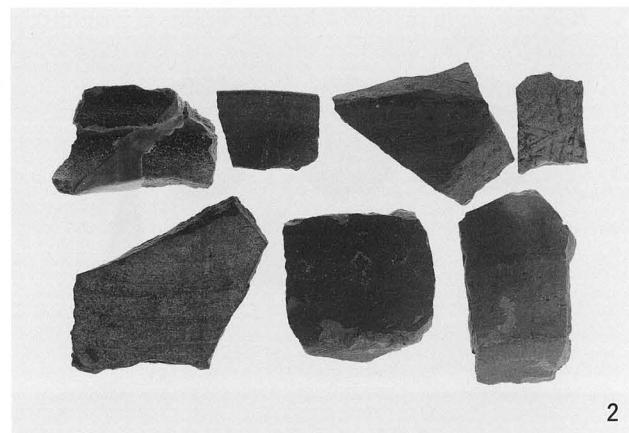
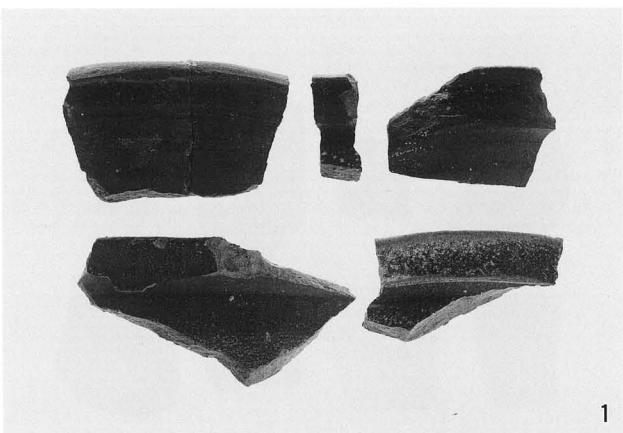


1・2.弥生土器 3～6.須恵器 7.中世須恵器 8・9.土師器

図版 22 遺構外出土遺物（6）



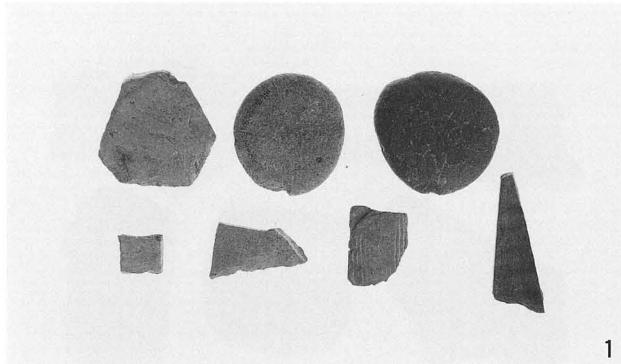
1・2.土師器 3・4.瓦 5～14.土師器



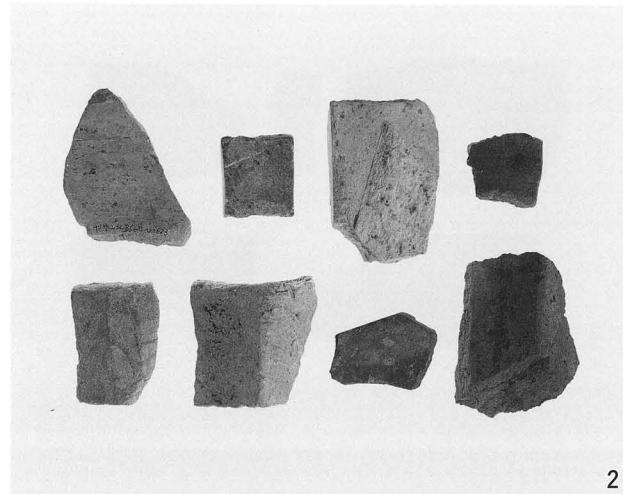
1・2.中世陶器 3・4・6・8～10.肥前系陶器 5.中世陶器・瓦質土器 7.瓦質土器 11.土製品

12.鉄製品 13.石製品

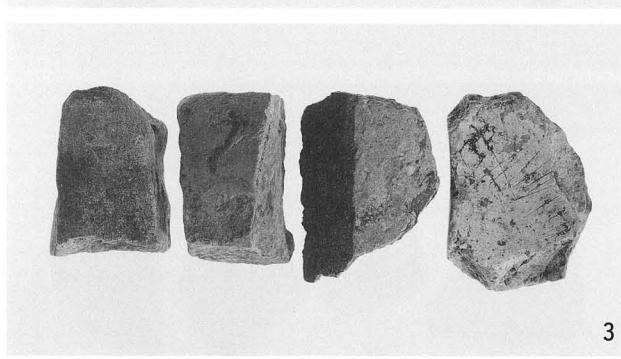
図版 24 遺構外出土遺物（8）



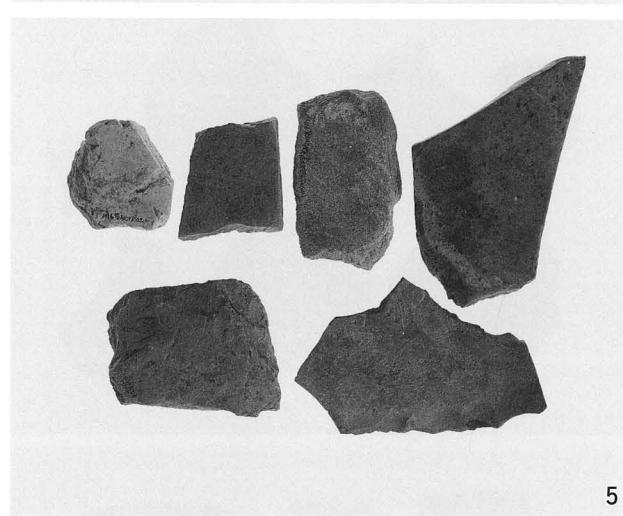
1



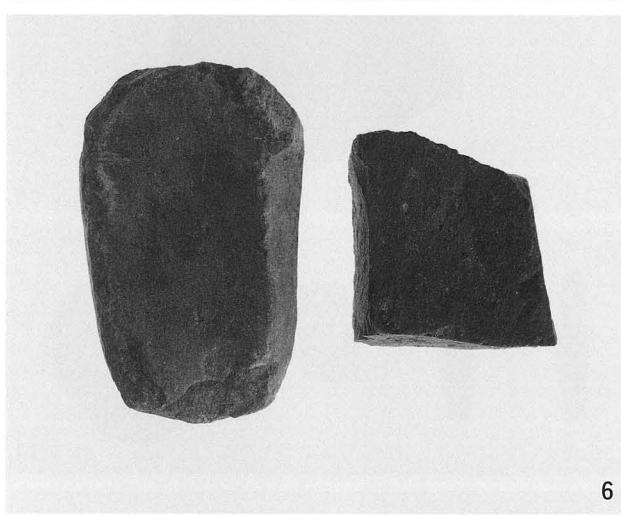
2



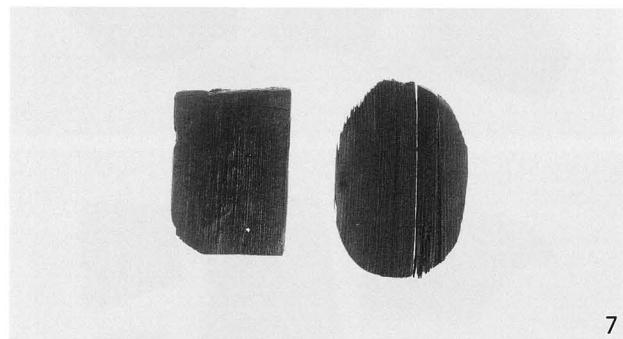
3



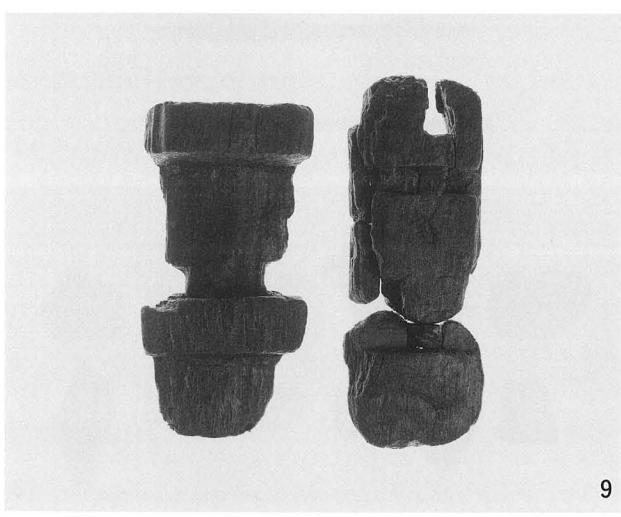
5



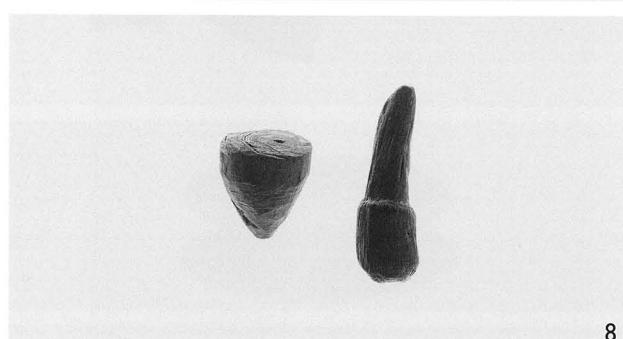
6



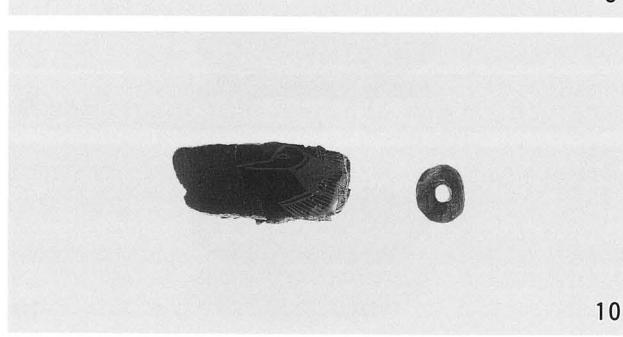
7



9



8



10

1~6.石製品 7~10.木製品



1.5B区北半（南から） 2.5B区南半（南から）

図版 26 遺構（1）

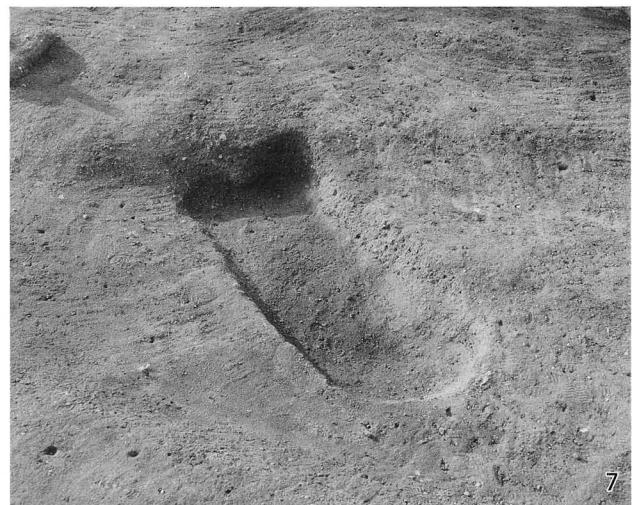
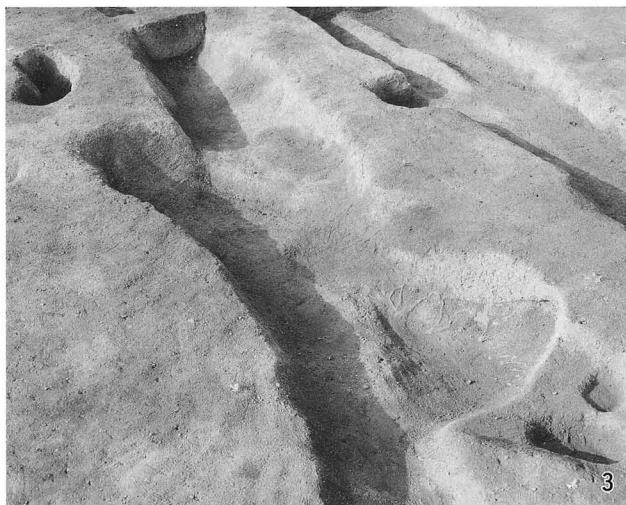


1



2

1.5号墳周溝北側（西から） 2.5号墳周溝南側（東から）



1.土坑SK2164（北東から） 2.土坑SK2174（北から）
6.土坑SK2211（南東から） 7.土坑SK2210（南から）

3・4.土坑SK2183（南から） 5.土坑SK2166（北東から）
8.土坑SK2210（西から）

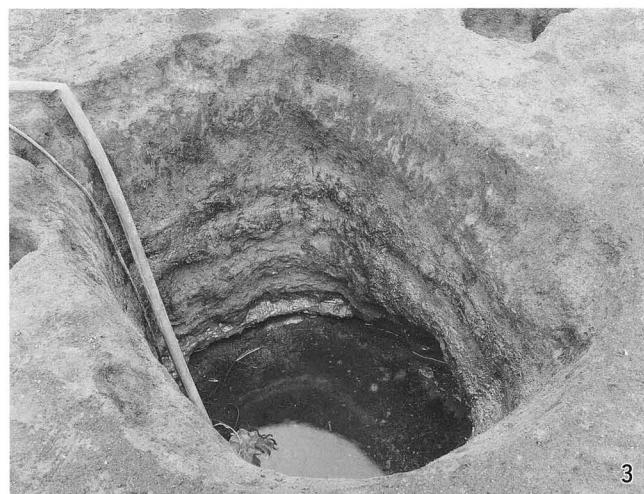
図版 28 遺構（3）



1



2



3

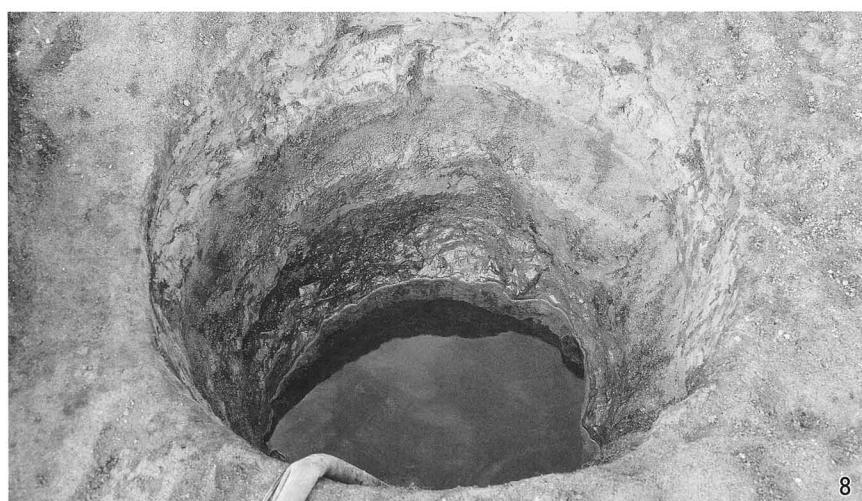


4



5

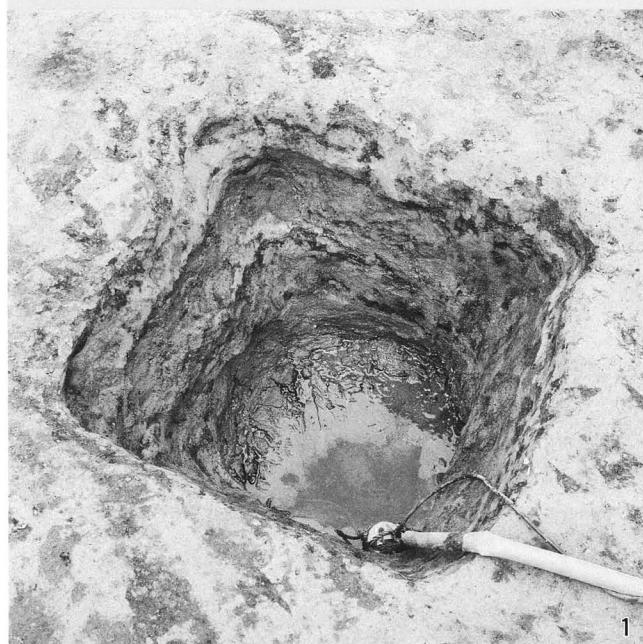
1.土坑SK2018（南西から） 2.土坑SK2021（南西から） 3.土坑SK2022（東から） 4.土坑SK2036（南から）
5.土坑SK2035（北西から）



1.土坑SK2047（南西から）
A列西端ピット（北西から）

2.土坑SK2030（北西から） 3.土坑SK2057（南東から） 4.土坑SK2045（南東から） 5.SX2010
6.土坑SK2076（北から） 7.SX2010 A列東端ピット（東から） 8.SX2010 B列中央ピット（南から）

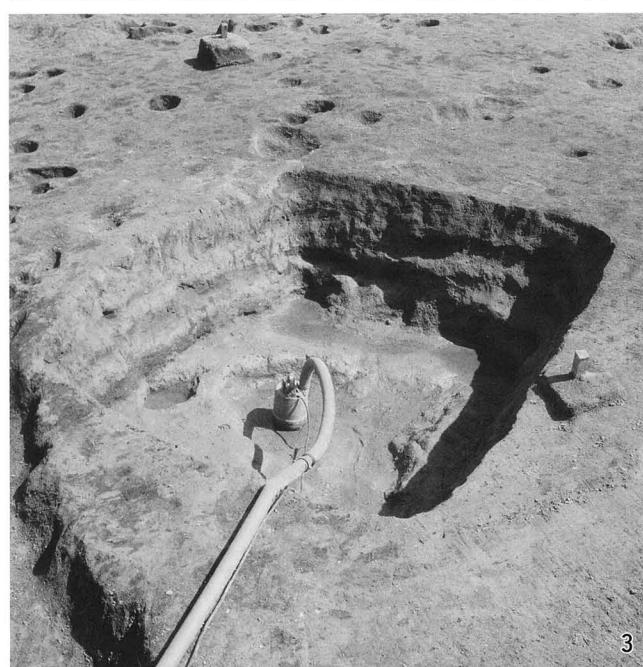
図版 30 遺構 (5)



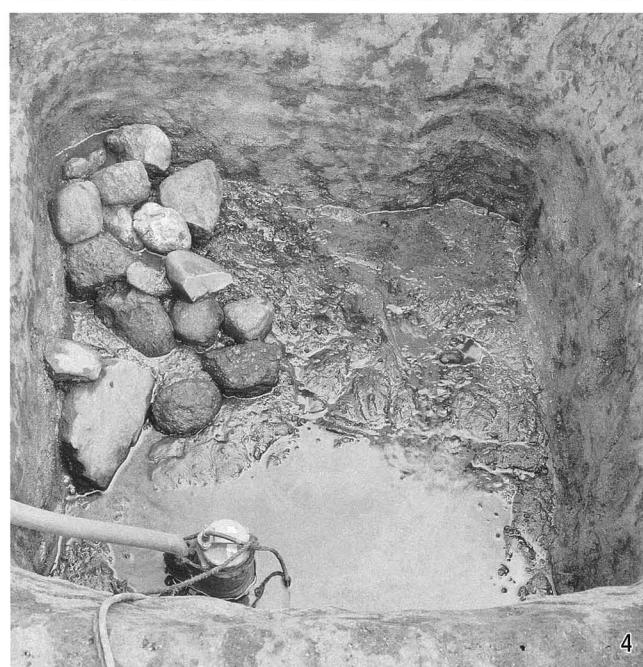
1



2



3



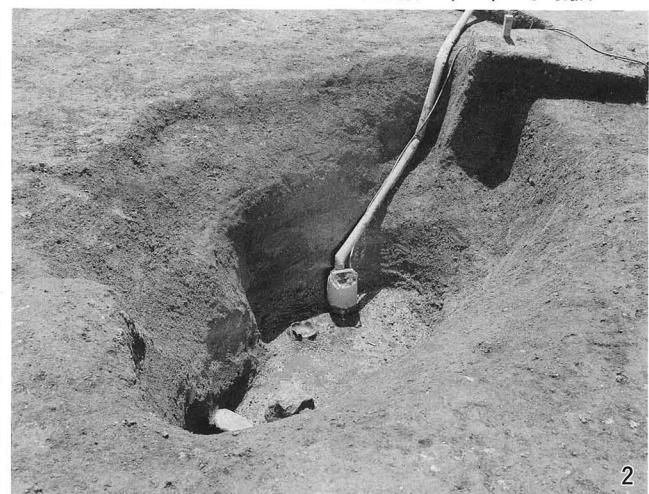
4



5

1.土坑SK2071（東から） 2.土坑SK2070（南東から） 3.土坑SK2066（南西から）

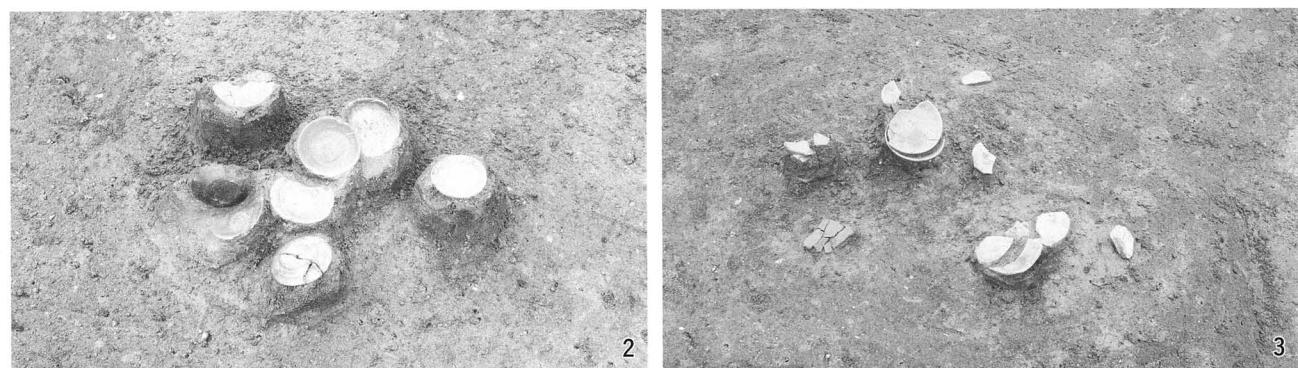
4.土坑2069（西から） 5.井戸SE2068（南西から）



1.土坑SK2179（南西から）
4.土坑SK2129（南西から）

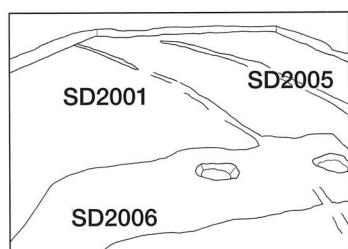
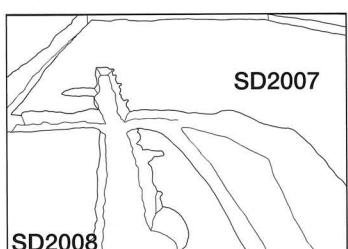
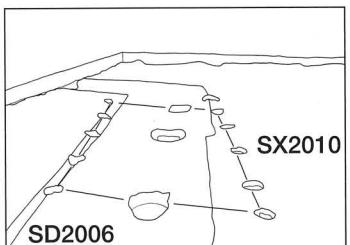
2.土坑SK2220（北東から）
5.土坑SK2186（南から）
3.土坑SK2160（北西から）

図版 32 遺構 (7)



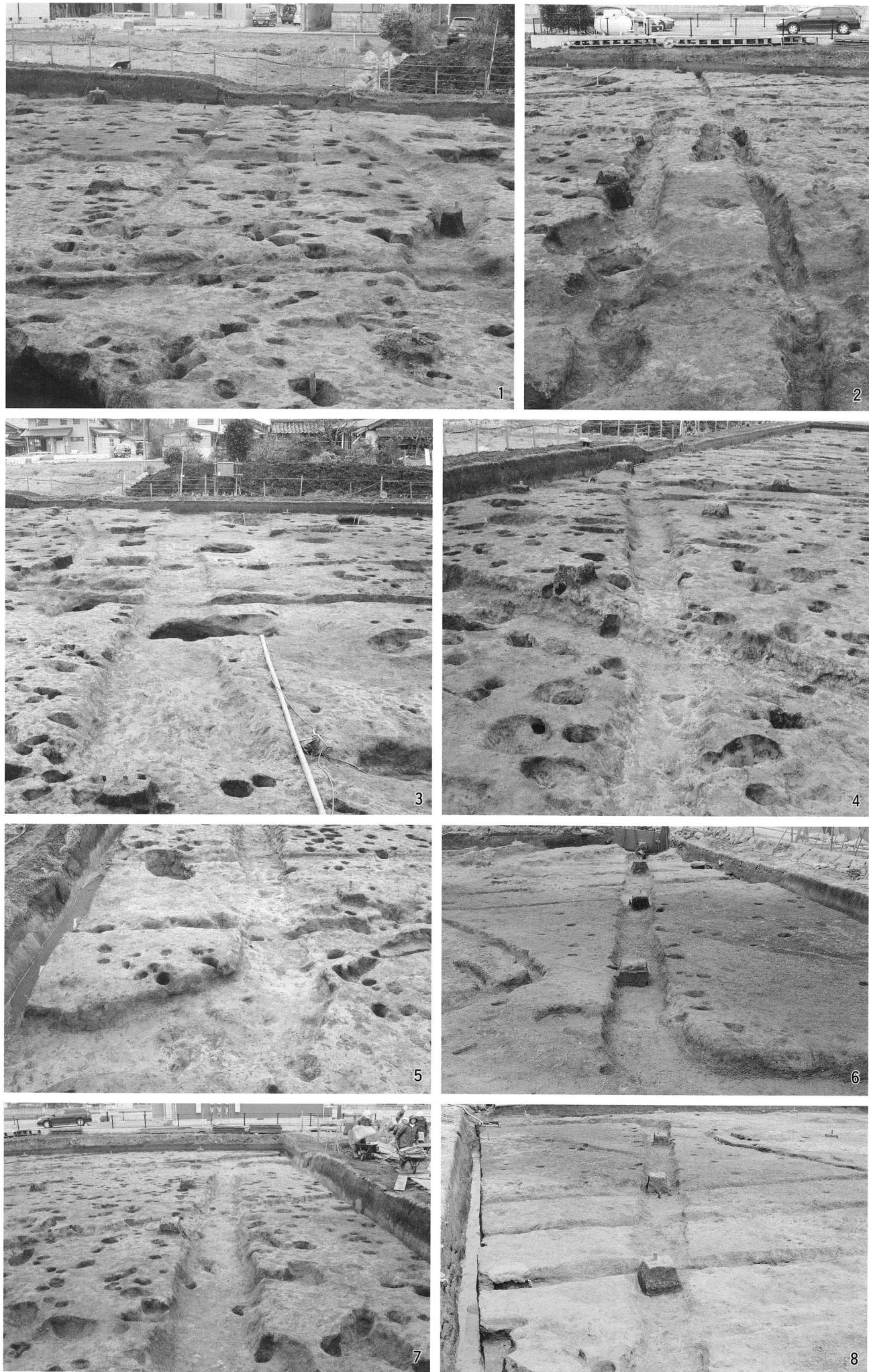
1.A27グリッド土器集中出土状況 2.A30グリッド土器集中出土状況

3.B30グリッド土器集中出土状況 4.5A区南半（北西から）

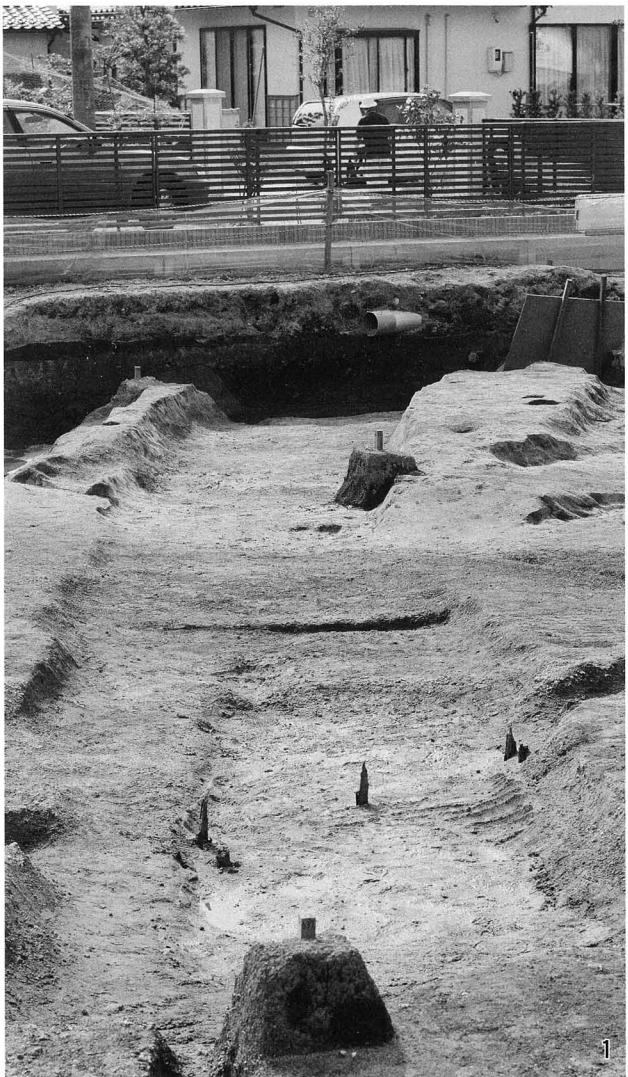


1.溝SD2006・SX2010（西から） 2.溝SD2007・溝SD2008（北から）
3.溝SD2001・溝SD2005（北から）

図版 34 遺構 (9)



1.溝SD2017・溝SD2019（東から） 2.溝SD2019・溝SD2048（西から） 3.溝SD2025・溝SD2031（東から） 4.溝SD2046（南東から）
5.溝SD2055北東隅（北東から） 6.溝SD2055南東隅（東から） 7.溝SD2055北半（西から） 8.溝SD2055南半（西から）



1.溝SD2090（南東から） 2.溝SD2090（南東から） 3.溝SD2095-1・2（南東から）
4.溝SD2165,2168-1・2,2170,2177（南東から） 5.5A区作業風景 6.5B区作業風景

図版 36 遺構内出土遺物（1）



1



4



2



5



3



6



7

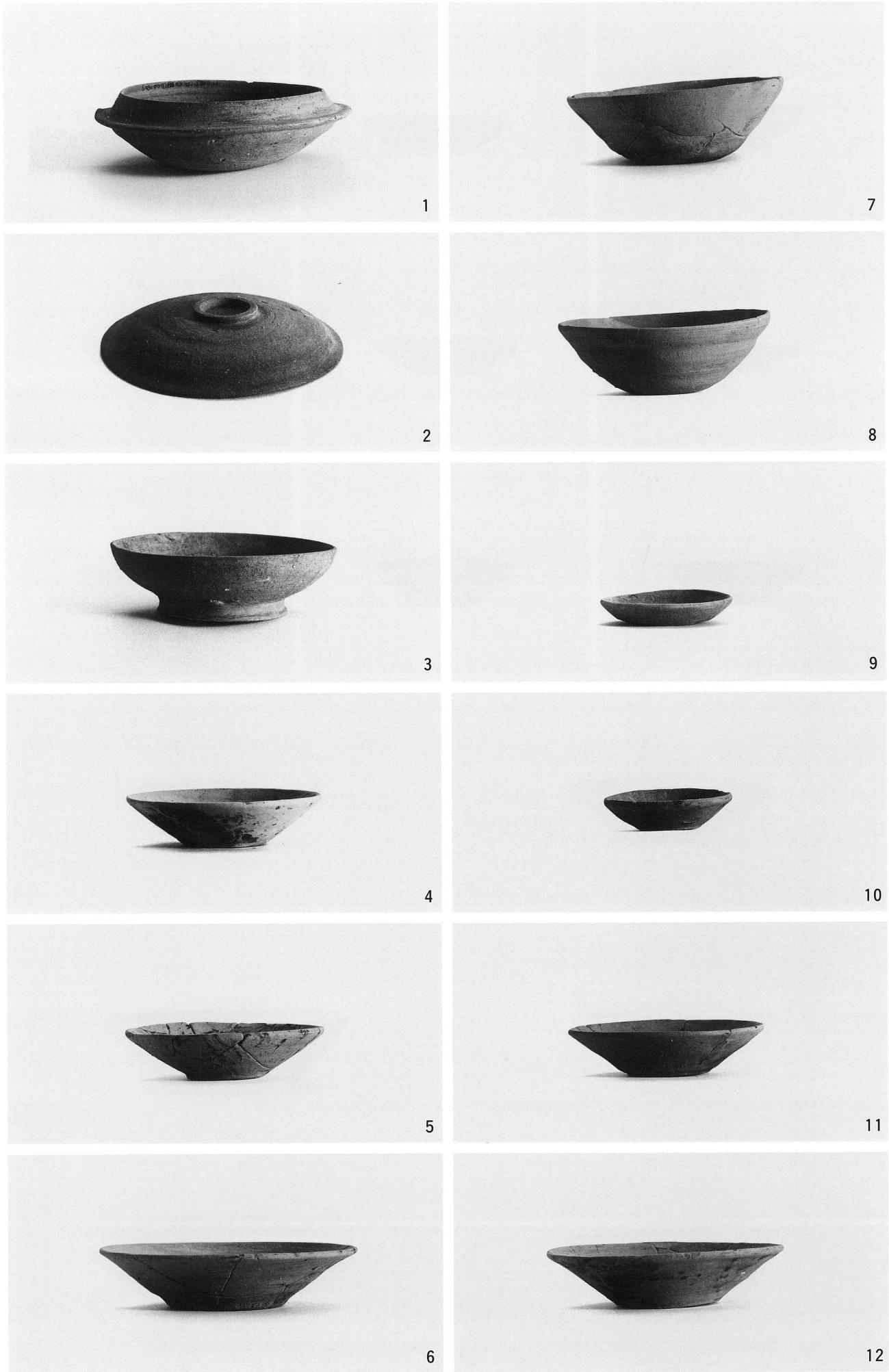


8



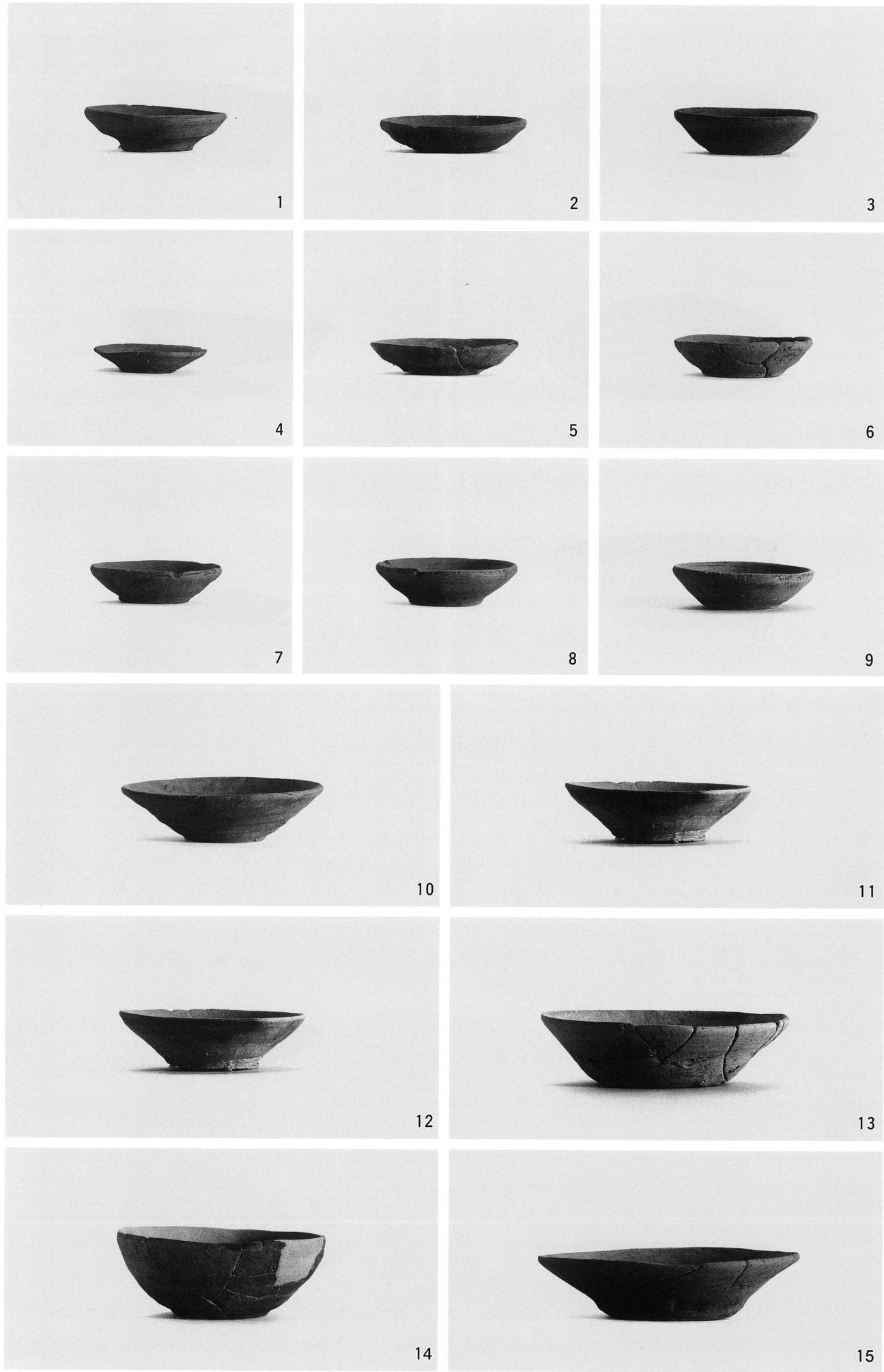
9

1～9.5号墳出土土器 (1:3)



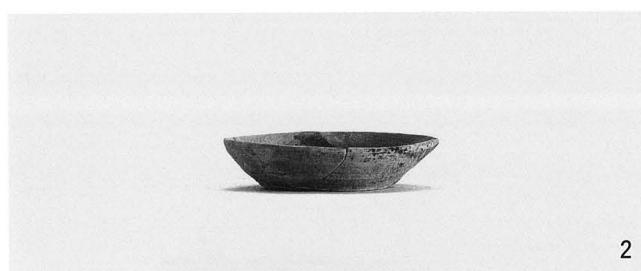
1.円形周溝1 2.土坑SK2174 3.土坑SK2183 4~6・10~12.溝SD2090 7・8.土坑SK2172
9.土坑SK2192 (1:3)

図版 38 遺構内出土遺物（3）



1.土坑SK2018 2.土坑SK2045 3.土坑SK2057 4.土坑SK2076 5.井戸SE2068 6・7・14.溝SD2019

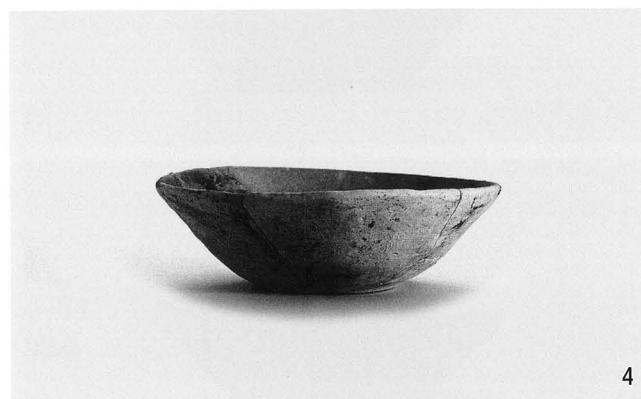
8～12.土杭SK2047 13.溝SD2003 15.溝SD2031 (1:3)



2



3



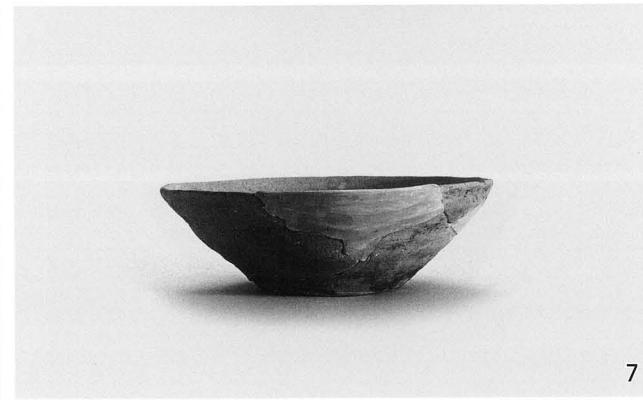
4



5



6



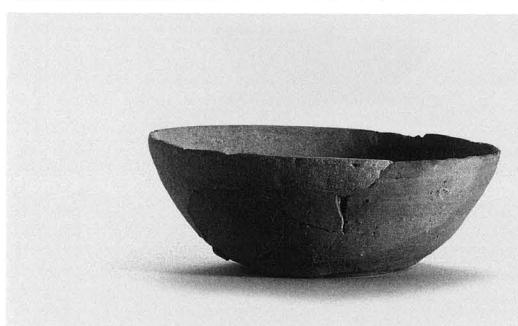
7

1.土坑SK2066（集合） 2～7.土坑SK2066（個別） (1:3)

図版 40 遺構内出土遺物（5）



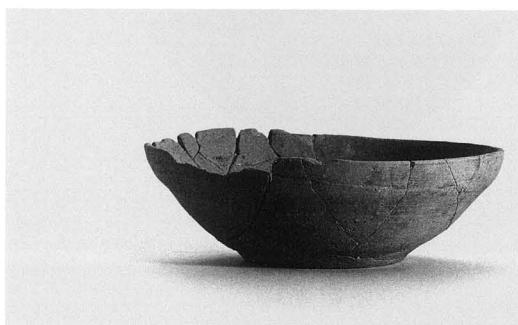
1



2



3



4



5

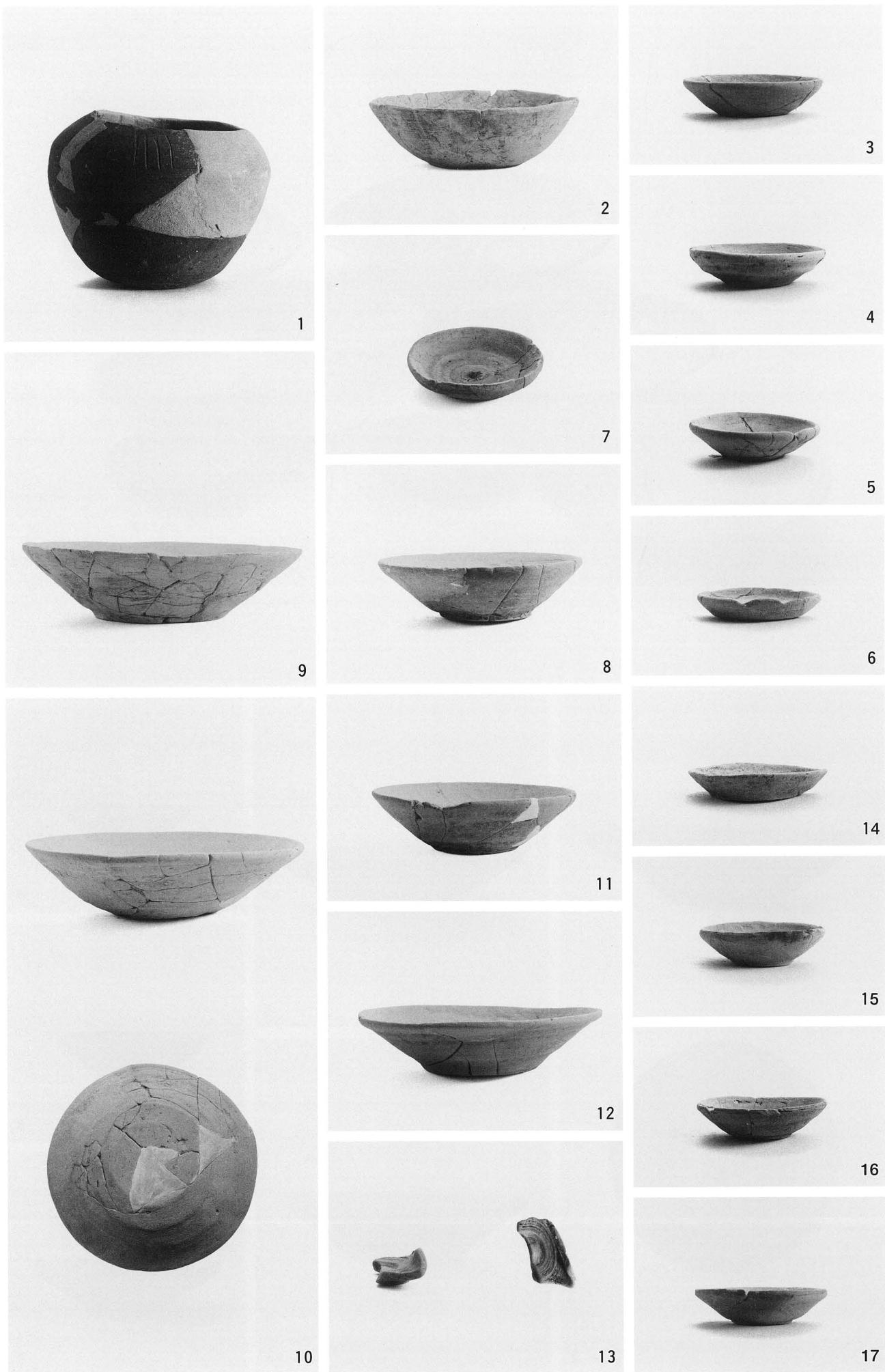


6



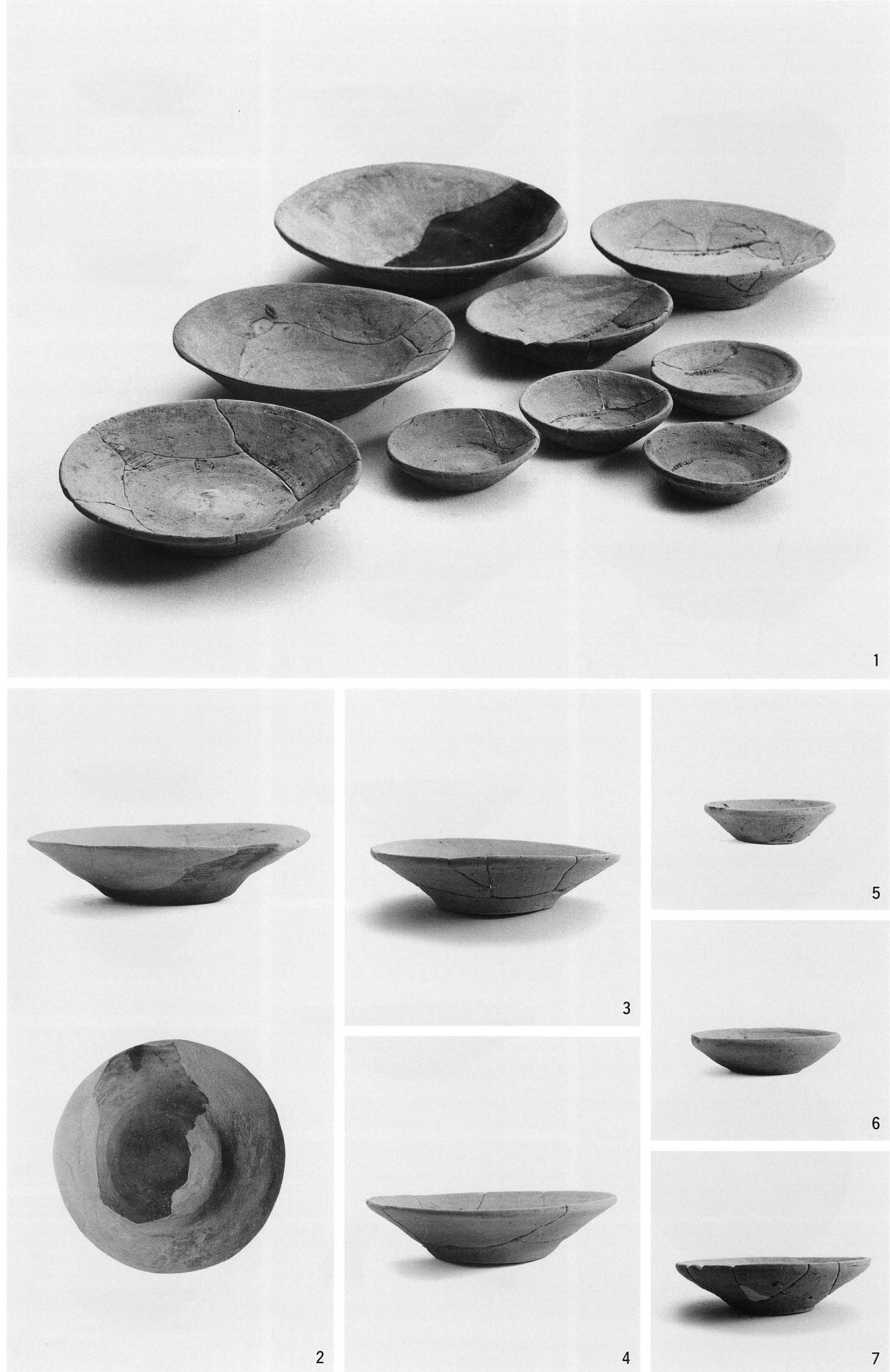
7

1.土坑SK2186（集合） 2～7.土坑SK2186（個別） (1:3)

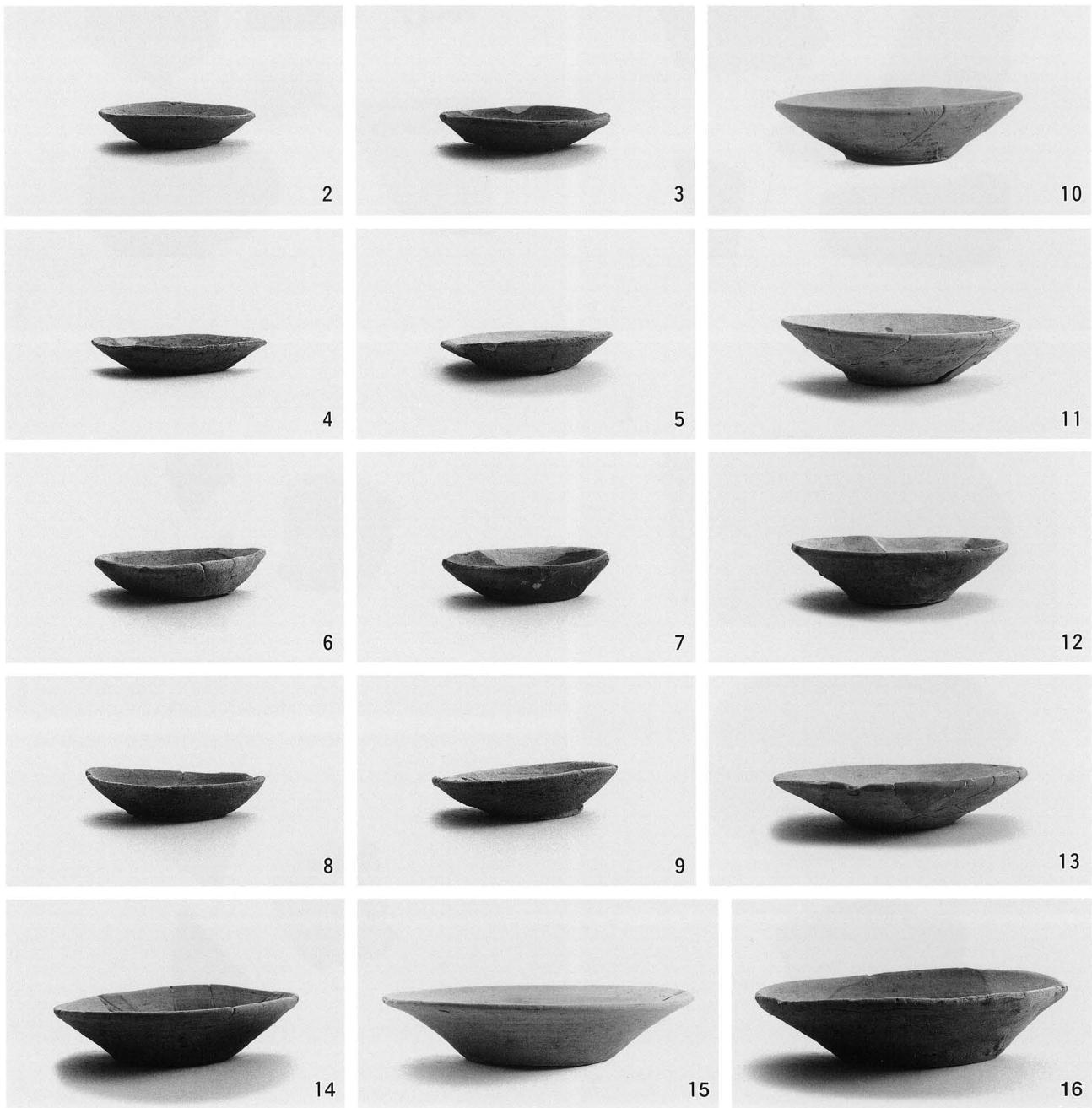


1~17.5A・5B区遺構外（1：須恵器、2~17：土師質土器）（1：3）

図版 42 遺構外出土遺物（2）

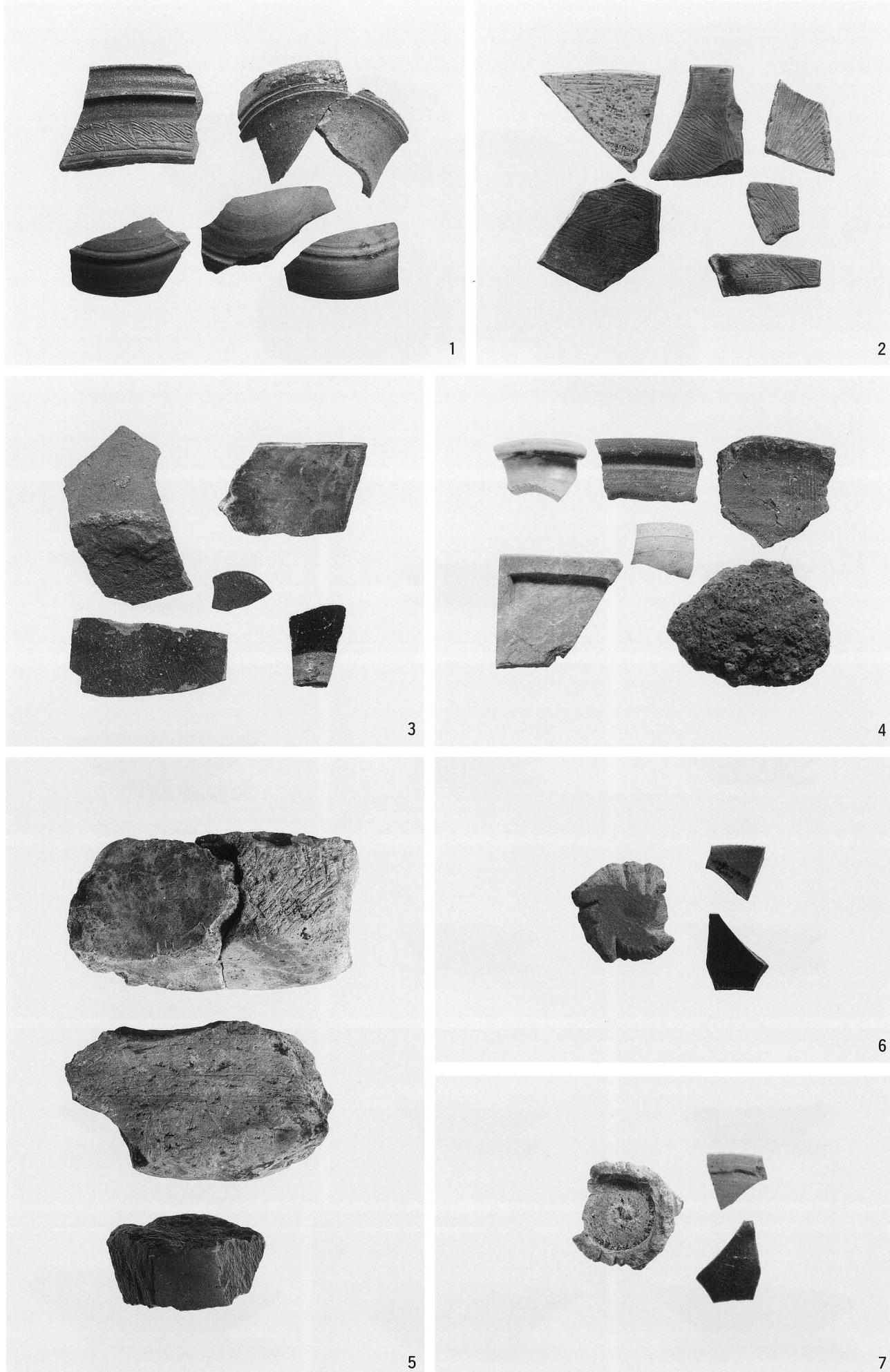


1.A27グリッド土器集中（集合） 2～7.A27グリッド土器集中（個別） (1:3)



1.A30グリッド土器集中（集合） 2～9.A30グリッド土器集中（個別） 10～13.B30グリッド土器集中（個別）
14～16.5B区遺構外 （1:3）

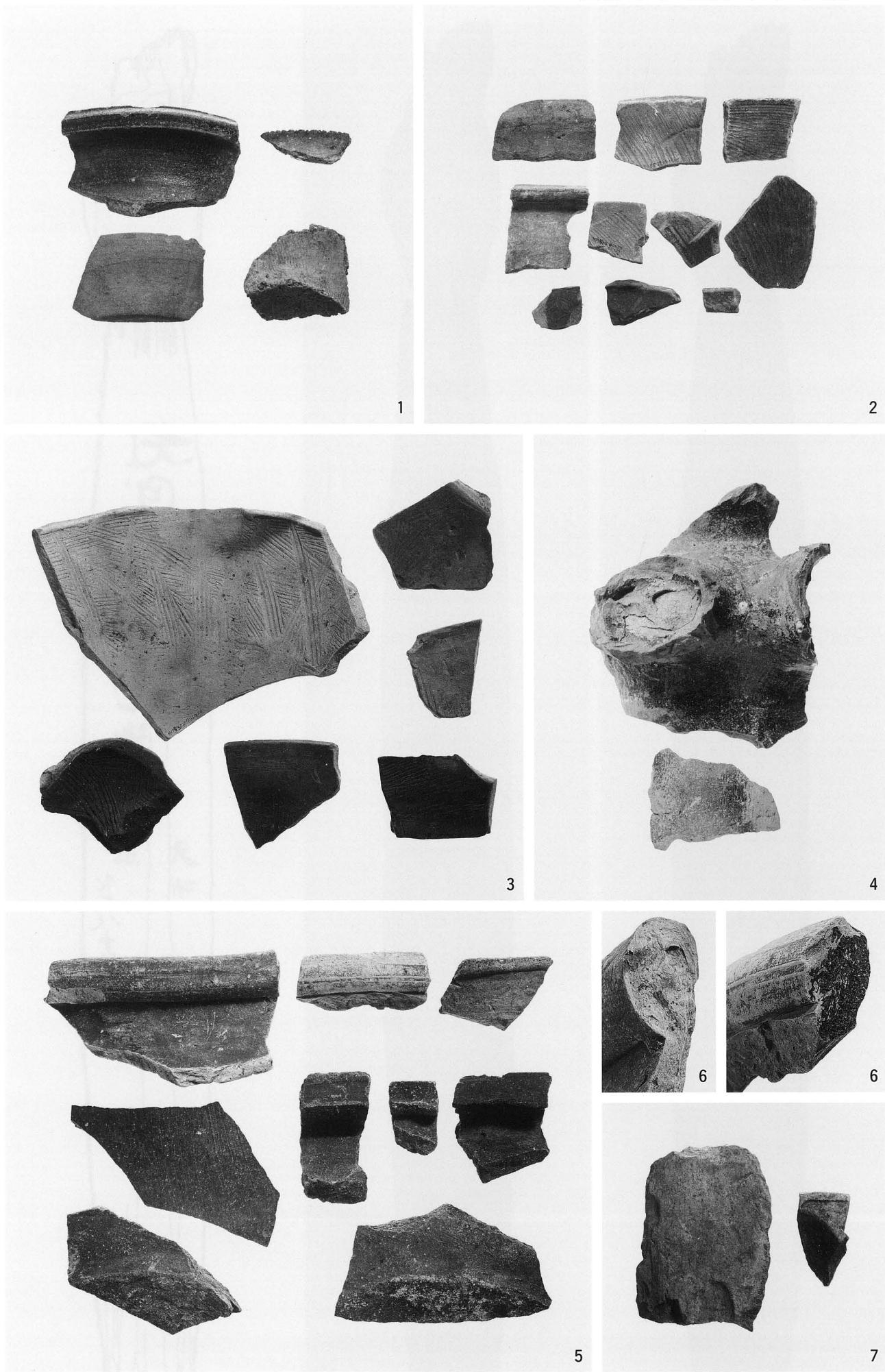
図版 44 遺構内出土遺物（6）



1・2.土坑SK2018・土坑SK2045・土坑SK2070 3.井戸SE2068・溝SD2006・溝SD2007・溝SD2031

4.土坑SK2030・土坑SK2045・土坑SK2050・土坑SK2069 5.井戸SE2068・溝SD2025・溝SD2048

6・7.土坑SK2220・土坑SK2179・溝SD2155 (1:3)

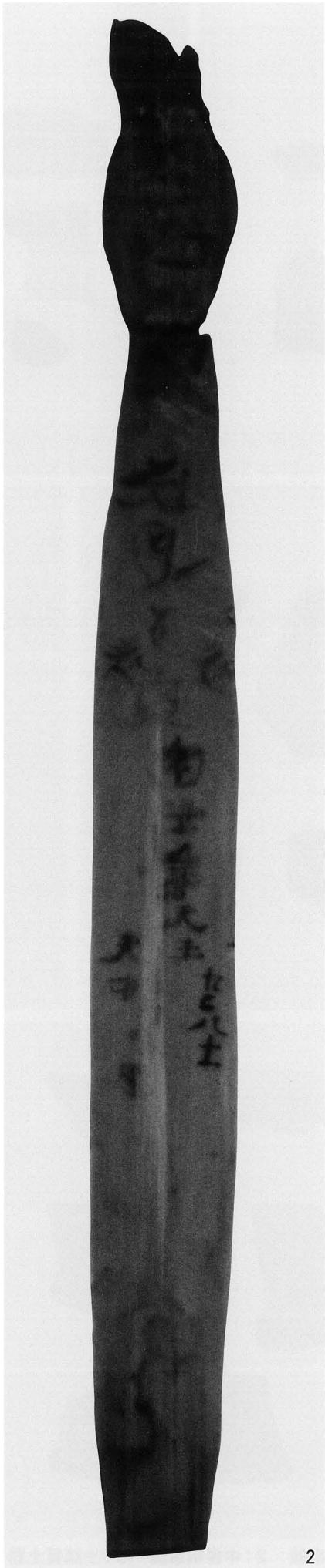


1～7.5A・5B区遺構外 [1:縄文・弥生・須恵器 2:中世須恵器 3:土師質土器 4:須恵器(子持壺)
5:国内陶器 6:国内陶器(断面) 7:石器] (1:3)

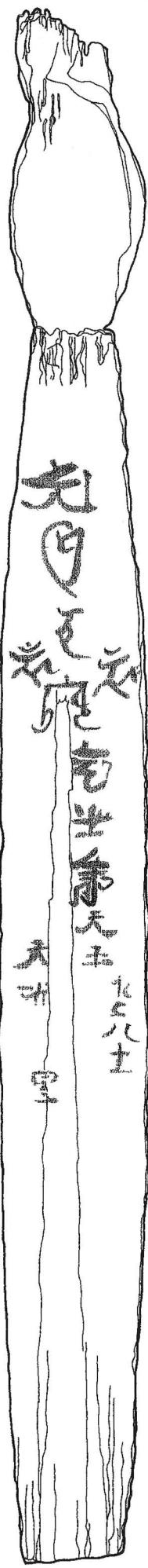
図版 46 木簡 (1)



1

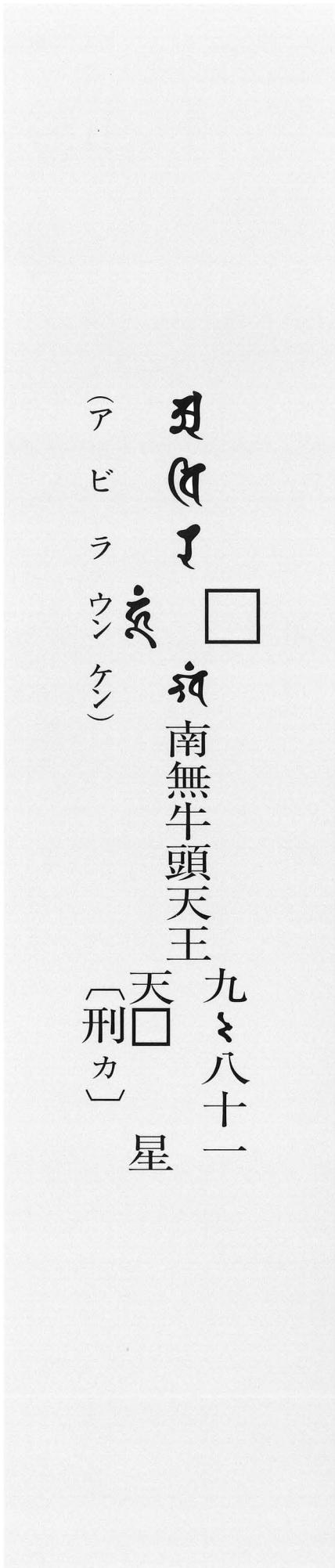


2



3

1.木簡全体写真 2.木簡全体写真（赤外線） 3.木簡全体図（1：3）



2



3



4



5

1.木簡釈文 2～5.木簡拡大（赤外線）

報告書抄録

ふりがな	つきやまいせきさん							
書名	築山遺跡Ⅲ							
副書名	県道今市古志線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	出雲市の文化財報告							
シリーズ番号	5							
編集者名	原俊二							
編集機関	出雲市文化企画部 文化財課							
所在地	〒693-8530 島根県出雲市今市町70番地 TEL0853-21-6893							
発行年月日	平成21年(2009)年3月							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つきやまいせき 築山遺跡	しまねけん 島根県 いづもし 出雲市 かみえんやちょう 上塩治町 1742外	32203	W24 (島根県遺跡番号) F23 (出雲市遺跡番号)	35度 21分 05秒	132度 45分 42秒	2004.4 ~ 2006.10	4区 3950m ² 5区 3850m ²	県道今市 古志線改 良事業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
築山遺跡	集落跡	縄文時代か ら中・近世	建物跡、 土壙墓、土坑、 井戸、溝	土師器、須恵器、 中世土師器、 陶磁器、木製品、 石製品など		牛頭天王と記 す木簡が出土		

出雲市の文化財報告5

築山遺跡Ⅲ

県道今市古志線改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009年3月

編 集 出雲市 文化企画部 文化財課

発 行 島根県出雲県土整備事務所
出雲市教育委員会

印刷・製本 松栄印刷有限会社

